埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第298集

熊谷市・行田市

古宮／中条条里
上河原

県道弥藤吾行田線建設事業関係
埋蔵文化財発掘調査報告

２００４
埼　玉　県
財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

遠景(手前より　古宮遺跡・上河原遺跡・中条条里遺跡)

遠景(手前より　古宮遺跡・上河原遺跡)

序

埼玉県では「人と自然にやさしい道づくり」を基本理念として、道路使用者の誰もが、安全・安心・快適に通行できる道路空間を形成するとともに、環境に十分配慮した道づくりを推進しています。

県道弥藤吾行田線の建設も、業務核都市に位置づけられた熊谷市内の慢性的な交通渋滞を解消し、良好な都市基盤を整備するための事業です。また、昨年完成した熊谷市と大里町を結ぶ久下橋と連携して、本年10月に開催される『彩の国　まごころ国体』のメイン会場へのアクセス道路として期待されるところです。

この路線内では、古宮遺跡・中条条里遺跡・上河原遺跡の三つの遺跡が確認されました。これらの遺跡の取り扱いについては、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が、各機関と慎重に協議を重ねてまいりましたが、やむを得ず記録保存の措置を講ずることとなりました。

発掘調査は、埼玉県県土整備部道路街路課の委託を受け、当事業団が実施しました。

発掘調査の結果、住居跡などの遺構や、土器・石器などの遺物が出土しました。縄文時代晩期から、弥生時代・古墳時代、さらに奈良・平安時代の集落跡が発見されただけでなく、河川の影響を受けた結果、現在の地形が、往時のものとは大きく異なっていることも明らかになりました。

本書は、これらの発掘調査の成果をまとめたものです。本書が、埋蔵文化財の保護、学術研究の基礎資料として、また、埋蔵文化財の普及・啓蒙及び教育機関の参考資料として、広く活用していただければ幸いです。

本書の刊行にあたり、発掘調査に関する調整に御尽力をいただきました埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課をはじめ、発掘調査から報告書刊行に至るまで御協力いただきました埼玉県県土整備部道路街路課、熊谷県土整備事務所、熊谷市教育委員会、並びに地元関係者各位に厚くお礼申し上げます。

平成16年9月

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長　福田陽充

例言

1　本書は、埼玉県熊谷市に所在する古宮遺跡・中条条里遺跡・上河原遺跡の発掘調査報告書である。

2　遺跡の略号と代表地番、発掘調査担当者は、以下のとおりである。

古宮遺跡（KMY）

第1次調査

熊谷市大字池上字関下936番地1他

鈴木孝之・大谷　徹

第2次調査

熊谷市大字池上字関下903番地他

鈴木孝之・安生素明

第3次調査

行田市大字小敷田字高根570番地他

鈴木孝之・安生素明

中条条里遺跡（TZZR）

第1次調査

熊谷市大字大塚字生田塚144番地他

昼間孝志・橋本　勉・木戸春夫

君島勝秀・上野真由美

第2次調査

熊谷市大字大塚字生田塚149番地他

富田和夫・君島勝秀・上野真由美

第3次調査

熊谷市大字大塚字前裏159番地他

鈴木孝之・安生素明

上河原遺跡（KMGWR）

第1次調査

熊谷市大字下川上字上河原1598-5番地他

鈴木孝之・上野真由美

3　発掘調査は、県道弥藤吾行田線建設工事に伴う事前調査である。埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が調整のもと、埼玉県熊谷土木事務所の委託を受けた財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

4　本事業は、第Ⅰ章の組織により実施した。報告書作成事業は鈴木が担当し、平成15年4月8日から平成16年9月30日まで実施した。

5　遺跡の基準点測量および空中写真撮影は、株式会社中央航業に委託した。

6　写真撮影は、発掘調査時の撮影を各担当者が行い、遺物の撮影は大屋道則が行った。

7　出土品の整理・図版の作成は、鈴木孝之が行い、細田　勝・吉田　稔・新屋雅明・加藤隆則の協力を得た。

8　本書の執筆は、鈴木が行ったが、その他にⅠ－1を埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課、Ⅲ－2の、縄文時代の遺物を加藤・新屋、弥生時代の遺物を吉田、またⅥ－1を加藤、Ⅵ－2を吉田・礪崎、Ⅵ－3を福田　聖が担当した。

9　本書の編集は、鈴木が行った。

10　本書に掲載した資料は、平成16年度以降、埼玉県立埋蔵文化財センターが管理・保管する。

11　本書を作成するに当り、熊谷市教育委員会からご教示・ご指導を賜った。記して感謝の意を表します。

凡　例

1　遺跡全体におけるX・Yの数値は、国土標準平面直角座標点第Ⅸ系(原点：北緯36度00分00秒、東経139度50分00秒)に基づく各座標値を示す。また、各方位指示はすべて座標北を表す。

2　各遺跡におけるグリッドの設置については、国土標準平面直角座標点第Ⅸ系に基づいており、10×10mの方眼である。

3　グリッドの名称は、北西杭を基準として、東西方向は西から東へ1，2，3・・・、南北方向は北から南へA、B、C・・・と命名した。
(例　F－36グリッド)

4　本書における遺構の略号は以下のとおりである。

SJ	竪穴住居跡	SB	掘立柱建物跡
SK	土壙	SE	井戸跡
SD	溝跡	SH	方形周溝墓

5　本書の挿図の縮尺は、原則として以下のとおりである。

調査区全測図		1：1500
竪穴住居跡・土壙・井戸跡		
・方形周溝墓・畝状遺構		1：60
溝跡	1：120(平面)	1：60(断面)
ピット	1：100(平面)	1：50(断面)

6　遺物挿図の縮尺は、原則的に以下のとおりであるが、例外的なものはスケールで示した。

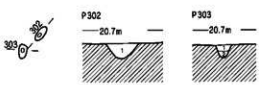
土器類	1：4	1：3 (拓本)
玉類・貝巣穴痕泥岩・種子		1：2
石器・金属製品・紡錘車・砥石		1：3
木製品		1：8

7　須恵器は、断面を黒塗りしてあるが、酸化焔焼成となっているものは塗っていない。

8　遺構図における水平数値は、海抜高度を示しており、単位はmである。

9　遺物観察表は次のとおりである。
口径・器高・底径はcmを単位とし、推定値は(　)内に記した。
・胎土は、肉眼観察により混入物を示した。
A：雲母　B：片岩　C：角閃石　D：長石
E：石英　F：軽石　G：砂粒子　H：赤色粒子　I：白色粒子　J：針状物質　K：黒色粒子　L：小礫
・焼成は、良好・普通・不良の3段階で表すがあくまでも主観的なものである。
・残存率は、図示した器形の部分について5%刻みで表した。
・本書に掲載した地図類は、国土地理院発行の地形図1/25,000（熊谷・妻沼）と陸軍測量部による迅速測図1/25,000（熊谷鐸・妻沼村）である。
・本書では、1947(昭和22)年11月撮影の米軍写真を切り貼りして使用した。

10　ピット図は、原則としてピット番号が振られている側を断面図の起点とする。



11　挿図中の網かけについては、以下のとおりである。

マンガン層	遺物包含層
噴砂	焼土
炭化物	柱痕
灰釉	鉄釉・黒色処理
自然釉・赤彩	墨

目 次

序
例言
凡例
目次
Ⅰ 調査の概要 ……1
1．発掘調査に至るまでの経過 ……1
2．発掘調査・報告書作成の経過 ……2
3．発掘調査・整理・報告書刊行の組織 ……4
Ⅱ 遺跡の立地と環境 ……6
Ⅲ 古宮遺跡 ……10
1．調査の概要 ……10
2．検出された遺構と遺物 ……15
A 調査区二面 ……15
(1)縄文時代 ……15
(a) 土器集中地点 ……15
(2)弥生時代 ……47
(a) 住居跡 ……47
(b) 掘立柱建物跡 ……54
(c) 土壙 ……56
(d) グリッド等出土遺物 ……76
(3)古墳時代 ……87
(a) 住居跡 ……87
(b) 土壙 ……105
(c) 溝跡 ……127
(d) 掘立柱建物跡 ……147
(e) 畝状遺構 ……157
(f) ピット ……159
(g) グリッド等出土遺物 ……175
B 調査区一面 ……182
(1)古代 ……186
(a) 住居跡 ……186
(b) 土壙 ……267
(c) 溝跡 ……293
(d) 掘立柱建物跡 ……309
(e) 井戸跡 ……312
(f) ピット ……321
(g) グリッド出土・表採遺物等 …341
(2)中近世 ……348
(a) 溝跡・ピット ……348
Ⅳ 中条条里遺跡 ……353
1．調査の概要 ……353
2．検出された遺構と遺物 ……358
(a) 住居跡 ……358
(b) 土壙 ……382
(c) 溝跡 ……384
(d) 方形周溝墓 ……388
(e) 井戸跡 ……392
(f) ピット ……392
(g) 斜面包含層 ……393
(h) グリッド出土・表採遺物等 …396
Ⅴ 上河原遺跡 ……398
1．調査の概要 ……398
2．検出された遺構と遺物 ……398
(a) 水山跡 ……398
Ⅵ まとめ ……400
1．古宮遺跡の縄文時代 ……400
2．弥生時代中期の遺構と出土物について ……404
3．古墳時代の出土土器について ……407
4．小結 ……415
引用・参考文献 ……419

挿図目次

第１図　埼玉県の地形 ……6
第２図　遺跡周辺の地形 ……8
第３図　遺跡の位置迅速測図 ……9
第４図　二面全測図……11
第５図　二面Ａ区全測図……12
第６図　二面Ｂ区全測図……13
第７図　古宮遺跡基本土層図……13
第８図　二面Ｃ区全測図……14
第９図　Ｂ・Ｃ区位置関係図……15
第10図　Ｂ区土器集中　遺物平面分布図……16
第11図　Ｂ区土器集中　遺物平面
　・立面分布図……17
第12図　Ｂ区土器集中　遺物出土状況図……18
第13図　Ｂ区土器集中出土遺物(1) ……19
第14図　Ｂ区土器集中出土遺物(2) ……21
第15図　Ｂ区土器集中出土遺物(3) ……23
第16図　Ｂ区土器集中出土遺物(4) ……24
第17図　Ｂ区土器集中出土遺物(5) ……25
第18図　Ｂ区土器集中出土遺物(6) ……26
第19図　Ｂ区土器集中出土遺物(7) ……27
第20図　Ｂ区土器集中出土遺物(8) ……28
第21図　Ｃ区土器集中　遺物平面分布図……30
第22図　Ｃ区土器集中　遺物平面
　・立面分布図……31
第23図　Ｃ区土器集中　遺物出土状況図……32
第24図　Ｃ区土器集中出土遺物(1) ……33
第25図　Ｃ区土器集中出土遺物(2) ……35
第26図　Ｃ区土器集中出土遺物(3) ……37
第27図　Ｃ区土器集中出土遺物(4) ……39
第28図　Ｃ区土器集中出土遺物(5) ……40
第29図　Ｃ区土器集中出土遺物(6) ……41
第30図　Ｃ区土器集中出土遺物(7) ……42
第31図　Ｃ区土器集中出土遺物(8) ……43
第32図　Ｃ区土器集中出土遺物(9) ……44
第33図　Ｃ区土器集中出土遺物(10)……45
第34図　Ｃ区土器集中出土遺物(11)……46
第35図　第1号住居跡 ……48
第36図　第1号住居跡出土遺物 ……49
第37図　第2号住居跡 ……50
第38図　第2号住居跡出土遺物 ……51
第39図　第14号住居跡 ……52
第40図　第14号住居跡出土遺物 ……52
第41図　第17号住居跡 ……53
第42図　第17号住居跡出土遺物 ……54
第43図　第5号掘立柱建物跡 ……55
第44図　第5号掘立柱建物跡出土遺物 ……56
第45図　土壙(1) ……64
第46図　土壙(2) ……65
第47図　土壙(3) ……66
第48図　土壙出土遺物(1) ……67
第49図　土壙出土遺物(2) ……68
第50図　土壙出土遺物(3) ……69
第51図　土壙出土遺物(4) ……70
第52図　土壙出土遺物(5) ……71
第53図　土壙出土遺物(6) ……72
第54図　土壙出土遺物(7) ……73
第55図　土壙出土遺物(8) ……74
第56図　土壙出土遺物(9) ……75
第57図　グリッド等出土遺物(1) ……80
第58図　グリッド等出土遺物(2) ……81
第59図　グリッド等出土遺物(3) ……82
第60図　グリッド等出土遺物(4) ……83
第61図　グリッド等出土遺物(5) ……84
第62図　グリッド等出土遺物(6) ……85
第63図　グリッド等出土遺物(7) ……86
第64図　第3号住居跡 ……87
第65図　第4号住居跡 ……88
第66図　第4号住居跡出土遺物 ……88
第67図　第5号住居跡 ……89
第68図　第5号住居跡出土遺物 ……89
第69図　第6号住居跡出土遺物 ……90
第70図　第6号住居跡 ……91

第71図　第7号住居跡出土遺物 ……92
第72図　第7号住居跡 ……93
第73図　第8・9号住居跡 ……94
第74図　第9号住居跡出土遺物 ……94
第75図　第10号住居跡 ……95
第76図　第10号住居跡出土遺物 ……95
第77図　第11号住居跡 ……96
第78図　第11号住居跡出土遺物 ……96
第79図　第12号住居跡 ……97
第80図　第12号住居跡出土遺物 ……98
第81図　第13号住居跡 ……99
第82図　第13号住居跡出土遺物……100
第83図　第15号住居跡……101
第84図　第15号住居跡出土遺物……102
第85図　第16号住居跡……103
第86図　第16号住居跡出土遺物……104
第87図　土壙(4)……112
第88図　土壙(5)……113
第89図　土壙(6)……114
第90図　土壙(7)……115
第91図　土壙(8)……116
第92図　土壙(9)……117
第93図　土壙(10) ……118
第94図　土壙(11) ……119
第95図　土壙出土遺物(10) ……120
第96図　土壙出土遺物(11) ……121
第97図　土壙出土遺物(12) ……122
第98図　土壙出土遺物(13) ……123
第99図　土壙出土遺物(14) ……124
第100図　二面A区溝跡平面図 ……128
第101図　二面B区溝跡平面図 ……129
第102図　二面C区溝跡平面図 ……130
第103図　第1～10号溝跡 ……135
第104図　第11～21号溝跡 ……136
第105図　溝跡出土遺物(1)……136
第106図　第22～39号溝跡 ……137
第107図　第40～46号溝跡 ……138
第108図　溝跡出土遺物(2)……139
第109図　溝跡出土遺物(3)……140
第110図　溝跡出土遺物(4)……141
第111図　溝跡出土遺物(5)……143
第112図　溝跡出土遺物(6)……144
第113図　溝跡出土遺物(7)……146
第114図　第1号掘立柱建物跡(1) ……148
第115図　第1号掘立柱建物跡(2) ……149
第116図　第1号掘立柱建物跡出土遺物 ……150
第117図　第2号掘立柱建物跡 ……151
第118図　第3号掘立柱建物跡(1) ……153
第119図　第3号掘立柱建物跡(2) ……154
第120図　第4号掘立柱建物跡 ……155
第121図　畝状遺構(1)……157
第122図　畝状遺構(2)……158
第123図　A区畝状遺構出土遺物 ……159
第124図　ピット(1)……161
第125図　ピット(2)……162
第126図　ピット(3)……163
第127図　ピット(4)……164
第128図　ピット(5)……165
第129図　ピット(6)……166
第130図　ピット(7)……167
第131図　ピット(8)……168
第132図　ピット(9)……169
第133図　ピット(10) ……170
第134図　ピット259出土遺物 ……170
第135図　ピット(11) ……171
第136図　ピット(12) ……172
第137図　ピット(13) ……173
第138図　ピット(14) ……174
第139図　グリッド等出土遺物(8)……175
第140図　グリッド等出土遺物(9)……176
第141図　グリッド等出土遺物(10) ……177
第142図　グリッド等出土遺物(11) ……178
第143図　グリッド等出土遺物(12) ……179
第144図　一面全測図 ……182
第145図　一面A区全測図 ……183
第146図　一面B区全測図 ……184

第147図　一面C区全測図 ……185
第148図　第18号住居跡 ……186
第149図　第18号住居跡出土遺物 ……186
第150図　第19～21号住居跡 ……187
第151図　第19号住居跡出土遺物 ……188
第152図　第21号住居跡出土遺物 ……189
第153図　第22・23号住居跡 ……190
第154図　第22・23号住居跡出土遺物 ……190
第155図　第24号住居跡 ……191
第156図　第25号住居跡 ……191
第157図　第26・27号住居跡 ……192
第158図　第26・27号住居跡出土遺物 ……193
第159図　第28号住居跡 ……194
第160図　第28号住居跡出土遺物 ……194
第161図　第29・31号住居跡 ……195
第162図　第29・31号住居跡出土遺物 ……196
第163図　第30号住居跡 ……197
第164図　第30号住居跡出土遺物 ……197
第165図　第32号住居跡 ……199
第166図　第33号住居跡 ……199
第167図　第33号住居跡出土遺物 ……200
第168図　第34号住居跡 ……200
第169図　第34号住居跡出土遺物 ……201
第170図　第35号住居跡 ……201
第171図　第35号住居跡出土遺物 ……202
第172図　第36・37号住居跡 ……203
第173図　第36・37号住居跡出土遺物 ……203
第174図　第38号住居跡 ……204
第175図　第39号住居跡 ……205
第176図　第40号住居跡 ……206
第177図　第40号住居跡出土遺物 ……206
第178図　第41号住居跡 ……207
第179図　第41号住居跡出土遺物 ……207
第180図　第42・45号住居跡 ……209
第181図　第42・45号住居跡出土遺物 ……210
第182図　第43号住居跡 ……211
第183図　第43号住居跡出土遺物 ……211
第184図　第44号住居跡 ……212
第185図　第44号住居跡出土遺物 ……213
第186図　第46号住居跡 ……214
第187図　第46号住居跡出土遺物 ……214
第188図　第47号住居跡 ……215
第189図　第47号住居跡出土遺物 ……215
第190図　第48・49号住居跡 ……216
第191図　第49号住居跡出土遺物 ……217
第192図　第50号住居跡 ……218
第193図　第50号住居跡出土遺物 ……218
第194図　第51号住居跡 ……218
第195図　第51号住居跡出土遺物 ……218
第196図　第52号住居跡 ……219
第197図　第52号住居跡出土遺物 ……220
第198図　第53・54号住居跡 ……221
第199図　第53号住居跡出土遺物 ……222
第200図　第55・56号住居跡 ……223
第201図　第55号住居跡出土遺物 ……223
第202図　第56号住居跡出土遺物 ……224
第203図　第57・58号住居跡 ……226
第204図　第58号住居跡出土遺物 ……226
第205図　第59号住居跡 ……227
第206図　第60号住居跡 ……228
第207図　第60号住居跡出土遺物 ……228
第208図　第61号住居跡 ……229
第209図　第61号住居跡出土遺物 ……229
第210図　第62・63号住居跡 ……231
第211図　第62・63号住居跡出土遺物 ……232
第212図　第64号住居跡 ……232
第213図　第65号住居跡 ……233
第214図　第65号住居跡出土遺物 ……234
第215図　第66号住居跡 ……234
第216図　第66号住居跡出土遺物 ……235
第217図　第67号住居跡 ……236
第218図　第67号住居跡出土遺物 ……236
第219図　第68号住居跡 ……237
第220図　第69号住居跡 ……238
第221図　第69号住居跡出土遺物 ……238
第222図　第70号住居跡 ……239

第223図　第70号住居跡出土遺物……239
第224図　第71号住居跡……240
第225図　第71号住居跡出土遺物……241
第226図　第72号住居跡……242
第227図　第72・74号住居跡出土遺物……243
第228図　第73号住居跡……244
第229図　第74号住居跡……244
第230図　第75号住居跡……245
第231図　第75号住居跡出土遺物……245
第232図　第76～78号住居跡……247
第233図　第76～78号住居跡出土遺物……248
第234図　第79・81号住居跡……249
第235図　第81号住居跡出土遺物……249
第236図　第80号住居跡……250
第237図　第80号住居跡出土遺物……250
第238図　第82号住居跡……251
第239図　第82号住居跡出土遺物……252
第240図　第83号住居跡……252
第241図　第84号住居跡……253
第242図　第84号住居跡出土遺物……253
第243図　第85号住居跡……254
第244図　第85号住居跡出土遺物……255
第245図　第86～88号住居跡……256
第246図　第86～88号住居跡出土遺物……257
第247図　第89・91・92号住居跡……259
第248図　第89・91・92号住居跡出土遺物…260
第249図　第90号住居跡……261
第250図　第90号住居跡出土遺物……262
第251図　第93号住居跡……263
第252図　第93号住居跡出土遺物……263
第253図　第94号住居跡……264
第254図　第94号住居跡出土遺物……265
第255図　第95・96号住居跡……266
第256図　第95・96号住居跡出土遺物……266
第257図　第97号住居跡……267
第258図　土壙(12)……279
第259図　土壙(13)……280
第260図　土壙(14)……281
第261図　土壙(15)……282
第262図　土壙(16)……283
第263図　土壙(17)……284
第264図　土壙(18)……285
第265図　土壙(19)……286
第266図　土壙(20)……287
第267図　土壙出土遺物(15)……288
第268図　土壙出土遺物(16)……289
第269図　一面A区溝跡平面図……294
第270図　一面B区溝跡平面図……295
第271図　一面C区溝跡平面図……296
第272図　第47～62号溝跡……301
第273図　第63～76号溝跡……302
第274図　第77～84号溝跡……303
第275図　第85～91号溝跡……304
第276図　第92～94号溝跡……305
第277図　溝跡出土遺物(8)……306
第278図　溝跡出土遺物(9)……307
第279図　第6号掘立柱建物跡……310
第280図　第7号掘立柱建物跡……311
第281図　第1～6号井戸跡……315
第282図　第7～12号井戸跡……316
第283図　第13～20号井戸跡……317
第284図　第21～25号井戸跡……318
第285図　井戸跡出土遺物(1)……319
第286図　井戸跡出土遺物(2)……320
第287図　ピット(15)……324
第288図　ピット(16)……325
第289図　ピット(17)……326
第290図　ピット(18)……327
第291図　ピット(19)……328
第292図　ピット(20)……329
第293図　ピット(21)……330
第294図　ピット(22)……331
第295図　ピット(23)……332
第296図　ピット(24)……333
第297図　ピット(25)……334
第298図　ピット(26)……335

第299図　ピット(27) ……336
第300図　ピット(28) ……337
第301図　ピット(29) ……338
第302図　ピット(30) ……339
第303図　ピット(31) ……340
第304図　ピット(32) ……341
第305図　グリッド出土・表採遺物等(1) ……342
第306図　グリッド出土・表採遺物等(2) ……343
第307図　グリッド出土・表採遺物等(3) ……344
第308図　グリッド出土・表採遺物等(4) ……345
第309図　グリッド出土・表採遺物等(5) ……346
第310図　B区中近世溝・ピット ……349
第311図　中条条里遺跡全測図 ……353
第312図　中条条里遺跡A区全測図 ……354
第313図　中条条里遺跡B区全測図 ……355
第314図　中条条里遺跡C区全測図 ……356
第315図　中条条里遺跡基本土層図 ……357
第316図　第1号住居跡 ……358
第317図　第2号住居跡 ……359
第318図　第2号住居跡出土遺物(1) ……360
第319図　第2号住居跡出土遺物(2) ……361
第320図　第3号住居跡 ……362
第321図　第3号住居跡出土遺物 ……363
第322図　第4号住居跡 ……364
第323図　第4号住居跡出土遺物 ……364
第324図　第5号住居跡 ……365
第325図　第5号住居跡出土遺物 ……366
第326図　第6号住居跡 ……367
第327図　第6号住居跡出土遺物 ……368
第328図　第7号住居跡 ……369
第329図　第7号住居跡出土遺物 ……370
第330図　第8号住居跡 ……370
第331図　第8号住居跡出土遺物 ……371
第332図　第9・10号住居跡 ……372
第333図　第9・10号住居跡出土遺物 ……373
第334図　第11号住居跡 ……374
第335図　第11号住居跡出土遺物 ……374
第336図　第12・13号住居跡出土遺物 ……375
第337図　第12・13号住居跡(1) ……376
第338図　第12・13号住居跡(2) ……377
第339図　第14号住居跡 ……378
第340図　第14号住居跡出土遺物 ……378
第341図　第15号住居跡 ……379
第342図　第15号住居跡出土遺物 ……380
第343図　第16号住居跡 ……380
第344図　第16号住居跡出土遺物 ……381
第345図　第17号住居跡 ……381
第346図　第17号住居跡出土遺物 ……381
第347図　第1・3号土壙出土遺物 ……382
第348図　第1～6号土壙 ……383
第349図　第1～3号溝跡 ……385
第350図　第4～7号溝跡 ……386
第351図　第1・2・5～7号溝跡出土遺物 …387
第352図　第1号方形周溝墓 ……389
第353図　第1号方形周溝墓出土遺物 ……390
第354図　第2号方形周溝墓 ……391
第355図　第2号方形周溝墓出土遺物 ……391
第356図　第1号井戸跡 ……392
第357図　ピット1～6 ……392
第358図　斜面包含層遺物出土状況 ……393
第359図　斜面包含層出土遺物(1) ……394
第360図　斜面包含層出土遺物(2) ……395
第361図　グリッド出土・表採遺物等(1) ……396
第362図　グリッド出土・表採遺物等(2) ……397
第363図　上河原遺跡全測図 ……399
第364図　基本土層図・出土遺物 ……399

図版目次

古宮遺跡

図版1　遺跡周辺(昭和22年撮影米軍写真)
古宮・上河原・中条条里遺跡遠景
図版2　古宮(一面)・上河原遺跡(手前より)
二面全景(北から 手前よりA・B・C区)
図版3　二面B区全景
A区全景(南から)
図版4　B区全景(北から)
C区全景(南から)
図版5　B区土器集中地点遺物出土状況
図版6　C区土器集中地点遺物出土状況
図版7　第1号住居跡
第1号住居跡遺物出土状況
第2号住居跡
第2号住居跡遺物出土状況
第3号住居跡
第4号住居跡
第4号住居跡遺物出土状況
図版8　第5号住居跡
第6号住居跡
第7号住居跡
第10号住居跡
第10号住居跡炉跡
第11号住居跡
第12号住居跡
第12号住居跡カマド
図版9　第13号住居跡
第13号住居跡遺物出土状況
第14・15号住居跡(手前より)
第15号住居跡遺物出土状況
第16号住居跡
第17号住居跡
第22号土壙
第23号土壙
図版10　第29号土壙
第30号土壙
第50号土壙
第51号土壙
第63号土壙
第63号土壙遺物出土状況
第73号土壙
第78号土壙
図版11　第81・82・83号土壙(右より)
第86号土壙
第87号土壙
畝状遺構
第3号溝跡遺物出土状況
第5号溝跡
第5号溝跡遺物出土状況
第20号溝跡
図版12　第42号溝跡
第43号溝跡
第1号掘立柱建物跡
第1号掘立柱建物跡P1
第1号掘立柱建物跡P3
第2号掘立柱建物跡
第3号掘立柱建物跡
第4号掘立柱建物跡
図版13　B区土器集中出土遺物
C区土器集中出土遺物
図版14　B区土器集中出土遺物
C区土器集中出土遺物
図版15　C区土器集中出土遺物
図版16　第1号住居跡出土遺物
第14号住居跡出土遺物
第17号住居跡出土遺物
土壙出土遺物(1)
図版17　土壙出土遺物(1)
土壙出土遺物(2)
グリッド等出土遺物(1)

図版18　C区土器集中地点出土遺物(3)
図版19　土壙出土遺物(3)
土壙出土遺物(5)
図版20　土壙出土遺物(1)
土壙出土遺物(4)
図版21　グリッド等出土遺物(3)
グリッド等出土遺物(4)
図版22　第7号住居跡出土遺物
第12号住居跡出土遺物
図版23　第12号住居跡出土遺物
第13号住居跡出土遺物
第15号住居跡出土遺物
図版24　第12号住居跡出土遺物
第15号住居跡出土遺物
第16号住居跡出土遺物
土壙出土遺物(10)
土壙出土遺物(11)
土壙出土遺物(12)
図版25　土壙出土遺物(12)
土壙出土遺物(13)
土壙出土遺物(10)
図版26　土壙出土遺物(14)
溝跡出土遺物(2)
図版27　溝跡出土遺物(2)
溝跡出土遺物(3)
図版28　溝跡出土遺物(4)
溝跡出土遺物(5)
溝跡出土遺物(6)
グリッド等出土遺物(8)
グリッド等出土遺物(9)
グリッド等出土遺物(10)
図版29　二面出土石製品
図版30　一面全景(北から　手前よりA・B・C区)
A区一面全景(南から)
図版31　B区一面全景(北から)
C区一面全景(南から)
図版32　第18号住居跡
第19・20・21号住居跡(奥より)
第19号住居跡カマド遺物出土状況
第21号住居跡
第22・23号住居跡
第25号住居跡
第26号住居跡
第27号住居跡
図版33　第29号住居跡
第30号住居跡
第31号住居跡
第32号住居跡
第33号住居跡
第34号住居跡
第37号住居跡
第38号住居跡
図版34　第39号住居跡
第40号住居跡
第41号住居跡
第42号住居跡
第43号住居跡
第44号住居跡
第45号住居跡
第46・47号住居跡
図版35　第48・49号住居跡
第50・51号住居跡
第52号住居跡
第53・54号住居跡(手前より)
第55号住居跡
第56号住居跡
第57・58号住居跡
第59号住居跡
図版36　第60号住居跡
第61号住居跡
第62・63号住居跡(手前より)
第64号住居跡
第65号住居跡
第66号住居跡

第66号住居跡遺物出土状況
第67号住居跡
図版37 第68号住居跡
第69号住居跡
第70号住居跡
第71・72号住居跡(左より)
第75・80号住居跡(手前より)
第76・77号住居跡
第76号住居跡カマド
第79号住居跡
図版38 第84号住居跡
第85号住居跡
第86・87号住居跡(手前より)
第88号住居跡(奥)
第89号住居跡
第89～92号住居跡
第90号住居跡
第91号住居跡
図版39 第94号住居跡
第95・96号住居跡
第97号住居跡
第193号土壙
第202号土壙
第67・68・69号溝跡(左より)
第85・87号溝跡(左より)
第86号溝跡
図版40 第88・89・90号溝跡(左より)
第93・94号溝跡(手前より)
第95号溝跡
第95号溝跡(二面での確認状況)
第3号井戸跡
第17号井戸跡
第6号掘立柱建物跡
第7号掘立柱建物跡
図版41 第19号住居跡出土遺物
第22号住居跡出土遺物
第27号住居跡出土遺物
第30号住居跡出土遺物
第33号住居跡出土遺物
第35号住居跡出土遺物
第41号住居跡出土遺物
図版42 第42号住居跡出土遺物
第44号住居跡出土遺物
第52号住居跡出土遺物
第53号住居跡出土遺物
第56号住居跡出土遺物
第61号住居跡出土遺物
第66号住居跡出土遺物
図版43 第66号住居跡出土遺物
第70号住居跡出土遺物
第71号住居跡出土遺物
第72・74号住居跡出土遺物
第76号住居跡出土遺物
第84号住居跡出土遺物
第85号住居跡出土遺物
図版44 第86号住居跡出土遺物
第87号住居跡出土遺物
第88号住居跡出土遺物
第89号住居跡出土遺物
第90号住居跡出土遺物
第92号住居跡出土遺物
第94号住居跡出土遺物
図版45 第94号住居跡出土遺物
第19号住居跡出土遺物
第26号住居跡出土遺物
図版46 第56号住居跡出土遺物
第66号住居跡出土遺物
第70号住居跡出土遺物
第71号住居跡出土遺物
第75号住居跡出土遺物
図版47 土壙出土遺物(15)
土壙出土遺物(16)
溝跡出土遺物(8)
溝跡出土遺物(9)

グリッド出土・表採遺物等(2)出土遺物
図版48 土錘(二面を含む)
貝巣穴痕泥岩(二面を含む)
砥石
鉄製品
軽石製品(一面・二面)
第8号井戸跡出土遺物
グリッド出土・表採遺物等(1)出土遺物
グリッド出土・表採遺物等(2)出土遺物

中条条里遺跡

図版49 調査区遠景(北から)
A区(北から)
図版50 調査区水没状況
A区現況(北から)
C区(南から)
C区現況(南から)
第2号住居跡遺物出土状況
第2号住居跡
図版51 第3号住居跡
第4号住居跡
第5号住居跡
第5号住居跡遺物出土状況
第6号住居跡
第7号住居跡
図版52 第8号住居跡
第9・10号住居跡(奥より)
第9号住居跡遺物出土状況
第9号住居跡
第11号住居跡
第12・13号住居跡(右より)
第14号住居跡
第14号住居跡遺物出土状況
図版53 第15号住居跡
第15号住居跡遺物出土状況
第16号住居跡
第17号住居跡
第1・2号土壙
第3号土壙
第4号土壙
第5号土壙
図版54 第1号溝跡
第2・3号溝跡(左より)
第4・5号溝跡(右より)
第6号溝跡
第6号溝跡遺物出土状況
第7号溝跡
第1号方形周溝墓
第1号方形周溝墓木製品出土状況
図版55 第2号住居跡出土遺物
図版56 第2号住居跡出土遺物
第4号住居跡出土遺物
第5号住居跡出土遺物
第6号住居跡出土遺物
第13号住居跡出土遺物
図版57 第8号住居跡出土遺物
第9号住居跡出土遺物
第14号住居跡出土遺物
図版58 第15号住居跡出土遺物
第5号溝跡出土遺物
第6号溝跡出土遺物
第1号方形周溝墓出土遺物
第2号方形周溝墓出土遺物
図版59 第14号住居跡出土遺物
第1号土壙出土遺物
斜面包含層出土遺物

上河原遺跡

図版60 調査区全景
第3・4トレンチ
第5トレンチ
第5トレンチ土層断面
第5トレンチ遺物出土状況

Ⅰ　調査の概要

1．調査に至る経過

埼玉県では、「彩の国5か年計画21」の「便利で快適な総合交通体系を整備する」という基本目標を達成するため、県内道路交通網の整備を推進している。

本報告書に係る県道弥藤吾行田線は、平成16年開催の「彩の国まごころ国体」メイン会場へのアクセス道路として位置づけられ、既存路線の交通渋滞等を解消するバイパスとして計画されたものである。

埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課では、これら県が実施する公共開発事業に係る文化財の保護について、従前より開発部局と事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

本事業に係る埋蔵文化財の所在及び取扱いについては、平成11年9月9日付け道建第272号で道路建設課長(当時)から文化財保護課長あて照会があった。

これを受けて文化財保護課では試掘による確認調査を実施し、古宮遺跡、中条条里遺跡、上河原遺跡の所在が確認されたため、平成13年1月9日付け教文第1012号で道路整備課長(当時)あて、同年7月11日付け教文第555号、同年9月14日付け教文第806号で道路街路課長あて、その旨の回答を行った。

道路街路課と文化財保護課は、「現状保存が望ましい」という基本的な考え方に基づいて、古宮遺跡、中条条里遺跡、上河原遺跡の埋蔵文化財の保護に係る協議を行ったが、工事計画の変更が困難であったため、やむを得ず記録保存のための発掘調査を実施することになった。また、発掘調査は財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団に委託することになった。

発掘調査の実施については、道路街路課、文化財保護課及び財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団の三者により調査方法、期間、経費などの問題を中心に協議を行った。

文化財保護法第57条の3に基づく埼玉県知事からの発掘通知は平成13年4月6日付け道街第165号で提出され、それに対する埼玉県教育委員会教育長からの保護上必要な勧告は平成13年6月7日付け教文第3－174号で行った。

古宮遺跡、中条条里遺跡、上河原遺跡の発掘調査は、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団により平成13年度、平成14年度の2か年にわたって実施された。

文化財保護法第57条に基づく財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長からの届出に対する埼玉県教育委員会教育長からの指示通知については、以下のとおりである。

[平成13年度]

古宮遺跡

平成13年6月7日付け教文第2－14号

平成13年6月7日付け教文第2－17号

平成14年2月8日付け教文第2－115号

中条条里遺跡

平成13年6月7日付け教文第2－15号

平成13年10月15日付け教文第1－78号

平成14年2月8日付け教文第2－114号

上河原遺跡

平成13年6月7日付け教文第2－13号

[平成14年度]

古宮遺跡

平成14年4月18日付け教文第2－2号

平成14年4月30日付け教文第2－4号

中条条里遺跡

平成14年7月12日付け教文第2－38号

(埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課)

2．発掘調査・整理・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

県道弥藤吾行田線建設事業地内に所在する周知の遺跡は、北から中条条里遺跡・上河原遺跡・古宮遺跡である。これら三遺跡の発掘調査は、平成13～14年にかけて実施された。

各遺跡の年度ごとの発掘調査期間は、第１表のとおりである。

平成13年度

上河原遺跡

上河原遺跡の第１次調査（800㎡）は、調査に先駆けて事務所を設置し、４月初旬から、重機による表土剥ぎと、補助員による遺構確認作業を実施した。水田遺構は断面において確認できたのみであった。そこで、水田断面および遺物の出土状況を、逐次写真撮影・測量によって記録した。５月末に行い調査を終了した。

古宮遺跡

古宮遺跡第１・２次調査(10,640㎡)は、６月初旬、A区一面から、重機による表土剥ぎと補助員による遺構確認作業を実施した。検出された遺構を順次精査し、遺構・遺物の検出状況を逐次写真撮影・測量によって記録した。

９月初旬、一面に引き続き二面目の文化層の検出と、遺構精査に入った。そして、A区二面目については10月末までに調査を終了し、埋め戻しを開始した。そして12月中旬に、A区の埋め戻しを終了した。

11月初旬から、C区一面の重機による表土剥ぎと、補助員による遺構確認作業を開始した。同月末にはC区一面目の調査を終了し、12月初旬より、一面に引き続いて二面目の文化層の検出と、遺構精査に入った。C区二面目では平成14年１月末までに調査を終了し、埋め戻しを開始した。そして、C区については同年２月末までに埋め戻しを終了した。

２月当初、B区一面(西半部)の、重機による表土剥ぎと補助員による遺構確認作業を実施した。検出された遺構を順次精査し、遺構・遺物の検出状況を逐次写真撮影・測量によって記録した。B区一面(西側)の調査は、３月初旬に終了し、３月上旬、B区一面(東半部)の重機による表土剥ぎを実施した。

中条条里遺跡

中条条里遺跡は、10月初旬、調査に先駆けて事務所を設置するとともに、重機による表土剥ぎと、補助員による遺構確認作業を実施した。第１次調査(5,280㎡)の対象範囲は、A区の西側３ｍ幅部分、B区北半部の一部、南半部とC区である。

検出された遺構を順次精査し、遺構・遺物の検出状況を逐次写真撮影・測量によって記録し、平成14年１月末に終了した。この際、10月中旬にそれまでに調査の終了していた部分の、埋め戻しを行った。

平成14年２月初旬、B区北半部の未調査部分の調査を開始し、３月末までには埋め戻しおよび、事務所の撤去を終了した。(第２次調査　1,600㎡)

平成14年度

古宮遺跡

４月(第２次調査)に、補助員によるB区一面(東半部)の遺構精査に入り、５月下旬に調査を終了した。

６月初旬(第３次調査　380㎡)、重機によってB区全体を二面目の文化層まで掘り下げ、補助員による精査を開始した。同月下旬、調査を終了し、調査区の埋め戻しと、事務所の撤去を完了した。

中条条里遺跡

中条条里遺跡の第３次調査（2,500㎡）は、調査に先駆けて事務所を設置し、７月初旬から、重機による表土剥ぎおよび、補助員による遺構確認作業を開始した。そして、検出された遺構を順次精査をし、遺構・遺物の検出状況を逐次写真撮影・測量によって記録を作成した。調査は９月末に終了し、併せて調査区の埋め戻し、および事務所の撤去を終了した。そして、10月末にすべての事務処理を完了した。

(2) 整理・報告書作成

整理・報告書作成は、平成15年4月8日～平成16年3月24日、平成16年4月8日～9月30日まで実施した。

平成15年度

平成15年4月上旬から、出土遺物の水洗・註記および接合・復元作業を開始した。これらと並行して、発掘調査時に測量した遺構実測図の整理と、第二原図の作成を行った。

6月上旬、接合・復元が終了した遺物から順次、実測を開始した。また、二次原図化できたものから、スキャナーで読み込んだデータをもとに、パソコンによるデジタルトレースを行い、遺構図版の作成を開始した。

8月上旬、報告の必要な土器片の採拓作業と断面実測、および遺物実測図のトレースを開始した。

11月上旬、トレースの終了した遺物から、各遺跡・各遺構ごとに、遺物図版のレイアウトを開始すると共に、木製品の実測を開始した。

12月上旬、遺構図版のデジタルトレース、遺物実測図のトレース、土器片の採拓作業、木器の実測および、遺物図版のレイアウト等と並行して、各遺構に関する事実記載を開始した。12月上旬より、遺構写真図版のレイアウトを開始した。

平成16年1月中旬、写真撮影を行う遺物の色塗りを開始した。またこれと並行して、レイアウトに従って遺構ごとの遺物図版の作成を開始した。

3月上旬、作成した遺物図版に従って、遺物観察表の作成を開始した。

平成16年度

平成16年4月、前年度からの作業を継続するのに並行して、遺物の写真撮影を開始した。

5月中旬から、遺構・遺物以外の図版作成を開始した。6月から7月下旬にかけて、写真図版の作成と割付作業を行った。また、これらと並行して図版類・写真類・遺物等を整理・分類し、収納作業を行った。8月・9月で校正を行い、9月下旬に報告書を刊行した。

第1表　各遺跡の調査経過

	平成13年									平成14年									
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
古宮遺跡			1次										2次						
															3次				
中条条里遺跡							1次												
											2次								
															3次				
上河原遺跡	1次																		

3．発掘調査・整理・報告書刊行の組織

主体者　財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

(1) 発掘調査(平成13・14年度)

平成13年度

理事長	中野健一
副理事長	飯塚誠一郎
常務理事兼管理部長	大舘健
(管理部)	
管理幹	持田紀男
主任	江田和美
主任	長滝美智子
主任	福田昭美
主任	腰塚雄二
主任	菊池久
(調査部)	
調査部長	高橋一夫
調査部副部長	坂野和信
主席調査員(調査第二担当)	昼間孝志
統括調査員	橋本勉
統括調査員	富田和夫
統括調査員	木戸春夫
統括調査員	鈴木孝之
主任調査員	大谷徹
主任調査員	君島勝秀
主任調査員	上野真由美

平成14年度

理事長	桐川卓雄
副理事長	飯塚誠一郎
常務理事兼管理部長	大舘健
(管理部)	
管理幹	持山紀男
主任	江田和美
主任	長滝美智子
主任	福田昭美
主任	腰塚雄二
主任	菊池久
(調査部)	
調査部長	高橋一夫
調査部副部長	坂野和信
主席調査員(調査第二担当)	昼間孝志
統括調査員	鈴木孝之
調査員	安生素明

(2) 整理・報告書刊行(平成15・16年度)

平成15年度		平成16年度	
理事長	桐川卓雄	理事長	福田陽充
副理事長	飯塚誠一郎	副理事長	飯塚誠一郎
常務理事兼管理部長	中村英樹	常務理事兼管理部長	中村英樹
(管理部)		(管理部)	
副部長	村田健二	副部長	村山健二
主席	田中出夫	主席	田中巾夫
主任	江田和美	主任	江田和美
主任	長滝美智子	主任	長滝美智子
主任	福田昭美	主任	福田昭美
主任	腰塚雄二	主任	菊池久
主任	菊池久		
(調査部)		(調査部)	
調査部長	宮崎朝雄	調査部長	宮崎朝雄
調査部副部長	坂野和信	調査部副部長	坂野和信
主席調査員(資料整理担当)	金子直行	主席調査員(資料整理担当)	金子直行
統括調査員	鈴木孝之	統括調査員	鈴木孝之

II　遺跡の立地と環境

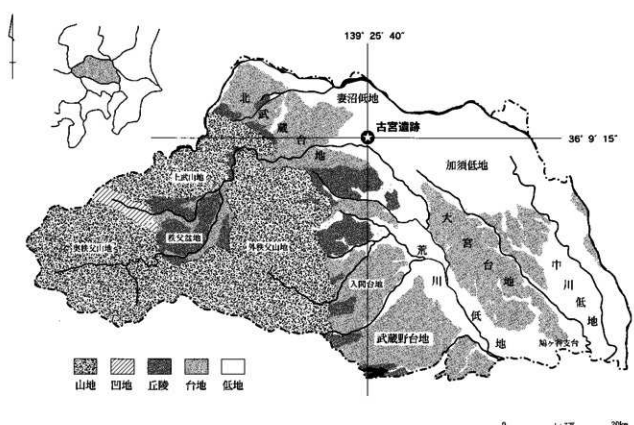
古宮遺跡・中条条里遺跡・上河原遺跡は、熊谷市市街から北東約3.5kmの郊外にあたる。遺跡周辺は県北部の穀倉地帯となり、広大な山間地帯が展開している。

遺跡の立地する地形は、大まかにみれば、熊谷市や妻沼町を挟む利根川と荒川のほぼ中間に相当する。

荒川は、奥秩父の甲武信岳を水源として秩父盆地を北流し、寄居町末野付近で東に流れを転じ、広大な洪積扇状地を形成する。三つの遺跡は、この熊谷新扇状地形の末端部に相当する。ここでは、扇状地形末端部の特長ともいうべき湧水点、およびこれにかかる伏流水がみられ、数多くの中小河川が発達し、その周辺部には多数の井戸が認められる。さらに、熊谷市三ヶ尻付近からは、東北東に開く沖積扇状地形が展開している。この一帯では、点在する自然堤防が利根川の氾濫原とも重なり、複雑な微地形を形成している。そのため、利根川沿いの妻沼町から熊谷市街地までは妻沼低地と呼ばれており、行田市北方を境に形成された加須低地へと移行する。

熊谷扇状地を東流する星川は、古代までの荒川筋とも考えられており、現流路に沿う自然堤防が多数形成されている。また、多くの河川の氾濫が、さまざまに流路を移したものと推定される。一方、忍川は市内に所在する星渓園を源として、扇状地形に沿って蛇行を繰り返し、行田市内の武蔵水路手前で、大きく南東へ向かって流下する。

熊谷市周辺では、旧石器から縄文時代の遺跡はき



第1図　埼玉県の地形

わめて少なく、この時代の遺跡としては、櫛挽台地上の籠原裏遺跡が知られているに過ぎない。

縄文時代に入ると、櫛挽台地や妻沼低地にも徐々に集落が現れ始める。妻沼低地では、寺東遺跡から前期の関山式土器が出土している。また櫛挽台地では、三ヶ尻遺跡群内の林遺跡において前期黒浜期の集落が検出されたほか、小台遺跡、割山遺跡など確認されている。また三ヶ尻遺跡では、縄文時代中期後半から後期初頭にかけての集落が確認されている。後期の遺跡としては、寺東遺跡・石田遺跡など知られている。池上遺跡・諏訪木遺跡では、縄文時代後期から晩期にかけての、遺構や包含層が発見されている。

このように、縄文時代後期から妻沼低地の自然堤防上へと、生活の拠点を移していった状況が窺える。

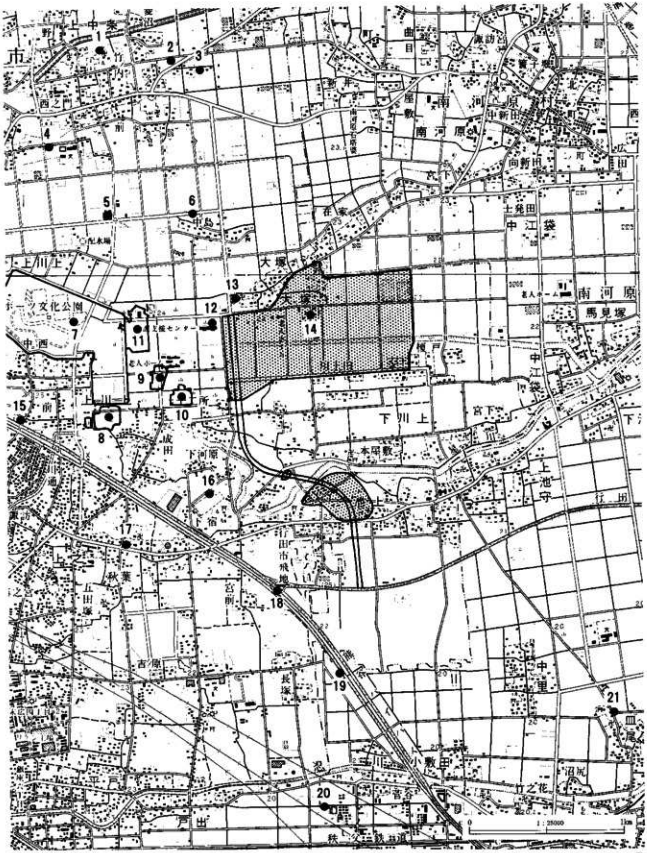
弥生時代に入ると、縄文時代からの立地を踏襲する形で、自然堤防上に集落が展開する例が増加する。三ヶ尻上古遺跡・横間栗遺跡などでは、再葬墓が検出されている。前中西遺跡では、弥生時代中期後半から後期まで継続する集落跡が確認されている。古宮遺跡から1500m程北西に位置する北島遺跡では、住居跡78軒・掘立柱建物跡1棟・土壙79基・溝跡6条等の遺構が検出されている。

古墳時代に入ると、墳丘は台地や、低地内に散在する自然堤防上の微高地に形成された。また集落についても、台地だけではなく自然堤防上にも数多くの遺跡が確認されており、低地部にも積極的に進出していった様相が見て取れる。この時期において遺跡数は増大し、さらには各遺跡の規模は拡大化をみせる。古墳時代前期では、根絡遺跡・横間栗遺跡・一本木前遺跡・中耕地遺跡等の集落遺跡が検出されている。なお、一本木前遺跡では4基の方形周溝墓も確認されている。また、熊谷市東部から行田市域の熊谷扇状地末端から妻沼低地にかけての一帯では、池上遺跡・池守遺跡・小敷田遺跡・皿尾遺跡・東沢遺跡・天神東遺跡・中条遺跡内の甫電塚遺跡等々の遺跡が知られている。これらの他に、小敷田遺跡では4・6世紀、前中西遺跡では後期を主体とする集落跡が検出されている。古墳では、鎧塚古墳、女塚1・2・4号墳、大塚古墳等を擁する中条古墳群がある。

古代に入ると、遺跡の規模が拡大すると共に、官衙関連施設を想定させるような特定集落遺跡が発見されている。西別府廃寺は、幡羅郡の郡寺と推定されている。また、近年深谷市幡羅遺跡では総柱の倉庫群が確認され、幡羅郡衙の正倉域と想定されている。また小敷田遺跡では、7世紀末から8世紀初頭にかけての出挙木簡などが出土したほか、池上遺跡では9世紀代の企画性をもつ掘立柱建物跡群が検出されている。さらに、熊谷市諏訪木遺跡では、9～10世紀代の複数の大型建物跡や多数の掘立柱建物跡群などが検出されている。このほか、河川脇の祭祀関連遺構や、企画性をもつ集落跡と大型掘立柱建物跡が検出されており、特殊な様相を窺がわせている。北島遺跡では、古代においても抜きん出た地域であったと思われる。とくに第19地点では、9～11世紀の二重濠をもつ台形の区画地が検出されている。その他の調査地点においても、数多くの住居跡や掘立柱建物跡が展開しており、他を圧倒するがごとき状況をみせている。さらにその周囲には、浅間B軽石が残る水田跡が検出されているが、中でも第17地点では、条里区画に沿う水路跡も調査されている。

平安時代末から中世に入ると、武蔵七党や在地武士団の館跡が群在し始め、中条氏館跡・熊谷氏館跡・久下氏館跡・市田氏館跡などが、中小の河川流域に覇を競っている。

古宮遺跡・中条条里遺跡・上河原遺跡の周辺には、中世館跡が数多く検出されているが、それらの多くは中条氏関連と推定されるものである。遺跡としては、上記のほかに光屋敷遺跡・常光院遺跡・権現山遺跡等があるが、これらは主として中世前半の遺跡である。成田氏の居館跡については奈蔵院付近とされている。



1．中条氏館跡　2．権現山古墳　3．中条古墳群　4．女塚古墳　5．鎧塚古墳　6．中島遺跡　7．北島遺跡（No.1～13地点）　8．北島遺跡（No.14～16地点）　9．北島遺跡（No.17地点）　10．北島遺跡（No.18地点）　11．北島遺跡（No.19地点）　12．天神東遺跡　13．大塚古墳　14．東沢遺跡　15．河上氏館跡　16．熊谷市No.59遺跡　17．成田氏館跡　18．池上遺跡　19．小敷田遺跡　20．持田藤の宮遺跡　21．皿尾遺跡

第2図　周辺の遺跡

第3図　遺跡の位置迅速測図

Ⅲ　古宮遺跡

1．調査の概要

古宮遺跡は、熊谷市大字池上字関下936番地１他に所在する。遺跡の推定範囲は、東西約450m・南北約330m、調査区の総延長は約350mである。

今回は、第１次～第３次調査であり、その期間と面積については、以下のとおりである。

第１次調査　平成13年６月１日～平成14年３月22日まで

第２次調査　平成14年４月９日～平成14年５月31日まで第１次・２次併せて10,640㎡

第３次調査　平成14年６月３日～平成15年３月10日まで380㎡

なお、第３次調査については、調査そのものは６月中に終了した。

古宮遺跡は、上河原遺跡の南東約150m、中条条里遺跡の南東約600mに位置し、三遺跡の南端に当る。なお、古宮遺跡は、上河原遺跡と星川を挟んで対岸の右岸に存在する。

古宮遺跡は、荒川と利根川に挟まれた妻沼低地に立地するが、位置的に荒川扇状地との境界域に近いといえる。そのため、扇状地形における伏流水上昇によって発生した湧水を源とする、中小の河川が多数みられる。これらの河川は、基本的に西から東へと流下しながら、さまざまに流路の移動を繰り返すことによって、自然堤防や後背湿地が複雑に形成されていったと推定される。遺跡周辺は、星川が大きく蛇行する地域であるため、よりいっそう地形の形成は複雑なものとなったと考えられる。古宮遺跡は、そういった自然堤防の一つに立地しており、星川右岸に接するように展開している。

各調査区の遺構確認面は主に二面、部分的に三面の文化層からなる。上から数えて一面目では、古代を中心として、中近世までの遺構と遺物が検出された。二面目では、弥生時代中期から古墳時代中期までが含まれるが、微地形的に窪地状の部分からは、縄文時代晩期の上器集中が検出されている。

このほか、Ｂ区南端部付近では、部分的にではあるが、一面目より上面に、中近世の溝跡やピットが認められる文化層が確認されたため、中近世面と呼称した(第310図)。

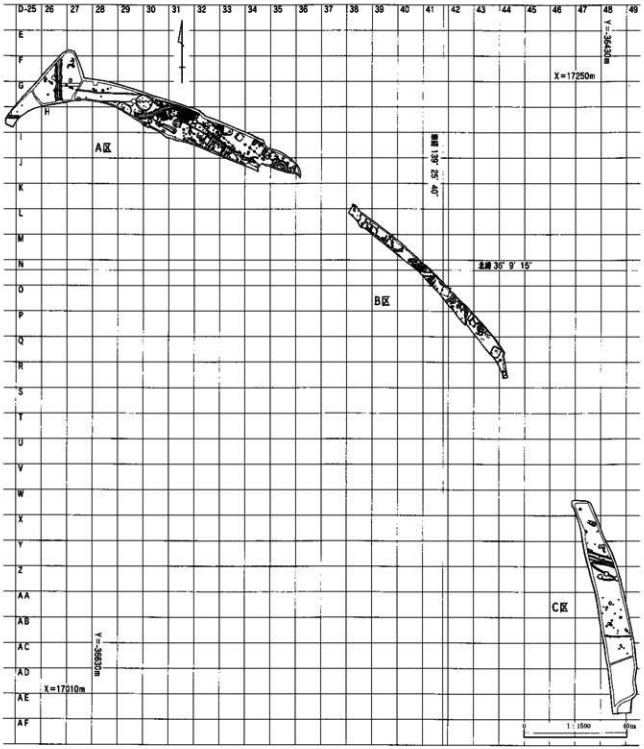
遺跡が自然堤防の肩の部分に立地しているため、河川の増水などの影響を受けやすく、地形的変化が生じ易い環境にある。そのため、各遺構確認面は、当時の地形を反映しているが、それは現在のものとは隔たりがある。

全測図(第４～８・144～147図)から明らかなように、二面と一面では、調査範囲に差がある。また、一面目と二面目では、調査区の長さが異なっている。これは、一面目ではＡ区北西端部が水田耕作により既に失われており、調査範囲となっていないのに対し、二面目は遺存しており、対象範囲となっていることによる。

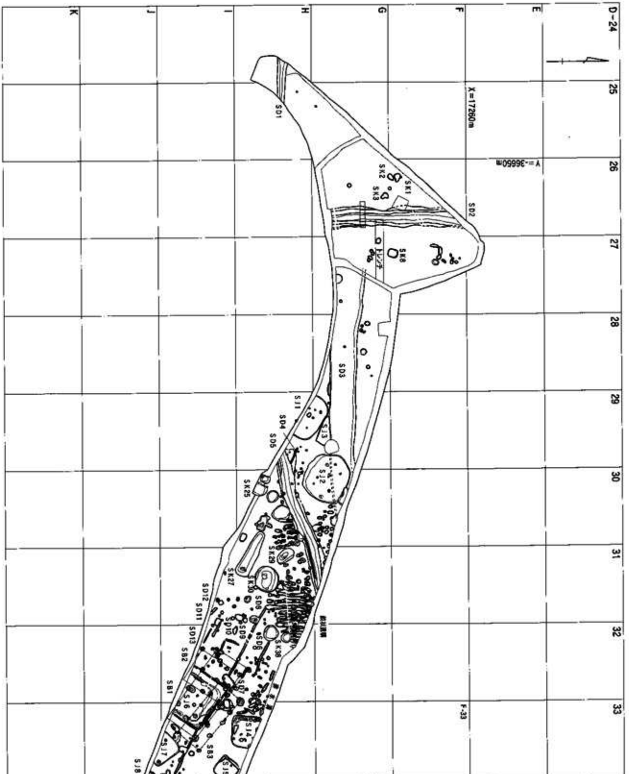
また、調査区の幅に差があるのは、調査区境の崩落を避けるため、壁面を垂直ではなく法面としたために、確認面が下がることに調査可能な範囲が狭くなったことによる。とくにＢ区付近では、現地表面が最も高いため二面目までの比高差が大きく、調査可能な幅が全体の半分程度まで狭くなった。

現地表面から、各遺構確認面までの深度はさまざまである。二面目の遺構確認面は、Ａ区西端部では、現地表面から120㎝程であり、東端部では150～220㎝程であった。Ｂ区では210～310㎝程、Ｃ区では170～220㎝程であった。

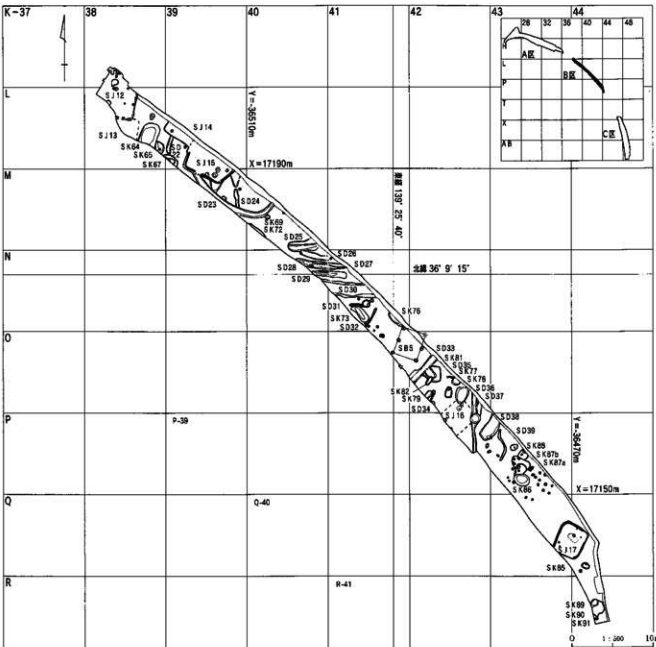
一面目の遺構確認面は、Ａ区西端部では、現水田面の直下、現地表面から10～20㎝程であり、東端部では120～140㎝程であった。Ｂ区では現地表下180～220㎝程、Ｃ区では120～150㎝程であった。


A区
B区
C区
X=17250m
Y=-36430m
X=17010m
Y=-36630m
東経 139° 25' 40"
北緯 35° 9' 15"
1:500
0
10m

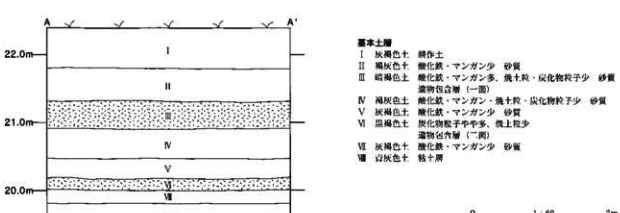
第4図　二面全測図


D-24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
E
F
G
H
I
J
K
X=17260m
Y=-36660m
X=17230m
Y=-36550m
SD1
SD2
SD3
SD4
SD5
SK1
SK2
SK3
SK8
SJ1
SJ2
SJ3
SK25
SK27
SK29
SD12
SD11
SD13
SB1
SB2
SB3
SJ5
SJ6
SJ7
SJ8
SJ9
SJ10
SJ11
SK62
SD14
SD15
SD18
SD19
SD20
SD21
F-33
G-34
H-35
A区
B区
C区
0
10m

第5図　二面A区全測図

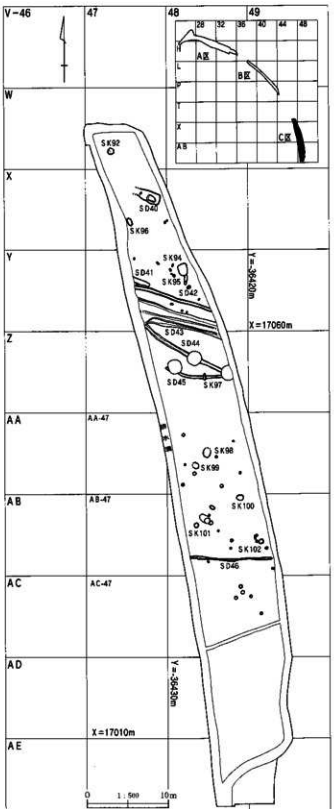


第6図　二面B区全測図



基本土層
- I　灰褐色土　耕作土
- II　褐灰色土　酸化鉄・マンガン少　砂質
- III　暗褐色土　酸化鉄・マンガン多、焼土粒・炭化物粒子少　砂質　遺物包含層（一面）
- IV　褐灰色土　酸化鉄・マンガン・焼土粒・炭化物粒子少　砂質
- V　灰褐色土　酸化鉄・マンガン少　砂質
- VI　黒褐色土　炭化物粒子中中多、焼土粒少　遺物包含層（二面）
- VII　灰褐色土　酸化鉄・マンガン少　砂質
- VIII　白灰色土　粘土層

第7図　古宮遺跡基本土層図



第8図　二面C区全測図

星川側から、A区(南側)に向かって徐々に高まり始め、B区周辺で最も高くなり、C区(南側)にいくに従って降下していく状況がみてとれる。そして、県文化財保護課による試掘結果によれば、その南には遺構が延びていない。

今回の発掘調査は、A区一面の西端部から開始し、続いて二面の調査に入った。A区終了後、B区の中近世面・一面目・二面目の順に調査を行ったが、B区に並行して、C区も一面目・二面目の調査を実施した。

その結果、二面と一面から検出された遺構は、以下のとおりである。

二面

竪穴住居跡	17軒	土壙	102基
溝跡	46条	掘立柱建物跡	5棟
畝状遺構	30枚	ピット	331本
土器集中	2箇所		

一面

竪穴住居跡	80軒	土壙	121基
溝跡	50条	掘立柱建物跡	2棟
井戸跡	25基	ピット	504本

本項に続く、「2　検出された遺構と遺物」においては、時期の古いものから順次報告するという原則に則り、二面目から報告を始め、ついで一面目、そして中近世面の順に報告を行うこととする。

2　検出された遺構と遺物

A　調査区二面

(1) 縄文時代

(a) 土器集中地点

古宮遺跡ではB区南側、C区北端の2箇所で、縄文時代晩期中葉の遺物包含層が確認された(第9図)。ここでは、それぞれの包含層をB区土器集中地点、C区土器集中地点として報告する。

B区土器集中地点(第10~12図)

Q−43グリッドの北東、Q−44グリッドの北西において大量の遺物が確認されている。調査区が南北に狭い形状であるため、北東側と南西側の遺物分布範囲を確定することができなかったが、北西側、南東側の分布は図示した範囲に留まるようである。遺物分布範囲は、調査区内において、南北に6.5m、東西に6mを測る。

土器集中地点の地形は、緩やかに南へ傾斜する地形である。土層断面等の記録は無いが、調査時の観察から、遺物はこの緩傾斜に則して出土しているようである。遺物出土レベルを見ると、高い地点で標高20.6m、低い地点で標高20.3mを測り、高低0.3m以上のレベル差を見せる(第11図)。遺物出土層位は、炭化物を多量に含む黒褐色粘質土層であり、上層に酸化鉄・酸化マンガンを多量に含む灰白色粘土層、下層に青灰色粘土層に挟まれた土層である。上層の灰白色粘土層は弥生時代~古墳前期にかけての遺構構築面でもある。

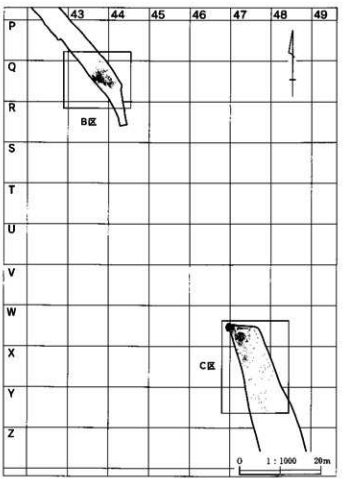
第12図は接合・復元した土器のうち、実測図を掲載できた個体の出土状況図である。出土土器の大半が粗製土器であったこともあり、接合関係の把握が徹底されたとは言えないが、接合個体の出土状況を見る限り、各個体は非常に近距離で接合している。これは掲載を省いた他の個体についてもほぼ同様の傾向であり、土器堆積後に大きな移動があったことは認めがたいだろう。

出土遺物 (第13~20図)

出土遺物の内容は、縄文晩期中葉の精製土器、粗製土器、石器、獣骨などであり、大小の礫を伴って出土した。遺物出土量はコンテナ換算で15箱を数え、そのほとんどすべてが土器である。出土土器の多くは粗製土器であり、精製土器は出土土器全体の5%に満たない。

石器の出土はわずかであり、内容としては磨石2点、石皿1点を確認したのみである (第20図)。

以下で出土土器の説明を行うが、ここでは第1~9群に分けて説明する。遺物掲載にあたり、文様を有する精製土器に関しては著しく小片であるもの以外、極力掲載するよう努めた。粗製土器に関しては、内面の炭化物粒子付着範囲を図示している。



第9図　B・C区位置関係図

第1群（第14図2・3・7・8）

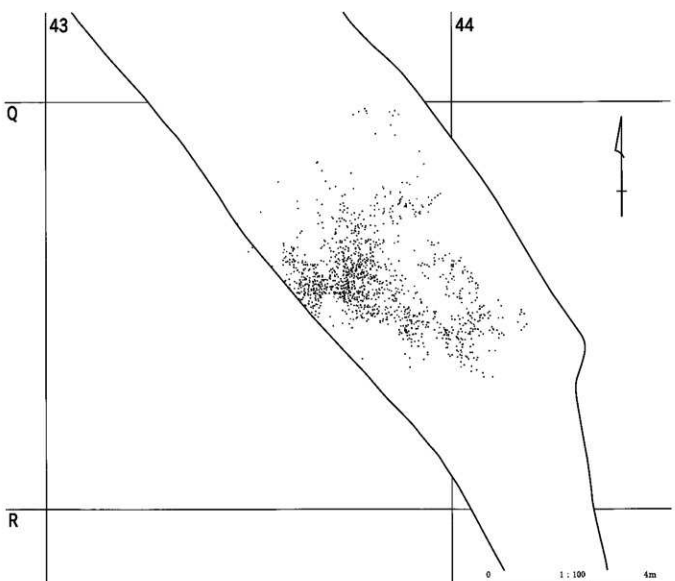
磨消縄文を施すもので安行3b式と考えられる土器を一括する。第14図2・3は豚鼻状貼付文を施す。2は口縁部、3はくびれ部の破片である。7・8は胴部下半の土器で、並行する沈線間に縄文を施して磨消縄文とする。

第2群（第13図1～3、第14図4·5、9～17·24）

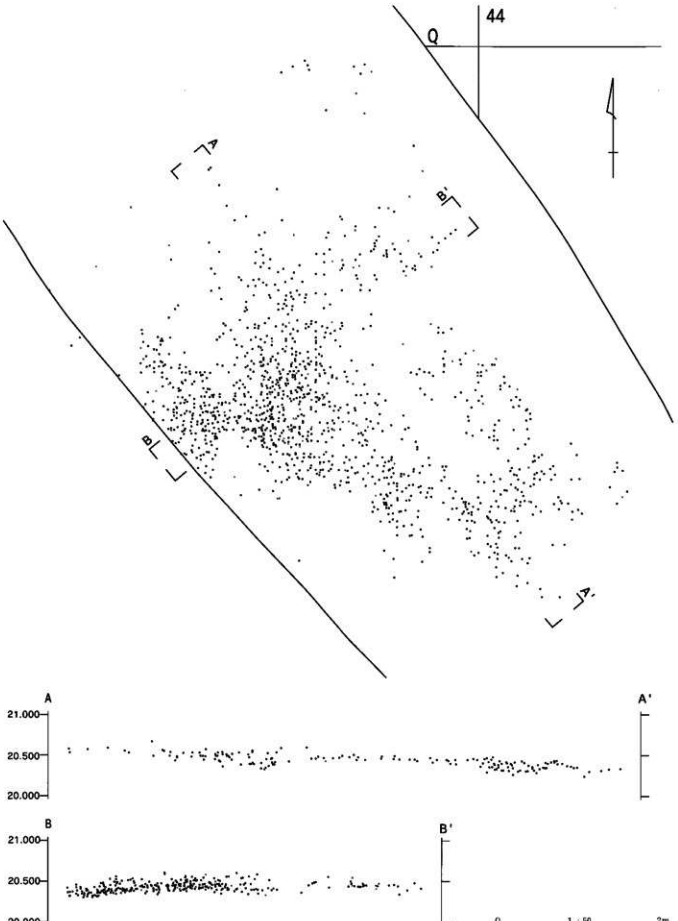
菱形区画文構成の土器を一括する。第13図1～3、第14図4・5、9～12は、いわゆる「天神原式」と呼ばれる土器群に相当する。文様は沈線と縄文によるもの、沈線のみのもの、沈線と小刺突によるものに分類され、これらに併せて円形貼付文や棒状貼付文等が用いられる。菱形区画は二条1単位の沈線により描出される。

一方、第14図14～16は「姥山Ⅲ式」類似の土器で、単沈線により菱形区画を描出する。

第13図1は頸部にくびれをもつ5単位の波状口縁深鉢で、第14図4・5と同一個体である。口縁部～胴部上半までの25%程度が残存し、おおよその文様把握が可能である。頸部には二条沈線を横走させ口頸部と胴部を区画する。口頸部文様は波頂部下に菱形区画文を配し、区画文内には楕円文を描出、その中に楕円形貼付文を配す。また、波底部下には円形貼付文を配す。地文はLR縄文であり、口頸部



第10図　B区土器集中　遺物平面分布図

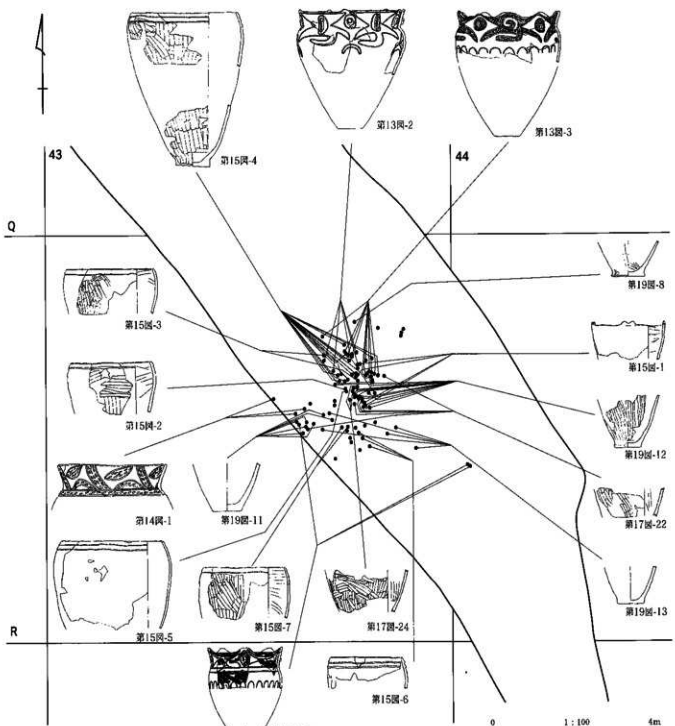


第11図　B区土器集中　遺物平面・立面分布図

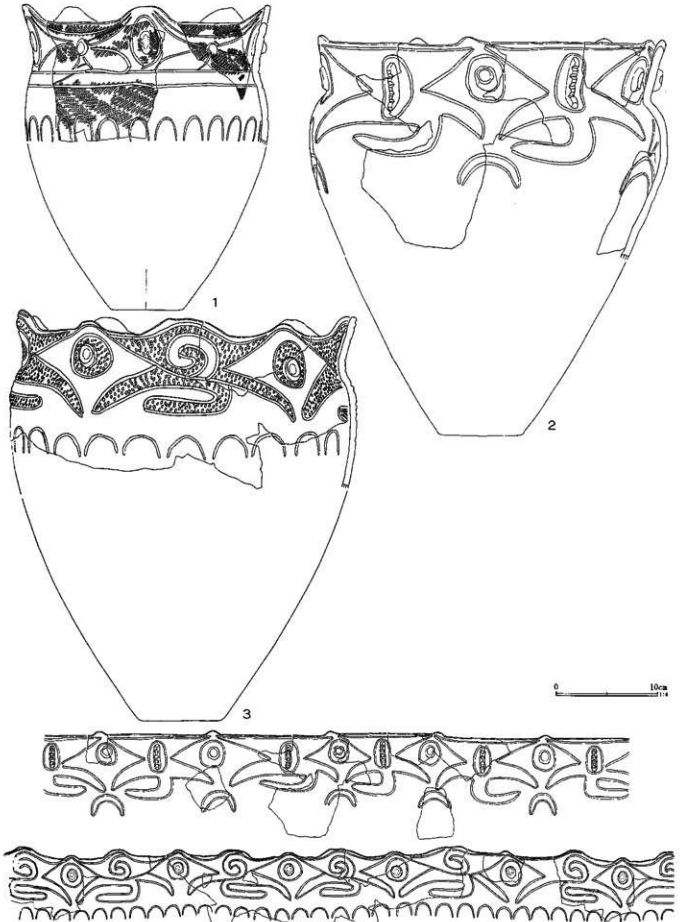
は横位、胴部は斜位に施文される。菱形区画文内、頸部区画線内は磨消されるようだが、磨消し範囲が不分明で地文が残存するところも見られる。また、ところどころに文様割り付け時の下書き沈線が残るなど、全体的に粗雑な印象を受ける。口径24.4cm、現存高13.8cm。

第13図2は小突起を有する5単位の平口縁深鉢で、胴部上半に最大径をもち、頸部で強くくびれ、口縁部に向かって外傾する土器である。資料は断片的であったが要所が残存しており、不確定要素を含みながらも文様を推測することができた。

菱形区画文は小突起直下に配され、区画文内には



第12図　B区土器集中　遺物出土状況図



第13図　B区土器集中出土遺物(1)

円形貼付文を有した円文が描かれる。5単位の菱形区画文間にはキザミを有する棒状貼付文を囲むように楕円文が描かれる。菱形区画は菱形の上部と下部が閉じず、右に開く「<」字状の文様と左に開く「>」字状の、それぞれ独立した文様が一筆書きで描出される。菱形を構成する「<」字状文様は小突起の直下で折り返し、口縁沿いに沈線を走らせ、次の小突起直下で菱形区画を構成する「>」字状文様として折り返す。「>」字状文様は菱形下部において鋭角に折り返し、棒状貼付文を囲む楕円文直下で横に押しつぶされたJ字状文へと連結する。菱形区画文下部には下向三日月文が描かれる。口径34.3cm、現存高25.8cm。

第13図3は5単位の波状口縁深鉢形土器で、胴部下半を欠損するものの胴部上半の80%が残り、文様の全容がほぼうかがえる個体である。第13図2とよく似た文様構成を示すが、2の菱形区画文が楕円文との交互配置であるのに対し、3は渦巻文との交互配置であるところに相違が認められる。小波状口縁下には菱形区画文、大波状口縁下には渦巻文が描出される。菱形区画文は上部で閉じ、下部で開くように描かれる。下部で鋭角に折り返した「>」字状文様は渦巻文下部において、2の資料同様、横につぶれたJ字状文へと接続する。小刺突は菱形区画文と渦巻文を除いた部分に、沈線と同一工具により充填される。口径33.5cm、現存高17.0cm。

第14図9～11は同一個体で、外傾する口縁部文様帯に二条の沈線により菱形区画文を配し、区画文内に円形貼付文を施す土器である。口縁部は緩やかな波状を呈し、波頂部の口端部には刺突が加えられる。

第14図12は並行する沈線間を小刺突で充填する波状口縁深鉢で、波頂部は台形状に突起する。緩やかに張った胴部最大径付近に小刺突を伴う横帯区画がみられ、口頸部文様帯内は、二条沈線による波状縁に沿った弧線文と直線的モチーフで菱形区画文を描出し、区画文内には貼付文を伴う小刺突充填の円文を配す。また菱形区画と横帯区画の接点に円形貼付文を配す。

第14図24は並行する沈線間を小刺突で充填する平口縁深鉢で、12とは同一個体である。小刺突は沈線と同一工具が用いられている。

第14図13は二条沈線で区画された口頸部文様帯に棒状貼付文を配し、これを中心に対向弧線文を描いて菱形区画構成をとる土器で、棒状貼付文を中心に据えた菱形区画文内は抉り込まれ、結果として棒状貼付文両側は三叉状の陰刻となる。平口縁と判断したが、緩やかな波状口縁の可能性もある。

第14図14～16は小片のため判然としないが単沈線により菱形区画構成をとる土器である。14は波状口縁深鉢の波底部付近の破片で、波頂部下と波底部下に菱形区画が描かれる。剥落の様子から、波底部下の菱形区画文内は円形貼付文を伴っていたものと思われる。15は波頂部の破片で、第13図2のように「<」字状文が口縁部付近で鋭角に折り返し、上部の閉じた菱形区画文を描出する土器であろう。区画文内には円文が描かれる。

第14図17は波状口縁深鉢で、口縁に沿った沈線が確認される。第13図3のように波頂部で閉じる菱形区画を描出するのであろうか。沈線は細く浅い。

第3群（第14図18～23）

並行する沈線によって弧線文、斜沈線等を施す土器である。小破片で文様構成がわかりづらく、菱形区画構成が予想されながらも、第2群に含められなかった土器もある。第14図18・21は斜沈線、20・22・23は弧線文が描かれる。19は3本沈線による弧線文が描かれる。

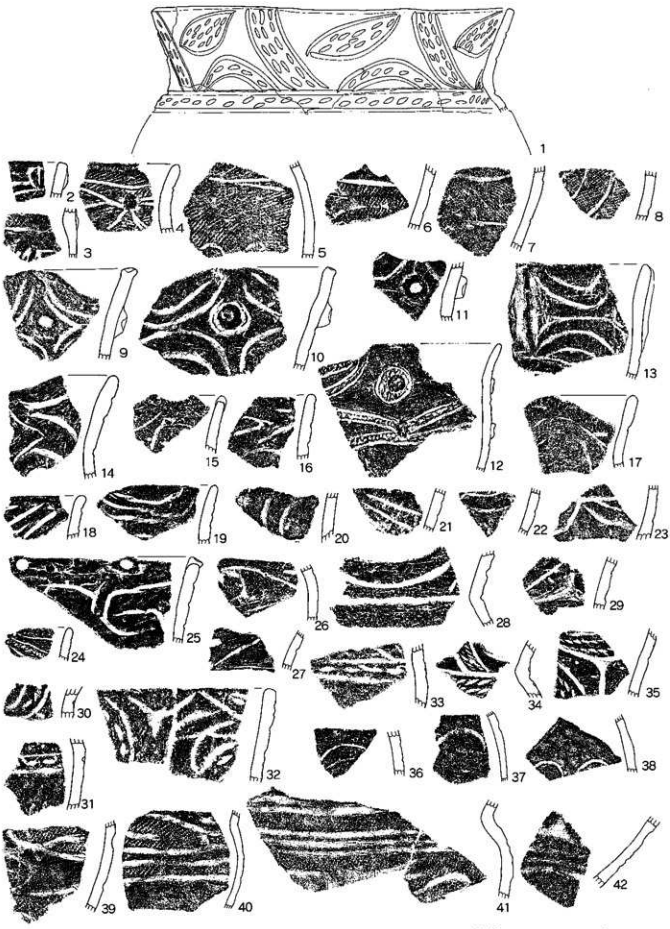
第4群（第14図25～29）

単沈線により文様を描出する土器を一括する。S字状沈線、斜沈線、弧線文、三叉文等に分類される。

第14図25・26は入組文の描かれた土器で、25は口端部に刺突と刺突が加わった突起を有する。器面は硬くケズリの痕跡が明瞭である。28はくびれ部に横帯区画を施し、口頸部に弧線文が描出される。29は三叉文の抉り込みが見られる。

第5群（第14図1・30～35）

並行する沈線間に米粒状の列点を施す土器で、第



第14図　B区土器集中出土遺物(2)

14図30～33は沈線間の列点が単列のもの、第14図1、34・35は列点が複列のものである。

31・33はくびれ部付近の横帯区画で、30・32は弧線間の列点である。列点描出は単列より複列化したものの方がシャープな印象を受ける。

第14図1は沈線間の列点が複列の平口縁深鉢で、口縁部から頸部までが残存している。頸部くびれ部付近に二条沈線による横帯区画が見られ、沈線による木の葉状文様や弧線文内に列点を複列に配する。口径35.6cm、現存高10.4cm。

第6群（第14図36～38）

胴部破片を一括する。くびれ部直下に弧線文を連続させるものであり、36は下向三日月文、37・38は弧線文を描出する。

第7群（第14図39～42）

浅くやや幅の広い沈線文で文様を構成するもので、大洞C1式系の土器である。第14図39～41は縄文を施文する。42は浅鉢であろうか、三条の並行沈線と三叉文の抉り込みが描出される。

第8群（第15図1、第16図1～15）

口縁部の突起やキザミ以外の文様を持たない土器を一括する。第15図1は口縁部に対の山形突起を5単位に配す土器で、くびれ部を持たず外傾直立する。内面は横方向にナデている。口径24.0cm、現存高12.4cm。

第16図1～7は頸部で屈曲し口縁部に向かって外傾する土器である。1は対の山形突起を有する。2は口端部に棒状工具の腹で連続的に押圧を加えた土器で、口端部は緩い波状を呈する。8は胴部が張る器形であろうか、頸部で屈曲し口縁部に向かって直立する。9・10は同一個体で、口縁端部にヘラ状工具によるキザミ列を施す。11～15は口縁部が内湾する土器で、13は口縁端部が外側へ鉤状に屈曲する。

第9群（第15図2～7、第16図16～37、第17図1～19）

口縁部に隆帯を巡らせた有段口縁粗製深鉢である。隆帯は1～3段のものまで確認された。出土量的には1段がもっとも多く、以下、2段、3段と続く。隆帯の接合部で破損している場合も多く、段数把握は正確なものではないが、1段：2段：3段の出土比率は概算で6：3：1程度となる。器形の多くは砲弾型を呈するものと思われ、最大径は、口縁部隆帯直下から胴部上半にくる土器が多い。器壁の厚さは5～9mmのものまで確認されたが、7mm程度のものがもっとも一般的である。外面調整は木口状工具によるケズリが圧倒的に多く、口縁部隆帯直下から行われる。体部ケズリ方向は、横方向のものと斜方向、縦方向のものが観察されるが、数量的には前者より後二者の方が多い。いずれの場合も胴部上半、下半、底部と下方へ行くに従い、ケズリ方向は縦方向に収斂される。口縁部隆帯には貼り付け時の指頭押圧が残る場合が多い。内面調整は多くの場合、口縁部付近が横方向、以下は縦方向にナデられる。

本地点においては、隆帯段数や器形、器壁の厚さや内外面調整等の属性間の相関は見られなかった。

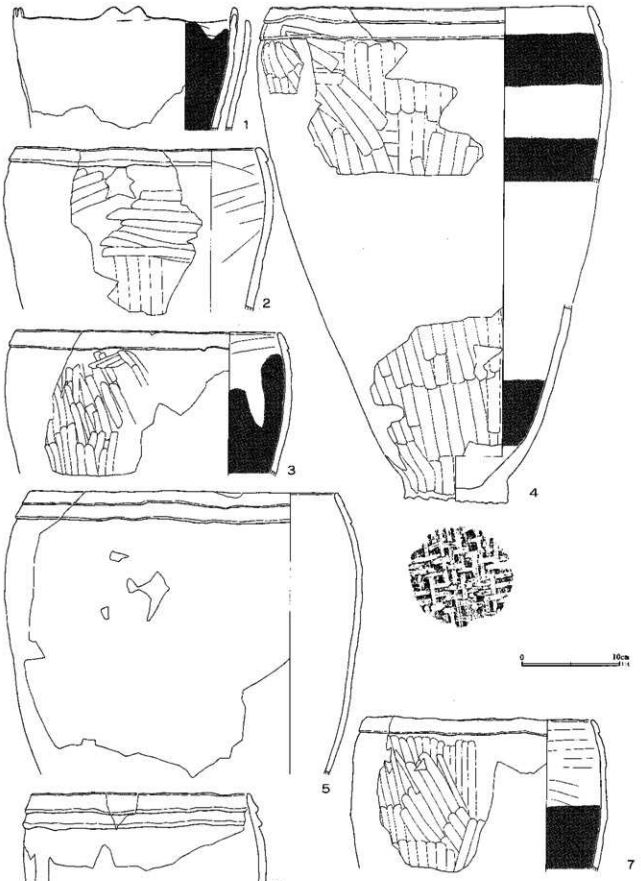
第15図2・3・7、第16図16～37、第17図1～3は1段の有段口縁粗製深鉢である。第15図2は口径26.4cm、現存高17.0cm。3は口径28.4cm、現存高14.8cm。7は口径24.4cm、現存高15.8cm。

第15図4～6、第17図5・6、8～19は2段の有段口縁粗製深鉢である。第15図4は口縁部と胴部下半～底部にかけての土器で、ほぼ隆帯直下から底部に至るまで、縦方向のケズリが施される。内面には胴部最大径付近、胴部中央、底面やや上位に帯状のススが見られる。底部には網代圧痕が観察される。口径34.0cm、器高50.0cm、底径10.4cm。

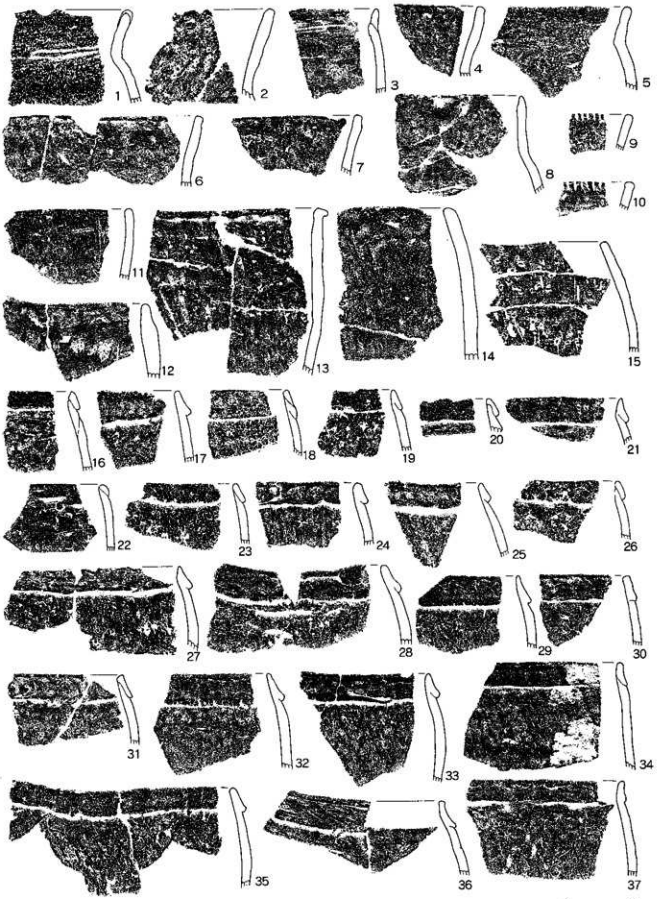
第10群（第17図21～23、第18・19図）

無文の胴部および底部を一括した。第17図21～23は外面に縦位や斜位のケズリの痕跡が見られる破片で、第9群土器の胴部に相当しよう。出土遺物中もっとも多く見られる部位であるが、多くの掲載を省いている。

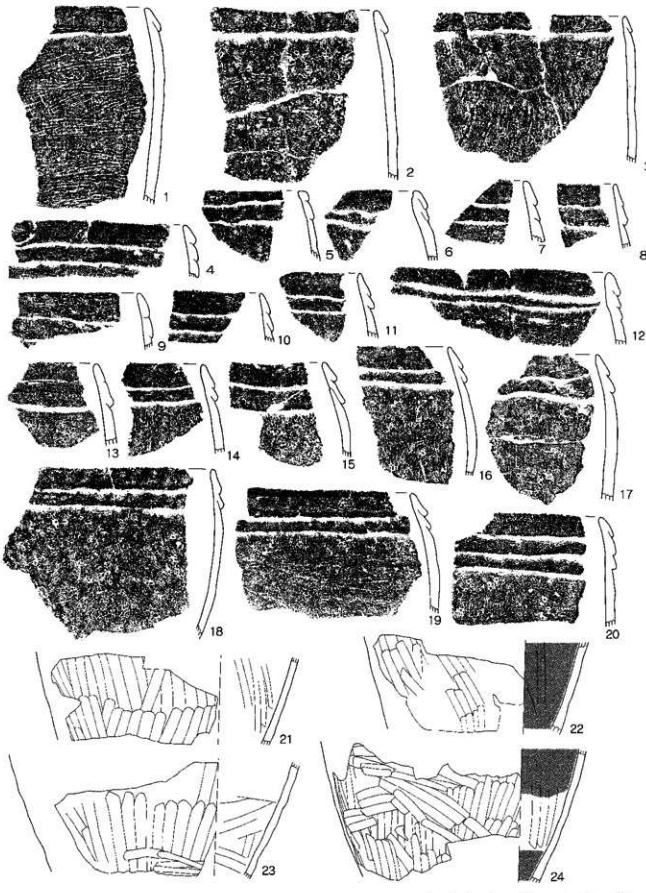
第18・19図は底部破片である。ここで掲載した



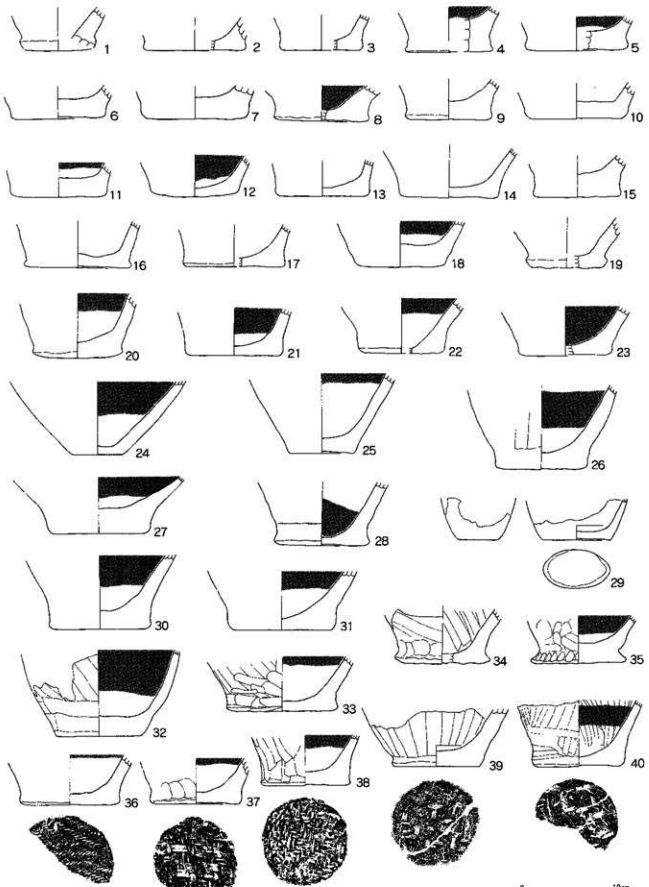
第15図　B区土器集中出土遺物(3)



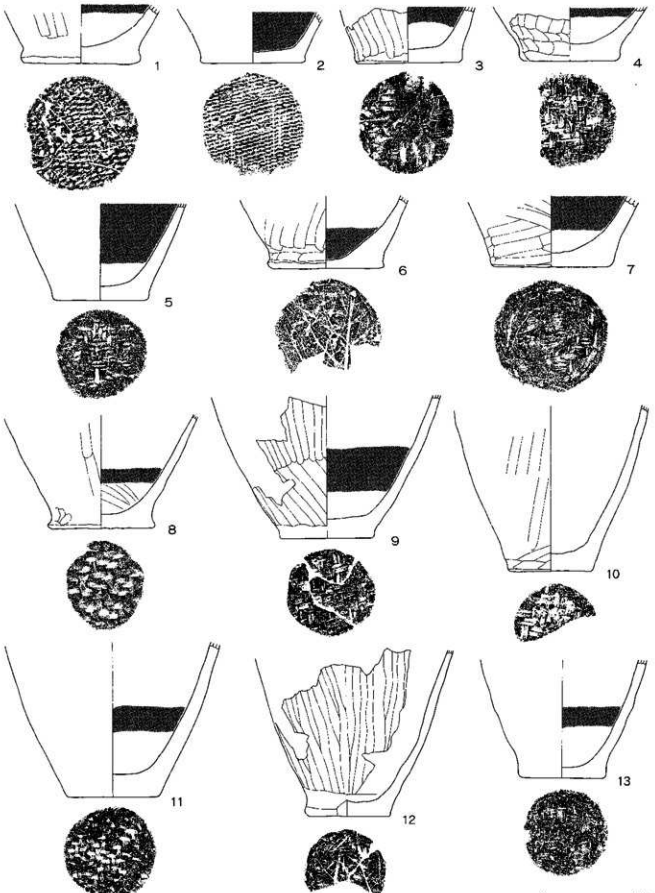
第16図　B区土器集中出土遺物(4)



第17図　B区土器集中出土遺物(5)



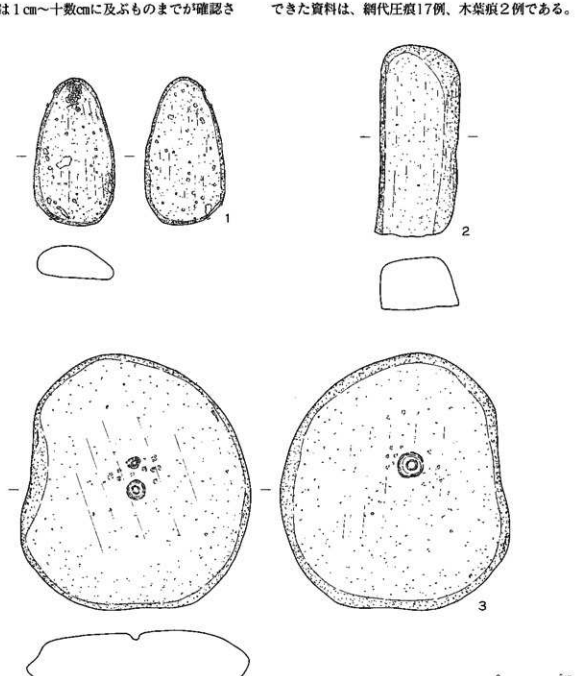
第18図　B区土器集中出土遺物(6)



第19図　B区土器集中出土遺物(7)

のは53点であるが、B区全体では80点を確認している。外面には縦方向や斜方向のケズリが見られ、第9群土器の底部に相当する。内面には帯状に炭化物粒子が付着している個体が多いが、付着箇所は底ではなく、底から3～5cm程上位が一般的である。炭化物の幅は1cm～十数cmに及ぶものまでが確認された。煮沸方法や煮沸物にもよるだろうが、一度の使用で形成される幅は1cm程度であり、幅広のものはこの累積的結果かもしれない。

底面はケズリやナデが多いが、全底部資料の3分の1の個体に網代圧痕、木葉痕が観察された。図示できた資料は、網代圧痕17例、木葉痕2例である。



第20図　B区土器集中出土遺物(8)

土器集中区土器観察表　(第23図)

番号	器　種	法　　量	石材	残存率	備　　考
1	磨石	長11.3×幅6.2×厚2.5cm　重量255.2g	安山岩	ほぼ完形	
2	磨石	長14.6×幅6.6×厚4.1cm　重量689.0g	安山岩	50	
3	石皿	長14.6×幅17.6×厚4.85cm　重量2650.8g	閃緑岩	100	

C区土器集中地点（第21～23図）

W－46・47、X－47・48、Y－47・48グリッドから縄文晩期中葉の遺物が確認された。先述のB区土器集中地点からは約60～70mの距離にある。後述する古代の遺構である第85～87号溝跡が遺物包含層まで達しており、一部の空白はあるものの、分布はおおむね北に濃密で、南へ行くにつれ希薄となるようである。C区最北地点であるW－46グリッドは遺物が特に集中し、分布は更に北と西へ延びるものと予想される。また、図示した分布の南限はY－47グリッドであるが、AB～AC－48グリッドに所在する第92号溝跡の覆土中から数点の粗製土器破片が、AC－48グリッドの第94号溝跡からは二十数点の粗製土器片が確認されるなど、その分布はさらに南へ広がる可能性もある。

土器集中地点付近の地形は、南北では南に向かって緩やかに傾斜し、東西は平坦もしくは東に向かって若干傾斜する地形である。遺物の出土レベルもこの傾斜に従っており、高い地点で標高20.6m、低い地点で標高20.4mのレベル差を見せる。遺物を包含している層は、酸化鉄を多量に含む黄灰色粘土層で15～20cm程度の厚みをもち、炭化物粒子・ブロックに富んでいるが、土器の集中するW－46グリッドでは、炭化物粒子・ブロックは特に多く含まれているようである。

第23図は接合・復元した土器のうち実測図を掲載でき、かつ出土位置が特定できた個体の出土状況図である。各個体はかなり破片化が進んでいるが非常に近い位置で接合しており、堆積後に大きな移動があったことは推測しがたいであろう。

出土遺物（第24～34図）

出土遺物の内容は、縄文時代晩期中葉の精製土器、同時期のものと思われる粗製土器、石器、剥片であり、多量の大小円礫を伴って出土した。遺物出土量はテンパコ換算で20箱であり、そのほとんどすべてが土器である。精製土器と粗製土器の出土比率の差は著しく、精製土器は出土土器全体の5％程度に過ぎない。

石器は少量確認されており、内容としては磨製石斧1点、スクレイパー1点、磨石5点、石皿1点である。この他に、図示はできなかったが、X－47グリッド内で少量の剥片がまとまって出土した。石材はチャート質であり、出土点数は15点、出土量は30gに満たない。

以下で出土遺物の説明に入るが、ここでは出土土器を第1～9群に分けて説明する。B区同様、文様を有する精製土器は可能な限り掲載している。また、粗製土器に関しては口縁部と底部を中心に選別を行ったが、有段口縁粗製深鉢の口縁部選定に関しては、各段数の出土比率を反映させている。

第1群（第24図1、第25図2～10）

二条の並行する沈線によって弧線文、斜沈線、横位区画文等を施すものである。

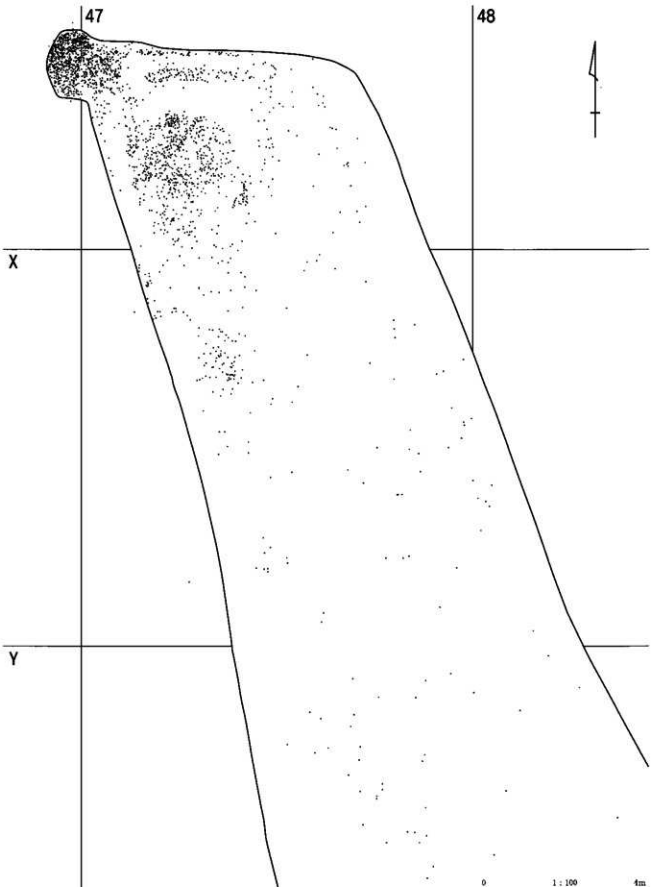
第24図1は5単位の緩い波状口縁深鉢であるが、口縁部から胴部上半にかけての1/5程度の小破片である。口端部は外面に隆帯を貼り付け、鉤状に肥厚させる。押圧が加わり二山となった波頂部からは、二条の沈線間に列点を施した縦区画を配し、縦区画間は口縁に沿った弧線文と、これと背合わせになる弧線文を配す。胴部最大径付近には、二条沈線内に列点を施した横帯文を巡らせ、直下には逆U字の弧線文を巡らせる。色調は黄橙色を呈し、器壁は薄く、焼き締まり良く非常に硬質な土器である。口径32.0cm、現存高17.2cm。

第25図2・3は横線が描出される平口縁深鉢で同一個体である。

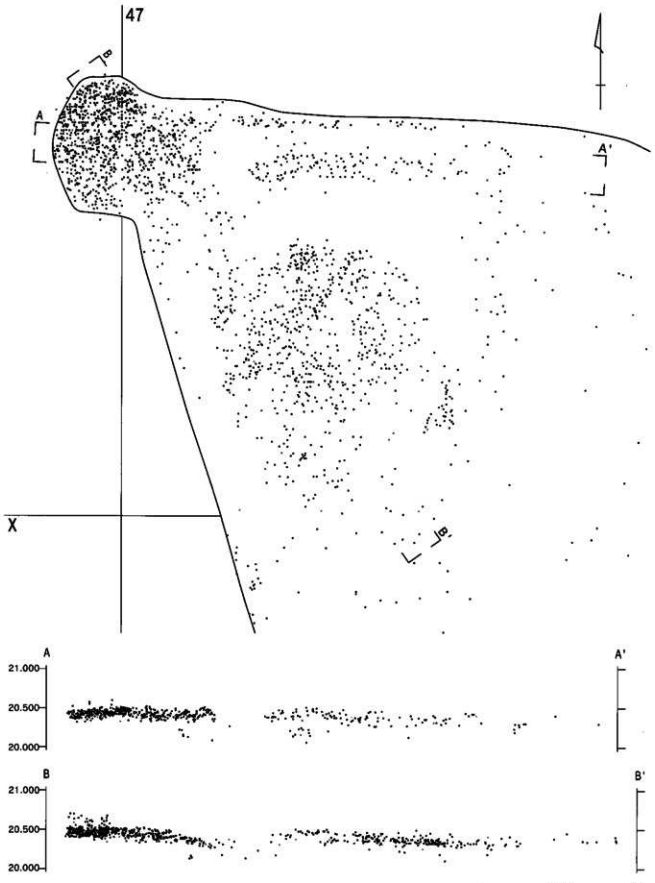
第25図4・5は斜沈線が施される土器で、4はくびれ部に横位区画が施される。5は口縁部付近がやや厚みをもち緩やかに内彎する。

第25図6は三叉状入組文を描出した土器であろう。

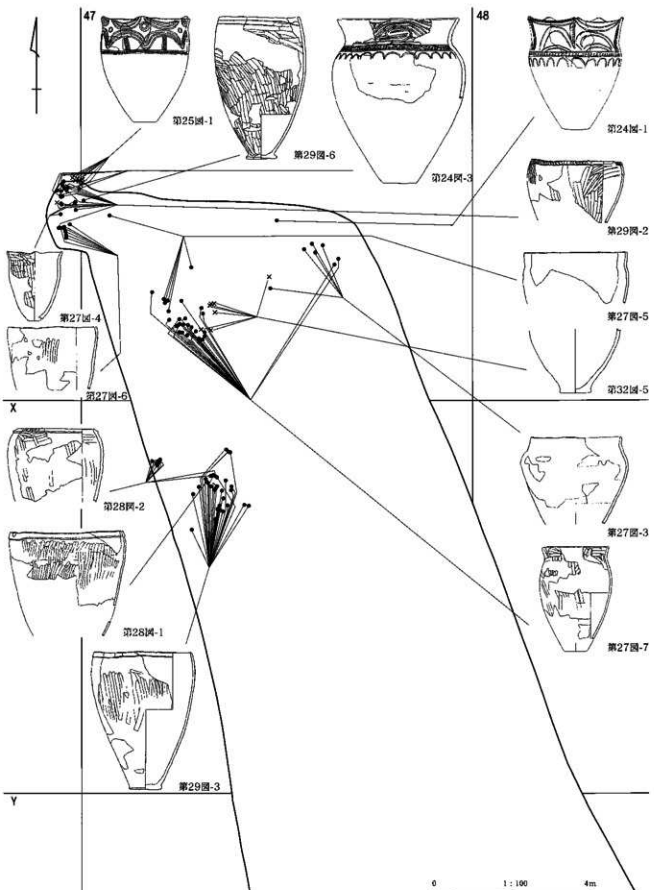
第25図8は、波状口縁深鉢の波頂部破片で、おそらく波頂部から波底部両側に、口縁に沿った沈線が施される土器と思われる。



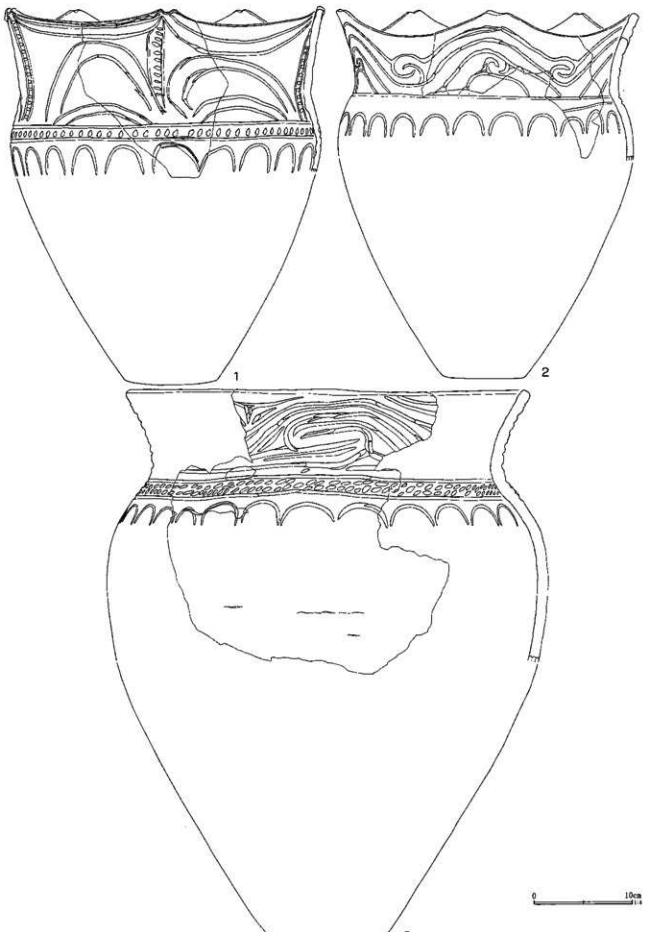
第21図　C区土器集中　遺物平面分布図



第22図　C区土器集中　遺物平面・立面分布図



第23図　C区土器集中　遺物出土状況図



第24図　C区土器集中出土遺物(1)

第25図10は形態上、紐線文系土器の流れを汲む土器である。くびれ部付近に沈線を巡らせ、口縁端部には棒状工具による押圧が加わる。

第2群（第25図1）

菱形区画文の構成をとるもので、平口縁に3単位の小突起を付す上器である。口縁部から胴部上半まで残存しており、口縁部に付した突起から突起までの、文様の一単位分が復元されている。

小突起下には三本沈線による菱形区画文を描出する。上部区画線は弧線で、下部区画線は波状に一筆書きで描出する。小突起下の菱形区画文内には窪みを有した円形貼付文を、小突起間の菱形区画文内には沈線による円文を配す。

胴部最大径付近には、二条沈線間に列点を施した区画線を横走させる。菱形区画文の下部を構成する、三本沈線による一筆書き波状文の波頂部からは、胴部上半の横帯区画同様、二条沈線間に列点を施した文様を垂下させる。口径30.0cm、現存高13.0cm。

第3群（第25図11・12）

区画内に三叉文を描出する上器である。

第25図11・12は三叉文の抉り込みとこれに沿って沈線が施された土器で、11は口縁部破片、12は波状口縁深鉢の口頸部破片である。11は平口縁として報告しているが、残存する口縁端部がわずかであり、緩い波状を呈す可能性もある。くびれ部には横帯区画であろう横位沈線が見られる。

第4群（第24図2、第25図7・9、13～17）

対向する三叉文から延びる並行沈線によって入組文を施す土器。13～16は外傾する口縁部に、17は胴部に文様が施される。

第24図2は口縁部から胴上半部にかけての5単位の波状口縁深鉢である。器面は著しく風化しているが、丁寧に磨かれた痕跡がところどころに残る。胎土には砂粒を多く含んでいる。口径30.8cm、現存高15.0cm。

第25図7・9・13・14・15は同一個体である。13～15には対向三叉文が見られる。胎土や器面調整、風化の具合が第24図2と非常に良く似ており、同一個体の可能性もある。

第25図16は深く幅広の沈線で対向三叉文が描かれる。施文手法としては第24図3と近似する。

第25図17は胴部の最大径付近に入組文が施される。

第5群（第24図3、第25図18～27、第26図1～8）

多条の沈線により文様を描出する土器である。

第24図3は口縁部から胴部最大径付近まで残存する平口縁深鉢で、口縁部文様帯には沈線による三叉状入組文が施される。頸部の二条沈線による横帯区画内には米粒状の列点を複列に施し、胴部上半には弧線文を巡らせる。胴部は中央まで残存するが、磨かれた様子はなく輪積痕を明瞭に残す。口径41.4cm、現存高29.0cm。

第25図18～27は沈線同士の接触があり、沈線のつなぎもスムースでない一群で、第26図1～8とはやや異質である。

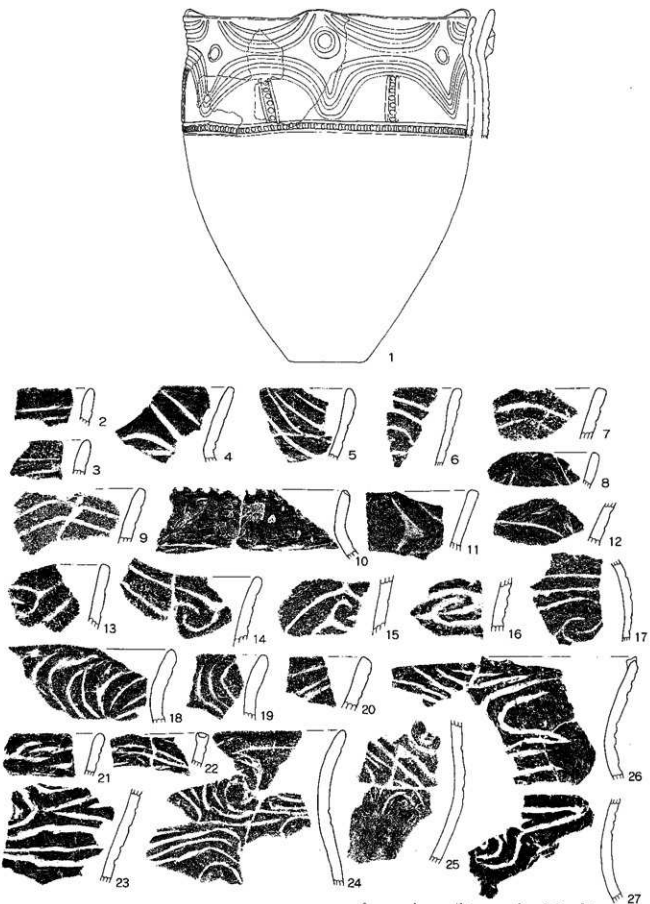
第25図18・19は口縁部が外反する平口縁深鉢で、胎土には砂粒を多く含む。同一個体である。

第25図20は平口縁深鉢で斜沈線が施される。

第25図21は三叉状入組文の施される平口縁深鉢である。

第25図22は緩やかな波状口縁深鉢であり、波頂部には小突起を貼り付け、棒状工具により刺突が加えられる。

第25図23・26・27は同一個体で、胴部上半に最大径をもち、頸部がくびれて口縁部が外反する平口縁深鉢である。23は並行する2本の沈線により菱形区画文を描出する土器であり、口縁部にはB突起が崩れたような小突起が付される。菱形区画文自体はかなりくずれてシャープさを失い、曲線的に折り返すところも見られる。突起下は区画文の接点がくる。27は一筆書きの沈線により字状文が描出されている土器である。26のような突起下の菱形区画文の接点に垂下するもので、本来、B区出土第15図2・3のような部位に施される文様であろう。胎土に砂粒



第25図　C区土器集中出土遺物(2)

を多く含み、器面には縦方向のケズリ痕が残る。

第25図24・25は口縁が外反し胴部上半に最大径をもつ平口縁深鉢であり、胎土は砂粒に富んでいる。24は渦巻文を描出。渦巻文からは口縁に沿った沈線が派生する。渦巻文左側にはく字状に折り返す沈線が見られる。渦巻文を介して菱形区画を横に展開していく、第24図3のような文様の可能性もある。頸部くびれ部には2～3本沈線による横沈線が見られるが、この沈線は渦巻文下において下方へ垂れながら収斂し、上下を完全には区画せず下方へ開くようである。胴部最大径付近には上下に重ねた弧線文を巡らせる。第26図18・19とは施文手法や胎土・色調が酷似しており同一個体の可能性もある。

第6群（第26図9～22）

胴部の破片を一括する。上記分類の第1・2・4・5群土器に相当する。横位区画文内に複列の列点文が施されるもの（第26図9～11、15～17）が多く、これらは第5群土器の胴部破片と思われる。

第26図9は横位区画文内に列点が複列に充填される。列点はヘラ状工具で浅く刺突しており、区画文や弧線文に用いられた棒状工具とは別工具である。

第26図11・15は横位区画文内の列点が縦方向に描出された同一個体資料で、胎土に砂粒を多く含む。11は口頸部文様帯に三叉状人組文が描かれる。

第26図16・17は同一個体で、横位区画文下の弧線文は一筆書きによって連結されたもので、2～3段に巡る。区画文と一筆書き弧線文の隙間には三叉状の抉り込みを描出する。沈線は太く浅く、施文手法は第24図3と似る。

第26図18・19は棒状工具により描出された沈線間に同一工具の先端で小刺突を施す。同一個体であろう。

第26図20は棒状の文様であろうか。

第26図21は大洞系浅鉢形土器の口縁部である。口縁端部は肥厚し、口縁部には浅く幅広の沈線が巡る。この資料よりさらに小破片であるため図示できなかったが、大洞系浅鉢は、この他に当資料と同一個体の口縁部破片1点が出土している。本遺跡においては唯一の例である。

第7群（第26図23～32、第27図）

素口縁の上器、もしくは口縁部の突起や貼付文のみ装飾を行う上器である。口縁部の形態上、外傾・外反、直立、内彎に分類される。

第26図23～25、27・28・31・32、第27図1・2・4・7は口縁部が外傾・外反して立ち上がる上器である。

第26図23は波状口縁深鉢の波頂部破片で、口縁端部の作りなどから、後述する第27図2と同一個体の可能性がある。

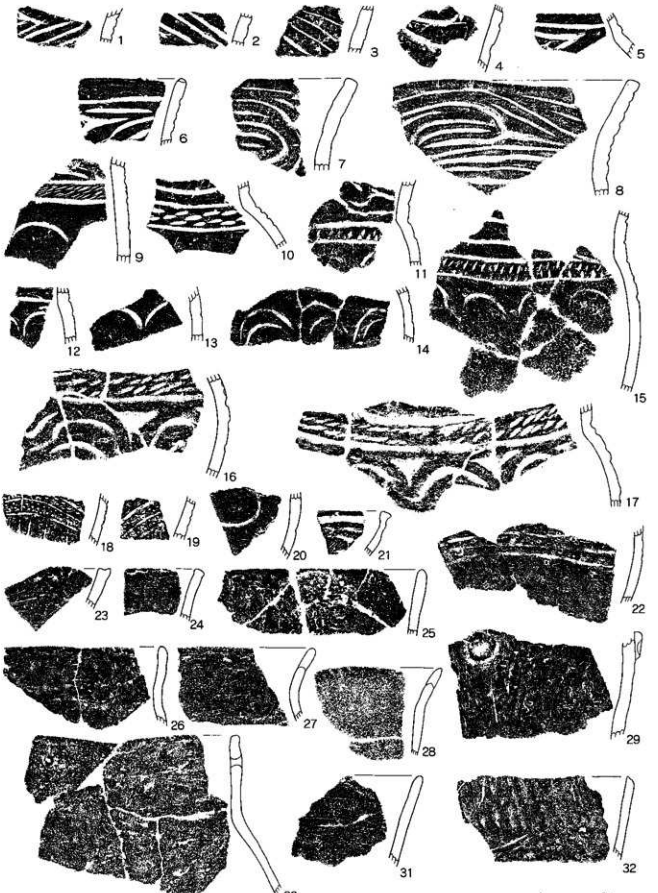
第26図29は胴部最大径付近に円形貼付文を施す上器で、外面は縦方向のケズリである。

第26図30、第27図3・5は口縁部が直立する土器である。第27図3は胴部下半まで残存しており、おおよその器形が窺える。胴部上半に最大径をもち、頸部に至るまでに径を減じ、頸部で屈曲し口縁部へ直立する。第26図30もこれと同様の器形と思われ、第27図5は最大径の張りが緩いものであろう。第27図3は口径30.6㎝、現存高29.2㎝。第27図5は口径35.0㎝、現存高17.4㎝。

第27図1は対の山形突起が4単位につく小型の壺形土器で胴部下半から底部までを欠損する。底部から外傾して立ち上がった胴部上半部でくの字に屈曲、頸部で外反し口縁部へ至る。頸部から胴部最大径へ至る器面の内傾部分に、棒状貼付文と円形貼付文が交互に4単位に配される。外面は丁寧にナデられ、造りは比較的丁寧である。内面は胴部最大径以下にススが付着している。口径13.1㎝、現存高11.2㎝。

第27図2は口縁部から胴部最大径までの5単位の波状口縁深鉢である。口縁部は肥厚し口端部は押圧が加えられる。

第27図4は口縁部が外反するやや小ぶりの甕形土器で全体の30～40%が残存する。口縁部は、両脇に押圧を加えることによって作り出した山形突起を配する。口縁部から頸部は横方向、それ以下は縦



第26図　C区土器集中出土遺物(3)

方向のケズリ。内面には口縁部付近と胴部下半に炭化物粒子が付着する。口径18.6cm、現存高23.2cm。

第27図７は胴部中央に最大径をもち、頸部がくの字に屈曲する甕形土器で、全体の40%が残存する。外面調整は口縁部が横方向、それ以下が縦方向のケズリである。胴部下半には粘土紐輪積痕を残す。口径22.6cm、現存高31.8cm。

第27図６は胴部から口縁部付近まで外傾気味に立ち上がり、口縁部に至りやや内彎する土器で、外面は縦方向のナデ。口径30.2cm、現存高21.5cm。

第８群（第28～30図、第31図１～13）

口縁部に隆帯を巡らせた有段口縁粗製深鉢である。隆帯は１～３段のものが確認される。隆帯は１段のものがもっとも多く、２段、３段がこれに次ぐ。隆帯の接合部で破損している場合も多く、段数把握は正確なものではないが、１段：２段：３段の出土比率は概算で５：４：１程度となる。器形の多くは口縁部が内彎して立ち上がる砲弾型で、最大径は口縁部隆帯直下から胴部中央付近に持つものまで様々であったが、口縁部隆帯の直下から胴部上半に最大径をもつ土器がもっとも多い。器壁は、４～10mmのものまで確認されたが、７、８mm程度のものがもっとも一般的である。外面調整は木口状工具によるケズリが圧倒的に多く、まれに縦方向のナデが施されるものも見られる。内面調整は、口縁部付近は横方向、以下は縦方向にナデられるものが多い。

本地点においては、隆帯段数や器形、器壁の厚さや内外面調整等、属性間の相関は見られなかった。

第28図１・２、第29図１～４、第30図１～17は口縁部隆帯が１段の有段口縁粗製深鉢である。

第28図１は口縁部上方から見た器形が正円にならず楕円を呈す土器で、本遺跡では唯一の例である。胴部下半から底部は欠損しており器形は窺えないが、B区出土第18図29のような底面が楕円形を呈するものが接続するのであろうか。外面調整は、口縁部隆帯に指頭押圧を残し、体部は縦方向にナデている。口径の長軸38.5cm、短軸25.1cm、現存高34.5cm。

第28図２は口縁部隆帯に指頭押圧を残す。外面調整は、口縁部隆帯直下が横方向のケズリ、以下は縦方向のケズリである。26.0cm、現存高24.6cm

第29図１・２・４は口縁部隆帯に指頭押圧を残す。外面調整は斜方向ないしは縦方向のケズリである。１は口径23.0cm、現存高11.7cm。２は口径30.2cm、20.7cm。４は口径22.0cm、9.2cm。

第29図３は残存率が比較的高く、器形を窺い知ることができた個体である。外面調整は縦方向のナデで、底面には網代圧痕を残す。口径33.0cm、底径11.0cm、器高46.2cmである。

第29図５・６、第30図22～35、第31図１～11・13は口縁部隆帯が２段の有段口縁粗製深鉢である。

第29図６は残存率が60%程度の土器で器形および外面調整の全容を窺い知ることができた。器形は胴部中央に最大径をもつ砲弾型である。外面調整は木口状工具によるケズリで、口縁部隆帯直下は横方向、胴部上半から中央までは斜方向、胴部下半は縦方向であった。内面は底面から若干上位のところに帯状の炭化物粒子が形成されるものが多い。口径27.0cm、底径10.4cm、器高48.0cm。

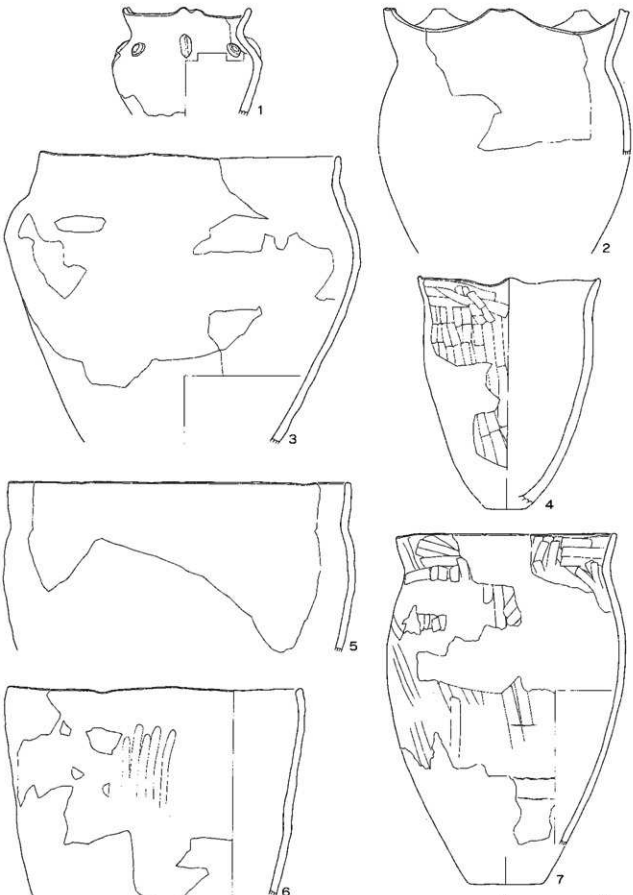
第９群（第31図14～26、第32・33図）

無文の胴部と底部を一括した。第32図１～３は胴部破片である。B区同様、胴部は出土遺物中もっとも多く検出された部位であるが、内外面調整以外の特徴に乏しく、接合・復元できた資料はたいへん少ない。ここでも多くの資料の掲載を省いた。外面調整は縦方向ないしは斜方向のケズリが観察されるものが多い。第８群土器の胴部に相当しよう。

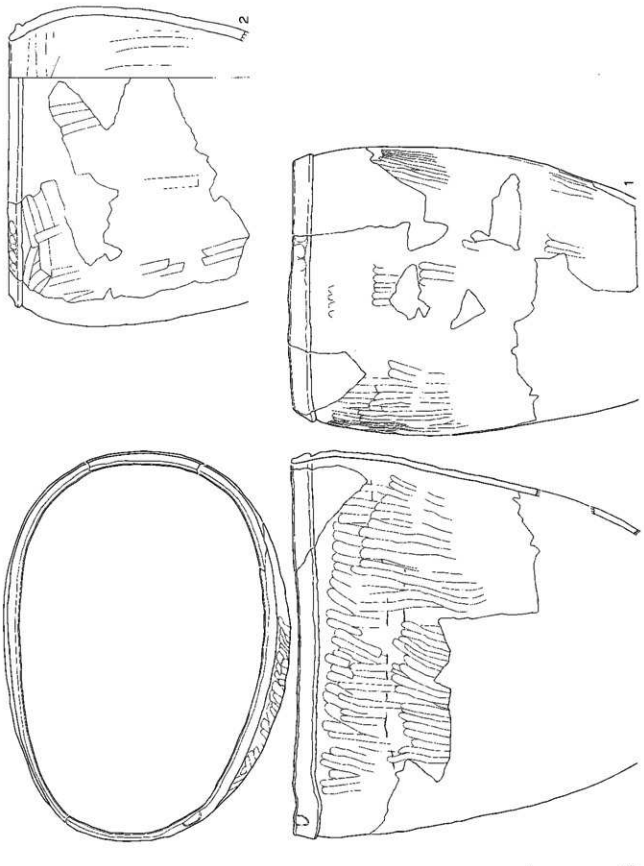
第31図14～26、第32図４～10、第33図１～15は底部破片である。ここで図示した底部は35点であるが、C区全体では50余点を確認している。

外面調整は縦もしくは斜方向のケズリで、底面付近の張り出し部には粘土紐貼り付け時の指頭押圧が残ることがある。

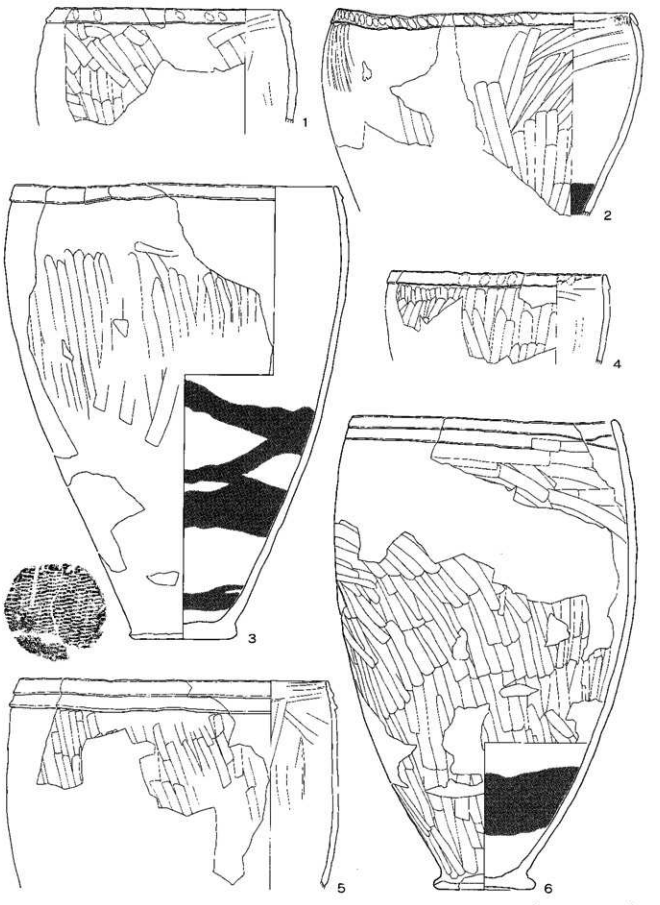
内面には帯状に炭化物粒子が付着している個体が



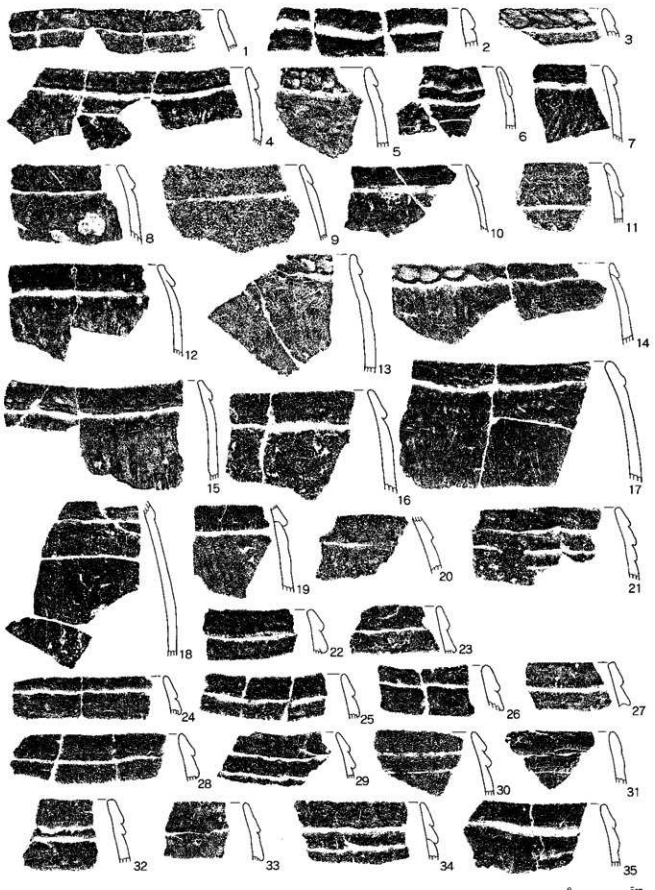
第27図　C区土器集中出土遺物(4)



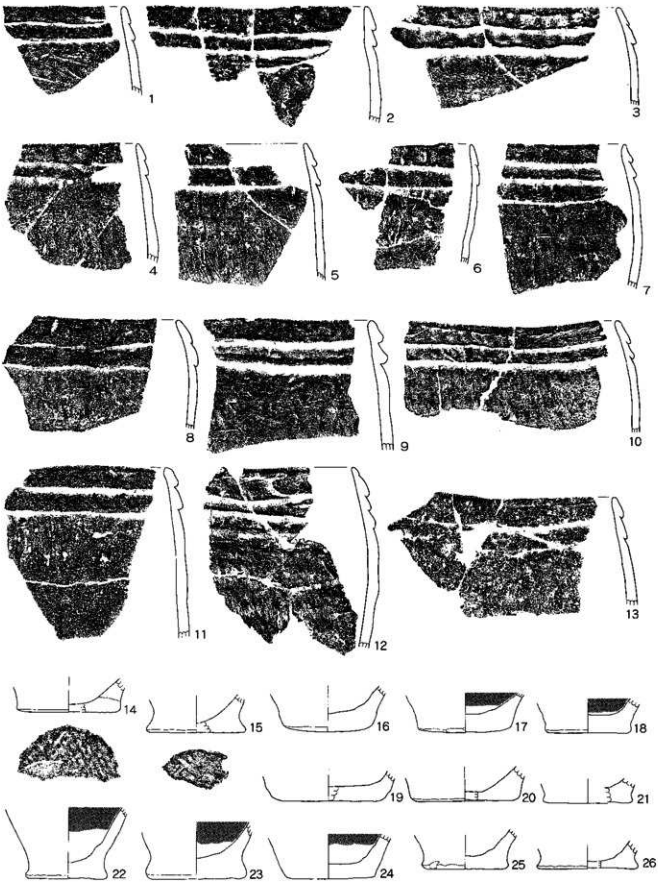
第28図　C区土器集中出土遺物(5)



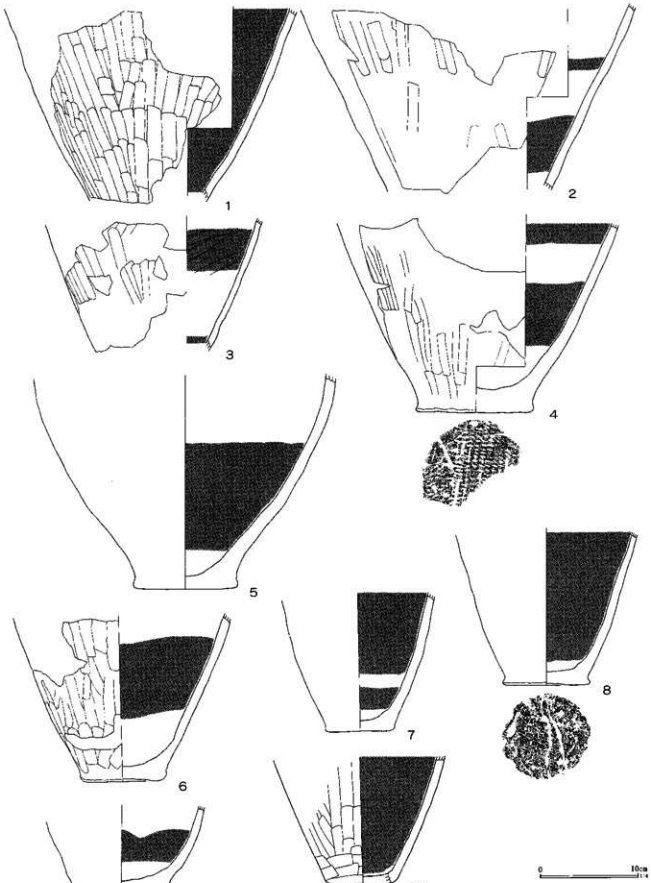
第29図　C区土器集中出土遺物(6)



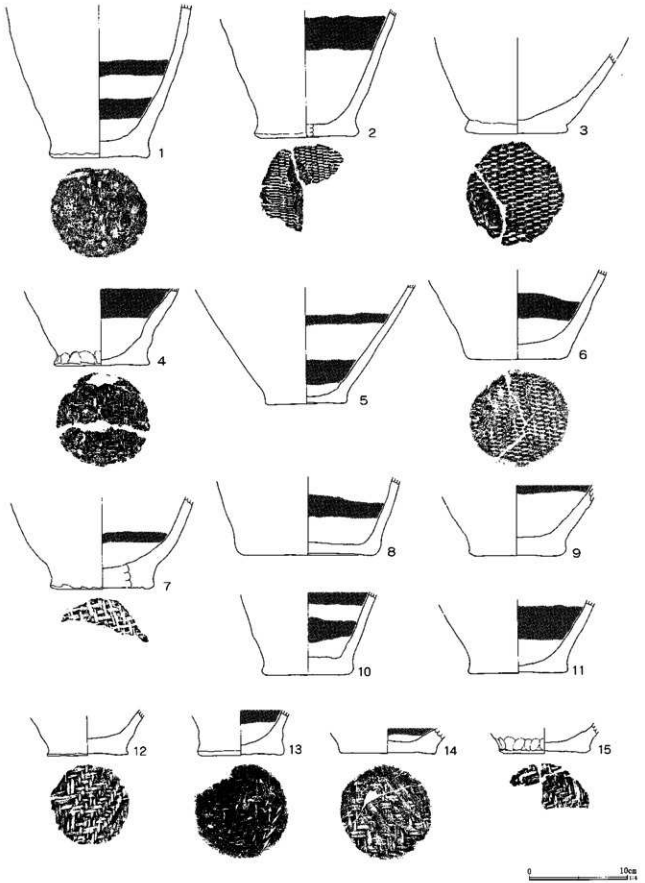
第30図　C区土器集中出土遺物(7)



第31図　C区土器集中出土遺物(8)



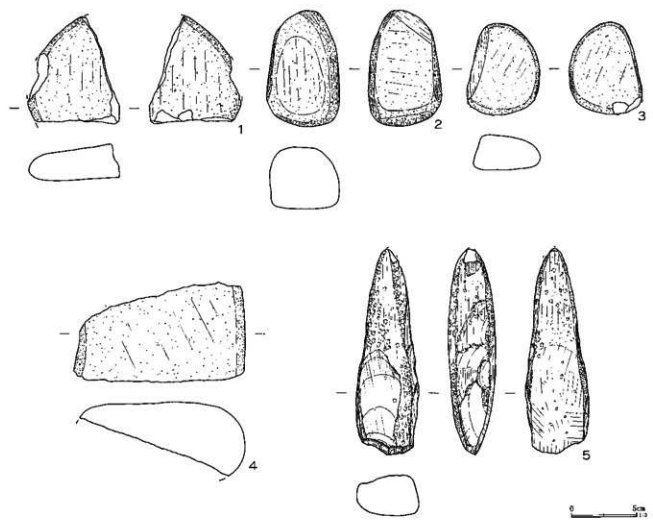
第32図　C区土器集中出土遺物(9)



第33図　C区土器集中出土遺物(10)

多く、幅狭のものでは1㎝程度、幅広のものでは10㎝を越えるものまで確認できた。B区出土土器同様、炭化物粒子は底にではなく底から3～5㎝程上位に付着することが多い。また、これよりさらに上位に1㎝もしくはそれ以上の間隔をあけて帯状に炭化物粒子が巡る場合も少なくない。煮沸方法を推測するうえで参考になるだろう。

底面には網代圧痕や木葉痕が観察されるものがある。図示できた資料は、網代圧痕13例、木葉痕1例で、全底部破片の4分の1程度の出現比率である。



第34図　C区土器集中出土遺物(11)

土器集中区石器出土観察表　(第34図)

番号	器　種	法　量	石材	残存率	備　考
1	磨石	長8.2×幅7.0×厚3.3cm　重量224.0g	閃緑岩	25	
2	凹石	長8.8×幅5.55×厚4.8cm　重量327.8g	砂岩	完形	
3	磨石	長7.0×幅5.55×厚2.7cm　重量145.6g	砂岩	ほぼ完形	
4	磨石	長7.7×幅13.1×厚6.6cm　重量603.4g	砂岩	破片	
5	剥製石斧	長15.6×幅4.8×厚3.6cm　重量376.6g	緑色凝灰岩	完形	

(2) 弥生時代

(a) 住居跡

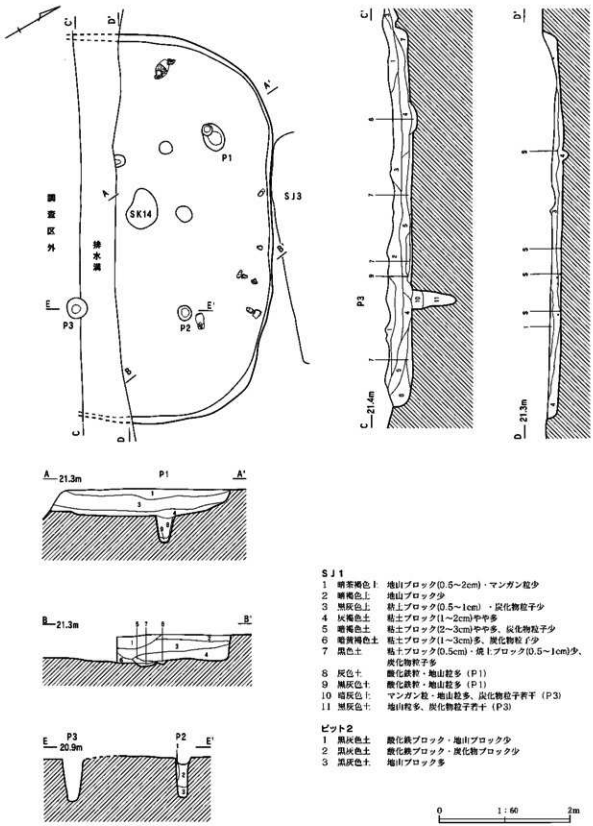
二面で検出された住居跡は17軒で、このうち弥生時代に属するものはA区・B区おのおの2軒ずつの計4軒、ほかの13軒は古墳時代に属するものであった。

ここでは弥生時代に属する住居跡をみていくことにしたい。なおC区からは、二面・一面とも住居跡は検出されていない。

第1号住居跡 (第35・36図)

G・H−29グリッドに位置する。住居跡の南半分が調査区外に続く。5軒のうちで、最も西に位置する住居跡である。住居の規模は、東西5.92m、南北2.40mまで調査し得たのみである。深さ41cmで、壁面の立ち上がりは比較的しっかりしている。長軸方向はN-60°-Wを指す。検出し得た範囲内では、炉や周壁溝はみられなかった。P1～3は柱穴と推定される。4本目の柱穴は3本の柱穴の位置関係からみて、排水溝によって切られていると考えられる。柱穴の平面径と深さは、P1が44×30×38cm、P2が21×20×60cm、P3が31×30×65cmである。平面規模に比して柱穴は深いといえよう。ピット間の距離は、P1−P2間が2.65m、P2−P3間が1.65mを測る。床面は比較的均質で、掘方は検出されなかった。第36図1・2は床面直上からの出土である。

1は細頸長頸壺である。口縁部を欠損する。頸部は直線的に窄り、胴部は卵形を呈す。器面の剥落が著しい。頸部は篦描平行線文下に列点文を施文する。さらにその下には篦描平行線文で区画し、原体LR単節縄文を充填した幅広の帯縄文を配置している。また、帯縄文内には篦描波状文を2条施文している。胴部文様は列点文下に篦描による工字状文を3単位施文している。区画文内は原体LR単節縄文を充填している。2は広口壺である。口縁部は緩やかに外反し頸部の窄まりも弱く胴部の張り出しも弱い。筒形に類似した器形を呈す。口縁部は原体LR単節縄文を横位に施文し、帯状施文としている。頸部から胴部にかけては篦描の細い懸垂文を4条施文している。この懸垂文には円形の貼付文が3箇所に取り付いている。また各懸垂文間を篦描平行線文で横位に区画して二段構成としている。各区画内は篦描の波状文を施文している。文様帯の施文順位は篦描波状文施文後に懸垂文を施文し、最後に平行線文を引いて区画している。胴部下端は篦描平行線によって区画している。尚、口縁部から胴部にかけて地文に原体LR単節縄文を施文している。3は平縁の鉢形土器である。器形全体が椀状を呈している。口端部は平坦に面取りが施されている。口縁部は原体LR単節縄文を横位に施文して帯状とし、その下を篦描平行線文で区画して無文帯を設けている。体部は地文縄文にクランク状の文様を施文したものであるが、碇形文の変形した文様とも考えられる。文様外は磨り消している。底部は大部分を欠失しており推測の域を出ないが十字文が施文されていてと考えられる。4は壷頸部から胴部にかけてである。頸部は篦描連続三角文を施文し、区画内を刺突充填している。頸部と胴部の境界は篦描平行線文で区画している。胴部は篦描重四角文を施文し、区画内を篦描波状文と刺突で充填している。5は壷胴上半部である。篦描連続三角文を施文し、区画内を刺突充填している。6は壷胴部である。文様は刺突充填文下に篦描平行線文を施文している。7は壷胴部である。文様は連繋文連結部に縦位の列点文を挿入している。8は壷胴部である。文様は篦描重四角文を施文し、区画内を篦描波状文と斜線文で充填している。尚、地文に原体不明の縄文を粗雑に施文している。9は壷胴部である。文様は単位不明の櫛歯状工具による直線文を施文している。10は壷胴部である。文様は幅広の工具による平行線文下に原体不明の縄文を施文している。



SJ1

1 明茶褐色土　地山ブロック(0.5～2cm)・マンガン粒少
2 暗褐色土　地山ブロック少
3 黒灰色土　粘土ブロック(0.5～1cm)・炭化物粒子少
4 灰褐色土　粘土ブロック(1～2cm)やや多
5 暗褐色土　粘土ブロック(2～3cm)やや多、炭化物粒子少
6 暗黄褐色土　粘土ブロック(1～3cm)多、炭化物粒 f少
7 黒色土　粘土ブロック(0.5cm)・焼土ブロック(0.5～1cm)少、炭化物粒子多
8 灰色土　酸化鉄粋・地山粒多（P1）
9 黒灰色土　酸化鉄粋・地山粒多（P1）
10 暗灰色土　マンガン粒・地山粒多、炭化物粒子若干（P3）
11 黒灰色土　地山粒多、炭化物粒子若干（P3）

ピット2

1 黒灰色土　酸化鉄ブロック・地山ブロック少
2 黒灰色土　酸化鉄ブロック・炭化物ブロック少
3 黒灰色土　地山ブロック多

0　1：60　2m

第35図　第1号住居跡

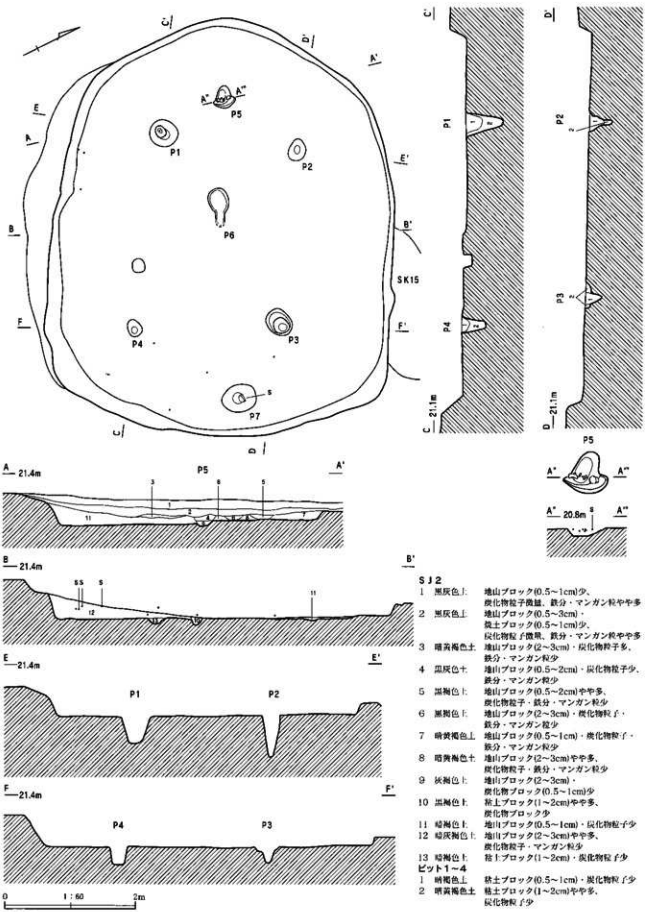
第36図　第１号住居跡出土遺物

第２号住居跡（第37・38図）

G・H－29・30グリッドに位置する。北壁の一部分を第15号土壙に切られてはいるものの弥生時代の住居跡４軒の中で、唯一全体像を検出し得たものである。遺構確認時には、黒褐色土の地山の中に黒灰色の部分が存在する、という状況であり、遺構の有無・種類は当初判断できなかった。そこでトレンチを各方向に６本入れた結果、住居跡または自然地形による窪地と推定した。順次掘り下げを行い、明褐色または灰褐色の遺構確認面が現れた時点で、長軸方向がやや膨らむ隅丸長方形を呈する住居跡であると判明した。

古墳時代の第３号溝跡の推定範囲を東に延ばせば、第２号住居跡の北半部が切られていると推定される。

住居跡の壁面をみると、東壁と西壁の立ち上がりは20～30cmであり大差はない。これに対して南壁と北壁の立ち上がりは、最大で40cmの違いがある。これは、本住居跡の北側部分が第３号溝跡に切られ



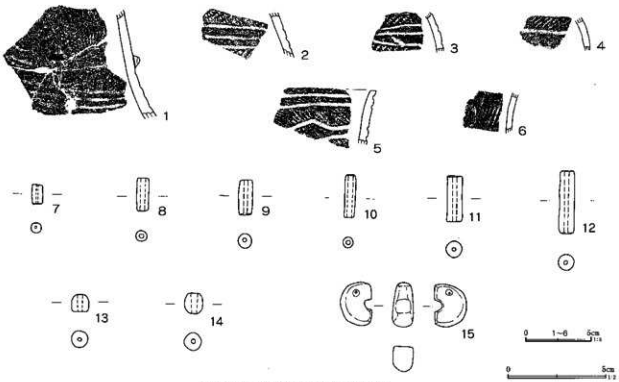
SJ2

1 黒灰色土　地山ブロック(0.5～1cm)少、炭化物粒子微量、鉄分・マンガン粒やや多
2 黒灰色土　地山ブロック(0.5～3cm)・焼土ブロック(0.5～1cm)少、炭化物粒子微量、鉄分・マンガン粒やや多
3 暗黄褐色土　地山ブロック(2～3cm)・炭化物粒子多、鉄分・マンガン粒少
4 黒灰色十　地山ブロック(0.5～2cm)・炭化物粒子少、鉄分・マンガン粒少
5 黒褐色土　地山ブロック(0.5～2cm)やや多、炭化物粒子・鉄分・マンガン粒少
6 黒褐色土　地山ブロック(2～3cm)・炭化物粒子・鉄分・マンガン粒少
7 暗黄褐色土　地山ブロック(0.5～1cm)・炭化物粒子・鉄分・マンガン粒少
8 暗黄褐色土　地山ブロック(2～3cm)やや多、炭化物粒子・鉄分・マンガン粒少
9 灰褐色土　地山ブロック(2～3cm)・炭化物ブロック(0.5～1cm)少
10 黒褐色土　粘土ブロック(1～2cm)やや多、炭化物ブロック少
11 暗褐色土　地山ブロック(0.5～1cm)・炭化物粒子少
12 暗灰褐色土　地山ブロック(2～3cm)やや多、炭化物粒子・マンガン粒少
13 暗褐色土　粘土ブロック(1～2cm)・炭化物粒子少

ピット1～4

1 暗褐色土　粘土ブロック(0.5～1cm)・炭化物粒子少
2 暗黄褐色土　粘土ブロック(1～2cm)やや多、炭化物粒子少

第37図　第2号住居跡



第38図　第２号住居跡出土遺物

た結果であると考えられる。ただ、第３号溝跡による第１号住居跡への撹乱は、床面までには達しなかったのは幸いであったといえる。Ｐ１～４は柱穴と思われる。各ピットの径(長軸×短軸)と深さは、Ｐ１が43×40×56cm、Ｐ2が34×25×35cm、Ｐ3が43×35×25cm、Ｐ4が25×21×36cmを測る。各柱穴間の距離は芯々で、Ｐ１－Ｐ２間が2.13m、Ｐ２－Ｐ３間が2.70m、Ｐ３－Ｐ４間が2.25m、Ｐ４－Ｐ１間が3.05m、主軸方向はN-64°-Wである。Ｐ5は、径35×33cmのハート型に近い形状を呈し、深さは18cmである。このピットの直上(=床面と同レベル)からは、7点の玉類がまとまった状態で出土した。この他に、調査期間中の豪雨や、これに伴う住居跡内での土砂流により、原位置を失った玉類が２点(同図13・14)出土している。この２点についても、その位置関係からみて、他の7点と共にまとまった状態にあったのではないかと推測される。Ｐ６は58×31×8cm、位置的にも形状的にも炉に近いが、焼土や炭化物などは検出されていない。Ｐ７は55×40×18cmを測る。炉や周壁溝は検出されなかった。出土した土器は少数で、図化し得たのは５点である。

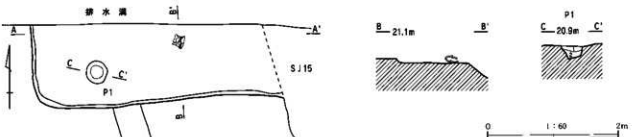
１は壺頸部である。文様は篦描波状文下に貼り瘤を設けている。貼り瘤は上方から下方に向けて穿孔されている。貼り瘤の下には篦描平行線文が多段に施文されている。２は壺胴部である。地文に原体ＬＲ単節縄文施文後、篦描平行線文を施文している。3は壺胴部である。地文に原体ＬＲ単節縄文施文後、篦描平行線文を施文している。４は壺胴部である。文様は篦描平行線文間に原体無節Ｌ縄文を施文している。５は甕口縁部である。直線的に僅かに外反する器形である。口端部は平坦に面取りされている。文様は地文に原体ＲＬ単節または多条系の縄文を横位に施文している。口縁部は篦描平行線文を施文し、頸部に篦描波状文または、弧線文を施文している。６は甕胴部である。櫛歯状工具による斜位の条痕文を施文している。

７～15は石製の玉類である。７は管玉で、長さ1.1cm、径0.5×0.6cm、孔径0.2cm、重さ0.5ｇを測る。深緑色で完形、碧玉製。８は管玉で長さ1.7cm、径

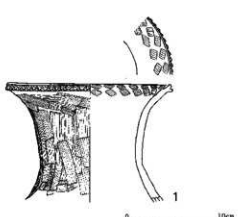
0.6×0.6cm、孔径0.2cm、重さ1.0gを測る。黒灰色。完形であったが調査時に一部分が削れてしまい残存率95パーセント。滑石製。9は原位地が失われている管玉で、長さ1.8cm、径0.7×0.7cm、孔径0.2cm、重さ1.4gを測る。深緑色で完形、碧玉製。10は管玉で長さ2.2cm、径0.6×0.5cm、孔径0.2cm、重さ1.1gを測る。黒灰色。一部キズがあるが完形。滑石製。11は管玉で長さ2.3cm、径0.8×0.8cm、孔径0.2cm、重さ2.6gを測る。深緑色で完形、碧玉製。12は管玉で長さ3.2cm、径0.8×0.8cm、孔径0.2cm、重さ3.7gを測る。深緑色で完形、碧玉製。13は原位地が失われている丸玉で、長さ0.9cm、径0.8×0.8cm、孔径0.2cm、重さ1.0gを測る。深緑色で完形、碧玉製。14は丸玉で、長さ1.1cm、径0.8×0.9cm、孔径0.3cm、重さ1.3gを測る。深緑色で完形、碧玉製。15は勾玉である。長さ2.2cm、幅1.6cm、厚さ1.1cm、孔径0.1cm、重さ8.4gを測る。薄緑色で完形、翡翠製。

第14号住居跡（第39・40図）

L－38・39グリッドに位置する。住居跡の北側は調査区外に続き、東側は第15号住居跡に切られる。南壁面・西壁面の一部と、コーナー部分が1箇所検出されたのみであった。調査し得た範囲内での規模は、東西4.00m、南北1.27m、深さ15cmである。1箇所のみのコーナー部分からは、隅丸の方形または長方形が想定される。住居跡の規模・形態などが不明であるため主軸方向を決めがたいが、現況



第39図　第14号住居跡



第40図　第14号住居跡出土遺物

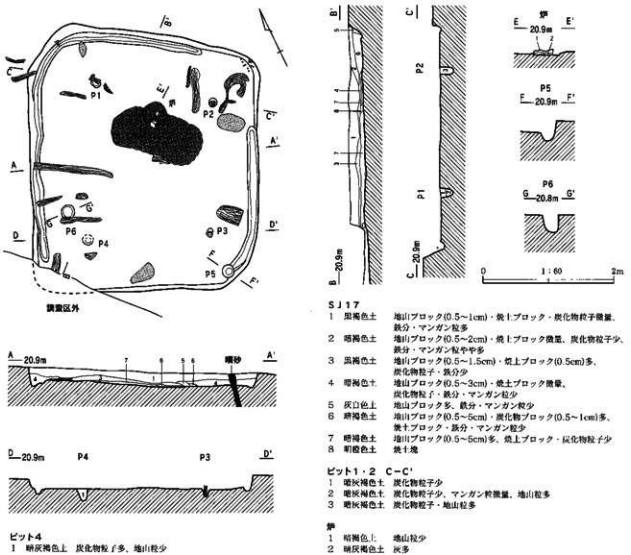
からみてN-50°-WまたはN-40°-Eと推定される。南西コーナー付近にピットが1本確認された。径は33×31cmの円形を呈し、深さ20cmを測る。床面には、径約5mmの炭化物ブロックや炭化物粒子が、住居跡全体に散在していた。調査し得た範囲内では、炉・周壁溝・掘方などは検出されなかった。床面は比較的堅固なものであった。出土遺物は、1点のみだった。

1は壺口縁部である。口縁部はラッパ状にやや強く外反し頸部の窄まりは弱い。口唇部外面に貼り付

け突帯を廻らし、ハケ状工具による刻み目を施している。口縁部直下は横位のハケ調整で頸部は縦位のハケ調整を施している。口縁部内面には4本一単位の櫛描斜行短線文が2段施文されている。焼成は普通で胎土も在地の胎土が用いられている。

第17号住居跡（第41・42図）

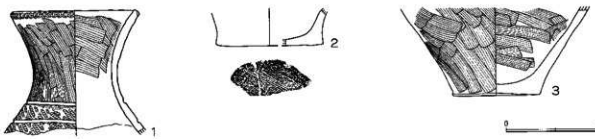
Q－43・44グリッドに位置する焼失家屋である。一部の炭化した部材が、住居の建築構造を反映した状態で遺存していた。南西のコーナー部分が僅かに調査区外に続くが、全体の規模・形態を知ることは可能である。住居の規模は南北4.00m、東西3.50m、深さ25cm、主軸方向はN-27°-Eである。西側の一辺が長い隅丸の台形を呈する。貼床をもたず、また南壁面には壁周溝はみられなかった。ピットが6本検出されているが、P1～4は柱穴と思われる。柱穴には柱の抜き取り痕はみられなかった。P1は径15×11cm、深さ21cm、P2は径13×13cm、深さ21cm、P3は径10×9cm、深さ12cm、P4は径14×15cm、深さ17cm、P5は径18×17cm、深さ30cm、P6は径20×20cm、深さ23cmを測る。P2には径10cm、長さ5cm程の炭化した材木片が直立した状態で遺存していたが、柱材と推定される。またP3には径5cm、長さ15cm程の炭化した柱材が遺存していた。各柱穴を線で結ぶと、西側の長い台形となるが、これは住居の平面形に近い形状である



第41図　第17号住居跡

といえよう。

1は細頸の壺口縁部である。口縁部は朝顔形に緩やかに外反し頸部は細く窄まる。胴部の張り出しはやや強く張り出す器形を呈すると考えられる。口唇端部に工具による刻み目を施している。口縁部から頸部にかけては斜位のハケ調整が施されている。頸部に篦描平行線文で区画し、原体ＲＬ単節縄文を充填した帯縄文が2段施文されている。口縁部内面は横位のハケ調整が施されている。焼成は良好で胎土に雲母が含まれている。2は底部である。底面に布目圧痕が付いている。3は壺底部である。外面は、斜位のハケ調整が施され、内面は横位のハケ調整が認められる。



第42図　第17号住居跡出土遺物

(b) 掘立柱建物跡

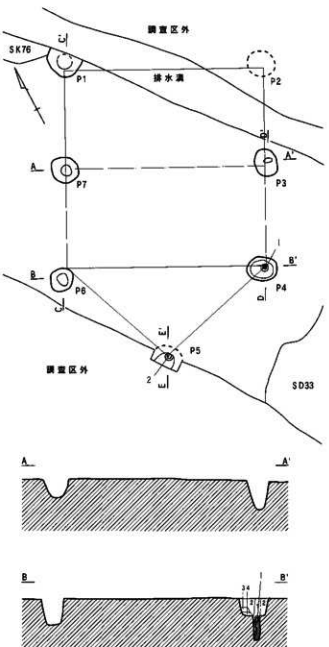
第5号掘立柱建物跡（第43・44図）

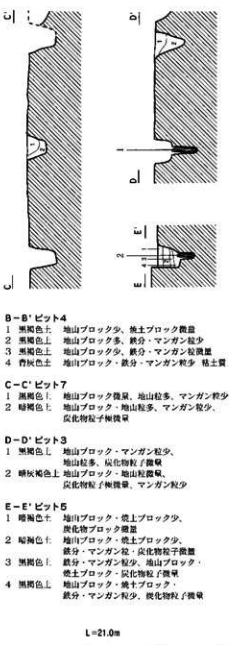
Ｎ−41·Ｏ−41·42グリッドに位置する。重複する遺構は、特にみられない。1×2軒の側柱建物で、規模は桁行長3.20m、梁行長3.00m、床面積9.9㎡である。主軸方向はN-28°-Eを指す。柱間は桁行がＰ2−Ｐ3間で(1.55)m、Ｐ3−Ｐ4間で1.65m、Ｐ6−Ｐ7間で1.70m、Ｐ7−Ｐ1間で1.70m、梁行はＰ1−Ｐ2間で(3.10)m、Ｐ3−Ｐ7間で3.10m、Ｐ4−Ｐ6間で3.15mを測る。Ｐ5は棟持柱であろうか、Ｐ4−6の梁行から1.20mの距離に位置する。

柱筋の通りは、良好とはいえないが、柱穴の深度は比較的揃っているといえる。柱穴の掘方は、基本的に平面形は隅丸長方形または楕円形、断面形はＵ字形穴を呈するものと、底面が平坦に近いものとがある。掘方の規模と平面形は、Ｐ1が52×(52)×40㎝、楕円形、Ｐ3が35×42×45㎝、隅丸長方形、Ｐ4が37×45×68㎝、楕円形、Ｐ5が(45)×(52)×66㎝、楕円形、Ｐ6が35×40×42㎝、不整円形、Ｐ7が38×42×30㎝、楕円形を測る。Ｐ2は、調査区外に位置している。Ｐ4・Ｐ5の底面からは、柱材の基部が検出された。16は、現存長38.4㎝、最大幅12.0㎝、厚さ11.2㎝の芯材であり、17は、現存長20.8㎝、最大幅12.8㎝、厚さ11.2㎝の芯材である。材自体の遺存度は良好である。上端部が折れていると思われることから、材として再利用するため、折り取っている可能性が考えられる。Ｐ5より15点の土器片が検出された。

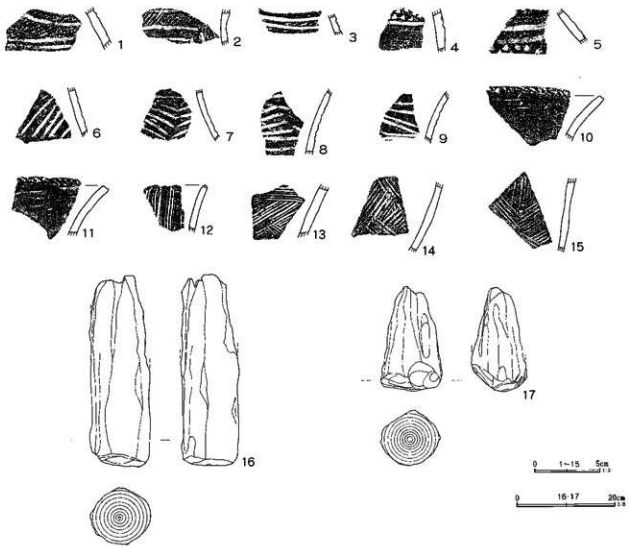
1は壺胴部である。地文に原体ＬＲ単節縄文を施文し、篦描の弧線状の文様と半行線文を施文している。2は細頸の壺頸部である。地文に原体ＬＲ単節縄文を施文し、篦描平行線文下に重四角文を施文している。3は壺頸部である。地文に原体不明の縄文を施文後、篦描平行線文を施文している。4は壺胴部である。刺突文下に篦描平行線文を施文している。5は壺胴部である。篦描平行線文下に刺突文を施文している。6・7・8・9は同一個体の壺頸部である。篦描平行線文下に篦描の縦羽状文を施文している。焼成は良好で胎土に雲母を含む。10・11は甕口縁部である。緩やかに外反する器形を呈す。口端部は、原体無節Ｒ縄文を施文している。口縁部は無文で内外面にハケ状工具による縦横のナデが認められる。

時期的に降る可能性がある。12は甕口縁部である。緩やかに外反する器形を呈す。口端部は工具による押捺を施す。文様は櫛歯状工具による縦位条痕文を施文している。13は甕胴部である。櫛歯状工具による直線文下に横羽状条痕文を施文している。14は甕胴部である。櫛歯状工具による斜格子状の条痕文を施文している。15は甕胴部である。櫛歯状工具による縦位条痕文下に縦羽状条痕文を施文している。





第43図　第5号掘立柱建物跡



第44図　第5号掘立柱建物跡出土遺物

第5号掘立柱建物跡出土遺物観察表　（第44図）

番号	器種	法量	備考
16	柱材	残存長39.0×幅12.2×厚11.6cm	SB5－P4
17	柱材	残存長21.2×幅12.6×厚11.0cm	SB5－P5

（c）土壙

古宮遺跡二面で検出された土壙はA区62基、B区30基、C区11基の計103基である。このうち弥生時代に属する土壙は、A区11基、B区6基の計17基である。それ以外については古墳時代以降の土壙である。

第13号土壙（第45・50図）

G－28グリッドに位置する。東側は壁面の立ち上がりが失われていた。規模は、長軸0.78m、短軸(0.75)m、深さ20cm。平面形はほぼ円形、断面形は椀形を呈す。

1は壺胴部である。胴部は強く張り出す器形を呈す。地文は原体不明のL縄文を粗雑に施文し、頸部との境界に篦描平行線文2条、胴部にも篦描平行線

文を施文している。

第18号土壙（第45・48・50図）

G－30グリッドに位置する。北側は調査区外に続く。規模は、長軸1.35m、短軸(0.85)mまで調査できたのみである。深さ7㎝。全体の形状が不明なため、長軸方向と平面形は特定できない。断面形は底面が平坦な皿状を呈す。

18－1は細頸長頸壺頸部から胴部にかけてである。頸部は緩やかに窄まり胴部の張り出しは弱い。頸部は篦描平行線文下に篦描波状文を施文している。胴部は篦描波状文3条下に篦描平行線文を施文している。器面の剥落が著しく地文の存在は不明である。18－2は壺胴部である。篦描平行線文と篦描波状文間を刺突充填している。

第22号土壙（第45・48図1・50図）

H－30グリッドに位置する。第5号溝跡と畝状遺構に切られている。覆土の色調が、地山のものときわめて類似しているため、当初は薄くシミ状に浮かび上がってみえるのみという状況であった。そこで、試掘溝を3本入れ、壁面の立ち上がる地点を結んで土壙のプランを確定した。調査できた範囲内での規模は、長軸2.35m、短軸1.90m、深さ38㎝である。全体の規模が不明であるが、長軸方向はN-15°-W、平面形はやや歪んだ楕円形、断面形は椀形であったと思われる。

1は壺頸部から胴部にかけてである。頸部のくびれは弱く胴部は球胴形に張り出す。地文は原体LR単節縄文を横位に施文している。頸部は篦描平行線文2条で区画して無文帯を設けている。無文帯下に平行線文を充填する楕円形区画文を1段施文している。区画内は磨り消している。頸部と胴部の境界を篦描平行線文3条で区画している。胴部は楕円形区画文を単位ずらし、現状で2段施文している。2・3・4は甕口縁部で同一個体と考えられる。口縁部は内湾気味に開く。文様は篦描連続竜山形文を施文し、頸部との境界に篦描平行線文2条を施文している。4には交点に刺突が付いている。5は壺胴上半部である。篦描平行線文3条による区画の上部は連続三角文を施文している。三角区画内は刺突充填をしている。平行線文区画下部は篦描の連続山形文を施文している。6は壺胴部である。篦描の連続三角文を施文しているものと考えられる。7は壺胴部である。篦描菱形連繋文を施文している。区画内は刺突充填している。連結部は縦位の列点文を挿入している。8は壺頸部である。篦描連続三角文を施文している。区画内は刺突充填している。9は壺胴部である。幅広の棒状工具による連続三角文を施文している。10・11・12は1の壺と同一個体と考えられる。地文原体LR単節縄文施文後、平行線文充填の篦描楕円形区画文と篦描平行線文を施文している。但し、楕円形区画文間のみ地文原体の施文方向を縦位に変換して施文している。13は甕口縁部である。口縁部は緩やかに外反する器形を呈す。口唇部は工具による押捺を施している。地文は原体LR単節縄文を横位に施文している。14・15は底部である。

第23号土壙（第45・50図）

H－30グリッドに位置する。規模は、長軸1.55m、短軸1.35m、深さ50㎝である。強いて計測するならば長軸方向はN-53°-W、平面形は円形に近い楕円形、断面形は壁面の立ち上がりが急な逆台形を呈する。

1は壺胴部上半である。頸部区画篦描平行線文下に列点文を施文している。列点文の下には地文原体LR単節縄文を施文し、篦描連続山形文とX字状区画文を施文している。X字状区画文内は条痕文で充填している。2は壺胴部である。地文原体は不明である。篦描平行線文間に列点文を施文している。3は壺胴部である。無文帯下に篦描平行線文で区画して原体LR単節縄文を充填している。4は甕胴部である。地文原体LR単節縄文施文後に櫛歯状工具による斜格子状条痕文を施文している。5は甕である。

口縁部は緩やかに外反し頸部はくびれずに胴部に移行する器形を呈す。口端部に指頭による押捺を表裏両面から交互に行っている。文様は櫛歯状工具による。横羽状条痕文を2段施文している。胎土に雲母を含む。6は甕胴部である。地文に原体LR単節縄文を粗雑に施文後、3本1単位櫛歯状工具による波状文を3段施文している。各波状文間を繋ぐ形で縦位条痕文を施文している。胎土に雲母を含む。7は底部である。底面に木葉痕が付いている。8は底部である。底面に布目圧痕が付いている。

第25号土壙（第45・51・56図）

H－30グリッドに位置する。南側は調査区外に続く。規模は、長軸1.50m、短軸(1.50)m、深さ37cmであり、長軸方向はN-25°-Eと考えられる。土壙であるとするならば、平面形は長楕円形を呈すると思われる。断面形は底面が平坦で、壁面の立ち上がりが緩やかな逆台形に近い。

1は壺口縁部である。緩やかに外反する器形を呈す口縁部無文帯に列点文を施文している。口縁部区画箆描平行線文下に、地文原体カナムグラ系擬縄文を施文し、箆描弧線文を施文している。胎土に雲母を含む。2は甕口縁部である。内湾気味の器形を呈す。口縁部直下から4本1単位櫛描斜行短線文を3段施文している。3は壺胴部である。地文原体RL単節縄文施文後、箆描楕円形区画文を施文していると考えられる。4は壺胴上半部である。箆描平行線文下に連続三角文を施文している。連続文内は刺突充填している。5は壺胴部である。無文地に貼り付け突帯2条を廻らしている。突帯上には刻み目が施される。また、突帯下に箆描沈線の痕跡が認められる。6は甕口縁部である。緩やかに外反する器形を呈す。口端部は工具による押捺を施している。文様は地文原体LR単節縄文を粗雑に施文後、櫛歯状工具による斜格子状の条痕文を施文している。7は底部である。

第27号土壙（第45・51・56図）

H－30・31、I－31グリッドに位置する。遺構の形状・規模・時期などから、コーナー部分が切れるタイプの方形周溝墓の一辺であり、他の三辺は調査区外に位置しているという可能性も想定した。しかし、せめて二辺がみえれば方形周溝墓の可能性が考えられるが、一辺のみでは根拠として弱いといわざるを得ない。そこで、ここでは土壙として扱った。

土壙内にピットが2本検出されたが土壙に帰属するものであるか、また帰属しない場合の新旧関係については不明である。規模は、長軸6.25m、短軸1.65m、深さ35cm、長軸方向はN-36°-Wである。平面形は隅丸の長方形で溝状である。断面形は壁面の立ち上がりが急な逆台形を呈する。

1は壺頸部である。地文原体ＬＲ縄文施文後、箆描山形文及び平行線文を施文している。2は壺胴部である。箆描平行線文間を刺突充填している。3は壺胴部である。文様は箆描波状文を施文している。4は壺胴部である。地文原体カナムグラ系擬縄文施文後に箆描波状文を施文している。5は壺胴部である。文様は箆描平行線文下に箆描懸垂文を施文している。また、区画内を斜行線文で充填している。6は壺胴部である。文様は4本1単位櫛描簾状文2段施文下に櫛描扇形文を施文している。胎土に雲母を含む。7は甕胴部である。櫛歯状工具による斜位の条痕文を施文している。

第29号土壙（第46・48・51図）

H－31グリッドに位置する。規模は、長軸1.10m、短軸0.75m、深さ7cm、長軸方向はN-64°-Wを指す。平面形はやや角張った長楕円形、断面形は壁面の立ち上がりが比較的緩やかな逆台形を呈する。

1は壺口縁部である。朝顔形に緩やかに外反する器形を呈す。口縁部は原体ＬＲ単節縄文後、箆描平行線文2条で無文帯を設けている。無文帯の下に箆描の懸垂舌状文を施文し、上部区画内を原体ＬＲ単節縄文を縦位に施文し充填している。頸部は箆描平

行線文を施文している。2は壺口縁部である。口唇部は肥厚している。口縁部に原体無節Ｌ縄文を施文し、以下を無文帯としている。3は壺胴部である。地文原体無節Ｌ縄文施文後、箆描平行線文と連続三角文を施文している。連結部には貼り瘤状の突起が認められる。4は壺胴部である。地文原体ＬＲ単節縄文施文後箆描平行線文を施文している。また、連繋文上に円形の貼付文を付けている。5は壺頸部である。地文原体不明縄文施文後、箆描平行線文を施文している。6は壺胴部である。地文原体ＬＲ縄文施文後箆描平行線文及び連続山形文を施文している。7は壺胴部である。箆描による幾何学形の区画文を施文し、原体ＬＲ単節縄文を充填している。8は壺胴部である。地文原体不明Ｒ縄文施文後、箆描重四角文を施文している。9は壺胴部である。4本1単位櫛描斜行短線文下に扇形文を施文している。10は壺胴部である。5本1単位櫛描直線文と斜行短線文を交互に2段施文している。11・12は同一個体の甕である。口縁部は屈曲気味に外反する器形を呈す。口端部は工具による押捺を施す。文様は櫛歯状工具による横羽状条痕文を施文する。13は甕胴部である。ＳＫ23−6と同一個体と考えられる。4本1単位櫛歯状工具による波状文間に縦位条痕文を挿入している。部分的に縄文を施文している。14は甕胴部である。櫛歯状工具による斜位の条痕文を施文している。15は甕胴部である。櫛歯状工具による横羽状条痕文を施文している。16・17は底部である。

第30号土壙（第46・48・51図）

Ｈ−31グリッドに位置する。規模は、開口面で長軸3.20m、短軸3.06m、底面で長軸2.23m、短軸1.20m、深さ85cmである。平面形はほぼ円形、断面形は椀状を呈する。底面は青灰色粘土層に達していた。

1は甕胴部である。頸部より上を欠損する。胴部は僅かに張り出し、底部に向かって直線的に窄まる器形を呈する。胴部中位までは櫛歯状工具による縦位条痕を施文している。胴部中位には煤の痕跡が明瞭に認められる。底部は焼成後の穿孔が付いている。また、布目圧痕が付いている。胎土に雲母が含まれている。2は壺頸部である。頸部と胴部の屈曲が強い。地文原体ＬＲ単節縄文施文後、重四角文、頸部区画平行線文、列点文の順で施文している。3は壺頸部である。地文原体不明縄文施文後、箆描の三角連繋文を施文している。連結部には円形の貼付文が付いている。4は壺胴部である。箆描連続三角文内を刺突充填している。5は壺頸部である。地文原体不明縄文施文後、箆描波状文を施文している。6は壺胴部である。地文原体反撚Ｌ｛11｝縄文施文後、箆描平行線文及び波状文を施文している。7は壺胴部である。地文原体LR単節縄文を粗雑に施文後、箆描平行線文間に波状文を挿入している。8は壺胴部である。箆描の横羽状文を施文している。9は壺頸部である。地文原体RL単節または多条系R縄文施文後、箆描平行線文を施文している。10・11・12は同一個体の壺頸部から胴部である。地文原体多条系L縄文施文後、6本1単位櫛描直線文及び上向き弧線文を施文している。胎土は在地の胎土を用いている。13は壺胴部である。5本1単位櫛描直線文下に扇形文を施文している。胎土は洗練され、焼成良好である。14は壺胴部である。13と同一個体の可能性がある。5本1単位櫛描直線文下に扇形文を施文している。またハケ調整が認められる。15・16は同一個体の甕胴部である。ＳＫ23−6と同一個体と考えられる。4本1単位櫛歯状工具による波状文間に縦位条痕文を挿入している。部分的に縄文を施文している。17は底部である。底面に木葉痕が付いている。

第38号土壙（第46・52図1〜13・56図14）

Ｈ−32グリッドに位置する。規模は、開口部で長軸3.20m、短軸3.06m、底面では長軸2.23m、短軸1.20m、深さ85cmである。土壙底面は青灰色粘土層に達していた。平面形はやや角張った楕円、

断面形は壁面の立ち上がりが比較的緩やかな逆台形に近い。

1は壺胴部である。SK25−5と同一個体の可能性がある。無文地に貼り付け突帯5条を廻らせ突帯上に工具による刻み目を施している。突帯の両側を篦状工具で押さえている。2は壺胴部である。地文原体LR単節縄文施文後、篦描平行線文と篦描波状文を施文している。3は壺頸部である。4本1単位櫛描直線文下に篦描平行線文で区画し、その下に櫛描連続刺突文を施文している。4は壺胴部で3と同一個体の可能性がある。4本1単位櫛描連続刺突文を施文している。5は壺頸部である。4本1単位櫛描直線文を2段施文している。6は壺頸部である。篦描平行線文を施文している。7は壺胴部である。篦描平行線文下に篦描斜行文を施文している。8は壺胴部である。篦描平行線文下に篦描の横羽状文を施文している。9は甕胴部である。櫛歯状工具による横羽状文を施文している。胎土に雲母を含む。10は甕胴部である。櫛歯状工具による横羽状条痕文を施文している。胎土に雲母を含む。11は壺頸部である。SK30−10と同一個体の可能性がある。5本1単位櫛描上向き弧線文と直線文を交互に施文している。原体LR単節縄文の一部施文が認められる。12は壺または小型の鉢口縁部である。直線的に外反する器形を呈す。文様は原体LR単節縄文を帯状に2段施文している。13は底部である。

第46号土壙（第46・52図）

I−33グリッドに位置する。第43・44号土壙と、3本のピットに切られている。規模は、長軸1.55m、短軸1.20m、深さ50cm、開口面で径2.00×1.90m、底面で経1.58×1.29m、深さ40cm、長軸方向はN-74°-Wである。底面は青灰色粘土層に達している。平面形は楕円形、断面形は底面が平坦で、立ち上がりが緩やかな逆台形と思われる。

1は壺胴部である。篦描平行線文下に刺突充填している。2は壺胴部である。地文原体LR単節縄文施文後、篦描重四角文を施文している。区画内は刺突充填している。3は壺頸部である。篦描平行線文下に篦描縦羽状文を施文している。4は壺頸部である。原体LR単節縄文施文後、懸垂文状の文様を施文し周囲を磨り消している。5は壺胴部である。細い棒状工具による平行線文を重畳させて施文している。6は甕胴部である。櫛歯状工具による横羽状文を施文している。7は甕口縁部である。緩やかに外反する器形を呈す。口端部は工具による押捺を施している。文様は櫛歯状工具による横羽状条痕文を施文している。

第63号土壙（第48・52・53図）

I−33・34グリッドに位置する。北は調査区外に続き、第5号住居跡に切られる。本遺構は、調査区境界線の壁面に接した状態であった。調査過程で、壁面にヒビ割れが生じ始め、崩落が危惧された。そこで、遺物出土状況の写真撮影(写真図版10)を行い、土壙内の遺物を回収した後、重機によりこの土壙周辺の埋め戻しを行うこととした。そのため、残念ながら第63号土壙については、遺構平面図・断面図等を残すことはできなかった。土壙底面付近では、青灰色粘土層に達していた。遺構調査中の所見では、平面形は不整楕円形、断面形は壁面が外側に広がるU字形に近い。

1は甕である。口縁部は緩やかに外反し胴部は張り出さずに底部にむかって直線的に窄まる器形を呈している。口端部は工具による押捺を施している。口縁部以下櫛歯状工具による横羽状文を1段施文している。胎土に雲母が含まれる。2は壺口縁部である。直線的に外反する器形を呈す。口縁部を篦描平行線文で区画し、区画内に列点文を施文している。3は壺口縁部である。ラッパ状に強く外反する器形を呈す。口縁部は肥厚気味である。口縁部に原体LR単節縄文を施文し、その下に列点文と篦描波状文を施文している。4は壺胴部である。地文原体LR単節縄文を粗雑に施文後、篦描平行線文及び波状文

を施文している。5は壷頸部から胴上半部にかけてである。頸部を篦描平行線文で区画し、その下に篦描波状文を重畳して施文している。6は壷胴部である。篦描連続山形文下に篦描平行線文を施文している。7は壷胴上半部である。地文原体ＬＲ単節縄文施文後、篦描連続三角文を施文している。8は壷胴部である。地文原体ＬＲ単節縄文施文後に篦描平行線文と連続三角文を施文している。9は壷頸部である。篦描懸垂文下に平行線文を施文している。10は壷胴部である。地文原体ＲＬ単節縄文施文後、篦描平行線文を施文している。11･12･13･14は壷胴部で同一個体である。地文に原体ＬＲ単節縄文を施文している。文様は篦描波状文及び平行線文、連続三角文を施文し、文様間を刺突充填している。15は壷胴部である。地文原体ＬＲ単節縄文を施文し、篦描の長方形区画文を施文しているものと考えられる。区画内は磨り消され、縄文部分は赤彩されている。16は壷胴上半部である。地文原体ＬＲ単節縄文施文後、篦描下向き弧線文を重畳させて施文している。弧線文の連結部に円形の貼付を行っている。17は甕胴部である。櫛歯状工具による横羽状条痕文を施文している。18･19は壷胴部で同一個体である。4本1単位櫛描斜行短線文下に直線文を施文している。胎土は在地のものが用いられている。焼成は良好である。20は甕口縁部である。緩やかに外反する器形を呈す。口端部は工具による刻み目が施される。文様は櫛歯状工具による縦位条痕文が施文されている。21は甕口縁部である。緩やかに外反する器形を呈す。口端部は工具による押捺を施している。文様は縦羽状条痕文を施文している。胎土に雲母を含む。22は甕口縁部である。緩やかに外反する器形を呈す。口端部は指頭による交互押捺を施している。文様は斜位の条痕文を施文している。胎土に雲母を含む。23は甕口縁部である。緩やかに外反する器形を呈す。口端部は工具による押捺を施している。文様は目の粗い櫛歯状工具による斜位の条痕文を施文している。胎土に雲母を含む。24は甕口縁部である。緩やかに外反する器形を呈す。口端部は工具による刻み目を施している。文様は櫛歯状工具による縦位条痕文を施文している。胎土に雲母を含む。25は甕口縁部である。緩やかに外反する器形を呈す。口端部は工具による押捺を施している。文様は櫛歯状工具による斜位条痕文を施文している。胎土に雲母を含む。26は甕口縁部である。緩やかに外反する器形を呈す。口端部は工具による刻み目を施している。文様は櫛歯状工具による斜位条痕文を施文している。胎土に雲母を含む。27は甕口縁部である。直線的に外反する器形を呈す。口端部は工具による刻み目を施している。文様は櫛歯状工具による斜位条痕文が認められる。胎土に雲母を含む。28は甕口縁部である。直線的に外反する器形を呈す。文様は櫛歯状工具による横羽状条痕文を施文している。胎土に雲母を含む。29は甕口縁部である。緩やかに外反する器形を呈す。口端部は工具による刻み目を施している。文様は櫛歯状工具による縦位条痕文を施文し、その下に直線文を施文している。胎土に雲母を含む。30から38は甕胴部である。文様は櫛歯状工具による斜位条痕文または、横羽状条痕文を施文している。胎土に雲母を含む。39から43は底部である。40の底部は底面が剥落している。

第73号土壙（第47・53図）

Ｎ－41グリッドに位置する。一面から二面に達している。第210号土壙に切られている。規模は、開口部で長軸2.50m、短軸1.05m、底面で長軸1.80m、短軸0.75m、深さ50cm、長軸方向Ｎ-45°-Ｗである。遺構検出面は、青灰色粘土層であった。平面形は隅丸長方形、断面形は壁面が外側に広がるＵ字形に近い。

1は壷頸部である。地文原体不明し縄文を施文後、篦描波状文を施文している。2は壷胴部である。無文地に篦描波状文及び平行線文を施文している。3は壷胴部である。篦描連続三角文を施文し、区画内を刺突充填している。4は壷頸部である。地文原体

無節Ｌ縄文施文後、篦描平行線文を重畳して施文している。５は壺胴部である。４本１単位櫛描直線文２段施文間に簾状文を挿入している。また直線文の下には３本１単位櫛描斜行短線文を施文している。焼成は良好である。また、ハケ調整が認められる。６は甕口縁部で無文地である。７は甕口縁部である。緩やかに外反する器形を呈す。口端部は工具による押捺を施している。文様は櫛歯状工具による縦位条痕文を施文している。胎土に雲母を含む。８は甕口縁部である。直線的に立ち上がる器形を呈す。口縁部文様帯を半截竹管状工具による平行線文で区画して、原体多条系Ｌ縄文で充填している。９は甕胴部である。櫛歯状工具による斜行短線状の条痕文を施文している。10は甕胴部である。櫛歯状工具による斜位条痕文を施文している。胎土に雲母を含む。11は底部である。

第77号土壙（第47・53図）

Ｏ－42グリッドに位置する。第35号溝跡と排水溝に切られている。規模は、長軸0.95ｍ、短軸(0.75) ｍまで確認できたのみである。深さ50㎝、現況からみた長軸方向はN-46°-Wである。平面形は楕円形、断面形は皿状を呈すると推定される。

１は無頸壺口縁部である。大きく内彎する器形を呈す。口端部から棒状の貼り瘤を付けている。文様は篦描上向き弧線文を重畳して施文している。２は壺胴部である。剥落が著しく文様が判明しないが、篦描の幾何学文を施文し、区画内を刺突充填をしているものと考えられる。３は壺頸部である。十字状の列点文による区画内に篦描重四角文を２段施文している。縦位列点文には貼り瘤が付いている。４・５は甕胴部で同一個体と考えられる。文様は櫛歯状工具による直線文下に横羽状条痕文を施文している。胎土に雲母及び片岩を含む。６は壺胴部である。地文原体不明Ｌ縄文施文後、篦描平行線文下に波状文を重畳して施文している。７は甕口縁部である。緩やかに外反する器形を呈す。口端部は工具による押捺を施している。文様は櫛歯状工具による斜位条痕文を施文している。胎土に雲母を含む。

第78号土壙（第47・48・54図）

Ｏ－42グリッドに位置する。北側は排水溝によって失われている。規模は、長軸(1.75)ｍ、短軸1.45ｍ、深さ43㎝、現況からみた長軸方向はN-46°-Wである。平面形は長楕円形を呈し、断面形は底面がやや窪む椀に近い。確認面は、青灰色粘土層であった。遺物は底面から浮いた状態で出土した。

１は細頸長頸壺頸部である。口縁部は、欠損している。頸部は下位に向かって緩やかに開く器形を呈す。口縁部に地文原体ＬＲ単節縄文の縦位施文が認められる。頸部上段は篦描平行線文4条で区画した幅広の無文帯を設けている。下段は重三角文を施文している。原体ＬＲ単節縄文を充填する三角文様帯と無文で構成する三角文様帯を交互に設けている。２は壺口縁部である。大きく外反する器形を呈す。口端部及び口縁部に原体無節Ｒ縄文を施文し、篦描平行線文で区画している。３は甕口縁部である。直線的に外反する器形を呈す。文様は原体不明Ｌ縄文施文後、篦描平行線文を施文している。４は壺胴上半部である。頸部境界を列点文で区画して櫛歯状工具による直線文を重畳して施文している。胎土に片岩を含む。５は壺胴部である。篦描平行線文を施文している。６は壺胴部である。篦描平行線文下に列点文を弧線状に充填している。７は壺胴部である。地文原体LR単節縄文施文後、篦描平行線文を施文している。８は壺胴部である。篦描弧線文を施文している。９は壺胴部である。篦描平行線文と波状文間に横長の刺突を充填している。10は壺胴上半部である。地文原体ＬＲ単節縄文施文後、篦描波状文を施文している。11は壺胴部である。地文原体ＬＲ単節縄文施文後篦描波状文及び平行線文を施文している。12は壺胴部である。地文原体ＬＲ単節縄文施文後、篦描波状文を施文している。13は壺胴部である。篦描重四角文を施文している。14は壺胴

部である。地文原体ＬＲ単節縄文施文後、篦描重四角文を施文している。区画内は篦描波状文で充填している。15は壺胴部である。地文に原体ＬＲ単節縄文を施文後、篦描Ｘ字状区画文を施文している。区画内は直線文と列点文で充填している。16は壺頸部である。篦描三角文または、山形文と平行線文の組み合わせを施文している。17・18は壺頸部で同一個体である。篦描平行線文下に原体ＬＲ単節縄文を施文している。その下には篦描連続三角文を施文している。また頸部境界に篦描半行線文で区画している。19は壺胴部である。篦描縦羽状文を施文し連結部に側面穿孔を持つ貼り瘤が付く。20は壺頸部である。篦描半行線文間に列点文を挿入している。21は壺胴部である。櫛描直線文下に篦描平行線文で区画している。その下には原体ＬＲ単節縄文を充填する上向き弧線文を施文している。また、平行線文と弧線文の間を刺突充填している。22は壺胴部である。原体ＬＲ単節縄文を充填する上向き弧線文を施文している。また平行線文と弧線文の間を刺突充填している。弧線文以下は丁寧に磨かれている。23は壺頸部である。４本１単位櫛描波状文を２段施文している。24から28までは甕口縁部である。緩やかに外反する器形を呈す。口端部は工具による押捺を施している。文様は櫛歯状工具による縦位及び横羽状条痕文を施文している。また、25の口縁部は直線文を施文して平行線文で区画している。胎土に雲母及び片岩を含む。29から34は甕胴部である。櫛歯状工具による斜位及び横羽状条痕文を施文している。35から37は底部である。36は布目圧痕、37は木葉痕が付く。

第86号土壙（第47・55・56図）

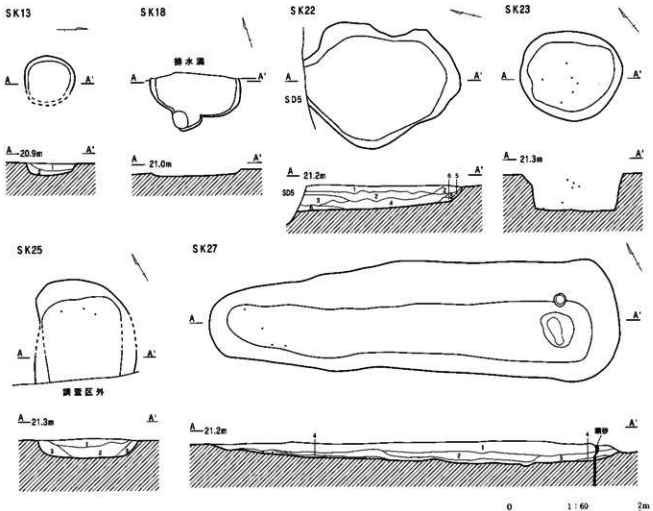
Ｐ－43グリッドに位置する。第87号土壙に切られている。規模は、開口部で長軸1.95m、短軸1.50m、底面で長軸1.32m、短軸0.95m、深さ40㎝、長軸方向N-80°-Wである。遺構検出面は、青灰色粘土層であった。平面形は隅丸長方形、断面形は壁面が外側に広がるＵ字形に近い。

１は壺口縁部である。直線的に外反し肥厚口縁である。口縁部は地文原体不明ＬＲ縄文を施文している。頸部は篦描平行線文を重複して施文している。２は壺胴部である。篦描平行線文下に地文原体不明縄文を施文し、文様間を刺突充填している。波状文間に原体不明の縄文施文が認められる。３は壺頸部である。篦描平行線文の上下を刺突充填している。４は壺胴部である。地文原体ＬＲ単節または多条系Ｌ縄文を施文後、篦描平行線文を重畳して施文している。５は壺胴部である。細い棒状工具による篦描平行線文下に上向き弧線文を２条施文し、弧線文間を原体ＬＲ単節縄文で充填している。６は壺頸部である。地文原体LR単節縄文施文後上段に重四角文を施文し、下段に篦描平行線文を重複して施文している。重四角文の連結部にはボタン状の貼付が付いている。７は壺頸部である。篦描平行線文で区画して下段に縦位短線文を施文している。８は甕胴下半部である。櫛歯状工具による斜位の条痕文が認められる。９は壺頸部である。地文原体無節Ｌ縄文施文後幅の広い篦状工具による平行線文を施文している。10から13は甕胴部である。櫛歯状工具による斜位及び横羽状条痕文を施文している。胎土に雲母乃至は片岩が含まれる。

第87号土壙（第47・49・55図）

Ｐ－43グリッドに位置する。第88号土壙との新旧関係は捉えられなかった。第86号土壙には切られている。規模は、開口部で長軸1.95m、短軸1.50m、底面で長軸1.32m、短軸0.95m、深さ40㎝、長軸方向はN-80°-Wである。遺構検出面は、青灰色粘土層であった。平面形は隅丸長方形、断面形は壁面が外側に広がるＵ字形に近い。

１は甕である。胴下半部から底部にかけて欠損する。口縁部は直線的に僅かに外反する。頸部から胴部にかけての肩が弱や張り出している。地文に原体カナムグラ系撚縄文を施文している。口縁部は篦描



SK13
1 暗褐色土　粘土ブロック(0.5～1cm)・炭化物粒子・マンガン粒少
2 暗黄褐色土　粘土ブロック(1～2cm)やや多、炭化物粒子・マンガン粒少

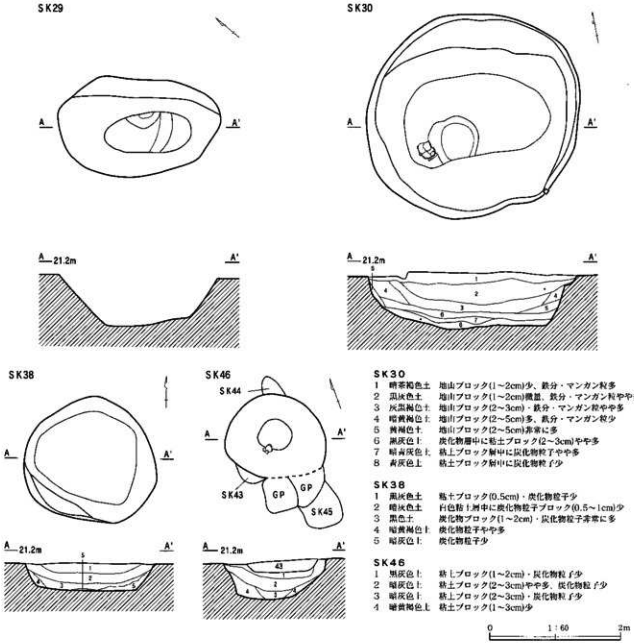
SK22
1 灰褐色土　地山ブロック(1～2cm)・炭化物粒子少、鉄分・マンガン粒多
2 灰黄色土　地山ブロック(1～2cm)・炭化物粒子やや多
3 黄褐色土　粘土ブロック層中にＦａ火山灰ブロック多
4 灰黄色土　炭化物ブロック(1～2cm)少、Ｆａ火山灰ブロック多
5 明灰色土　粘土ブロック(1～2cm)少、鉄分・マンガン粒やや多
6 灰黒色土　粘土ブロック(0.5～3cm)少

SK25
1 黒灰色土　炭化鉄粒少
2 暗灰色土　炭化鉄粒少、炭化物粒子若干
3 灰色土　炭化鉄ブロック少

SK27
1 暗灰色土　炭化鉄ブロック多
2 黒灰色土　炭化鉄粒少、炭化物粒子多
3 黒灰色土　炭化鉄粒少、炭化物粒子・地山粒多
4 灰色土　黒灰色ブロック多

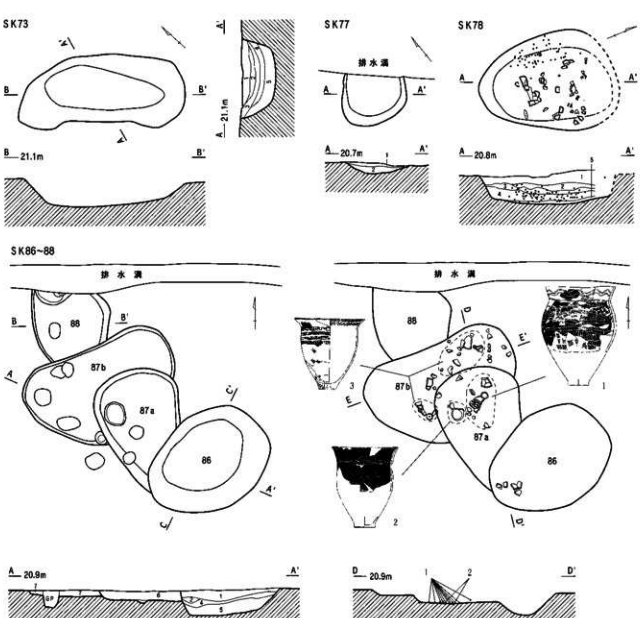
第45図　土壙(1)

波状文を２条施文している。頸部は箆描平行線文２条で区画している。但し、下位の沈線は弧線状を呈している。胴部は箆描の変形工字文２段３単位施文している。連結部には縦位のスリットを２箇所乃至１箇所挿入している。連結部の一部は連繋文風に閉塞する部分が認められる。尚、器面の剥落が著しい。２は甕である。胴部下半部以下を欠損する。口縁部は緩やかに外反し頸部から直線的に胴部に移行する器形を呈す。口端部は工具による押捺が認められる。口縁部に櫛歯状工具による斜位の条痕文を施文後、頸部に横位の条痕文を施文している。胴部は横羽状条痕文を１段施文している。胎土に多量の雲母が含まれる。３は甕である。口縁部が強く外反し胴部が僅かに張り出し底部に向かって直線的に窄まる器形を呈す。口縁部は縦位のハケ調整が認められる。頸部以下は５本１単位櫛描簾状文、櫛描直線文、櫛描簾状文の順で施文されている。胴部下半は斜位のハケ調整が施されている。口縁部内面には櫛描斜行短



第46図　土壙(2)

線文が矢羽状に2段施文されている。底部は焼成後の穿孔が付いている。また、上げ底である。胎土は在地の胎土が用いられている。4は壷胴部である。篦描連続三角文を施文し、区画内を刺突充填している。5は底部である。6・7・8は壷頸部で同一個体と考えられる。篦描平行線文間に原体不明L縄文を施文している。9は壷頸部である。地文原体不明L縄文施文後篦描平行線文を施文している。10は壷頸部である。篦描平行線文下に篦描連続山形文を施文している。11は壷または甕胴部である。篦描の平行線文または変形工字文を施文していると考えられる。12は壷胴上半部である。地文原体不明L縄文施文後、篦描の上向き弧線文を施文している。13・14は壷頸部または筒形土器で同一個体である。地文原体無節L縄文施文後、楕円形区画文を施文している。15は壷胴下半部である。胴部最大径部分に原体多条系L縄文を施文している。16・17は底部である。16は網代痕が付く。17は布目圧痕が付いている。



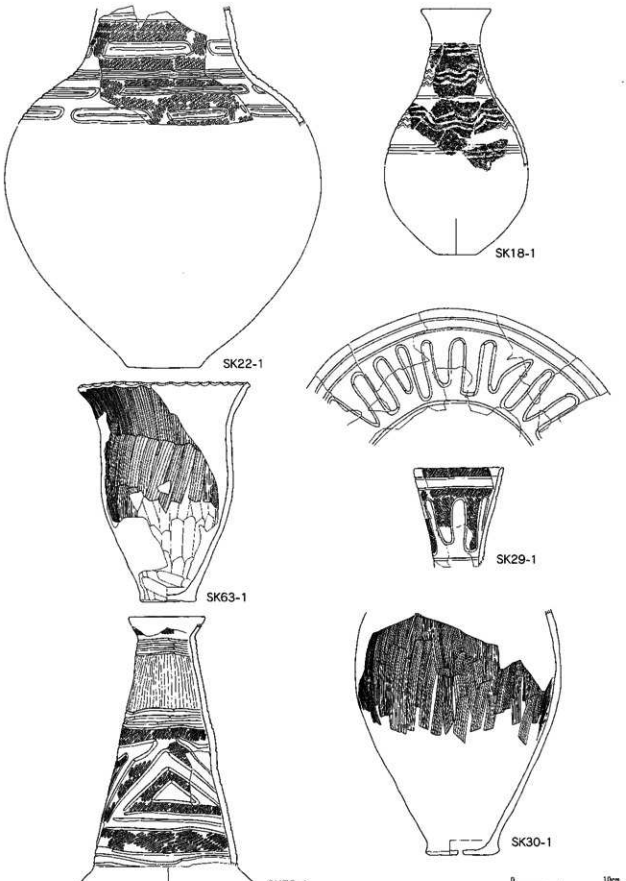
SK73
1 黒褐色土　白色粘土ブロック(0.5～1cm)・炭化物粒子少
2 黒褐色土　白色粘土粒・炭化物粒子少
3 黒灰色土　白色粘土ブロック(2～3cm)多、炭化物ブロック(1～2cm)やや多
4 暗灰色土　白色粘土ブロック(1～2cm)多、炭化物粒子やや多
5 青白色土　白色粘土ブロック・炭化物粒子少

SK77
1 黒褐色土　地山粒・マンガン粒少、炭化物粒子微量
2 暗灰褐色土　地山ブロック(1～3cm)・地山粒・炭化物粒子・マンガン粒少

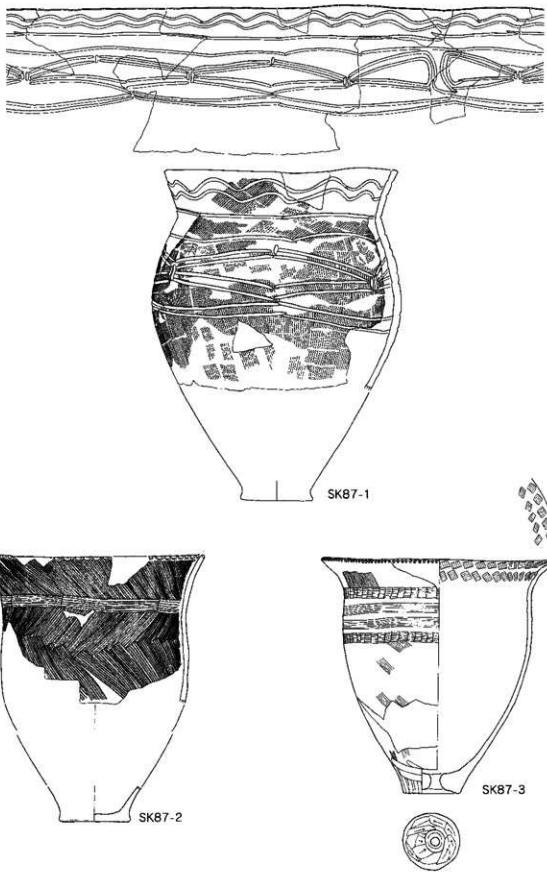
SK78
1 暗褐色土　鉄分・マンガン粒多、炭化物粒子微量
2 暗褐色土　鉄分・マンガン粒・炭化物粒少
3 黒褐色土　地山ブロック少、炭化物ブロック(0.5～1cm)
4 黒褐色土　地山ブロック少、炭化物ブロック多
5 黒褐色土　地山ブロック・炭化物ブロック多

SK86～88
1 暗灰褐色土　地山粒・炭化物粒子微量、マンガン粒少
2 暗灰褐色土　地山粒少
3 灰褐色土　地山粒、マンガン粒・炭化物粒子少
4 灰褐色土　地山粒多、炭化物粒子少
5 灰褐色土　炭化物粒子・地山粒多
6 暗灰褐色土　地山粒少
7 暗灰褐色土　地山ブロック少、地山粒多
8 黒褐色土　地山粒多、マンガン粒微量

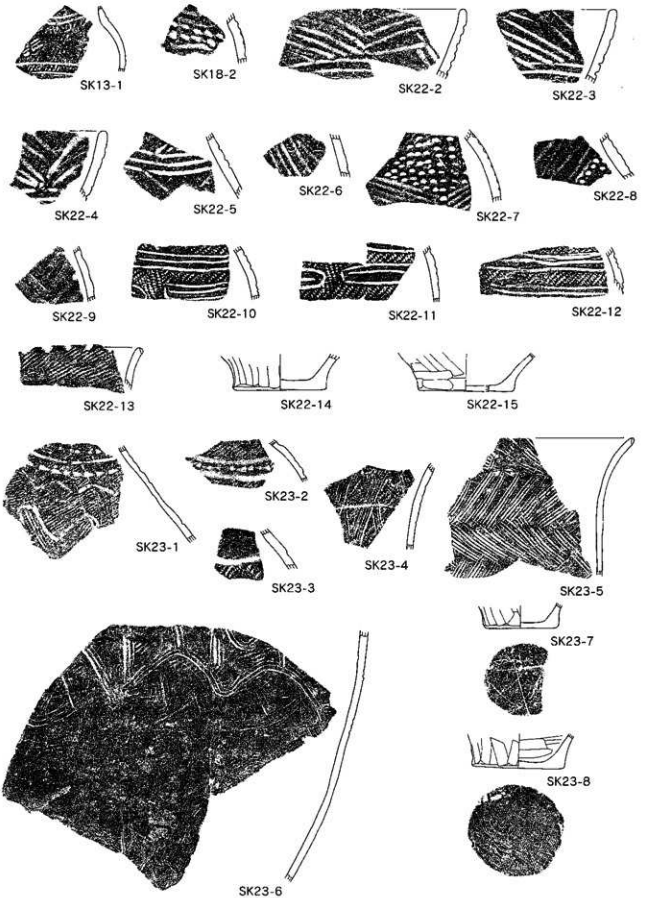
第47図　土壙(3)



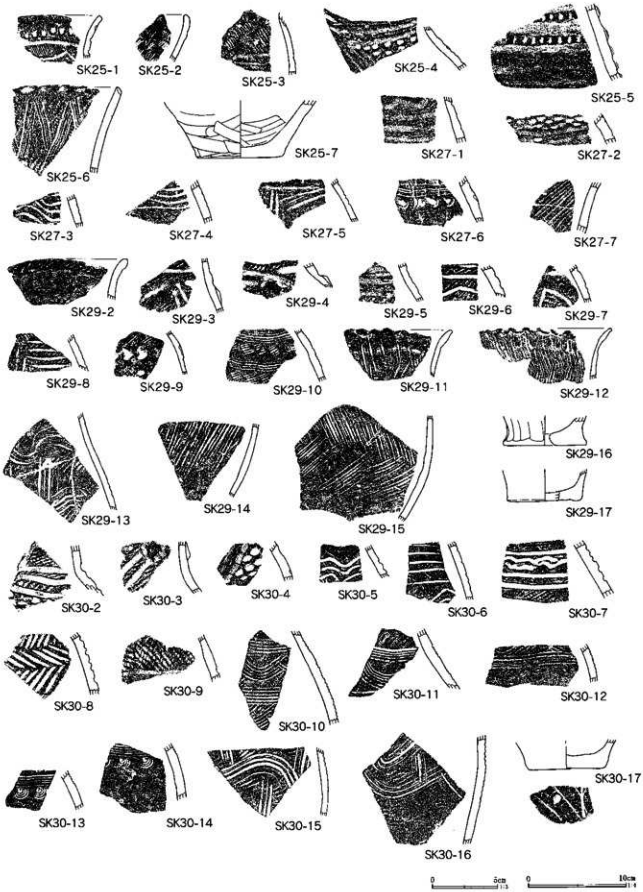
第48図　土壙出土遺物(1)



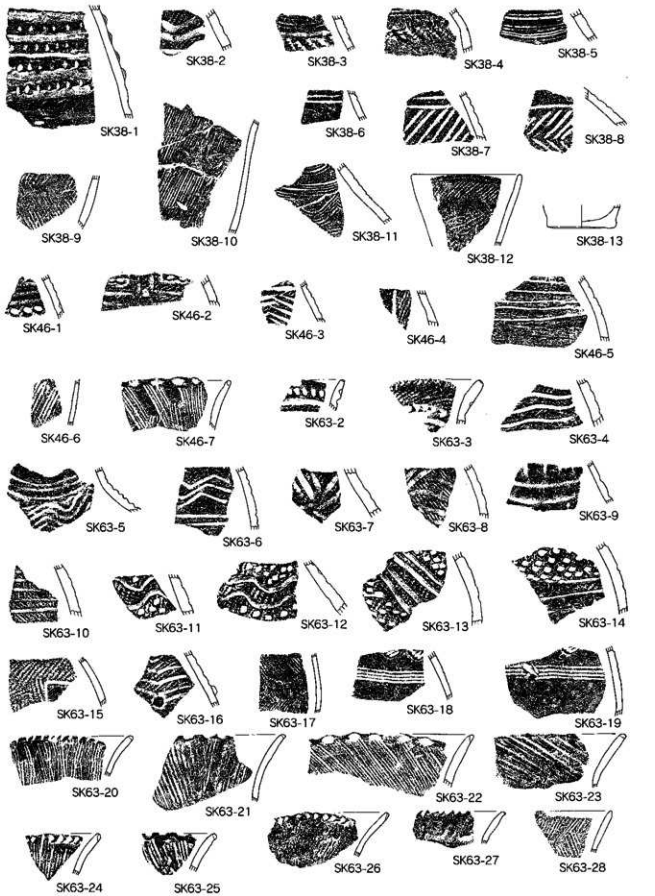
第49図　土壙出土遺物(2)



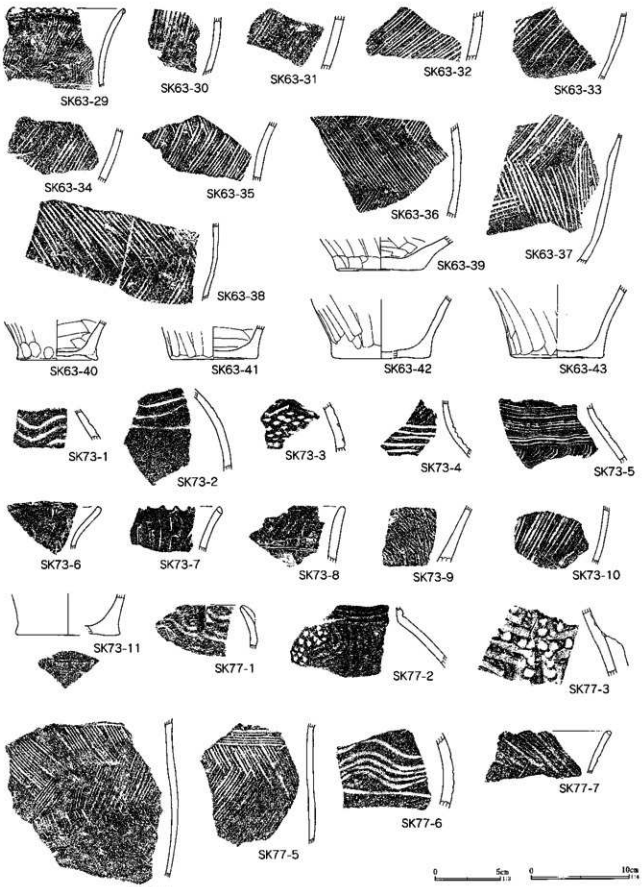
第50図　土壙出土遺物(3)



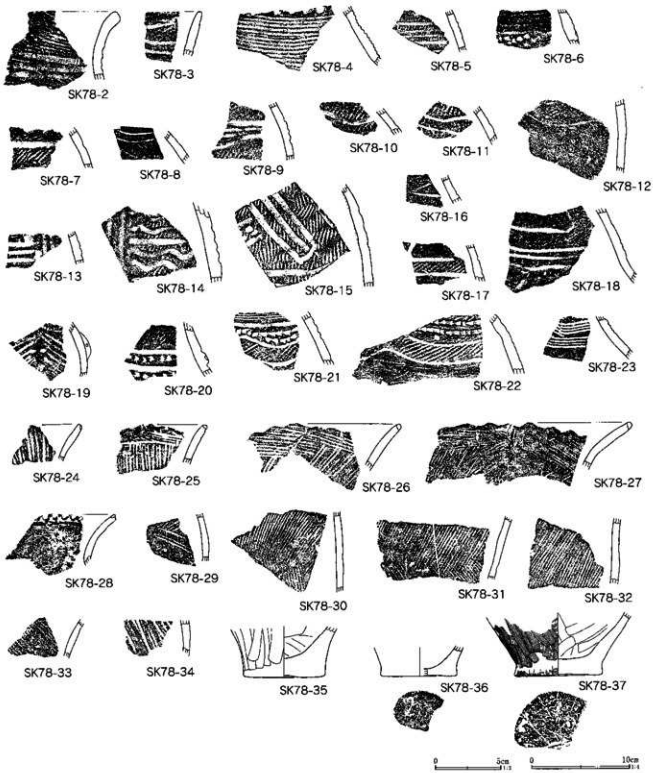
第51図　土壙出土遺物(4)



第52図　土壙出土遺物(5)



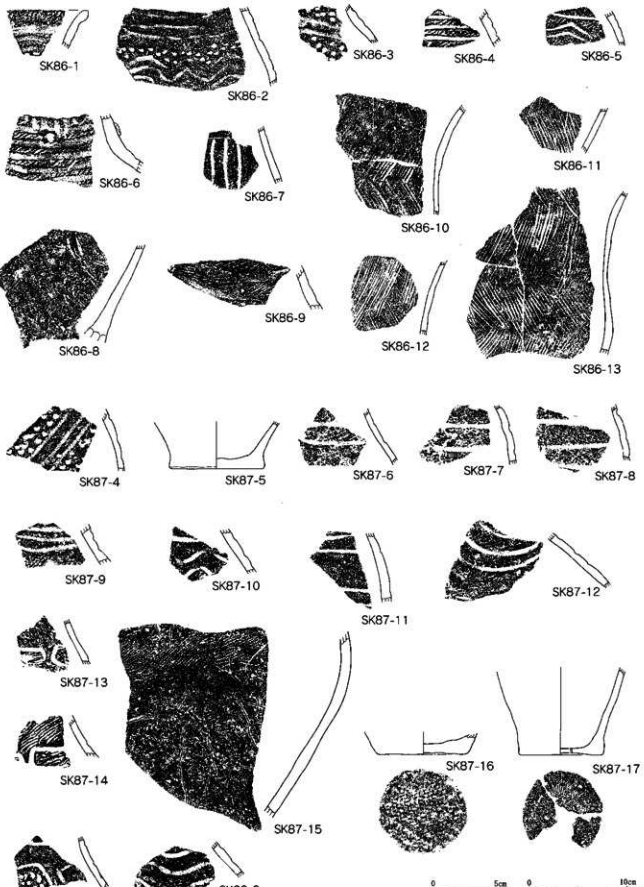
第53図　土壙出土遺物(6)



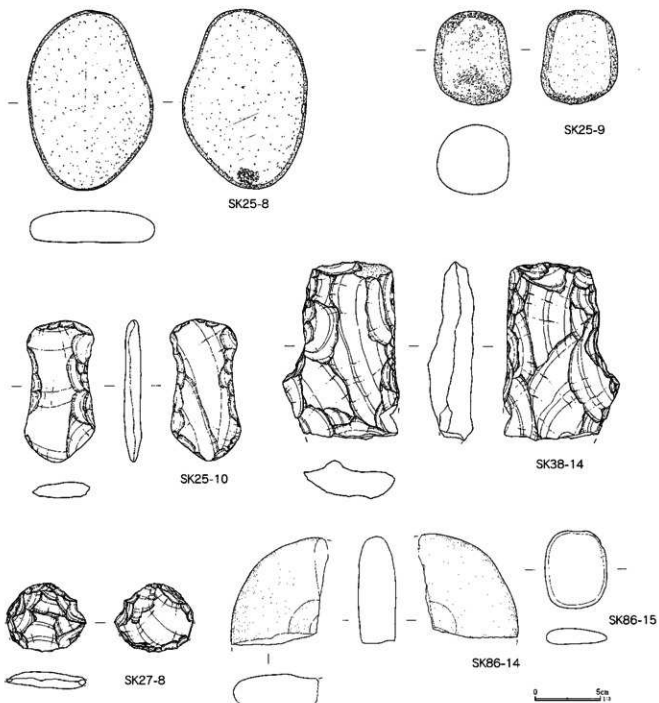
第54図　土壙出土遺物(7)

土壙出土遺物観察表　(第56図)

番号	器種	法量	石材	残存率	備考
SK25-8	磨石	長13.75×幅9.55×厚2.7cm　重量416.0g	砂岩	100	
SK25-9	敲石	長7.2×幅5.85×厚5.45cm　重量334.6g	閃緑岩	ほぼ完形	
SK25-10	打製石斧	長10.8×幅5.3×厚1.3cm　重量103.4g	ホルンフェルス	100	
SK27-8	楔器	長5.25×幅6.0×厚1.35cm　重量43.0g	ホルンフェルス	ほぼ完形	
SK38-14	打製石斧	長13.7×幅8.9×厚3.5cm	ホルンフェルス	80	
SK86-14	窪石か	長7.9×幅7.6×厚2.7cm　重量248.5g	花崗岩	25	
SK86-15	編物石か	長5.9×幅4.7×厚1.2cm　重量58.0g	硬質砂岩	95	または石錘か



第55図　土壙出土遺物(8)



第56図　土壙出土遺物(9)

第88号土壙（第47・55図1・2）

P−43グリッドに位置する。北側は調査区外に続く。第87号土壙との新旧関係は捉えられなかった。規模は、長軸1.20m、短軸(0.95)mまでしか確認できなかった。深さ10cm、現況からみた長軸方向はN-52°-Wである。遺構検出面は、青灰色粘土層であった。平面形は長楕円形と推定される。断面形は皿状に近い。

1は壷頸部である。箆描平行線文下に円形の区画文を施文している。区画内は刺突充填している。2は壷頸部である。箆描波状文を施文している。

第2表　土壙一覧

番　号	位　置	方　位	形　態	長　軸(m)	短　軸(m)	深　さ(m)	備　考
13	G-30		円形	0.78	(0.75)	0.20	
18	G-30		—	1.35	(0.85)	0.07	
22	H-30	N-15°-W	円形	2.35	1.90	0.38	
23	H-30	N-53°-W	楕円形	1.55	1.35	0.50	
25	H-30	N-53°-E	長楕円形	1.50	(1.50)	0.37	
27	H-30・31、I-31	N-36°-W	隅丸長方形	6.25	1.65	0.35	
29	H-31	N-64°-W	長楕円形	1.10	0.75	0.07	
30	H-31		円形	3.20	3.06	0.85	
38	H-32		楕円形	3.20	3.06	0.85	
46	I-33	N-74°-W	楕円形	1.55	1.20	0.50	SK43・44より旧
63	I-33・34	—	不整楕円形	—	—	—	SJ5より旧
73	N-41	N-45°-W	隅丸長方形	2.50	1.05	0.50	SK210より旧
77	O-42	N-46°-W	楕円形	0.95	(0.75)	0.50	SD34より旧
78	O-42	N-46°-W	長楕円形	(1.75)	1.45	0.43	
86	P-43	N-80°-W	隅丸長方形	1.95	1.50	0.40	SD87より旧
87	P-43	N-80°-W	隅丸長方形	1.32	0.95	0.40	SK88新旧不明、SK86より旧
88	P-43	N-52°-W	長楕円形	1.20	(0.95)	0.10	SK87新旧不明

(d) グリッド等出土遺物

ここでは、表面採集遺物や遺構外から出土した遺物を「グリッド等出土遺物」として掲載する（第57～63図）。また、弥生時代以降の遺構に混入していた遺物についても併せて掲げておきたい（第57・61・62図）。

グリッド等出土遺物1（第57図）

SD2－1は細頸長頸壺である。口縁部と底部を欠損している。頸部は強く窄まり、胴部は球胴状を呈す。頸部は撚りの浅いLR単節縄文を地文として施文し、箆描平行線文で区画して無文帯を設けている。また、頸部と胴部の境界は箆描平行線文2条により区画している。胴部文様は同一原体を地文とし、箆描の同心円文を上下の縄文帯で繋いでいる。この同心円文は5単位施文されている。円文の中心部及び区画外は磨り消されている。

SK64－1は細頸長頸壺である。口縁部を欠損する。頸部は強く窄まり胴部は卵形を呈している。頸部は地文原体LR単節縄文施文後、箆描平行線文を施文している。頸部と胴部の境界は箆描平行線文3条で区画している。胴部文様は箆描沈線3条による三角連繋文を7単位施文している。連結部には縦位のスリットが挿入されている。また描き始めの単位が間延びしたため、描き終わりの単位が上下左右に縮小した状況が認められる。

G30－1は細頸壺である。胴部の大部分を欠損している。口縁部はラッパ状に強く外反している。口端部は外側に凹線状に丁寧な面取りが施されている。口縁部直下に横位のハケ調整が認められる。また内面にもハケ調整が認められる。頸部文様は4本1単位櫛描直線文が1段廻っている。胴部文様は4本1単位櫛描直線文3段施文間に櫛描斜行短線文と櫛描波状文を上下に挿入している。器面全体が丁寧なナデ調整を施している。胎土は緻密で焼成堅緻である。

グリッド等出土遺物2（第58図）

G28－1は底部である。ハケ調整が認められる。G28－2は底部である。

G29－1は壺胴部である。箆描沈線による多重の連続三角文を施文している。

G30－2は壺口縁部である。朝顔形に外反する器形を呈す。施文方向の乱れた原体無節R縄文を粗雑に施文し、箆描連続山形文を施文している。G30－3は鉢口縁部で第1号住居跡－3の鉢と同一個体である。口縁部は平坦に面取りが施されている。地文は原体LR単節縄文を施文し箆描平行線文で区画して無文帯を設けている。体部はクランク状の文様を施文していると考えられる。G30－4は無頸壺口縁部である。内彎する器形を呈す。地文に原体LR単

節縄文を施文し、篦描波状文を施文している。G30－5は甕口縁部である。薄手の造りである。口縁部に篦描連続山形文を施文し、その下に平行線文を施文している。G30－6は壺胴上半部である。地文に原体LR単節縄文を施文し、篦描平行線文下に連続三角文を施文している。区画内は刺突充填している。G30－7は壺胴部である。篦描連続三角文を施文し、区画内を刺突充填している。G30－8は壺胴部である。地文原体LR単節縄文施文後、篦描平行線文と連続山形文を施文している。上部に刺突充填が認められる。G30－9は壺胴部である。篦描三角連繋文を施文している。連結部には縦位の刺突列を挿入している。G30－10は壺頸部である。器面の剥落が著しく横位列点文のみ認められる。G30－11は壺胴部である。篦描連続三角文を施文し、区画内を刺突充填している。G30－12は壺頸部である。篦描連続山形文を施文し、間を刺突充填している。G30－13は壺胴部である。篦描連続三角文を施文し、区画内を刺突充填している。G30－14・15は壺頸部である。篦描平行線文を施文している。G30－16は壺胴部である。篦描重四角文を施文している。G30－17は壺胴部である。地文原体無節L縄文施文後、篦描連続菱形文を施文している。G30－18は壺胴部である。地文原体無節L縄文施文後、篦描楕円形区画文と円文を施文している。G30－19は壺頸部である。篦描によるΩ状の文様を施文し、間に縦位穿孔の貼り瘤を付けている。G30－20・21は壺胴部で同一個体である。地文原体不明縄文施文後、篦描平行線文を施文している。G30－22・23は壺頸部である。地文原体不明縄文施文後、篦描平行線文を施文している。G30－24は壺胴上半部である。篦描沈線文を施文している。G30－25は壺頸部である。地文原体LR単節縄文施文後、篦描平行線文を施文している。G30－26は壺頸部である。地文原体LR単節縄文施文後、篦描平行線文を施文している。G30－27・28・29は壺胴部で同一個体と考えられる。地文原体LR単節縄文施文後、篦描平行線文を施文している。G30－30は壺胴部である。地文原体LR単節縄文施文後、篦描平行線文と連続山形文を施文している。G30－31は壺胴部乃至は筒形土器胴部である。地文原体LR単節縄文施文後、篦描楕円形区画文を半単位ずらして2段施文している。G30－32から36は壺胴部乃至は筒形土器胴部で同一個体である。地文原体LR単節縄文を施文後、篦描平行線文と円文を施文している。また、区画外を磨り消している。G30－37は甕胴部である。地文原体LR単節縄文を斜位に施文している。G30－38は甕胴部である。櫛歯状工具による横羽状条痕文を施文している。胎土に雲母乃至は片岩を含む。G30－39は球胴形に強く張り出す壺胴部である。4本1単位櫛描波状文2段施文下に、直線文と簾状文を施文している。G30－40から43は底部である。

グリッド等出土遺物3（第59図）

G30－44から48は底部である。44・45・46は種子圧痕がつく。45・47は布目圧痕か。48は木葉痕が付く。

H30・31－1は甕頸部である。櫛歯状工具による斜位の条痕文を施文する。胎土に雲母乃至片岩を含む。

H31－1は甕胴部である。櫛歯状工具による横羽状条痕文を施文している。胎土に雲母を含む。

I33－1は壺頸部である。篦描重四角文を施文し、区画内を刺突充填している。I33－2は壺胴部である。篦描菱形連繋文を施文している。連結部には縦位刺突列が挿入されている。

I34－1は壺胴部である。SK25－5と同一個体である。貼り付け突帯上に刻み目を施している。I34－2は壺胴部である。篦描三角連繋文を施文している。I34－3は管玉である。

不明－1は壺胴部である。地文原体RL単節縄文施文後、篦描平行線文と波状文を施文している。不明－2は壺胴部である。篦描重四角文を施文し、区画内を山形文で充填している。不明－3は壺頸部である。篦描平行線文を施文している。不明－4は甕

口縁部である。直線的に外反する器形を呈す。口端部は工具による刻み目を施し、体部は櫛歯状工具による斜位の条痕文を施文している。不明－５は底部である。縦位ハケ調整が認められる。

グリッド等出土遺物４（第60図）

L38－１は壺胴部である。篦描波状文を重畳して施文している。その下に篦描平行線文と列点文を施文している。

L39－１は壺胴部である。地文原体無節Ｌ縄文施文後、篦描平行線文を施文している。L39－２は壺胴部である。篦描の連繋文を施文している。また、区画内を刺突充填している。L39－３は壺胴部である。６本１単位櫛描施文で上位から直線文、波状文、直線文、斜行短線文の順で施文している。焼成良好である。

M40－１は壺胴部である。４本１単位櫛描波状文を施文している。M40－２は壺頸部である。篦描平行線文下に、篦描菱形連繋文を施文している。区画内は刺突充填している。M40－３は壺胴部である。篦描楕円形区画文と円文を組み合わせて施文している。区画内外に刺突充填が認められる。胴下端部を篦描平行線文２条で区画している。M40－４は壺頸部でM40－３と同一個体である。篦描きの円文を施文し、区画内外を刺突充填している。M40－５は壺胴部である。篦描による同心円文乃至はフラスコ文風の文様を施文していると考えられる。

N41－１は甕頸部である。櫛歯状工具による横羽状条痕文を施文している。

O41－１は壺口縁部である。ラッパ状に外反する器形を呈す。口唇部は複合口縁状を呈している。頸部に２列の列点文が施文されている。

O42－１は甕口縁部である。直線的に外反する器形を呈す。口端部は工具による押捺を施している。文様は櫛歯状工具による斜位の条痕文を施文している。O42－２は甕口縁部である。やや強く外反する器形を呈す。口端部は工具による刻み目を施している。胴部は無文である。O42－３は壺胴部である。地文原体不明Ｌ縄文施文後、篦描平行線文を施文している。O42－４は壺頸部である。地文原体無節Ｌ縄文施文後、篦描平行線文を施文している。O42－５・６は壺胴部で同一個体である。篦描平行線文を施文している。O42－７は壺胴部である。地文原体ＲＬ単節縄文を施文後、篦描重四角文乃至は長方形区画文を施文している。区画間のみ原体を縦位施文している。O42－８は壺胴部である。篦描重四角文を施文している。区画内は平行沈線で充填している。O42－９は壺胴部である。地文原体ＬＲ単節縄文を粗雑に施文後、篦描連続三角文を施文している。区画内は刺突充填している。O42－10は壺胴部である。篦描連続三角文を施文している。区画内は刺突充填している。

P42－１は壺胴部である。篦描菱形連繋文を施文していると考えられる。区画内は刺突充填している。

P43－１・２・３は壺頸部である。篦描平行線文を施文している。P43－４は壺頸部である。篦描連繋文を施文している。連結部に縦位の刺突列を挿入している。P43－５は壺頸部である。棒状工具による平行線文と波状文を施文している。P43－６・７は壺胴部である。篦描連続三角文を施文している。区画内は刺突充填している。P43－８は壺胴部である。篦描平行線文下に刺突充填している。P43－９・10は壺胴部である。刺突充填を施している。

Q42－１・Q43－１は底部である。

R44－１は壺口縁部である。口唇部は肥厚している。口縁部直下に刺突充填を施している。R44－２は壺胴部である。地文原体ＬＲ単節縄文施文後篦描重四角文を施文している。区画内は刺突充填している。R44－３は甕口縁部である。口端部は指頭による押捺を施している。文様は櫛歯状工具による縦位条痕文を施文している。

グリッド等出土遺物５（第61図）

ＳＪ４－１は底部である。縦位ハケ調整が施され

ている。

ＳＫ43－１は甕胴部である。櫛歯状工具による縦位及び斜位の条痕文を施文している。胎土に雲母乃至は片岩を含む。

ＳＫ26－１壷胴部である。篦描平行線文及び弧線状の文様を施文している。ＳＫ26－２は壷頸部である。篦描連続三角文を施文していると考えられる。区画内は刺突充填している。

ＳＫ51－１は広口壷口縁部である。内彎する器形を呈す。口端部は平坦に面取りが施されている。口縁部文様は棒状の貼り付け突帯を縦位に２本付け、突帯上に刻み目を施している。突帯間は篦描のＵ字形区画の中に円文を施文し、円文の内部を刺突充填している。ＳＫ51－２は壷胴部である。篦描平行線文下に、波状文を施文している。ＳＫ51－３は壷胴部である。篦描波状文を施文している。ＳＫ51－４は壷胴部である。３と同一個体の可能性がある。篦描波状文を重畳して施文し、下段に篦描平行線文を施文し刺突を加えている。胎土に片岩を含む。ＳＫ51－５は壷胴部である。篦描の菱形連繋文を施文している。連結部に刺突を加えている。区画内は刺突充填している。ＳＫ51－６・７は甕口縁部である。口端部に工具による押捺を施し、櫛歯状工具による斜位または横羽状条痕文を施文している。胎土に片岩乃至は雲母を含む。ＳＫ51－８から11は甕胴部である。櫛歯状工具による斜位乃至は横羽状条痕文を施文している。ＳＫ51－12は底部である。布目圧痕が付いている。

ＳＫ50－１は壷胴部である。篦描波状文下に半行線文を施文している。ＳＫ50－２は甕胴部である。櫛歯状工具による横羽状条痕文を施文している。

ＳＫ52－１は底部である。布目圧痕が付いている。

ＳＤ5－１は壷頸部である。地文原体ＬＲ単節縄文を粗雑に施文後、篦描平行線文を施文している。ＳＤ５－２は壷胴部である。地文原体ＬＲ単節縄文施文後、篦描楕円形区画文を単位をずらして２段施文している。区画内は磨り消して直線文を施文している。また、区画文間は原体を縦位に施文している。ＳＤ５－３は壷頸部である。地文原体不明縄文施文後、篦描による蛇行懸垂文を施文し、文様間を刺突充填している。

ＳＤ２－２は壷頸部である。篦描菱形連繋文を施文している。区画内は刺突充填している。ＳＤ２－３は壷頸部である。篦描菱形連繋文を施文し、区画内を刺突充填している。また、一部原体不明縄文の施文が認められる。

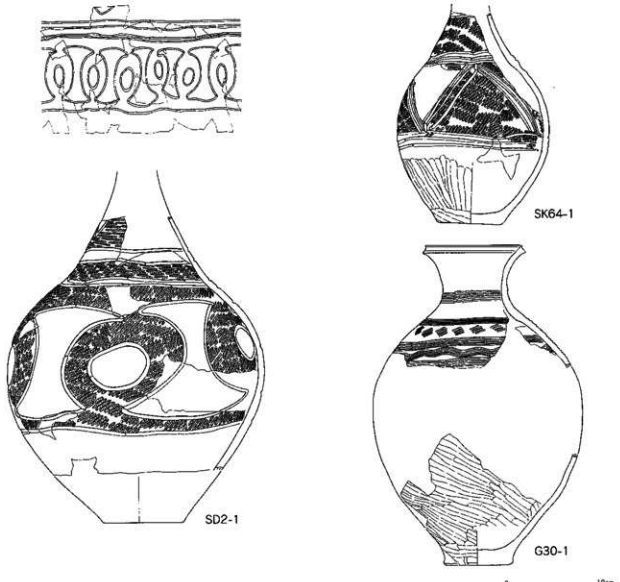
ＳＤ３－１・２は壷胴上半部で同一個体である。また、ＳＫ25－５の壷と同一個体の可能性がある。無文地に貼り付け突帯を廻らしている。突帯には刻み目が施されている。ＳＤ３－３は広口壷胴部でＳＪ１－２の広口壷と同一個体の可能性がある。篦描の短い波状文を重畳して施文している。ＳＤ３－４は壷頸部である。篦描きの下向き弧線文を重畳して施文している。ＳＤ３－５は壷胴部である。篦描波状文に刺突充填が施されている。ＳＤ３－６は壷胴部である。篦描平行線文２条間に５本１単位櫛描連続刺突文を施文している。ＳＤ3－７は底部である。

グリッド等出土遺物６（第62図）

ＳＪ15－１は壷胴部である。地文原体無節しまたは多条系Ｌ縄文を施文後篦描平行線文２条で区画して無文帯を設けている。ＳＪ15－２は壷頸部である。刺突充填している。ＳＪ15－３は壷頸部である。篦描平行線文を施文している。

ＳＪ12－１は壷頸部である。地文原体ＬＲ単節縄文を粗雑に施文後、篦描半行線文を施文している。ＳＪ12－２は壷胴部である。篦描平行線文間に列点文を挿入している。ＳＪ12－３は甕胴部である。櫛歯状工具による横羽状条痕文を施文している。

ＳＪ14－１は壷頸部である。篦描半行線文下に貼り付け突帯を廻らしている。ＳＪ14－２は壷胴上半部である。地文原体ＬＲ単節縄文施文後に篦描平行線文で区画して無文帯を設けている。ＳＪ14－３は甕口縁部である。緩やかに外反する器形を呈す。口



第57図　グリッド等出土遺物(1)

脣部は折り返し状を呈す。文様は櫛歯状工具による斜位の条痕文を施文している。

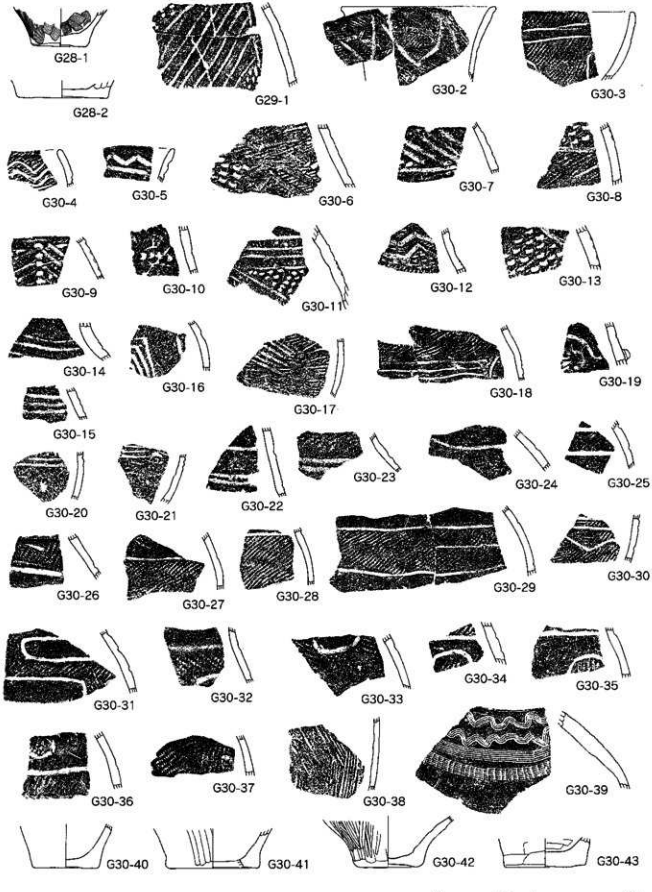
ＳＫ210－１は壷胴部である。篦描による弧線状の文様を施文し、原体不明縄文を施文している。

ＳＫ80－１は壷頸部である。篦描平行線文を施文している。ＳＫ80－２は壷頸部である。地文原体無節Ｌ縄文を粗雑に施文後、篦描波状文を施文している。ＳＫ80－３は壷胴上半部である。頸部境界に篦描平行線文を施文し、胴部に篦描連続三角文乃至は菱形連繋文を施文していると考えられる。区画内は刺突充填している。ＳＫ210－２は底部である。

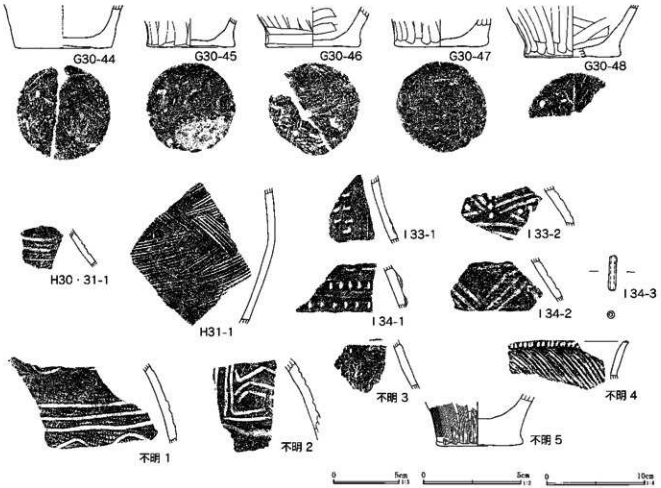
ＳＫ80－４から７は壷胴部である。篦描連続三角文を施文している。区画内は刺突充填している。ＳＫ80－８・10・11は壷胴部で同一個体の可能性がある。篦描重四角文を施文し、区画内を刺突充填している。ＳＫ80－９は壷胴部である。篦描三角連繋文を施文している。連結部は縦位の刺突列を挿入している。

ＳＫ64－２は壷頸部である。地文不明原体施文後、篦描重四角文を施文している。ＳＫ64－３は壷胴部である。刺突充填を施している。ＳＫ64－４は甕胴部である。櫛歯状工具による横羽状条痕文を施文している。胎土に雲母乃至は片岩を含む。

ＳＫ70－１は壷胴部である。地文原体無節Ｒ縄文



第58図　グリッド等出土遺物(2)



第59図　グリッド等出土遺物(3)

施文後篦描平行線文を施文している。SK70－2は壷頸部である。篦描波状文下に平行線文を施文している。SK70－3は壷頸部である。篦描の上向き弧線文間に刺突充填を施している。SK70－4は壷頸部である。篦描連続三角文を施文し、区画内を刺突充填している。SK70－5は底部である。

SK90－1は壷頸部である。地文原体多条系L縄文施文後、篦描による波状文を重畳して施文している。SK90－2は甕胴部である。櫛歯状工具による斜位の条痕文を施文している。SK90－3は甕胴部である。櫛歯状工具による斜位の条痕文を施文している。

SK85－1は壷胴部である。地文原体RL単節縄文施文後、篦描菱形連繋文を施文している。連結部に刺突を付けている。

SD25－1は壷頸部である。篦描波状文を施文している。

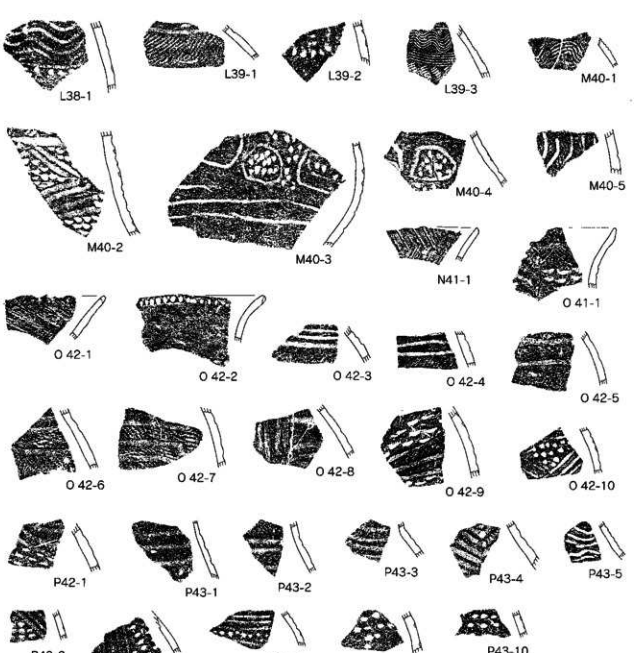
SD24－1は壷頸部である。篦描平行線文を重畳して施文している。SD24－2は壷胴部である。篦描連続三角文を施文していると考えられる。SD24－3は壷または鉢口縁部である。篦描連続三角文を施文し、区画内を刺突充填している。

SD28－1は壷胴部である。地文原体不明L縄文施文後、篦描平行線文下に同心円文状の文様を施文している。

歛－1・2・3は壷頸部で同一個体である。地文原体不明L縄文施文後、列点文を挿入する篦描平行線文で区画し、区画内を楕円形区画文で充填している。

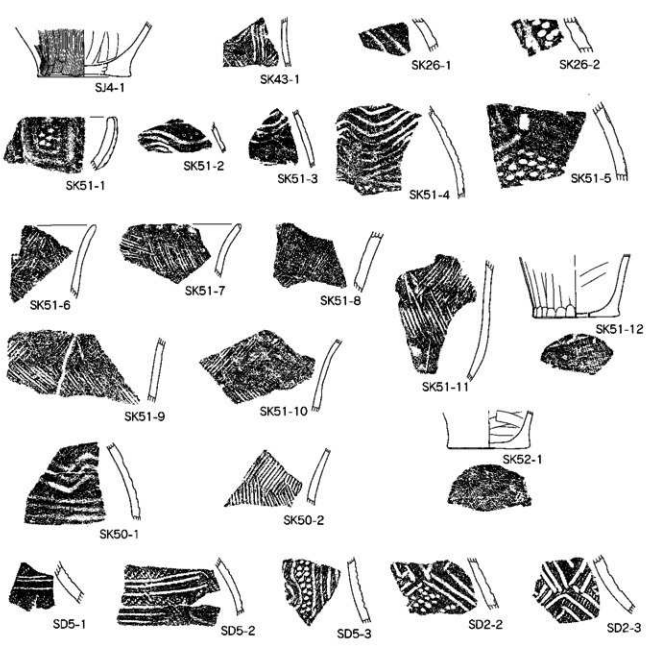
グリッド等出土遺物7（第63図）

表採－1は壷頸部である。篦描下向き弧線文と平行線文を施文している。表採－2は壷胴上半部であ



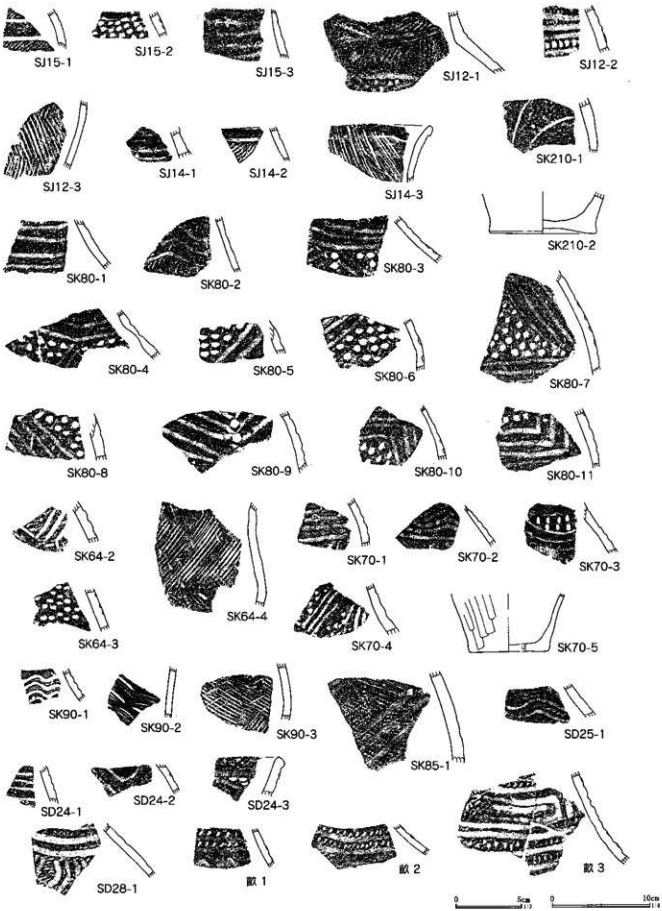
第60図　グリッド等出土遺物(4)

る。篦描平行線文下に弧線文を施文し刺突充填している。表採－3は壷頸部である。地文原体LR単節縄文施文後、篦描平行線文を施文している。表採－4は壷胴上半部である。地文原体LR単節縄文施文後篦描平行線文を施文している。表採－5は壷胴上半部である。地文原体LR単節縄文を施文している。表採－6は壷頸部または、筒形土器である。篦描楕円形区画文を施文し、区画内を原体多条系し縄文で充填している。表採－7は甕口縁部である。直線的に外反する器形を呈す。口端部は指頭による押捺を

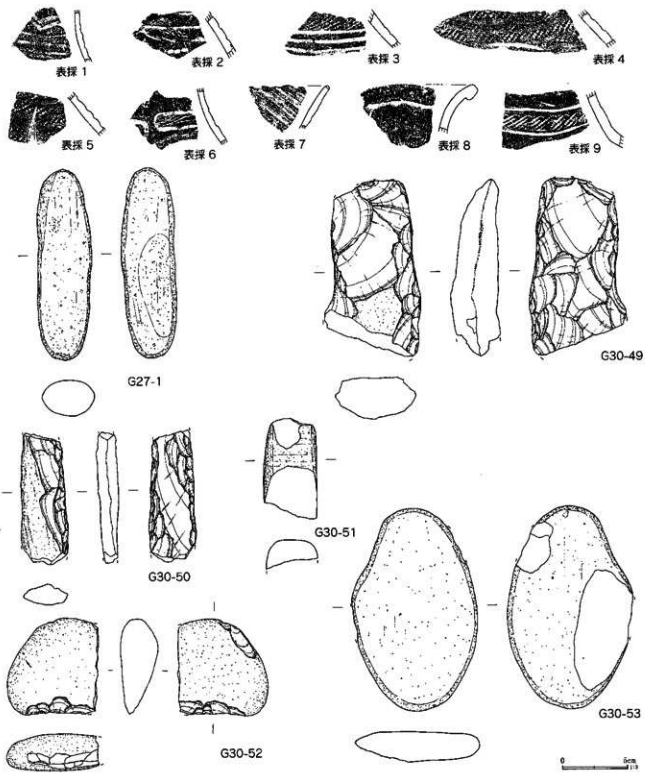


第61図　グリッド等出土遺物(4)

施している。文様は櫛歯状工具による斜位の条痕文を施文している。胎土に雲母を含む。表採－8は壺口縁部である。朝顔形に外反する器形を呈す。口唇部は折返口縁である。口縁部以下無文である。時期的に降る可能性がある。表採－9は壺頸部である。筆描平行線2条で区画し、区画内を原体L{RRR}縄文で充填施文している。両端は丁寧に磨り消している。



第62図　グリッド等出土遺物(6)



第63図　グリッド等出土遺物(7)

グリッド等出土遺物観察表　(第63図)

番号	器種	法量	石材	残存率	備考
G27-1	敲石	長14.5×幅4.2×厚2.8cm　現重206.7g	安山岩	完形	
G30-49	打製石斧	長13.5×幅7.5×厚3.75cm　重量402.6g	ホルンフェルス	80	風化著しい
G30-50	打製石斧	長10.0×幅3.6×厚1.65cm　現重74.3g	緑色片岩	80	
G30-51	砥石	長7.75×幅4.1×厚2.15cm　重量93.9g	緑色凝灰岩	破片	
G30-52	磨敲	長7.4×幅6.9×厚2.85cm　現重179.1g	砂岩	50	
G30-53	磨石	長15.5×幅9.6×厚2.4cm　重量431.4g	砂岩	90	磨面使用の為表面滑らか

(3) 古墳時代

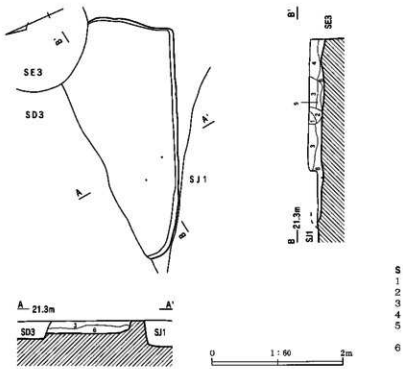
(a) 住居跡

二面で検出された住居跡は17軒で、このうち弥生時代に属するものは4軒(第1・2・14・17号住居跡)、残り13軒は古墳時代に属するものである。13軒の内訳は、A区が9軒、B区が4軒であり、C区からは住居跡は検出されていない。

第3号住居跡 (第64図)

G−29グリッドに位置する。一面から二面にとどく第3号井戸跡のほか、第3号溝跡に切られている。第1号住居跡と接してはいるが、重複関係にはないと思われる。検出し得た範囲内での住居の規模は東西3.50m、南北1.73mで、深さは20cmである。これらから推定される主軸方向はN-67°-W、またはN-23°-Eである。

床面直上には、焼土と炭化材が住居全体に広がっていた。出土した炭化材はごく少量ではあるものの、この住居の建築構造を一部反映している状況であった。しかし遺存状況がきわめて悪く、残念ながら図化には至らなかった。床面は掘方をもたないもので、壁面の立ち上がりは、比較的しっかりしたものである。古墳時代前期と思われる壺や台付甕の破片がごく少数出土しているが、図化には至らなかった。

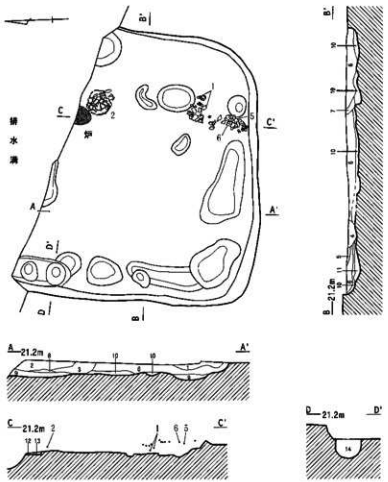


第64図 第3号住居跡

第4号住居跡 (第65・66図)

H・I −33グリッドに位置する。住居の北側部分は調査区外に続く。住居の規模は東西4.60m、南北は検出し得た範囲で3.60m、深さは25cmである。これらから推定される主軸方向はN-84°-W、またはN-6°-Eである。コーナー部分は隅丸を呈する。壁面の立ち上がりは緩やかであるといえる。

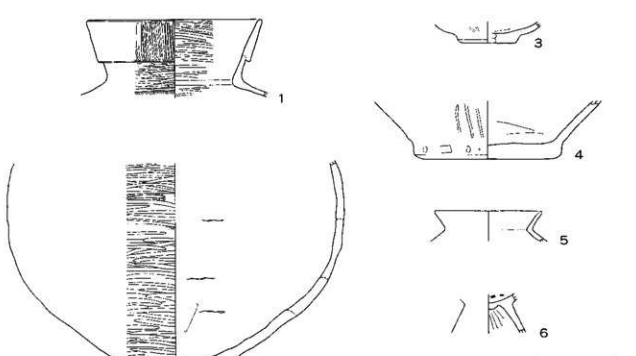
中央よりやや東寄りの境界線際に、炉跡が検出されたが、焼け方は弱いものであった。平面図上では、幅27~58cmの溝状あるいは土壙状の表現が、西側・南側の壁面際に巡っているが、これらは大雑把な周壁溝というよりも掘方の可能性がより高いと考え



SJ4
1 炭色土 酸化鉄粒・地山粒・炭化物粒子多 粘土質
2 黒灰色土 酸化鉄粒多 粘土質
3 黒灰色土 地山粒・酸化鉄粒・焼土粒・炭化物粒子多 粘土質
4 黒灰色土 地山ブロック石下、地山粒多
5 黒灰色土 酸化鉄粒多
6 黒灰色土 地山ブロック石下、地山粒・酸化鉄粒多 粘土質
7 黒灰色土 地山粒多 粘土質
8 黒色土 炭化物層中に地山粒多 粘土質
9 黒灰色土 地山ブロック多 粘土質
10 黒灰色土 地山粒多 粘土質
11 黒色土 炭化物層中に地山粒石下
12 赤褐色土 火を受けて変色した部分、しまり強
13 灰白色土 黒灰色土粒微量 粘土質
14 黒灰色土 地山ブロック・炭化物粒子少 地山粒多 粘土質

0 1:60 2m

第65図 第4号住居跡



第66図 第4号住居跡出土遺物

られる。床面のしまりは比較的弱く、硬化面はみられなかった。出土遺物のうちから6点が図化できたが、いずれも床面から5～20cm程浮いた状態で検出されたものである。

第4号住居跡出土遺物観察表　(第66図)

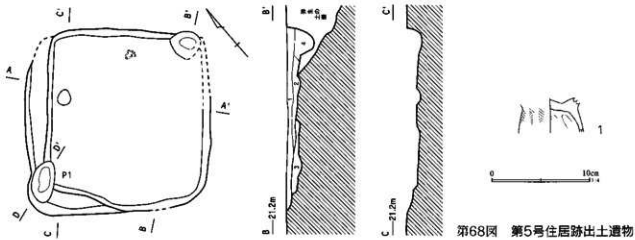
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	壺	(18.1)	8.0		AHUK	普	白橙色	25	胎土緻密　風化著しい
2	壺		21.6	10.3	AGHIJ	普	橙褐色	35	内外面とも風化著しい
3	甕		2.2	(5.8)	AGHIJ	普	褐色	35	器面風化
4	壺		5.9	(15.0)	AGHIJ	不	暗橙褐色	40	風化著しい
5	甕	(11.1)	3.0		AEIJK	不	橙褐色	15	風化著しい
6	台付甕		4.0		ACGIJ	普	明褐色	70	器面は荒れている

第5号住居跡（第67・68図）

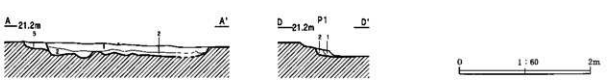
I－33・34グリッドに位置する。第63号土壙を切っている。なお、第63号土壙に関しては、調査過程で調査区境界線の壁面にヒビ割れが生じ始め、壁面の崩落の可能性が危惧される結果となった。そこで、遺物出土状況の写真撮影を行い、土壙内の遺物を一括で取り上げた後、重機によりこの土壙周辺の埋め戻しを行った。平面図では、第5号住居跡の西壁が二重に表現されているが、内側のプランを基にみていきたいと思う。住居の規模は、2.50×2.83mの隅丸方形を呈し、床面までの深さは12cm、掘方を含めた深さは42cm、主軸方向はN-40°-Eを指す。

また、西壁の外周を基にした規模は2.85×2.83mを測り、長軸方向はN-50°-Wを指す。住居の東コーナーで、弥生時代の土壙を切っているのが確認されているが、実測以前に崩落したため、残念ながら図化することはできなかった。

この住居跡は掘方をもつが、床面は比較的しまりが弱く硬化面はみられなかった。また、炉・柱穴・周壁溝も検出されていない。遺物はごく少数出土したが、図化し得たのは1点のみであった。



第68図　第5号住居跡出土遺物



SJ5
1　黒灰色土　酸化鉄ブロック多、地山粒少　粘土質
2　黒灰色土　地山ブロック・地山粒多、炭化物粒子若干　粘土質
3　黒灰色土　地山大ブロック多　粘土質　掘方
4　暗灰色土　地山粒若干　粘土質
5　黒灰色土　地山粒多、炭化物粒子少　粘土質

ピット1
1　暗灰色土　地山粒多　粘土質
2　暗灰色土　地山ブロック多　粘土質

第67図　第5号住居跡

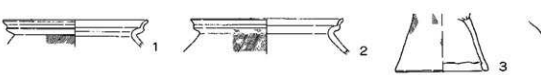
第5号住居跡出土遺物観察表 （第68図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	台付甕		3.5		AGHIJ	普	橙褐色	50	砂粒多

第6号住居跡（第69・70図）

Ⅰ－32・33グリッドに位置する。住居の南側は、調査区外に続いている。この住居跡は軸方向を変えることなく、北側・西側へと一回り大きく拡張されていると思われる。東側については、拡張はなされていないと考えられる。当初の住居の規模は、東西5.90mで、南北は4.78mまで確認できた。拡張後は、東西6.80mで、南北は5.35mまで確認できた。床面までの深さは10～15cmで、床面自体は拡張後も同じレベルであったと推定される。なお、確認面から掘方最深部までの深さは40cmであり、掘方そのものでは20～25cmに及ぶところもある。軸方向はN-60°-W、またはN-30°-Eを指す。壁面の立ち上がりは比較的しっかりしたものである。あくまでも周壁溝からの推測ではあるが、北側では15cm、西側では1.10m程拡張されているといえる。調査し得た範囲からみてこの住居跡は、拡張以前・以後ともに、周壁溝の巡るタイプの住居と考えられる。掘方は、ドーナツ状を呈すると推定される。

調査し得た範囲内からは炉は確認できなかった。また、明確に柱穴と断定し得るピットは検出されていない。あえて挙げるとするならば、Ｐ３は拡張前の北西に位置する柱穴であろうか。径28×18cm、深さ36cmである。拡張以前・以後にかかわらずＰ２を柱穴とした場合、これに対応する北西の柱穴がみられない。因みにこのピットは、径56×45cm、深さ45cmを測る。少数の土器片が出土したが、図化し得たのは４点のみであった。



第69図　第6号住居跡出土遺物

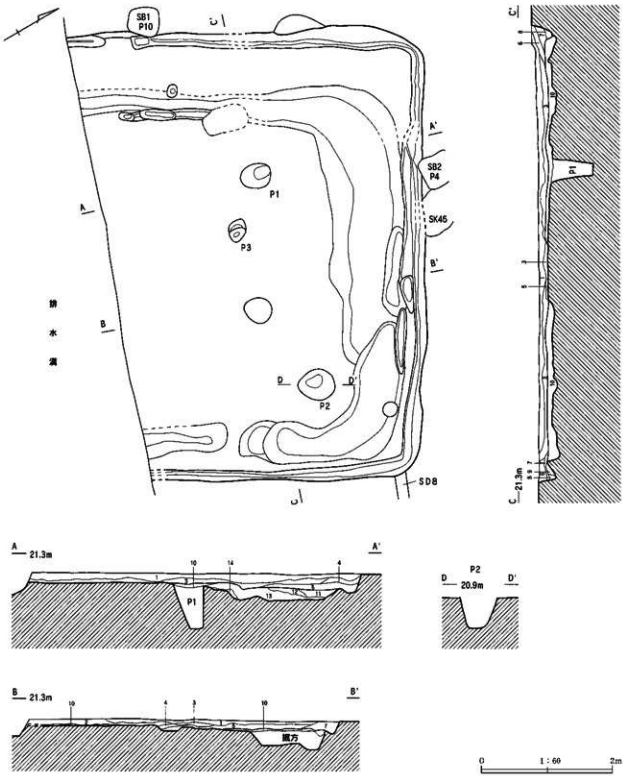
第6号住居跡出土遺物観察表 （第69図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	台付甕	(14.8)	2.9		ACHIJ	普	明褐色	15	器面は荒れている
2	台付甕	(15.7)	3.6		AHIJK	普	白橙色	15	器面は荒れている
3	台付甕		5.9	9.5	ACGHIJ	普	橙褐色	75	器面は荒れている
4	壺		1.8	6.8	ARGHIJ	不	明褐色	80	風化著しい

第7号住居跡（第71・72図）

Ⅰ・Ｊ－33グリッドに位置する。住居の南半部は調査区外に続くため、隅丸のコーナー部分は２箇所のみの検出となった。第42号土壙を切っている。住居の規模は、南北3.95mで、東西2.84mまで調査できたのみである。床面までの深さは７～15cmで、掘方の深さは５～10cm、軸方向はN-38°-Wもしくは N-52°-Eが推測される。床面は比較的しまっており、壁面の立ち上がりはしっかりとしたものである。調査し得た範囲内では炉・柱穴・周壁溝は検出されなかった。Ｐ１は貯蔵穴と思われる。径50×47cm、深さ28cmを測る。

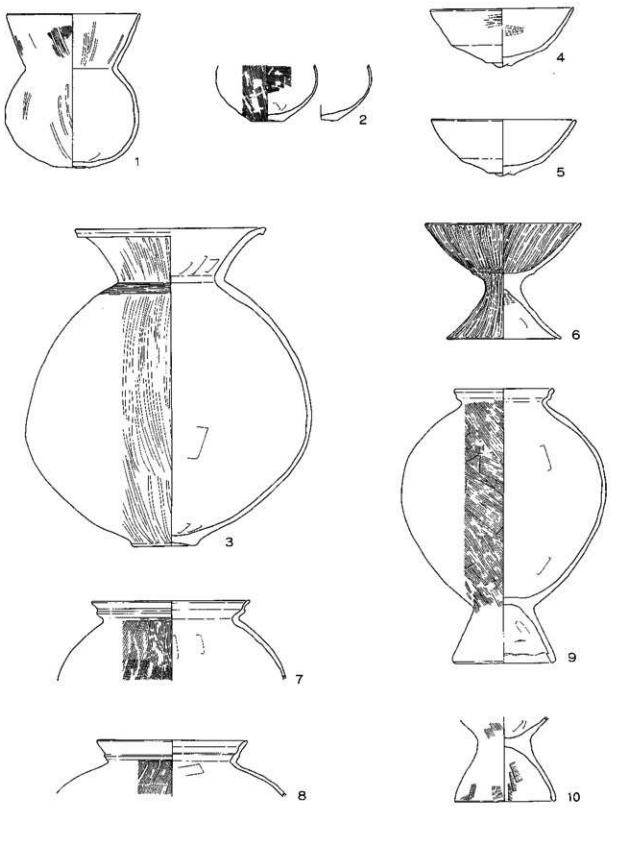
遺物は比較的まとまった状態で出土しており、図化し得たのは10点であった。



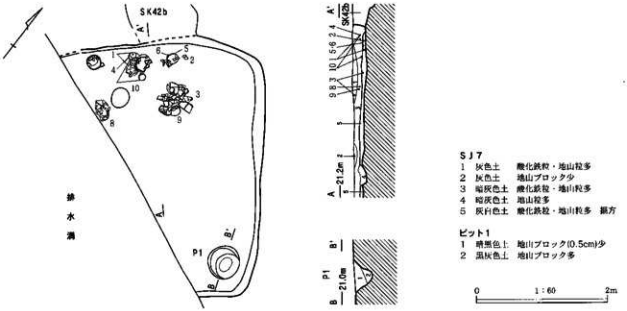
SJ6

1 暗赤褐色土 地山ブロック(0.5～1cm)少、マンガン粒多
2 暗褐色土 地山ブロック(0.5～1cm)・焼土粒・マンガン粒少
3 黒褐色土 地山ブロック(0.5～1cm)・炭化物粒子少、マンガン粒多
4 黒褐色土 地山ブロック(0.5～1cm)微量、焼土ブロック(2cm)・マンガン粒少
5 暗褐色土 地山ブロック(0.5～1cm)少、マンガン粒やや多
6 暗褐色土 地山ブロック(0.5～2cm)・マンガン粒やや多
7 暗褐色土 地山ブロック(0.5～1cm)・マンガン粒少
8 黒褐色土 地山ブロック(0.5～1cm)やや少、マンガン粒少
9 暗茶褐色土 地山ブロック(0.5～1cm)多、炭化物粒子・マンガン粒少
10 暗黄褐色土 地山ブロック(0.5～3cm)多、炭化物粒子・マンガン粒少 貼床
11 暗黄褐色土 地山ブロック(0.5～5cm)赤茶に多、炭化物粒子・マンガン粒少
14層まで調方
12 黒褐色土 地山ブロック(1～3cm)・マンガン粒少
13 暗褐色土 地山ブロック層中に黒色土ブロック(2～3cm)少
14 暗褐色土 地山ブロック(0.5～2cm)多

第70図 第6号住居跡



第71図　第7号住居跡出土遺物



第72図　第7号住居跡

第7号住居跡出土遺物観察表　(第71図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坩	(13.7)	15.5	3.4	AGHIK	不	橙褐色	75	器面は風化著しい
2	坩		5.8	3.3	AGHIJ	普	橙褐色	25	器面は荒れている　煤付着　黒斑
3	壷	19.5	32.4	6.3	AGHIJ	普	褐色	85	外面に黒斑　器面風化
4	高坏	14.7	6.0		ACHIJ	不	橙褐色	80	器面は風化著しい
5	高坏	14.9	5.7		AGHIJ	不	明褐色	90	風化著しい
6	高坏	15.9	11.8	(11.7)	AGHIJK	普	明褐色	80	内面黒色
7	台付甕	(16.4)	8.1		AEGHIJ	普	暗褐色	50	
8	甕	(15.6)	5.7		AGHIJ	普	暗褐色	20	
9	台付甕	(10.1)	27.8	10.5	AGIJ	普	暗褐色	65	外面に煤付着
10	台付甕		(8.4)	10.4	ACEGIJ	普	橙褐色	90	

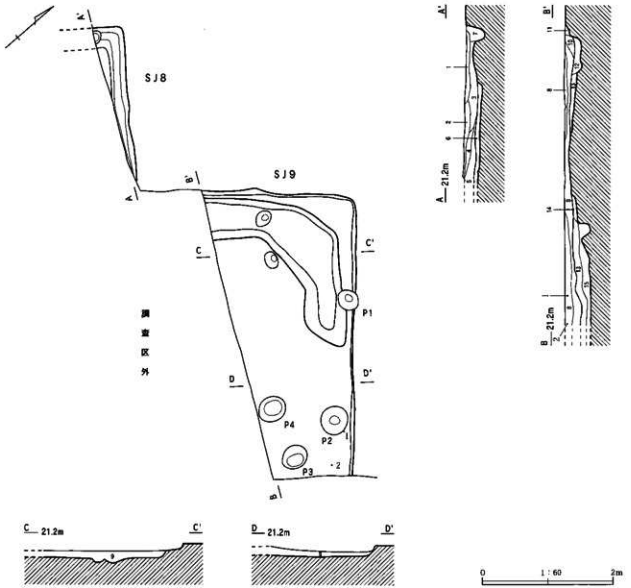
第8号住居跡（第73図）

J－33・34グリッドに位置する。住居の大部分が調査区外に位置しており、コーナー部分が1箇所検出されたのみである。位置関係からみて、第9号住居跡と重複関係にあると推測される。調査範囲が小さく、角張ったコーナーから一辺は2.35m、もう一辺にいたっては0.42mまでしか調査することができなかった。この範囲内から推定される軸方向は、N-55°-WまたはN-35°-Eである。床面までの深さは18cm、貼床の厚さは5～8cm程である。周壁溝の幅は23cm、床面からの深さは15cm程である。

古墳時代前期の壺や台付甕などの破片が少数出土したが、図化には至らなかった。

第9号住居跡（第73・74図）

J－34グリッドに位置する。位置的に、第8号住居跡と重複関係にある。住居の多くの部分が調査区外に位置しており、コーナー部分は1箇所検出できたのみである。この角張ったコーナーから一辺は4.16m、もう一辺は2.30mまで確認できたのみである。確認面から床面までの深さは8～20cm、貼床の厚さは5～20cm程で、コーナー付近にみられる溝状の表現は掘方である。掘方の規模は、幅55～90cm、深さ10cm程である。　柱穴と明言できるピットは見当たらなかった。またこの範囲内からは、炉・貯蔵穴・周壁溝などは確認されなかった。ピットが6本検出されているが、内容は不明である。出土した遺物はごく少数であり、図化し得た遺物は2点のみであった。



SJ8・9

1 暗赤褐色土 地山ブロック(1~2cm)・炭化物粒子・マンガン粒多
2 黒褐色土 地山ブロック(0.5~1cm)微量、炭化物粒子やや多、マンガン粒少
3 暗褐色土 地山ブロック(1~2cm)・炭化物粒子やや多、マンガン粒少
4 暗褐色土 地山ブロック(1~2cm)・炭化物粒子やや多、マンガン粒少
5 黒褐色土 地山ブロック(2~3cm)やや少、炭化物粒子・マンガン粒少
6 暗褐色土 地山ブロック(2~3cm)多、炭化物粒子・マンガン粒少 貼床
7 暗赤褐色土 地山ブロック(1~2cm)・炭化物粒子・マンガン粒少、焼壁溝
8 灰色土 酸化鉄粒多
9 灰色土 酸化鉄粒・地山ブロック多
10 灰色土 酸化鉄粒多、地山ブロック少
11 灰色土 酸化鉄粒・地山粒多
12 黒灰色土 地山粒多 15層まで類方
13 暗灰色土 地山大ブロック少
14 灰白色土 暗灰色ブロック多
15 黒灰色土 地山粒・地山ブロック多

第73図 第8・9号住居跡

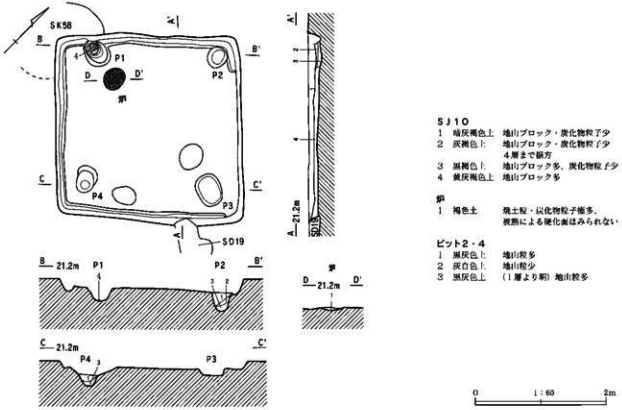
第74図 第9号住居跡出土遺物

第9号住居跡出土遺物観察表 (第74図)

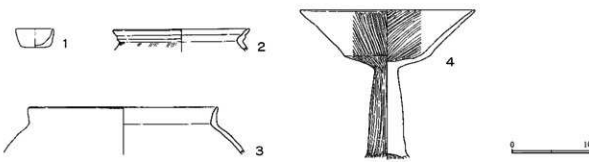
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坩台		5.1	10.6	ACGHIJK	普	橙褐色	85	器面は荒れている 赤彩か
2	台付甕		6.3	9.1	AHIJ	普	明橙褐色	60	風化著しい

第10号住居跡（第75・76図）

I-J-35グリッドに位置する。第58号土壙・第19号溝跡に切られている。住居の規模は2.86×2.85mのほぼ正方形で、コーナー部分に丸みをもたない。床面までの深さは17cm、長軸方向はN-44°-Wを指す。P1～4は柱穴と思われる。各ピットの規模は、P1が径44×38cm、深さ20cm、P2が径32×28cm、深さ27cm、P3が径47×37cm、深さ10cm、P4は32×27cm、深さ27cmである。P1付近に35×29cmの炉が検出されているが、焼け方は弱いものである。東側の1辺を除いて、幅13～20cm、深さ5～10cm程の周壁溝が巡っている。土器片が少数出土しているが、図化し得たのは4点であった。



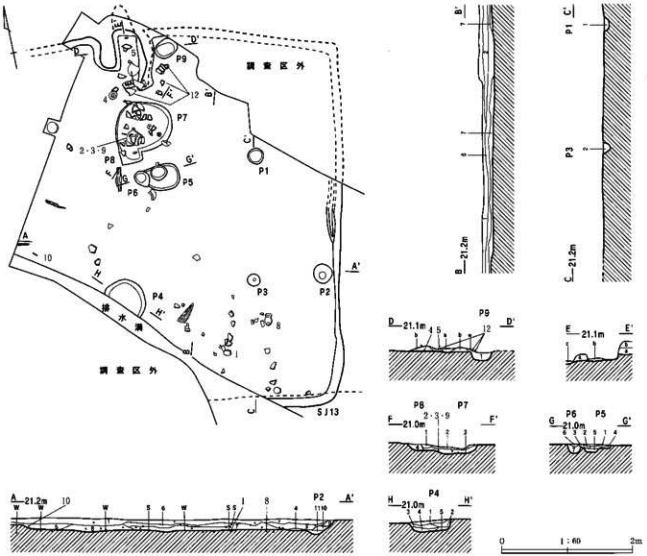
第75図　第10号住居跡



第76図　第10号住居跡出土遺物

第10号住居跡出土遺物観察表　(第76図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	手捏ね	3.9	1.9	2.8	ACIJ	普	黒褐色	60	
2	台付甕	(14.0)	2.3		AHIJK	不	白橙色	15	器面は荒れている
3	甕	(19.3)	4.8		ACEGHIJ	不	白灰色	10	器面風化のため整形見えず　二次被熱
4	高坏	(18.0)	15.2		ACEHIJ	良	暗褐色	45	



SJ12
1 暗灰褐色土　地山粒少、炭化物粒子・焼土粒微量
2 暗茶褐色土　地山粒・炭化物粒子多、マンガン粒微量
3 黒灰褐色土　地山粒・炭化物粒子少
4 暗灰褐色土　地山粒・炭化物粒子微量
5 暗灰褐色土　地山粒・炭化物粒子多、マンガン粒微量
6 暗灰褐色土　地山粒多、炭化物粒子微量
7 黒灰褐色土　地山粒多、地山ブロック(0.5cm)微量
8 暗灰褐色土　地山粒多、炭化物粒子少、マンガン粒微量
9 暗茶褐色土　地山粒微量
10 暗灰褐色土　地山粒少 (P2)
11 黒灰褐色土　地山ブロック(1cm)微量、地山粒多 (P2)

カマド
a 茶褐色土　焼土粒・炭化物粒子少
b 橙褐色土　焼土層中に茶褐色土ブロック(0.5～1cm)・炭化物粒子少
c 黒灰褐色土　灰層

ピット1・3　C－C'
1 黒灰褐色土　地山ブロック(1cm)微量、地山粒多
2 暗灰褐色土　地山粒多、マンガン粒微量

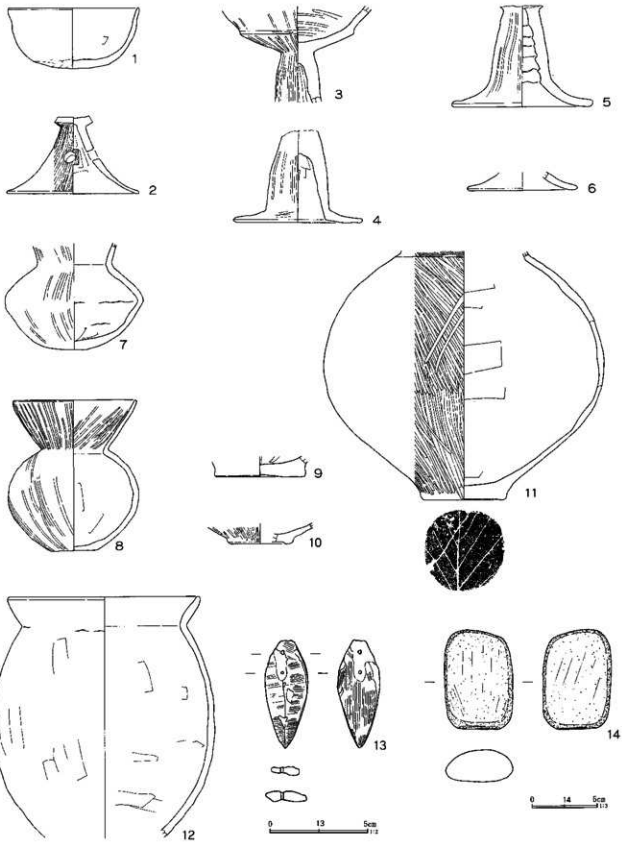
ピット4　H－H'
1 明灰褐色土　地山ブロック(1cm)・地山粒・炭化物粒子少
2 明灰褐色土　地山粒・炭化物粒子微量
3 明灰褐色土　地山ブロック(1cm)微量、地山粒多、マンガン粒少
4 暗灰褐色土　地山ブロック多、地山粒多、マンガン粒微量
5 暗黄褐色土　地山ブロック(0.5～1cm)多

ピット5・6　G－G'
1 暗灰褐色土　地山ブロック(1cm)・地山粒微量
2 灰褐色土　地山ブロック(2～3cm)多
3 暗灰褐色土　地山粒多
4 灰褐色土　地山粒多
5 明褐色土　地山粒少
6 暗灰褐色土　地山粒微量
7 灰褐色土　地山粒・マンガン粒少

ピット7・8　F－F'
1 暗灰褐色土　地山ブロック(1cm)・炭化物粒子少、地山粒多
2 暗灰褐色土　地山ブロック(1cm)・マンガン粒・黒色土粒子少、地山粒多
3 暗灰褐色土　地山粒・黒色土粒子多、マンガン粒少
4 暗灰褐色土　地山ブロック(1cm)・マンガン粒少、地山粒多

ピット9
1 黒灰褐色土　灰層中に焼土ブロック(0.5～1cm)少

第79図　第12号住居跡



第80図　第12号住居跡出土遺物

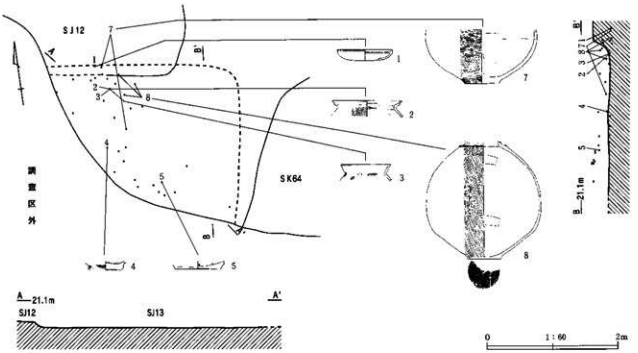
第12号住居跡出土遺物観察表　(第80図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	鉢	13.5	6.0		ACEGHIJ	普	明褐色	80	器面は風化著しい
2	高坏		7.8	(13.6)	ACHIJK	普	橙褐色	40	
3	高坏		9.9		AGHIJ	普	明褐色	35	風化著しい
4	高坏		9.4	13.1	ACHIJ	普	明褐色	95	
5	高坏		10.3	14.3	ACGHIJ	普	明褐色	90	
6	高坏		1.8	(11.2)	AEGHIJ	普	褐色	20	器面は風化著しく器形不明
7	坩		10.8		AEGHIJ	普	明褐色	90	器面は荒れている
8	坩	12.7	15.3	4.5	ACGHIJ	普	明褐色	90	器面は荒れている
9	壺		2.0	9.2	ACEGHIJ	普	褐色	95	
10	壺		2.1	(6.8)	AGIJK	不	暗灰色	25	風化著しい
11	甕		25.4	8.4	GHIJ	普	白橙色	70	赤彩か
12	甕	19.8	24.6		AEGHI	普	明褐色	65	器面は風化
13	剥形模造品	現存長5.6×幅2.2×厚0.6cm　孔径0.2　重量7.7g　滑石製　95%							
14	滑石	現存長7.6×幅5.3×厚3.05cm　重量172.5g　砂岩製　完形							

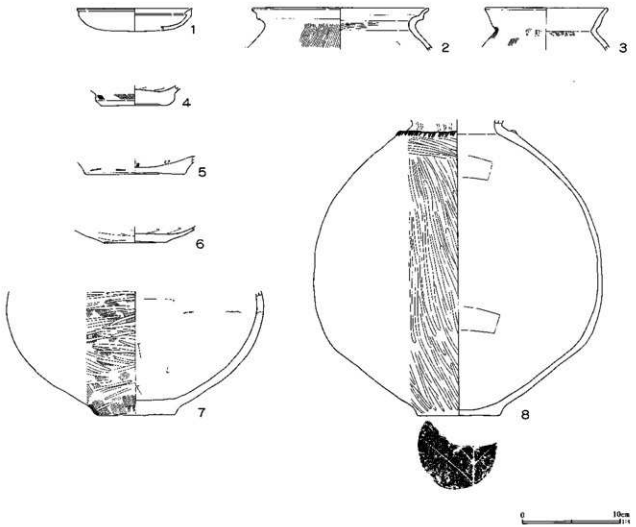
第13号住居跡（第81・82図）

L－38グリッドに位置する。第12号住居跡に切られる。この一帯は遺構の密集度が高いため、調査終了後、そのままスロープごと埋め戻してしまうのではなく、埋め戻し直前に、重機でスロープ部分の除去作業を試みた。その結果、スロープ下から検出されたのが本住居跡である。そのため、遺物の出土状況の写真撮影と、遺物の一括取り上げ、および住居プランの大まかな記録をとることができたのみであった。住居跡は、北東のコーナー付近が検出されたのみで、大部分は調査区外に位置しており、規模は不明である。確認面から、床面までの深さは5cm程で、調査区境界線の土層断面にみられる壁面の立ち上がりも同様であった。発掘調査の開始以前の段階で、既にこの住居跡は、床面の手前まで失われていたと考えられる。床面は地山ブロックを多く混入した貼床である。

遺物は、いずれも床面直上から、比較的のまとまった状態で出土した。その中から、図化し得た遺物は8点である。



第81図　第13号住居跡



第82図　第13号住居跡出土遺物

第13号住居跡出土遺物観察表　(第82図)

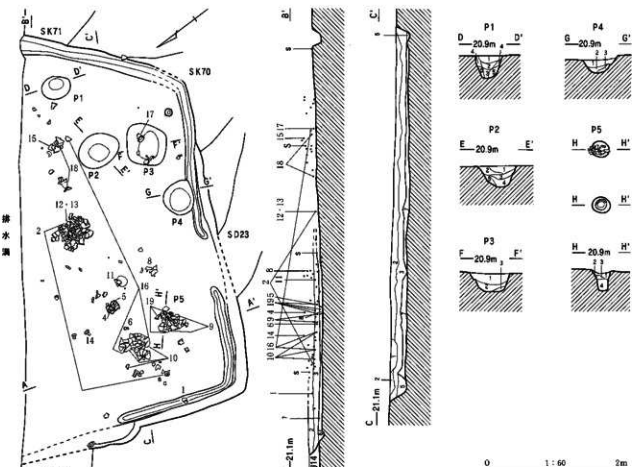
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	碗か	(11.8)	2.2		AGHIJ	普	茶褐色	25	風化著しい
2	台付甕	(18.2)	4.3		ACHIJK	普	白橙色	15	
3	甕	(12.6)	4.3		AGHIJK	普	明橙褐色	15	
4	壺		1.9	6.9	AHIJK	普	明褐色	90	
5	壺		1.8	10.2	AEGHIJ	普	赤褐色	85	
6	壺		1.7	6.5	AGHIJ	普	明橙褐色	65	
7	甕		12.7	8.3	ACGHIJK	普	白橙色	35	風化著しい
8	壺		30.1	8.3	AGHIJ	普	橙褐色	55	

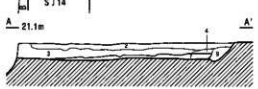
第15号住居跡（第83・84図）

L・M－39グリッドに位置する。住居の北側部分は、調査区外に続く。第14号住居跡・第23号溝跡を切り、第70・71号土壙を切っていると思われる。住居の規模は、東西6.35mであるが、南北3.50mまで調査できたのみである。平面形は北側に開く台形を呈すると思われる。床面までの深さは10cm、貼床の厚さは5～10cm程である。ほぼ全面が貼床で、比較的しっかりとしており、壁面の立ち上がりも明瞭である。5本のピットが検出されているが、明確に柱穴と思われるものは確認されなかった。ピットの規模は、P1が径45×37cm、深さ35cm、P2が径65×50cm、深さ33cm、P3が径70×60cm、深さ25cm、P4が径57×46cm、深さ20cm、P5が

径27×25cm、深さ30cmを測る。

周壁溝は幅10～20cm、深さ5～13cm程である。周壁溝は、西側全体に巡っているのが確認されたが、調査の過程で失われてしまった。調査し得た範囲内では、炉・貯蔵穴は検出されなかった。多数の土器片が床面から若干浮いた状態で出土したが、図化し得たのは19点であった。





SJ15
1 暗褐色土　地山ブロック(0.5cm)少、炭化物粒子・焼土ブロック微量、鉄分・マンガン粒多
2 暗褐色土　地山ブロック(1～5cm)・炭化物粒子微量、鉄分・マンガン粒多
3 黒褐色土　地山ブロック(1～3cm)・鉄分・焼土ブロック少、炭化物ブロック(0.5～2cm)多
4 黒褐色土　地山ブロック少、炭化物粒子微量、鉄分・マンガン粒多
5 黒褐色土　地山ブロック(1cm)・鉄分中多
6 黒褐色土　地山ブロック(1～1.5cm)少、焼土ブロック微量
7 青灰色土　地山ブロック(1～4cm)多　貼床
8 黒褐色土　地山粒微量
9 黒褐色土　地山ブロック(1～1.5cm)・鉄分少

ピット1
1 黒灰色土　粘土ブロック(1～2cm)・炭化物ブロック(0.5cm)少
2 黒灰色土　粘土ブロック(1～2cm)・炭化物粒子少
3 暗灰色土　粘土ブロック(1～2cm)多、炭化物ブロック(0.5cm)少
4 暗灰色土　粘土ブロック(0.5～1cm)多
5 暗灰色土　粘土ブロック(0.5～3cm)多、炭化物粒子少

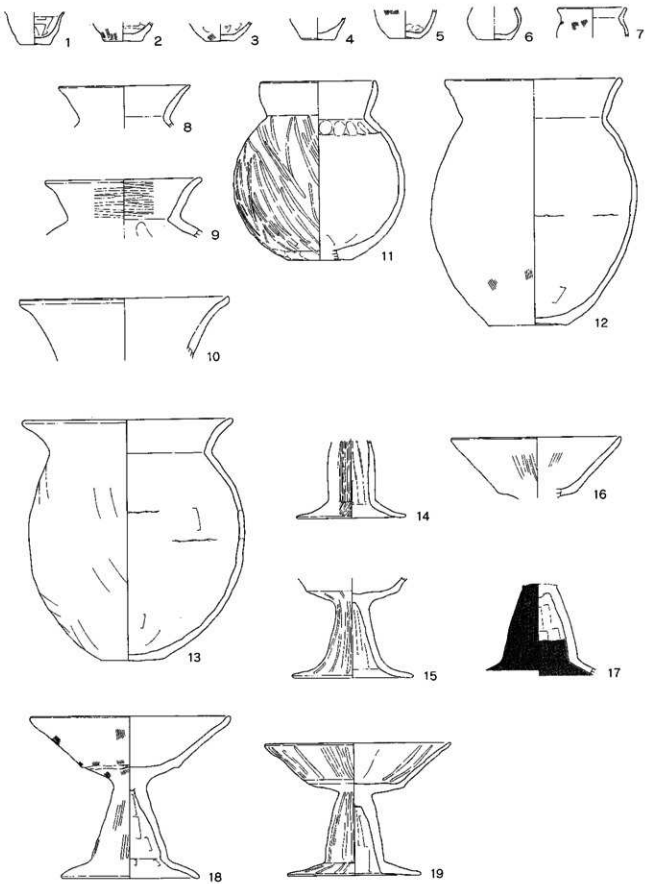
ピット2
1 黒褐色土　地山ブロック(0.5～1cm)・鉄分・マンガン粒少、炭化物ブロック(0.5cm)微量
2 黒褐色土　地山ブロック(0.5～3cm)・鉄分・マンガン粒多、炭化物粒子微量
3 黒褐色土　地山ブロック(0.5～1cm)多、鉄分・マンガン粒少
4 暗褐色土　地山ブロック(0.5～1.5cm)・鉄分・マンガン粒多
5 暗褐色土　地山ブロック多・鉄分・マンガン粒少

ピット3
1 黒灰色土　粘土ブロック(0.5cm)・炭化物ブロック(0.5～1cm)少
2 黒灰色土　粘土ブロック(0.5～1cm)微量、炭化物粒子少
3 暗灰色土　粘土ブロック(0.5～1cm)少

ピット4
1 黒色土　白色粘土ブロック(0.5cm)・炭化物ブロック(0.5cm)多
2 黒灰色土　白色粘土ブロック(0.5～1cm)やや多、炭化物ブロック(0.5cm)少
3 暗灰色土　白色粘土ブロック(2～3cm)多、炭化物ブロック少

ピット5
1 黒褐色土　地山ブロック(0.5～2cm)多、鉄分少
2 青灰色土　地山ブロック多
3 青灰色土　地山ブロック多
4 黒褐色土　地山ブロック多、炭化物粒子・鉄分少

第83図　第15号住居跡



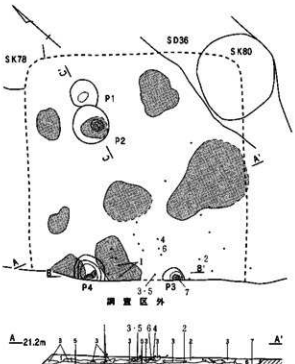
第84図　第15号住居跡出土遺物

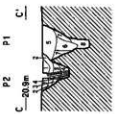
第15号住居跡出土遺物観察表 (第84図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	手捏ね		3.3	3.0	ACHIJ	普	明褐色	80	
2	小型壺		2.0	4.0	AGHIJ	普	暗灰色	75	
3	坩		1.9	2.9	AEHIJ	普	黒褐色	75	
4	手捏ね		2.3	3.2	AEIJ	普	褐色	60	内外面に黒斑
5	手捏ね		2.9	3.0	AHIJK	普	褐色	65	器面は荒れている
6	小型壺		3.4	3.3	AGHIJ	普	明褐色	40	
7	小型壺	(7.1)	3.1		GHIJ	普	明褐色	15	
8	坩か	(13.5)	4.3		ACGHIJ	普	橙褐色	20	器面は風化著しい
9	壺	(16.0)	6.0		AGHIJ	普	暗褐色	10	器面は風化している
10	壺	21.2	6.3		AGHIJK	普	暗茶褐色	40	器面は風化著しい
11	壺	(11.8)	18.2	6.6	AGHI	良	褐色	80	外面黒斑
12	甕	18.0	25.1	8.0	ACGHIJ	普	黒褐色	70	胴部外面煤付着多
13	甕	21.5	24.5	6.5	AEGHIJ	普	橙褐色	80	器面荒れている 胴部外面黒斑 煤付着
14	高坏		8.0	(11.0)	ACHIJK	良	明褐色	45	
15	高坏		10.3	(12.4)	ACHIJ	普	褐色	35	
16	高坏	(17.2)	6.3		AGHIJ	普	茶褐色	20	器面は風化著しい
17	高坏		9.4		ACGHIJ	普	赤褐色	85	赤彩
18	高坏	(20.5)	16.5	14.1	ADEGHI	普	褐色	55	脚部煤付着
19	高坏	18.9	13.5	13.7	AEGHK	不	明褐色	80	器面風化著しい

第16号住居跡 (第85・86図)

O・P−42グリッドに位置する。第78号土壙を切るが、第80号土壙と第36号溝跡に切られていると思われる。貼床面の直上に、焼土・炭化物が分布し、





SJ16

1 明褐色土 焼土ブロック(0.5cm)多、炭化物粒子少 焼土塊
2 明褐色土 焼土ブロック(0.1～1cm)・鉄分・マンガン粒多、炭化物粒子少
3 暗褐色土 炭化物粒子・焼土ブロック(0.5～1cm)・鉄分・マンガン粒少
4 黒褐色土 粘土ブロック(0.5～5cm)・鉄分・マンガンブロック(0.5～2cm)多、炭化物ブロック(0.5～2cm)少
5 明褐色土 粘土ブロック多、鉄分・マンガンブロック(0.5～2cm)少
6 灰白色土 粘土層中に炭化物粒子少、鉄分多
7 明灰色土 焼土ブロック・鉄分・マンガン粒微量

ピット1・2

1 明褐色土 地山ブロック(2～3cm)多、マンガンブロック(0.5cm)少 柱穴
2 暗灰褐色土 地山粒少
3 暗灰褐色土 地山ブロック(1cm)・地山粒少
4 黒灰褐色土 地山粒少
5 暗灰褐色土 地山ブロック(1cm)微量、地山粒多
6 黒灰褐色土 地山ブロック(1～2cm)少、地山粒多
7 暗灰褐色土 地山ブロック(3～4cm)多、炭化物ブロック(3～4cm)微量
8 黒灰褐色土 地山ブロック(2～3cm)・地山粒多

ピット3・4

1 明褐色土 地山ブロック(0.5～1.5cm)・焼土ブロック(0.5cm)・鉄分・炭化物粒子少 貼床
2 暗褐色土 地山ブロック(1～4cm)・鉄分・マンガン粒多、焼土ブロック(0.5cm)・炭化物粒子微量 柱穴
3 黒褐色土 地山ブロック(0.5cm)・焼土ブロック(0.5cm)少、炭化物粒子微量、鉄分・マンガン粒多
4 暗褐色土 地山ブロック(1～4cm)多、焼土ブロック・炭化物粒子・鉄分少
5 暗褐色土 地山ブロック(0.5～2cm)・焼土ブロック微量、炭化物ブロック(0.5～1cm)・鉄分少
6 褐褐色土 地山ブロック(0.5～5cm)多、焼土ブロック微量、炭化物粒子・鉄分少
7 暗褐色土 地山ブロック(0.5～1cm)・鉄分・マンガン粒少、焼土ブロック多
8 暗褐色土 地山ブロック(0.5～7cm)多、焼土ブロック・炭化物粒子微量、鉄分少
9 黒褐色土 地山ブロック(0.5～1cm)・焼土ブロック微量
10 青灰色土 地山ブロック(2～3cm)多、鉄分少

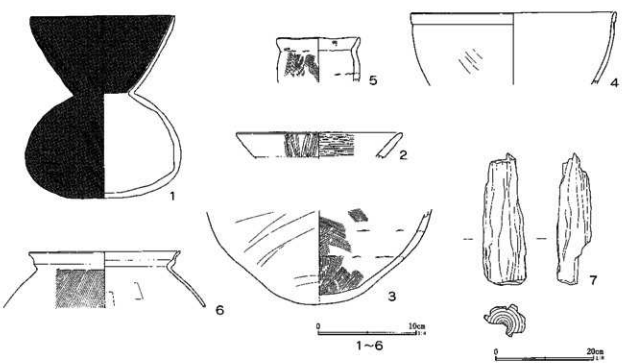
0 1:60 2m

第85図 第16号住居跡

その範囲内に土器片のまとまりがみられるという状態であったが、住居跡のプランは確定できなかった。住居の推定範囲内にピットが4本検出された。P1は、その断面形や土層からみて柱穴と考えられる。P2からは、腐食のため取り上げには至らなかったが、径10cm、長さ30cm程の木材が直立した状態で検出された。P1から建て替えられた柱穴と推定される。P3からは径4.4cm、長さ13.2cmの木材(第86図7)が出土しており、柱材と思われる。P4の底面からは、長さ25cm・幅15cm・厚さ1cmの板材が重ねられた状態で2枚出土したが、腐食が激しく遺物実測には至らなかった。柱の沈下を防ぐための礎板と推定される。各ピットの規模は、P1が径39×(45)cm、深さ72cm、P2が径58×53cm、深さ40cm、P3が径30×(30)cm、深さ45cm、P4が径47×(45)cm、深さ90cmを測る。

床面を精査したが、北東部分の柱穴は確認されなかった。床面は堅く締まっている。住居の破線は、柱穴の位置からの推定線である。調査し得た範囲内では、炉・貯蔵穴・周壁溝などは検出されなかった。

壺・甕・S字台付甕などの破片が少数出土したが、図化し得たのは土器6点と柱材1点であった。



第86図　第16号住居跡出土遺物

第16号住居跡出土遺物観察表　(第86図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	甕	(14.9)	18.5		AEGHI	普	暗赤褐色	55	器面は風化著しい　赤彩
2	壺	(17.0)	2.7		GIJK	普	暗茶褐色	25	赤彩か
3	甕		9.6		AGHIJK	普	黒褐色	35	外面煤付着
4	鉢	(21.0)	7.3		AGHIJ	普	赤橙色	15	風化著しい
5	甕	(8.6)	4.6		AGHJK	普	赤褐色	25	内面褐色　赤彩か
6	台付甕	(15.5)	5.9		EG(多)IJ	不	黒灰色	25	
7	柱材	現存長26.6×径8.7×6.6cm							

(b)土壙

古宮遺跡二面で検出された土壙は、A区62基、B区29基、C区11基の計102基である。このうち弥生時代に属する土壙は、A区10基、B区7基の計17基である。それ以外は古墳時代以降の土壙であると考えられる。

第1号土壙（第87図）

F－26グリッドに位置する。第2号土壙と共に最西端に位置する。規模は、長軸1.10m、短軸0.85m、深さ5cmで、強いて計測するならば、長軸方向はN-70°-Wである。平面形はハート形に近い。壁面の立ち上がりは緩やかで、中央部がやや窪む皿状を呈する。遺物は出土しなかった。

第2号土壙（第87図）

F・G－26グリッドに位置する。第1号土壙と共に最西端に位置する。規模は、長軸0.90m、短軸0.60m、深さ5cmで、長軸方向はN-4°-Eである。平面形はやや歪んだ楕円形に近い。壁面の立ち上がりは緩やかで、中央部がやや膨らむ皿状を呈する。遺物は出土しなかった。

第3号土壙（第87図）

G－26グリッドに位置する。規模は、長軸0.95m、短軸0.80m、深さ5cmで、強いて計測するならば長軸方向はN-28°-Wである。平面形は歪んだハート形に近く、断面形は底面が平坦な皿状を呈する。遺物は出土しなかった。

第4号土壙（第87図）

F－27グリッドに位置する。規模は、長軸1.00m、短軸0.35m、深さ8cmで、長軸方向はN-1°-Eであり、ほぼ南北方向である。平面形は長楕円形で、断面形は底面が平坦な皿状を呈する。遺物は出土しなかった。

第5号土壙（第87図）

F－27グリッドに位置する。規模は、長軸1.05m、短軸0.45m、深さ10cmで、長軸方向はN-89°-Wであり、ほぼ東西方向である。平面形は長楕円形で、断面形は底面が平坦な皿状を呈する。遺物は出土しなかった。

第6号土壙（第87図）

F－27グリッドに位置する。規模は、長軸0.60m、短軸0.50m、深さ5cmである。強いて計測するならば長軸方向はN-89°-Wであり、ほぼ東西方向である。平面形は円形に近い楕円形であるが、断面形は底面が平坦な皿状を呈する。遺物は出土しなかった。

第7号土壙（第87図）

F－27グリッドに位置する。規模は、長軸0.85m、短軸0.67m、深さ10cmである。長軸方向はN-17°-Eを指す。平面形は長楕円形。断面形は底面が平坦な皿状を呈する。遺物は出土しなかった。

第8号土壙（第87図）

F・G－27グリッドに位置する。規模は、長軸1.25m、短軸1.10m、深さ10cmであり、長軸方向はN-16°-Eを指す。平面形は隅丸長方形。断面形は底面が平坦な皿状を呈する。遺物は出土しなかった。

第9号土壙（第87図）

G－27グリッドに位置する。規模は、長軸0.75m、短軸0.60m、深さ7cmであり、長軸方向はN-55°-Wを指す。平面形は長楕円形。断面形は底面が平坦な皿状を呈する。遺物は出土しなかった。

第10号土壙（第87図）

G－27グリッドに位置する。規模は、長軸0.75m、短軸0.35m、深さ8cmであり、長軸方向はN-35°-Eを指す。平面形は長楕円形。断面形は底面が

平坦な皿状を呈す。遺物は出土しなかった。

第11号土壙（第87図）

G－27グリッドに位置する。南側は調査区外に続く。規模は、長軸1.15mであるが、短軸0.80mまでしか調査できなかった。深さは8cmであり、南北方向を主軸方向と仮定すると、長軸方向はN-2°-Eを指す。平面形は長楕円形。断面形は底面が平坦な皿状を呈す。遺物は出土しなかった。

第12号土壙（第87図）

G－28グリッドに位置する。規模は、長軸0.70m、短軸0.60m、深さ8cmであり、強いて計測するならば長軸方向はN-15°-Eを指す。平面形は円形に近い楕円形であり、断面形は底面が平坦な皿状を呈す。遺物は出土しなかった。

第14号土壙（第87図）

H－29グリッドに位置する。第1号住居跡を切る。規模は、長軸0.65m、短軸0.45m、深さ10cmであり、強いて計測するならば、長軸方向はN-58°-Wを指す。平面形は円形に近いやや歪んだ楕円形である。断面形は底面が平坦な皿状を呈す。古墳時代前期の土器片が少数出土したが、図化し得るものはなかった。

第15号土壙（第87図）

G－30グリッドに位置する。北側は調査区外に続くため、全体の規模は不明である。長軸2.30mであるが、短軸(1.25)mまで、調査できたのみである。深さ10cmで、長軸方向と平面形は不明である。断面形は、底面が平坦な皿状を呈する。遺物は出土しなかった。

第16号土壙（第87図）

G－30グリッドに位置する。規模は、長軸0.55m、短軸0.40m、深さ13cmであり、強いて計測するならば、長軸方向はN-9°-Wを指す。平面形はやや歪んだ楕円形である。底面は平坦であり、断面形は逆台形を呈す。遺物は出土しなかった。

第17号土壙（第87・95図1）

G－30グリッドに位置する。規模は、長軸0.75m、短軸0.35m、深さ10cmであり、長軸方向はN-1°-Wでほぼ南北軸である。平面形は長楕円形。底面は凹凸がみられる。図化し得たのは1点である。

第19号土壙（第88図）

G・H－30グリッドに位置する。重複するピットとの新旧関係は不明である。規模は、長軸(1.33)m、短軸0.90m、深さ25cmであり、長軸方向はN-18°-Wを指す。平面形は長楕円形、断面形は逆台形を呈する。遺物は出土しなかった。

第20号土壙（第88図）

H－30グリッドに位置する。重複する第5号溝跡との新旧関係は不明である。調査できた範囲内での規模は、長軸0.95m、短軸0.85m、深さ22cmであるが、全体の規模が不明であるため、平面形・長軸方向については不明である。断面形は皿状を呈する。遺物は出土しなかった。

第21号土壙（第88図）

H－30グリッドに位置する。重複する第5号溝跡との新旧関係は不明である。調査できた範囲内での規模は、長軸0.65m、短軸(0.40)m、深さ5cmであるが、全体の規模が不明であるため、平面形・長軸方向については不明である。断面形は皿状を呈している。遺物は出土しなかった。

第24号土壙（第88・95図2）

H－30グリッドに位置する。規模は、長軸1.30m、短軸0.90m、深さ55cmで、長軸方向はN-27°-Eである。平面形は長楕円形に近く、断面形は外側

に開くU字状を呈する。ごく少数の土器片が出土したが、図化し得たのは1点である。

第26号土壙（第88・95図3～6）

H－30グリッドに位置する。規模は、長軸2.15m、短軸1.00m、深さ15cmで、長軸方向はN-74°-Wを指す。平面形は隅丸の長方形に近い不整形を呈する。底面は、窪む部分と平坦な部分とがあり、壁面は緩やかに立ち上がる。少数の土器片が出土したが、図化し得たのは4点である。

第28号土壙（第88図）

H－30グリッドに位置する。規模は、長軸1.10m、短軸0.75m、深さ7cmで、長軸方向はN-64°-Wを指す。平面形は西側が角張る長楕円形、断面形は皿状を呈する。ごく少数の土器片が出土したが、図化し得るものはなかった。

第31号土壙（第88図）

I－31グリッドに位置する。規模は、長軸0.60m、短軸0.60m、深さ7cm。平面形はほぼ円形、断面形は皿状を呈する。遺物は出土しなかった。

第32号土壙（第88・95図7～12）

H－31グリッドに位置する。規模は、長軸1.25m、短軸1.00m、深さ45cmで、長軸方向はN-21°-Eを指す。平面形はやや歪んだ長楕円形で、底面近くにテラスをもつ。中央部が窪んだU字形に近い。少数の土器片が出土したが、図化し得たのは6点である。

第33号土壙（第88図）

H－31グリッドに位置する。規模は、長軸1.00m、短軸0.80m、深さ35cmで、強いて計測するならば長軸方向はN-50°-Wである。平面形は円形に近いが、断面形は逆台形に近い。古墳時代前期の土器片がごく少数出土したが、図化し得るものはなかった。

第34号土壙（第88図）

H・I－31グリッドに位置する。規模は、長軸1.10m、短軸0.80m、深さ8cm、長軸方向はN-15°-Eである。平面形は長楕円形、断面形は皿状を呈す。遺物は出土しなかった。

第35号土壙（第88図）

H－32グリッドに位置する。第36号土壙と連結していた溝跡の可能性もある。西端部は失われている。規模は、長軸(1.35)m、短軸0.35mまで確認できた。深さ5cmで、長軸方向はN-69°-Wを指す。平面形は溝状に近い略長方形で、断面形は皿状を呈する。遺物は出土しなかった。

第36号土壙（第88図）

H－32グリッドに位置する。土壙と判断したが、第35号土壙と連結していた溝跡の可能性があり、また近接する畝状遺構の一部の可能性も考えられる。規模は、長軸1.45m、短軸0.35m、深さ10cmで、長軸方向はN-53°-Wを指す。平面形は略長方形、断面形は椀状を呈する。古墳時代前期の土器片がごく少数出土したが、図化し得るものはなかった。

第37号土壙（第89図）

H－32グリッドに位置する。北側部分を、畝状遺構の精査の段階で設けた試掘溝によって失われている。規模は、長軸1.25m、短軸1.25m、深さ30cmと思われる。平面形はほぼ円形、断面形は底面が平坦な逆台形を呈する。遺物は出土しなかった。

第39号土壙（第89図）

I－32グリッドに位置する。第8号溝跡を切り、ピットに切られていると思われる。規模は、長軸2.00m、短軸1.00m、深さ20cmであり、長軸方向はN-51°-Eを指す。平面形は隅丸長方形、断面形は底面が平坦な逆台形もしくは椀状を呈する。古墳時代前期の土器片がごく少数出土したが、図化し得

るものはなかった。

第40号土壙（第89図）

Ⅰ－32グリッドに位置する。規模は、長軸1.10m、短軸0.55m、深さ10cmで、長軸方向はN-71°-Wである。平面形は長楕円形に近い不整形、断面形は皿状を呈す。遺物は出土しなかった。

第41号土壙（第89図）

Ⅰ－31・32グリッドに位置する。第11号溝跡とピットに切られている。規模は、長軸0.95m、短軸0.70m、深さ10cmで、長軸方向はN-65°-Wである。平面形は隅丸長方形、断面形は皿状を呈す。遺物は出土しなかった。

第42号ａ土壙（第89図）

Ⅰ－33グリッドに位置する。第42号ｂ土壙を切り、２本のピットに切られていると思われる。土壙の覆土と、土壙周辺の地山の色調ときわめて類似しており、１つの土壙として掘り下げたが、結果的に２つの土壙となってしまった。規模は、長軸1.30m、短軸0.65m、深さ35cmで、長軸方向はN-45°-Eである。平面形は隅丸長方形、断面形は箱形を呈す。遺物は出土しなかった。

第42号ｂ土壙（第89図）

Ⅰ－33グリッドに位置する。第７号住居跡と第42号ａ土壙、および２本のピットに切られている。周辺の地山の色調がきわめて似ており、１つの土壙として掘り下げていたが、結果的に２つの土壙となってしまった。規模は、長軸1.30m、短軸0.95m、深さ20cmで、長軸方向はN-60°-Wである。平面形は隅丸長方形と推定され、断面形は皿状を呈す。遺物は出土しなかった。

第43号土壙（第89・95図13・14）

Ⅰ－32・33グリッドに位置する。第44・46号土壙を切る。規模は、長軸1.10m、短軸0.80m、深さ20cmで、長軸方向はN-86°-Eを指す。平面形は隅丸長方形に近い。底面は平坦で、壁面の立ち上がりは緩やかで、外側に広がるU字状を呈する。少数の土器片が出土したが、図化し得たのは１点である。

第44号土壙（第89図）

Ⅰ－33グリッドに位置する。第46号土壙を切り、第43号土壙に切られている。規模は、長軸0.55m、短軸0.30m、深さ10cmで、長軸方向はN-8°-Wである。平面形は長楕円形、断面形は皿状と推定される。遺物は出土しなかった。

第45号土壙（第89図）

Ⅰ－33グリッドに位置する。第１号掘立柱建物跡のＰ４に切られている。規模は、長軸0.60m、短軸0.55m、深さ33cmで、長軸方向はN-30°-Wと推定される。壁面の立ち上がりは比較的急であり、断面形は逆台形に近い。平面形は長楕円形を呈すと思われる。遺物は出土しなかった。

第47号土壙（第89図）

Ⅰ－33グリッドに位置する。第７号住居跡に切られていると思われるが、第８号溝跡との新旧関係については捉えられなかった。規模は、長軸1.05m、短軸0.75m、深さ10cmで、長軸方向はN-25°-Eである。平面形は隅丸長方形で、断面形は箱形に近い。遺物は出土しなかった。

第48号土壙（第89図）

Ⅰ－33グリッドに位置する。規模は、長軸0.65m、短軸0.65m、深さ10cmを測る。平面形は円形、断面形は底面が平坦な皿状を呈す。遺物は出土しなかった。

第49号土壙（第89図）

Ⅰ－33グリッドに位置する。第50号土壙と隣接し、第51・52号土壙に近接している。規模は、長軸0.87m、短軸0.53m、深さ23cmで長軸方向はN-80°-Wである。平面形は長楕円形、底面が平坦であり、断面形は逆台形を呈す。古墳時代前期の土器片が少数出土したが、図化し得るものはなかった。

第50号土壙（第89・96図15・16）

Ⅰ－33・34、Ｊ－33グリッドに位置する。第49号土壙に隣接し、第52号土壙に近接している。第51号土壙に切られている。規模は、長軸0.94m、短軸0.65m、深さ15cmであるが、欠損部分はさらに深くなると推定される。遺存部分からみた長軸方向はN-30°-Eである。平面形は楕円形、断面形は皿状を呈すと思われる。少数の土器片が出土したが、図化し得たのは2点であった。

第51号土壙（第89・96図17）

Ⅰ・Ｊ－33・34グリッドに位置する。第49・52号土壙に隣接し、さらに第50号土壙を切っている。規模は、長軸1.85m、短軸1.05m、深さ45cm、長軸方向はN-83°-Eで、平面形は隅丸長方形、断面形はＵ字状を呈す。ごく少数の土器片が出土したが、図化し得たのは1点であった。

第52号土壙（第90図）

Ⅰ－33・34グリッドに位置する。第49～51号土壙と隣接している。規模は、長軸0.80m、短軸0.60m、深さ25cm、長軸方向はN-30°-Wで、平面形は楕円形、断面形は底面が平坦な逆台形を呈す。遺物は出土しなかった。

第53号土壙（第90図）

Ⅰ－34グリッドに位置する。規模は、長軸0.80m、短軸0.80m、深さ15cm、平面形は円形、断面形は底面が平坦な皿状を呈す。遺物は出土しなかった。

第54号土壙（第90図）

Ⅰ－34グリッドに位置する。第55号土壙に切られていると思われる。規模は、長軸0.45m、短軸0.40m、深さ5cm、平面形は隅丸長方形、断面形は底面が平坦な皿状を呈すると推定される。遺物は出土しなかった。

第55号土壙（第90図）

Ⅰ－34グリッドに位置する。第54号土壙を切っていると思われる。規模は、長軸1.35m、短軸0.40m、深さ7cmで、長軸方向はN-52°-Wである。平面形は隅丸長方形、断面形は底面が平坦な皿状を呈する。遺物は出土しなかった。

第56号土壙（第90図）

Ⅰ・Ｊ－34グリッドに位置する。ピットに切られている。規模は、長軸1.45m、短軸0.45m、深さ8cm、長軸方向はN-63°-Wである。平面形はやや歪んだ隅丸長方形、断面形は底面が平坦な皿状を呈する。遺物は出土しなかった。

第57号土壙（第90図）

Ⅰ－34グリッドに位置する。規模は、長軸0.90m、短軸0.73m、深さ15cm、長軸方向はN-88°-Eである。平面形は楕円形、断面形は底面が平坦な皿状を呈す。古墳時代前期の土器片がごく少数出土したが、図化し得るものはなかった。

第58号土壙（第90図）

Ⅰ・Ｊ－34・35グリッドに位置する。第10号住居跡を切っている。規模は、長軸1.55m、短軸(1.20)m、深さ10cm、長軸方向はN-3°-Wである。平面形は隅丸長方形、断面形は底面が平坦な皿状を呈す。遺物は出土しなかった。

第59号土壙（第90図）

J－35グリッドに位置する。第60号土壙と近接している。第20号溝跡と重複するが、新旧関係を捉えることはできなかった。規模は、長軸1.10m、短軸(0.75)m、深さ8cm、長軸方向はN-3°-Wである。平面形は長楕円形、断面形は底面が平坦な皿状を呈す。遺物は出土しなかった。

第60号土壙（第90図）

J－35グリッドに位置する。第59号土壙と近接している。規模は、長軸0.85m、短軸0.65m、深さ10cmを測る。強いて計測するならば、長軸方向はN-35°-Wとなる。平面形は楕円形、断面形は底面が平坦な皿状を呈す。遺物は出土しなかった。

第61号土壙（第90図）

J－35グリッドに位置する。南側は調査区外に続く。規模は、長軸2.00m、短軸(1.15)m、深さ10cmを測る。全体の規模が不明であるため、長軸方向は計測できない。断面形は底面が平坦な皿状であるが、平面形については楕円形もしくは長楕円形と推定される。遺物は出土しなかった。

第62号土壙（第90・96図18～24）

I－34グリッドに位置する。排水溝に接しているが、土壙の形態を捉えることができた。規模は、長軸2.45m、短軸1.45m、深さ35cm、長軸方向はN-35°-Eである。平面図上では、土壙が2基重複しているような表現であるが、底面の起伏が図化されていることによるものである。平面形は隅丸長方形、断面形は凹凸の多い皿状を呈す。古墳時代前期の土器片がごく少数出土したが、図化し得たのは7点であった。

第64号土壙（第91・97～99図1～31）

L－38グリッドに位置する。南側は調査区外に続く。他の遺構との重複はない。規模は、長軸2.60mであるが、短軸2.25mまで確認できたのみであり、深さは35cmを測る。断面形は立ち上がりの緩やかな溝状を呈す。コーナーの切れる方形周溝墓の西辺または東辺の北端部の可能性もあるが、調査面積が狭く全容がつかめないため、土壙として扱った。その場合、主軸方向はN-29°-Eである。

今回の調査において、最も出土遺物の多い土壙であった。遺物の大多数は、土壙底面から浮いた状態で出土している。図化できた遺物は、土器29点と石製品2点の計31点であった。

第65号土壙（第91図）

L－38グリッドに位置する。第64・67号土壙と隣接する。南側は調査区外に続く。規模は、長軸(1.05)m、短軸0.95m、深さ16cm、現状からみた長軸方向はN-28°-Eである。平面図上では、土壙が2基重複しているような表現であるが、底面の起伏が図化されていることによるものである。平面形は隅丸長方形、断面形は凹凸の多い皿状を呈す。古墳時代前期の土器片がごく少数出土したが、図化し得るものはなかった。

第66号土壙（第91図）

L－38グリッドに位置する。規模は、長軸0.75m、短軸0.50m、深さ35cm、長軸方向はN-21°-Eである。平面形は長楕円形、断面形は逆台形を呈す。遺物は出土しなかった。

第67号土壙（第91・99図32～35）

L－38・39グリッドに位置する。土壙の南部分は調査区外に続く。調査し得た範囲内での規模は、長軸2.10m、短軸0.70m、深さ30cmである。全体の規模が不明であるため、平面形態や長軸方向は不明である。壁面の立ち上がりは緩やかで、底面も軽く窪む程度である。ごく少数の土器片が出土したが、図化し得たのは4点である。

第68号土壙（第91図）

M－39グリッドに位置する。南側は調査区外に続く。規模は、長軸0.55mであるが、短軸については0.35mまで確認できたのみである。深さ15cm、長軸方向は不明である。平面形は長楕円形または楕円形であろうか。断面形は、底面が平坦な逆台形を呈する。遺物は出土しなかった。

第69号土壙（第91図）

M－40グリッドに位置する。規模は、長軸0.60m、短軸0.50mで東西軸がわずかに大きい。深さ40cmである。長軸方向はN-77°-Eである。平面形は楕円形、断面形はU字形を呈す。遺物は出土しなかった。

第70号土壙（第91図）

M－39グリッドに位置する。第15号住居跡・第23号溝跡に切られていると思われる。現状での規模は、長軸(1.48)m、短軸1.30m、深さ15cmで、長軸方向は不明である。平面形、断面形とも現状からは判断できなかった。底面には凹凸がみられる。遺物は出土しなかった。

第71号土壙（第91図）

M－39グリッドに位置する。第15号住居跡・排水溝に切られている。現状での規模は、長軸(2.00)m、短軸(1.48)m、深さ25cmで、長軸方向は不明である。現状からでは平面形・断面形とも判断できなかった。古墳時代前期の土器片がごく少数出土しているが、図化し得るものはなかった。

第72号土壙（第91図）

M－40グリッドに位置する。遺構の大部分が調査区外に位置した状態である。現状から土壙として扱ったが、住居跡・溝跡等の可能性もある。検出できた範囲内での規模は、長軸2.75m、短軸0.33m、深さ20cm。平面形は判断できなかった。断面形は、底面が平坦に近い逆台形を呈すると思われる。遺物は出土しなかった。

第74号土壙（第92図）

N－41グリッドに位置する。この周囲は、微地形として小規模な谷の底面に相当していると思われる。そのため、当時の地表面（一面）の位置がほかの地点に比べて二面に近かったと考えられる。そのため、一面の第210号土壙の底面が二面に及んでおり、第74号土壙を切っている。規模は、長軸0.85m、短軸0.85m、深さ10cm。平面形はほぼ円形、断面形は、底面が平坦な皿状を呈する。遺物は出土しなかった。

第75号土壙（第92図）

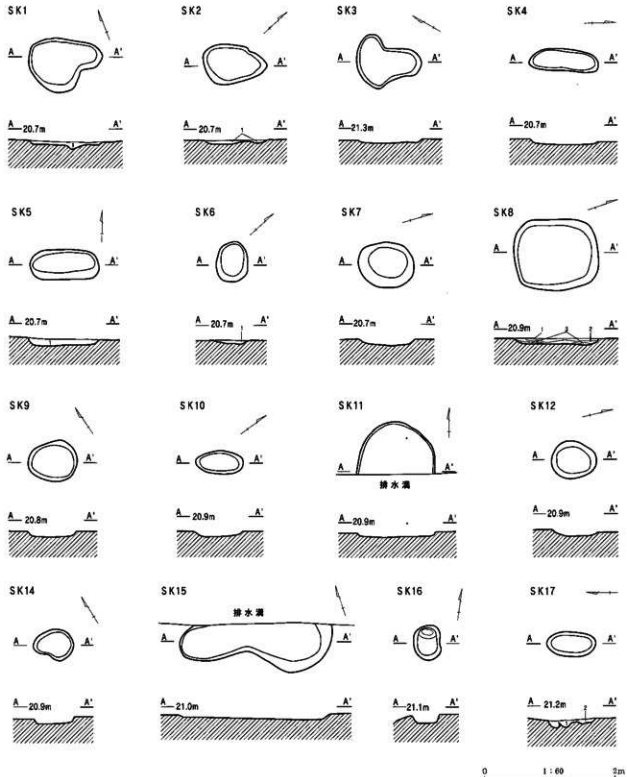
O－42グリッドに位置する。ピットに切られている。規模は、長軸1.40m、短軸0.80m、深さ20cm、長軸方向はN-10°-Eである。平面形は長楕円形、断面形は一部窪みがあるものの、立ち上がりの急な逆台形を呈すると思われる。遺物は出土しなかった。

第76号土壙（第92・99図36）

N－42グリッドに位置する。土壙の大部分は調査区外に位置している。調査し得た範囲内での規模は、長軸3.40m、短軸0.57m、深さ40cmである。全体の規模が不明であるため、平面形態や長軸方向は不明である。壁面の立ち上がりは緩やかで、底面は比較的平坦である。ごく少数の土器片が出土したが、図化し得たのは1点であった。

第79号土壙（第92図）

O－42グリッドに位置する。南側は調査区外に続く。規模は、長軸(1.35)mであるが、短軸0.60mまで確認できたのみである。深さ10cm、長軸方向はN-45°-Eである。平面形は長楕円形、断面形は皿状を呈すると推定される。遺物は出土しなかった。



SK1
1 暗灰色土 酸化鉄ブロック・地山ブロック・地山粒多 粘土質

SK2
1 黒灰色土 酸化鉄ブロック・地山ブロック・地山粒少 粘土質

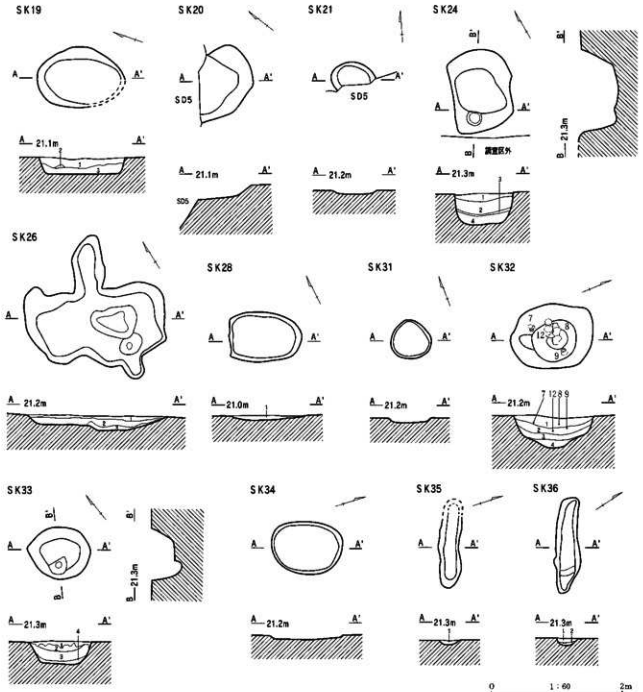
SK5
1 暗灰色土 酸化鉄ブロック・地山ブロック・地山粒やや多 粘土質

SK6
1 黒灰色土 酸化鉄ブロック・地山ブロック・地山粒やや少 粘土質

SK8
1 暗灰褐色土 地山ブロック(0.5~1cm)・炭化物粒子少、鉄分・マンガン粒多
2 暗黄褐色土 地山ブロック(0.5~2cm)やや多、鉄分・マンガン粒少
3 黄褐色土 地山ブロック層中に炭化物粒子・鉄分・マンガン粒少

SK17
1 黒褐色土 地山ブロック(0.5~1cm)・炭化物粒子少
2 暗褐色土 地山ブロック(0.5~1cm)やや多

第87図 土壙(4)



SK19
1 暗褐色土　炭化物粒子・焼土粒微量、マンガン粒少
2 褐色土　炭化物粒子やや多、焼土粒・粘土ブロック(0.5～1cm)少
3 暗黄褐色土　炭化物粒子少

SK24
1 黒灰色土　酸化鉄粒・地山粒多、炭化物粒子少
2 黒灰色土　酸化鉄ブロック・地山ブロック多
3 黒灰色土　黄色土ブロック多
4 黒灰色土　酸化鉄ブロック少、地山粒多

SK26
1 暗灰褐色土　地山粒・炭化物ブロック・炭化物粒子少
2 暗黒褐色土　地山ブロック多、炭化物ブロック・炭化物粒子少
3 黄灰褐色土　地山ブロック多

SK28
1 暗褐色土　地山ブロック多

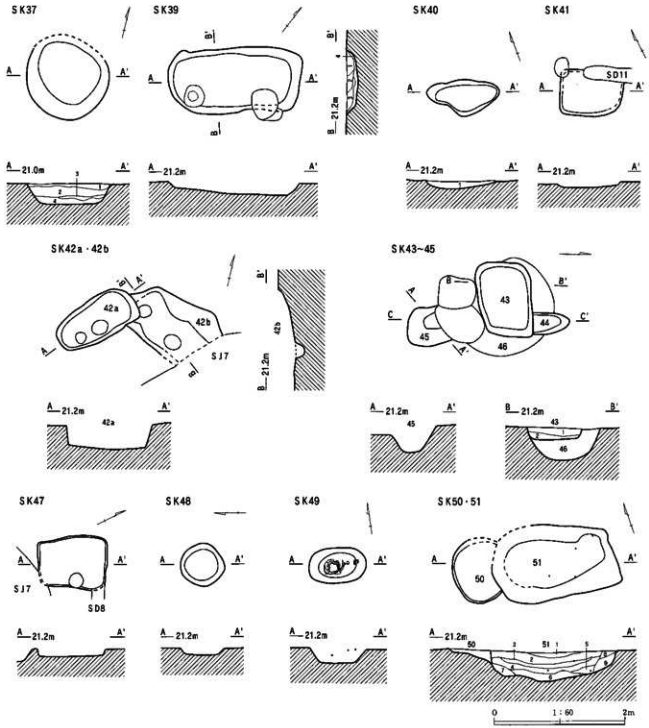
SK32
1 灰色土　酸化鉄ブロック・地山粒多、炭化物粒子若干　粘土質
2 黒灰色土　地山粒多、炭化物粒子微量　粘土質
3 黒灰色土　地山ブロック多　粘土質
4 灰白色土　黒灰色ブロック多　粘土質

SK33
1 暗黒褐色土　地山ブロック(0.5～2cm)少、鉄分・マンガン粒多
2 暗灰色土　地山ブロック(0.5～2cm)・鉄分・マンガン粒やや多
3 暗灰色土　地山ブロック(0.5～1cm)少、鉄分・マンガン粒やや多
4 褐灰色土　粘土ブロック層中に地山ブロック(0.5～1cm)少

SK35
1 黒灰色土　酸化鉄粒・地山粒多　粘土質

SK36
1 黒灰色土　酸化鉄粒・地山粒多　粘土質
2 灰色土　地山ブロック多

第88図　土壙(5)



SK37
1 暗茶褐色土　鉄分多
2 灰黒色土　粘土ブロック(0.5～1cm)・炭化物粒子少
3 黒灰色土　粘土ブロック(0.5～1cm)微量、炭化物粒子やや多
4 暗灰褐色土　粘土ブロック(1～2cm)多、炭化物粒子少

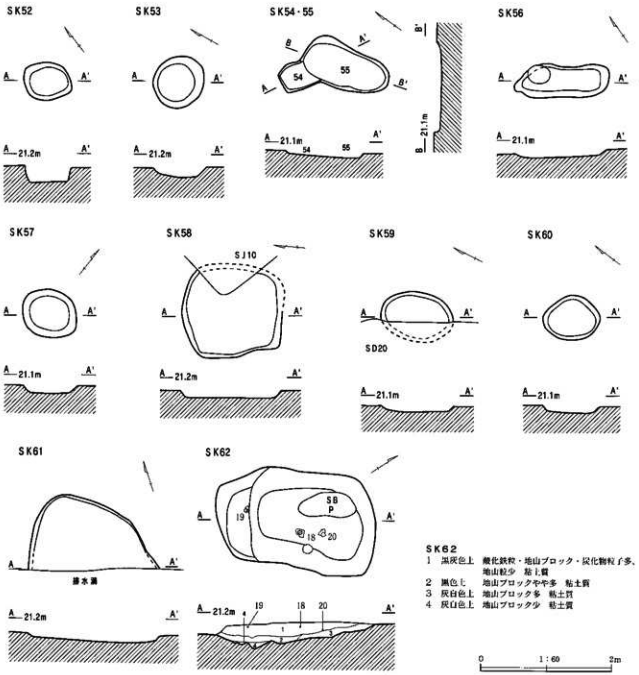
SK39
1 暗茶褐色土　地山ブロック(1～2cm)・炭化物粒子少、鉄分・マンガン粒やや多
2 茶褐色土　地山ブロック(0.5～2cm)・炭化物粒子・鉄分・マンガン粒少
3 暗茶褐色土　地山ブロック(1～3cm)・鉄分・マンガン粒やや多、炭化物粒子少
4 暗黄褐色土　地山ブロック(2～3cm)非常に多、鉄分・マンガン粒少

SK40
1 黒灰色土　地山ブロック多

SK43
1 黒灰色土　鉄分・地山ブロック多
2 灰白色土　鉄分多

SK51
1 灰色土　酸化鉄粒多
2 明灰色土　酸化鉄粒多、地山粒少
3 暗灰色土　地山ブロック・地山粒多、炭化物粒子微量
4 暗灰色土　酸化鉄粒・炭化物粒子多
5 暗灰色土　地山ブロック多
6 明褐色土　炭化物層中に地山ブロック多
7 灰色土　暗灰色土ブロック多
8 暗灰色土　酸化鉄粒多、地山粒・炭化物粒子少
9 灰色土　地山粒多

第89図　土壙(6)



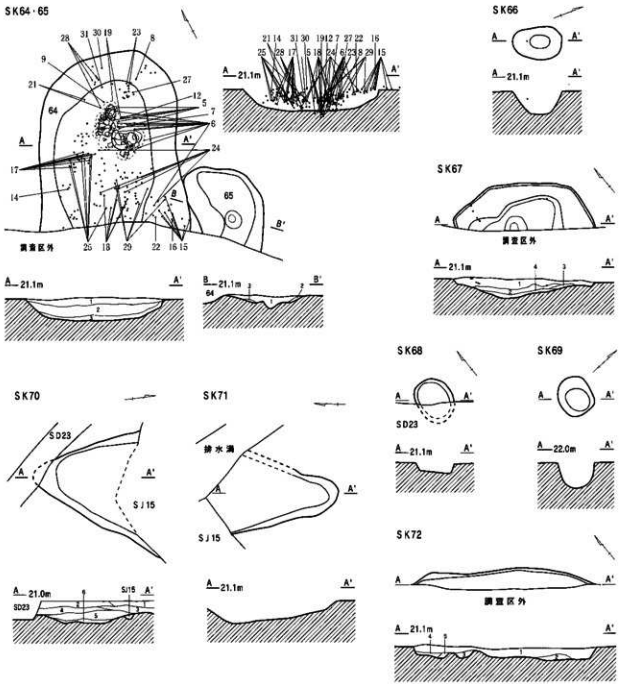
第90図 土壙(7)

第80号土壙（第92図）

P－42グリッドに位置する。第36・37号溝跡を切っていると思われる。規模は、長軸1.35m、短軸1.25m、深さ27cm、長軸方向はN-63°-Eである。平面形は楕円形、断面形は、立ち上がりの緩やかな逆台形を呈する。遺物は出土しなかった。

第81号土壙（第92図）

O－42グリッドに位置する。第82号土壙、第24号溝跡に切られている。規模は、長軸2.32mであるが、短軸1.92mまで確認できたのみである。深さ20cm、長軸方向・平面形は不明である。断面形は、立ち上がりの緩やかな皿状を呈すると思われる。遺物は出土しなかった。



SK64
1 暗褐色土　地山ブロック(0.5cm)・炭化物ブロック・焼土ブロック・鉄分微量
2 暗褐色土　地山ブロック(0.5～1.5cm)・炭化物粒子多、焼土ブロック少
3 黒褐色土　地山ブロック多、鉄分少

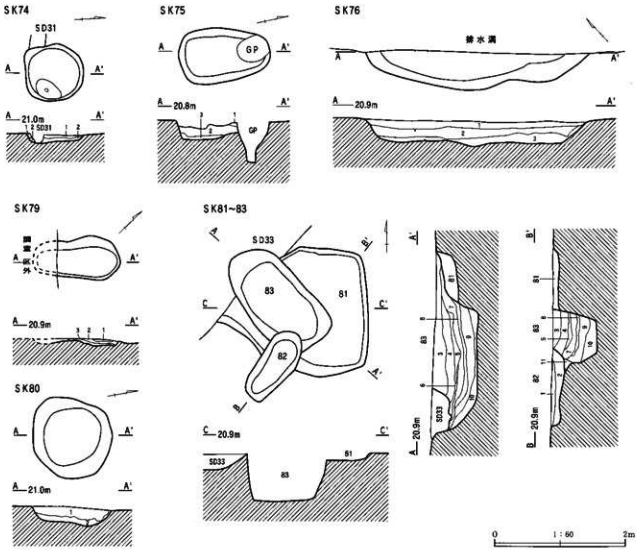
SK65
1 黒褐色土　粘土ブロック(0.5～1cm)・炭化物粒子やや多
2 暗褐色土　粘土ブロック(1～2cm)多
3 黒褐色土　粘土粒多、炭化物粒子少

SK67
1 黒褐色土　粘土ブロック(0.5～2cm)・炭化物粒子少、鉄分多
2 黒褐色土　粘土ブロック(0.5～1cm)・炭化物ブロック(0.5cm)やや多、鉄分少
3 灰褐色土　粘土ブロック(0.5～1cm)多　粘質
4 暗灰褐色土　粘土ブロック(3～4cm)やや多、炭化物ブロック(1～2cm)少　粘質

SK70
1 暗茶褐色土　地山粒多、マンガン粒・炭化物粒子少
2 暗茶褐色土　地山粒・マンガン粒多
3 暗灰褐色土　地山ブロック(1cm)・マンガン粒少、地山粒多
4 灰褐色土
5 灰白色土　地山ブロック(0.5～1cm)・炭化物粒子・鉄分少
6 黄褐褐色土　地山ブロック・炭化物粒子多

SK72
1 暗灰褐色土　地山ブロック(2～3cm)少、地山粒多、炭化物粒子・マンガン粒微量
2 暗褐褐色土　地山ブロック(2～3cm)多、マンガン粒少
3 暗茶褐色土　地山粒多、炭化物粒子・マンガン粒少
4 暗茶褐色土　地山粒多、地山ブロック(2～3cm)少
5 暗褐褐色土　地山ブロック(1cm)多、マンガン粒(0.5～1cm)・地山粒少

第91図　土壙(8)



SK74
1 黒灰褐色土　白色粘土ブロック(1~2cm)少
2 暗青灰色土　白色粘土ブロック(2~3cm)多

SK75
1 黒褐色土　地山ブロック(1~5cm)多、マンガン粒微量
2 暗灰褐色土　地山粒・マンガン粒少、炭化物粒子微量
3 明灰褐色土　地山ブロック(1cm)・マンガン粒少、炭化物粒子微量

SK76
1 黒褐色土　炭化物粒子・マンガン粒少
2 灰褐色土　炭化物粒子・マンガン粒少、地山粒微量
3 暗灰褐色土　炭化物ブロック(5~6cm)微量、炭化物ブロック(1~2cm)・マンガン粒少、炭化物粒子・地山粒多　炭化物粒子を多量に含む層

SK79
1 黒褐色土　地山粒・マンガン粒少
2 黒褐色土　地山ブロック(1~5cm)多、地山粒・マンガン粒少、炭化物粒子微量
3 黒褐色土　マンガン粒・地山ブロック(1~2cm)少、地山粒多、炭化物粒子微量

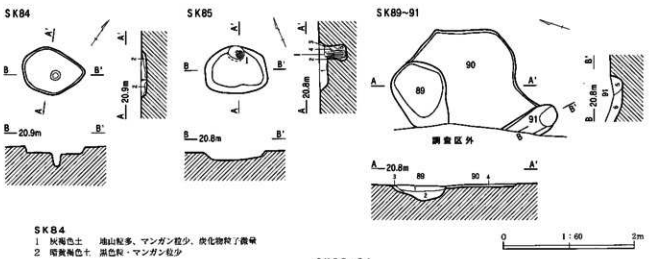
SK80
1 暗褐色土　地山ブロック(0.5~2.5cm)・炭化物粒子少、鉄分・マンガン粒多
2 青灰色土　地山ブロック(0.5~1cm)・炭化物粒子微量、鉄分・マンガン粒多

SK82・83
1 褐色土　地山粒・鉄分多
2 暗褐色土　地山ブロック(0.5~4cm)・鉄分多
3 暗褐色土　地山粒微量、鉄分・マンガン粒少
4 暗褐色土　地山ブロック・鉄分・マンガン粒・炭化物ブロック少
5 青灰色土　炭化物ブロック(0.5~1cm)・鉄分・マンガン粒少
6 黒色土　地山ブロック・炭化物粒子少
7 青灰色土　炭化物ブロック・鉄分・マンガン粒少
8 黒色土　地山ブロック微量
9 暗青灰色土　地山ブロック・炭化物ブロック(0.5~1cm)多
10 青灰色土　炭化物粒子・鉄分少
11 青灰色土　地山ブロック多

第92図　土壙(9)

第82号土壙（第92図）

O−42グリッドに位置する。第81・83号土壙を切っている。規模は、長軸1.15m、短軸0.50m、深さ20cm、長軸方向はN-36°-Eである。平面形は隅丸長方形、断面形は、底面に起伏のある皿状を呈す。遺物は出土しなかった。



第93図　土壙(10)

第83号土壙（第92図）

O－42グリッドに位置する。第81号土壙を切り、第82号土壙・第33号溝跡に切られている。規模は、長軸(1.80)m、短軸0.75m、深さ70cm、長軸方向はN-43°-Wである。平面形は隅丸長方形、断面形は、底面が平坦な逆台形を呈する。遺物は出土しなかった。

第84号土壙（第93図）

P－43グリッドに位置する。ほぼ中央にあるピットとの帰属関係、新旧関係については不明である。規模は、長軸0.95m、短軸0.70m、深さ10cm、長軸方向はN-65°-Eである。平面形は長楕円形、断面形は、底面が平坦な皿形を呈する。古墳時代前期の土器片がごく少数出土したが、図化し得るものはなかった。

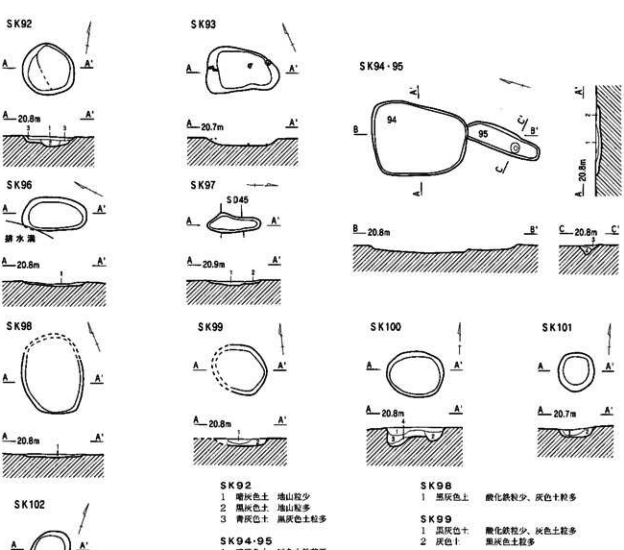
第85号土壙（第93・99図37）

Q－44グリッドに位置する。規模は、長軸0.95m、短軸0.70m、深さ13cm、長軸方向はN-70°-Wである。平面形は長楕円形、断面形は皿状を呈する。この土壙の、中央よりやや北寄りに径26×22cm、深さ42cmのピットが検出された。このピットと土壙との帰属関係や新旧関係は把握できなかった。このピットからは長さ32cm、太さ4cm程の木材が出土していることから柱穴と思われる。この柱穴に対応するピットの有無を確認するため、周辺の精査を行ったが、検出することはできなかった。

なお、この木材は土壙出土として扱ったが、単独のピットとして扱うべきであったかも知れない。

第89号土壙（第93図）

R－44グリッドに位置する。西側は調査区外に続く。第90号土壙を切る。規模は、長軸1.00mであるが、短軸0.80mまで確認できたのみである。深さ25cm、長軸方向はN-53°-Eである。平面形は長楕円形、断面形は、底面が平坦な皿形を呈する。古墳時代前期の土器片がごく少数出土したが、図化し得るものはなかった。



SK92
1 暗灰色土　地山粒少
2 黒灰色土　地山粒多
3 青灰色土　黒灰色土粒多

SK94・95
1 明灰色し　灰色土粒若干
2 灰色土　　明灰色土粒多
3 明灰色し　灰色土粒少
4 灰色土　　明灰色土ブロック若干

SK96
1 黒灰色土　古灰色土粒多

SK97
1 暗灰色土　地山ブロック微量
2 黒灰色土　地山ブロック多

SK98
1 黒灰色土　酸化鉄粒少、灰色土粒多

SK99
1 黒灰色土　酸化鉄粒少、灰色土粒多
2 灰色し　　黒灰色土粒多

SK100
1 暗褐色土　地山粒・炭化物粒子少
2 暗灰褐色土　炭化物粒子少
3 灰黄褐色土　地山ブロック多、炭化物粒子少
4 灰黄褐色土　炭化物粒子少

SK101
1 灰褐色土　地山粒多、炭化物粒子少
2 灰黄褐色土　地山ブロック多、炭化物粒子少

SK102
1 黒灰色土　地山粒多

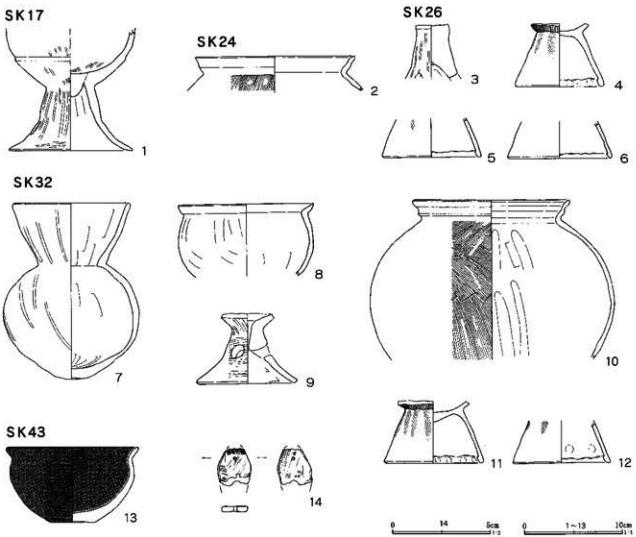
第94図　土壙(11)

第90号土壙（第93図）

R－44グリッドに位置する。西側は調査区外に続く。第89・91号土壙に切られる。規模は、長軸(2.05)mであるが、短軸(1.55)mまで確認できたのみである。深さ5cm。長軸方向・平面形は特定できない。断面形は底面が平坦な皿状を呈す。遺物は出土しなかった。

第91号土壙（第93図）

R－44グリッドに位置する。西側は調査区外に続く。第90号土壙を切る。規模は、長軸0.60m、短軸(0.35)mまで確認できたのみである。深さ15cm、長軸方向はN-50°-Wである。平面形は長楕円形と思われる。断面形はU字形に近い。遺物は出土しなかった。



第95図　土壙出土遺物(10)

第92号土壙（第94図）

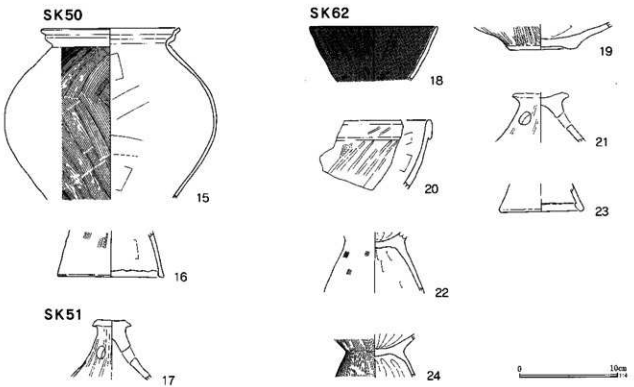
W－47グリッドに位置する。規模は、長軸0.80m、短軸0.80m、深さ15cm。平面形は円形、断面形は皿状に近い。遺物は出土しなかった。

第93号土壙（第94図）

X－47グリッドに位置する。第40号溝跡と重複するが、新旧関係は捉えられなかった。規模は、長軸1.10m、短軸0.63m、深さ10cm、長軸方向はN-68°-Wである。平面形はやや歪んだ楕円形、断面形は皿状に近い。遺物は出土しなかった。

第94号土壙（第94図）

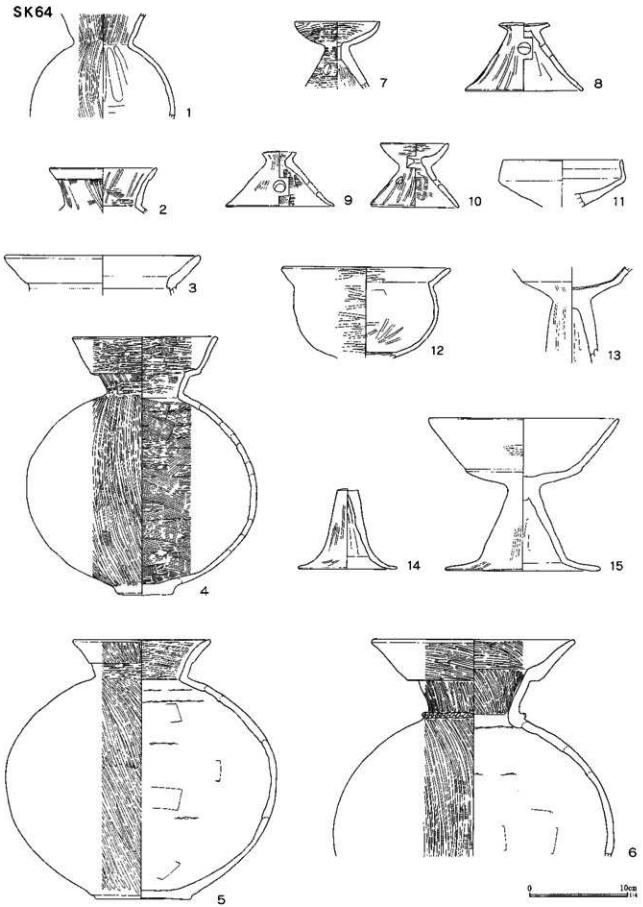
Y－48グリッドに位置する。第95号土壙を切っていると思われる。規模は、長軸1.50m、短軸1.05m、深さ10cm、長軸方向はN-16°-Wである。平面形はやや歪んだ楕円形、断面形は皿状に近い。古墳時代前期の土器がごく少数出土したが、図化し得るものはなかった。



第96図　土壙出土遺物(11)

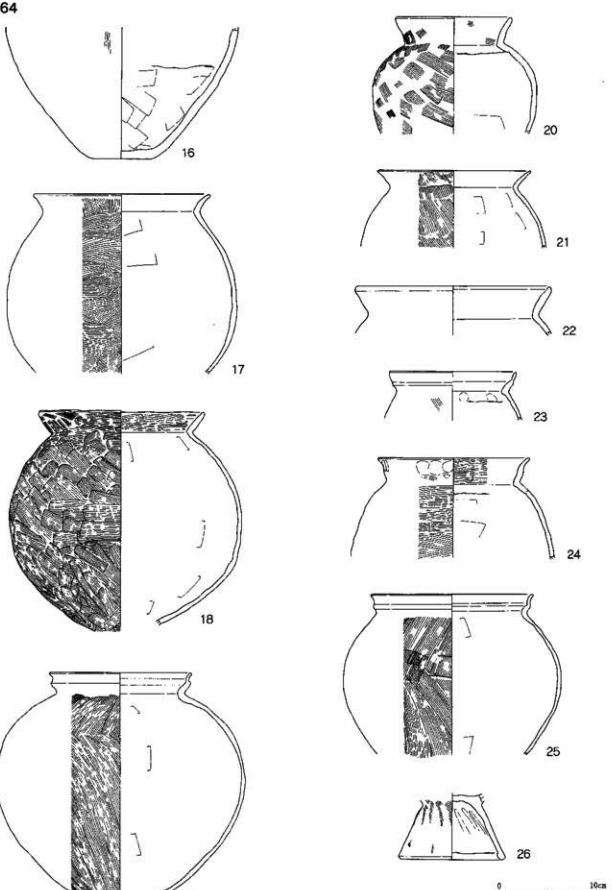
土壙出土遺物観察表　(第95･96図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	高坏		12.5	(12.7)	AGHIJ	良	茶褐色	20	SK17　器面風化
2	台付甕	(16.3)	3.7		ACEHI	普	橙褐色	15	SK24　器面は荒れている
3	高坏		5.6		AGHIJ	普	黒褐色	55	SK26　風化著しい
4	台付甕		6.5	(8.9)	ACGHIJ	不	橙褐色	15	SK26
5	台付甕		4.0	(10.0)	AGHIJ	不	橙褐色	20	SK26　器面風化著しい
6	台付甕	(10.6)	3.8		AEGHI	普	橙褐色	15	SK26　器面風化著しい
7	坩	12.0	18.0	1.8	AGHIJ	普	明褐色	100	SK32　器面は荒れている
8	甕	(13.9)	7.3		AGHIJ	普	黒褐色	25	SK32　内面橙褐色
9	器台		7.1	10.3	AEGHIJ	普	橙褐色	90	SK32　器面は荒れている
10	台付甕	(16.1)	16.4		ACGIJK	普	暗褐色	40	SK32　外面煤付着
11	台付甕		5.4	10.1	ACEGHIJ	普	明褐色	95	SK32
12	台付甕		4.3	(10.0)	AGIJ	普	橙褐色	20	SK32　器面風化
13	碗	(13.5)	7.7	4.7	AGHIJ	普	赤褐色	35	SK43　内面非常に荒れている　赤彩
14	剥形模造品	現存長1.9×幅1.7×厚0.3cm　重量1.8g　灰黒色							SK43　緑泥片岩製
15	台付甕	14.2	17.4		AHIJ	良	黒褐色	50	SK50
16	台付甕		4.7	(10.8)	AEGHIJ	普	橙褐色	15	SK50　器面は荒れている
17	器台		6.2		AGHIJ	普	茶褐色	75	SK51　風化著しい
18	坩	(13.2)	5.5		AGHIJ	普	赤褐色	15	SK62　風化著しい　赤彩
19	壷		2.6	6.9	ACEHIK	普	褐色	65	SK62
20	壷		7.1		AGHIJ	普	暗褐色	10	SK62　器面は荒れている
21	器台		5.2		AEG(多)HIJ	不	褐色	60	SK62　風化著しい
22	台付甕		6.2		AEGHIJ	不	明褐色	45	SK62　風化著しい
23	台付甕		2.9	(8.3)	AGHJ	普	暗褐色	20	SK62　風化著しい
24	台付甕		4.5		AGIJK	普	橙褐色	70	SK62　器面風化　砂粒多

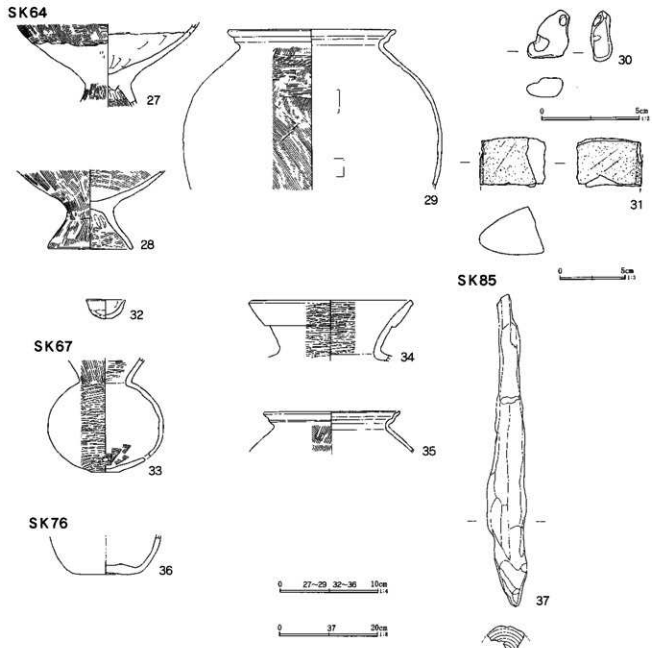


第97図　土壙出土遺物(12)

SK64



第98図　土壙出土遺物(13)



第99図　土壙出土遺物(14)

第95号土壙（第94図）

Y－48グリッドに位置する。第94号土壙に切られていると思われる。規模は、長軸(1.20)m、短軸0.35m、深さ8cm、長軸方向はN-5°-Eである。平面形は隅丸長方形、断面形はV字形を呈する。遺物は出土しなかった。

第96号土壙（第94図）

X－47グリッドに位置する。こく部分的に排水溝によって切られている。規模は、長軸1.00m、短軸0.50m、深さ5cm、長軸方向はN-27°-Wである。平面形は長楕円形、断面形は皿状を呈する。遺物は出土しなかった。

土壙出土遺物観察表 (第97～99図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坩		10.7		ACEGHIJK	普	橙褐色	70	SK64 器面荒れている
2	壺	(11.0)	4.7		ACGHIJK	普	橙褐色	15	SK64 器面荒れている
3	壺	(20.1)	4.1		ACCHIJK	普	暗褐色	20	SK64 器面風化著しい
4	壺	(14.8)	26.3	5.6	AGHIJ	普	黄褐色	80	SK64
5	壺	14.0	26.5		AGHIJK	普	橙褐色	80	SK64
6	壺	20.4	22.2		ACCHIJ	普	明褐色	75	SK64
7	器台	(8.8)	7.0		AHIJK	普	明褐色	45	SK64 脚台部3孔
8	高坏		7.0	12.0	ACCHI	良	橙褐色	95	SK64 器面風化 赤彩か 脚部3孔
9	器台		5.6	(11.1)	AGHIJ	不	暗褐色	35	SK64 風化著しい
10	器台	7.0	6.5	9.1	AEGHIJK	普	橙褐色	65	SK64 器面は荒れている
11	高坏	(12.3)			CHIJ	普	白橙色	30	SK64 器面は荒れている
12	台付碗	17.3	9.3		ACCHIJ	普	赤褐色	90	SK64 風化著しい
13	高坏		9.9		AGHIJ	普	暗茶褐色	65	SK64 内面に調整痕跡 風化著しい
14	高坏		8.2	(10.1)	ACGHIJK	普	褐色	70	SK64
15	高坏	(19.3)	15.6	15.8	ARG(多)HIJ	普	暗褐色	55	SK64 内面煤付着
16	盌		13.4	5.7	AEGHI	普	橙褐色	35	SK64 煤付着
17	甕	(18.3)	18.5		AGHIJ	普	暗橙褐色	35	SK64 外面煤付着 下部被熱(赤色化)
18	台付甕	17.0	22.7		ADEH	普	褐色	70	SK64 口縁・胴部に黒斑有
19	台付甕	14.6	23.6		AGHIJ	普	黒褐色	75	SK64 外面煤付着
20	甕	11.9	12.0		AEGHIJK	普	暗褐色	75	SK64 胴外面煤付着 器面荒れている
21	甕	(15.7)	8.0		AGHIJK	普	褐色	35	SK64 外面煤付着
22	甕	(20.1)	5.0		AHIJ	普	橙褐色	20	SK64 器面は荒れている
23	甕	13.0	4.9		AEGHIJ	不	明橙色	70	SK64 器面風化著しい
24	甕	(15.5)	10.4		ACGHIJ	普	黒褐色	30	SK64
25	台付甕	16.6	16.4		AEGHIJ	普	橙褐色	45	SK64 器面は荒れている
26	台付甕		6.7	10.4	ACEGHIJ	普	橙褐色	35	SK64
27	台付甕		8.5		AGHIJ	普	暗褐色	65	SK64 器面は荒れている
28	台付甕		8.0	8.6	ACGHIJ	普	明褐色	45	SK64
29	台付甕	17.1	16.4		AGHIJ	普	暗褐色	40	SK64 外面煤付着
30	貝巣穴痕泥岩	法量2.4×2.4×1.0cm			IJ		明赤褐色		SK64 3孔 被熱している
31	磨石	現存長3.75×幅5.0×厚3.8cm 重量90.2g 砂岩製							SK64
32	手捏ね	4.0	1.9	2.8	AEHIJ	普	褐色	100	SK67
33	坩		11.6		AHIJ	普	褐色	95	SK67 器面は荒れている
34	壺	16.3	6.2		AGHIJ	普	橙褐色	85	SK67
35	台付甕	(14.0)	4.3	(7.0)	AEHIJ	普	黒褐色	15	SK67
36	甕		4.1		AGH(多)J	普	暗黄褐色	55	SK76 風化著しい
37	柱材か	現存長32.2×幅8.0×厚6.2cm							SK85

第97号土壙（第94図）

Z－48グリッドに位置する。第45号溝跡との新旧関係は捉えられなかった。規模は、長軸0.80m、短軸0.25m、深さ5cm、長軸方向はN-5°-Wである。平面形は歪んだ隅丸長方形、断面形は皿状を呈す。遺物は出土しなかった。

第98号土壙（第94図）

AA－48グリッドに位置する。遺構が浅いため、北側部分では壁面の立ち上がりが失われていた。規模は、長軸(1.20)m、短軸0.95m、深さ5cm、長軸方向はN-20°-Eである。平面形は長楕円形が推定される。断面形は皿状を呈す。遺物は出土しなかった。

第99号土壙（第94図）

AA－48グリッドに位置する。西側部分では壁面の立ち上がりが失われていた。規模は、長軸0.85m、短軸(0.75)m、深さ10cm、長軸方向はN-18°-Wである。平面形は長楕円形が推定される。断面形は皿状を呈す。遺物は出土しなかった。

第100号土壙（第94図）

AB－48グリッドに位置する。規模は、長軸0.90m、短軸0.70m、深さ30cm、長軸方向はN-89°-Wである。平面形は長楕円形が推定される。断面形は皿状を呈す。遺物は出土しなかった。

第3表　土壙一覧表

番　号	位　置	方　位	形　態	長　軸(m)	短　軸(m)	深　さ(m)	備　考
1	F-26	N-70°-W	ハート型	1.10	0.85	0.05	
2	F·G-26	N-41°-E	楕円形	0.90	0.60	0.05	
3	G-26	N-28°-W	ハート型	0.95	0.80	0.05	
4	F-27	N-1°-E	長楕円形	1.00	0.35	0.08	
5	F-27	N-89°-W	長楕円形	1.05	0.45	0.10	
6	F-27	N-89°-W	楕円形	0.60	0.50	0.05	
7	F-27	N-17°-E	長楕円形	0.85	0.67	0.10	
8	F·G-27	N-16°-E	隅丸長方形	1.25	1.10	0.10	
9	G-27	N-55°-W	長楕円形	0.75	0.60	0.07	
10	G-27	N-35°-E	長楕円形	0.75	0.35	0.08	
11	G-27	N-20°-E	長楕円形	1.15	0.80	0.08	
12	G-28	N-15°-E	楕円形	0.70	0.60	0.08	
14	H-29	N-58°-W	楕円形	0.65	0.45	0.10	SJ1より新
15	G-30	—	—	2.30	(1.25)	0.10	
16	G-30	N-9°-W	楕円形	0.55	0.40	0.13	
17	G-30	N-1°-W	長楕円形	0.75	0.35	0.10	
19	G·H-30	N-18°-W	長楕円形	(1.33)	0.90	0.25	
20	H-30	—	—	0.95	0.85	0.22	SD5重複、新旧不明
21	H-30	—	—	0.65	(0.40)	0.05	SD5重複、新旧不明
24	H-30	N-27°-E	長楕円形	1.30	0.90	0.55	
26	H-30	N-74°-W	不整形	2.15	1.00	0.15	
28	H-30	N-64°-W	長楕円形	1.10	0.75	0.07	
31	I-31		円形	0.60	0.60	0.07	
32	H-31	N-21°-E	長楕円形	1.25	1.00	0.45	
33	H-31	N-50°-W	円形	1.00	0.80	0.35	
34	H·I-31	N-15°-E	長楕円形	1.10	0.80	0.08	
35	H-32	N-69°-W	略長方形	(1.35)	0.35	0.05	SK36と連結、溝跡の可能性も有
36	H-32	N-53°-W	略長方形	1.45	0.35	0.10	SK35と連結、溝跡・畝状遺構の可能性も有
37	H-32	—	円形	1.25	1.25	0.30	
39	I-32	N-51°-E	隅丸長方形	2.00	1.00	0.20	SD8より新
40	I-32	N-71°-W	不整形	1.10	0.55	0.10	
41	I-31·32	N-65°-W	隅丸長方形	0.95	0.70	0.10	SD11より旧
42a	I-33	N-45°-E	隅丸長方形	1.30	0.65	0.35	SD42bより新
42b	I-33	N-60°-W	隅丸長方形	1.30	0.95	0.20	SJ7·SD42aより旧
43	I-32·33	N-86°-E	隅丸長方形	1.10	0.80	0.20	SK44·46より新
44	I-33	N-8°-W	長楕円形	0.55	0.30	0.10	SK43より旧、SK46より新
45	I-33	N-30°-W	長楕円形	0.60	0.55	0.33	SB1P4より旧
47	I-33	N-25°-E	隅丸長方形	1.05	0.75	0.10	SJ7より旧、SD8との新旧不明
48	I-33		円形	0.65	0.65	0.10	
49	I-33	N-80°-W	長楕円形	0.87	0.53	0.23	
50	I-33·34	N-30°-E	楕円形	0.94	0.65	0.15	SK51より旧
51	I·J-33·34	N-83°-E	隅丸長方形	1.85	1.05	0.45	SK50より新
52	I-33·34	N-30°-W	楕円形	0.80	0.60	0.25	
53	I-34		円形	0.80	0.80	0.15	
54	I-34	—	隅丸長方形	0.45	0.40	0.05	SK55より旧
55	I-34	N-52°-W	隅丸長方形	1.35	0.40	0.07	SK54より新
56	I·J-34	N-63°-W	隅丸長方形	1.45	0.45	0.08	
57	I-34	N-88°-E	楕円形	0.90	0.73	0.15	
58	I·J-34·35	N-3°-W	隅丸長方形	1.55	(1.20)	0.10	SJ10より新
59	J-35	N-3°-W	長楕円形	1.10	(0.75)	0.08	SD20と重複、新旧不明
60	J-35	N-35°-W	楕円形	0.85	0.65	0.10	
61	J-35	—	楕円形か	2.00	(1.15)	0.10	
62	I-34	N-35°-E	隅丸長方形	2.45	1.45	0.35	
64	L-38	N-29°-E	—	2.60	2.25	0.35	
65	L-38	N-28°-E	隅丸長方形	(1.05)	0.95	0.16	
66	L-38	N-21°-E	長楕円形	0.75	0.50	0.35	
67	L-38·39	—	—	2.10	0.70	0.30	
68	M-39	—	長楕円形か	0.55	0.35	0.15	
69	M-40	N-77°-E	楕円形	0.60	0.50	0.40	
70	M-39	—	—	(1.48)	1.30	0.15	SJ15·SD23より旧
71	M-39	—	—	(2.00)	(1.48)	0.25	SJ15より旧
72	M-40	—	—	2.75	0.33	0.20	
74	N-41		円形	0.85	0.85	0.10	
75	O-42	N-10°-E	長楕円形	1.40	0.80	0.20	

第63図　グリッド等出土遺物(6)

第4表　土壙一覧表

番号	位置	方位	形態	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	備考
76	N-42	—	—	3.40	0.57	0.40	
79	O-42	N-45°-E	長楕円形	(1.35)	0.60	0.10	
80	P-42	N-63°-E	楕円形	1.35	1.25	0.27	SD36·SD37より新
81	O-42	—	—	2.32	1.92	0.20	SK82·SD24より旧
82	O-42	N-36°-E	隅丸長方形	1.15	0.50	0.20	SK81·83より新
83	O-42	N-43°-W	隅丸長方形	(1.80)	0.75	0.70	SK81より新、SK82·SD33より旧
84	P-43	N-65°-E	長楕円形	0.95	0.70	0.10	
85	Q-44	N-70°-W	長楕円形	0.95	0.70	0.13	
89	R-44	N-53°-E	長楕円形	1.00	0.80	0.25	SK90より新
90	R-44	—	—	(2.05)	(1.55)	0.05	SK89·91より旧
91	R-44	N-50°-W	長楕円形	0.60	(0.35)	0.15	SK90より新
92	W-47		円形	0.80	0.80	0.15	
93	X-47	N-68°-W	楕円形	1.10	0.63	0.10	SD40と重複、新旧不明
94	Y-48	N-16°-W	楕円形	1.50	1.05	0.10	SK95より新
95	Y-48	N-5°-E	隅丸長方形	(1.20)	0.35	0.08	SK94より旧
96	X-47	N-27°-W	長楕円形	1.00	0.50	0.05	
97	Z-48	N-5°-W	隅丸長方形	0.80	0.25	0.05	SD45との新旧不明
98	AA-48	N-20°-E	長楕円形	(1.20)	0.95	0.05	
99	AA-48	N-18°-W	長楕円形	0.85	(0.75)	0.10	
100	AB-48	N-89°-W	長楕円形	0.90	0.70	0.30	
101	AB-48	N-5°-W	楕円形	0.60	0.55	0.13	
102	AB-49	N-72°-E	楕円形	0.65	0.60	0.10	

第101号土壙（第94図）

A·B－48グリッドに位置する。規模は、長軸0.60m、短軸0.55m、深さ13cm、強いて計測するならば長軸方向はN-5°-Wである。平面形は楕円形、断面形は外側に開くU字状を呈す。遺物は出土しなかった。

第102号土壙（第94図）

A·B－49グリッドに位置する。規模は、長軸0.65m、短軸0.60m、深さ10cm、強いて計測するならば長軸方向はN-72°-Eである。平面形は楕円形、断面形は外側に開くU字状を呈す。遺物は出土しなかった。

(c) 溝跡

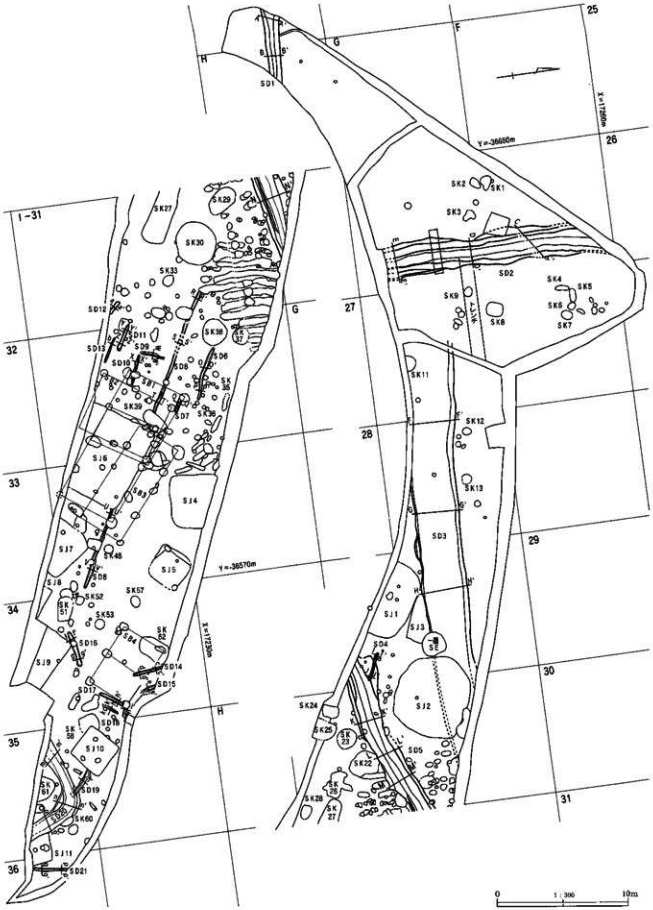
二面において検出された溝跡は、A区が21条、B区が18条、C区が7条の計46条である。

第1号溝跡（第100·103図）

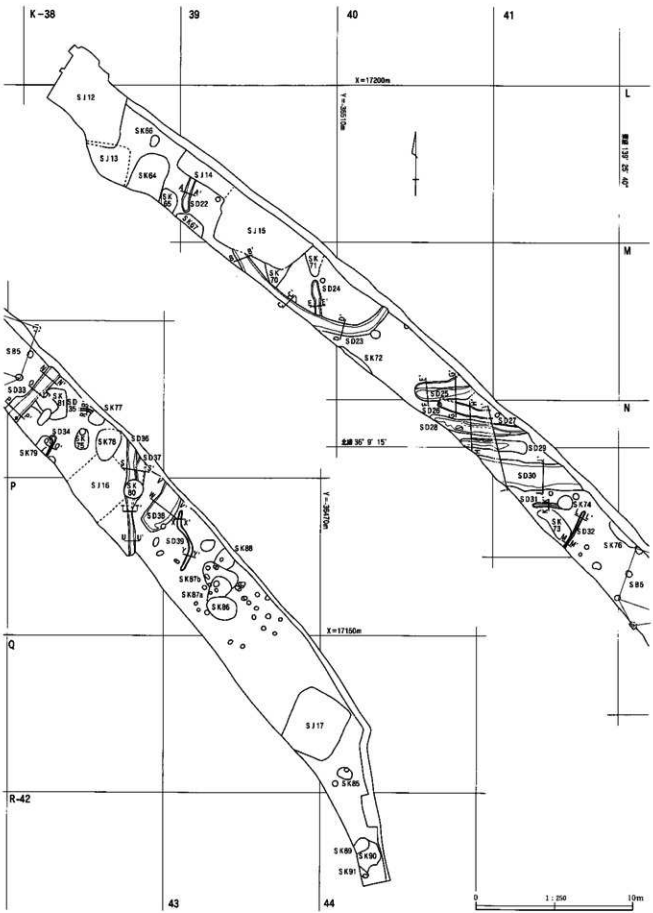
H－24·25グリッドに位置する。今回の調査において検出された古宮遺跡最西端の溝跡である。両端ともに調査区外に続くため、全体の長さは不明であり、5.90m程調査できたのみである。上幅1.00～1.30m、下幅0.20～0.60m、深さ50～55cmである。ほぼ直線状を呈す。壁面の立ち上がりは比較的緩やかで、底面は平坦に近い。軸はN-86°-Wを指す。30m程西に星川が東流しているが、第1号溝跡がこの川に流下するのか、あるいは星川から分岐しているかは不明である。遺物は出土しなかった。

第2号溝跡（第100·103·105図1·2）

F·G－26グリッドに位置する。両端ともに調査区外に続くため、全体の長さは不明であり、調査できたのは16.70mである。上幅1.80～2.80m、下幅0.30～0.70m、深さ56～65cmである。ほぼ直線状を呈す。壁面の立ち上がりは緩やかで、底部は平坦面に近い。軸はN-1°-Eを指し、ほぼ南北方向である。25m程北に星川が東流しているが、第2号溝跡がこの川に流下するのか、あるいは星川から分岐しているかは不明である。土器片がごく少数出土したが、図化し得たのは2点である。



第100図　二面A区溝跡平面図



第101図　二面B区溝跡平面図

第102図　二面C区溝跡平面図

第3号溝跡（第100・103・108～110図）

G－27～29グリッドにおいて検出されたが、G－30グリッド以東まで続くと思われる。

地山と溝跡の覆土がほとんど同じ色調であったため、当初は溝跡と認識できなかった。そこで面的に掘り下げを行うのと平行して、南北方向のトレンチを何本も入れて壁面の立ち上がりを確認し、それを線で結んで溝のプランを確定していった。第2・3号住居跡、第15～18号土壙を切っていると考えられる。第1号井戸跡に切られている。第3号溝跡が浅いため、幸いにも第2号住居跡のプランや床面が残る結果となった。

溝の両端部が、どこまで延びるかは不明である。壁面の立ち上がりを確認できたのは50m程で、上幅3.00～3.60m、下幅3.00～3.15m、深さ56～65cmである。ほぼ直線状を呈す。壁面の立ち上がりは緩やかで、底部は平坦である。軸はN-89°-Wを指し、ほぼ東西である。40m程西に星川が東流しているが、第3号溝跡がこの川に流下するのか、あるいは星川から分岐しているかは不明である。

数多くの遺物が出土したが、すべてが破片というのではなく、完形品も含まれる。図化し得たのは土器56点、石製品11点の、計67点であった。

第4号溝跡（第100・103図）

H－29グリッドに位置する。第5号溝跡を切っていると思われる。長さ1.90m、上幅0.10～0.20m、下幅0.10～0.15m、深さ5～10cmを測る。ほぼ直線状を呈し、断面形はU字形に近い。軸方向はN-66°-Wを指す。重複している第5号溝跡との関連については不明である。古墳時代前期の土器片が少数出土したが、図化し得るものはなかった。

第5号溝跡（第100・103・111図）

G－30・31、H－29～31グリッドに位置する。第20～22土壙と畝状遺構を切っていると思われる。溝の両端部とも調査区外に続くため全長は不明である。調査できた長さは18.80m、上幅1.40～2.30m、下幅0.30～0.60m、深さ85cmを測る。緩やかにS字を描くが、概ね直線状である。底面は狭いながらも平坦面をもち、断面形は逆台形を呈す。軸方向はN-69°-Eを指す。少数の土器片が出土しているが、図化し得たのは10点である。

第6号溝跡（第100・103図）

H－32グリッドに位置する。規模は、長さ4.20m、幅0.30m、深さ10cm、軸方向はN-68°-Wである。緩やかに湾曲する部分があるが、概ね直線状である。断面形はU字状を呈する。第7・8・10・11・13号溝跡とほぼ平行関係にあるが、各溝跡との関連は不明である。畝状遺構の一部という可能性も考えられる。古墳時代前期の土器片が少数出土したが、図化し得るものはなかった。

第7号溝跡（第100・103図）

H－32グリッドに位置する。第1号掘立柱建物跡に切られる。規模は検出された長さは1.10m、幅0.30m、深さ5cm、軸方向はN-68°-Wである。平面形は直線状であると思われる。断面形はU字状を呈する。第6・8・10・11・13号溝跡とほぼ平行関係にあるが、各溝跡との関連は不明である。畝状遺構の一部という可能性も考えられる。遺物は出土しなかった。

第8号溝跡（第100・103図）

H－31・32、I－33グリッドに位置する。途切れる部分があるが、遺構としては連続すると考えられる。第6号住居跡・第39・47号土壙と重複するが、新旧関係は捉えられなかった。また、西端部での畝状遺構との新旧関係も不明である。長さ24.20m、幅0.20～0.30m、深さ5～10cm、軸方向はN-67°-Wである。平面形は直線状で、断面形はU字状を呈する。第6・7・10・11・13号溝跡とほぼ平行関係にあるが、各溝跡との関連は不明である。これだ

けの長さがあると、畝状遺構の一部とは考えづらく、平行する溝跡に畝状遺構の可能性を想定するには無理があるのかも知れない。しかし、他の溝跡については、一つの可能性として畝状遺構を挙げておくこととした。遺物は出土しなかった。

第9号溝跡（第100・103図）

H・I－32グリッドに位置する。長さは1.90m、幅0.20～0.30m、深さ10cm。軸方向はN-25°-Eで、第6～8・10・11・13号溝跡とは直行する。平面形は直線状で、断面形はU字状を呈する。遺物は出土しなかった。

第10号溝跡（第100・103図）

I－32グリッドに位置する。重複するピットに切られていると思われるが、この部分も含めた長さは2.40m、幅0.20～0.30m、深さ5cm。軸方向はN-66°-Wで、第6～8・11・13号溝跡とほぼ平行関係にあるが、各溝跡との関連は不明である。畝状遺構の一部という可能性も考えられる。遺物は出土しなかった。

第11号溝跡（第100・104図）

I－31・32グリッドに位置する。第41号土壙を切っていると思われる。規模は長さ2.00m、幅0.25～0.30m、深さ10cm、軸方向はN-69°-Wである。平面形は概ね直線状で、断面形はU字状を呈する。第6～8・10・13号溝跡とほぼ平行関係にあるが、各溝跡との関連は不明である。畝状遺構の一部という可能性も考えられる。遺物は出土しなかった。

第12号溝跡（第100・104図）

I－31グリッドに位置する。東側は調査区外に続く。規模は、調査し得た範囲内で長さ1.20m、幅0.20m、深さ10cm、軸方向はN-42°-Wである。第6～11・13号溝跡とは、方位を異にしている。平面形は直線的で、断面形はU字形に近い。遺物は出土しなかった。

第13号溝跡（第100・104図）

I－32グリッドに位置する。規模は長さ2.20m、幅0.15～0.20m、深さ10cm、軸方向はN-65°-Wである。平面形は概ね直線状で、断面形はU字形に近い。第6～8・10・11号溝跡とほぼ平行関係にあるが、各溝跡との関連は不明である。畝状遺構の一部という可能性も考えられる。古墳時代前期の土器片が少数出土しているが、図化し得るものはなかった。

第14号溝跡（第100・104図）

I－34グリッドに位置する。北側は調査区外に続く。規模は検出できた範囲で、長さ2.30m、幅0.20～0.30m、深さ5cm、軸方向はN-9°-Wである。平面形は概ね直線状で、断面形はU字形に近いと思われる。第15号溝跡とは平行し、第16号溝跡とは直行する位置関係にある。遺物は出土しなかった。

第15号溝跡（第100・104図）

I－34グリッドに位置する。北側は調査区外に続く。規模は検出できた範囲で、長さ1.30m、幅0.20～0.30m、深さ5cm、軸方向はN-13°-Wである。平面形は概ね直線状で、断面形はU字形に近いと思われる。第14号溝跡とは平行し、第16号溝跡とは直行する位置関係にある。遺物は出土しなかった。

第16号溝跡（第100・104図）

I・J－34グリッドに位置する。規模は長さ1.30m、幅0.30～0.40m、深さ5cm、軸方向はN-79°-Eである。平面形は概ね直線状で、断面形はU字形に近いと思われる。第14・15号溝跡とは直行する位置関係にある。遺物は出土しなかった。

第17号溝跡（第100･104図）

Ⅰ－34グリッドに位置する。北側は調査区外に続く。第４号掘立柱建物跡のＰ４に切られていると思われる。規模は、検出できた範囲で長さ2.70m、幅0.20～0.30m、深さ5～10cm、平面形はクランク状に屈曲している。軸方向はN-39°-Eを指す。断面形はU字形に近いと思われる。 第18号溝跡と平行する位置関係にある。古墳時代前期の土器片が少数出土しているが、図化し得るものはなかった。

第18号溝跡（第100・104図）

Ⅰ－34グリッドに位置する。規模は長さ1.10m、幅0.20m、深さ5cm、軸方向はN-42°-Eである。平面形は概ね直線状で、断面形はU字形に近いと思われる。第17号溝跡とは平行する位置関係にある。古墳時代前期の土器片が少数出土しているが、図化し得るものはなかった。

第19号溝跡（第100・104図）

Ⅰ･Ｊ－35グリッドに位置する。第10号住居跡に切られる。 第20号溝跡との新旧関係は捉えられなかった。検出できた長さは2.10m、幅0.30～0.40m、深さ15cm、軸方向はN-51°-Wである。平面形は概ね直線状で、断面形はU字形に近い。遺物は出土しなかった。

第20号溝跡（第100・104・111図）

Ｊ－35グリッドに位置する。第11号住居跡を切るが、第19号溝跡との新旧関係は捉えられなかった。検出できた長さは東西4.90m、南北4.30m、上幅0.80～1.20m、下幅0.30～0.50m、深さ45～50cm、軸方向はN-70°-EとN-29°-Wである。直線状の溝跡が屈曲している。断面形は逆台形を呈する。平面形･断面形から方形周溝墓の可能性が考えられるが、検出範囲が限られているため、ここでは溝跡として扱った。少数の土器片が出土しているが、図化し得たのは８点である。

第21号溝跡（第100・104図）

Ｊ－36グリッドに位置する。両端とも調査区外に続く。検出できた長さは2.60m、幅0.30～0.40m、深さ10～15cm、軸方向はN-13°-Eである。平面形は概ね直線状で、断面形はU字形に近い。遺物は出土しなかった。

第22号溝跡（第101・106図）

Ｌ－39グリッドに位置する。第14号住居跡を切っていると思われるが、第14号住居跡の覆土内に第22号溝跡の覆土を識別できなかった。検出できた長さは2.00m、幅0.40～0.60m、深さ20cm、軸方向はN-15°-Eである。平面形は概ね直線状で、断面形はU字形に近い。古墳時代前期の土器片がごく少数出土しているが、図化し得るものはなかった。

第23号溝跡（第101・106・112図）

Ｍ－39･40グリッドに位置する。第15号住居跡に切られていると思われる。検出できた長さは11.70m、上幅0.70m、下幅0.50m、深さ15～25cmを測り、検出された範囲内では円弧を描いている。断面形はU字形または逆台形を呈する。少数の土器片が出土したが、図化し得たのは２点である。

第24号溝跡（第101・106・112図）

Ｍ－39グリッドに位置する。第23号溝跡に切られていると思われる。検出できた長さは2.40m、幅0.40～0.60m、深さ25～30cmを測り、軸方向はN-8°-Wを指す。壁面の立ち上がりは急であり、断面形はU字形または逆台形を呈する。少数の土器片が出土したが、図化し得たのは１点である。

第25号溝跡（第101・106・112図）

Ｍ･Ｎ－40グリッドに位置する。東側は調査区外に続く。第26号溝跡を切っていると思われる。検出できた長さは3.20m、上幅1.20m、テラス状の部分をもつ。このテラス状の部分を除いた上幅0.75

m、下幅0.35m、深さ35～40cmを測る。軸方向はN-85°-Eを指し、第26～31号溝跡とほぼ平行する。平面形は縦長の土壙状、断面形は皿状を呈する。ごく少数の土器片が出土したが、図化し得たのは1点である。

第26号溝跡（第101・106図）

N－40グリッドに位置する。第25号溝跡に切られていると思われる。検出できた長さは3.30m、幅0.50～0.80m、深さ5～15cmを測る。軸方向はN-78°-Wを指し、第25·27～31号溝跡とほぼ平行する。平面形は概ね直線状であるが、西端部が若干四角張っている。断面形は皿状を呈する。遺物は出土しなかった。

第27号溝跡（第101・106図）

N－40·41グリッドに位置する。東側は調査区外に続く。第28号溝跡を切っている。検出できた長さは4.20m、幅0.30m、深さ15cmを測り、軸方向はN-89°-Wを指し、第25·26·28～31号溝跡とほぼ平行する。平面形は概ね直線状で、断面形は上に開くU字状を呈する。遺物は出土しなかった。

第28号溝跡（第101・106図）

N－40·41グリッドに位置する。両端部とも調査区外に続く。第27号溝跡に切られている。検出できた長さは6.50m、幅0.80m、深さ10cmであり、軸方向はN-85°-Wを指し、第25～27·29～31号溝跡とほぼ平行する。平面形は概ね直線状で、断面形は上に開くU字状を呈するが、底面には凹凸が比較的多くみられる。古墳時代前期の土器片が少数出土しているが、図化し得るものはなかった。

第29号溝跡（第101・106・112図）

N－40·41グリッドに位置する。西側は調査区外に続く。東端部はやや四角張る。検出できた長さは4.40m、幅0.70m、深さ25cmであり、軸方向はN-88°-Wを指し、第25～28·30·31号溝跡とほぼ平行する。平面形は概ね直線状で、断面形は上に大きく開くU字状を呈する。ごく少数の土器片が出土したが、図化し得たのは1点である。

第30号溝跡（第101・106図）

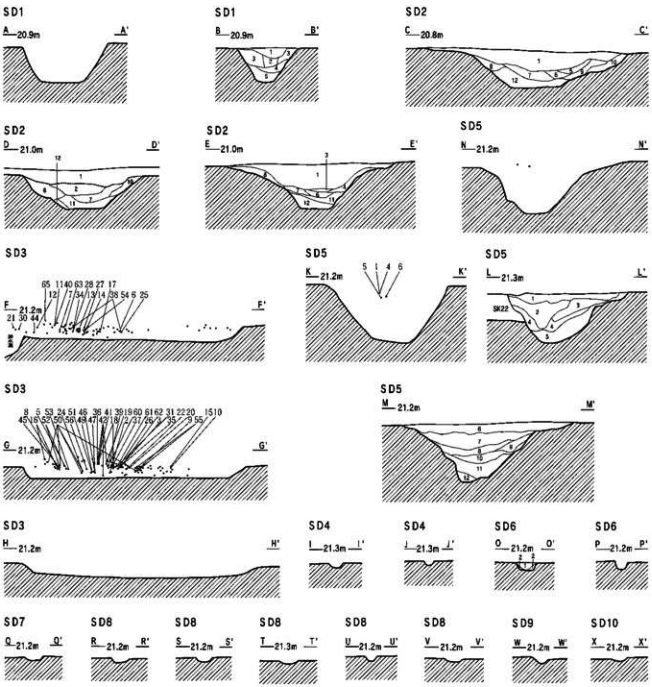
N－40·41グリッドに位置する。両端部とも調査区外に続く。検出できた長さは7.10m、上幅1.65～1.80m、深さ35～50cmであり、底面は青灰色粘土層に達している。軸方向はN-86°-Wを指し、第25～29·31号溝跡とほぼ平行する。平面形は概ね直線状で、断面形は逆台形を呈する。古墳時代前期と思われる土器片がごく少数出土したが、図化し得るものはなかった。

第31号溝跡（第101・106図）

N－41グリッドに位置する。長さは1.90m、幅0.40m、深さ10cmであり、軸方向はN-88°-Wを指し、第25～30号溝跡とほぼ平行する。但し、第25·26·28～30号溝跡がある程度幅広であるのに対し、第27·31号溝跡は幅の狭いものである。軸方向が近くても、別の内容をもった溝跡の可能性が考えられる。平面形は概ね直線状で、断面形は上に大きく開くU字状を呈する。遺物は出土しなかった。

第32号溝跡（第101・106図）

N－41グリッドに位置する。南側は調査区外に続く。検出できた長さは2.90m、幅0.20～0.30m、深さ10～15cmであり、軸方向はN-29°-Eを指す。平面形は概ね直線状で、断面形はU字状に近い。古墳時代前期の土器片が少数出土しているが、図化し得るものはなかった。



SD1

1 黒灰色土　酸化鉄ブロック少、地山粒多
2 暗灰色土　酸化鉄ブロック若干、地山粒・炭化物粒子多
3 灰色土　酸化鉄ブロック多、地山ブロック・炭化物ブロック多
4 灰白色土　酸化鉄ブロック少、地山ブロック若干
5 灰色土　酸化鉄ブロック少、地山粒多、炭化物ブロック若干

SD2

1 暗灰色土　酸化鉄粒・ブロック多、炭化物粒子少
2 暗灰色土　灰白色土粒多
3 灰白色土　黒灰色土粒子微量
4 灰色土　酸化鉄ブロック多、炭化物ブロック若干
5 暗灰色土　酸化鉄ブロック若干、灰白色土粒・炭化物粒子多
6 黒灰色土　青灰色土粒少、炭化物粒子多
7 黒灰色土　青灰色ブロック・炭化物粒子多
8 灰色土　酸化鉄ブロック・灰白色土粒多
9 暗灰色土　酸化鉄ブロック少、炭化物ブロック若干
10 灰色土　酸化鉄ブロック多、炭化物ブロック若干
11 黒灰色土　炭化鉄ブロック少、青灰色土粒多
12 青灰色土　黒灰色ブロック多

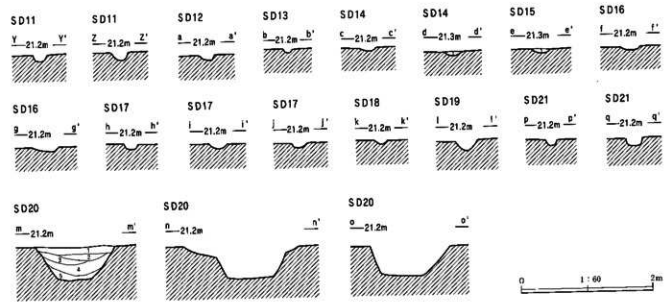
SD5

1 灰黒色土　地山ブロック少、鉄分・マンガン粒多
2 黒灰色土　地山ブロック・鉄分・マンガン粒少、炭化物粒子やや多
3 黒灰色土　地山ブロック・鉄分・マンガン粒少
4 灰褐色土　粘土ブロックやや多、鉄分・マンガン粒少
5 暗灰色土　粘土ブロック層中に炭化物ブロック・鉄分・マンガン粒少
6 暗赤褐色土　粘土ブロック・炭化物ブロック少、マンガン粒多
7 黒褐色土　粘土ブロックやや多、炭化物粒子・マンガン粒少
8 黒褐色土　粘土ブロック少
9 灰黒色土　粘土ブロック多
10 黒灰色土　粘土ブロックやや多
11 暗黄橙色土　粘土ブロック多、炭化物粒子やや多
12 黄橙色土　粘土ブロック層

SD6

1 黒灰色土　地山ブロック・炭化物粒子少、鉄分・マンガン粒多
2 暗褐色土　地山ブロック多、鉄分・マンガン粒少

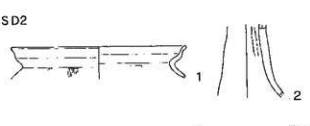
第103図　第1～10号溝跡



第104図　第11～21号溝跡

第2号溝跡出土遺物観察表　(第105図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	台付甕	(18.0)	3.3		AGHIJ	普	明褐褐色	20	
2	高坏		7.3		ACGHIJ	普	褐色	80	器面は風化著しい



第105図　溝跡出土遺物(1)

第33号溝跡（第101・106・112図）

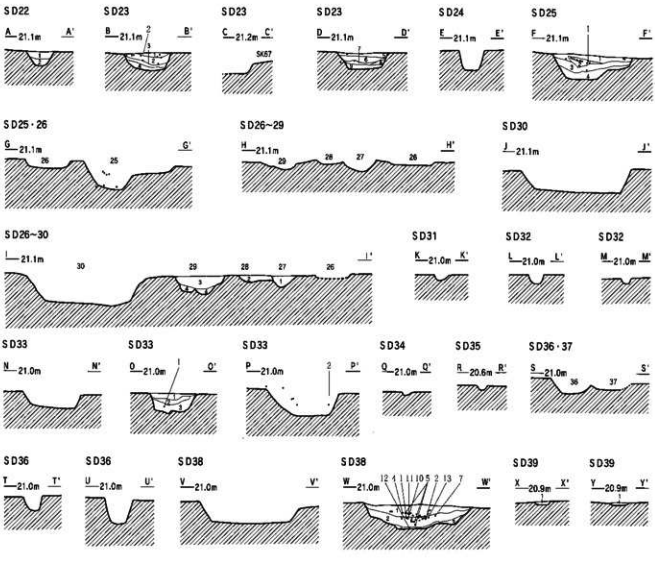
O－41・42グリッドに位置する。第83号土壙を切る。両端部は調査区外に続く。検出できた長さは3.90m、上幅0.70～1.10m、下幅0.45～0.65m、深さ25～40cm、軸方向はN-44°-Eを指す。平面形は概ね直線状で、断面形は壁面の立ち上がりが比較的急な逆台形を呈する。土器片が少数出土したが、図化し得たのは8点である。

第34号溝跡（第101・106図）

O－42グリッドに位置する。南側は調査区外に続く。検出できた長さは1.30m、幅0.15～0.40m、深さ5cm、軸方向はN-29°-Eを指す。平面形は概ね直線状で、断面形はU字形を呈する。遺物は出土しなかった。

第35号溝跡（第101・106図）

N－42グリッドに位置する。第77号土壙を切るが、その先は検出されなかった。検出できた長さは0.80m、幅0.15～0.20m、深さ10cm弱である。軸方向はN-81°-Wを指す。平面形は緩やかに湾曲するが、概ね直線状といえる。断面形はU字状に近い。遺物は出土しなかった。



SD22
1 暗赤褐色土 マンガン粒・地山粒少、炭化物粒子微量
2 明灰褐色土 地山ブロック・地山粒多、マンガン粒少

SD23
1 暗赤褐色土 粘土ブロック少、鉄分多
2 黒褐色土 粘土ブロック微量、炭化物ブロック少
3 黒灰色土 粘土ブロック・炭化物ブロック少
4 青灰色土 青灰色粘土ブロック多
5 黒褐色土 地山粒少、マンガン粒多
6 黒褐色土 地山ブロック微量、地山粒・マンガン粒少
7 黒褐色土 地山ブロック微量、地山粒多
8 黒灰褐色土 地山粒多
9 黒灰褐色土 地山ブロック・地山粒多、マンガン粒微量

SD25
1 黒褐色土 地山ブロック・マンガン粒・炭化物粒子少、地山粒多
2 黒褐色土 炭化物粒子多、地山粒少
3 暗灰褐色土 炭化物粒子・地山粒少、地山粒微量
4 明灰褐色土 地山ブロック・地山粒多

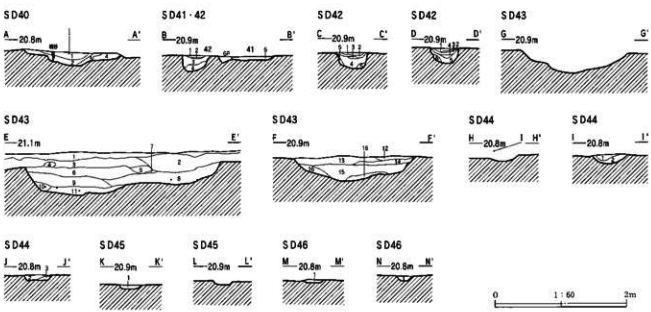
SD26~30 I－I'
1 褐褐色土 鉄分・マンガン粒多 砂質
2 褐褐色土 鉄分やや多、砂質
3 青灰色土 鉄分・マンガン粒多、炭化物粒子微量 砂質
4 暗褐色土 鉄分・マンガン粒多、炭化物粒子微量 砂質

SD33
1 暗褐色土 地山ブロック・鉄分・マンガン粒多、炭化物粒子微量
2 黒褐色土 地山ブロック・鉄分・マンガン粒多、炭化物粒子少
3 黒褐色土 地山ブロック・鉄分・マンガン粒微量

SD38
1 灰褐色土 地山ブロック・炭化物粒子微量、地山粒少
2 灰褐色土 地山ブロック・地山粒・炭化物粒子少
3 灰褐色土 粘土ブロック少

SD39
1 暗黄褐色土 マンガン粒・黒色粒少

第106図 第22~39号溝跡



SD40
1 暗灰色土 青灰色土粒・炭化物粒子多
2 暗灰色土 青灰色土粒・炭化物粒子少
3 暗灰色土 青灰色土ブロック多
4 暗灰色土 古灰色土粒多

SD41・42
1 黄橙色 FA層
2 黒灰色土 炭化物粒子多
3 黒灰色土 灰色土粒多
4 黒灰色土 灰白色土ブロック多
5 黒灰色土 灰色土大ブロック多

SD42 C-C'・D-D'
1 黒灰色土 炭化物粒子多
2 黒色土 炭化物層
3 黄橙色 FA層
4 黒灰色土 炭化物粒子多
5 黒灰色土 灰色土粒多
6 黒灰色土 灰色土ブロック多

SD43 E-E'・F-F'
1 灰色土 酸化鉄粒多
2 灰色土 全体的に締化 しまり強
3 暗灰色土 酸化鉄ブロック多
4 暗灰色土 火山灰ブロック多
5 暗灰色土 酸化鉄ブロック・炭化物粒子多
6 暗灰色土 炭化物粒子多
7 灰色土 炭化物粒子若干
8 暗灰色土 炭化物粒子多
9 暗灰色土 灰色粒・炭化物粒子多
10 暗灰色土 灰色土ブロック多
11 灰色土 青灰色ブロック・炭化物粒子多
12 灰色土 全体的に締化 しまり強
13 暗灰色土 炭化物粒子多
14 暗灰色土 炭化物粒子多
15 暗灰色土 炭化物粒子・火山灰粒多、火山灰ブロック若干
16 暗灰色土 青灰色土ブロック少

SD44
1 黒灰色土 炭化物粒子多
2 黒灰色土 灰色土ブロック多、炭化物粒子少
3 灰色土 黒灰色土粒若干

SD45
1 暗灰色土 酸化鉄ブロック・地山ブロック若干

SD46
1 黒灰色土 地山粒若干

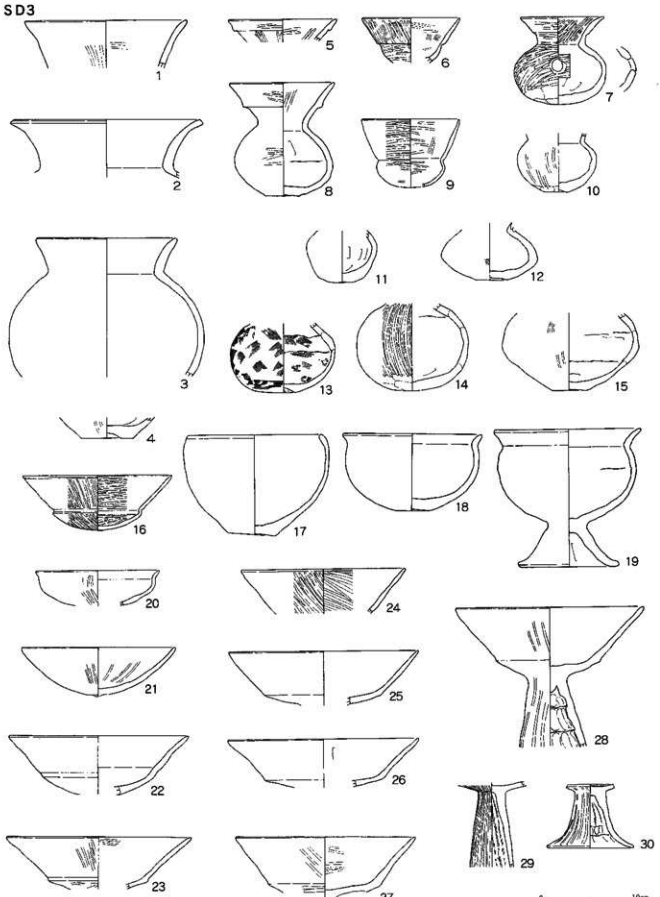
第107図 第40～46号溝跡

第36号溝跡（第101・106図）

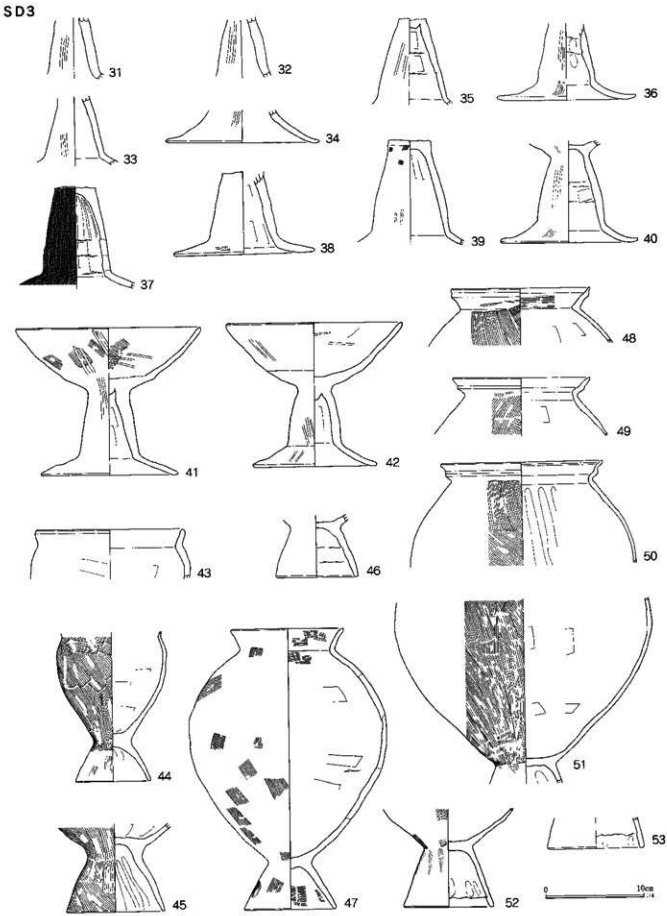
O・P－42グリッドに位置する。第80号土壙に切られていると思われる。第37号溝と重複するが、新旧関係については把握できなかった。両端ともに調査区外に続く。検出できた長さは7.10m、幅0.25～0.60m、深さ25～40cmである。軸方向はN-2°-Wを指し、ほぼ南北に走る溝といえる。平面形は直線状で、断面形は外側に開くU字状または逆台形に近い。古墳時代前期の土器片がごく少数出土したが、図化し得るものはなかった。

第37号溝跡（第101・106図）

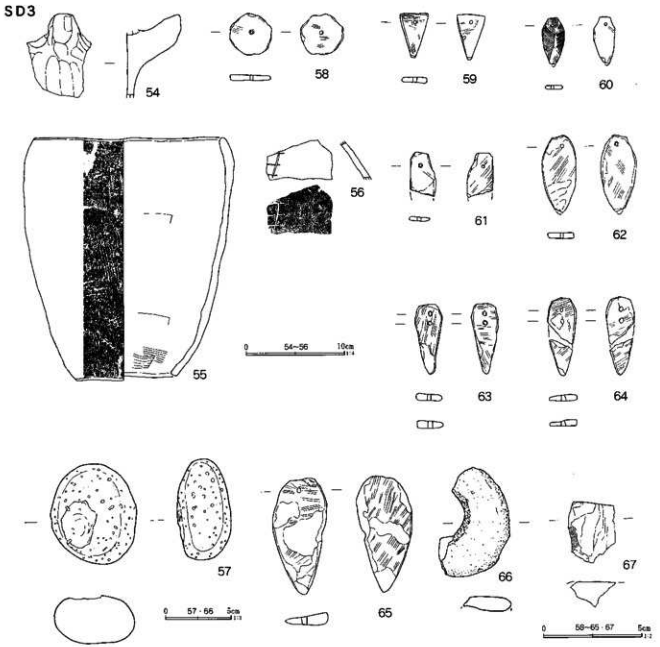
O・P－42グリッドに位置する。第80号土壙に切られていると思われる。北側は調査区外に続く。第36号溝跡と重複関係にあるが、重複する箇所が第80号土壙に切られているため、溝が分岐しているのか、新旧関係をもつのか判断できなかった。検出できた長さは7.10m、幅0.40～0.60m、深さ25cm弱である。軸方向はN-2°-Wを指し、ほぼ南北に走る溝といえる。平面形は直線状で、断面形は外側に開くU字状または逆台形に近い。遺物は出土しなかった。



第108図　溝跡出土遺物(2)



第109図　溝跡出土遺物(3)



第110図　溝跡出土遺物(4)

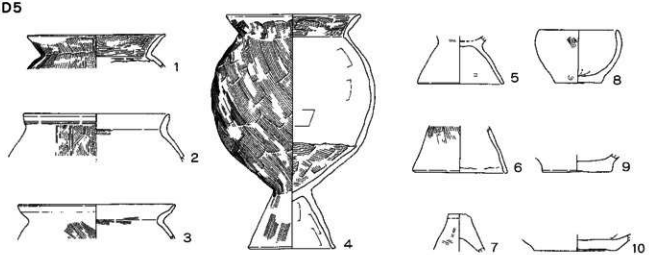
第3号溝跡出土遺物観察表　(第108図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	壺	(16.5)	4.8		AEGHIJ	普	褐色	70	器面は風化著しい
2	壺	19.0	6.0		AEGHIJ	普	明褐色	80	器面は風化著しい
3	壺	14.5	14.2		AEGHIJ	普	茶褐色	45	器面は風化著しい
4	壺		2.1	5.3	AEGHIJ	普	白橙色	80	器面は荒れている
5	坩	(11.2)	2.3		AHIJ	普	暗褐色	15	器面は荒れている
6	坩	(10.1)	4.6		AGHIJ	普	暗褐色	35	器面は荒れている
7	坩	(8.6)	8.9		AGHIJ	良	橙褐色	75	器面は荒れている
8	坩	10.7	11.5	3.5	AEGHIJ	普	橙褐色	95	風化著しく整形不明瞭　煤付着か
9	坩	10.1	(7.0)		AGHIJ	普	橙褐色	55	器面は荒れている　外面黒斑
10	坩		5.9	2.4	AGHIJ	普	橙褐色	90	器面は荒れている
11	坩		5.3	1.8	AEG(多)HIJ	普	橙褐色	40	外面は風化著しい
12	坩		5.9	3.0	ACGHIJ	普	褐色	95	器面は風化著しい
13	坩		7.0	2.1	ACGHIJ	普	橙褐色	80	器面は荒れている
14	坩		9.0		AGHIJK	普	明褐色	45	器面は荒れている

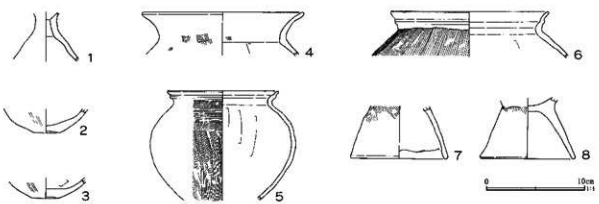
第3号溝跡出土遺物観察表 (第108～110図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
15	坩		7.8	3.9	ACEGHIJ	普	褐色	65	外面に黒斑 風化著しい
16	坩	(15.3)	5.6		ACGHIJ	普	黒褐色	35	外面黒斑 器面は荒れている
17	鉢	13.6	10.3	4.8	AG(多)HIJ	普	橙褐色	95	内外面黒斑 器面は風化著しい
18	碗	(14.3)	7.8	3.5	AEG(多)HIJ	不	褐色	60	器面は風化著しく器形は不明 赤彩か
19	台付碗	14.9	14.0	9.8	AEGHIK	普	茶褐色	95	内外面風化著しく整形痕どわからない
20	器台	(12.6)	3.6		AEGJK	普	褐色	20	器面は荒れている
21	高坏	(15.6)	5.0		ACEGHIJ	普	明褐色	30	器面は荒れている
22	高坏	(18.6)	6.0		AGHIJ	普	褐色	15	器面は風化著しい
23	高坏	(19.0)	5.3		AG(多)HIJ	普	褐色	20	風化著しい
24	高坏	(16.7)	4.6		ACEGHIJ	普	茶褐色	15	
25	高坏	(19.4)	5.5		AGHIJ	普	褐色	35	器面は風化著しい
26	高坏	(19.5)	4.9		ACGHIJ	普	茶褐色	20	器面は風化著しい
27	高坏	(18.5)	6.9		ACHIJ	普	褐色	15	器面は風化著しい
28	高坏	19.1	14.2		AEGHIJ	不	明茶褐色	80	器面は風化著しい
29	高坏		8.6		AGHJ	良	白橙色	85	
30	高坏		6.5	(8.8)	ACGHIJ	普	明褐色	35	器面は荒れている
31	高坏		6.2		ACGHIJ	普	褐色	95	器面は荒れている
32	高坏		6.2		AGHIJ	普	橙褐色	90	器面は荒れている
33	高坏		7.0		ACGHIJ	普	明褐色	85	器面は荒れている
34	高坏		3.3	15.5	AEGHIJ	不	褐色	20	器面は風化著しい
35	高坏		8.8		ACGHIJ	普	褐色	85	器面は荒れている
36	高坏		7.8	(14.2)	AEGHIJ	普	茶褐色	20	器面は風化著しい
37	高坏		10.4		ACEGHIJ	普	暗褐色	75	器面は荒れている 赤彩
38	高坏		8.3	14.4	ACGHI	普	褐色	75	器面は風化著しい
39	高坏		10.6		AHIJ	普	茶褐色	45	風化著しい
40	高坏		10.3	14.0	AGHIJ	普	明褐色	85	
41	高坏	18.8	15.0	13.9	ACGHIJ	普	褐色	70	外面に煤付着
42	高坏	17.6	14.6	(12.3)	AEGHIJ	普			
43	甕	(15.0)	5.1		AEGHIJK	普	橙褐色		器面は風化著しい
44	台付甕		15.2	7.6	AGHIJ	普	黒褐色	80	器面は荒れている 外面に黒斑
45	台付甕		9.0	10.0	ACEHIJ	普	茶褐色	65	器面は荒れている
46	台付甕		6.4	8.3	ACEGHIJ	普	橙褐色	80	
47	台付甕	(11.6)	28.5	(9.4)	AGHIJ	普	暗褐色	30	器面は風化著しい 外面に煤付着
48	甕	(14.1)	5.7		AEGHIJ	普	黒褐色	25	
49	台付甕	(14.0)	5.8		AGIJK	普	黒褐色	15	
50	台付甕	(16.5)	10.6		AGHIJ	普	橙褐色	40	外面黒斑
51	台付甕		18.7		AGHIJ	普	橙褐色	25	器面風化 内外面黒斑
52	台付甕		10.0	9.2	ACGHIJ		橙褐色	70	器面は風化著しい
53	台付甕		3.2	(9.8)	AGHIJ	普	褐色	20	器面は風化著しい
54	甑		8.5		AEGHIJ	普	茶褐色	70	
55	甑	19.4	24.6	10.1	AG(多)HIJ	普	褐色	75	
56	壺				ACGHIJ	普	明褐色		線刻あり 風化著しい
57	磨石	現存長5.2×幅4.4×厚2.4cm 重量69.6g 95% 軽石製							
58	石製有孔円盤	径2.1×2.1cm 厚0.3cm 孔径0.2cm 重量2.7g 完形 緑泥片岩製							
59	剣形石製品	現存長2.3×幅1.4×厚0.3cm 孔径0.2cm 重量1.6g 95% 滑石製							
60	剣形石製品	現存長2.4×幅1.1×厚0.2cm 孔径0.2cm 重量1.0g 95% 滑石製 薄緑色							
61	剣形石製品	現存長2.2×幅1.3×厚0.2cm 孔径0.2cm 重量1.1g 55% 滑石製 薄緑色							
62	剣形石製品	現存長3.9×幅1.8×厚0.3cm 孔径0.1cm 重量4.2g 95% 滑石製 暗緑色							
63	剣形石製品	現存長3.6×幅1.4×厚0.4cm 孔径0.1cm 重量2.7g 95% 滑石製 薄緑色							
64	剣形石製品	現存長(4.1)×幅1.5×厚0.3cm 孔径0.2cm 重量2.4g 90% 滑石製 暗青色							
65	剣形石製品	現存長6.0×幅2.9×厚0.6cm 孔径0.2cm 重量13.8g フォンフェルス							
66	砥み石	現存長8.3×幅5.4×厚1.2cm 重量52.4g 遺存度85% 滑石製							
67	不明品	現存長3.1×幅2.4×厚1.3cm 重量10.7g 緑泥片岩 薄緑色							

SD5



SD20



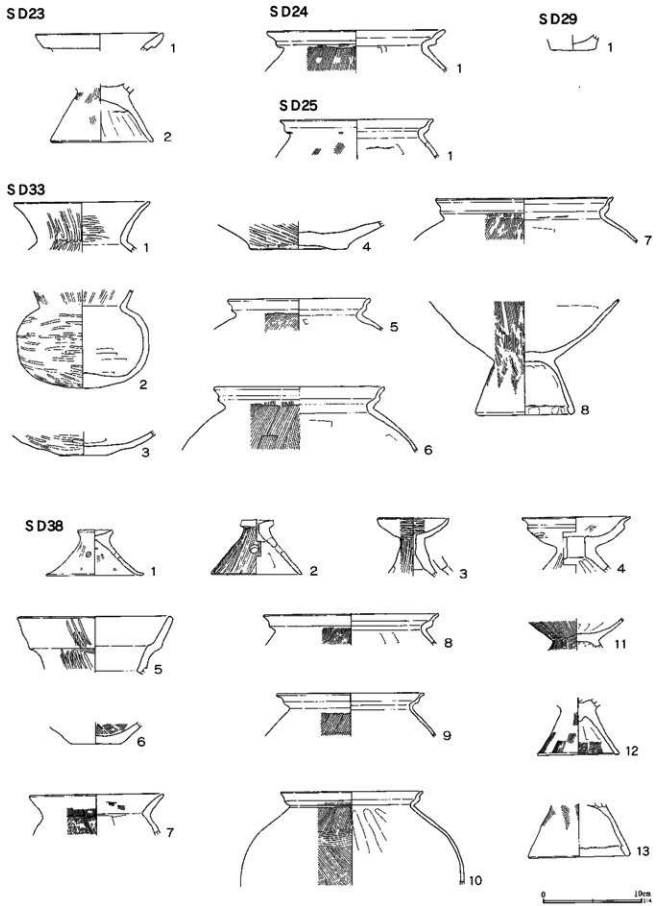
第111図　溝跡出土遺物(5)

第5号溝跡出土遺物観察表　(第111図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	甕	(14.0)	3.4		EGI	普	白橙色	25	
2	甕	(15.1)	4.8		AGHIJ	普	白橙色	15	
3	甕	(16.1)	3.6		AGHIJ	普	橙褐色	15	
4	台付甕	(13.8)	23.9	8.8	AHIK	普	暗褐色		
5	台付甕		4.9	8.8	ACGHIJ	不	明褐色	70	器面は風化著しい
6	台付甕		4.8	9.7	AGHIJ	不	橙褐色	70	器面は荒れている
7	器台か		3.9		AGHIJ	普	明褐色	85	
8	椀	(8.0)	5.5	4.7	AGHIJ	普	明褐色	55	器面は風化著しい
9	壺		1.8	7.0	ACGHIJ	普	褐色	95	
10	壺		1.5	8.2	AGHIJ	普	褐色		器面風化

第20号溝跡出土遺物観察表　(第111図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	器台		5.0		AGHIJ	普	暗褐色	75	風化著しい
2	坩		2.5	2.6	ACEHI	普	白橙色	65	
3	坩		2.1	2.9	AHIJ	普	橙褐色	60	
4	甕	(16.6)	4.4		AEGHIJ	不	明褐色	15	内面煤付着　被熱
5	台付甕	(11.3)	11.1		ACGHIJK	普	明橙褐色	40	
6	台付甕	(16.4)	4.6		ACGHIJK	不	橙褐色	25	
7	台付甕		5.3	(9.8)	ACEGHIJ	不	橙褐色	15	器面は風化著しい
8	台付甕		6.2	9.7	AGIJ	不	茶褐色	60	器面は風化著しい



第112図　溝跡出土遺物(6)

第23号溝跡出土遺物観察表 (第112図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	壺	(13.1)	1.8		ACGHIJ	不	赤褐色	15	風化著しい
2	台付甕		6.0	10.3	ACEIJ	普	橙褐色	95	

第24号溝跡出土遺物観察表 (第112図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	台付甕	(18.3)	4.4		ACGHIJ	普	明橙褐色	15	風化している

第25号溝跡出土遺物観察表 (第112図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	台付甕	(15.6)	4.1		AHIJ	普	暗橙褐色	20	器面は風化している

第29号溝跡出土遺物観察表 (第112図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坩か		1.6	4.6	GJK	普	明褐色	60	器面は風化している

第33号溝跡出土遺物観察表 (第112図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	壺	(13.9)	5.2		ACGHIJ	普	橙褐色	15	
2	坩		10.0	3.6	ACGHIJ	普	明橙褐色	90	器面風化 内面鉄分付着 調整不明瞭
3	壺		2.6	5.1	ACEGHIJ	普	白橙色	70	外面に黒斑
4	壺		2.8	9.9	ACGHIJ	普	白橙色	80	底部内面に炭化物付着 内面風化著しい
5	台付甕	(14.6)	3.3		AGIJ	普	暗褐色	5	
6	台付甕	(17.0)	6.4		ACHIJK	普	暗橙色	25	
7	台付甕	(18.0)	4.6		ACGHIJK	普	黒褐色	15	
8	台付甕		11.6	9.6	ACGHIJ	普	橙褐色	35	器面風化 外面に煤付着 炭化物

第38号溝跡出土遺物観察表 (第112図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	器台		4.7	(9.9)	AGIJ	普	明橙色	40	風化著しい
2	器台		5.6	(9.3)	ACHIJ	普	明褐色	40	器面荒れている 脚台部に4孔
3	器台	7.2	6.0		AHIJ	良	赤褐色	35	赤彩
4	器台	11.0	5.7		AEGHIJ	普	明褐色	75	器面は風化著しい
5	壺	(15.9)	5.8		ACGHIJ	普	茶褐色	15	
6	壺		2.2	5.2	AGHIJ	普	明褐色	60	外面風化著しい
7	甕	(13.8)	4.2		AGHIJ	普	暗褐色	10	
8	台付甕	(17.9)	3.0		AEIJK	普	橙褐色	15	
9	台付甕	(15.0)	4.5		ACGHIJK	普	橙褐色	15	器面は荒れている
10	台付甕	(14.5)	9.5		AGHIJ	普	黒褐色	20	内面風化
11	台付甕		3.1		AGHIJK	普	黒褐色	75	外面に煤付着
12	台付甕		5.6	8.3	AEGHIJ	普	黒褐色	95	
13	台付甕		5.4	(10.4)	ACGIJ	普	橙褐色	25	

第38号溝跡 (第101・106・112図)

P−42・43グリッドに位置する。北側は調査区外に続く。検出できた長さは2.70m、上幅1.50〜1.60m、下幅1.20〜1.30m、深さ35cm弱である。軸方向はN-37°-Eを指す。平面形は直線状で、南端部はやや四角張り、断面形は外側に開く逆台形または丸みを帯びた逆台形を呈する。比較的多くの土器片が、底面から浮いた状態で出土した。図化し得た土器は13点であった。

第40号溝跡出土遺物観察表 (第113図)

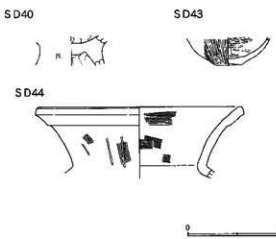
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	台付甕		3.1		AEGHIJ	普	暗褐色	80	

第43号溝跡出土遺物観察表 (第113図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坩		2.8	2.6	ACGHIJ	良	黒色	30	内面褐色

第44号溝跡出土遺物観察表 (第113図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	壺	(20.7)	7.2		ACEHIJ	普	明橙褐色	15	風化著しい



第113図 溝跡出土遺物(7)

第39号溝跡 (第101・106図)

P－43グリッドに位置する。平面形はクランク蛇行している。全体の長さは3.90m、幅0.25m前後、深さ5cm前後とごく浅い。断面形は外側に開くU字状を呈すと思われる。遺物は出土しなかった。

第40号溝跡 (第102・107・113図)

X－47グリッドに位置する。第93号土壙との新旧関係は不明である。東側はやや四角張って止まっているが、西側は浅くなることによって、壁面の立ち上がりがみえなくなった。検出できた長さは2.90m、幅1.00～1.50m、深さ20cmである。軸方向はN-66°-W、断面形は外側に開くU字状を呈すと思われる。ごく少数の土器片が出土しているが、図化し得たのは1点のみであった。

第41号溝跡 (第102・107図)

Y－47グリッドに位置する。西側は調査区外に続く。検出できた長さは2.40m、幅0.40～0.60m、深さ20cmである。軸方向はN-70°-Wで、第42・43号溝跡と平行する。平面形は直線状で、断面形は外側に開くU字状を呈する。古墳時代前期の土器がごく少数出土したが、図化し得るものはなかった。

第42号溝跡 (第102・107図)

Y－47・48グリッドに位置する。両端とも調査区外に続く。検出できた長さは9.80m、幅0.40～0.50m、深さ25cm前後である。底面には凹凸が多い。軸方向はN-72°-Wで、第41・43号溝跡と平行する。平面形は直線状で、断面形はU字状を呈する。覆土中(3層)にFA火山灰層をもつ。古墳時代前期の土器がごく少数出土したが、図化し得るものはなかった。

第43号溝跡 (第102・107・113図)

Y－47・48、Z－48グリッドに位置する。両端とも調査区外に続く。検出できた長さは10.10m、上幅1.80～3.00m、下幅1.50～2.60m、深さ40cm前後である。底面は青灰色粘土層に及んでいる。幅1.20～1.50mのテラス部分をもつ。軸方向はN-75°-Wで、第41・42号溝跡と平行する。平面形は直線状で、断面形は皿状を呈する。古墳時代前期の土器がごく少数出土したが、図化し得たのは1点であった。

第44号溝跡（第102・107・113図）

Y－47、Z－47·48グリッドに位置する。西端は調査区外に続き、東側は第10号井戸跡に切られているため、その先は不明である。また第7号井戸跡にも切られている。検出できた長さは11.10m、幅0.40～0.50m、深さ15cm前後である。やや湾曲するが概ね直線状を呈し、軸方向はN-61°-Wを指す。断面形は皿状を呈す。古墳時代前期の土器がごく少数出土したが、図化し得たのは1点であった。

第45号溝跡（第102・107図）

Z－47·48グリッドに位置する。東側は第10号井戸跡に切られているため、その先は不明である。また第7号井戸跡にも切られている。検出できた長さは7.10m、幅0.30m、深さ5cm前後である。北にやや湾曲し、断面形は皿状を呈す。遺物は出土しなかった。

第46号溝跡（第102・107図）

A・B－48·49グリッドに位置する。西端は調査区外に続く。検出できた長さは10.20m、幅0.20～0.30m、深さ5cm前後である。やや湾曲するが概ね直線状を呈し、軸方向はN-88°-Wを指しており、ほぼ東西に走る溝といえる。断面形は皿状を呈す。古墳時代前期の土器がごく少数出土したが、図化し得るものはなかった。

(d) 掘立柱建物跡

二面で検出された掘立柱建物跡は、A区4棟、B区1棟（弥生時代）の計5棟である。

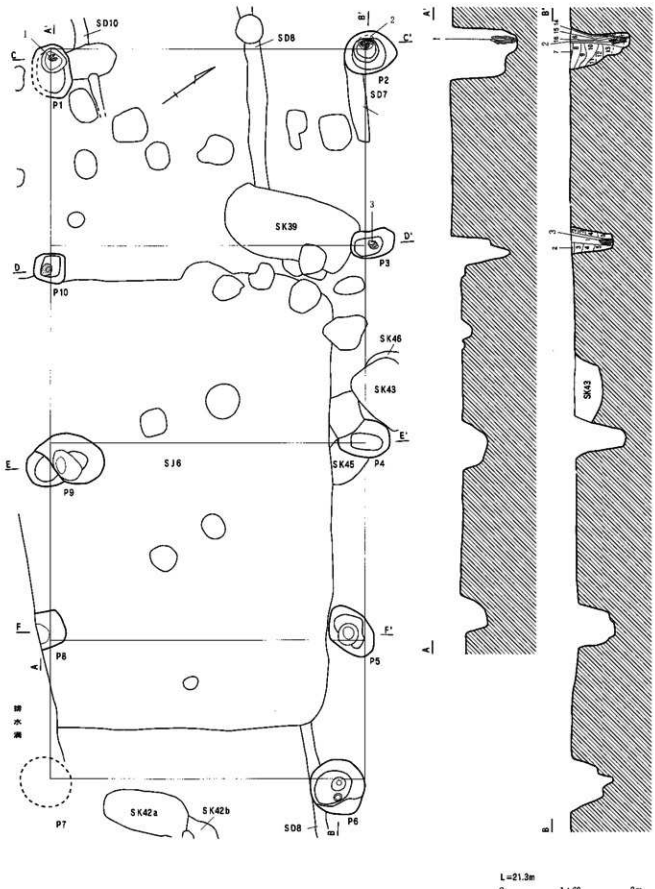
第1号掘立柱建物跡（第114·115・116図）

H－32、I－32·33グリッドに位置する。第6号住居跡・第2・3号掘立柱建物跡・第39・43・45・42号土壙・第8・10号溝跡他と重複するが、新旧関係は把握できなかった。1×4軒の側柱建物で、規模は桁行長11.15m、梁行長4.70m、床面積52.4㎡である。主軸方向はN-45°-Wを指す。

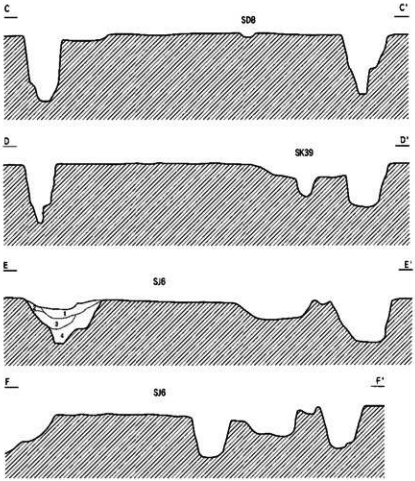
柱間は、桁行がP2－P3間で3.05m、P3－P4間で3.00m、P4－P5間で2.90m、P5－P6間で2.25m、P7－P8間で(2.55)m、P8－P9間で2.65m、P9－P10間で2.70m、P10－P1間で3.25m、梁行はP1－P2間で4.90m、P10－P3間で4.95m、P9－P4間で4.65m、P8－P5間で4.70m、P7－P6間で(4.70)mを測る。柱間は不揃いで、柱筋の通りも良くないといえる。

柱穴の掘方は、基本的に方形または長方形を意識していると考えられるが、部分的に円形を呈するもの(P6)もある。各柱穴の長径×短径×深さ(cm)・掘方の規模と平面形は、P1が、80×58×108cm・隅丸長方形、P2が、82×65×90cm・隅丸方形、P3が、40×68×93cm・隅丸長方形、P4が、58×80×75cm・隅丸方形、P5が、83×58×56cm・隅丸長方形、P6が、80×83×65cm・隅丸方形、P8が、53×(58)×48cm・隅丸長方形か、P9が、95×73×58cm・隅丸方形か、P10が、47×48×90cm・隅丸方形である。各柱穴の確認面からの深度は、比較的近いといえる。

9本の柱穴のうち3本から、柱材の最下部が遺存している例が確認された。P1では径14cm、現存長36.8cm(第116図1)、P2では径18cm、現存長24cm、(同図2)、P3では径17cm、残存長60cm(同図3)の柱材が検出されている。P1·2から出土した



第114図　第1号掘立柱建物跡(1)



B－B' ピット2・3
1 暗赤褐色土 粘土ブロック(0.5～1cm)やや多、鉄分・マンガン粒多 柱痕跡
2 黒灰色土 粘土ブロック(0.5cm)・炭化物粒子少
3 灰褐色土 粘土ブロック(0.5～1cm)やや少、炭化物粒子少
4 黄灰色土 粘土ブロック(0.5cm)・炭化物粒子少
5 灰黒色土 粘土ブロック(1～2cm)多、炭化物粒子少
6 黒灰色土 鉄分・マンガン粒多 柱痕跡
7 褐灰色土 地山ブロック(0.5～1cm)・鉄分・ブロック多
8 暗褐灰色土 地山ブロック(3～4cm)多、炭化物粒子少
9 黒褐色土 地山ブロック(1～2cm)多、炭化物粒子少
10 暗黄褐色土 地山ブロック(3～4cm)多、炭化物粒子少
11 褐灰色土 地山ブロック(1～2cm)やや多、炭化物粒子少
12 暗褐色土 地山ブロック(3～4cm)・炭化物粒子少
13 褐色土 地山ブロック(1～2cm)やや多、炭化物粒子少
14 褐灰色土 黒色土ブロック(2～3cm)少
15 暗黄褐色土 黒色土ブロック(3～4cm)やや多
16 黒褐色土 粘土ブロック(2～3cm)少

E－E' ピット9
1 明黄褐色土 地山ブロック層中に黒色土ブロック(2～3cm)多
2 黒褐色土 地山ブロック(0.5～1cm)・炭化物粒子少
3 暗青灰色土 粘土ブロック(5～7cm)多、炭化物粒子少
4 黒灰色土 青灰色粘土ブロック(2～3cm)少

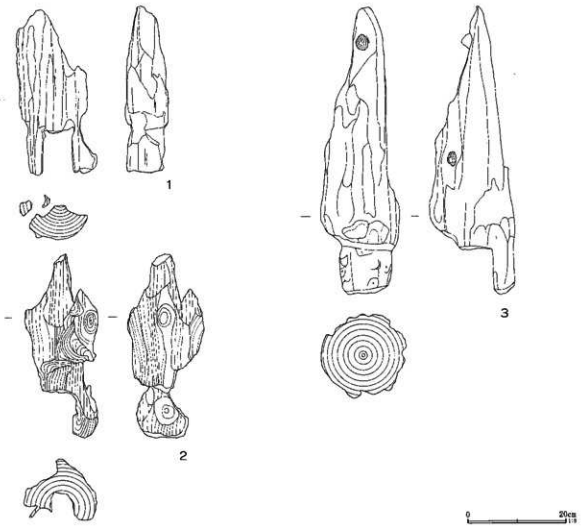
第115図 第1号掘立柱建物跡(2)

柱材の下部には、柄穴と思われる加工が施してあり、転用材と推定される。

柱穴の断面形は基本的にU字形であると思われるが、P5・6の底面に小さなピット状の窪みがみられるのは、柱材の沈降によるものと推定される。P9の南側部分が膨らんでいるのは、柱材の抜き取り痕であろうか。

柱穴埋土は、地山ブロックを多く含んだ縞状を呈し、堅固なものである。

本遺構に伴うと推定される土器などの遺物は、確認されなかった。



第116図　第1号掘立柱建物跡出土遺物

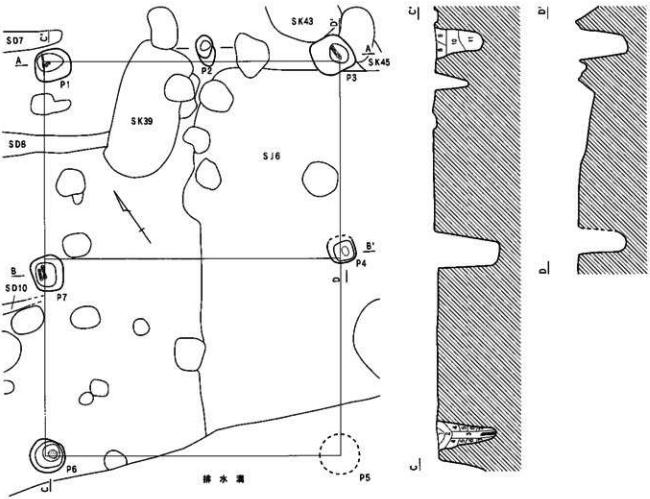
第1号掘立柱建物跡出土遺物観察表　(第116図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	柱材	残存長36.8×13.8×9.2cm							SB1−P1
2	芯材	残存長37.6×14.8×12.4cm							SB1−P2
3	柱材	残存長59.0×17.2×17.217cm							SB1−P3

第2号掘立柱建物跡（第117図）

H−32・I−32・33グリッドに位置する。第6号住居跡・第1・3号掘立柱建物跡のほか、多数の遺構と重複するが、新旧関係は把握できなかった。1×2軒の側柱建物で、規模は桁行長5.95m、梁行長4.37m、床面積26.0㎡である。主軸方向はN-34°-Eを指す。P5は、調査区外に位置しているため、検出できなかった。

柱間は、桁行がP3−P4間で2.95m、P4−P5間で(3.03)m、P6−P7間で2.80m、P7−P1間



A－A' ピット2

1 黒灰色土　粘土ブロック(0.5cm)少
2 灰黒色土　粘土ブロック(1～2cm)・炭化物粒子少
3 黒灰色土　粘土ブロック(0.5cm)・炭化物粒子少

B－B' ピット4

1 暗灰色土　粘土ブロック(1～2cm)若干
2 黒灰色土　粘土ブロック(0.5～1cm)・炭化物粒子少
3 明黄褐色土　粘土ブロック(3～4cm)多
4 黒灰色土　粘土ブロック(1～2cm)少
5 黒灰色土　粘土ブロック(3～4cm)少

C－C' ピット1・6

1 暗褐色土　炭化物粒子少、マンガン粒多
2 明黄褐色土　地山ブロック(2～3cm)多、炭化物粒子・マンガン粒少
3 黒黒色土　地山ブロック(0.5～1cm)・マンガン粒少　柱痕跡
4 明褐色土　地山ブロック(2～3cm)や中多、マンガン粒少
5 黒褐色土　地山ブロック(0.5～1cm)・マンガン粒少
6 褐色土　地山ブロック(2～3cm)・マンガン粒少
7 暗褐色土　地山ブロック(3～4cm)・マンガン粒少
8 暗灰色土　酸化鉄ブロック多、地山ブロック若干　粘土質
9 明灰色土　全体的に酸化鉄化　ガリガリ　粘土質
10 黒灰色土　酸化鉄粒多、地山ブロック若干　粘土質
11 黒灰色土　酸化鉄ブロック・地山粒少　粘土質

第117図　第2号掘立柱建物跡

で3.15m、梁行はP1－P2間で2.40m、P2－P3間で2.00m、P4－P7間で4.45m、P5－P6間で(4.37)mを測る。P8ではなく、P2を柱穴と推定した。P8であるとすれば、棟持ち柱であろうか。

柱筋の通りは比較的良いといえるが、主軸方向の柱間が不揃いである。柱穴の掘方は、基本的に方形または長方形を意識していると考えられるが、部分的に円形を呈するもの(P6)もある。柱穴の底面は、平坦なものと、U字形を呈するものとがある。

掘方の規模と、平面形は、P1が、48×55×75cm・隅丸方形、P2が、26×33×52cm・楕円形、P3が、58×60×75cm・隅丸方形、P4が、39×43×73cm・隅丸方形、P6が、50×53×93cm・円形、P7が、50×53×95cm・隅丸方形、各柱穴の確認面からの深度は、比較的近いといえる。6本の柱穴のうち2本から、柱材の最下部が遺存しているのが確認された。P3では、残存径10cm、現存長20cm、P6では残存径14cm、現存長15cmの柱材が検出されている。ともに遺存度が悪くグズグズで、図化には至らなかった。P7から出土した木材は、底面よりやや浮いた位置から、ほぼ水平の状態で検出されたものである。柱穴の断面形は基本的にU字形を呈する。

P3・6では掘方埋土が残っていたが、地山ブロックを多く含んだ縞状を呈し、堅固なものであった。

本遺構に伴うと推定される土器などの遺物は、確認されなかった。

第3号掘立柱建物跡（第118図）

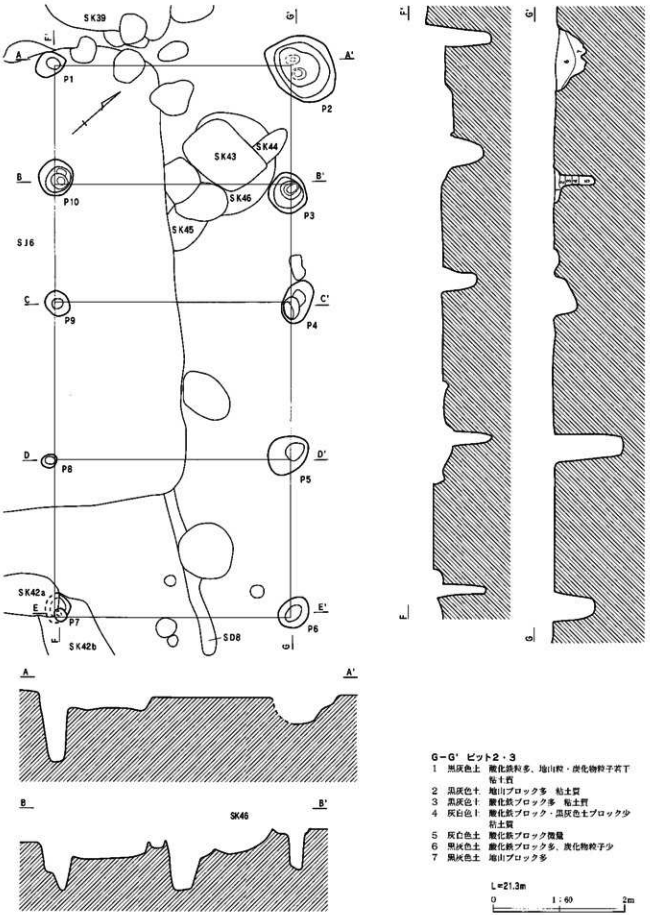
H・I－32・33グリッドに位置する。第6号住居跡・第1・2号掘立柱建物跡のほか、多数の遺構と重複するが、新旧関係は把握できなかった。1×4軒の側柱建物で、規模は桁行長8.45m、梁行長3.55m、床面積30.0㎡である。主軸方向はN-49°-Wを指す。

柱間は、桁行がP2－P3間で1.95m、P3－P4間で1.95m、P4－P5間で2.15m、P5－P6間で2.40m、P7－P8間で2.30m、P8－P9間で2.35m、P9－P10間で1.85m、P10－P1間で1.90m、梁行はP1－P2間で3.80m、P3－P10間で3.55m、P4－P9間で3.55m、P5－P8間で3.70m、P6－P7間で3.57mを測る。

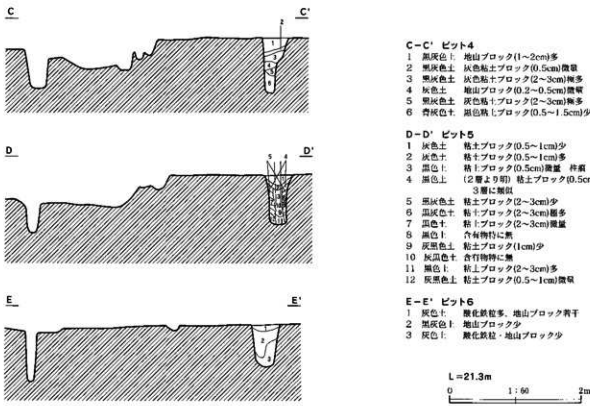
南側の桁行は、柱筋が良く通っており、柱穴の深度も揃っているが、掘方の規模がきわめて小さいといえる。北側の桁行は、掘方の径や深度が不揃いではあるが、柱筋は比較的良く通っているといえる。柱穴の掘方も、南側に比べて規模が大きい。P2では、柱穴が2箇所存在していた。柱穴の掘方は、基本的に平面形は円形または楕円形、断面形はU字形穴を呈するものが多い。

掘方の規模と、平面形は、P1が、38×48×100cm・楕円形、P2が、95×115×47cm・隅丸長方形、P3が、55×58×60cm・楕円形、P4が、40×65×52cm・隅丸長方形、P6が、41×55×60cm・楕円形、P7が、(40)×(45)×80cm・楕円形、P8が、20×26×56cm・楕円形、P9が、35×40×56cm・楕円形、P10が、50×53×70cm・楕円形、径の小さな柱穴も、比較的深度が大きいといえる。P5では掘方埋土が残っていたが、地山ブロックを多く含んだ縞状を呈し、堅固なものであった。3層は、柱痕である。本遺構では、柱材はまったく検出されず、P5のように掘方埋土の残っている柱穴はなかった。

本遺構に伴うと推定される土器などの遺物は、確認されなかった。



第118図　第3号掘立柱建物跡(1)



第119図　第3号掘立柱建物跡(2)

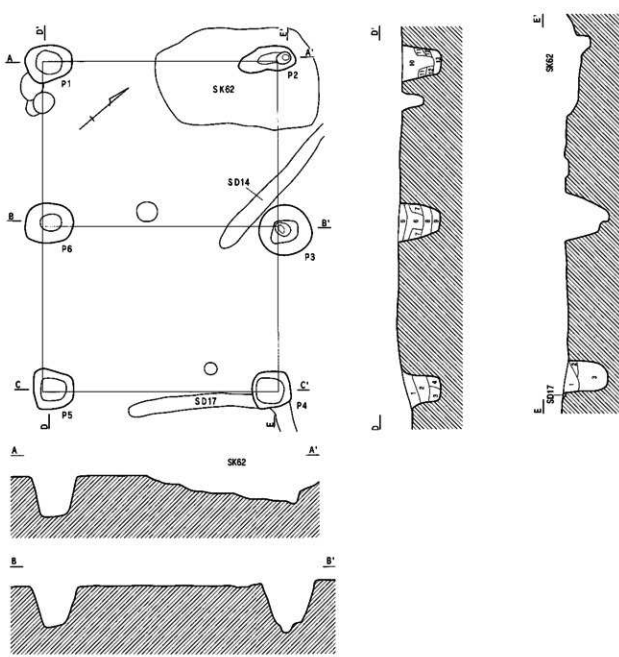
第4号掘立柱建物跡（第120図）

Ⅰ－34グリッドに位置する。第62号土壙に切られていると思われる。第14・17号溝跡やピットと重複するが、新旧関係は捉えられなかった。1×2軒の側柱建物で、規模は桁行長5.00m、梁行長3.50m、床面積17.5㎡である。主軸方向はN-39°-Wを指す。

柱間は、桁行がP2－P3間で2.60m、P3－P4間で2.40m、P5－P6間で2.60m、P6－P1間で2.40m、梁行はP1－P2間で3.60m、P3－P6間で3.60m、P4－P5間で3.50mを測る。

柱筋は比較的良く通り、柱穴の深度も近い。柱穴の掘方は、基本的に平面形は隅丸方形または楕円形、断面形はU字形穴を呈するものと、底面が平坦に近いものとがある。

掘方の規模と、平面形は、P1が、55×75×56cm・楕円形、P2が、37×(60)×36cm・隅丸長方形、P3が、80×80×75cm・円形、P4が、52×60×66cm・隅丸方形、P5が、60×62×62cm・隅丸方形、P6が、60×74×60cm・楕円形を測る。P2は、第62号土壙に切られているため、平面形は原形を失っていると思われる。P3の底面が、径15cm程のピット状に窪んでいるのは、柱材の沈降の結果と考えられる。本遺構では、柱材はまったく検出されなかった。本遺構に伴うと推定される土器などの遺物は、確認されなかった。



D－D' ピット1・5・6
1 明灰色土 酸化鉄ブロック・地山ブロック・地山粒多 粘土質
2 黒灰色土 地山大ブロック多 粘土質
3 黒灰色土 地山ブロック多 粘土質
4 灰白色土 黒灰色土ブロック多 粘土質
5 黒灰色土 酸化鉄粒多、地山ブロック若干 粘土質
6 黒灰色土 酸化鉄粒・地山粒多 粘土質
7 灰白色土 酸化鉄粒・黒灰色土粒多 粘土質
8 黒灰色土 地山ブロック少 粘土質
9 灰色土 黒灰色土ブロック多 粘土質
10 黒灰色土 地山粒多、酸化鉄ブロック少 粘土質
11 黒灰色土 地山ブロック多 粘土質
12 灰白色土 黒灰色土粒多 粘土質
13 灰白色土 酸化鉄粒多 粘土質

E－E' ピット4
1 灰灰色土 酸化鉄粒多、地山ブロック少 粘土質
2 灰白色土 酸化鉄粒・黒灰色土粒多 粘土質
3 黒灰色土 地山ブロック少 粘土質

第120図 第4号掘立柱建物跡

(e) 畝状遺構

H・I－30～32グリッドには、溝跡やピットが多数みられる。しかしそれらとは別に、何条かの畝状遺構が検出された。後述するように、畝状遺構は小さな窪みが直線状に並んだ状態であり、これは鋤や鍬などによる耕作の結果と考えられる。これらの遺構を、溝跡やピットとせず、畝状遺構とした所以である。

これらの畝状遺構は、いずれも北側は調査区外に続いているため、その分布範囲は捉えることができない。現状での分布範囲は、東西約30m、南北約10mである。この辺りでは溝やピットが数多くみられ、どれが畝の痕跡であるかを特定することは困難であるが、およそ3つのグループが認められた。

記述の便宜上、西から I 区・II 区・III 区と呼称していきたい。また、畝1条ごとに番号を振ることとした。

I 区　畝1～畝6（第121図）

H－32・33グリッドに位置する。畝状遺構が検出された範囲は、東西約3m、南北約6mである。東に位置する、第4号住居跡の部分には畝状遺構が認められないのは、住居跡に切られているためであろうか。

畝の幅は概ね30cm程であるが、最小は24cm、最大60cmであった。深さは概ね10cm程であるが、最小5cm、最大20cmであった。畝間(畝の芯－芯、以下同じ)は70cm前後で、比較的等間隔といえる。畝3の底面には凹凸が多くみられるが、それ以外の畝は比較的平坦である。畝の上層は、いずれも自然堆積であると思われる。

畝と思われる遺構の数は少ないものの、畝の軸方向は3種類観察される。具体的にはN-11°-W(畝1)、N-30°-W(畝2・3・5)、N-28°-E(畝4)であり、これは時期差を示すものと推定される。この狭い範囲内で、3種類の軸が混在しており、最大58°の違いをもつ。古墳時代の土器片が少数出土しているが、図化し得るものはなかった。

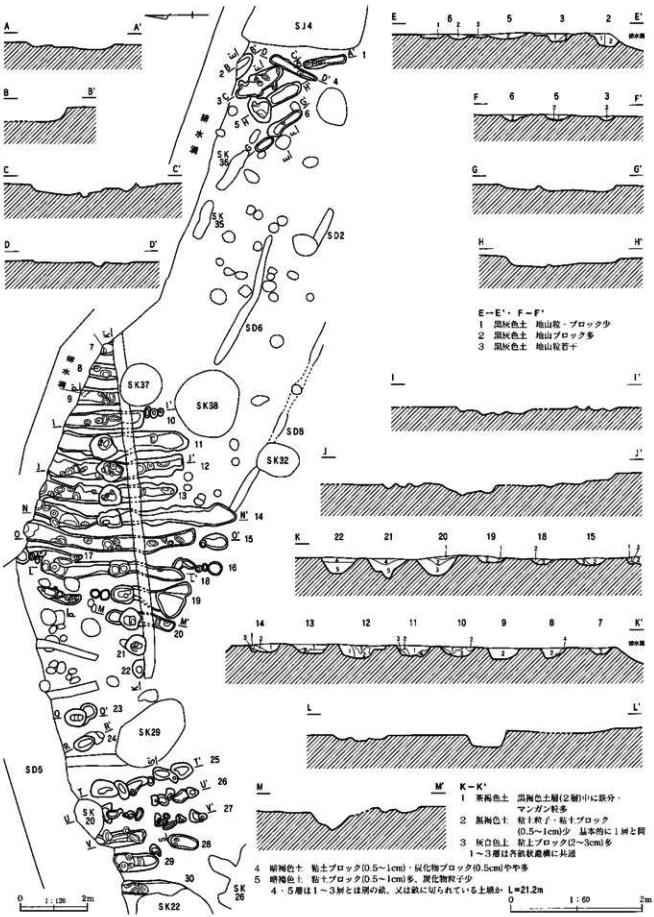
II 区　畝7～畝22（第121～123図）

H－31・32グリッドに位置する。畝状遺構が検出された範囲は、東西約10m、南北約8mである。西側は畝が途切れているが、東側は調査区外に続くと思われる。この範囲内で16条の畝が検出された。

畝の幅は概ね50cm程であるが、最小は24cm、最大は68cmであった。深さは概ね15cm程であるが、最小は8cm、最大は28cmであった。畝間は70～80cm程で、比較的等間隔であるが、東側が西側に比べやや狭い。

各々の畝には窪みが数多くあり、その連続が畝としての形態をなしているといえる。この窪みは、I区の畝に比べて明瞭である。I・III区の畝に比べ、この窪みが途切れることなく溝状に続いている。但し、これは畝そのものの深度の違いによる可能性が考えられる。畝の土層は、いずれも自然堆積であると思われる。

畝の軸方向は2種類観察される。具体的にはN-33°-E(畝8～18)、N-11°-E(畝19・20)である。II区として1つの範囲に括ったが、軸方向を異にする両者は重複していない。しかし、畝19・20以西には畝がみられず、この軸方向をもつのは2条のみということになる。この点について1つの可能性として、畝7～18の位置にも、畝18・19と同じ軸方向の畝が存在していたが、新たに耕作する際に8°程東に振れた結果とも推定される。畝12～18を観察すると、北側がやや東に振れている。これは、畝19・20の軸方向で耕作されていた畝の、痕跡との可能性もある。出土した遺物の内、図化し得たのは3点である。その内、特定できたのは2点であった。


SJ4
SK36
SK35
SD2
SD6
SK37
SK38
SD8
SK32
SK29
SD5
SK20
SK22
SK26
E－E'・F－F'
1 黒灰色土 地山粒・ブロック少
2 黒灰色土 地山ブロック多
3 黒灰色土 地山粒若干
K－K'
1 茶褐色土 黒褐色土層(2層)中に鉄分・マンガン粒多
2 黒褐色土 粘土粒子・粘土ブロック(0.5～1cm)少 基本的に1層と同
3 灰白色土 粘土ブロック(2～3cm)多
1～3層は各畝状遺構に共通
4 暗褐色土 粘土ブロック(0.5～1cm)・炭化物ブロック(0.5cm)やや多
5 暗褐色土 粘土ブロック(0.5～1cm)多、炭化物粒子少
4・5層は1～3層とは別の畝、又は畝に切られている土壌か L=21.2m
0 1:120 2m
0 1:60 2m

第121図 畝状遺構(1)

Ⅲ区　畝23～畝30（第121・122図）

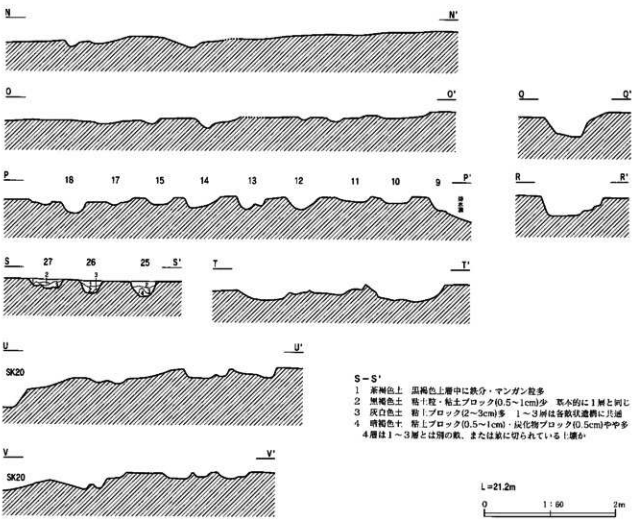
H－30・31グリッドに位置する。畝状遺構が検出されたのは、東西７m、南北５m程の範囲で、畝と判断したものは８条である。第５号溝跡に切られていると思われる。

畝の幅は概ね40cm程であるが、最小は30cm、最大48cmであった。深さは概ね15cm程であるが、最小10cm、最大20cmであった。畝間は80cm前後であるが、間隔は不揃いである。ピット状の窪みの連続であるが、途切れる箇所も多い。この点については、畝の深度が浅いためと推定される。

Ⅰ区の畝は、途中途切れながらも調査区外に続くと推定されることから、畝の長さを考える参考とはならない。Ⅱ区では、調査区内に収まっている部分だけでも、６mを超えるものがある。

確認面のレベルは、第５号溝跡を挟んで、ほぼ同レベルであるが、Ⅲ区の畝の場合、第５号溝跡の北側では確認されていない。Ⅱ区の畝は10～20cmの深さがあり、仮に第５号溝跡の、北岸ギリギリまで畝が続いていたとしても、長さは5.40mという規模となる。畝の土層は、いずれも自然堆積であると思われる。

畝と思われる遺構の数は少ないものの、畝の軸方向は２種類観察される。具体的にはN-22°-W（畝25～27）、N-4°-W(畝29・30)である。また畝としての遺存度が悪く、短いため軸方向を計測するには無理があるが、畝28はN-22°-Eを指す。なお、畝23・24は、それぞれ２本のピットが重複したような

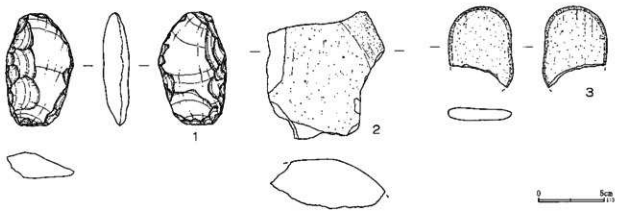


第122図　畝状遺構(2)

状態であるため、軸方向の参考とはならない。

畝25～27と畝29・30は、18° 軸方向を異にしているが、II区の場合と同様に畝同士は重複していない。

複数の軸方向がみられるのは、前後関係は不明であるものの、時期差を示すものと推定される。古墳時代の土器片が少数出土しているが、図化し得るものはなかった。



第123図　A区畝状遺構出土遺物

畝状遺構跡出土遺物観察表　(第123図)

番号	器種	法量・残存率	備考
1	横剥	残存長8.55×幅5.1×厚2.0cm　重量97.4g 石質ホルンフェルス　100%	
2	磨石	残存長9.7×幅8.95×厚4.3cm　重量349.1g　石質砂岩　破片	
3	砥石	残存長8.1×幅4.85×厚1.1cm　重量41.7g　石質砂岩　60%	

(f) ピット

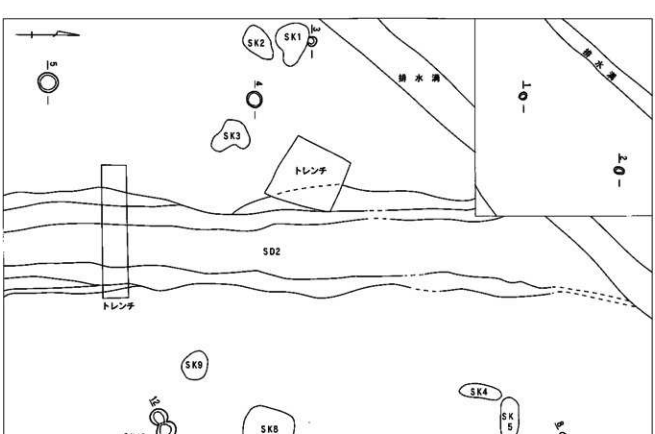
ここでピットとして扱ったのは、土壙として扱わず、掘立柱建物跡や柵列の柱穴となった遺構を除いたものである。土壙との区分も明確なものではなく、概ね平面規模が50×50cm以下の小穴をピットとし

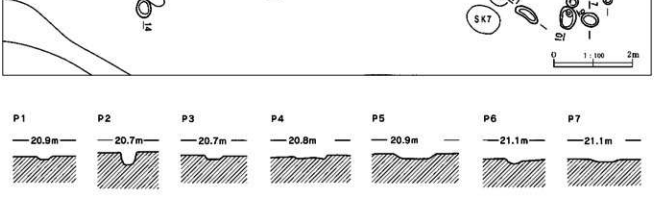
第5表　ピット一覧表(1)

番号	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	番号	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	番号	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	番号	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)
1	25	18	4	21	25	18	7	41	45	28	8	61	35	30	7
2	26	18	16	22	30	25	11	42	58	35	8	62	28	22	14
3	25		3	23	20		9	43	22		10	63	35	32	8
4	42	40	4	24	26	22	25	44	50	31	10	64	32	40	7
5	50		6	25	25	22	15	45	50	35	12	65	65	25	8
6	25	20	6	26	18		7	46	55	45	7	66	30	25	9
7	45	35	2	27	25	18	17	47	28		15	67	20		8
8	45	28	4	28	18		11	48	25	23	10	68	35	18	56
9	30		5	29	20		16	49	35	35	6	69	32	25	15
10	55	40	5	30	25	21	10	50	35	28	11	70	20		15
11	65	25	8	31	28		11	51	25	20	16	71	35		18
12	45	40	5	32	30		14	52	55	40	10	72	28		10
13	55	45	5	33	22	18	23	53	35	25	20	73	20	20	8
14	45	38	5	34	32	22	23	54	35	15	25	74	42	38	10
15	35		4	35	42	20	8	55	55	40	16	75	32		9
16	35		9	36	45	40	8	56	35	22	17	76	35		14
17	45		33	37	22	20	12	57	30	10		77	30	18	21
18	40	25	7	38	35	25	10	58	40	32	11	78	22	20	16
19	30	25	12	39	50	35	10	59	25		16	79	35	25	22
20	45		10	40	32	25	36	60	30	35	6	80	18		6

第6表　ピット一覧表(2)

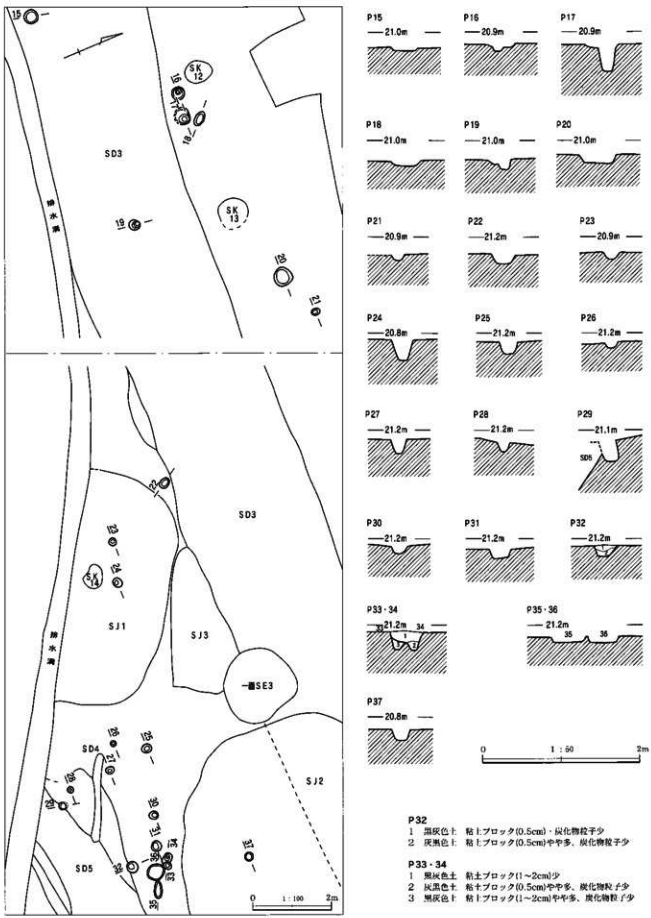
番号	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	番号	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	番号	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	番号	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)
81	32	18	12	144	70	50	4	207	30	35	14	276	40	25	12
82	25	16	6	145	20	15	25	208	25	15	6	277	25	15	20
83	16	30	4	146	20		23	209	35	30	36	278	25	15	15
84	20		14	147	55	35	43	210	30		12	279	25	20	24
85	45	38	24	148	45	40	32	211	70	40	16	280	28		20
86	20	20	8	149	45	35	27	212	30		26	281	30	28	6
87	20		10	150	30	25	14	213	20		8	282	28	30	8
88	55	(45)	14	151	20		6	214	30	25	14	283	28	25	14
89	25	12	12	152	40	25	17	215	30		10	284	30	22	16
90	25	20	5	153	28	30	26	216	20	15	6	285	20		26
91	45	25	12	154	40	35	6	217	30	25	11	286	15		19
92	50	40	18	155	28	25	17	218	40	20	8	287	25		26
93	22	15	14	156	28		8	219	35	25	10	288	28		16
94	60	50	10	157	25		13	220	43	38	6	289	25		20
95	25	15	4	158	30	28	28	221	38	28	26	290	32	22	29
96	25	15	5	159	30	28	12	222	25		8	291	28	25	19
97	20		6	160	58	35	8	223	66	20	4	292	35		14
98	40	22	4	161	28	20	10	224	42	35	22	293	28	25	15
99	50	40	22	162	30		8	225	20		6	294	18	15	6
100	20		4	163	48	20	5	226	38	30	5	295	20		7
101	25		6	164	30	20	3	227	20	18	6	296	25	10	6
102	25	15	12	165	50	40	8	228	30		6	297	20	15	12
103	30	17	8	166	45	35	25	229	60	20	8	298	20		6
104	20		3	167	25	25	10	230	20	15	12	299	28	18	14
105	25		6	168	45		8	231	25		16	300	35	20	12
106	35	27	12	169	35	30	50	232	32		18	301	40	22	6
107	55	30	12	170	18	15	10	233	50	30	10	302	40	20	18
108	40		2	171	20	15	5	234	50	32	14	303	35	20	16
109	48	40	6	172	28	15	3	235	30		14	304	20		13
110	35		6	173	45		26	236	55	45	13	305	39	30	18
111	35	25	8	174	50	42	50	237	30		20	306	50	15	5
112	10		6	175	32	15	10	238	35	20	25	307	40	25	22
113	35	20	3	176	40	20	18	239	30		29	308	28	18	9
114	21		10	177	55	45	14	240	30		10	309	35	21	4
115	30	25	6	178	40	25	12	241	30	20	12	310	25		6
116	45	30	7	179	40	15	6	242	32	22	38	311	20		6
117	20		8	180	75	25	13	243	25		20	312	40	32	13
118	28	20	6	181	70	50	10	244	40		40	313	28	21	14
119	35	25	6	182	38	20	6	245	25		13	314	30		9
120	25		7	183	42		70	246	25		17	315	30	25	6
121	20	15	17	184	25	20	29	247	21		28	316	45	38	6
122	50	40	10	185	20		10	248	28		52	317	42	38	19
123	40	30	40	186	25	20	12	250	55	40	10	318	38	25	16
124	35	30	8	187	15		12	251	20		12	319	45	40	16
125	50	40	47	188	31	25	50	252	15		16	320	68	40	18
126	45	38	22	189	15		12	258	51	28	50	321	25		12
127	40	35	40	190	25		50	259	45	38	58	322	50	50	18
128	50	40	28	191	20		35	260	30	28	22	323	25	20	15
129	20		8	192	28	25	25	261	60	35	10	324	40	35	22
130	30	25	12	193	30		3	262	50	28	10	325	25		8
131	65	55	2	194	22		26	263	35	20	22	326	28	25	25
132	40	30	7	195	45		10	264	25	19	4	327	25	20	13
133	45	40	4	196	20	15	4	265	25	15	22	328	30	25	15
134	45	38	7	197	25		14	266	20	20	10	329	35	30	11
135	25		8	198	25	20	11	267	25		18	330	35	30	12
136	35	23	6	199	30	21	4	268	35	20	10	331	38	28	13
137	25		6	200	45	35	6	269	28	25	23	332	32	22	8
138	35		8	201	20		10	270	18	15	14	333	48	40	8
139	25		6	202	30		58	271	25	20	12	334	50	45	9
140	35	25	30	203	40	30	54	272	25	18	20	335	41		10
141	22	17	10	204	55	38	4	273	25		16	336	35		30
142	15		10	205	42		9	274	35		14	337	40	35	22
143	25	19	12	206	48		56	275	25	25	15				



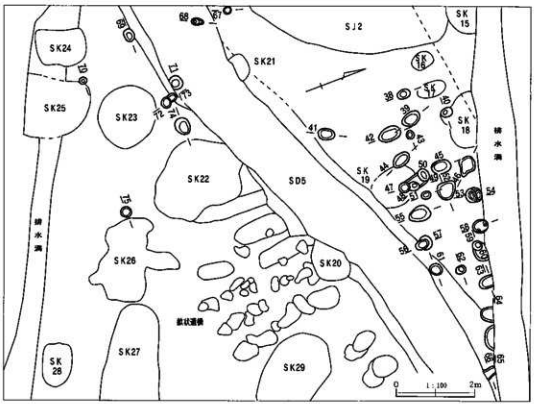


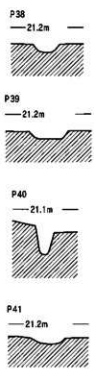
第124図　ピット(1)

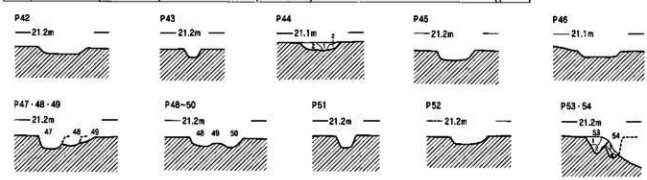
た。この中には、柱材や明瞭な柱痕が認められるものもあり、掘立柱建物跡や柵列の存在を想定して、周辺のピットとの位置関係や並びを検討した。しかし結果的に、そのどちらとも結論づけられなかった例も少なからずあった。検出されたピットは、A区が238本、B区が49本、C区が44本の計331本である。

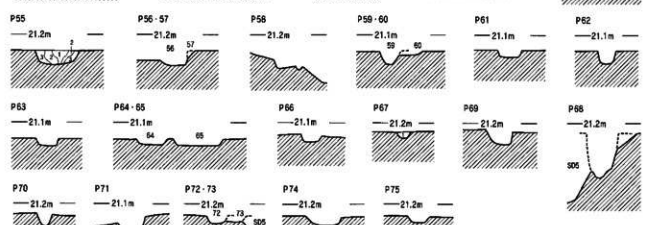

SD3
SK 12
SK 13
SD3
SJ1
SJ3
SE3
SD4
SJ2
SD5
0 1:100 2m
P15
21.0m
P16
20.9m
P17
20.9m
P18
21.0m
P19
21.0m
P20
21.0m
P21
20.9m
P22
21.2m
P23
20.9m
P24
20.8m
P25
21.2m
P26
21.2m
P27
21.2m
P28
21.2m
P29
21.1m
SD6
P30
21.2m
P31
21.2m
P32
21.2m
P33・34
21.2m
34
P35・36
21.2m
35
36
P37
20.8m
0 1:50 2m
P32
1 黒灰色土 粘土ブロック(0.5cm)・炭化物粒子少
2 灰黒色土 粘土ブロック(0.5cm)やや多、炭化物粒子少
P33・34
1 黒灰色土 粘土ブロック(1～2cm)少
2 灰黒色土 粘土ブロック(0.5cm)やや多、炭化物粒子少
3 黒灰色土 粘土ブロック(1～2cm)やや多、炭化物粒子少

第125図 ピット(2)









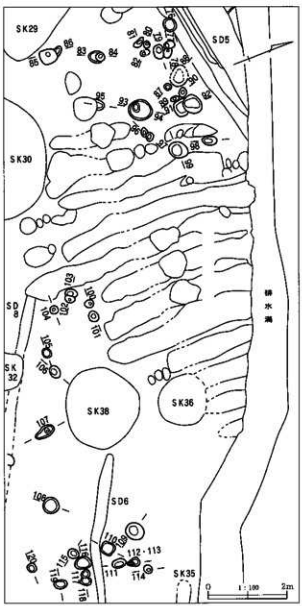
P44
1 黒褐色土　地山ブロック(0.5~1cm)・炭化物粒子少
2 暗褐色土　地山ブロック(2~3cm)多、炭化物粒子少

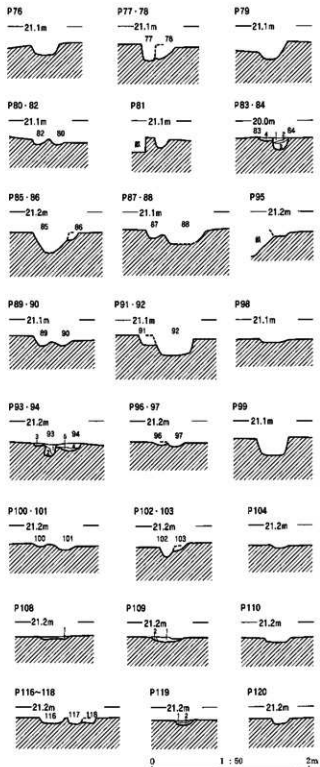
P53・54
1 茶灰色土　2層の土が成分で変色した層
2 灰色土　地山ブロック少　砂質
3 灰色土　炭化粒粒多　粘土質
4 灰色土　地山ブロック多　粘土質

P55
1 茶褐色土　鉄分多
2 黒褐色土　地山ブロック(1~2cm)・炭化物粒子少
3 茶褐色土　鉄分多

P67
1 黒灰色土　粘土ブロック(0.5cm)少、鉄分多

第126図　ピット(3)





P83・84
1 黒褐色土　鉄分多
2 黒褐色土　地山ブロック(0.5cm)・炭化物粒子少
3 暗褐色土　地山ブロック(1~2cm)やや多、炭化物粒子少
4 暗褐色土　地山ブロック(1~2cm)多

P93・94
1 黒褐色土　地山ブロック(0.5~1cm)やや多
2 暗褐色土　地山ブロック(1~2cm)少
3 暗褐色土　地山ブロック(0.5~1cm)少
4 黒褐色土　地山ブロック(0.5cm)・炭化物粒子少
5 黒褐色土　地山ブロック(1~2cm)・炭化物粒子少

P106
1 黒灰色土　地山ブロック若干　粘土質
2 灰白色土　黒灰色土粒少　粘土質

P108
1 灰色土　地山粒若干　粘土質

P109
1 灰色土　地山ブロック若干　粘土質
2 灰色土　炭化物粒子微量　粘土質

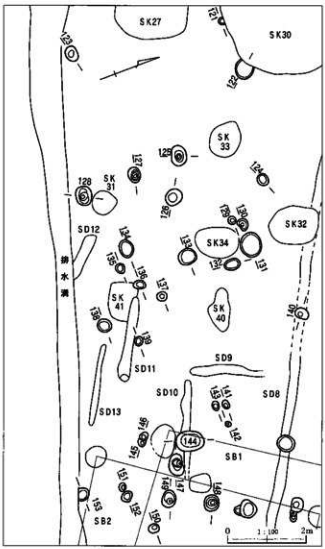
P111~113
1 灰色土　黒灰色ブロック若干　粘土質
2 灰色土　鉄化粒粒多　粘土質
3 黒灰色土　鉄化鉄ブロック多　粘土質
4 灰色土　土器片多　粘土質
5 灰色土　鉄化鉄粒若干　粘土質

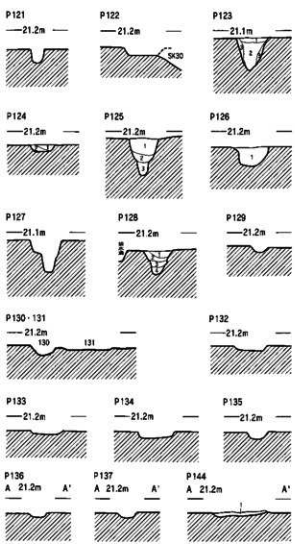
P114
1 黒褐色土　地山ブロック(0.5cm)少　粘土質
2 暗褐色土　地山ブロック(0.5cm)やや多　粘土質

P115
1 灰色土　地山ブロック多　粘土質

P119
1 灰色土　地山ブロック若干　粘土質
2 灰色土　地山ブロック多　粘土質

第127図　ピット(4)





P123
1 暗灰褐色土　地山ブロック多
2 暗黒褐色土　地山粒少　粒径細か
3 灰褐色土　地山ブロック多

P124
1 黒灰色土　酸化鉄粒多　粘土質
2 黒灰色土　地山ブロック多　粘土質

P125
1 黒灰色土　酸化鉄ブロック・地山ブロック多
2 黒灰色土　地山ブロック(1層より大)多
3 黒灰色土　地山ブロック若干

P126
1 黒灰色土　地山ブロック・地山粒多、炭化物粒子少

P128
1 黒灰色土　地山ブロック・地山粒多
2 黒灰色土　地山粒少
3 黒灰色土　地山ブロック・地山粒多
4 黒灰色土　地山粒少

P140
1 暗灰色土　地山ブロック多　粘土質

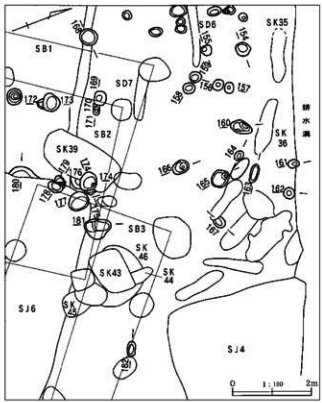
P144
1 暗灰色土　地山粒多

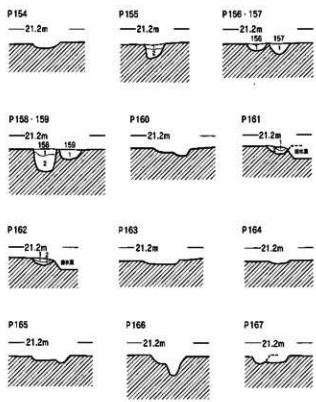
P147
1 暗灰色土　地山ブロック多
2 黒灰色土　酸化鉄ブロック多、地山粒少
3 黒灰色土　地山ブロック・酸化鉄ブロック多
4 黒灰色土　地山粒若干
5 黒灰色土　地山ブロック多、酸化鉄ブロック若干

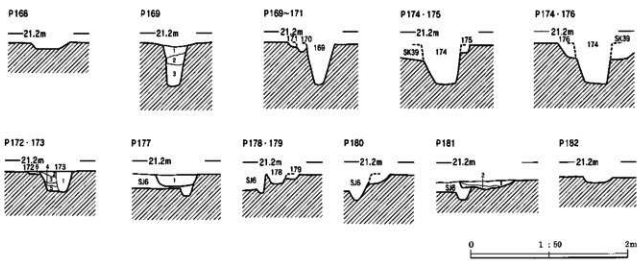
P148
1 黒灰色土　地山ブロック多
2 黒灰色土　酸化鉄粒・地山粒多
3 黒灰色土　酸化鉄粒多
4 灰白色土　黒灰色土粒少

P149
1 黒灰色土　地山粒若干、炭化物粒子微量　粒径細か
2 黒灰色土　地山粒多、炭化物粒子若干
3 黒灰色土　地山粒若干
4 黒灰色土　地山ブロック多

第128図　ピット(5)







P155
1 灰色土　酸化鉄粒多、地山粒若干　粘土質
2 灰色土　酸化鉄ブロック若干　粘土質

P156・157
1 灰色土　地山ブロック多　粘土質

P158・159
1 灰色土　酸化鉄ブロック・地山粒多　粘土質
2 黒灰色土　地山ブロック少　粘土質

P161
1 灰色土　酸化鉄粒若干　粘土質
2 灰色土　地山ブロック多　粘土質

P162
1 暗灰色土　酸化鉄粒多　粘土質
2 灰色土　地山粒若干　粘土

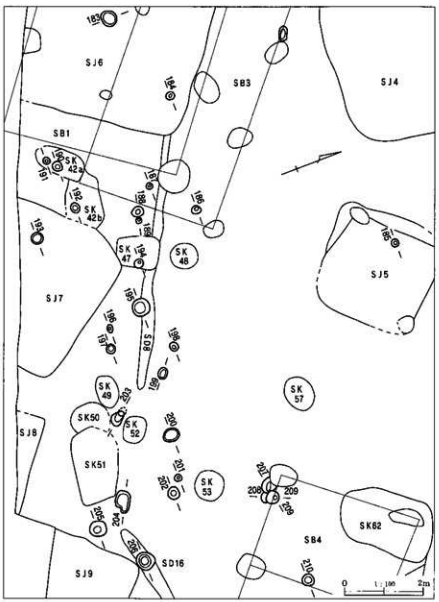
P169
1 暗灰色土　地山粒・地山ブロック少　粘土質
2 黄褐色土　暗灰色土ブロック少　粘土質
3 灰色土　酸化鉄粒多　粘土質

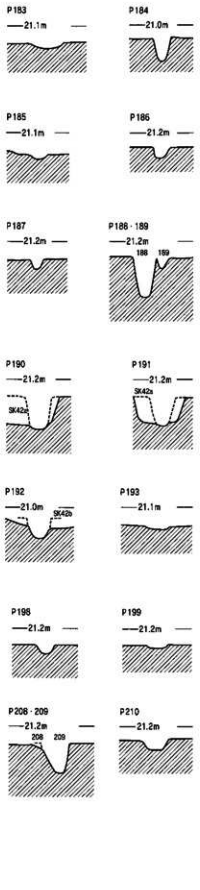
P172・173
1 黒灰色土　粘土ブロック(0.5~2cm)少　柱痕跡か
2 明褐色土　粘土ブロック(0.5~1cm)やや多
3 暗黄褐色土　粘土ブロック(2~3cm)多
4 暗褐色土　粘土ブロック(1~2cm)やや多
5 暗褐色土　粘土ブロック(0.5~1cm)やや多
6 暗褐色土　粘土ブロック(0.5cm)少

P177
1 黒灰色土　鉄分・マンガン粒多、粘土ブロック少

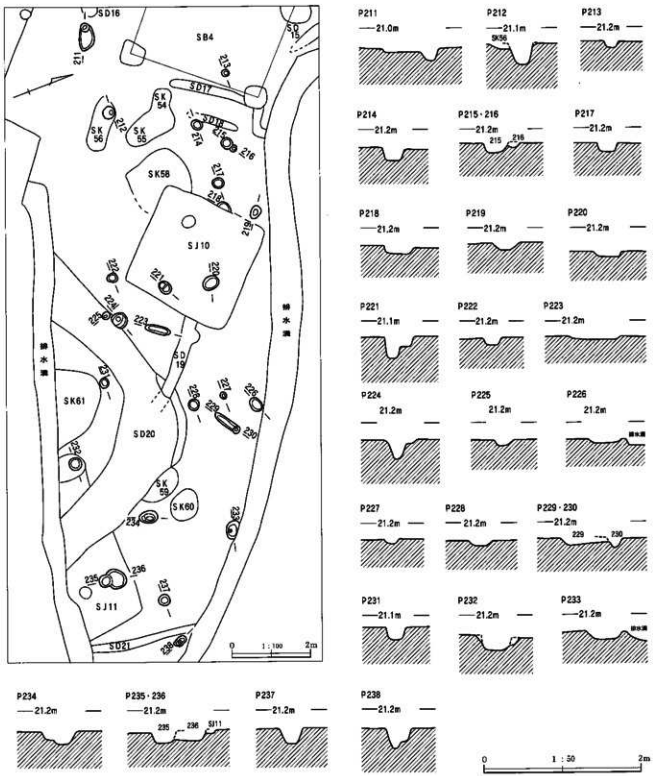
P181
1 黒灰色土　酸化鉄粒・炭化物粒子少　粘土質
2 黒灰色土　地山ブロック多　粘土質

第129図　ピット(6)

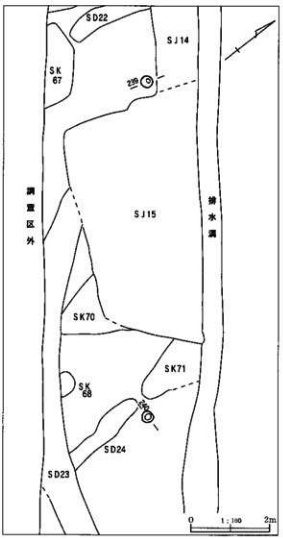

SJ6
SB3
SJ4
SB1
SK 42a
SK 42b
SK 47
SK 48
SJ5
SJ7
SK 49
SK50
SK 52
SK 57
SJ8
SK51
SK 53
SK62
SB4
SJ9
SD16
0 1:100 2m

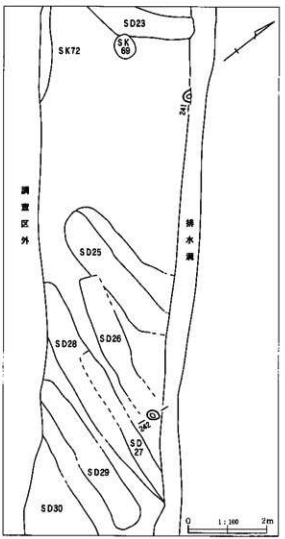

P183
21.1m
P184
21.0m
P185
21.1m
P186
21.2m
P187
21.2m
P188・189
21.2m
P190
21.2m
SK42a
P191
21.2m
SK42a
P192
21.0m
SK42b
P193
21.1m
P194
21.2m
SK42a
P195
21.2m
SD9
P196
21.2m
P197
21.2m
P198
21.2m
P199
21.2m
P202
21.2m
P203
21.2m
P206
21.2m
P207・209
21.2m
207
209
P208・209
21.2m
208
209
P210
21.2m
P200
21.2m
P201
21.2m
P204
21.2m
P205
21.2m
0 1:50 2m

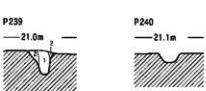
第130図　ピット(7)

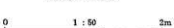

SD16
SB4
SD17
SK54
SK56
SK55
SD18
SK58
SJ10
SK61
SD20
SK59
SK60
SJ11
SD21
P211
P212
P213
P214
P215・216
P217
P218
P219
P220
P221
P222
P223
P224
P225
P226
P227
P228
P229・230
P231
P232
P233
P234
P235・236
P237
P238
0 1:100 2m
0 1:50 2m

第131図　ピット(8)





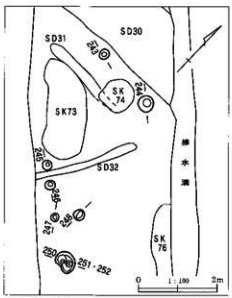


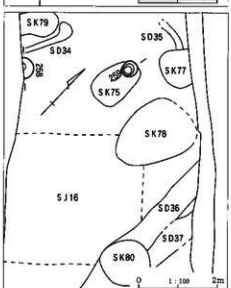


P239
1　黒灰褐色土　地山ブロック・炭化物粒子・マンガン粒少、
　　地山粒多　柱痕跡か
2　明灰褐色土　地山粒多、地山ブロック微量、マンガン粒少

P242
1　明褐色土　地山ブロック・鉄分・マンガン粒多、
　　炭化物粒子微量
2　黒褐色土　鉄分・マンガン粒多、地山ブロック少
3　黒褐色土　地山ブロック・鉄分・マンガン粒少
4　明褐色土　地山ブロック・鉄分・マンガン粒少
5　黒褐色土　地山ブロック・鉄分・マンガン粒微量

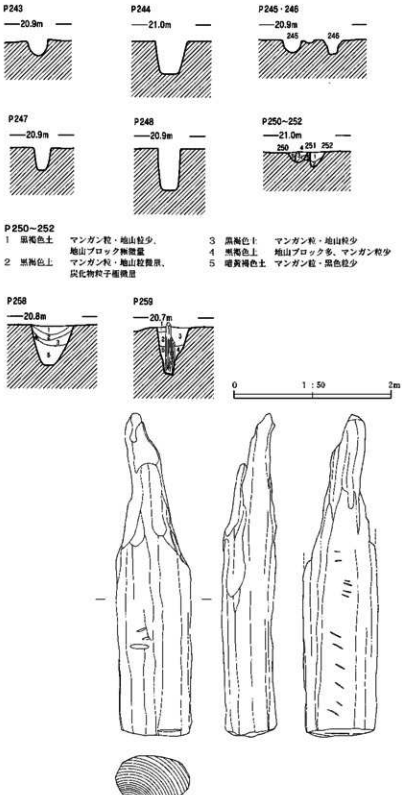
第132図　ピット(9)





P258
1 褐色土　地山ブロック・鉄分少
マンガン粒・炭化物ブロック微量
2 褐色土　地山ブロック・鉄分・マンガン粒多
3 暗褐色土　地山ブロック・鉄分・マンガン粒多
4 明褐色土　地山ブロック少、鉄分・
マンガン粒微量
5 黒褐色土　地山ブロック・鉄分・
マンガン粒微量

P259
1 黒褐色土　地山ブロック多、マンガン粒微量
2 黒褐色土　地山ブロック多
3 黒褐色土　地山ブロック・地山粒多、
マンガン粒微量
4 黒褐色土　地山ブロック・地山粒多、
炭化物粒子・マンガン粒少
5 黒褐色土　地山ブロック・炭化物粒子少、
マンガン粒微量

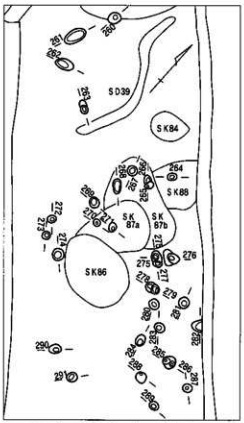


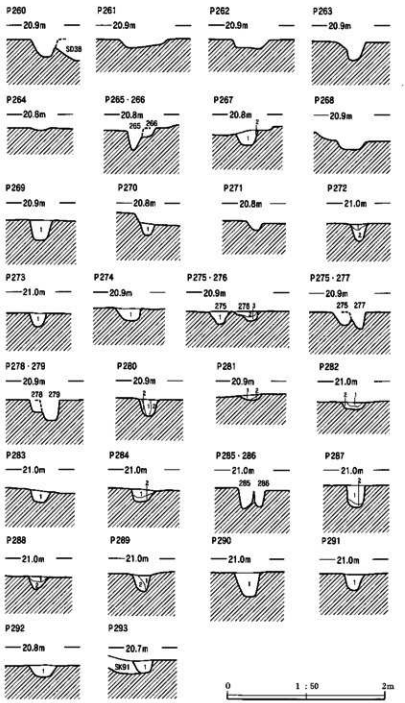
第134図　ピット259出土遺物

第133図　ピット(10)

ピット259出土遺物観察表　(第134図)

番号	種　類	法　量	備　考
1	柱材	現在長66.0×幅15.0×厚10.4cm	工具痕か





P267
1 黒灰色土　粘土ブロック少
2 灰色土　粘土ブロック多

P269
1 黒灰色土　地山ブロック少

P270
1 黒灰色土　地山ブロック少

P272
1 黒褐色土　地山粒・マンガン粒少、炭化物粒子微量
2 暗灰褐色土　地山粒多、マンガン粒・炭化物粒子少

P273
1 暗褐色土　地山粒多、炭化物粒子・マンガン粒少

P274
1 明褐色土　炭化物粒子・マンガン粒・黒色粒少、地山粒多、地山ブロック微量

P275・276
1 黒褐色土　地山粒・マンガン粒多
2 黒褐色土　地山粒少
3 暗黄褐色土　地山ブロック多

P280
1 暗褐色土　地山粒微量
2 明褐色土　地山粒多、炭化物粒子少

P281
1 暗褐色土　地山粒多
2 暗褐色土　地山粒少

P282
1 黒褐色土　地山粒多
2 暗褐色土　地山粒少

P283
1 暗褐色土　地山粒多、炭化物粒子少

P284
1 灰褐色土　地山粒・マンガン粒多、炭化物粒子少
2 暗褐色土　炭化物粒子微量、地山粒多、地山ブロック少

P287
1 黒褐色土　地山粒・マンガン粒・炭化物粒子少
2 暗黄褐色土　マンガン粒・黒色粒少

P288
1 暗褐色土　地山粒少
2 暗褐色土　地山粒多

P289
1 暗褐色土　地山粒少
2 暗褐色土　地山粒多

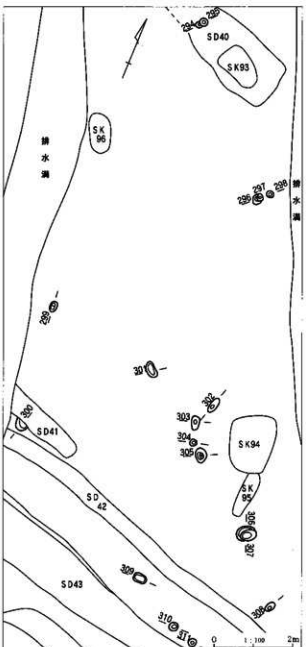
P290
1 明褐色土　地山粒多

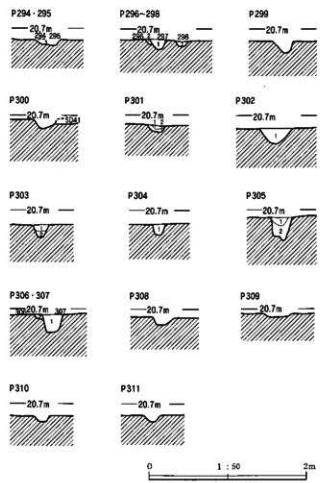
P291
1 明褐色土　地山粒多

P292
1 黒褐色土　地山ブロック少

P293
1 暗灰褐色土　炭化物粒子少、地山ブロック微量

第135図　ピット(11)





P296~298
1 黒灰色土　青灰色土粒多
2 青灰色土　黒灰色土粒多

P301
1 黒灰色土　灰色土ブロック若干
2 炭色土　黒灰色土粒少

P302
1 黒灰色土　灰色土粒多

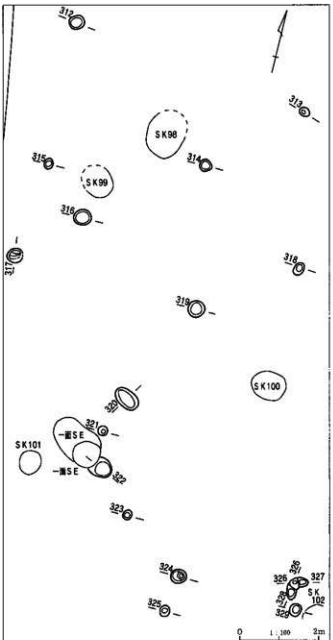
P303
1 黒灰色土　灰色土粒多
2 黒灰色土　灰色土ブロック若干

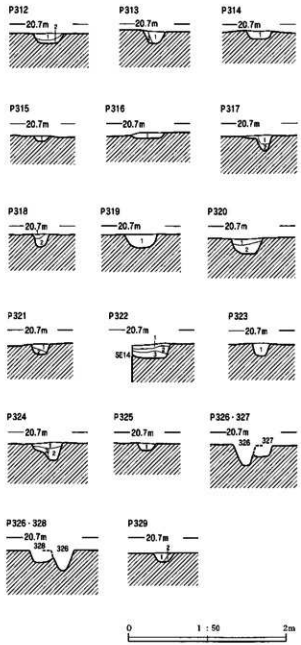
P304
1 黒灰色土　灰色土粒多

P305
1 黒灰色土　灰色土粒多
2 黒灰色土　灰色土ブロック少

P306・307
1 黒灰色土　灰色土粒多
2 暗灰色土　灰色土粒多

第136図　ピット(12)





P312
1 黒灰色土　灰色土粒多
2 灰色土　黒灰色土粒多

P313
1 黒灰色土　灰色土粒微量
2 灰色土　黒灰色土粒多

P314
1 灰色土　黒灰色土粒多

P315
1 黒灰色土　灰色土粒多、炭化粒微量

P316
1 黒灰色土　酸化鉄粒・灰色土粒多

P317
1 暗灰色土　酸化鉄粒・灰色土粒多
2 灰色土　暗灰色土粒・ブロック多

P318
1 黒灰色土　酸化鉄粒少
2 黒灰色土　灰色土粒多

P319
1 灰色土　黒灰色土粒多

P320
1 灰褐色土　地山粒多、炭化物粒子少
2 灰黄褐色土　地山粒多

P321
1 黒灰色土　地山粒少
2 黒灰色土　地山粒若干

P322
1 明灰褐色土　地山粒・炭化物粒子少
2 灰黄褐色土　地山粒多、炭化物粒子少
3 灰黄褐色土　地山ブロック多、炭化物粒子少

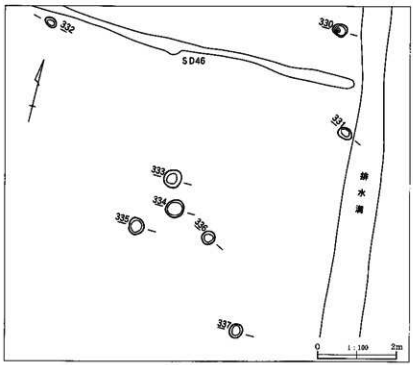
P323
1 暗褐色土　地山ブロック少

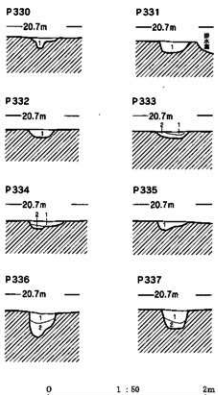
P324
1 灰褐色土　地山粒・炭化物粒子少
2 明灰褐色土　地山粒少
3 灰黄褐色土　地山粒多

P325
1 灰褐色土　地山粒多

P329
1 黒灰色土　地山粒少
2 灰白色土　黒灰色土粒多

第137図　ピット(13)





P330
1　黒灰色土　地山粒多

P331
1　黒灰色土　地山粒・ブロック少

P332
1　暗褐色土　地山粒多

P333
1　黒褐色土　地山粒・炭化物粒子少
2　灰黄褐色土　黒色土粒少

P334
1　灰黄褐色土　地山粒・炭化物粒子少
2　灰黄褐色土　炭化物粒子少

P335
1　灰黄褐色土　地山粒・炭化物粒子少

P336
1　暗灰褐色土　地山粒多、炭化物粒子少
2　暗黒褐色土　灰白色粘土ブロック少

P337
1　灰黄褐色土　炭化物粒子少
2　灰白色土　炭化物粒子少

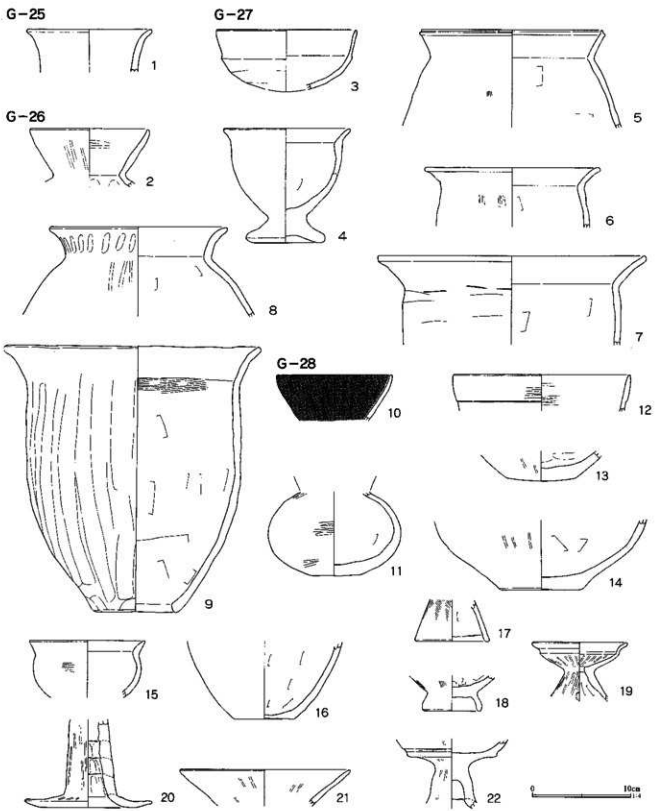
第138図　ピット(14)

(g) グリッド出土遺物

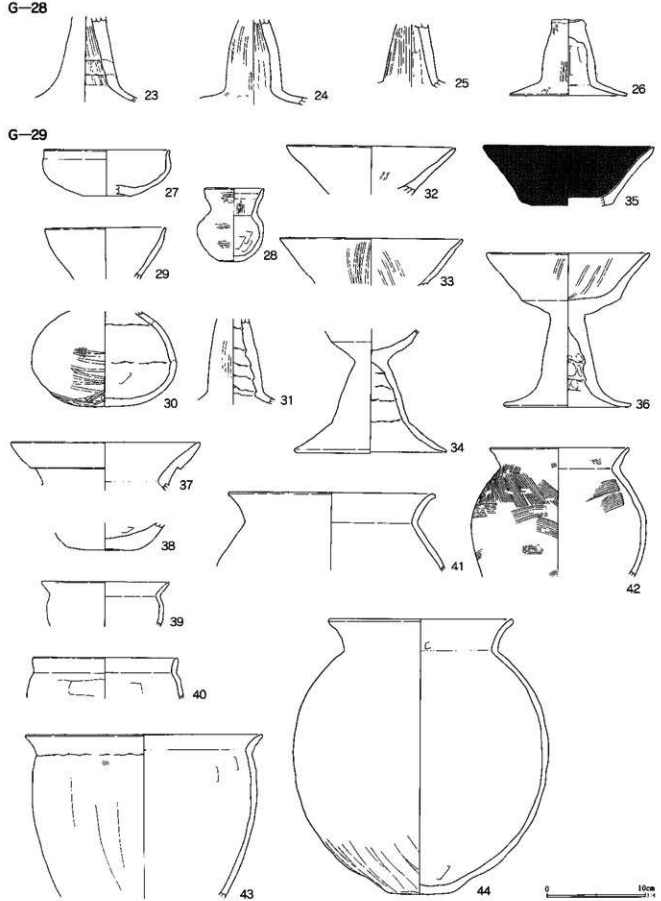
グリッド等出土遺物(3) (第141図)

50は磨石である。長さ7.75cm、最大幅5.9cm、厚さ1.6cm、72.5g。砂岩製、完形。

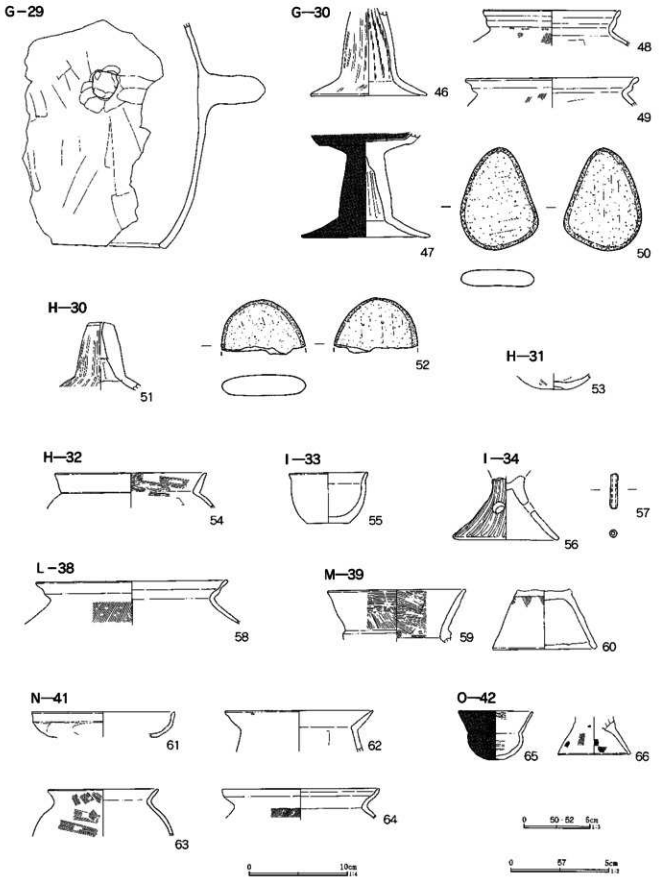
52は砥石である。現存長4.15cm、最大幅6.4cm、



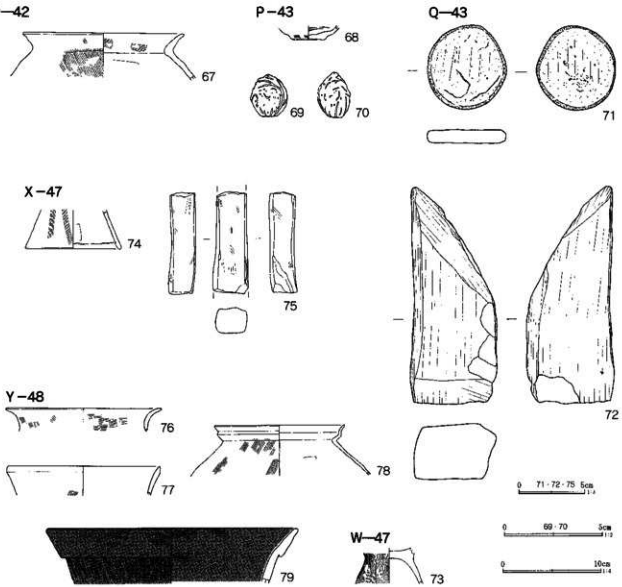
第139図　グリッド等出土遺物(8)



第140図　グリッド等出土遺物(9)



第141図　グリッド等出土遺物(10)



第142図　グリッド等出土遺物(11)

厚さ1.6cm、58.9g。砂岩製、遺存度50%。

57は管玉である。長さ1.8cm、径0.4cm、孔径0.2cm、0.4g。滑石製、黒灰色、完形。

グリッド等出土遺物(11)（第142図）

69は桃の種である。長さ2.1cm、最大幅1.8cm、厚さ1.4cm、1.8g。白橙色、完形。

70は桃の種である。長さ2.3cm、最大幅1.6cm、厚さ1.4cm、0.9g。白橙色、遺存度80%。

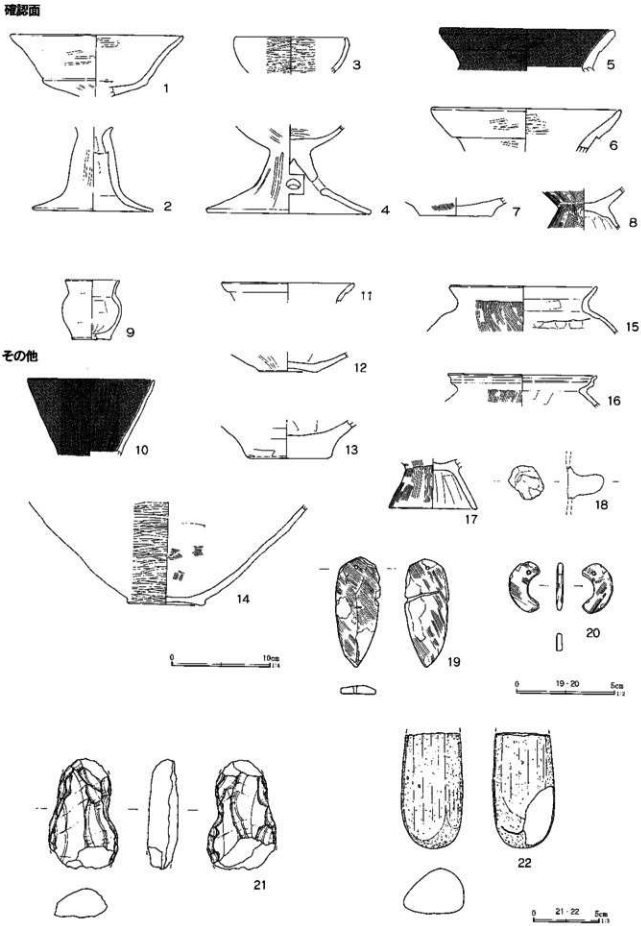
71は磨石である。長さ6.4cm、最大幅6.0cm、厚さ1.05m、61.1g。結晶片岩製、完形。

72は砥石である。長さ16.4cm、最大幅6.65cm、厚さ4.25m、561.3g。砂岩製、完形。

75は砥石である。両端部を欠く。砥ぎキズは細かくみえづらい。現存長7.8cm、最大幅2.8cm、厚さ1.9cm、68g、凝灰岩製。

グリッド等出土遺物(12)（第143図）

19は剝形石製品である。細かな調整痕が表裏面ともに認められる。長さ5.6cm、最大幅2.3cm、厚さ0.4cm、孔径0.2cm、9.6g。滑石製、暗緑色、遺存度85%。



第143図　グリッド等出土遺物(12)

グリッド出土遺物等観察表　(第139～141図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	壺	(12.6)	4.3		AEGHIJ	不	褐色	15	G-25 内面黒色　器面は風化著しい
2	坩	12.1	6.0		AGHIJ	不	橙褐色	75	G-26 器面は風化著しい
3	坏	(14.3)	6.2		ACGHIJ	普	褐色	40	G-27 底(外)黒斑
4	台付鉢	(13.0)	11.7	(8.2)	AEGHIJ	普	暗褐色	35	G-27 風化著しい
5	甕	(18.3)	9.9		ACFGHIJ	普	暗褐色	15	G-27 器面は荒れている
6	甕	(17.9)	6.1		ACGHIJ	普	暗褐色	15	G-27 内外面黒斑　器面は風化著しい
7	甕	(27.2)	9.0		AEGHIJ	普	褐色	15	G-27 風化著しい
8	壺	(18.1)	9.1		AEGHIJ	普	褐色	15	G-27 風化著しい
9	甑	26.1	27.0	8.2	AEGHIJ	普	褐色	80	G-27 煤付着
10	坩	(11.9)	4.7		AHIJ	普	茶褐色	20	G-28 風化著しい　赤彩
11	坩		8.4		AEGHIJ	普	赤褐色	80	G-28 風化著しい　外面赤彩か
12	壺	(18.0)	3.7		ACGHIJK	普	橙褐色	10	G-28 器面は荒れている
13	壺		3.1	7.0	ACEGIJ	普	明褐色	70	G-28 風化著しい
14	壺		7.0	8.4	GH(多)IJ	普	明橙褐色	25	G-28 風化著しく調整痕見づらい
15	鉢	(11.8)	5.8		AGHIJ	普	橙褐色	15	G-28 風化著しい
16	甕		7.9	6.2	AGHIJ	普	暗褐色	35	G-28
17	台付甕		4.2	(7.6)	AGHIJ	普	明褐色	15	G-28
18	台付甕		3.7	5.9	AGHIJ	普	橙褐色	25	G-28 器面は荒れている
19	器台	(9.8)	6.0		AGHIJ	普	橙褐色	45	G-28 内外面に黒斑　風化している
20	高坏		8.9	(12.9)	AGHIJ	普	茶褐色	60	G-28 風化著しい
21	高坏	(17.4)	3.7		AGHIJ	不	明橙褐色	20	G-28 風化著しい
22	高坏		7.1		AHIJK	普	橙褐色	80	G-28 風化著しい
23	高坏		8.6		AGHIJ	普	褐色	70	G-28 風化著しい
24	高坏		8.7		AGHIJK	普	明褐色	75	G-28 器面は荒れている
25	高坏		6.4		AGHIJ	普	明褐色	85	G-28 風化している
26	高坏		7.8	(11.9)	AGHIJ	普	褐色	40	G-28 風化著しい
27	坏	(12.8)	4.7		AEGHIJ	普	橙褐色	30	G-29 風化著しい
28	坩	6.0	7.5	2.6	AGHIJ	普	明褐色	100	G-29 風化著しく整形(外面)は不明瞭
29	坩	12.3	5.3		AGHIJK	普	褐色	85	G-29
30	坩		9.7	5.1	ACEHIJ	普	明褐色	80	G-29 器面は荒れている
31	高坏		8.7		ACGHIJ	普	明褐色	85	G-29
32	坩	17.3	4.9		ACGHIJ	普	明褐色	25	G-29
33	高坏	(18.5)	4.8		AEGHIJ	不	褐色	15	G-29 風化著しい　外面黒斑
34	高坏		12.7	15.4	AEGHIJ	普	橙褐色	70	G-29 風化著しい
35	高坏	17.5	6.1		BGHIJ	普	赤褐色	55	G-29 赤彩　器面荒れている
36	高坏	16.6	15.8	12.9	AGHIJ	普	明褐色	85	G-29 風化著しい
37	壺	(19.4)	4.9		AEGHIJ	普	橙褐色	15	G-29 風化著しい
38	壺		2.8	5.2	ACHIJK	不	明褐色	75	G-29 風化著しい
39	甕	(13.0)	4.6		AGHIJK	普	明褐色	15	G-29
40	甕	(14.9)	4.2		ACGHIJ	普	茶褐色	20	G-29 風化著しい
41	壺	(21.3)	7.8		AGHIJ	普	褐色	15	G-29 風化著しく整形不明
42	甕	14.2	13.0		AGHIJ	不	暗褐色	35	G-29 器面は荒れている
43	甕	(24.0)	16.6		ACFGHIJ	普	白橙色	20	G-29
44	甕	(18.8)	27.8	6.0	AGHIJ	普	暗褐色	40	G-29 外面下部煤付着
45	甑		23.1		AGHIJ	普	橙褐色	10	G-29 外面黒斑　煤付着　荒れている
46	高坏		8.9	(11.9)	AGHIJK	普	明褐色	45	G-30
47	高坏		10.5	(13.1)	AGHIJ	普	茶褐色	70	G-30 赤彩
48	台付甕	(14.0)	3.6		AHIJK	普	橙褐色	30	G-30 器面荒れている
49	台付甕	(17.6)	3.0		AGHIJ	普	橙褐色	5	G-30 風化著しい
50	砥石	現存長7.75×幅5.9×厚1.6cm　重量72.5g　砂岩製						完形	G-30・H-30
51	高坏		6.9		AGHIJ	普	橙褐色	75	H-30 風化
52	砥石	現存長4.15×幅6.4×厚1.6cm　重量58.9g　砂岩製						50	H-30 H-30
53	坩	(15.5)	1.7	2.4	AEGJ	普	白橙色	45	H-31 外面黒斑　風化著しい
54	甕	(7.9)	3.6		ACGHIJ	普	暗褐色	35	H-32 器面は荒れている
55	鉢		5.1	4.3	ACGHIJ	普	橙褐色	55	I-33 黒斑
56	器台		6.5	10.7	ACGHIJ	普	橙褐色	65	I-34 器面は荒れている
57	管玉	長さ1.8×径0.4cm　孔径0.2cm　重量0.4g					黒灰色	完形	I-34
58	台付甕	(19.5)	4.5		AGHIJ	普	橙褐色	10	L-38
59	壺	(14.0)	5.3		AEGIJK	普	暗褐色	20	M-39
60	台付甕		6.1	10.5	ACGHIJ	普	明橙色	45	M-39 風化著しい
61	坏	(14.6)	2.6		AGIJ	普	明褐色	25	N-41 器面は荒れている
62	甕	(15.0)	4.1		ACEGIJ	普	橙褐色	15	N-41
63	甕	(11.2)	4.8		AGHIJ	普	橙褐色	20	N-41
64	甕	(16.0)	3.1		AGHIJ	普	明褐色	15	N-41

グリッド出土遺物等観察表　(第141・142図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
65	甕	(7.6)	4.9	1.6	AHIJ	普	橙褐色	40	O-42　内面黒斑大　赤彩　風化著しい
66	台付甕		3.9	7.3	AEGHIJ	普	橙褐色	45	O-42　内外面黒斑
67	甕	(16.4)	4.5		AGHIJ	普	暗褐色	15	P-42
68	小型壺		1.4	3.4	AGHJK	普	橙白色	40	P-43
69	桃の種	現存長2.1×幅1.8×厚1.4cm　重量1.8g					白橙色	完形	P-43
70	桃の種	現存長2.3×幅1.6×厚1.4cm　重量0.9g					白橙色	80	P-43
71	磨石	現存長6.4×幅6.0×厚1.05cm　重量61.1g　結晶片岩製							Q-43
72	凹石	現存長16.4×幅6.65×厚4.25cm　重量61.2g　結晶片岩製						完形	Q-43
73	台付甕		3.6		AGIJK	普	橙褐色	55	W-47
74	台付甕		4.0	(9.8)	AEHIJ	普	橙褐色	10	X-47
75	砥石	現存長7.8×幅2.8×厚1.9cm　重量68.0g　白橙色　滑石製？							X-47　「きず」見づらい
76	甕	(15.8)	3.4		AEIJ	普	暗褐色	25	Y-48
77	甕	(15.6)	3.0		AGHIJK	不	橙褐色	25	Y-48　風化著しい
78	台付甕	(13.3)	5.1		AGHIJ	普	橙褐色	15	Y-48　風化著しい
79	壺	(25.7)	5.5		AGHIJ	普	赤褐色	35	Y-48　赤彩　風化著しい

グリッド出土遺物等観察表　(第143図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	高坏	(17.6)	6.3		AGHIJ	普	明褐色	55	風化著しい
2	高坏		8.6	12.3	AHIJK	普	褐色	60	風化著しい
3	高坏	(11.4)	3.7		AGHIJ	普	茶褐色	25	
4	高坏		9.1	(16.9)	AGHIJ	普	黄褐色	45	風化著しい
5	壺	(17.8)	4.3		ACCHIJ	良	赤褐色	25	赤彩僅かに残存　器面は荒れている
6	壺	19.2	4.4		ACGHI	普	橙褐色	70	風化著しく赤彩は不明瞭
7	壺		1.9	(7.5)	AGHIJK	普	暗褐色	55	
8	台付甕		4.3		AGHIJ	普	橙褐色	55	
9	小型壺	(5.5)	6.0	3.9	AGHIJ	普	橙褐色	40	外面黒斑
10	坩	(13.0)	7.8		AHIJ	良	赤褐色	35	赤彩　胎土細密
11	壺	(13.6)	2.0		AGHIJ	普	明褐色	20	風化著しい
12	蓋		2.0	6.1	AGHIJ	普	褐色	70	器面は風化している
13	壺		3.9	8.6	AGHIJ	普	暗褐色	90	
14	壺		10.3	8.0	AEGHIJ	普	茶褐色	75	
15	甕	(15.0)	4.6		AGHIJ	普	暗褐色	20	
16	台付甕	(15.2)	3.3		AGHIJK	普	暗褐色	20	器面は荒れている
17	台付甕		5.1	9.0	AEGHIJ	不	暗橙褐色	85	器面は荒れている
18	甑		3.1		AGHIJ	普	褐色	95	
19	剥形石製品	現存長5.6×幅2.3×厚0.4cm　孔径0.2cm						85	重量9.6g
20	石製勾玉	現存長2.6×幅1.0×厚0.3cm　孔径0.1cm						完形	重量1.8g
21	打製石斧	現存長8.85×幅5.2×厚2.3cm						75	重量111.6g
22	磨石	現存長8.75×幅4.7×厚3.6cm						65	重量213.5g

20は石製勾玉である。細かな調整痕が表裏面ともに認められる。長さ2.6cm、最大幅1.0cm、厚さ0.3cm、孔径0.1cm、1.8ｇ。緑泥片岩製、暗緑色、完形。

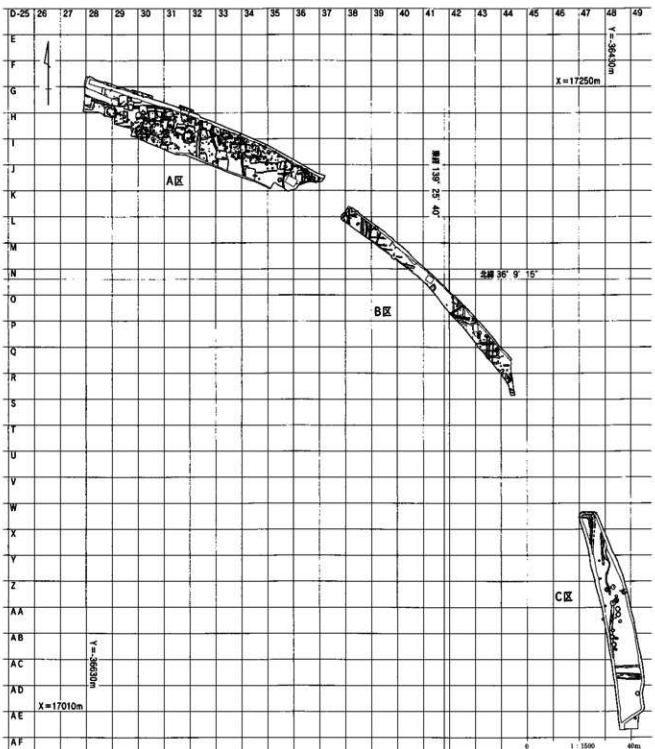
21は打製石斧である。長さ8.85cm、最大幅5.2cm、厚さ2.3cm、111.6ｇ。結晶片岩製、遺存度75%。

22は磨石である。現存長8.75cm、最大幅4.7cm、厚さ3.6cm、213.5ｇ。安山岩製、遺存度65%。

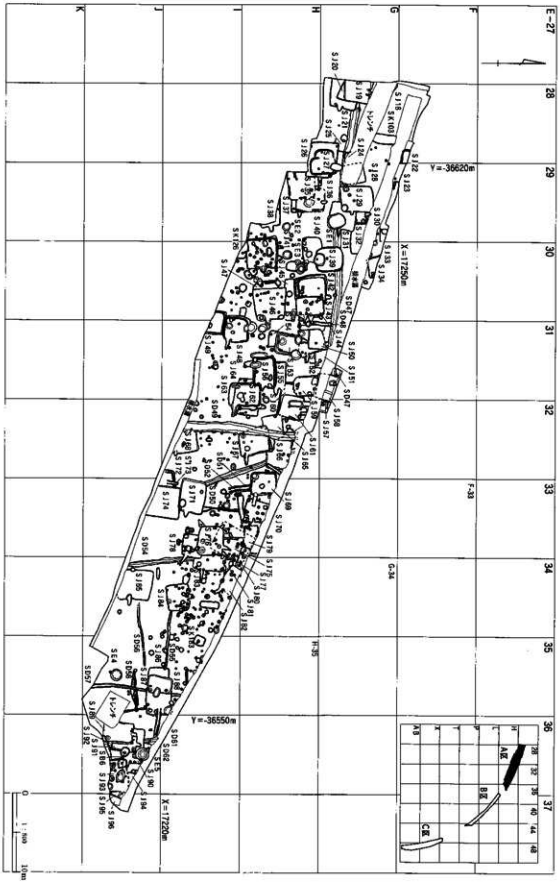
B　調査区一面

今回、発掘調査した三遺跡は、北から中条条里遺跡・上河原遺跡・古宮遺跡という位置関係であり、上河原遺跡は中条条理遺跡の南東約450m、古宮遺跡は上河原遺跡の南東約150mの距離にある。

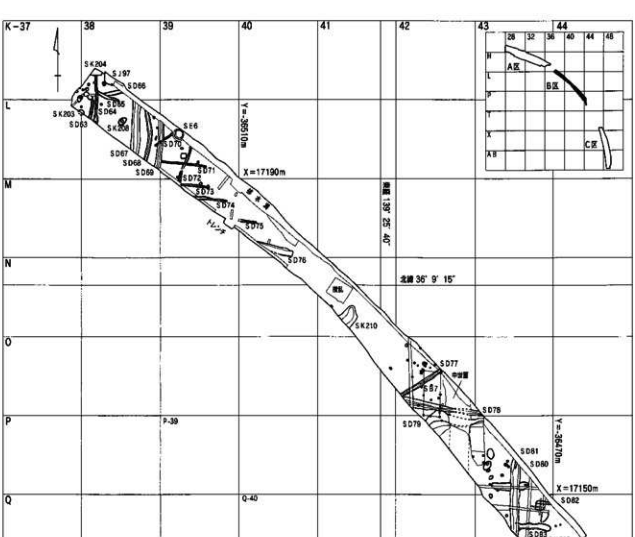
調査地点は、当然のことながら二面・一面・中近世面とも重なるものであるが、厳密には調査範囲の



第144図　一面全測図



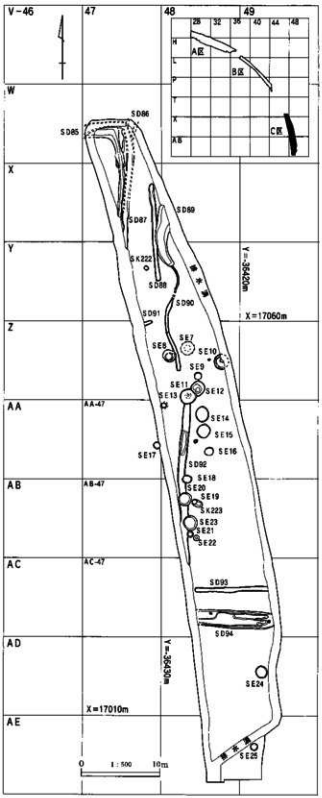
第145図　一面A区全測図



第146図　一面B区全測図

長さ・幅に違いがある。長さについては、A区西端部が該当する。A区西側は、自然堤防が星川に向かって降下していく部分に相当しており、二面は現水田面下に遺存していたが、一面については耕作によって失われていた。このため、西端部に関しては二面よりも短くなる結果となった。幅については、遺構確認面までの深度の違いによるものである。発掘調査において、重機で遺構確認面まで掘削する際には、調査区境の壁面を垂直にする場合と、法面にする場合とがある。現地表面から遺構確認面までの距離(＝深度)が小さい場合は、壁面を垂直にして掘り下げるが、大きい場合は、壁面の崩落防止のため垂直ではなく法面にして掘り下げることになる。

古宮遺跡では、他の二遺跡とは異なり、基本的に２枚、部分的には４枚の遺構確認面が検出されている。そこで、上記のように各確認面まで掘り下げる際には、調査区境の壁面を法面とした。そのため、確認面までの深度が大きくなるに従って、法面も大きく調査区内に延びることになり、結果的に調査可能な範囲が減少した。



第147図　一面C区全測図

今回の発掘調査は、県道弥藤吾行田線建設に伴うものである。新たに建設される県道が、既存の道路にアクセスする部分や、新たに橋が設置されるため土盛りが行われる箇所では、他の部分よりも幅広になるほかは、基本的に用地幅は一定である。しかし、調査面は同じでありながら、調査区によって幅が異なる箇所がある。この点に関しては、再三再四述べてきたように、遺構確認面までの掘削深度の違いによるところが大きいといえる。では、同じ調査面でありながらなぜ深度が異なるか。各調査面における凹凸は、当時の地形を反映していると思われるが、大きな高低差はみられない。つまり、現状における地表面の高低差(微地形)が要因であるといえよう。

言い換えるならば、二面においても一面においても、それぞれ目立った微地形の違いは認められない。わずかに、二面のB区中央部に小規模な谷地形の痕跡がみられたにとどまる。

しかし、後代の地形変化によって高低差が生じた場合、掘削深度に差が生じることになる。具体的に述べるならば、現地形を観察するとB区周辺がレベル的に最も高く、この一帯をピークとして、北は星川に向かって、南は現水田域に向かって降下する地形となっている。そのため、往時においては目立った高低差がなかったにもかかわらず、現地表面からの掘削深度に違いが生じ、深くなる部分ではそれだけ法面が内側に大きく延びることとなった。その結果として、B区は一・二面とも、調査区の幅が他の2区と比べて狭くなっている。

なお、二面のA区先端(＝西端)部が鍵状を呈しているのは、このすぐ西側を流れる星川を跨ぐ橋の建設が予定されており、この部分に土盛りが行われるため、用地が幅広になっていることによる。

一面において検出された遺構は、以下のとおりである。

竪穴住居跡	81軒	土壙	121基
溝跡	49条	掘立柱建物跡	2棟
井戸跡	25基	ピット	487本

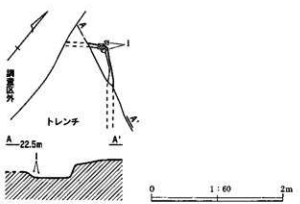
以下に、一面および中近世面を報告する。

(1) 古代

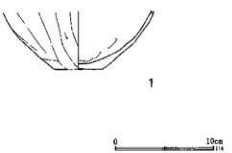
(a) 住居跡

第18号住居跡（第148・149図）

G−27・28グリッドに位置する。遺構の一部は調査区外に続くと思われるが、その他の大部分は試掘溝によって失われており、北東コーナー部分のみの検出である。検出できた規模は、東西0.30m、南北0.65m、深さ10～17cmである。周壁溝・柱穴はみられなかった。出土した遺物はごく僅かで、図化し得た遺物は1点のみであった。



第148図　第18号住居跡



第149図　第18号住居跡出土遺物

第18住居跡出土遺物観察表　(第149図)

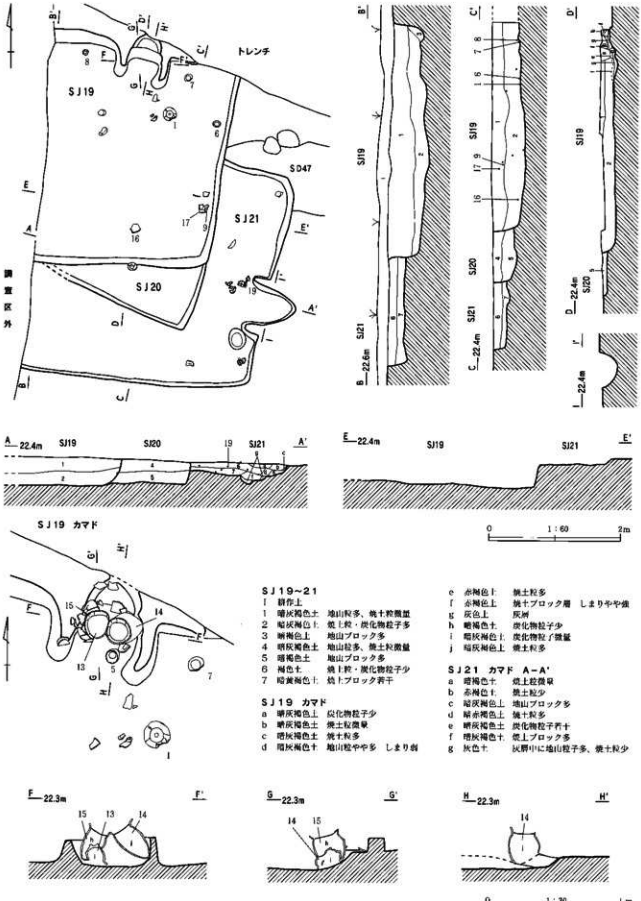
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	甕		5.9	(4.8)	AHU	普	暗褐色	25	

第19号住居跡（第150・151図）

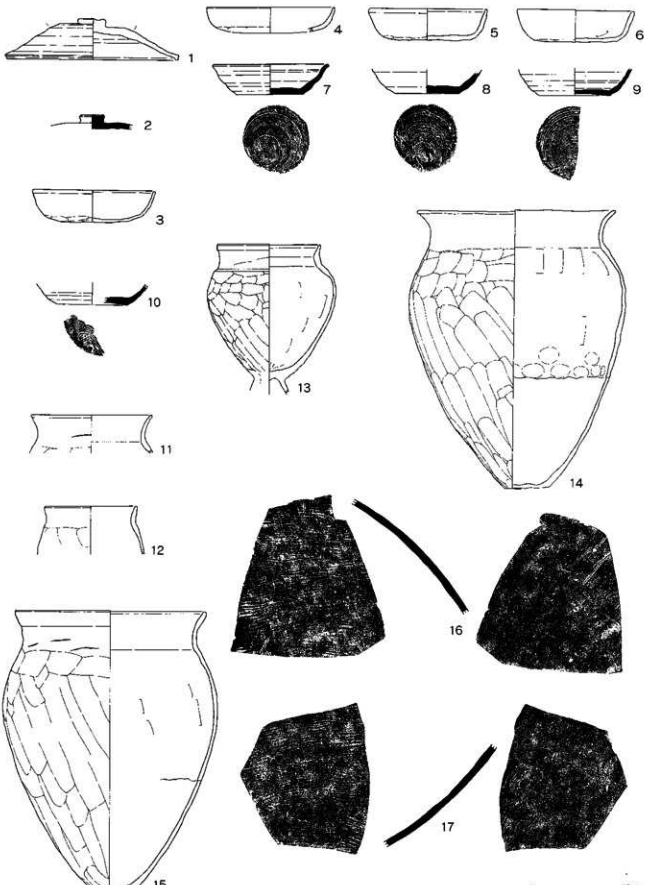
G−27・28グリッドに位置する。遺構の西側は調査区外に続き、カマド先端部と北東コーナーを試掘溝によって失っている。第20・21号住居跡を切っている。住居の規模は、南北は3.58mであるが、東西は2.70mまでの検出である。深さ60cm、主軸方向はN-9°-Eである。平面形は、方形または長方形を呈すると推定される。壁面は、僅かに開きながら立ち上がる。

カマドは、北壁中央からやや東寄りに設けられている。カマドの遺存度は比較的良好で、天井部は失われているものの、白色粘土ブロックを多く混入するソデが良く残っていた。a層は掛け口、f・g層は燃焼部、d・g層は煙道部、b・c層は煙出し部に相当すると思われる。燃焼部は、ピット状に掘り窪められ、凹凸を繰り返しながら煙道から煙出しへと続く。カマド内部は、非常に良く焼けており、焚口手前まで炭や灰が広がっていた。カマドの掛け口には、2個の土師器甕(第151図13～15)が掛けられた状態で出土した。15の甕は、倒立した土師器甕(同図3)に乗った状態であった。13の甕は、脚台部を欠損しており、支脚として転用されていたと推定される。

床面は、住居中央からカマド手前までの範囲の、硬化が比較的顕著であった。調査した範囲内では、貯蔵穴・ピット・周壁溝・住居掘方は検出されなかった。出土した遺物の内、図化し得たのは17点であった。



第150図 第19～21号住居跡



第151図　第19号住居跡出土遺物

第20号住居跡（第150図）

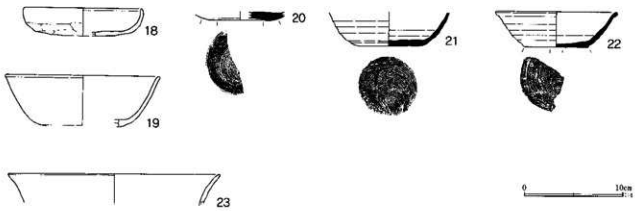
G－27･28グリッドに位置する。第21号住居跡を切り、第19号住居跡に切られている。南東コーナーのみの検出である。検出し得た住居の規模は、南北1.07m、東西2.40mにとどまる。深さは35cmである。強いて主軸方向を計測するならばN-68°-W、またはN-22°-Eである。平面形は、方形または長方形と推定され、壁面は開きながら立ち上がる。

調査範囲が狭いためか、床面硬化が顕著な部分は認められなかった。またこの範囲内では、カマド･貯蔵穴･周壁溝･ピット･住居掘方などは検出されなかった。ごく少数の遺物が出土したが、図化し得るものはなかった。

第21号住居跡（第150・152図）

G－27･28グリッドに位置する。遺構の西側は、調査区外に続いている。第19･20号住居跡に切られている。住居の規模は、南北3.45mであるが、東西3.45mまでの確認にとどまる。深さ25cm、主軸方向はN-100°-Eである。

カマドは、東壁中央からやや南寄りに設けられている。白色粘土ブロックを多く含んだカマドのソデ



第152図　第21号住居跡出土遺物

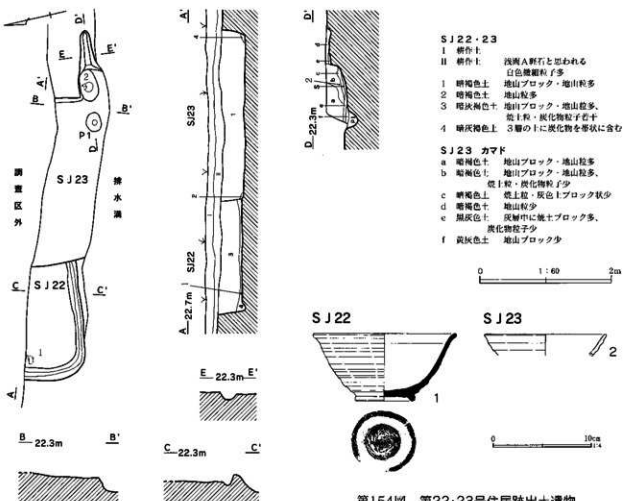
第19･21号住居跡出土遺物観察表（第151･152図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師蓋	17.5	4.2		AGHIJ	不	橙褐色	90	
2	須恵蓋	2.6	1.5		AGHIJ	不	橙褐色	30	軽く被熱か
3	坏	12.6	3.3		ACHIK	普	褐色	95	
4	坏	(13.0)	2.5		ACGIK	普	明褐色	15	
5	坏	12.0	3.3	8.3	ACEGH	普	暗褐色	95	内外面に煤付着
6	坏	11.9	3.3	8.3	ACEHI	普	茶褐色	95	
7	須恵坏	11.9	3.1	6.9	ACF	普	灰色	65	一部黒灰色
8	鉢恵坏		2.5	6.5	AEIJ	普	灰色	80	
9	須恵坏		2.8	(7.2)	AIJK	普	青灰色	45	
10	須恵坏		2.3	(7.0)	AHIJ	不	灰色	20	
11	甕	(12.4)	3.9		AGHIJK	普	褐色	15	
12	甕	(9.5)	4.9		AGHIJ	普	暗褐色	10	
13	台付甕	10.7	15.3		ADGHI	普	褐色	65	支脚に転用か
14	甕	20.4	28.4	4.7	ACEHI	普	暗褐色	95	外面に煤付着多
15	甕	19.5	28.3	4.9	AGHIJ	普	褐色	85	胴外面に黒斑あり　胴外面に煤付着
16	須恵甕		(10.0)		AGIJ	普	暗青灰色	―	
17	須恵甕		(10.3)		GIJK	普	青灰色	―	
18	土師坏	(12.3)	2.8		AIJK	普	暗褐色	30	
19	土師坏	(15.7)	5.1		AGHJ	普	暗褐色	15	
20	鉢恵坏		0.9	(6.4)	AIJ	普	灰褐色	45	
21	須恵坏		3.5	6.2	AEGIJ	良	青灰色	70	
22	須恵坏	(12.4)	3.6	(6.5)	GIJK	普	青灰色	20	
23	甕	(21.8)	3.1		ACGHIJK	普	暗褐色	15	

が、短いながらも両側に検出されている。燃焼部は、壁面を掘り込んで造られている。f・g層は燃焼部、c・e層は煙道部に相当すると思われる。燃焼部は、土壙状に掘り窪められ、2°立ち上がりつつ、25°程の傾斜で煙出しへと続く。カマド内面の赤色硬化は、比較的弱いものである。床面は、カマド手前が、他の部分より若干硬化していたが、顕著なものではなかった。カマドの右ソデ際に、ピットが検出された。径と深さは、23×30×5cmを測る。規模は小さいが、貯蔵穴の可能性が考えられる。調査した範囲内では、ピット・周壁溝・住居掘方は確認されなかった。出土した遺物の内、図化し得たのは6点であった。

第22号住居跡（第153・154図）

F－28グリッドに位置する。遺構の北側部分は調査区外に続き、東側部分は第23号住居跡に切られている。検出された住居の規模は、東西1.74m、南北0.90mにとどまり、深さは32cmである。幅10～17cm、深さ5cmの周壁溝が巡っている。調査範囲が狭いため、床面の硬化が顕著な部分は特定できなかった。この範囲内では、カマド・貯蔵穴・ピッ



第154図　第22・23号住居跡出土遺物

第153図　第22・23号住居跡

第22・23号住居跡出土遺物観察表（第154図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	須恵器台付坏	(14.6)	6.8	5.9	ABDFJ	普	黒灰色	45	
2	土師坏	(12.4)	2.2		AGHIJ	普	黄褐色	15	

ト・住居掘方などは検出できなかった。出土した遺物の内、図化し得たのは1点であった。

第23号住居跡（第153・154図）

F・G－29グリッドに位置する。遺構の北側は調査区外に続く。第22号住居跡を切り、南側部分は排水溝によって切られている。排水溝以南にはプランは確認されなかったことから、南壁は排水溝内に収まるものと推定される。検出できた住居の規模は、東西2.58m、南北0.80m、深さ35cm、軸方向はN-94°-Eである。

カマドは東壁に設けられている。燃焼部は、壁面を掘り込んで造られている。d・e層は、燃焼部・煙道部に相当すると思われる。燃焼部は椀状に掘り窪められ、端部では急傾斜で立ち上がって、平坦な煙道部に至る。カマド内部の赤色硬化は弱いといえる。燃焼部下面から、径22×27cm、深さ13cmのピットが1本検出された。床面は、カマド周辺部での硬化が、他の部分より顕著であった。調査した範囲内では、貯蔵穴・周壁溝・住居掘方は確認されなかった。出土した遺物の内、図化し得たのは1点である。

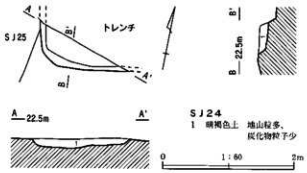
第24号住居跡（第155図）

G－28グリッドに位置する。南西コーナー1箇所のみの遺存で、遺構の大部分を試掘溝によって切られている。第25号住居跡を切る。規模は、南北0.50m、東西1.30mまで確認できたのにとどまる。深さは12cmである。

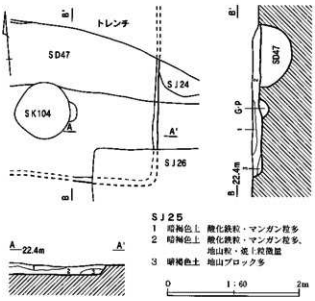
平面形は、隅丸方形または隅丸長方形と推定される。僅かに残った壁面は、緩やかに開きながら立ち上がる。調査範囲が小さいこともあり、床面の硬化を捉えることはできなかった。周壁溝や住居掘方は確認されていない。土師器坏の小破片が僅かに出土したが、図化し得るものはなかった。

第25号住居跡（第156図）

G－28グリッドに位置する。第104号土壙を切っていると思われる。第47号溝跡とピットを切り、第26号住居跡と試掘溝に切られている。検出できた住居の規模は、東西1.25m、南北2.35m、深さは15cmである。平面形は、方形または長方形と推定される。僅かに残った壁面は、緩やかに開きながら立ち上がる。調査範囲が小さいこともあり、床面の硬化を捉えることはできなかった。カマド・貯蔵穴・周壁溝・住居掘方などは確認されていない。遺物は出土しなかった。



第155図　第24号住居跡

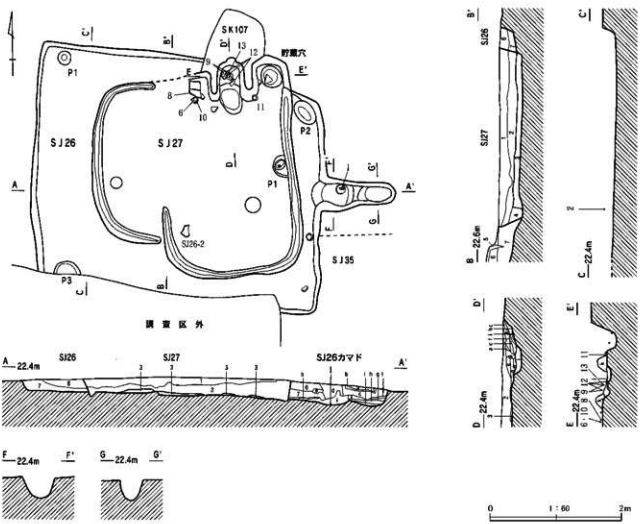


第156図　第25号住居跡

第26号住居跡（第157・158図）

G・H－28・29グリッドに位置する。遺構の南側は調査区外に続く。第27号住居跡・第107号土壙に切られる。住居の規模は、東西4.41m、南北3.80m、深さ25cm、主軸方向N-90°-Eである。平面形は北東コーナーがやや歪んだ長方形を呈し、壁面はやや開きながら立ち上がる。

カマドは、東壁中央よりやや北寄りに設けられている。燃焼部は、壁面を掘り込んで造られている。壁面から1.05m程の長さをもつもので、a・b層は天井部、d層は掛け口、i層は燃焼部、c層は煙道部に相当すると思われる。燃焼部は、ピット状に掘



SJ26・27

1 暗褐色土　地山ブロック多
2 暗褐色土　地山粒少
3 暗褐色土　地山ブロック多
4 暗褐色土　地山粒多
5 黒色土　地山粒少
6 暗褐色土　地山粒多、灰色ブロック・炭化物粒子少
7 暗褐色土　地山ブロック・地山粒多、炭化物粒子少

SJ26　カマド　A－A'

a 暗黄褐色土　地山ブロック(1～2cm)多、炭化物粒子少 大井部
b 赤褐色土　被熱強　天井部
c 暗褐色土　地山ブロック(2～3cm)・炭化物粒子少、焼土粒やや多　煙道部
d 暗黄褐色土　地山ブロック(1～3cm)多、焼土粒少　煙道部
e 赤褐色土　天井部の崩落土
f 暗赤褐色土　焼土ブロック(1～2cm)・焼土粒やや多　煙道部下面
g 暗褐色土　地山ブロック(0.5～1cm)多
h 暗褐色土　地山ブロック(1～3cm)・焼土粒やや多
i 黒色土　炭化物層中に焼土粒多

SJ27　カマド　D－D'

a 暗褐色土　地山ブロック(1～2cm)多
b 赤褐色土　地山ブロック(0.5～1cm)やや多、焼土粒少
c 赤褐色土　焼土粒・焼土ブロック(0.5～1cm)やや多
d 黒褐色土　炭化物粒子多、地山ブロック(0.5～1cm)・焼土ブロック(0.5～1cm)やや多
e 暗黄褐色土　地山ブロック(1.5～1cm)やや多、炭化物粒子少
f 暗赤褐色土　炭化物粒子・焼土粒やや多
g 暗赤褐色土　焼土粒多　掛け口
h 暗赤褐色土　炭化物粒子少、焼土粒・焼土ブロック(0.5～1cm)やや多
i 赤褐色土　焼土粒多
j 暗褐灰色土　粘土ブロック(0.5～1cm)やや多　袖石
k 褐灰色土　粘土ブロック(1～2cm)少　ソデ部

第157図　第26・27号住居跡

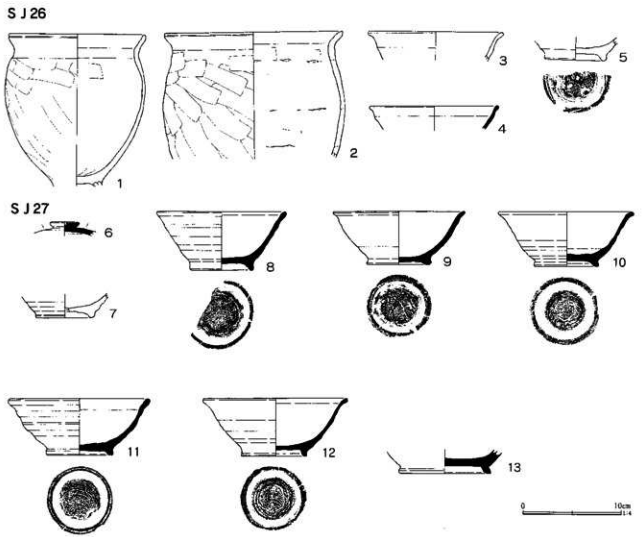
り窪められて端部で立ち上がり、煙道部もピット状に掘り窪められ、端部では急傾斜で立ち上がる。カマド内面は、被熱による赤色化が認められた。燃焼部からは、台付甕(第158図1)が倒立した状態で出土した。

北東・北西・南西コーナー際に、径20～40cm程のピットが3箇所検出されたが、南東コーナーでは確認されなかった。各ピットの深さは、P1からそれぞれ10cm・13cm・8cmである。床面の硬化は、カマド周辺が他の部分に比べやや顕著であった。

調査した範囲内では、貯蔵穴・周壁溝などは認められなかった。出土した遺物の内、図化し得たのは5点であった。

第27号住居跡（第157・158図）

G・H－28・29グリッドに位置する。第26号住居跡・107号土壙を切る。遺構内には、ピットが1本検出されているが、住居を切っていると判断した。周壁溝の形状から、カマドは移動せずに、当初南北に長軸があったものを西側に拡幅し、北側に縮小しているものと推定される。但し、縮小はしても、南側の周壁溝は痕跡をとどめていた。当初の住居の規模は、南北3.12m、東西2.13m、深さについては、建て替え後の床面と同じレベルであることから26cmと思われる。主軸方向はN-5°-Wである。平面形は隅丸長方形を呈し、壁面はやや開き気味に立ち上がる。



第158図　第26・27号住居跡出土遺物

カマドは、北壁中央からやや東寄りに設けられている。燃焼部には径46×30cmの楕円形、深さ15cm程の掘方をもつ(j層)。g層は掛け口、k層はソデ、h層は煙道部に相当すると思われる。燃焼部から煙道部への傾斜は緩やかで、煙出し手前から急傾斜で立ち上がる。カマドの手前左側には、炭や灰が散在していた。カマド右、北東コーナーに径30×45cm、深さ15cm程の貯蔵穴をもつ。周壁溝は、東壁の貯蔵穴際から始まって南壁、さらに西壁の南3分の1まで巡っている。幅は15～20cm、深さは5～10cm程である。

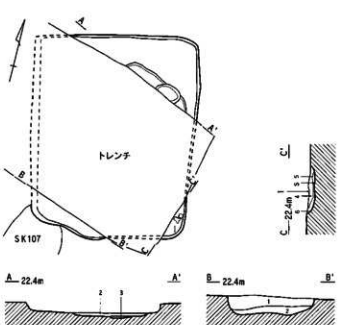
建て替え後の規模は、南北2.45m、東西3.08m、深さ20～28cm、主軸方向はN-5°-Wである。新たに拡幅された範囲に、幅10～20cm、深さ10cm程の周壁溝が「コ」字形に巡っている。東壁中央の壁際に、径31×35cm、深さ8cmのP1がみられる。出土した遺物の内、図化し得たのは8点である。

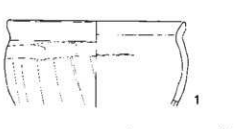
第26·27号住居跡出土遺物観察表　(第158図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	台付甕	13.9	15.5		ACGHIJ	普	明褐色	90	胴面は荒れている
2	甕	18.1	12.8		CGHIJ	普	橙褐色	20	煤付着
3	土師坏	(13.8)	2.9		AGHIJ	普	明褐色	10	
4	須恵坏	(13.1)	2.5		AGIJ	普	青灰色	10	
5	土師高台付坏		2.4	6.3	AGHIJK	普	橙褐色	45	
6	須恵蓋	3.0	1.5		AGJK	普	灰色	75	
7	土師高台付坏		2.5	(6.0)	ACGHJ	不	灰橙色	45	
8	須恵高台付坏	(13.2)	6.0	6.4	ABCDJK	不	灰褐色	15	
9	須恵高台付坏	13.4	5.4	6.6	ADHIJ	不	橙灰色	65	
10	須恵高台付坏	(13.7)	5.6	6.4	AEHIJK(多)	普	灰色	35	表面ザラザラ
11	須恵高台付坏	(14.5)	5.7	6.7	ABCJ	普	灰色	30	
12	須恵高台付坏	14.7	5.9	6.6	AEHIJ	不	灰褐色	55	黒斑
13	須恵壺		2.4	9.4	AEGIJ	普	灰色	85	

第28号住居跡 (第159・160図)

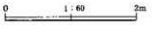
G－29グリッドに位置する。第107号土壙を切っていると思われる。遺構の大部分を試掘溝によって失っている。住居の規模は、南北3.13m、東西2.37





第160図　第28号住居跡出土遺物

SJ28
1　明褐色土　地山粒多、灰褐色土・炭化物粒子少、焼土粒微量
2　明褐色土　地山ブロック・地山粒多　掘方
3　褐色土　地山ブロック・地山粒多　掘方
4　暗褐色土　地山粒・炭化物粒子多、焼土粒少
5　暗褐色土　炭化物粒子・焼土粒多
6　暗褐色土　地山ブロック多、炭化物粒子・焼土粒少



第159図　第28号住居跡

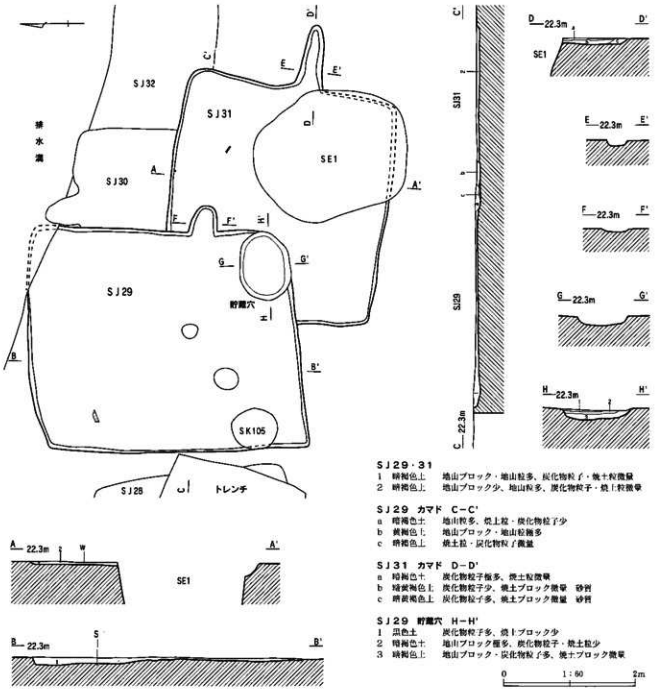
第28号住居跡出土遺物観察表 (第160図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	甕	(18.1)	8.7		AGHIJK	普	茶褐色	15	器面は荒れている

mと推定される。深さ12cm、長軸方向はN-15°-Wである。平面形はやや歪んだ長方形を呈し、壁面はやや開くように立ち上がる。2・3層は、住居掘方である。床面の、顕著な硬化は認められなかった。確認範囲内では、カマド・貯蔵穴・ピット・周壁溝などは検出されなかった。出土した遺物は極めて少なく、図化し得たのは1点である。

第29号住居跡 (第161・162図)

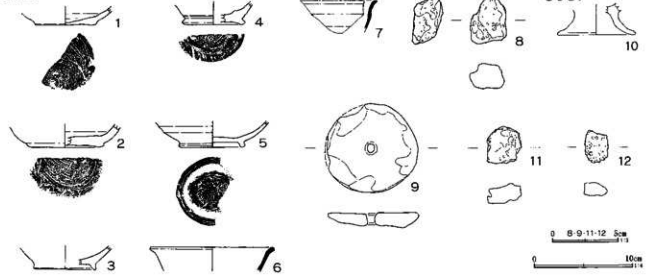
G−29グリッドに位置する。北東コーナー部分



第161図 第29・31号住居跡

は調査区外に続く。第30・31号住居跡を切り、第105号土壙とピットに切られている。住居の規模は、東西3.34m、南北4.10m、深さ11cm、主軸方向N-90°-Eである。

平面形は、やや歪んだ長方形を呈する。カマドは、東壁中央からやや南寄りに設けられている。a・c層は燃焼部、b層は煙道部に相当すると思われる。燃焼部は浅く掘り窪められており、平坦なまま煙道部に続く。カマド内面の赤色硬化は弱く、被熱量は少ないと推定される。カマド南側、南東コーナーに貯蔵穴をもつ。貯蔵穴の規模は、径104×75cm、深さ15cmである。住居中央から、カマド・貯蔵穴までに、床面の硬化が認められた。出土した遺物の内、図化し得たのは9点である。



第162図　第29・31号住居跡出土遺物

第29・31号住居跡出土遺物観察表　(第162図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師坏		1.9	6.2	AEGHIJK	普	暗褐色	45	貯蔵穴
2	土師坏		2.3	(7.5)	AHIJ	普	暗橙褐色	40	
3	土師高台付坏		2.5	(6.2)	HIJ	不	暗褐色	20	
4	土師高台付坏		2.4	(6.4)	AHIJ	普	灰褐色	40	
5	土師高台付坏		2.7	6.7	AHIJ	普	褐色	55	
6	須恵坏	(12.6)	2.4		AIJ	普	暗青灰色	10	
7	須恵坏		3.3		AGIJ	普	暗青灰色	10	
8	鉄滓	法量3.8×2.7×1.9cm　黒褐色							
9	紡錘車	径7.0×幅6.7×厚1.1cm			AHIJK	普	明褐色	85	土師坏の底部を転用　重量46.0g
10	台付甕		3.2	(7.8)	HIJ	普	明褐色	40	
11	鉄滓	法量2.8×2.6×1.5cm　重量19.2g　黒褐色							
12	鉄滓	法量2.4×1.8×1.0cm　重量8.1g　黒褐色							

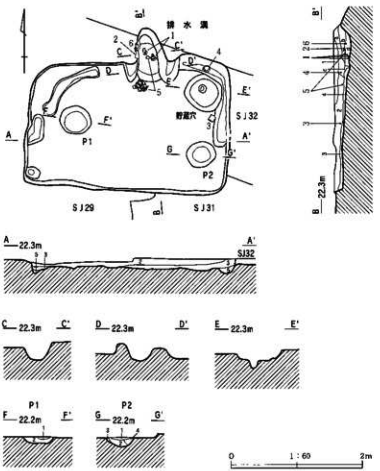
第30号住居跡（第163・164図）

G－29グリッドに位置する。第31・32号住居跡を切り、第29号住居跡に切られる。住居の規模は、南北1.95m、東西3.10m、深さ15cm、主軸方向N-2°-Eである。平面形はやや隅丸の長方形で、壁面は比較的しっかりとした立ち上がりをもつ。

カマドは、北壁中央からやや東寄りに設けられている。燃焼部は床面から10～15cm程掘り込まれているが、壁外にまで及んでいる。a層は、天井崩落土に相当すると思われる。d層は燃焼部の灰層である。燃焼部から煙道部は平坦面である。カマド東、北東コーナーに径55cm、深さ10cm程の土壙がみら

れる。さらにその内側には、径10cm、深さ13cmのピットがみられる。この土壙については、貯蔵穴と判断したが、その形状からロクロピットの可能性も考えられる。

周壁溝は、カマドソデの東際からこの土壙を取り込むように始まり、東壁途中で途切れる。幅は10～20cm、深さ10cm程である。また、北西コーナーより10～20cm程内側にも同規模の溝がみられるが、



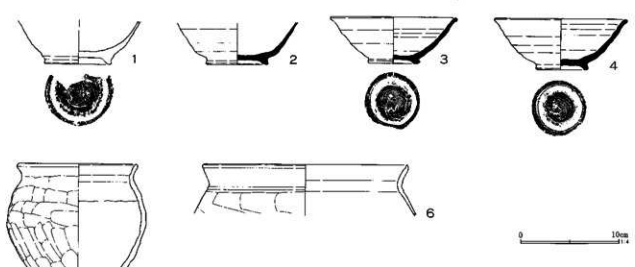
SJ30
1 暗褐色土　地山ブロック少
2 暗褐色土　地山ブロック・炭化焼土粒多、焼土粒・炭化物粒子微量
3 暗灰褐色土　地山大ブロック・炭色焼土粒多、焼土粒・炭化物粒子微量
4 黒灰色土　灰層中に地山粒・炭化物粒子多、焼土粒若干　粘性やや強
5 暗褐色土　地山粒多　しまりやや弱

カマド
a 暗褐色土　地山粒少
b 暗褐色土　焼土ブロック多
c 黄褐色土　地山粒少
d 灰色土　灰層中に地山ブロック少、焼土粒多

ピット1
1 暗灰褐色土　地山大ブロック・炭色焼土粒多、焼土粒・炭化物粒子微量
2 黒褐色土　炭化物層中に地山粒多、焼土粒若干　粘性やや強

ピット2
1 暗灰褐色土　地山大ブロック・炭色焼土粒多、焼土粒・炭化物粒子微量
2 黒褐色土　炭化物層中に地山粒多、焼土粒若干　粘性やや強
3 黄灰色土　地山粒若干
4 黄灰色土　地山ブロック・焼土ブロック多

第163図　第30号住居跡



第164図　第30号住居跡出土遺物

第30号住居跡出土遺物観察表 (第164図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師高台付坏		4.5	6.8	ACHIJ	不	橙褐色	60	
2	須恵高台付坏		4.2	6.4	AEG(多)IJ	普	黒灰色	55	
3	須恵高台付坏	(13.0)	4.7	5.2	ADEIJ	普	暗灰色	25	外面煤付着
4	須恵高台付坏	13.5	5.1	5.3	ACEGIJ	普	暗灰色	95	黒斑
5	甕	12.1	11.9		ACEHI	普	橙褐色	75	煤付着多　被熱による赤色部分あり
6	甕	(21.0)	5.2		AGHIJK	普	褐色	15	

これも周壁溝であると思われる。なお、南西コーナーにはピット状の表現がみられるが、これも同じく周壁溝の痕跡と考えられる。

2本のピットが検出されているが、ピットの規模は、P1が径40×45cm、深さ10cm、P2が径38×45cm、深さ15cmを測る。床面の硬化については、カマド手前の部分が比較的硬化が認められた。出土した遺物の内、図化し得たのは6点である。

第31号住居跡 (第161・162図)

G−29グリッドに位置する。第29·30号住居跡·第1号井戸跡に切られている。遺構確認面が、この住居跡の床面に近く、遺構としての遺存度は低く、また遺構のプランとしても失われた部分が多いものの、全体の規模·形状は推測することができる。住居の規模は、東西3.48m、南北3.30m、深さ5cm、主軸方向N-110°-Eである。平面形はやや隅丸の正方形に近い。

カマドは、東壁中央からやや南寄りに設けられている。b·c層は、燃焼部から煙道に相当すると思われる。煙道は、先端部に向かってやや下っていき、煙出しに続いていると思われる。カマド内部の焼け方は弱く、被熱量は少ないと考えられる。床面の硬化については、住居中央からカマド手前の部分が、比較的硬化が認められた。検出された範囲内では、貯蔵穴·ピット·周壁溝などは確認されなかった。出土した遺物の内、図化し得たのは3点である。

第32号住居跡 (第165図)

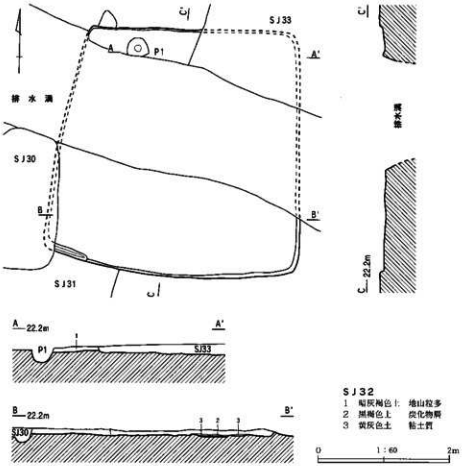
G−29·30グリッドに位置する。第30·33号住居跡に切られ、また排水溝によって、遺構の中央部分を失っている。住居の規模は、南北3.78m、東西(3.65)m、深さ10cm。長軸方向はN-2°-Eと推定される。平面形は隅丸方形と推定される。北西コーナーにピットが1本検出されており、ピットの規模は径24×34cm、深さ18mを測る。南西コーナー付近に、幅10cm、深さ5cm程の周壁溝が確認されているが、そのほかの部分ではみられなかった。

確認した範囲内では、床面の顕著な硬化は認められなかった。またこの範囲内では、カマド·貯蔵穴·ピット·住居掘方などは確認されなかった。土師器坏の破片が僅かに出土したが、図化し得るものはなかった。

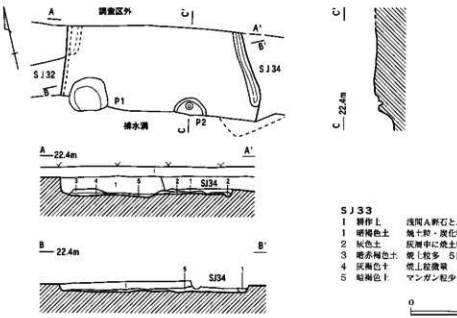
第33号住居跡 (第166・167図)

G−29·30グリッドに位置する。遺構は調査区北側に続く。第34号住居跡に切られているほか、排水溝によって多くを失っている。東壁際の周壁溝は、本遺構の上にのっていた第34号住居跡の下から検出されたものである。検出し得た範囲での住居の規模は、南北1.30m、東西3.00m、深さ32cmを測る。

ピットが2本確認された。ともに部分的にしか残っていないが、P1は径58×(60)cm、深さ10cm、P2は径48cm、深さ10cm程である。東壁では、幅13cm、深さ10cmの周壁溝が途中で途切れる形で確認されたが、西壁ではみられなかった。確認した範囲内では、床面の顕著な硬化は認められなかった。またこの範囲内では、カマド·貯蔵穴は確認されなかった。検出された遺物の内、図化し得たのは4点である。



第165図　第32号住居跡



第166図　第33号住居跡

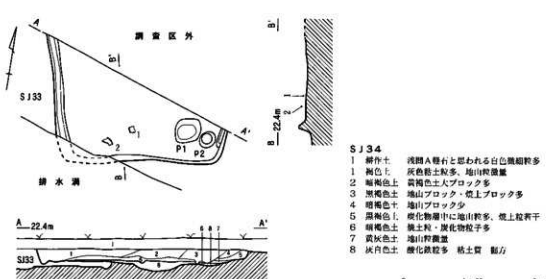
第167図　第33号住居跡出土遺物

第33号住居跡出土遺物観察表（第167図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師坏	(10.1)	3.2	5.4	ACHIJ	普	橙褐色	55	
2	須恵坏		4.1		AHIJ	普	暗灰色	10	
3	須恵坏		1.3	5.9	AEIJ	良	灰青色	55	
4	須恵坏		1.1	7.0	AGIJK	普	暗青灰色	25	

第34号住居跡（第168・169図）

G－30グリッドに位置する。遺構北側は調査区外に続く。第33号住居跡を切り、南西コーナーを排水溝によって失っている。部分的にではあるが、5～10cm程の掘方をもつ。検出できた範囲内での規模は、南北1.90m、東西2.65m、深さ33cmである。強いて主軸方向を計測するならば、N-80°-EもしくはN-10°-Wと推定される。平面形は、隅丸長方形または隅丸方形と思われる。壁面は開きながら立ち上がる。西壁には、幅10～20cm、深さ5cmの周壁溝がみられる。東壁にも、南東コーナー付近まで幅10cm、深さ5cm前後の周壁溝がみられる。南東コーナー付近に、2本のピットが確認された。ピットの規模は、P1が径35×40cm、深さ10cm、P2が径20cm、深さ10cmを測る。確認した範囲内では、床面の顕著な硬化は認められなかった。またこの範囲内では、カマド・貯蔵穴は確認されなかった。出土した遺物の内、図化し得たのは2点である。



第168図　第34号住居跡

第169図　第34号住居跡出土遺物

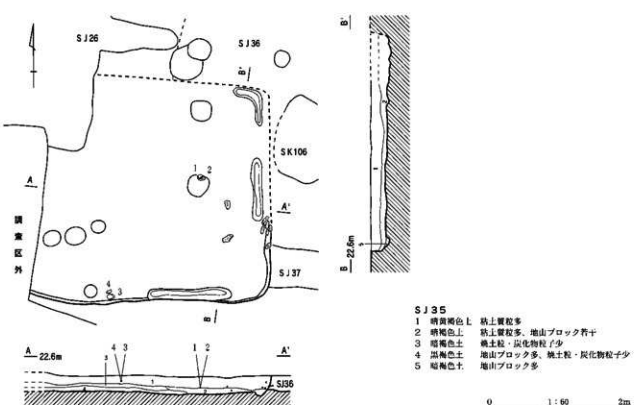
第34号住居跡出土遺物観察表　(第169図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	高台付坏		2.8	7.4	1	香	灰色	75	灰釉
2	知恵壺	(20.1)	7.4		EGIJK	普	灰色	20	外面に自然釉　内面に全面自然釉

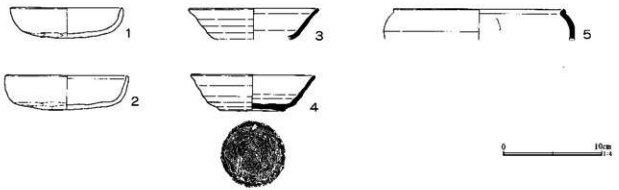
第35号住居跡（第170・171図）

H－29グリッドに位置する。遺構西側は調査区外に続く。第36・37号住居跡を切り、第26号住居跡に切られる。またこれらのほかに、6本のピットが住居跡内で検出されているが、いずれも本遺構に伴うものではなく、ピットの方が新しいと判断した。

北壁・東壁・南壁の一部に幅・深さともに10cm前後の周壁溝がみられることから、ある程度の規模・形状が推測できる。確認し得た範囲内での住居の規模は、東西3.55m、南北(3.45)m、深さ26cmである。平面形は隅丸長方形と推定される。床面の、顕著な効果は認められなかった。調査した範囲内では、カマド・貯蔵穴・ピット・住居掘方などは確認されなかった。出土した遺物の内、図化し得たのは5点である。



第170図　第35号住居跡



第171図　第35号住居跡出土遺物

第35号住居跡出土遺物観察表　(第171図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	11.6	3.1		ACGHIJ	普	褐色	55	
2	坏	(12.3)	3.5		ACGHIJ	普	褐色	70	
3	須恵坏	(13.2)	3.2		AEHIJ	普	明灰色	15	
4	須恵坏	(12.8)	3.6	6.7	AHIJK	普	灰色	30	
5	須恵鉢	(17.3)	3.2		AIJK	普	暗青灰色	10	

第36号住居跡（第172・173図）

G・H－29グリッドに位置する。第37号住居跡を切り、第35号住居跡、第106号土壙や5本のピットに切られている。遺構の形状・規模を推測することができる。住居の規模は、南北3.69m、東西3.33m、深さ23cm、主軸方向はN-2°-Eである。平面形は隅丸長方形、壁面は開き気味に立ち上がる。

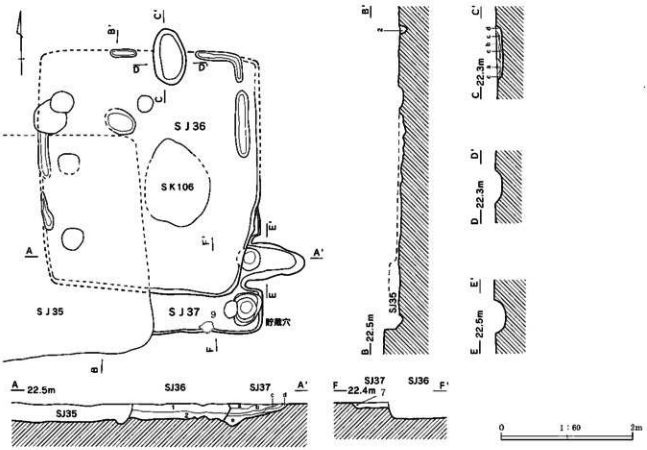
北壁・東壁・西壁の一部に、幅10～20cm、深さ10cm前後の周壁溝がみられるのに対し、南壁は遺存度が良くないためか、周壁溝は認められなかった。東辺の周壁溝は、壁面から10cm程内側を巡っている。

カマドは、北壁中央からやや東寄りに設けられている。カマドの遺存度は悪く、径50×85cm、深さ10cmの土壙状に検出されたのみであるが、燃焼部内の灰層や焼土層が確認できた。c・d層は、燃焼部・煙道部に相当すると思われる。カマド内部の赤色化は少なく、被熱量は少ないと思われる。床面の、顕著な効果は認められなかった。出土した遺物の内、図化し得たのは2点である。

第37号住居跡（第172・173図）

H－29グリッドに位置する。第35・36号住居跡および1本のピットに切られている。検出できた住居の規模は、東西1.68m、南北1.90m、深さ5cm、主軸方向N-89°-Eである。平面形は隅丸方形または隅丸長方形が推定される。僅かに残った壁面は、緩やかに立ち上がる。

カマドは、東壁に設けられているが、中央から南寄りに位置すると思われる。白色粘土ブロックを多く含む右ソデが、部分的に遺存していた。燃焼部は10cm程掘り窪められ、段を経て煙道部に続く。e層は燃焼部、d層は煙出しに相当すると思われる。カマド南、南東コーナーに貯蔵穴が検出された。貯蔵穴の規模は、径(35)×50cm、深さ27cmを測る。確認できた範囲内では、周壁溝・ピットなどは検出されなかった。床面の、顕著な効果は認められなかった。出土した遺物の内、図化し得たのは7点である。

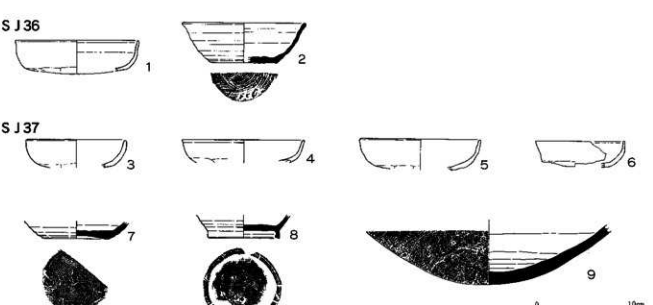


SJ36・37
1 暗灰褐色土　地山粒多
2 暗灰褐色土　地山ブロック多、焼土粒若干

SJ36 カマド C－C'
a 黄褐色土　粘土ブロック(0.5～2cm)多、炭化物ブロック(0.5～1cm)少
b 暗黄褐色土　粘土ブロック(0.5～2cm)少、炭化物ブロック・焼土ブロック(0.5cm)やや多
c 明黄褐色土　粘土ブロック(0.5～1cm)・炭化物ブロック・焼土ブロック(0.5cm)少
d 暗褐色土　粘土ブロック(0.5～1cm)・炭化物ブロック(0.5～1cm)少、焼土ブロック(1cm)やや多

SJ37 カマド A－A'
a 暗褐色土　黒褐色土ブロック多
b 明灰褐色土　焼土粒多
c 明灰褐色土　地山ブロック若干、焼土ブロック多
d 灰色土　灰層中に地山ブロック多　粘性やや強
e 暗灰褐色土　焼土粒多

第172図　第36・37号住居跡



第173図　第36・37号住居跡出土遺物

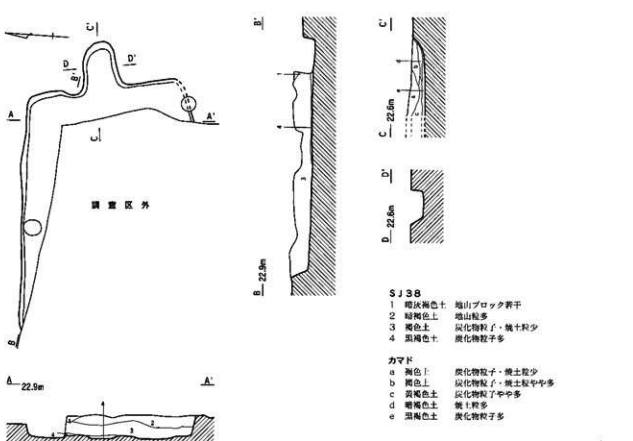
第36·37号住居跡出土遺物観察表 (第173図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(12.6)	3.4		AGHIJK	普	褐色	25	
2	須恵坏	(12.7)	4.1	(6.6)	AIJK	普	暗青灰色	35	
3	坏	(10.2)	2.9		ACGHIJ	普	茶褐色	15	器面は荒れている
4	坏	(12.4)	2.3		AHIJK	普	明橙褐色	15	
5	坏	(12.4)	3.1		ACGHIJ	普	暗褐色	20	器面は荒れている
6	坏		2.6		AHIJ	良	暗褐色	10	
7	須恵坏		1.8	6.7	AGIJ	普	灰白色	65	墨書土器か
8	須恵高台付坏		2.4	7.4	AEIJ	普	灰色	75	
9	須恵甕		6.5		GIJ	普	灰色	30	

第38号住居跡 (第174図)

H－29グリッドに位置する。西側部分は調査区外に続く。2本のピットと重複するが、本住居跡が切られていると推定される。確認できた住居の規模は、東西3.59m、南北2.40m、深さ30cm、主軸方向N-82°-Eである。平面形は、主軸(東西)方向に、長い台形と推定される。壁面はやや開き気味に立ち上がる。カマドは東壁中央に設けられている。燃焼部は、壁面を掘り込んで造られている。a～b層は、燃焼部～煙道部に相当すると思われる。燃焼部底面は平坦面に近く、緩やかな傾斜で煙道部に続く。

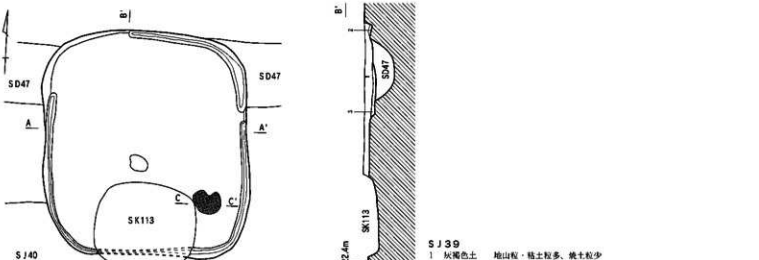
床面の、顕著な効果は認められなかった。調査した範囲内では、貯蔵穴・ピット・住居掘方などは確認されなかった。土師器坏の小破片が僅かに出土したが、図化し得るものはなかった。



第174図 第38号住居跡

第39号住居跡（第175図）

G・H－30グリッドに位置する。第40号住居跡第47号溝跡を切り、第113号土壙に切られる。また、中央付近にピットが1本検出されたが、これは本住居跡に伴うものではなく、ピットの方が新しいと思われる。住居の規模は、南北3.40m、東西3.06m、深さ10cm、長軸方向N-3°-Wである。北西コーナー部分を除いて、幅10～20cm、深さ5cm程の周壁溝が巡っている。また、南東コーナー付近に、径35×45cmのややハート形に近い形状をした赤色の部分が認められた。これは床面が被熱により変色したものと思われる。検出できた範囲内では、カマド・貯蔵穴・ピット等は認められなかった。土師器甕の破片が少数出土したが、図化し得るものはなかった。



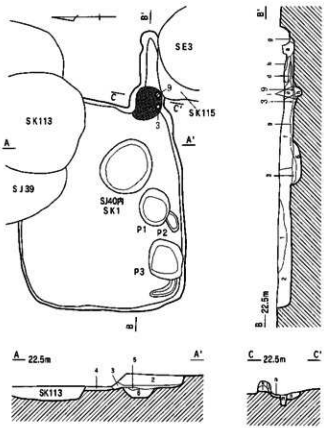
第175図　第39号住居跡

第40号住居跡（第176・177図）

G・H－29・30グリッドに位置する。第39号住居跡・第113・115号土壙・第3号井戸跡に切られている。住居の規模は、東西3.20m、南北2.55m、深さ15～20cm、主軸方向N-90°-Eである。平面形は隅丸長方形を呈し、壁面は少し開きながら立ち上がる。

カマドが、東壁の南東コーナー際に設けられている。燃焼部は、壁面を掘り込んで造られており、煙道部は壁外に長く延びる。b層は天井部が被熱により変色した部分、d層は天井崩落土、k層・l層はソデ部、m層は掘方に相当すると思われる。掘り窪められた燃焼部から、緩やかな傾斜で煙道へ続く。なお、燃焼部は赤色硬化しており、被熱量が多いと推定される。住居跡のSK1は床下から検出された。規模は、径75×85cm、深さ13cmを測る。このほかにピットが3本検出されたが、調査時の状況から本住居跡に伴うと推定した。径と深さは、P1が径45×60cm、深さ10cm、P2が径15×(20)cm、深さ4cm、P3が径55×65cm、深さ10cmを測る。南西コーナー際で、幅10cm、深さ5cm程の周壁溝が検出されたが、きわめて部分的な状況であり、このほかの部分では、周壁溝はみられなかった。調査した範囲内では、貯蔵穴・住居掘方は確認されていない。

出土した遺物の内、図化し得たのは11点である。



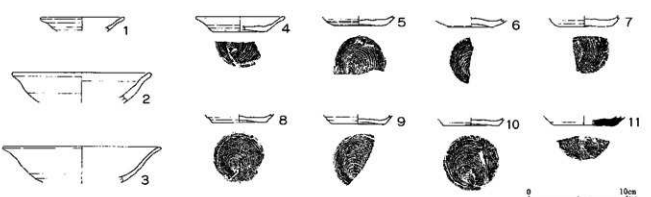
SJ40
1 灰褐色土 地山粒多
2 暗灰褐色土 地山ブロック多、炭化物粒子少
3 黒褐色土 炭化物層中に地山粒・焼土粒少
4 暗灰褐色土 地山粒少
5 灰色土 地山粒少 粘土質
6 明褐色土 地山ブロック多

カマド B－B'
a 暗灰褐色土 焼土粒・炭化物粒了多
b 赤褐色土 天井部が被熱で変色した部分
c 暗灰褐色土 地山粒多
d 赤褐色土 焼土ブロック層 天井崩落土
e 暗灰褐色土 地山粒・焼土粒多
f 暗灰褐色土 地山ブロック多、炭化物粒子少
g 黒褐色土 炭化物層中に地山粒・焼土粒少
h 灰褐色土 地山粒・焼土粒多
i 暗赤褐色土 地山が被熱で変色した部分

カマド C－C'
j 赤褐色土 被熱による赤色硬化面 1層までソデ部
k 明褐色土 地山ブロック(1～2cm)やや多
l 暗黄褐色土 地山ブロック(1～3cm)多
m 暗褐色土 1層に類似
n 黒褐色土 炭化物ブロック層中に地山ブロック(1～3cm)多

0 1:60 2m

第176図 第40号住居跡



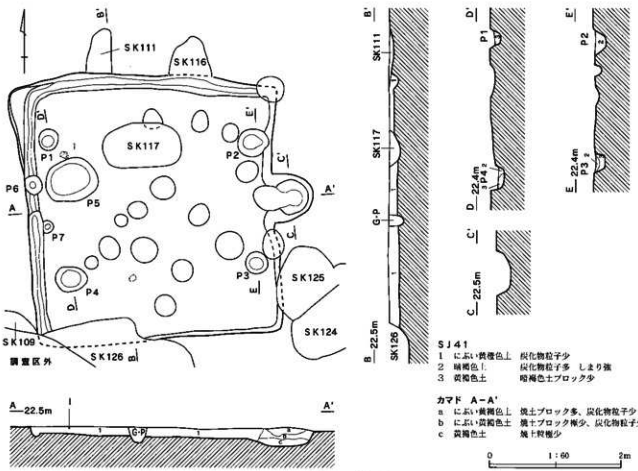
第177図 第40号住居跡出土遺物

第40号住居跡出土遺物観察表 (第177図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師甕	(8.6)	1.4		AHIJK	普	明褐色	20	
2	土師坏	(14.1)	3.1		ACGHIJK	普	橙褐色	25	
3	土師坏	(16.2)	3.7		AHIJK	普	明褐色	15	
4	土師皿	(9.1)	1.6	(5.5)	AHIJK	普	橙褐色	30	
5	土師坏		1.0	(5.1)	AHIJ	普	明褐色	40	
6	土師坏		0.9	4.6	AGHIJK	普	明褐色	35	
7	土師坏		1.1	(5.0)	AHIJ	普	暗褐色	20	
8	土師坏		0.8	5.4	AGHIJ	普	明褐色	80	
9	土師坏		0.9	(5.2)	AHIJ	普	明褐色	55	
10	土師坏		0.8	5.6	AHIJK	普	明褐色	90	
11	須恵坏		1.1	(6.1)	AIJK	不	白灰色	35	

第41号住居跡(第178・179図)

H－29・30グリッドに位置する。第111・116号土壙を切っていると思われるが、第109・117・125・126号土壙、および14本のピットに切られている。住居の規模は、東西3.75m、南北3.98m、深さ17cm、主軸方向N-87°-Eである。平面形はほぼ正方形を呈し、壁面はやや開きながら立ち上がる。カマドは、東壁中央に設けられている。燃焼部から煙道部まで、一つの窪みとして掘り込まれており、距離は90cmと短く、壁外に延びる部分は少ない。また、燃焼部の赤色化は少なく、被熱量は少ないと思われる。北壁・西壁に幅20cm前後、深さ10cm程の周壁溝が巡るが、東壁・南壁の二辺にはみられなかった。床面検出時の状況から、7本のピットを本住居跡に関連するものと推定したが、P1～P4は柱穴であろうか。ピットの具体的内容については、特定できなかった。各ピットの径は15～45cm、深さはP1が16cm、P2が20cm、P3が18cm、P4が20cm、P5が8cm、P6が



第178図　第41号住居跡

第179図　第41号住居跡出土遺物

第41号住居跡出土遺物観察表（第179図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	須恵坏	(13.4)	4.2	7.4	ADEIJ	普	暗灰色	55	
2	須恵甕		6.8	(11.0)	I	不	灰白色	25	外面に叩き目

15cm、P7が6cmを測る。床面の顕著な硬化は認められなかった。貯蔵穴と特定できるものや、住居掘方は確認されなかった。出土した遺物の内、図化し得たのは2点である。

第42号住居跡(第180・181図1～17)

G・H－30グリッドに位置する。第43・45号住居跡を切り、第44号住居跡に切られる。また南西コーナー付近のピットを切っているが、そのほかのピットには、切られていると思われる。住居跡の規模は、南北4.05m、東西3.67m、深さ26cm、上軸方向N-2°-Wである。住居跡の平面形は、台形に近い隅丸長方形を呈し、壁面は開きながら立ち上がる。

カマドは、北壁中央と北東コーナーの中間に設けられており、燃焼部は、壁面を掘り込んで造られている。カマドの遺存度は低く、ソデの痕跡もみられなかった。a層は、カマド掛け口を反映した土層と推定される。c層は天井崩落土、d層は煙道部～煙出し部、f層は火床面に相当すると考えられる。燃焼部から煙道部への傾斜は緩やかである。全体的に、カマド内面の赤色硬化は弱く、被熱量は少ないと思われる。北西コーナー手前から南東コーナー手前まで、幅10～25cm、深さ5～10cmの周壁溝が巡っているが、ほかの他の部分にはみられない。床面の、顕著な硬化は認められなかった。貯蔵穴・ピットは検出されなかった。出土した遺物の内、図化し得たのは17点である。

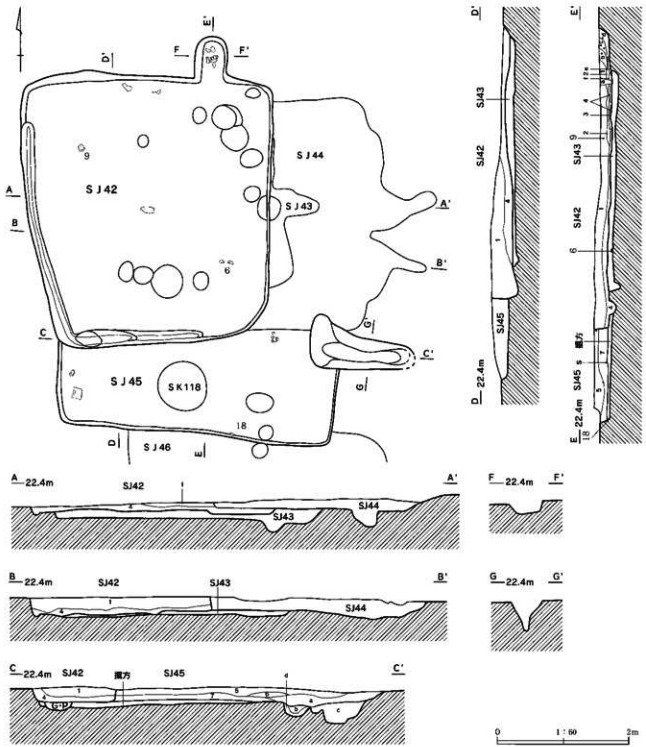
第43号住居跡(第182・183図)

G・H－30グリッドに位置する。第42・44号住居跡に遺構全体を切られているが、重複の深度が浅かったため、全体の形状・規模を把握することができた。また、遺構内に14本のピットがみられるが、床面検出時の状況から、本住居跡を切っていると判断した。住居跡の規模は、東西3.80m、南北3.50m、深さ12cm、主軸方向N-82°-Eである。住居跡の平面形は、やや台形に近い隅丸長方形を呈し、僅かに残った壁面は、開きながら立ち上がる。

カマドは、東壁中央からやや南寄りに設けられており、燃焼部は、壁面を掘り込んで造られている。カマドの遺存度は低く、ソデの痕跡もみられなかった。b層は天井崩落土、g層は煙道部に相当すると思われる。燃焼部は15cm程掘り窪められ、傾斜の緩い煙道へと続く。今回の調査で検出されたカマドの中では、本住居跡のカマドは比較的被熱量が多く、燃焼部の底面と側面には、炭化物がびっしりとこびり付いた状態であった。幅15cm、深さ10cm程の周壁溝が、南壁中央から南西コーナーまで巡るが、その他の部分にはみられない。部分的にではあるが、住居掘方が観察された。また、床面の硬化は、住居中央からカマドにかけての部分で、僅かに観察された。貯蔵穴・ピットなどは確認されなかった。出土した遺物の内、図化し得たのは5点である。

第44号住居跡(第184・185図)

G－30・H－30・31グリッドに位置する。第42・43・45号住居跡を切る。床面検出時の状況から、P1～3は本住居跡に伴うと判断したが、その内容については特定できなかった。そのほかの7本のピットについては、住居跡よりも新しいと判断した。住居跡の規模は、東西2.65m、南北3.54m、深さ15～21cm、主軸方向N-91°-Eである。住居跡の平面形は、隅丸長方形を呈し、壁面は僅かに開きながら立ち上がる。

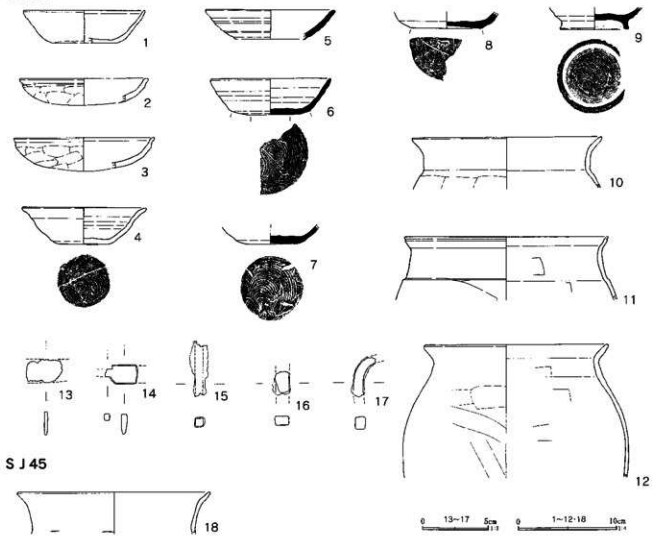


SJ42・45
1 暗褐色土　焼土ブロック(0.5～1cm)・炭化物ブロック(0.5cm)少
2 暗褐色土　炭化物ブロック(1～2cm)やや多　カマド燃焼部
3 黒色土　炭化物層　カマド燃焼層
4 暗褐色土　地山ブロック(1～2cm)少
5 暗褐色土　地山ブロック(1～2cm)・炭化物ブロック(0.5～1cm)少
6 灰色土　粘土ブロック多、焼土ブロック少
7 暗褐色土　地山ブロック(1～3cm)やや多、炭化物粒子少

SJ42　カマド　E－E'
a 黒褐色土　炭化物ブロック(0.5～1cm)多　掛け口袖存部か
b 暗褐色土　地山ブロック(0.5～1cm)少
c 暗褐色土　焼土粒少
d 暗赤褐色土　焼土ブロック(1～2cm)少、炭化物粒子多　煙道部
e 暗赤褐色土　焼土ブロック(1～2cm)多　天井崩落土
f 黒色土　炭化物層　燃焼部

SJ45　カマド　C－C'
a 暗褐色土　焼土ブロック・炭化物ブロック少　煙道部
b 暗褐灰色土　地山ブロック(0.5～1cm)やや多、炭化物ブロック(0.5～1cm)少
b～d層掘方
c 暗褐色土　地山ブロック(2～3cm)多、炭化物ブロック(0.5～1cm)少
d 褐灰色土　地山ブロック(1～2cm)多

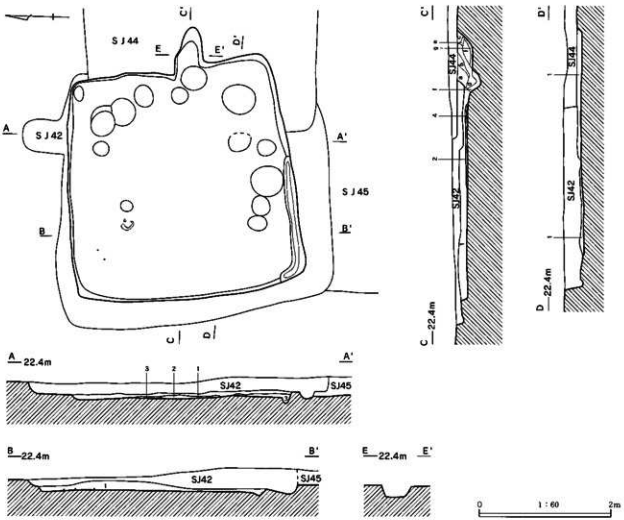
第180図　第42・45号住居跡



第181図　第42·45号住居跡出土遺物

第42·45号住居跡出土遺物観察表（第181図）

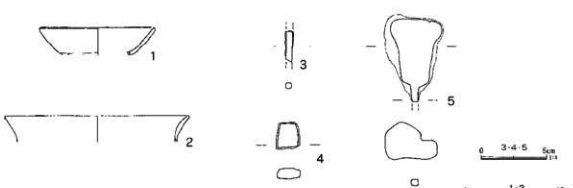
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(12.5)	3.3		ACHIJK	良	褐色	25	
2	坏	(13.0)	2.5		ACGHIJ	普	暗褐色	15	
3	坏	(14.2)	3.1		ACHIJK	普	褐色	20	
4	土師坏	(12.7)	3.7	5.2	ACGHIJK	不	明灰色	30	
5	須恵坏	(13.3)	2.9	(7.2)	AEGIJ	普	青灰色	15	
6	須恵坏	(12.2)	3.7	(7.9)	AGHIJK	良	暗褐色	20	
7	須恵坏		1.9	5.4	ARIJ	普	灰色	80	
8	須恵坏		1.7	(7.2)	AGIJ	良	青灰色	25	
9	高台付坏		2.2	7.1	AGIJK	普	灰青色	85	
10	甕	(19.2)	5.3		AGHIK	普	明褐色	15	
11	甕	(20.7)	6.4		ACHIJ	良	暗褐色	15	
12	甕	(20.8)	13.6		AGIJ	普	茶褐色	20	外面に煤付着
13	刀子	法量2.7×1.8×0.3cm			鉄製				銹化著しい
14	刀子	法量2.5×1.5×0.5cm			鉄製				両端部を欠損
15	釘	法量4.2×1.4×0.8cm			鉄製				
16	釘	法量1.8×1.4×0.7cm			鉄製				両端部とも欠損
17	不明鉄製品	法量3.2×1.1×0.9cm							両端部とも欠損
18	甕	(19.7)	4.2		AGIJK	普	褐色	10	



SJ43
1 暗灰褐色土　地山ブロック(1～3cm)多、炭化物粒子少
2 暗灰色土　地山ブロック(0.5～2cm)非常に多、炭化物粒子少　貼床
3 暗褐色土　地山ブロック(0.5～1cm)多、炭化物粒子やや多　掘方
4 黒褐色土　炭化物粒子多

カマド C－C'
a 暗褐色土　地山ブロック(0.5～1cm)・炭化物粒子少
b 暗赤褐色土　焼土ブロック(1～2cm)多　大井板倉土
c 暗褐色土　地山ブロック(1～2cm)焼土やや多
d 黒褐色土　灰層中に焼土ブロック(1～2cm)多
e 黒褐色土　地山ブロック(0.5～1cm)・焼土ブロック(0.5cm)やや多
f 黒色土　炭化物層中に焼土ブロック(3～4cm)少、焼土粒多
g 赤褐色土　焼土ブロック層中に炭化物粒子多

第182図　第43号住居跡

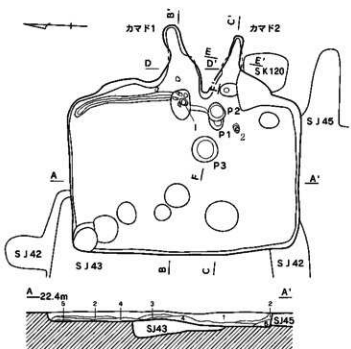


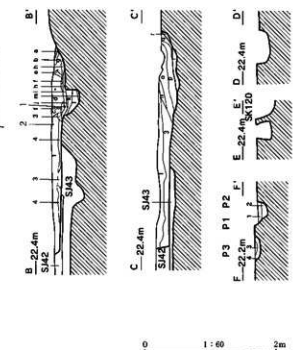
第183図　第43号住居跡出土遺物

第43号住居跡出土遺物観察表（第183図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(11.9)	2.8		AGHIJK	普	明褐色	10	
2	甕	(19.0)	2.7		ACHIJ	普	明褐色	10	
3	釘	法量	2.8×0.6×0.5cm		鉄製				両端部とも欠損
4	不明鉄製品	法量	2.1×1.8×0.8cm		鉄製				錆化著しい
5	雁股鏃か	法量	6.5×4.5×2.8cm		鉄製				錆化著しい

東壁に、2基のカマドが、軸を若干(27°)異にして設けられていた。どちらの上層断面にも埋め戻した痕跡はなく、一方を取り除いたのちもう一方を設置したとするには根拠が薄い。一つの可能性として、併存していたとも考えられる。カマド1のb層は天井崩落土、e層は掛け口を反映したものと思われる。燃焼部は、径30×45cm、深さ25cm程掘り窪めたもので、煙道から煙出しまで緩やかな斜面で壁外から長く延びる。カマド内部の赤色硬化は、カマド2よりは強い。カマド1・2の手前の床面には、炭が多く残されている状態であった。カマド2については、p層は火床面～煙道部、q層は煙出し部、r層はカマド掘方に相当すると考えられる。燃焼部は、径20×28cm、深さ8cm程掘り窪めたもので、途中に





SJ44
1 暗褐色土　炭化物粒子微量
2 灰褐色土　粘土ブロック(0.5～1cm)やや多
3 赤褐色土　焼土粒多
4 黒褐色土　焼土ブロック(0.5～1cm)・炭化物粒子多
5 暗褐色土　炭化物粒子微量

カマド1　B－B'
a 赤褐色土　焼土ブロック(0.5～1cm)少
b 暗褐色土　地山粒少
c 暗褐色土　炭化物ブロック(0.5～2cm)多、焼土粒少
d 暗褐色土　粘土ブロック(1～2cm)やや多
e 黒褐色土　粘土ブロック(0.5～1cm)・焼土ブロック(1～2cm)少　掛け口か
f 黒褐色土　炭化物ブロック(0.5～2cm)多
g 赤褐色土　焼土ブロック(1～2cm)・炭化物粒子少
h 赤褐色土　焼土ブロック(0.5～2cm)・炭化物粒子多
i 黒褐色土　炭化物粒子多
j 黒色土　炭化物層
k 黒灰色土　炭化物ブロック(0.5～1cm)多

l 暗灰色土　砂粒ブロック(0.5～2cm)多、炭化物粒子少
m 暗灰色土　炭化物ブロック(0.5cm)少

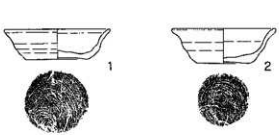
カマド2　C－C'
n 暗褐色土　粘土ブロック(0.5～2cm)・炭化物粒子少
o 暗褐色土　粘土ブロック(0.5～1cm)・炭化物粒子やや多、焼土ブロック(0.5～1cm)少
p 暗褐色土　粘土ブロック(1～2cm)・焼土ブロック(1～3cm)・炭化物粒子やや多
q 黒褐色土　粘土ブロック(0.5～1cm)・炭化物ブロック(0.5～2cm)多　煙道部
r 暗褐色土　粘土ブロック(0.5～2cm)多　掘方

ピット1～3
1 黒色土　炭化物層中に焼土ブロック(0.5～1cm)少
2 褐褐色土　焼土ブロック層中に焼土ブロック(0.5～1cm)・炭化物粒子(0.5～1cm)少
3 黒褐色土　粘土ブロック層中に炭化物粒子多
4 黒褐色土　炭化物層中に粘土ブロック(1～2cm)少

第184図　第44号住居跡

第44号住居跡出土遺物観察表（第185図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師坏	10.9	3.1	6.4	AEHI	普	赤橙褐色	100	内外面黒斑 二次的被熱か
2	土師坏	(10.6)	3.5	5.5	ACGHIJ	普	白橙色	55	



第185図　第44号住居跡出土遺物

小さな段をもち、緩やかな斜面で煙道へ続く。壁外からの延びは、カマド1よりも小さいものである。幅10cm、深さ5cm程の周壁溝は、東壁のカマド1の燃焼部から、北東コーナーまで巡っているのみで、他の部分ではみられない。周壁溝の検出状況からみて、当初カマド2があり、周壁溝はその北ソデから始まっていたものであり、カマド1を設置する際に、周壁溝の一部がカマド1の下に取り込まれた結果とするのも可能性の一つとして挙げておきたい。

ピットの径は20～35cm程で、深さはP1から順に17cm,12cm,8cmである。床面の硬化は、カマド手前の住居中央で認められた。貯蔵穴・住居掘方などは確認されなかった。出土した遺物の内で、図化し得たのは2点である。

第45号住居跡(第180・181図)

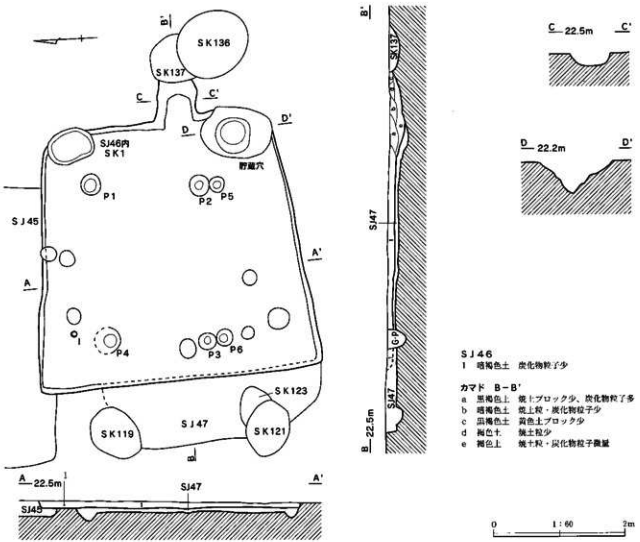
H－30・31グリッドに位置する。第42～44・46号住居跡・第118号土壙および、2本のピットに切られている。住居の規模は、東西4.25mであるが、南北1.44mまでしか遺存していなかった。住居跡の深さは25cm、主軸方向はN-93°-Eである。平面形は、方形または長方形を呈すと思われる。壁面は開きながら立ち上がる。

カマドは東壁に設置されているが、位置的にみて、壁面中央より南に寄っていると推定される。a層は煙道部、b～d層はカマド掘方に相当すると思われる。c層の深度は30cm程あり、カマドの掘方として比較的大きなものといえる。燃焼部の掘り込みは浅く、緩やかな傾斜で煙道部に続く。燃焼部は壁を掘り込んで造られており、煙道部は壁外へ長く延びる。カマド内面は比較的よく焼けており、焚口手前にも炭や灰が散乱していた。カマド周辺では、床面の硬化がほかよりも顕著であった。遺存していた範囲内では、貯蔵穴・周壁溝・ピットなどは検出されなかった。出土した遺物の内で、図化し得たのは1点である。

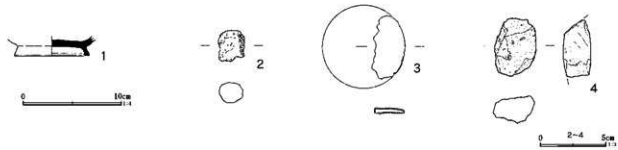
第46号住居跡(第186・187図)

H－30・31グリッドに位置する。第45・47号住居跡を切り、第137号土壙に切られる。5本のピットは、遺構検出時点に確認されたため住居跡よりも新しいと判断したが、そのほかの10本のピットについては、床面検出の過程で検出されたものである。しかしすべてが住居跡に伴うという確証はないが、図示することとした。住居跡の規模は、東西3.95mであるが、南北についてはカマドのある東辺が3.43m、西辺が4.25m、主軸方向はN-87°-E、深さは8～12cmを測る。平面形は、カマドのある東壁が短い台形を呈し、僅かに残る壁面は開きながら立ち上がる。

カマドは、東壁中央よりやや南寄りに設けられている。遺存度は低く、また内面の被熱硬化も少ない。c層は、燃焼部と煙道部に相当すると考えられる。10cm程掘り窪められた燃焼部から、きわめて緩やかな傾斜で煙道へ続く。カマド南側の、南東コーナーに貯蔵穴をもつ。貯蔵穴の規模は、径80×104cm、深さ50cm程であり、さらにその内側に径50×50cm程



第186図　第46号住居跡



第187図　第46号住居跡出土遺物

第46号住居跡出土遺物観察表（第187図）

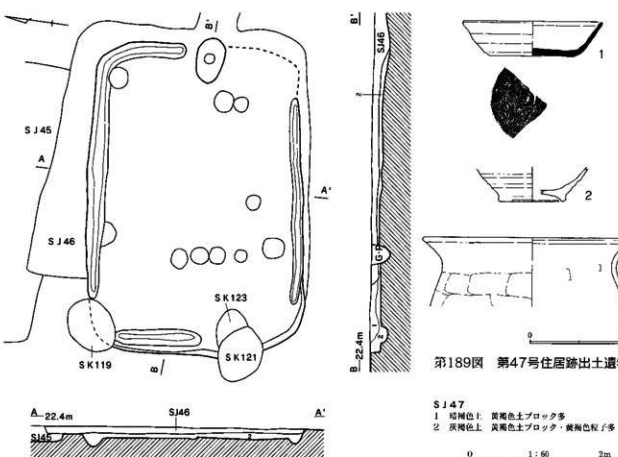
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	須恵高台付坏		2.0	7.6	EGIJK	普	灰色	90	
2	鉄滓	法量2.3×2.0×1.5cm 深緑色							
3	紡錘車	径(6.2)×厚0.5cm 鉄製							錆化著しい
4	軽石製品	法量4.3×3.2×2.0cm 重量10.9g 白橙色							浮子か

のピットが納まるような形状であった。本住居跡に伴うと判断したピットは6本である。径20～30cm、深さP1が11cm、P2が10cm、P3が18cm、P4が14cm、P5が10cm、P6が15cmを測る。また、北東コーナー部分に土壙が検出された。規模は、径48×72cm、深さ14cmを測る。床面の硬化は、顕著なものではなく、周壁溝や掘方は検出されなかった。出土した遺物の内で、図化し得たのは4点である。

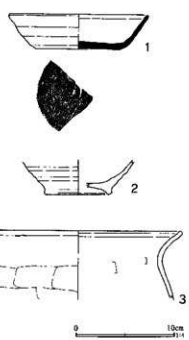
第47号住居跡(第188・189図)

H－30・31グリッドに位置する。第46号住居跡・第119・121・123号土壙に切られる。また、このほかに10本のピットがみられるが、いずれも本住居跡を切っていると思われる。遺構の多くの部分を切られているが、重複の深度が浅いため、概ねの規模・形状を捉えることができる。住居の規模は、東西4.70m、南北3.30m、深さ5～15cm、主軸方向はN-82°-Eである。平面形は隅丸長方形を呈し、僅かに残る壁面は開き気味に立ち上がる。東壁中央にピット状の窪みが検出された。僅かではあるものの、底面に焼土や炭が認められたため、カマドの燃焼部と判断した。主軸方向は、これを基に計測したものである。本住居跡のカマドと、先にみた第46号住居跡のカマドの位置とほぼ重なる位置にあることから、第46号住居跡は本住居跡を建て替えたものという可能性も考えられる。その場合、建て替えに当たって、東側には1m程縮小し、北側に40～95cm、東側に20cm程拡幅、さらに床面を5～10cm程かさ上げしたことになる。幅15～25cm、深さ5～10cm程の周壁溝が、南東・南西コーナーを除いた部分に巡っている。ちなみに、第46号住居跡では周壁溝はみられなかった。

第46号住居跡が、本住居跡の建て替えであるとすれば、貯蔵穴は本住居跡から、踏襲されたものであ



第188図　第47号住居跡



第189図　第47号住居跡出土遺物

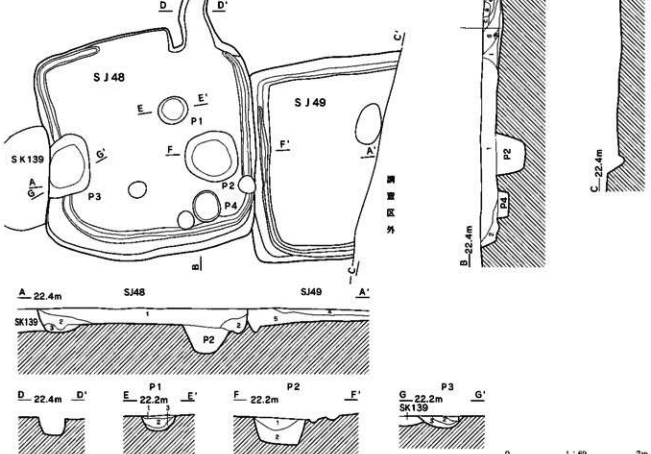
第47号住居跡出土遺物観察表（第189図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	須恵坏	(14.2)	3.5	8.6	AEIJ	普	青灰色	25	
2	土師高台付坏		3.6	(6.8)	AGHIJK	普	白橙色	20	
3	甕	(21.7)	6.9		ACGHIJ	普	褐色	15	

るかも知れない。床面検出時において、本住居跡に伴うと思われるピットは検出されなかった。床面中央よりやや南寄りの部分と、カマドと貯蔵穴の周辺部では、床面の硬化が他の部分より顕著であった。出土した遺物の内で、図化し得たのは3点である。

第48号住居跡(第190図)

H・I－30・31グリッドに位置する。第49号住



SJ48・49
1 暗褐色土 黄褐色ブロック・白色粘土ブロック・炭化物粒子・焼土粒多
2 暗褐色土 黄褐色粒多
3 白色土 褐色土ブロック少 粘性強
4 暗褐色土 黄色土ブロック多
5 褐色土 白色粘土ブロック多

SJ48 カマド
a 赤褐色土 大井落
b 褐色土 焼土粒少
c 黒褐色土 炭化物粒子少
d 暗褐色土 焼土ブロック少
e 暗褐色土 焼土粒少
f 黄褐色土 黄色土ブロック多
g 暗褐色土 焼土ブロック多 粘性やや強
h 黒褐色土 炭化物粒子・焼土粒多
i 暗褐色土 黄色土ブロック多量
j 黒色土 炭化物粒子極多

SJ48 ピット1
1 暗褐色土 黄色土ブロック少
2 褐色土 黄色土ブロック多
3 暗褐色土 焼土粒・炭化物粒子少

SJ48 ピット2
1 暗褐色土 黄色土ブロック・炭化物粒子少
2 褐灰色土 黄色土ブロック・炭化物粒子・焼土ブロック少

SJ48 ピット3
1 灰色土 鉄分多 粘性強
2 褐色土 炭化物粒子少 粘性強
3 白色土 褐色土ブロック少 粘性強

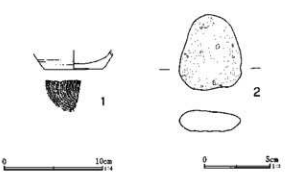
第190図 第48・49号住居跡

居跡・第139号土壙を切る。床面地調査の段階で、本住居跡に伴わないと判断したピットは3本である。住居跡の規模は、東西3.42m、南北3.15m、深さ22cm、主軸方向はN-82°-Eである。平面形は隅丸長方形を呈し、壁面はやや開き気味に立ち上がる。

カマドは東壁の南寄り、南東コーナー際に設けられている。粘土ブロックを多く含むソデと、天井の一部が遺存していた。燃焼部は、底面の窪みはごく僅かで、壁面を切り込み、ほとんど平坦面で煙道へと続く。a層は天井部、j層は火床面に相当すると思われる。燃焼部と天井部は比較的良く焼けている。東壁中央よりやや北寄りから、南東コーナーまで、幅10～20cm、深さ5cm程の周壁溝が巡っている。この周壁溝は、南壁を除いて壁面から内側に離れている。便宜上ピットとした遺構が4箇所検出されたが、内容については特定できない。ピットの規模は、P1が径40×45cm、深さ25cm、P2が径78×85cm、深さ30cm、P3が径60×90cm、深さ17cm、P4が径40×45cm、深さ24cmを測る。床面は、住居中央からカマド手前までが、比較的硬化しているのが確認された。なお、本住居跡には掘方は検出されなかった。

第49号住居跡(第190・191図)

I－30・31グリッドに位置する。遺構の南側は、調査区外に続く。北壁を、第48号住居跡に切られている。なお、確認面検出の段階で、1本のピットに切られていると判断した。住居の規模は、東西3.05mであるが、南北2.30mまでの確認にとどまる。深さは20cmを測る。平面形からみて、南北に長い東壁の、中央よりやや南寄りにカマドを有する可能性が高いと思われる。その場合の主軸をあえて計測するならば、N-93°-Eとなる。平面形は、長方形と推定される。壁面は開き気味に立ち上がる。幅10～15cm、深さ5～10cm程の周壁溝が確認された。この周壁溝は、北西コーナー付近では壁面からやや離れた位置を巡っている。床面の、顕著な硬化は認められなかった。なお検出し得た範囲内では、貯蔵穴・ピット・住居掘方はみられなかった。出土した遺物の内で、図化し得たのは2点である。



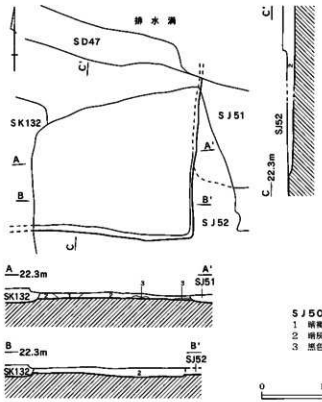
第191図　第49号住居跡出土遺物

第49号住居跡出土遺物観察表（第191図）

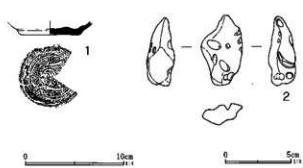
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師坏		2.0	(5.8)	CGHIJK	普	白橙色	25	
2	軽石製品	法量5.7×4.7×1.6cm			重量28.1g	白橙色	完形		浮子か

第50号住居跡(第192図・193図)

G・H－31グリッドに位置する。遺構北側は、調査区外に続く。第51・52号住居跡・第132号土壙に切られる。コーナー部分1箇所の確認である。検出できた範囲内での規模は、南北2.70m、東西2.41mである。調査区境界線の、土層断面上に観察できた本遺構の立ち上がりは10cm程であった。平面形は、方形または長方形を呈すると思われる。床面の、顕著な硬化は認められなかった。この範囲内では、カマド・貯蔵穴・周壁溝・ピット・住居掘方はみられなかった。出土した遺物の内で、図化し得たのは2点である。



第192図 第50号住居跡



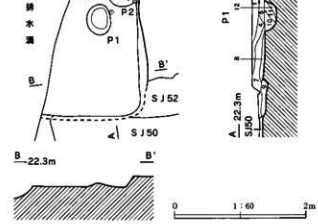
第193図 第50号住居跡出土遺物

第50号住居跡出土遺物観察表（第193図）

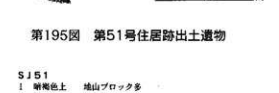
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	須恵坏		1.4	6.0	AEGHIJ	普	灰褐色	75	
2	貝巣穴痕泥岩	法量3.6×2.1×1.1cm 重量5.3g 明赤褐色							16孔 被熱

第51号住居跡(第194・195図)

G・H－31グリッドに位置する。遺構北側は、調査区外に続く。第50号住居跡を切り、第52号住居跡に切られる。住居の規模は、東西2.43mであるが、



第194図 第51号住居跡



第195図 第51号住居跡出土遺物

SJ51
1 暗褐色土 地山ブロック多
2 暗褐色土 粒十ブロック多
3 暗褐灰色土 地山ブロック、炭化物ブロック少
4 暗灰褐色土 粘土ブロック少、炭化物粒子多
5 黒灰色土 粘土ブロック・炭化物ブロック多、焼土粒やや多
6 暗灰褐色土 地山粒少
7 暗褐色土 粘土ブロック・炭化物粒子少
8 褐褐色土 灰色土ブロック多、地山ブロック少
9 褐灰褐色土 地山ブロック少、焼土粒・炭化物粒子微量
10 黒灰色土 地山ブロック・炭化物ブロック多
11 暗灰褐色土 地山ブロック多
12 黒褐色土 炭化物層中に地山ブロック・焼土粒多

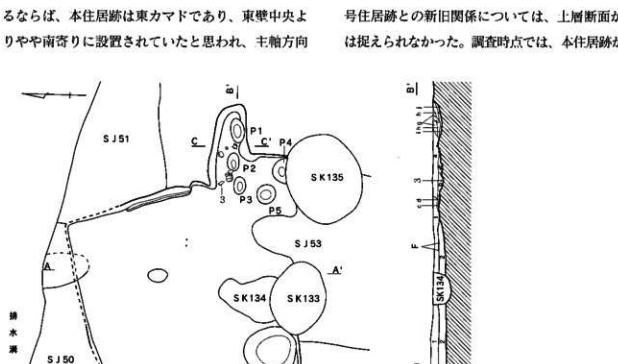
第51号住居跡出土遺物観察表（第195図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	須恵坏		1.5	(6.8)	AGIJK	普	灰色	20	

南北1.62mまでの確認である。深さ20cm。平面形は、隅丸方形または隅丸長方形を呈すると推定される。壁面は、やや開きながら立ち上がる。ピットが2本検出された。ピットの規模は、P1が径35×45cm、深さ20cm、P2が径45×55cm、深さ10cmを測る。P2は貯蔵穴と推定される。P2の北側には、炭が散在しているのが観察された。このピットが貯蔵穴であった場合、炭の存在からみて、この近くにカマドの存在していた可能性が高いと思われる。言い換えるならば、本住居跡は東カマドであり、東壁中央よりやや南寄りに設置されていたと思われ、主軸方向はN-89°-Eが想定される。9層は住居跡掘方と思われる。P2周辺では、他の部分に較べ床面の硬化が顕著であった。調査した範囲内では、カマド・周壁溝・住居掘方は認められなかった。出土した遺物の内で、図化し得たのは1点である。

第52号住居跡(第196・197図)

G・H－31グリッドに位置する。第50号住居跡を切り、第133～135号土壙に切られている。第53号住居跡との新旧関係については、土層断面からでは捉えられなかった。調査時点では、本住居跡が切っ

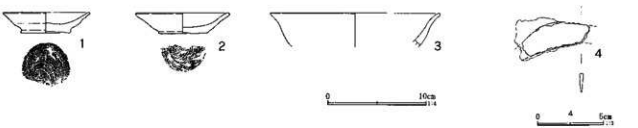


SJ52
1 暗灰褐色土　地山ブロック・地山粒多
2 暗褐色土　地山粒多、焼土粒・炭化物粒子若干　掘方

カマド
a 暗灰褐色土　地山ブロック・地山粒・焼土粒多
b 暗灰褐色土　地山ブロック少、炭化物粒子多
c 黒色土　炭化物層
d 赤褐色土　火床面
e 灰色土　灰層中に焼土ブロック多
f 白褐色土　地山ブロック少
g 黒褐色土　地山ブロック多、焼土粒・炭化物粒子少
h 灰色土　焼土粒・地山ブロック多
i 暗灰褐色土　地山ブロック多、焼土粒微量
j 暗灰褐色土　地山粒多

第196図　第52号住居跡

ているとの印象をもったが、確証を得るには至らなかった。住居の規模は、東西3.15m、南北3.30m、深さ15～25cm、主軸方向N-82°-Eである。平面形は、東壁が若干長くなる台形を呈し、僅かに残った壁面は開きながら立ち上がる。カマドは、東壁中央より南寄り、南東コーナー際に設けられている。カマドの遺存度は低く、ソデ部も北側の一部のみが残っていた。d層は火床面、e・h層は燃焼部・煙道部、i・j層は掘方に相当すると思われる。燃焼部はわずかに窪む程度で、ほとんど傾斜をもたずに煙道部へ続く。カマド内部は、燃焼部とソデ壁面に若干の赤色硬化がみられるのみで、被熱量は少ないと思われる。東壁中央に、長さ1.0m、幅・深さ5cm程の周壁溝が検出されたが、他の部分ではみられなかった。P1～6までの深さは番号順に、5cm・4cm・4cm・8cm・7cm・23cmを測る。P4またはP6が貯蔵穴であろうか。床面は、カマド付近と、住居跡中央よりやや南寄りの部分の硬化が顕著であった。2層は住居掘方である。出土した遺物の内で、図化し得たのは4点である。



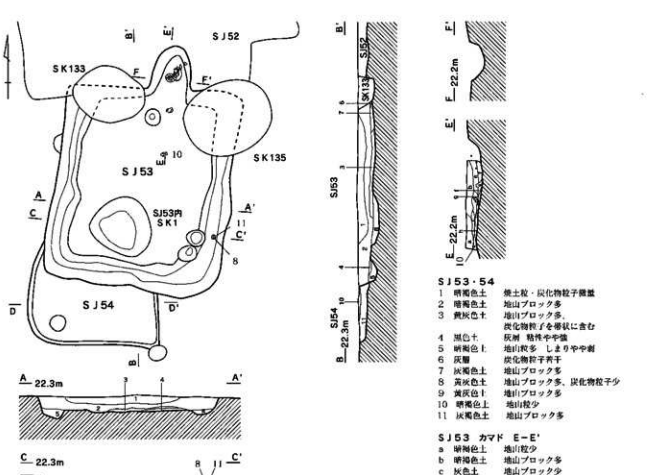
第197図　第52号住居跡出土遺物

第52号住居跡出土遺物観察表（第197図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師皿	(8.9)	2.1	5.0	ACGHK	普	褐色	35	
2	土師皿	(9.6)	2.1	(5.0)	ACEG(多)IJ	普	橙褐色	25	
3	土師坏	(17.2)	3.5		AIK	普	橙褐色	20	
4	鎌	現存長5.8×幅3.1×厚0.2cm　鉄製							銹化著しい

第53号住居跡(第198・199図)

H－31グリッドに位置する。第52号住居跡との新旧関係については、土層断面からでは捉えられなかった。調査時点では、本住居跡が切られているとの印象をもったが、確証を得るには至らなかった。第133・135号土壙に切られている。住居の規模は、南北3.12m、東西2.70m、深さ18～26cm、主軸方向N-10°-Eである。平面形は、隅丸長方形と推定される。壁面は開きながら立ち上がる。カマドは、北壁中央より東寄りに設けられている。d・e層は燃焼部～煙道部、f・g層は掘方に相当すると思われる。燃焼部は僅かに窪む程度で、緩やかな傾斜で煙道部へと続く。カマド内部は、燃焼部壁面に若干の赤色硬化がみられ、底面に炭が散在している程度であり、被熱量は少ないと思われる。床面は、カマド付近と、住居跡中央の硬化がやや顕著であった。幅28～60cm、深さ5～10cmという、住居の規模に比して大規模な周壁溝が三辺を巡っている。周壁溝は、カマド部分を除いて全周していたとも考えられる。床面検出時にピットが3本検出されたが、本住居跡に伴う可能性があるものの、その性格については特定できなかった。貯蔵穴は検出されなかった。床面は、カマド周辺の硬化が若干顕著であった。出土した遺物の内で、図化し得たのは11点である。



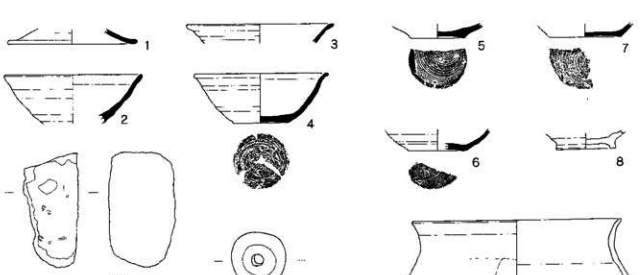
第198図　第53・54号住居跡

第54号住居跡(第198図)

H－31グリッドに位置する。第53号住居跡と、2本のピットに切られている。住居の規模は、東西1.97mであるが、東西については1.60mまでの検出である。深さは17cm。遺存している範囲からみると、平面形はやや歪んだ長方形が推測される。僅かに残った壁面は、開きながら立ち上がる。床面については、特に効果の顕著な部分はみられなかった。カマド・貯蔵穴・ピット・周壁溝・住居掘方などは検出されなかった。遺物は出土しなかった。

第55号住居跡(第200・201図)

H－31グリッドに位置する。第60号住居跡を切り、第56号住居跡に切られている。住居北東コーナーの破線は、貼床の範囲からの推定線である。第56号住居跡のほうが深度が大きいため、この部分では第56号住居跡の痕跡はない。住居の規模は、東西は3.15mであるが、南北は1.12mまでの検出にとどまる。深さは18～28cm、主軸方向はN-87°-Eである。平面形は長方形を呈すると思われる。壁面は開きながら立ち上がる。カマドは東壁に設けられており、粘土ブロックを含む左ソデの一部が遺存していた。燃焼部は壁外にまで及んでいる。a層は煙出し、b層は掛け口を反映した土層と思われる。g・h層は火床面、f層は煙道、i層は掘方に相当する。燃焼部は浅く掘り窪められたもので、途中の段を経て



第199図　第53号住居跡出土遺物

第53号住居跡出土遺物観察表（第199図）

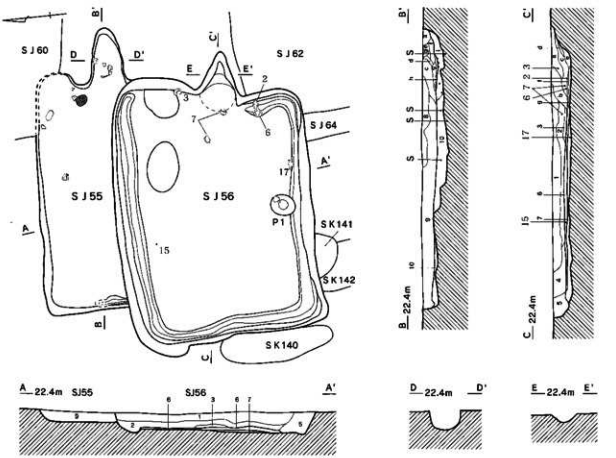
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	須恵蓋		1.4	(13.2)	AEIJ	普	青灰色	15	
2	須恵坏		5.0	(14.1)	AEIJK	普	灰色	15	
3	須恵坏	(14.9)	1.9		AEIJ	良	青灰色	15	
4	須恵坏	13.6	5.1	5.7	AEHIJK	不	暗灰色	95	内外面に煤付着
5	須恵坏		1.4	5.6	AGIJ	普	青灰色	75	
6	須恵坏		2.2	(6.0)	AIJK	普	灰色	20	
7	須恵坏		1.4	(7.2)	AEGIJ	普	茶褐色	30	
8	上師高台付坏		1.6	6.1	ADEGIJ	不	橙褐色	80	内面黒色
9	甕	(21.3)	6.5		ACGHIJ	普	褐色	15	
10	砥石	現存長8.7×幅4.2×厚4.2cm　重量203.8g　凝灰岩製　黄緑色							
11	紡錘車	法量上径2.5×下径3.9×厚2.0cm　重量47.6g　白灰色　滑石製　遺存率95%							

緩やかな傾斜で、煙道部へと続く。左ソデ・燃焼部・煙道部の内面は、被熱による赤色硬化がみられた。西壁中央に、幅10cm前後、深さ5cm程の周壁溝が、南に続いていくが、そのほかの部分ではみられない。10層は、住居掘方である。検出し得た範囲内では、貯蔵穴・ピット・土壙・住居掘方などは確認されなかった。出土した遺物の内で、図化し得たのは4点である。

第56号住居跡(第200・202図)

H－31グリッドに位置する。第55・62号住居跡を切る。3本のピットに切られているが、いずれのピットも浅く床面には達していなかった。住居跡の規模は、東西4.10m、南北3.00m、深さ18～25cm、主軸方向N-87°-Eである。平面形はやや歪んだ隅丸長方形を呈し、壁面は少し開きながら立ち上がる。カマドは、東壁中央よりやや南寄りに設けられている。燃焼部は壁外に及んでいる。燃焼部は平坦に近く、煙道部で屈曲して、短い煙出し部へ続く。燃焼部壁面は、被熱のため赤色化していた。f・g層は火床面、c～e層は煙道部に相当すると思われる。

東壁の、カマド左部分を除いて幅15～25cm、深さ10cm前後の周壁溝が巡っている。住居北辺では、周壁溝は壁面よりやや内側に入り込んだ形となっている。1枚目の貼床(7層)の上面に、さらにもう1枚貼床を載せているのが確認された。床面は、カマド周



SJ55・56

1 暗褐色土 炭化物粒子・焼土粒少
2 暗褐色土 炭化物粒子・焼土粒多 白色粘土少
3 暗褐色土 炭化物粒子・焼土粒極多
4 暗褐色土 炭化物粒子少
5 暗褐色土 炭化物粒子・白色粘土粒少 しまりやや強
6 黄褐色土 粘土質 しまり強 貼床
7 黄褐色土 粘土質 しまり強 2枚貝の貼床
8 暗褐色土 地山粒少
9 暗褐色土 地山ブロック多
10 褐色土 焼土粒微量 締方

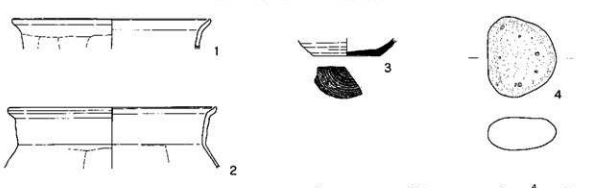
SJ55 カマド B-B'

a 灰褐色土 地山ブロック多
b 黒褐色土 地山ブロック若干、火山灰と思われる白色微細粒少 ピット
c 灰褐色土 地山粒・焼土粒多
d 灰色土 地山粒少
e 暗褐色土 地山粒多、焼土粒少
f 黒色土 灰層中に地山粒多、焼土粒少
g 灰色土 灰層中に焼土粒多
h 灰色土 灰層
i 暗褐色土 地山粒多、炭化物粒子若干 制方

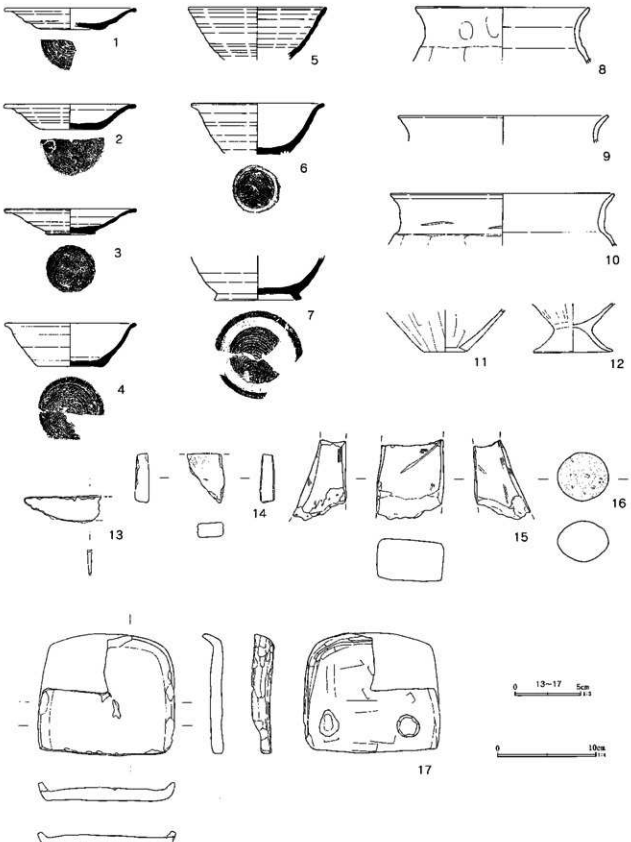
SJ56 カマド C-C'

a 暗褐色土 焼土粒・白色粘土少
b 暗褐色土 焼土粒・炭化物粒子やや多 しまり強
c 暗褐色土 焼土粒・炭化物粒子多 しまり弱
d 黒褐色土 炭化物粒子多、白色粘土ブロック少
e 黄褐色土 炭化物粒子少、白色粘土ブロックやや多
f 暗褐色土 炭化物粒子多、白色粘土ブロック少
g 暗褐色土 炭化物粒子多、白色粘土ブロックやや多

第200図 第55・56号住居跡



第201図 第55号住居跡出土遺物



第202図　第56号住居跡出土遺物

第55号住居跡出土遺物観察表（第201図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	甕	(20.1)	2.9		AHIJK	普	褐色	35	
2	甕	(21.2)	6.2		ACGHIJ	普	褐色	15	
3	須恵坏		1.8	(6.8)	AJK	普	灰青色	30	
4	軽石製品	法量6.1×5.2×2.4cm　重量43.9g　白橙色　完形							浮子か

第56号住居跡出土遺物観察表（第202図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	須恵皿	(13.4)	2.1	(6.1)	AIJ	普	青灰色	15	
2	須恵皿	(13.5)	2.5	6.0	AEGIJ	普	暗青灰色	35	
3	須恵皿	(13.3)	2.6	4.9	ACEGIJ	良	暗青灰色	30	
4	須恵坏	(13.3)	4.4	6.7	AGHIJK	不	暗灰色	20	
5	須恵坏	(14.2)	5.4		ADGIJ	普	暗灰色	25	(外)一部黒斑あり
6	須恵高台付坏	(13.5)	5.2		EGIJK	不	暗灰色	35	
7	須恵高台付坏		4.5	8.8	AGHIJ	不	橙灰色	75	
8	甕	(17.6)	5.6		ACGHIJ	普	褐色	35	
9	甕	(21.5)	2.9		AHIJ	普	褐色	20	
10	甕		(22.9)	5.3	ACHIJ	良	暗褐色	15	
11	甑		4.3	4.4	AGHJ	普	褐色	35	
12	台付甕		5.0	(8.0)	AHIJ	普	暗橙褐色	40	
13	小刀	現存長5.8×幅(1.8)×厚0.2cm　鉄製							錆化著しい
14	砥石	現存長3.7×幅2.9×厚1.1cm　重量14.1g　凝灰岩製　橙褐色							
15	砥石	現存長6.1×幅4.0×厚3.2cm　重量158.8g　凝灰岩製　白橙色							
16	軽石製品	法量3.9×3.6×3.1cm　重量22.5g　白橙色							浮子か
17	風字硯	13.4×15.5×1.2cm　GIJ　普　暗灰色　75							

辺部が他の部分よりも若干効果が顕著であった。

貯蔵穴・土壙・ピットなどは確認されなかった。

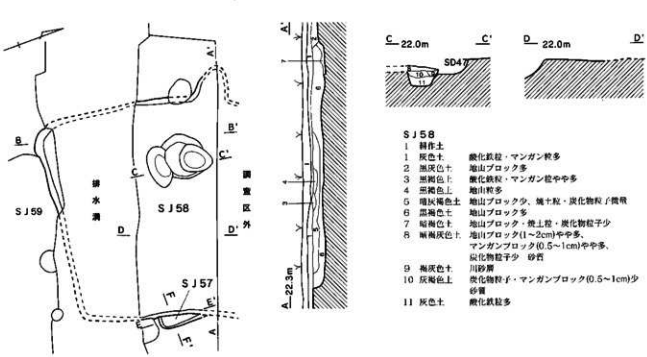
出土した遺物の内で、図化し得たのは17点である。

第57号住居跡(第203図)

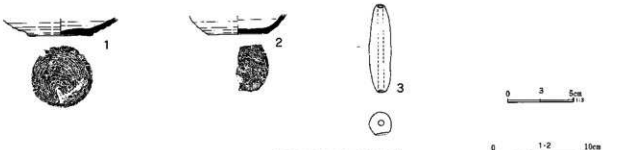
G−32グリッドに位置する。北側は調査区外に続くが、その他の大部分は、第58号住居跡と排水溝に切られており、南西コーナー部分のみが遺存していた。僅かに検出できた範囲は、南北0.70m、東西0.20mで、深さは15cmであった。壁面は、やや開きながら立ち上がる。住居の掘方は認められなかった。床面の硬化については、確認されなかった。遺物は出土しなかった。

第58号住居跡(第203・204図)

G−31・32、H−31グリッドに位置する。現地表面下15cmから検出された。第57号住居跡を切る。第59号住居跡との重複関係については、本住居跡が切っていると思われる。遺構の北側は調査区外に続き、西側の多くの部分を排水溝によって失われている。住居の規模は、東西3.30mであるが、南北2.50mまでの確認である。深さ15cm、主軸方向はN-75°-Wを指すと推定される。平面形は、長方形または隅丸長方形が推定される。壁面は、開きながら立ち上がる。カマドは、西壁に設けられていた。形状と規模からみて、このカマドは西壁中央よりやや北寄りに位置すると推定される。燃焼部は、壁面を掘り込んで造られている。7層は、火床面・煙道部に相当すると思われる。燃焼部・煙道部ともに平坦部に近い。カマド内面の赤色化はあまりみられないことから、被熱量は少ないと思われる。遺構内に土壙が検出された。平面形では、複数が重複しているかのような表現となっているが、土層断面を観察した限りでは同一遺構と推定される。規模は、径75×95cm、深さ23cmを測る。調査した範囲内では、貯蔵穴・土壙・ピット・周壁溝・住居掘方などは検出されなかった。出土した遺物の内、図化し得たのは3点である。



第203図　第57・58号住居跡



第204図　第58号住居跡出土遺物

第58号住居跡出土遺物観察表（第204図）

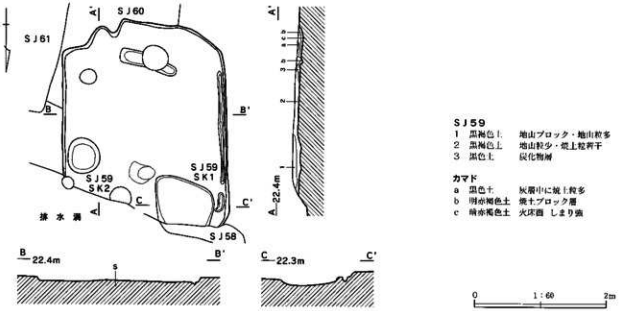
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	須恵坏		1.7	6.6	AEIJK(多)	普	灰青色	60	
2	須恵坏		1.9	(6.0)	IJK	普	青灰色	25	
3	土錘	6.7×1.7cm孔径0.5cm			AGHIJ	普	橙褐色	95	重量17.6g

第59号住居跡(第205図)

H－31グリッドに位置する。遺構の北側は、調査区外に続く。第60号住居跡を切っているが、第58号住居跡には切られていると思われる。ピットが4本確認されたが、本住居跡よりも新しいと判断した。住居の規模は、東西2.50mであるが、南北2.92mまでの確認にとどまる。深さ5～12cm、主軸方向はN-176°-Eである。平面形は、基本的に隅丸長方形であると思われるが、南壁が外側に膨らみやや不整形である。カマドは、南壁中央からやや東寄りに設けられている。燃焼部は、壁面を掘り込んで造られている。c層は火床面に相当すると思われる。燃焼部

は浅く窪む程度で、緩やかな傾斜で煙道部へ続く。カマド内面は、比較的良く焼けている。

遺構内に、土壙が2基検出された。SK1は径90×(80)cm、深さ5cm、SK2は径45×50cm、深さ24cmを測る。西辺のみに幅10～15cm、深さ5cm程の周壁溝が検出された。カマドの西側に幅20cm、深さ5cm、長さ90cmの溝がみられるが、南壁から40cm程離れている。床面調査の結果、本住居跡に伴うと判断したが、周壁溝であろうか。本住居跡では掘方は確認されなかった。床面直上に、径30×40cm、高さ15cm程の石が検出された。上面は比較的平坦であり、「台」として用いられた可能性も考えられる。床面の硬化については、カマド周辺に、若干認められる程度であった。遺物は出土しなかった。



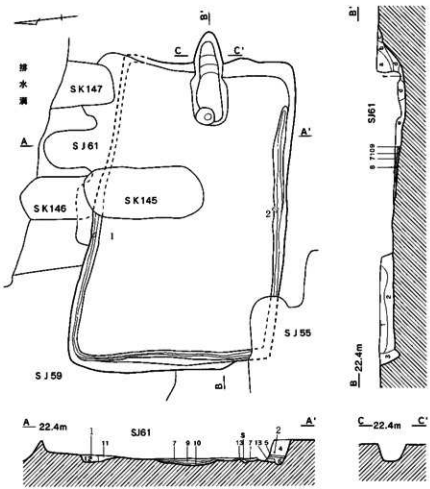
第205図 第59号住居跡

第60号住居跡(第206・207図)

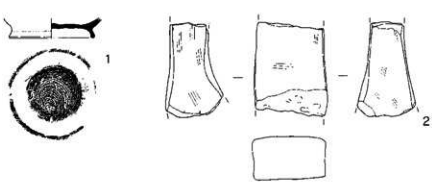
H－31・32グリッドに位置する。第55・59・61号住居跡・第145号土壙に切られている。重複によって失われている部分が多いものの、規模・形状を捉えることは可能である。住居の規模は、東西4.65m、南北3.05m、深さ20～35cm、主軸方向N-110°-Eである。平面形はやや歪んだ隅丸長方形を呈し、壁面はやや開きながら立ち上がる。カマドは、東壁に設けられているが、現状からみて中央に位置していると思われる。遺存状況は悪く、ソデや天井部の痕跡は確認されなかった。d・f層は燃焼部、d層は煙道部に相当すると思われる。燃焼部から煙道部への傾斜角度41°で立ち上がり、次いで緩やかな傾斜となって煙出しに続く。煙道部の壁面は、被熱のため比較的良く焼けていた。南西コーナー手前から北壁中央まで、幅10～20cm、深さ10cm前後の周壁溝が巡っている。北壁の東半分は失われているため、周壁溝の有無は不明である。東壁については、周壁溝はなかった。7～13層は住居掘方である。床面の硬化は、カマド周辺が、他に比べて若干顕著であった。貯蔵穴・土壙・ピットなどは検出されなかった。出土した遺物の内、図化し得たのは2点であった。

第61号住居跡(第208・209図)

H－31・32グリッドに位置する。第59号住居跡を切り、第145～147号土壙および、2本のピットに切られている。住居の規模は、南北2.97m、東西2.84m、深さ15～25cm、主軸方向N-10°-Eである。平面形は、隅丸方形を呈し、壁面はやや開きながら立ち上がる。カマドは、北壁中央に設けられている。



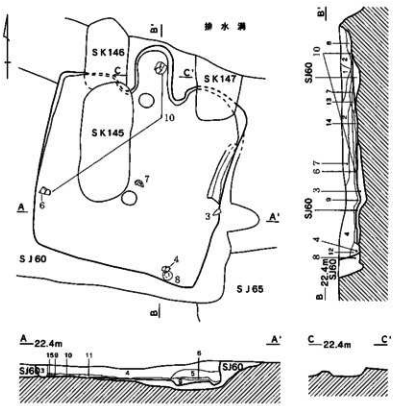
第206図　第60号住居跡



第207図　第60号住居跡出土遺物

第60号住居跡出土遺物観察表（第207図）

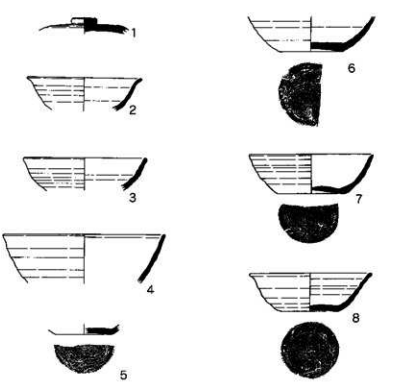
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	須恵高台付坏		2.0	8.6	AEHIJK	普	灰色	80	
2	砥石	現存長7.1×幅5.5×厚3.2cm　重量230.2g　凝灰岩製　白橙色							



SJ61
1 黄灰色土 焼土粒若干
2 暗褐色土 地山ブロック少
3 黒褐色土 地山粒多、焼土粒少
4 暗褐色土 地山ブロック若干
5 暗褐色土 地山ブロック若干
6 暗褐色土 炭化物粒子を帯状に含む
7 黒褐色土 炭化物層中に地山ブロック・焼土粒多
8 黒灰色土 灰層中に地山粒・焼土粒多
9 灰白色土 酸化鉄粒多 粘土質
10 灰褐色土 酸化鉄粒多
11 灰色土 酸化鉄粒・地山粒多
12 暗褐色土 地山ブロック多
13 灰白色土 焼土粒微量
14 灰色土 酸化鉄粒少
15 灰色土 酸化鉄粒多

0 1:60 2m

第208図 第61号住居跡



第209図 第61号住居跡出土遺物

第61号住居跡出土遺物観察表（第209図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	須恵蓋	2.6	1.6		AEGHIJK	普	暗灰色	70	
2	須恵坏	(11.8)	3.4		AEGHIJ	普	暗灰色	15	
3	須恵坏	(12.6)	3.3		AEGIJK	普	灰色	20	
4	須恵坏	(16.4)	4.9		AGHIJK	不	暗灰色	20	
5	須恵坏		1.0	(6.0)	AGIJK	普	橄欖色	45	
6	須恵坏		3.6	6.2	AEHIJK	普	灰色	30	
7	須恵坏	(12.7)	4.0	6.6	AEIJK	普	暗灰色	45	
8	須恵坏	12.5	3.9	5.8	AGIJ	普	灰色	90	
9	甕	(19.6)	3.0		AHIJ	普	明褐色	15	外面黒斑あり
10	甕		12.1	(4.5)	AHIJ	普	茶褐色	25	外面煤付着

カマドの遺存度は低く、ソデの一部が残っているのみで、天井部の痕跡はみられなかった。7層は火床面、8層は煙道部に相当すると思われる。燃焼部は平坦面に近く、緩やかな傾斜で煙道部へ続く。カマド内面は、壁面が若干、赤色硬化しているが、被熱量は比較的少ないと思われる。カマド右ソデの手前には、炭や灰が、床面にこびり付いた状態で検出された。東壁中央に、幅20cm、深さ5cm程の周壁溝が検出されたが、そのほかの部分ではみられなかった。また、貯蔵穴・土壙・ピットなども検出されなかった。出土した遺物の内で、図化し得たのは10点であった。

第62号住居跡(第210・211図)

H・I－31・32グリッドに位置する。第63・64号住居跡を切る。住居の規模は、東西2.90m、南北3.40m、深さ10～15cm、主軸方向N-92°-Eである。平面形はややいびつな隅丸長方形を呈し、壁面は開きながら立ち上がる。

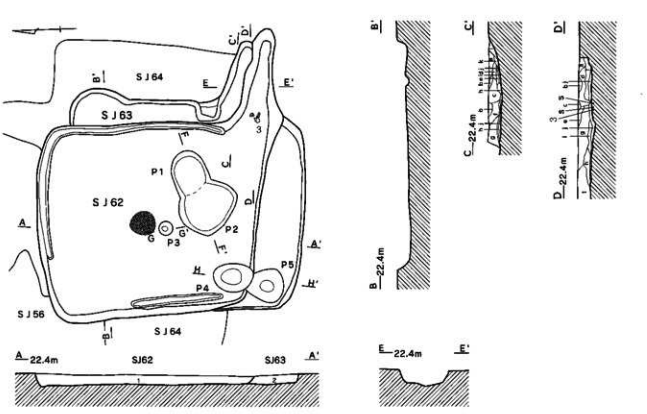
カマドは、南東コーナーに、東向きで設けられている。燃焼部は、壁面を掘り込んで造られており、燃焼部・煙道部は壁外に長く延びる。d・j層は天井崩落土、j層は燃焼部から燃焼部に相当すると思われる。燃焼部は、僅かに窪む程度で煙道へ続き、一段小さく立ち上がって垂直の煙出しへと連結する。燃焼部底面には、被熱により赤色硬化した部分があり、ここには炭も残っていた。しかし、概ねカマド内面の、被熱による赤色硬化は少ないものであった。

P1～4は、本住居跡に伴うと判断した。径と深さは、P1が径(65)×93cm、深さ14cm、P2が径53×65cm、深さ14cm、P3が径20×20cm、深さ17cm、P4が径40×62cm、深さ25cmを測る。なお、P1・2は住居掘方の可能性も考えられる。カマドの左ソデ手前～北壁中央付近までと、西壁の一部に幅10cm、深さ5cm程の周壁溝が巡っている。また、住居跡中央には、径30×40cm程の範囲で、被熱による赤色硬化した箇所が検出されている。貯蔵穴・住居掘方は認められなかった。出土した遺物の内で、図化し得たのは3点である。

第63号住居跡(第210・211図)

H・I－31・32グリッドに位置する。第64号住居跡を切り、第62号住居跡に切られる。遺構の大部分が、第62号住居跡によって失われているが、コーナー部分が3箇所残っているため、規模・形状は推定することができる。住居の規模は、東西3.20m、南北4.07m、深さ12cm、主軸方向N-92°-Eである。平面形は隅丸長方形と推定され、壁面は開きながら立ち上がる。

カマドは、東壁中央からやや南寄りに設けられている。カマドは、粘土ブロックを多く含んだ左ソデの一部が残っているが、概して遺存度は低い。燃焼部は壁面を掘り込んでおり、煙道部は壁外まで長く延びる。b層は天井崩落土、c層は燃焼部、h～j層は煙道部に相当すると考えられる。燃焼部はごく僅かに窪む程度で、緩やかな傾斜で煙道部へと続く。床面調査の結果、P5は、本住居跡に伴うものと判断した。規模は径48×（53）cm、深さ15cmを測る。



SJ62・63
1 黒褐色土 黄色土ブロックやや多、炭化物粒子少
2 暗褐色土 黄色土ブロック多、炭化物粒子少

SJ62 カマド D-D'
a 暗褐色土 焼土粒少
b 暗褐色土 焼土粒少、炭化物粒子微少
c 暗褐色土 焼土粒・地山粒少
d 黄褐色土 天井崩落土
e 暗褐色土 焼土粒・炭化物粒子粒・地山粒少
f 黒褐色土 炭化物粒子多、焼土粒少
g 黒褐色土 焼土粒・黄色土ブロック少
しまりやや強
h 暗褐色土 黄色土ブロック少 しまり強
i 暗褐色土 焼土粒多 天井崩落土
j 黒褐色土 炭化物粒子多

SJ63 カマド C-C'
a 黄褐色土 焼土粒少
b 黄褐色土 下層は焼熱により赤色硬化
天井崩落土
c 暗褐色土 炭化物粒子多
d 黄褐色土 焼土粒多
e 暗褐色土 炭化物粒子・焼土粒多
f 暗褐色土 黄褐色粒層少、焼土粒少
g 暗褐色土 黄褐色粒やや多
h 黄褐色土 焼土粒微少
i 黒褐色土 炭化物粒子多
j 黄褐色土 粘性強
k 黄褐色土 焼土粒やや多

SJ62・63 ピット1・2・4・5
1 暗褐色土 地山ブロック多、焼土粒少
2 暗褐色土 地山ブロック多、粘性強
3 暗褐色土 地山ブロック多、炭化物粒子少
4 暗褐色土 地山ブロック多、炭化物粒子少 粘性強
5 暗褐色土 地山ブロック多、炭化物粒子少
6 暗褐色土 地山ブロック多、炭化物粒子少 粘性強

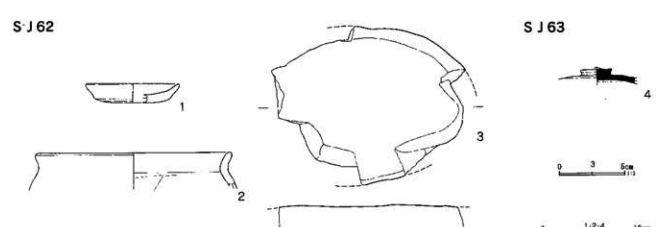
SJ62 ピット3
1 黒褐色土 地山ブロック少、炭化物粒子多
2 黄褐色土 地山ブロック多

第210図 第62・63号住居跡

床面硬化の有無は、捉えることができなかった。調査した範囲内では、貯蔵穴・周壁溝・住居掘方は認められなかった。出土した遺物はごく僅かで、図化し得たのは1点のみである。

第64号住居跡(第212図)

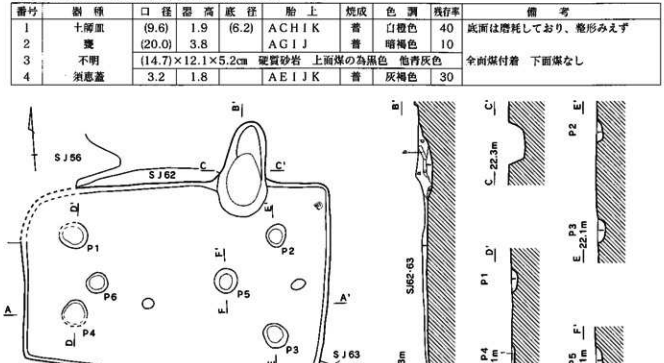
H・I-31・32グリッドに位置する。第56・62・63号住居跡に切られている。重複によって遺構の大部分が削り取られているが、幸い他遺構の深度が浅かったため、遺構の規模・形状は捉えることができた。住居の規模は、南北2.85m、東西4.62m、深さ16~25cm、主軸方向N-5°-Eである。平面形は長方形を呈し、壁面は開きながら立ち上がる。カマドは、北壁中央から東寄りに設けられている。焼成部は、壁面を掘り込んで造られている。e・f層は燃焼部、d層は煙道部に相当すると思われる。燃焼部は25cm程掘り窪められており、段を経て煙道部に続く。カマド内部はあまり焼けておらず、被熱量は少ないと思われる。床面調査時の結果から、8本のピットの内6本を、本住居跡に伴うものと判断した。各ピッ



第211図　第62・63号住居跡出土遺物

第62・63号住居跡出土遺物観察表（第211図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師皿	(9.6)	1.9	(6.2)	ACHIK	普	白橙色	40	底面は磨耗しており、整形みえず
2	甕	(20.0)	3.8		AGIJ	普	暗褐色	10	
3	不明	(14.7)×12.1×5.2cm			硬質砂岩　上面煤の為黒色　他青灰色				全面煤付着　下面煤なし
4	須恵蓋	3.2	1.8		AEIJK	普	灰褐色	30	



SJ64
1　暗褐色土　炭化物粒子極少

カマド
a　黄褐色土　炭化物粒子少　しまり強
b　黄褐色土　炭化物粒子やや多　しまりやや強
c　暗褐色土　焼土粒少
d　暗褐色土　焼土粒・炭化物粒子多
e　暗褐色土　炭化物粒子多
f　暗褐色土　炭化物粒子・焼土粒極多

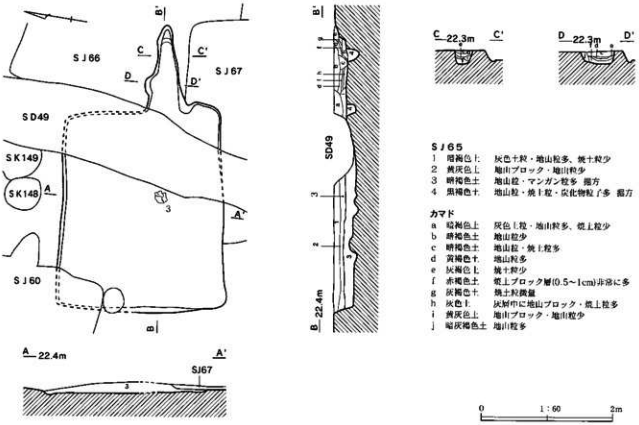
ピット1～5
1　暗褐色土　地山ブロック少

第212図　第64号住居跡

トの径と深さは、P1から番号順に、径40×42cm、深さ10cm、径30×35cm、深さ10cm、径35×35cm、深さ11cm、径40×(45)cm、深さ5cm、径35×35cm、深さ10cm、径30×35cm、深さ4cmを測る。P1～4は極めて浅いものの、規則的な配置であり、主柱穴の可能性も考えられよう。住居中央からカマド手前において、床面の硬化が比較的顕著であった。貯蔵穴・周壁溝・住居掘方などは認められなかった。土師器坏の小破片が僅かに出土したが、図化し得るものはなかった。

第65号住居跡(第213・214図)

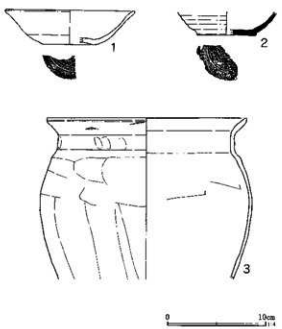
H－32グリッドに位置する。第66号住居跡を切り、第60・61・67号住居跡・第49号溝跡に切られている。ピットが1本確認されたが、本遺構に伴うものではないと判断した。住居の規模は、東西3.04m、南北2.50m、深さ16～25cm、主軸方向N-5°-Eである。平面形は長方形を呈し、壁面は開きながら立ち上がる。カマドは、東壁中央から南寄りに設けられている。燃焼部は、壁外に及んでいる。f・h層は燃焼部から煙道部、i層はカマド掘方に相当すると思われる。燃焼部は、浅く皿状に掘り窪められており、緩やかな傾斜で煙道部に続く。さらに、煙道端部において急傾斜で立ち上がり、段を経て緩やかに煙出しへ至る。燃焼部から煙出しは壁外に長く延びている。燃焼部・煙道部には焼土が多くみられたが、カマド内部の壁面自体は、比較的焼け方が弱いものであった。床面は、カマド周辺が他の部分よりもやや硬化が顕著であった。4層は、住居跡の掘方である。貯蔵穴・ピット・周壁溝などは検出されなかった。出土した遺物は少なく、図化し得たのは3点であった。



第213図　第65号住居跡

第65号住居跡出土遺物観察表（第214図）

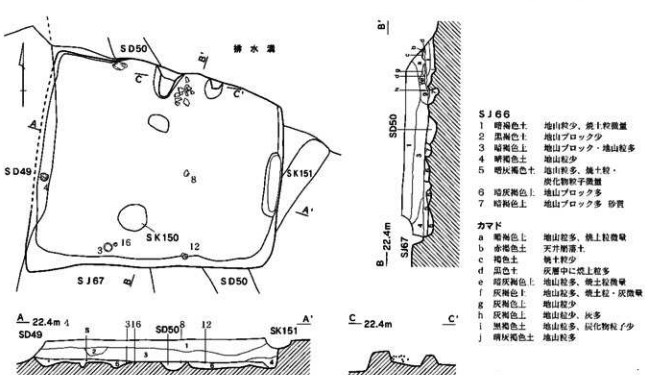
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(13.3)	3.5	5.6	ACGHIJK	普	橙褐色	5	酸化炎
2	須恵坏		2.4	(5.8)	AGIJ	普	灰色	25	
3	甕	(20.4)	16.4		AHIJK	普	橙褐色	20	



第214図　第65号住居跡出土遺物

第66号住居跡(第215・216図)

H－32グリッドに位置する。北側は排水溝によって失われている。第50号溝跡を切り、第65・67号住居跡・第49号溝跡・第150・151号土壙に切られる。北壁の一部と、カマドの壁外部分が失われているほかは、概ね住居跡のプランを窺がうことができる。住居の規模は、南北3.16m、東西3.65m、深さ35cm、主軸方向N-8°-Eである。平面形は隅丸長方形を呈し、壁面はやや掘きながら立ち上がる。カマドは、北壁中央からやや東寄りに設けられている。ソデは白色粘土ブロックを多く含む。b層は天井崩落土、h層は燃焼部、d層は煙道部、i・j層はカマド掘方に相当すると思われる。燃焼部は、壁面を掘り込んで皿状に浅く掘り窪められ、緩やかな傾斜で煙道部と連結する。カマド内面の、被熱による変

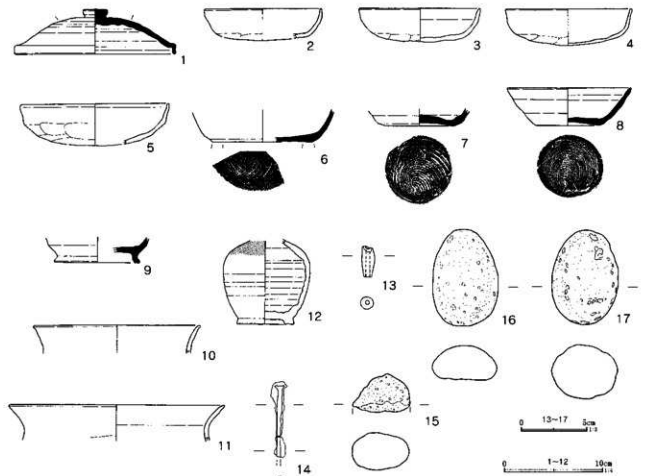


第215図　第66号住居跡

色は少ない。

東壁中央際に、幅20cm、深さ10cm、長さ98cm程の周壁溝がみられるが、そのほかの部分では確認されなかった。6層は住居覆方に相当すると思われる。

床面は、カマド周辺の硬化が、他の部分よりも顕著であった。検出できた範囲内では、貯蔵穴・ピットなどは確認されなかった。出土した遺物の内、図化し得たのは17点であった。



第216図　第66号住居跡出土遺物

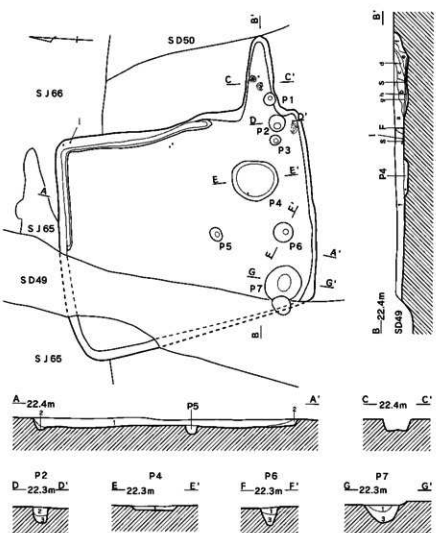
66号住居跡出土遺物観察表（第216図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	須恵蓋	(16.4)	4.5		AIJ	普	暗青灰色	35	
2	坏	12.0	(3.2)		ACEHI	肯	褐色	40	
3	坏	12.5	3.4		ACGHIK	肯	褐色	95	底部外面に黒斑
4	坏	13.0	3.7		ACHIJ	普	褐色	85	
5	坏	(15.2)	4.2		AHIJK	普	暗褐色	25	
6	須恵坏		3.3	(10.7)	AEGIJ	普	暗灰色	20	
7	須恵坏		1.8	6.9	AGHIJK	普	橙灰色	80	
8	須恵坏	12.7	3.8	6.5	GIJ	不	暗灰色	80	
9	須恵高台付坏		2.6	(8.7)	AIJK	普	灰色	15	
10	甕	(17.0)	2.8		AHIJ	普	褐色	15	
11	甕	(21.9)	3.6		AHIJ	普	褐色	15	
12	灰釉薬壺		8.6	5.8	G	良	暗褐色	95	
13	土錘	2.3×1.0×1.0cm 孔径0.3cm AIJ				普	橙褐色	50	重量2.2g
14	釘	現存長5.7×幅0.4×厚0.3cm 鉄製							錆化著しい
15	軽石製品	現存長2.8×幅4.3×厚2.8cm 重量18.5g					白橙色		浮子か
16	軽石製品	現存長7.3×幅5.0×厚2.6cm 重量58.3g					白橙色	完形	浮子か
17	軽石製品	現存長7.2×幅5.0×厚4.1cm 重量81.2g					白橙色	完形	浮子か

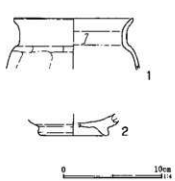
第67号住居跡(第217・218図)

H・I－32グリッドに位置する。第65・66号住居跡を切り、第49号溝跡に切られる。住居の規模は、東西3.33m、南北3.90m、深さ13cm、主軸方向N-80°-Eである。平面形は隅丸長方形を呈し、壁面は開きながら立ち上がる。

カマドは、東壁の南東コーナー際に設けられている。燃焼部は、壁外に及んでいる。g・h層は燃焼部、e・f層は煙道部に相当すると思われる。ごく浅く皿状に掘り窪められ、20°程の傾斜で煙道部に続く。燃焼部から煙出しは壁外に長く延びる。カマド内面は比較的良く焼けた状態であった。東壁と北壁の一部に、幅10cm、深さ5cm程の周壁溝が巡っているが、他の部分では検出されなかった。図示したピットは、床面調査時に本遺構に伴うと判断したものである。各ピットの径と深さは、P1が径15×15cm、深さ8cm、P2が径25×25cm、深さ23cm、P3が径12×12cm、深さ10cm、P4が径58×70cm、深さ5cm、P5が径15×20cm、深さ1cm、P6が径30×32cm、深さ26cm、P7が径50×56cm、深さ25cmを測る。本



第219図　第67号住居跡



第218図　第67号住居跡出土遺物

SJ67
1　暗褐色土　黄色地山ブロック・炭化物粒子少　しまり弱
2　黄褐色土　黄色地山ブロック多、□色粘土少　しまり強

カマド
a　暗褐色土　黄色土ブロック少
b　暗褐色土　焼土ブロック多　天井崩落土
c　暗褐色土　黄色土ブロック多
d　暗褐色土　焼土ブロック少
e　暗褐色土　黄色土ブロック少、焼土粒・炭化物粒子微少
f　黄褐色土　炭化物粒子多
g　黒褐色土　炭化物粒子多
h　暗褐色土　焼土粒・炭化物粒子多

ピット2・4・6・7
1　暗褐色土　黄色土ブロック少
2　黒褐色土　炭化物粒子多、焼土粒少
3　暗褐色土　黄色土ブロック多

0　1:60　2m

第67号住居跡出土遺物観察表(第218図)

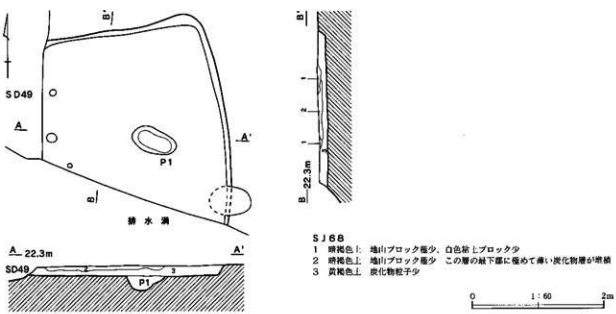
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	甕	12.3	5.1		AGHIJ	普	暗褐色	10	
2	土師高台付坏		2.2	(6.8)	AIJ	普	明褐色	35	内面黒色処理

住居跡は掘方が検出されなかった。住居中央から、カマド周辺までの床面硬化は、他の部分よりもやや顕著であった。出土した遺物の内、図化し得たのは2点である。

第68号住居跡(第219図)

Ⅰ－32グリッドに位置する。遺構の南側は調査区外に続く。第49号溝跡と4本のピットに切られる。検出できた住居の規模は、東西2.85m、南北3.06m、深さ15cmを測る。強いて計測するならば、主軸方向はN-10°-WまたはN-80°-Eと推定される。

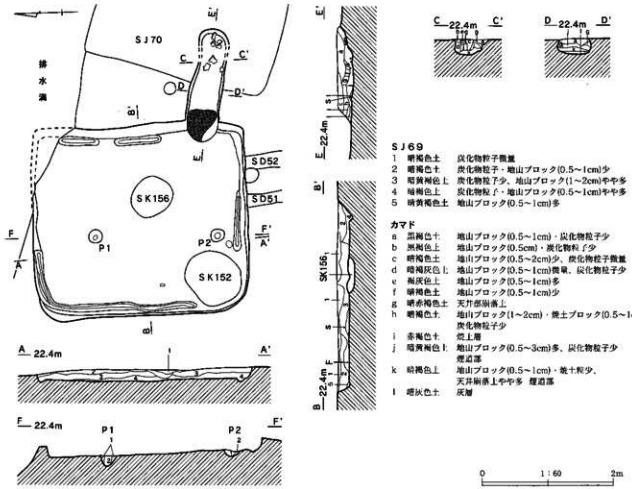
本住居跡の西壁は、第49号溝跡の西側にはみられないことから、第49号溝跡の中で収まる小規模なものと推定される。平面形は、方形または長方形と思われる。ピットが1本確認された。規模は、径35×68cm、深さ20cmを測る。床面の硬化は、住居の北西部分でやや目立ったことから、このすぐ西側に、カマドが設置されていたとも推定される。調査した範囲内では、カマド・貯蔵穴・周壁溝・住居掘方などは、検出されなかった。遺物は出土しなかった。



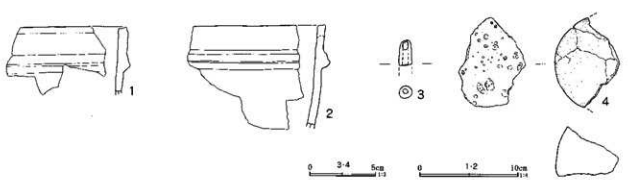
第219図 第68号住居跡

第69号住居跡(第220・221図)

H－32・33グリッドに位置する。第70号住居跡、第156号土壙、第51・52号溝跡を切り、第152号土壙に切られていると思われる。北東コーナーを排水溝によって失っている。住居の規模は、東西2.91m、南北3.28m、深さ10～17cm、主軸方向N-91°-Eである。カマドは、東壁の南東コーナー際に設けられている。燃焼部は、壁外まで浅く掘り窪められ、緩やかな傾斜で煙道部に続き、段を経て煙出しに至る。g層は天井崩落土、i層は火床面、k層は煙道部に相当すると思われる。燃焼部から煙道までは、壁外に長く造られているが、被熱により非常に良く焼けている。煙道部から煙出し部にかけての底面には、土師器甕の破片が点在していた。幅10cm、深さ5cm程の周壁溝が、部分的に途切れるものの、四辺に巡っている。径20cm程のピットが2本検出されているが、深さはP1が13cm、P2が10cmを測る。カマド周辺の床面硬化は、他の部分よりは、やや顕著であった。貯蔵穴・掘方は確認されなかった。出土した遺物の内、図化し得たのは4点であった。



第220図 第69号住居跡



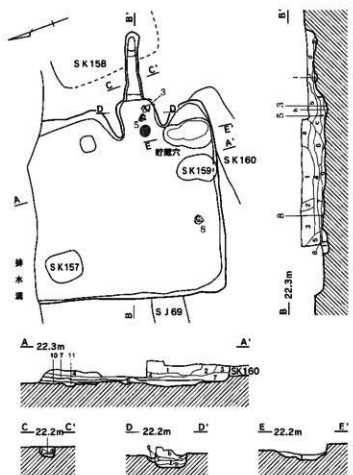
第221図 第69号住居跡出土遺物

第69号住居跡出土遺物観察表（第221図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	羽釜		6.9		AHIJG	普	褐色	10	
2	羽釜		10.5		AGIJ	普	褐色	10	
3	土錘	(1.9)×1.0×1.0cm			JK	普	黒褐色	40	重量1.8g
4	軽石製品	現存長6.7×幅4.9×厚3.8cm 重量64.5g					灰白色		欠け口以外全面煤付着 浮子か

第70号住居跡(第222・223図)

H－33グリッドに位置する。北側は調査区外に続く。第160号土壙を切り、第69号住居跡・第157・159号土壙に切られている。第158号土壙はプランが不明確であり、本遺構との新旧関係は確定できなかった。ピットが1本検出されているが、本遺構に伴うものではないと判断した。住居の規模は、東西2.87mであるが、南北2.83mまでの検出である。深さ28cm、主軸方向N-105°-Eである。平面形は南北に長い長方形と推定される。壁面は、やや開きなが



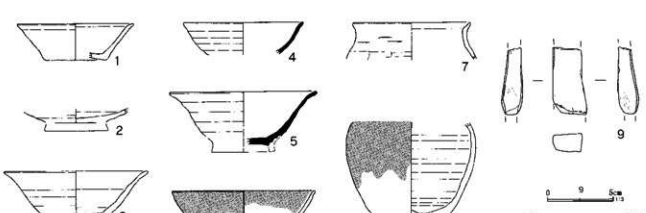
SJ70
1 暗灰褐色土 地山粒多、炭化物粒子若干
2 暗灰褐色 黒褐色ブロック少
3 暗灰褐色土 地山粒少
4 灰色土 酸化鉄粒・マンガン粒多
5 灰色土 地山粒多
6 黒褐色土 地山粒多、焼土粒・炭化物粒子若干
7 灰色土 酸化鉄粒多
8 暗灰色土 マンガン粒多、焼土粒・炭化物粒子微量
9 灰色土 酸化鉄ブロック・マンガン粒多 軟土質 掘方
10 黒褐色土 地山粒多 掘方
11 黒褐色土 地山粒多 掘方

カマド
a 暗灰褐色土 焼土粒少
b 暗灰褐色土 マンガン粒多
c 赤褐色土 焼土ブロック層 天井崩落土
d 暗灰褐色土 地山粒若干、焼土粒多
e 黒色土 炭化物層中に暗灰褐色土ブロック少
f 灰色土 炭層中に暗灰色土ブロック・焼土ブロック・炭化物粒子多
g 黒色土 炭層中に地山粒・焼土粒・炭化物粒子多
h 黒褐色土 炭化物粒子少
i 暗褐色土 炭化物ブロック少 掘方

貯蔵穴
1 黒褐色土 地山ブロック多、焼土粒・炭化物粒子微量

0 1:60 2m

第222図 第70号住居跡



第223図 第70号住居跡出土遺物

第70号住居跡出土遺物観察表（第223図）

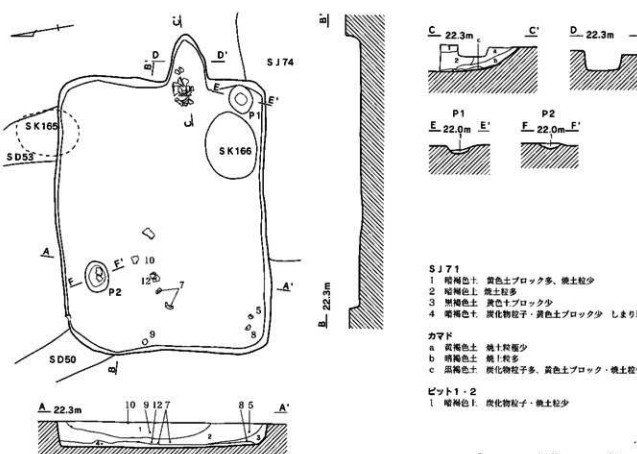
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師坏	(11.9)	3.7	(6.2)	AHIJK	普	灰色	35	
2	土師高台付坏		1.5		AGHIJ	普	橙褐色	40	
3	土師高台付坏	(14.8)	5.6	(7.8)	AEGHIJ	不	灰褐色	25	
4	須恵坏	(12.3)	3.3		AIJ	普	暗灰色	15	
5	須恵高台付坏	(15.0)	5.5		AIJK	普	暗青灰色	20	
6	灰釉坏	(14.6)	3.2		IK	普	明緑色	15	
7	甕	(12.0)	3.8		AGHIJ	普	橙褐色	10	
8	灰釉壷		10.5	6.7	IK	普	灰白色・緑灰色	45	
9	砥石	現存長5.0×幅2.5×厚1.4cm　重量27.8g　凝灰岩製　白橙色							

ら立ち上がる。

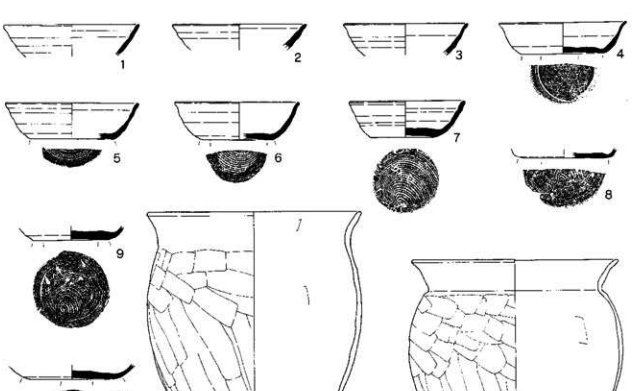
カマドは、東壁中央から南寄りに設けられている。燃焼部は、壁面を掘り込んでいる。白色粘土ブロックを多く含むソデが、一部分ではあるが左右ともに遺存していた。c層は天井崩落土、d層は煙道部、f・g層は燃焼部、i層は掘方に相当すると思われる。浅く掘り窪められた燃焼部は、38°程の傾斜で立ち上がり、平坦で長く延びる煙道部へと続く。燃焼部底面とソデ内面では、赤色硬化が認められた。カマドの右、南東コーナー部分に、貯蔵穴が検出された。規模は、径43×73cm、深さ18cmを測る。9～12層は、住居掘方である。周壁溝・ピットは確認されなかった。出土した遺物の内、図化し得たのは9点である。

第71号住居跡(第224・225図)

I－33グリッドに位置する。第74号住居跡・第165・166号土壙・第53号溝跡に切られる。住居の



第224図　第71号住居跡



第225図　第71号住居跡出土遺物

第71号住居跡出土遺物観察表（第225図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	須恵坏	(13.8)	3.3		GIJK	普	灰色	15	
2	須恵坏	(13.5)	2.6		AEHIJ	普	明灰色	15	
3	須恵坏	(12.6)	3.2		AGHIJ	普	橙褐色	10	
4	須恵坏	(12.9)	3.2	8.3	AEHIJ	良	暗青灰色	20	
5	須恵坏	(13.5)	3.7	(8.5)	EIJK	良	青灰色	15	
6	須恵坏	(12.7)	3.9	(7.6)	AGHIJ	普	橙灰色	20	
7	須恵坏	12.0	3.7	6.7	AEGIJK	良	青灰色	80	
8	須恵坏		1.0	(9.1)	EIJK	普	青灰色	40	
9	須恵坏		1.4	7.8	AEGHIJ	普	橙灰色	90	
10	須恵坏		1.5	(8.6)	AGIJ	普	灰色	35	
11	甕	21.7	27.8		ACGHIJ	普	褐色	45	胴外面に煤付着多
12	甕	(21.0)		15.7	AGHIJ	普	褐色	30	煤付着

規模は、東西4.10m、南北3.18m、深さ33～38cm、主軸方向N-110°-Eである。平面形は隅丸長方形を呈し、壁面は僅かに開きながら立ち上がる。

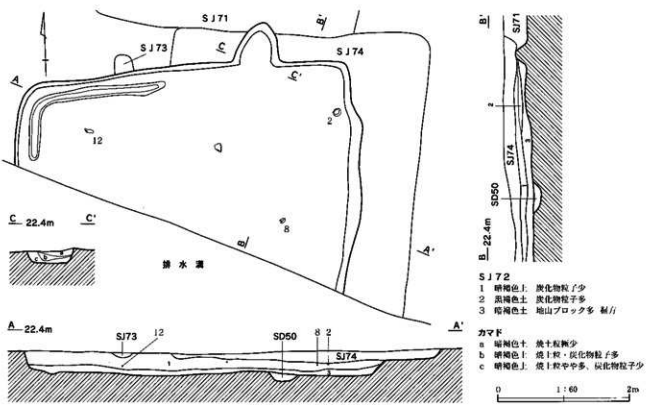
カマドは、東壁中央からやや南寄りに設けられている。燃焼部は、壁面を掘り込んで造られている。c層は燃焼部、b層は煙道部に相当すると思われる。燃焼部は浅く掘り窪められ、38°の傾斜で煙道部へ続く。カマド内面は、被熱のため赤色硬化している箇所もあるが、その範囲は狭く、全体的に焼け方は弱い。燃焼部底面から数センチ程浮いた状態で、土師器甕の破片がある程度まとまった状態で出土している。ピットが2本確認されたが、いずれも本遺構に伴うものと判断した。径と深さは、P1が径35×43cm、深さ10cm、P2が径35×46cm、深さ7cmを測る。

P1の規模は小さいものの、位置関係からみて貯蔵穴の可能性が考えられる。床面の硬化が比較的顕著であったのは、住居跡中央からやや南に寄った部分であった。周壁溝・住居掘方などは検出されなかった。遺物は、住居内の西寄りからの出土が目立った。出土した遺物の内、図化し得たのは12点である。

第72号住居跡(第226・227図)

Ⅰ-32・33グリッドに位置する。遺構の南側は調査区外に続く。第71号住居跡・第50号溝跡を切り、第73・74号住居跡に切られる。住居の規模は、東西5.28mであるが、南北3.50mまでの確認である。深さ25～30cm、主軸方向N-2°-Eである。

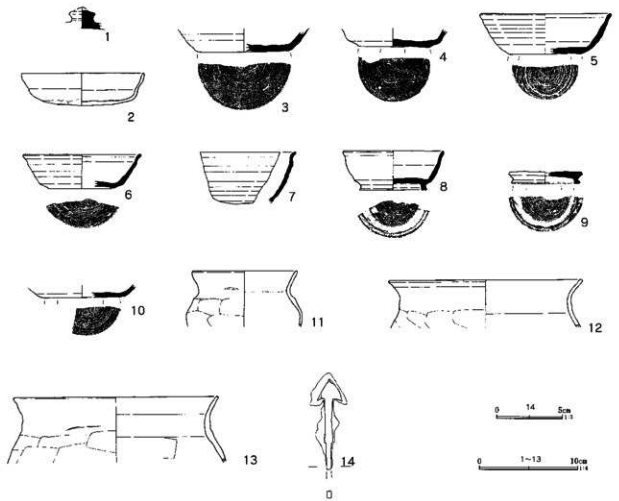
カマドは、北壁中央から東寄りに設けられている。燃焼部は、壁面を掘り込んで造られている。c層は、火床面に相当すると思われる。燃焼部は、壁外まで



第226図 第72号住居跡

第72・74号住居跡出土遺物観察表（第227図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	須恵蓋	2.6	1.9		AHIJ	普	灰色	70	
2	坏	12.4	3.4		ACEGHI	普	褐色	70	
3	須恵坏		2.4	9.4	AEHIJ	良	暗青灰色	40	
4	須恵坏		1.9	7.2	AEHIJ	普	青灰色	40	
5	須恵坏	(13.3)	4.1	(7.3)	AEHIJ	普	青灰色	40	
6	須恵坏	(12.1)	3.5	(6.7)	AKGIJ	普	青灰色	20	
7	須恵坏		5.2		AIJ	普	暗青灰色	10	
8	須恵高台付坏	(10.1)	4.0	(6.8)	AIJK	普	灰色	15	
9	須恵高台付坏		1.3	(7.0)	AIJK	普	灰色	45	
10	須恵坏		1.3	(7.8)	AHIJ	普	灰色	15	
11	甕	(10.8)	5.7		ACEHIJ	普	褐色	15	内外面に煤付着
12	甕	(19.7)	5.0		AHIJK	普	褐色	20	
13	甕	(20.9)	6.8		ACGHIJ	普	橙褐色	15	
14	鉄鏃	現存長7.3×幅2.9×厚0.5cm　欠損部以外は錆で覆われている							



第227図　第72・74号住居跡出土遺物

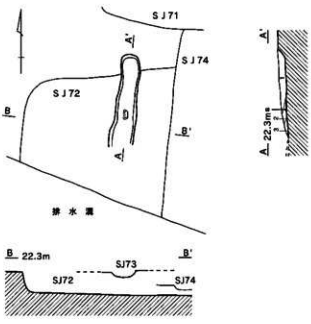
浅く掘り窪められ、短く立ち上がって煙出し部に至る。カマド内面はあまり焼けておらず、被熱量は少なかったものと推定される。北壁から西壁の一部に、幅15cm前後、深さ5cm前後の周壁溝が巡っているが、他の部分では認められなかった。3層は住居掘方で、貼床面はカマド周辺の硬化が、他の部分よりも顕著であった。貯蔵穴・ピットなどは確認されなかった。出土した遺物の内、図化し得たのは14点であるが、当初、第74号住居跡との識別ができなかったため、一つの遺構からの出土として捉えてしまう結果となった。そのため、出土遺構の特定ができなかった。

第73号住居跡(第228図)

Ⅰ－33グリッドに位置する。この遺構内に、焼土や炭が比較的多くみられたこと、またこの南側に、貼床の痕跡が観察されたことから、住居跡に伴うカマドと判断した。住居跡本体は調査区外に続くと思われる。第72号住居跡を切り、同様に第74号住居跡も切っていると思われる。検出できた範囲は、長さ137cm、幅38cm、深さ10cmで、カマドの主軸方向はN-7°-Eである。1層は、天井崩落土と思われる。燃焼部ではなく、煙道部であるためか、内面はあまり焼けていない状態であった。上器片がごく少数出土したが、図化には至らなかった。

第74号住居跡(第229・227図)

Ⅰ・Ｊ－33グリッドに位置する。遺構の南側は、調査区外に続く。第72号住居跡・第50号溝跡を切る。住居の規模は、東西3.85mであるが、南北4.25mまでの検出である。深さ18cmを測る。平面形は、

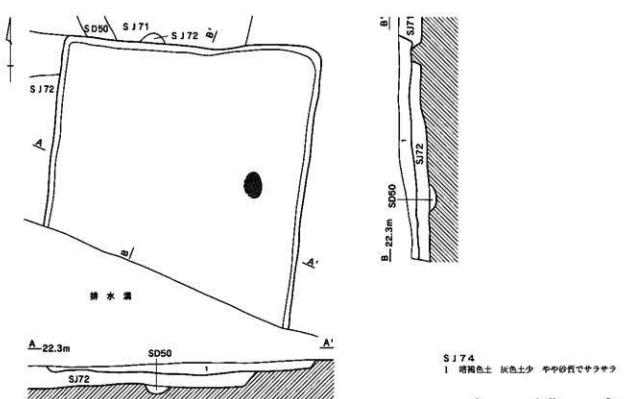


第228図　第73号住居跡

長方形と推定される。僅かに残った壁面は、開きながら立ち上がる。本住居跡の中央から東寄りに、径28×38cmの範囲で、被熱により赤色硬化した箇所が検出された。調査範囲内では、カマド・貯蔵穴・ピット・住居掘方などは検出されていない。床面の、顕著な硬化は認められなかった。出土した遺物の内、図化し得たのは14点であるが、当初、第72号住居跡との識別ができなかったため、一つの遺構からの出土として捉えてしまう結果となった。そのため、出土遺構の特定ができなかった。

第75号住居跡(第230・231図)

H－33、I－33・34グリッドに位置する。第54号溝跡を切り、第76・80・83号住居跡に切られている。ピットが4本検出されたが、本住居跡には伴わないと判断した。住居の規模は、南北3.70m、東西2.90m、深さ15cm、長軸方向はN-2°-Wである。平面形は、SK1の部分でプランがやや歪むものの、

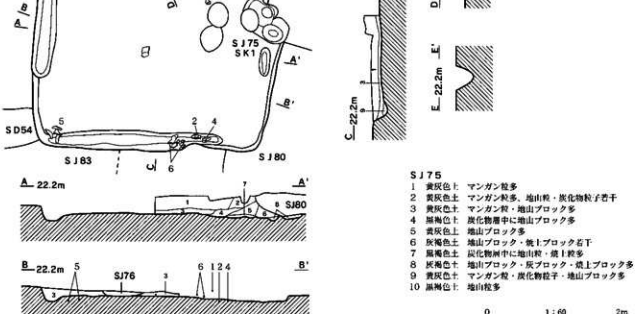


第229図　第74号住居跡

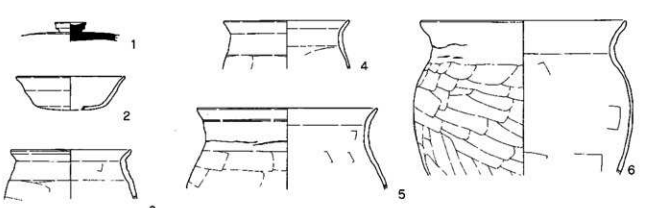
概ね隅丸長方形を呈し、壁面は開きながら立ち上がる。一部途切れるものの、西壁・南壁から東壁にかけて、幅15～35cm、深さ10cm前後の周壁溝が巡っている。また、北壁中央にも、周壁溝と思われる部分がみられる。ＳＫ1の規模は、径36×80cm、深さ12cm程で、これに深さ18cmと24cmのピット2本が、重複している状態であると推定した。床面の硬化は、四隅よりも中央部の方が顕著であった。なお、カマド・貯蔵穴・住居掘方などは検出されなかった。出土した遺物の内、図化し得たのは6点であった。

第76号住居跡(第232・233図)

Ｉ－33グリッドに位置する。第75・78・79・83号住居跡・第54号溝跡を切り、6本のピットに切ら



第230図　第75号住居跡



第231図　第75号住居跡出土遺物

第75号住居跡出土遺物観察表（第231図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	現存率	備考
1	須恵蓋	3.1	1.9		GIJ	普	灰白色	35	
2	坏	(11.0)	3.3		AHIJK	普	明褐色	20	
3	甕	(12.4)	5.0		ACGHIJ	普	橙褐色	20	
4	甕	(12.8)	4.9		ACGHIJ	普	褐色	15	
5	甕	(18.3)	8.3		AGHIJ	普	褐色	20	
6	甕	(21.0)	15.7		ACGHI	普	茶褐色	25	煤付着

れている。第77号住居跡との重複関係は、土層からでは捉えられなかった。住居の規模は、東西3.65m、南北3.31m、深さ18～30cm、主軸方向はN-2°-Eである。平面形は隅丸長方形を呈し、壁面は開きながら立ち上がる。

カマドは2基検出された。カマド1は、南西コーナーに設けられている。燃焼部は、壁面を掘り込んで造られている。壁外でのカマドの遺存度は良好で、天井部・掛け口・煙出しが遺存していた。c層は天井部で、下面は被熱による赤色硬化が著しい。h～j層は燃焼部・煙道部に相当すると思われる。j層は天井部同様に、被熱による赤色硬化が著しい。全体的にカマドは非常に良く焼けており、天井部では上面まで赤色化しているのが認められた。南西コーナー部分では、焚口に相当すると思われる箇所が赤色硬化し、その手前には炭が散在していたが、それ以外にはカマドの痕跡はみられなかった。このことからカマド1は、焚口やソデなどの屋内施設が撤去されたものと推定される。d層は掛け口を、b層は煙出しを、カマド撤去の際に埋め戻した土層であると推定される。燃焼部は、浅く掘り窪められ、緩やかな傾斜で煙道部に続く。カマド2は、北壁中央からやや東寄りに設けられている。燃焼部は、壁面を掘り込んで造られている。5層は、燃焼部から煙道部に相当すると思われる。燃焼部～煙道部は壁外に長く延びる。燃焼部・煙道部の底面・壁面は、被熱による赤色硬化が顕著であった。また、焚口に相当する箇所の手前には、炭が散在していた。燃焼部はごく浅く掘り窪められ、ほとんど傾斜をもたずに、長い煙道部へと続く。床面は部分的に貼られている。本遺構に伴うと判断したピットは4本であるが、その径と深さは、P1が径40×40cm、深さ9cm、P2が径76×76cm、深さ27cm、P3が径53×58cm、深さ25cm、P4が径32×35cm、深さ10cmを測る。住居跡中央には、径28×40cm程の被熱により赤色硬化した箇所が認められた。周壁溝は確認されなかった。出土した遺物の内、図化し得たのは6点である。

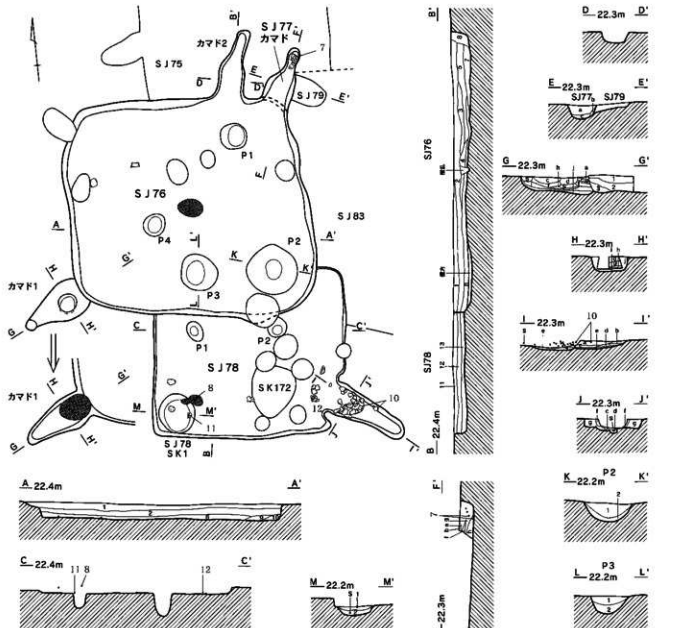
第77号住居跡(第232・233図)

I－33グリッドに位置する。第75・79・83号住居跡・第54号溝跡を切る。第76号住居跡との重複関係は、土層からでは捉えられなかった。

カマド部分のみの遺存である。住居の北壁に設けられていると思われるが、さらに北東コーナー部分に該当するともみられる。燃焼部は、壁外にまで及んで掘り込まれている。現存長1.75cm、幅18～43cm、深さ22cmを測り、主軸方向はN-24°-Eを指す。f・g層は天井崩落土、h層は煙道部に相当すると思われる。燃焼部の底面・壁面は、被熱により赤色硬化がみられた。煙道部先端付近からは、石が3点出土したが、被熱の痕跡は特にみられなかった。出土した遺物の内、図化し得たのは1点のみであった。

第78号住居跡(第232・233図)

I－33・34グリッドに位置する。第83号住居跡を切り、第76号住居跡・第172号土壙、および7本のピットに切られる。住居の規模は、東西2.90m、南北2.50m、深さ17cm、主軸方向N-85°-Eである。平面形は長方形を呈し、壁面は開きながら立ち上がる。カマドは、東壁の南東コーナー際に設けられている。カマドの軸は、東壁のとは直行しておらず、30°程南に振れている。燃焼部は、壁面を掘り込ん



SJ76・78

1 暗灰褐色土　地山粒多、炭化物粒子・焼土粒少
2 暗褐色土　地山ブロック・炭化物粒子・焼土粒少
3 暗褐色土　地山ブロック・炭化物粒子少
4 暗褐色土　地山ブロック多
5 黒褐色土　炭化物粒子・焼土粒多
6 黒褐色土　地山ブロック・炭化物粒子多
7 黒褐色土　焼土ブロック多、炭化物粒子少
8 黒褐色土　地山ブロック・炭化物粒子少
9 暗褐色土　焼土ブロック少
10 暗褐色土　地山粒多、炭化物粒子少
11 暗灰褐色土　地山粒・炭化物粒子多
12 暗褐色土　地山ブロック多、焼土粒少
13 暗黄褐色土　地山ブロック多

SJ76 カマド G–G' H–H'

a 暗褐色土　炭化物粒子少
b 黒褐色土　炭化物粒子少
c 赤褐色土　天井部
d 暗褐色土　焼土粒・炭化物粒子少
　掻付けの壁の反し土か
e 暗褐色土　地山ブロック(0.5～1cm)・
　焼土ブロック(0.5cm)少
f 暗褐色土　地山ブロック少
g 黒褐色土　地山ブロック(0.5cm)少
h 黒色土　炭化物層中に灰混入
i 黒褐色土　焼土ブロック(0.5～1cm)・
　炭化物ブロック(0.5～1cm)・
　灰多
j 赤褐色土　被熱の為、赤色硬化した層

SJ76 ピット2

1 暗褐色土　地山粒・焼土粒少
2 暗褐色土　地山粒多

SJ76 ピット3

1 暗褐色土　地山ブロック多
2 褐色土　地山ブロック多、炭化物粒子少

SJ77 カマド E–E' F–F'

a 黒褐色土　地山ブロック(1～3cm)多、
　炭化物ブロック(0.5～1cm)やや多
b 暗褐色土　地山ブロック(1～2cm)・
　炭化物ブロック(0.5cm)やや多
c 暗褐色土　地山ブロック(2～4cm)・
　炭化物ブロック(0.5cm)やや多
d 黒褐色土　炭化物粒子多、
　焼土ブロック(0.5cm)少
e 暗褐色土　地山ブロック(0.5～1cm)少
f 暗赤褐色土　天井崩落土
g 赤褐色土　天井崩落土
h 黒褐色土　炭化物粒子多、焼土粒少

SJ78 カマド I–I' J–J'

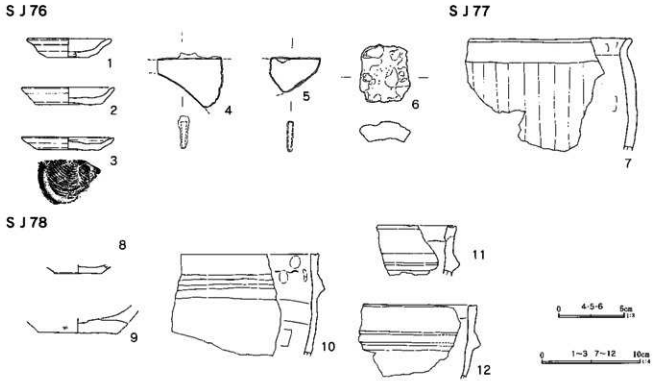
a 暗黄褐色土　地山ブロック 天井崩落土
b 暗赤褐色土　焼土ブロック多
c 赤褐色土　焼土ブロック・炭化物粒子多
d 暗黒褐色土　炭化物粒子・灰粒子多
e 黒色土　炭化物層中に焼土粒多
f 赤褐色土　被熱のため赤色硬化した層
g 暗黄褐色土　埋土

SJ78内 SK1 M–M'

1 暗褐色土　地山ブロック多
2 暗褐色土　地山粒多、焼土粒子少

0　1:60　2m

第232図　第76～78号住居跡



第233図　第76～78号住居跡出土遺物

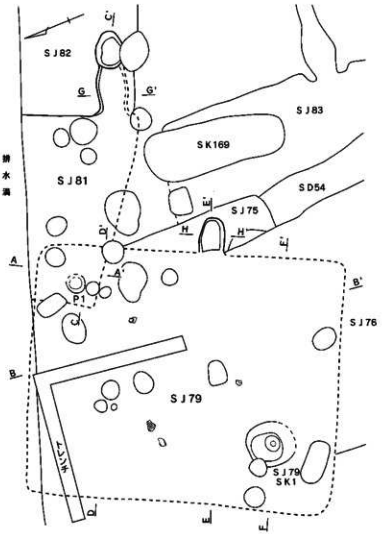
第76・77・78号住居跡出土遺物観察表（第233図）

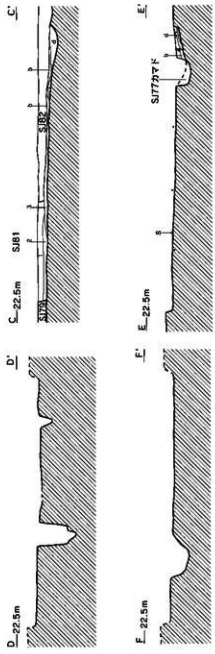
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師皿	8.5	1.9	4.3	AHIJ	普	橙褐色	60	器面は荒れている
2	土師皿	(9.5)	1.8	(6.8)	ACHIJ	普	橙褐色	20	
3	土師皿	(9.5)	1.3	6.3	AEGHIJ	普	明褐色	30	
4	小刀	現存長5.0×幅4.1×厚(0.2)cm　重量18.1g　鉄製							全面錆
5	小刀	現存長3.8×幅2.7×厚(0.4)cm　重量10.3g　鉄製							全面錆　4・5同一個体か
6	鉄滓	法量4.4×3.8×1.6cm　重量31.6g							細かな気泡が各面を覆っている
7	甕		11.4		AG(多)HIJ	普	褐色	10	煤付着
8	土師坏		0.9	4.6	AHIJK	不	明褐色	95	風化著しい
9	壺		1.4	(8.0)	AHIJK	普	暗褐色	40	
10	羽釜		10.3		AGHIJ	普	明褐色	10	
11	羽釜		5.1		AGHIJ	普	黒褐色	5	
12	羽釜		7.5		AGHIJ	普	暗褐色	5	

で造られており、煙道部が壁外へ長く延びる。また、僅かではあるが、粘土ブロックを多く含むソデも、部分的に遺存していた。a層は天井崩落土、d・e層は燃焼部～煙道部に相当すると思われる。燃焼部は浅く掘り窪められ、緩やかな傾斜で煙道部へ続く。燃焼部の底面と壁面は、被熱による赤色硬化が認められた。燃焼部からは、土師器の甕の破片が出土している（第233図10～12）。2本のピットと土壙1基が検出されているが、径と深さは、P1が径23×32cm、深さ22cm、P2が径23×30cm、深さ25cm、土壙が径58×60cm、深さ10cmを測る。住居の掘方はごく部分的にしか認められなかった。床面から土壙壁面にかけて、5×35cmの範囲に焼土が認められた。住居中央から、カマド手前までに床面の硬化が確認された。調査した範囲内では、周壁溝は検出されなかった。出土した遺物の内、図化し得たのは5点である。

第79号住居跡(第234図)

H・I－33・34グリッドに位置する。第54号溝跡を切り、第75・76・81・83号住居跡に切られる。貼床の痕跡などから推定規模は、東西3.75m、南北





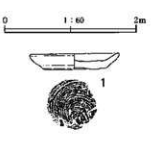
SJ79
1 暗灰褐色土　地山粒・マンガン粒多
2 黒褐色土　地山ブロック・地山粒多、炭化物粒子少
3 灰色土　マンガン粒多、焼土粒・炭化物粒子若干混入

SJ81
1 暗褐色土　地山粒・炭化物粒子少
2 暗褐色土　地山ブロック(1～2cm)・地山粒少
3 暗黄褐色土　地山ブロック(2～3cm)多、炭化物粒子少

SJ79 カマド E-E'
a 暗褐色土　地山ブロック多、焼土ブロック少
b 暗黄褐色土　焼土ブロック少
c 暗赤褐色土　焼土ブロック多
d 暗褐色土　地山ブロック・炭化物粒子少

SJ81 カマド C-C'
a 明赤褐色土　焼土ブロック層　天井崩落土
b 黒色土　炭層中に地山粒多
c 暗赤褐色土　火床面
d 黒褐色土　炭・炭化物粒子若干

第234図　第79・81号住居跡



第235図　第81号住居跡出土遺物

第81号住居跡出土遺物観察表（第234図）

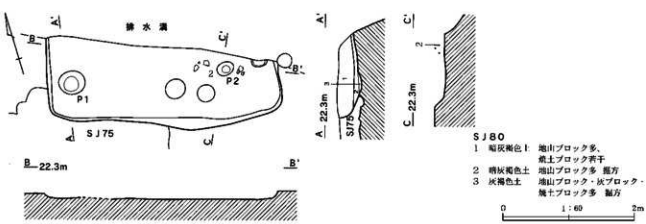
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師皿	(9.2)	1.6	5.0	EHIJK	良	暗褐色	55	

4.66m、深さ12cm、主軸方向N-113°-E、平面形は、長方形を呈すると思われる。

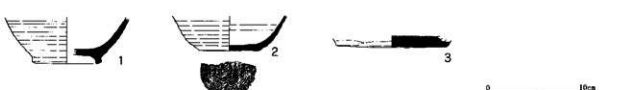
カマドは、東壁中央に位置していると考えられる。カマドは短く、内部の被熱量は少ないと推定される。c・d層は、煙道部に相当すると思われる。床面の、顕著な硬化は認められなかった。貯蔵穴・ピット・周壁溝などは検出されなかった。図化し得る遺物は出土しなかった。

第80号住居跡(第236・237図)

H・I−33・34グリッドに位置する。住居の北側部分は、調査区外に続いている。第75・76・81・83号住居跡・第54号溝跡を切る。住居の規模は、東西3.52m、南北1.15m、深さ15cmである。平面形は、隅丸方形または隅丸長方形を呈すると思われる。壁面は、緩やかに立ち上がる。床面には、顕著な硬化はみられなかった。ピットの径と深さは、P1が径35×40cm、深さ40cm、P2が径19×25cm、深さ9cmを測る。2・3層は住居掘方に相当する。調査した範囲内では、カマド・貯蔵穴・周壁溝などは検出されなかった。出土した遺物の内、図化し得たのは3点である。



第236図　第80号住居跡



第237図　第80号住居跡出土遺物

第80号住居跡出土遺物観察表（第237図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	須恵高台付坏		4.8	(6.9)	AEHIJK	普	暗青灰色	15	
2	須恵坏		3.6	6.0	CGHIJ	普	灰色	30	両面とも殆ど黒色
3	須恵壺か		1.2	(12.0)	EIJK	良	灰色	55	自然釉

第81号住居跡(第234・235図)

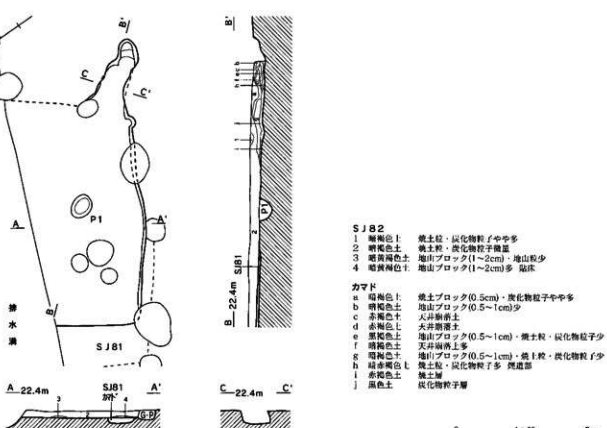
H・I−33・34グリッドに位置する。遺構北側は、調査区外に続く。第79号住居跡・第54号溝跡を切り、第75号住居跡および、多数のピットに切られている。住居の規模は、東西2.80mであるが、南北1.73mまでの確認である。深さは12〜15cm。南壁の推定線から計測した方位は、N-126°-Eであるが、カマドそのものの方位は、N-105°-Eを指す。平面

形は、方形または長方形を呈すると推定される。僅かに残る壁面は、開きながら立ち上がる。カマドは東壁の、南東コーナー際に設けられている。燃焼部は、壁面を掘り込んで造られているが、燃焼部から煙道までは、長く壁外に延びている。a層は天井崩落土、b層は燃焼部に相当すると思われる。燃焼部・煙道部ともに、被熱による赤色硬化が顕著である。燃焼部中央には、縦長の20cm程の石がやや傾いた状態で自立していた。なおこの石は、上面が欠損しており、平らな面を上にした状態であった。支脚として用いられたものと推定される。

ピットが1本検出された。規模は、径30×(30)cm、深さ30cmを測る。床面には、顕著な硬化はみられなかった。調査した範囲内では、貯蔵穴・周壁溝・住居掘方などは、検出されなかった。遺物の出土はごく少数で、図化できたのは1点のみであった。

第82号住居跡(第238・239図)

H・I−34グリッドに位置する。遺構北側は、調査区外に続く。第81号住居跡を切り、4本のピットに切られている。住居の規模は、東西(3.35)mであるが、南北2.03mまでの確認である。深さは10cm。南壁の推定線から計測した方位は、N-126°-Eであるが、カマドそのものの方位は、N-122°-Eを指す。但し、カマド自体は、住居の壁面とは若干方位を異にしており、N-142°-Eを指している。平面形は、方形または長方形を呈すると推定される。僅かに残る壁面は、開きながら立ち上がる。カマドは、東壁の南東コーナーに設けられている。c・d層は天井崩落土、i・j層は燃焼部、h層は煙道部に相当すると思われる。燃焼部は、ごく浅く掘り窪められており、ごく僅かな傾斜で煙道部に続いている。煙道部は、端部で34°の傾斜となり、さらに煙



第238図 第82号住居跡

第239図　第82号住居跡出土遺物

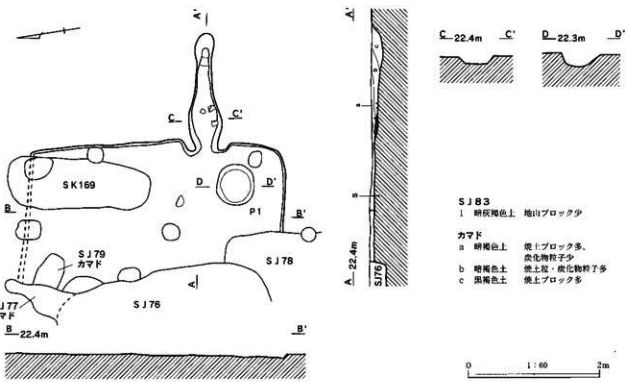
第82号住居跡出土遺物観察表（第239図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	羽釜	(25.9)	11.8		AEGHIJK	普	褐色	10	

出し手前で急激に立ち上がる。ピットが1本確認された。規模は、径30×38cm、深さ55cmを測る。貯蔵穴・周壁溝は検出されなかった。図化し得た遺物は1点である。

第83号住居跡(第240図)

Ⅰ－33・34グリッドに位置する。第79号住居跡を切り、第76～78号住居跡、および7本のピットに切られている。住居の規模は、南北3.93mであるが、南北2.10mまでの確認である。深さ10cm、主軸方向N-98°-Eである。平面形は、隅丸の方形または長方形を呈すると推定される。僅かに残る壁面は、開きながら立ち上がる。カマドは、東壁中央から南寄りに設けられている。白色粘土ブロックを多く含むソデが、僅かではあるが遺存していた。燃焼部は、壁面を掘り込んで造られており、煙道部は壁外に長く延びている。燃焼部は、被熱のため赤色硬化が顕著であった。b・c層は、煙道部に相当すると思わ



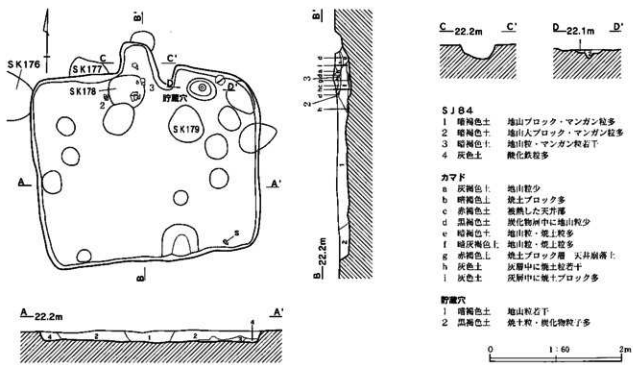
第239図　第82号住居跡

れる。煙道部の底面・壁面とも、被熱による赤色硬化がみられた。燃焼部は、ごく浅く掘り窪められており、緩やかに下りながら煙道部に続く。煙道部は、短部手前で窪んだ後、煙出しに至る。

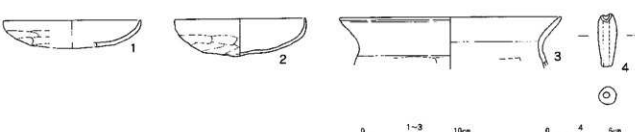
P1は、貯蔵穴と思われる。規模は、径56×62cm、深さ20cmを測る。カマドとP1の周辺での、床面硬化が、他の部分よりやや顕著であった。調査した範囲内では、周壁溝や掘方は確認されなかった。土器片が少数出土したが、図化し得るものはなかった。

第84住居跡(第241・242図)

I－34グリッドに位置する。第176～179号土壙と12本のピットに切られている。住居の規模は、南北2.87m、東西3.50m、深さ10～15cm、主軸方向N-5°-Wである。平面形は、隅丸長方形で、壁面は開きながら立ち上がる。



第241図　第84号住居跡



第242図　第84号住居跡出土遺物

第84号住居跡出土遺物観察表（第242図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(14.0)	2.7		AGHIJ	普	褐色	20	
2	坏	13.3	3.7		AGHIJ	普	褐色	80	
3	甕	(22.5)	5.3		ACGHIJ	普	黒褐色	20	
4	土錘	4.0×1.4×1.3cm			孔径0.4cm AHI	否	暗褐色	95	重量6.7g

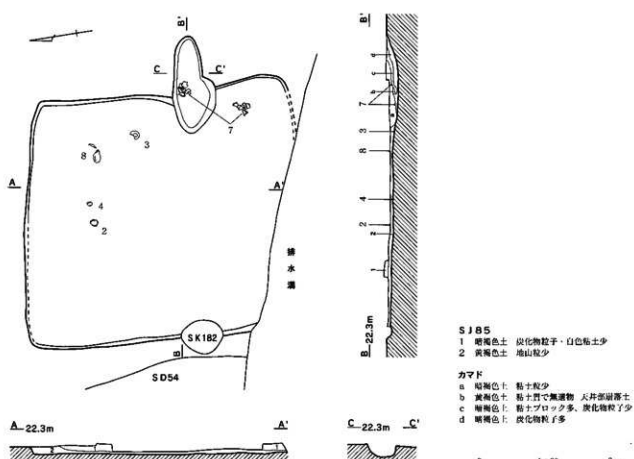
カマドは、北壁中央からやや西寄りに設けられている。カマド右ソデの一部が遺存していた。燃焼部は、壁面を掘り込んで造られている。白色粘土ブロックを多く含む。c層は天井部で、被熱のため赤色化している。g層は天井崩落土、h・i層は燃焼部、d・e層は煙道部に相当すると思われる。燃焼部は、浅く掘り窪められており、緩やかな傾斜で煙道部へと続く。煙道部は、クランク状に立ち上がって煙出しに至る。天井部以外は、赤色化は顕著とはいえない状態であった。右ソデ横に、ピットが検出された。カマドとの位置関係から、貯蔵穴としたが、規模や断面形などから、ロクロピットの可能性も考えられる。貯蔵穴の径と深さは順に、径30×45cm、深さ15cm。

南壁中央からやや東寄りに、奥行き・幅ともに55cm、高さ5cm程の高まりが検出された。非常に硬く踏み固められており、入り口に伴う施設であると推定される。床面の硬化は、入り口部・住居中央部、およびカマド前で顕著であったが、なかでも入り口部の高まりは、最も硬く踏み締められていた。周壁溝は確認されなかった。出土した遺物の内で、図化し得たのは4点である。

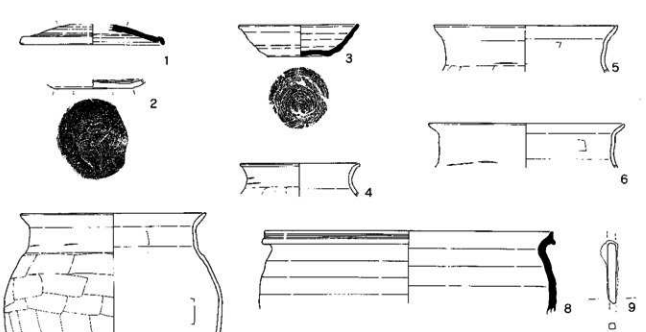
第85号住居跡(第243・244図)

J－34グリッドに位置する。遺構の南側は調査区外に続く。第182号土壙に切られている。住居の規模は、東西3.73m、南北(4.10)m、深さ5～10cm、主軸方向N-89°-Eである。平面形は、隅丸長方形を呈し、僅かに残る壁面は、開きながら立ち上がる。

カマドは、東壁中央から南寄りに設けられている。b層は天井崩落土、d層は煙道部に相当すると思われる。燃焼部は、ごく浅く皿状に掘り窪められており、緩やかな傾斜で煙道部に続く。カマド内部の赤色化は弱い。床面の硬化は、住居中央部とカマド前



第243図 第85号住居跡



第244図　第85号住居跡出土遺物

第85号住居跡出土遺物観察表（第244図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	須恵蓋	(14.8)	2.1		AGHIJK	不	灰褐色	20	
2	土師坏		0.9	7.9	AHIJK	普	橙褐色	90	内面黒色　ヘラ磨き
3	須恵坏	12.1	3.2	6.5	AEG(多)HIJ	普	暗青灰色	70	
4	甕	(12.2)	3.4		AIJ	良	暗褐色	20	
5	甕	(18.7)	4.7		AGHIJK	普	褐色	15	
6	甕	(20.0)	4.5		ACGHIJK	普	明橙褐色	20	
7	甕	(18.8)	19.6		AGHIJ	普	明褐色	30	
8	須恵甕	(29.2)	8.4		AGIJK	普	暗灰色	30	
9	棒状鉄製品	現存長4.8×幅1.3×厚0.4cm							錆化著しい　釘か　両端部とも欠損

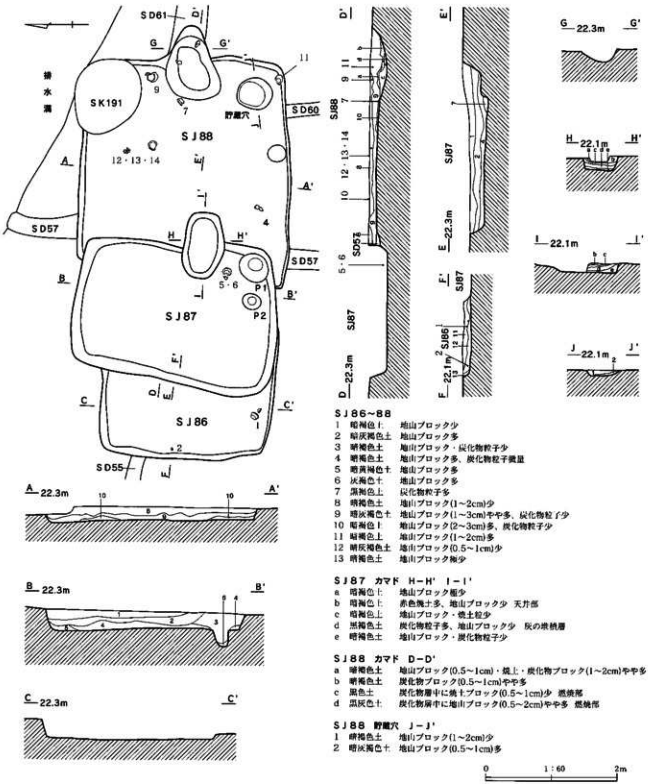
で認められたが、原立ったものではなかった。貯蔵穴・ピット・周壁溝・住居掘方などは確認されなかった。出土した遺物の内、図化し得たのは9点である。

第86号住居跡(第245・246図)

Ⅰ・Ⅰ－35グリッドに位置する。第87号住居跡に切られている。住居の規模は、南北2.62mであるが、東西1.90mまでの検出である。深さ10～28cmである。平面形は、隅丸長方形と推定される壁面は、開きながら立ち上がる。床面の硬化については、顕著な部分は見られなかった。調査した範囲内では、カマド・貯蔵穴・ピット・周壁溝・住居掘方などは認められなかった。出土した遺物は少なく、図化し得たのは2点である。

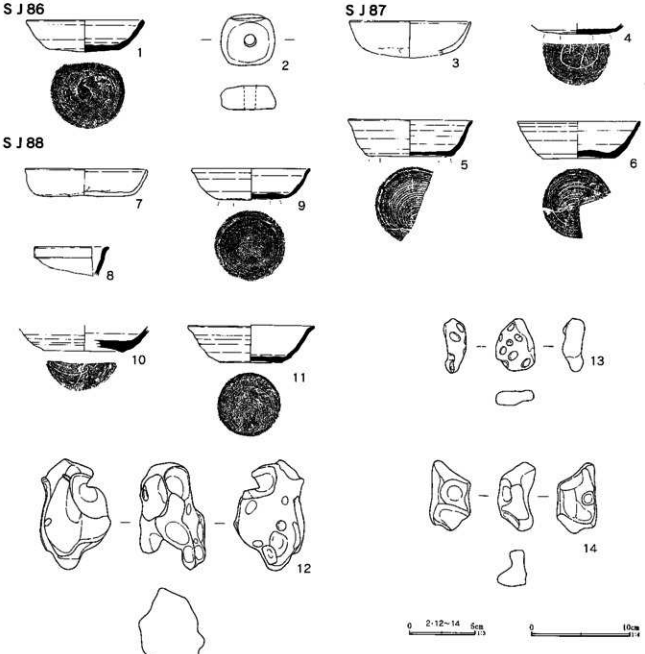
第87号住居跡(第245・246図)

Ⅰ・Ⅰ－35グリッドに位置する。第86・88号住居跡を切り、第57号溝跡に切られている。住居の規模は、東西2.00m、南北3.10m、深さ25～30cm、主軸方向N-7°-Eである。平面形は、隅丸長方形を呈し、壁面は、やや開きながら立ち上がる。カマ



第245図　第86～88号住居跡

ドは、東壁中央から南寄りに設けられている。b層は天井部、d層は燃焼部～煙道部に相当すると思われる。燃焼部は、壁面を掘り込んで造られている。なお、この燃焼部は、床面よりも深く掘り窪められているが、ほぼ平坦に煙道部に続き、煙出し部で急激に立ち上がる。煙道部はきわめて短い。カマド内部の赤色化は弱く被熱量は少ないと思われる。ピット2本の径と深さは、P1が径40×43cm、深さ5cm、



第246図　第86～88号住居跡出土遺物

第86～88号住居跡出土遺物観察表（第246図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	須恵坏	(12.0)	3.3	7.0	AEGHIJ	普	暗灰色	45	
2	紡錘車	最大径(3.8)×4.2×厚1.8cm			孔径0.9cm	泥岩製	灰白色	90	重量42.4g
3	坏	(12.3)	3.4		ACGHIJ	普	暗褐色	25	
4	須恵坏		1.1	(6.6)	GHIJ	普	青灰色	65	
5	須恵坏	(12.7)	3.7	(8.3)	AGIJ	良	青灰色	35	
6	須恵坏	12.3	3.7	7.1	AEGHIJK	普	灰色	60	
7	坏	12.3	2.8	9.7	ACDEHIK	普	褐色	80	
8	須恵坏		3.0		HIJ	不	白灰色	5	
9	須恵坏	12.2	3.1	5.9	AEGIJ	良	青灰色	40	
10	須恵坏		2.6	(8.2)	AEHI	不	灰白色	40	
11	須恵坏	12.9	3.7	6.3	AEGIJ	普	暗灰色	60	
12	貝巣穴痕泥岩	法量5.4×3.3×3.8cm			重量35.9g		明橙褐色		13孔　被熱か
13	貝巣穴痕泥岩	法量2.6×1.9×0.7cm			重量3.5g		明褐色	8孔	被熱の有無不明
14	貝巣穴痕泥岩	法量3.5×2.1×1.8cm			重量8.7g		明橙褐色	4孔	被熱の有無不明

P2が径23×30cm、深さ25cmを測る。P1は、貯蔵穴と思われる。床面硬化は、南西コーナーから北西コーナーにかけての部分と、カマド周辺で顕著であった。周壁溝や掘方は検出されなかった。出土した遺物の内、図化し得たのは4点であった。

第88号住居跡(第245・246図)

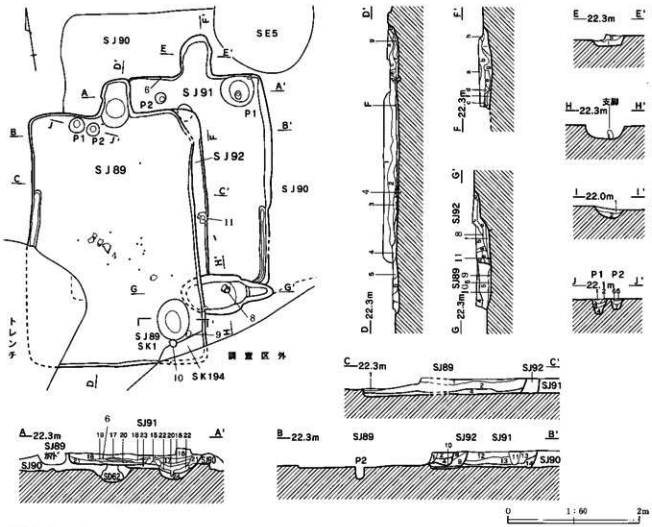
Ⅰ－35、J－35・36グリッドに位置する。第87号住居跡・第191号土壙・第57・60・61号溝跡および1本のピットに切られている。住居の規模は、東西3.50m、南北3.20m、深さ25～30cm、主軸方向N-88°-Eである。平面形は、隅丸長方形を呈し、壁面は、やや開きながら立ち上がる。カマドは、東壁中央に設けられている。c・d層は、燃焼部に相当すると思われる。燃焼部には炭化物が多くみられた。燃焼部は、椀状に掘り窪められ、緩やかな傾斜をもって煙道部へ続く。燃焼部から煙道部までは、短く延びる。カマドの右側に貯蔵穴が検出された。カマドの規模は、径48×53cm、深さ10cmを測る。遺構内に1本ピットがみられるが、床面精査の段階で住居跡を切っていると判断した。床面の硬化については、住居中央からカマド周辺までに、若干の硬化がみられた。調査した範囲内では、ピット・周壁溝・住居掘方は認められなかった。出土した遺物の内、図化し得たのは計8点である。

第89号住居跡(第247・248図)

J－36グリッドに位置する。南西コーナー部分を、試掘溝によって失っている。第90～92号住居跡・第62号溝跡を切り、第194号土壙に切られている。住居の規模は、南北3.80m、東西2.52m、深さ10～15cm、主軸方向N-7°-Eである。南東コーナーは、部分的に歪んでいる。平面形は、やや歪んだ長方形を呈し、壁面は、やや開きながら立ち上がる。カマドは、北壁中央に設けられている。燃焼部は壁面を掘り込んで造られている。f・g層は、燃焼部～煙道部に相当すると思われる。カマド内部はあまり焼けておらず、被熱量は少ないと推定される。燃焼部は、浅く掘り窪められ、緩やかな傾斜をもって煙道部へ続く。燃焼部から煙道部までは、短く延びる。西壁の一部に、幅15cm、深さ5cm程の周壁溝がみられるが、他の部分では検出されていない。土壙1基とピット2本が確認されているが、径と深さは、SK1が径62×48cm、深さ13cm、P1が径23×23cm、深さ22cm、P2が径20×20cm、深さ15cmを測る。4～7層は、住居掘方である。床面の硬化については、住居中央のやや南寄りと、カマド周辺に若干の硬化がみられた。出土した遺物の内、図化し得たのは4点である。

第90号住居跡(第249・250図)

J－36グリッドに位置する。南西コーナー部分を、試掘溝によって失っている。第62号溝跡を切り、第89・91・92号住居跡・第196号土壙・第5号井戸跡に切られている。4本のピットが検出されたが、床面精査の段階で、住居より新しいと判断した。住居の規模は、東西4.40m、南北4.32m、深さ16～27cm、主軸方向N-97°-Eである。平面形は、隅丸方形を呈し、壁面は、やや開きながら立ち上がる。カマドは、東壁中央からやや北寄りに設けられている。燃焼部は壁面を掘り込んで造られている。f・g層は、燃焼部～煙道部に相当すると思われる。カマド内部はあまり焼けておらず、被熱量は少ないと思われる。燃焼部は、椀状に浅く掘り窪められ、緩やかな傾斜をもって煙道部へ続くが、途中段をもって煙出しに至る。5～7層は、住居掘方である。床面の硬化については、住居中央のやや西寄りの部分と、カマド周辺に若干の硬化がみられた。貯蔵穴・周壁溝は認められなかった。出土した遺物の内、図化し得たのは7点で、主にカマド内およびその周辺から出土した。



SJ89・91・92

1 暗褐色土　地山ブロック(0.5~2cm)やや多、炭化物粒子少
2 暗灰褐色土　地山ブロック(2~3cm)多、炭化物粒子やや多
3 暗褐色土　地山ブロック(1~2cm)・焼土粒・炭化物粒子少
4 灰褐色土　地山ブロック(2~3cm)非常に多、粘土ブロック(3~4cm)多　貼床
5 明灰褐色土　地山ブロック多
6 灰褐色土　地山ブロック少、炭化物ブロック若干
7 灰褐色土　地山粒多
8 暗褐色土　地山ブロック(0.5~1cm)・炭化物粒子少
9 黒褐色土　地山ブロック(1~2cm)・焼土粒少
10 灰褐色土　地山ブロック(2~3cm)非常に多　貼床
11 黒褐色土　地山ブロック(0.5~1cm)少　ピット
12 暗褐色土　地山ブロック(1~2cm)微量、炭化物粒子少
13 暗灰褐色土　地山ブロック(2~3cm)多、炭化物粒子微量
14 灰褐色土　地山ブロック(2~3cm)非常に多　貼床
15 灰褐色土　地山粒若干
16 暗褐灰色土　地山ブロック(1~2cm)やや多、炭化物ブロック(0.5~1cm)少
カマド天井部
17 黒灰色土　灰層中に地山ブロック・地山粒・焼土粒多
18 暗褐色土　地山ブロック(1~2cm)少、炭化物粒子多
19 赤褐色土　焼土ブロック層
20 黒灰色土　灰層中に地山ブロック多、焼土粒少
21 暗灰褐色土　地山粒多
22 灰褐色土　地山ブロック多
23 灰色土　酸化鉄粒多　煙穴
24 暗灰色土　地山ブロック多　掘方

SJ89　カマド　D-D'

a 暗灰褐色土　地山粒多
b 褐色土　灰がブロック状に混入
c 灰色土　地山粒多、焼土粒・炭化物粒子微量
d 灰色土　酸化鉄ブロック少
e 黄褐色土　地山粒少、焼土粒若干
f 灰褐色土　地山粒多、焼土粒少
g 黒灰色土　灰層中に地山粒多
h 黒灰色土　灰層中に焼土ブロック若干

SJ89内SK1

1 暗灰褐色土　地山粒多
2 灰褐色土　地山ブロック多

SJ89　ピット1・2

1 黒褐色土　炭化物粒子少
2 黒褐赤褐色土　炭化物粒子微量
3 黒褐褐色土　地山ブロック(1~2cm)少
4 黒褐褐色土　地山ブロック(1~2cm)やや多
5 暗褐色土　炭化物粒子やや多、地山ブロック(1~2cm)少
6 暗褐色土　地山ブロック(0.5~1cm)やや多
7 暗褐灰色土　炭化物粒子少、地山ブロック(1~2cm)やや多

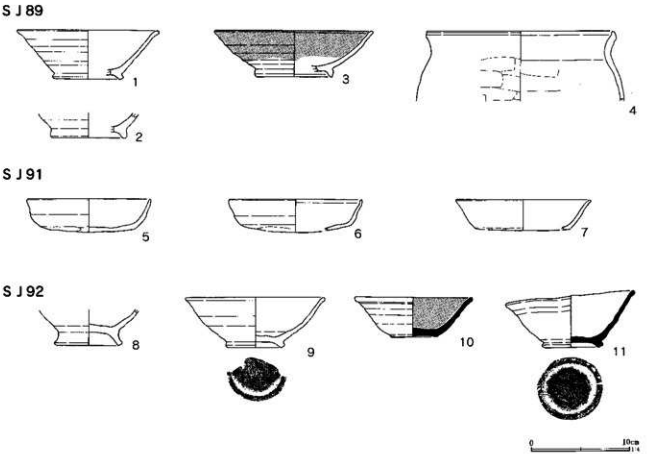
SJ91　カマド　E-E'　F-F'

a 暗褐灰色土　地山ブロック(1~2cm)・炭化物ブロック(0.5~1cm)少
b 暗褐灰色土　地山ブロック(1~2cm)やや多、炭化物ブロック(0.5~1cm)少　天井部
c 暗赤褐色土　被熱による赤化面　天井部下面
d 暗褐色土　地山ブロック(2~3cm)多
e 暗褐色土　地山ブロック(1~2cm)少、炭化物粒子多
f 黒色土　炭化物層　燃焼面
g 黒色土　炭化物粒子多、地山ブロック少　燃焼部
h 赤褐色土　天井部
i 暗褐色土　焼土・炭化物粒子多　煙道部

SJ92　カマド　G-G'

a 明赤褐色土　焼土ブロック(0.5~1cm)、炭化物粒子やや多　掻け口
b 暗褐色土　地山ブロック(0.5~1cm)少
c 明赤褐色土　焼土ブロック(1~2cm)・炭化物粒子やや多
d 暗赤褐色土　焼土粒・炭化物粒子やや多　煙出し
e 暗赤褐色土　焼土ブロック(1~2cm)多、炭化物粒子やや多　燃焼部
f 黒褐色土　炭化物粒子非常に多　燃焼部

第247図　第89・91・92号住居跡



第248図　第88・91・92号住居跡出土遺物

第89・91・92号住居跡出土遺物観察表（第248図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師高台付坏	(14.5)	5.0	(7.2)	AEHIJK	普	橙褐色	25	
2	土師高台付坏		2.5	6.4	ACHIJ	普	橙褐色	30	
3	高台付坏	(16.2)	4.7	7.7	EI	普	暗灰色	40	灰釉陶器
4	甕	(19.1)	7.2		ACEGHK	普	茶褐色	15	
5	坏	(12.7)	3.4		AGHIJK	普	褐色	40	
6	坏	(13.6)	3.2		AGHIK	普	暗褐色	15	
7	坏	(13.8)	3.1		ACEHIJ	普	暗褐色	25	
8	土師高台付坏		3.7	6.9	ACGIJK	普	橙褐色	95	
9	土師高台付坏	(14.3)	5.1	(6.1)	CGHIJK	普	白橙色	25	
10	須恵坏	12.1	4.1	4.7	ACGHI	不	茶褐色	80	内面外と黒色
11	須恵高台付坏	13.2	5.7	6.2	AEGHIK	不	灰色	85	器形の歪み著しい　黒斑あり

第91号住居跡(第247・248図)

J－36グリッドに位置する。第90号住居跡・第62号溝跡を切り、第89・92号住居跡に切られている。北西コーナーと南東コーナーが、かろうじて確認できていることから、3つのコーナーを基に計測した。住居の規模は、南北3.25m、東西2.13m、深さ16cm、主軸方向N-8°-Eである。

平面形は、長方形を呈すると思われる。壁面は、やや開きながら立ち上がる。

カマドは、北壁中央からやや東寄りに設けられている。燃焼部は壁面を掘り込んで造られている。b・h層は天井部、c層は被熱により赤色化した天井部、f・g層は燃焼部、i層は煙道部に相当すると思われる。カマド内部はあまり焼けていない。燃焼部は、ごく浅く掘り窪められ、緩やかな傾斜をもって煙道部へ続く。燃焼部から煙道部までは、短く延びる。

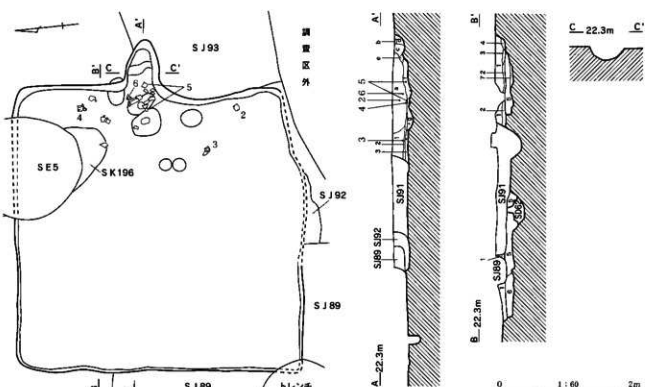
東壁に幅10cm、深さ5cm程の周壁溝が巡っているが、調査範囲内では、他の部分には認められなかった。ピットが2本検出された。P1は、貯蔵穴と思われる。ピットの規模は、P1が径45×50cm、深さ18cm、P2が径15×17cm、深さ15cmである。

23・24層は、住居掘方である。床面の硬化については、P1とカマド周辺に、若干の硬化がみられた。出土した遺物の内、図化し得たのは3点である。

第92号住居跡(第247・248図)

J－36グリッドに位置する。第90・91号住居跡・第62号溝跡を切り、第89号住居跡に切られている。住居の規模は、東西0.20m、南北3.13mまでの確認である。深さ16cm、主軸方向N-96°-Eである。

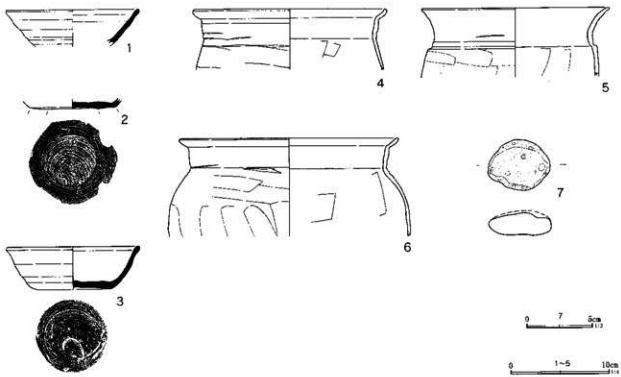
平面形は、長方形を呈すると思われる。壁面は、開きながら立ち上がる。カマドは、南壁中央からやや東寄りに位置していると思われる。燃焼部は、壁面を掘り込んで造られている。a層は掛け口、d層は煙出しを反映した土層と推定される。e・f層は燃焼部～煙道部に相当すると思われる。燃焼部底面には炭が付着し、煙道部壁面は、被熱のため赤色硬化した状態であった。燃焼部は浅く掘り窪められ、40°程の傾斜をもって立ち上り煙道部へ続く。煙道部は緩やかな傾斜であるが、煙出し手前で急激に立ち上がる。燃焼部から煙道部は、壁外に長く延びる。燃焼部底面では、15×10×8cm程の石が倒れた状態で検出された。この石には炭が付着しており、支脚として用いられたものが転倒したと推定される。10



SJ90
1 暗褐色土　地山粒・マンガン粒多、炭化物粒子若干
2 灰白色土　酸化鉄粒・マンガン粒多
3 明灰褐色土　地山ブロック多
4 暗褐色土　炭化物粒子多、焼土粒若干
5 暗褐色土　地山ブロック多　7層まで類方
6 暗褐色土　地山粒・マンガン粒多
7 灰色土　マンガン粒多

カマド
1 灰褐色土　地山ブロック(1～2cm)少
2 灰白色土　酸化鉄粒・マンガン粒多
3 明灰褐色土　地山ブロック(0.5～1cm)多
a 明灰褐色土　地山ブロック(1～2cm)多、焼土粒・炭化物粒子少
b 赤褐色土　焼土ブロック層
c 暗褐色土　地山ブロック多、炭化物粒子若干
d 灰褐色土　地山ブロック(1～2cm)少
e 暗褐色土　地山ブロック(1～2cm)多
f 黒色土　炭層中に地山ブロック(4～5cm)・焼土ブロック多
g 黒色土　炭層中に地山ブロック(2～3cm)多、焼土粒・ブロック少

第249図　第90号住居跡



第250図　第90号住居跡出土遺物

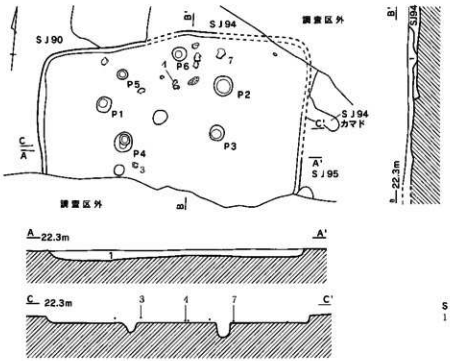
第90号住居跡出土遺物観察表（第250図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	須恵坏	(13.4)	3.7		AIJK	良	青灰色	20	
2	須恵坏		1.0	8.8	EGIJ	普	暗灰色	90	
3	須恵坏	(12.5)	4.3	7.0	AEIJK	普	灰色	35	
4	甕	(19.8)	6.2		ACDHIJ	普	橙褐色	15	
5	甕	(19.1)	7.1		AGHIJK	普	褐色	20	
6	甕	(22.2)	10.0		AGHIJK	普	褐色	25	
7	軽石製品	法量4.8×3.8×1.6cm　重量17.4g					白橙色	80	浮子か

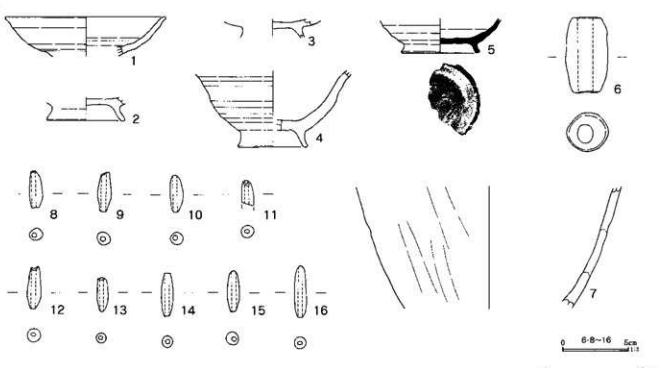
層は、住居掘方である。床面の硬化については、調査範囲が狭いため、確認できなかった。調査した範囲内では、貯蔵穴・ピット・周壁溝などは確認されなかった。出土した遺物の内、図化し得たのは4点である。

第93号住居跡(第251・252図)

J－36グリッドに位置する。第94号住居跡を切る。北西コーナー部分と東壁の一部分のみの検出である。住居の規模は、東西3.95mであるが、南北2.60mまでの検出である。深さ8～15cm。平面形は、やや歪んだ隅丸方形または隅丸長方形と推定される。8本のピットが検出されたが、内2本は住居跡を切っていると判断した。各ピットの径と深さは、P1が径22×25cm、深さ15cm、P2が径29×30cm、深さ10cm、P3が径22×23cm、深さ20cm、P4が径25×31cm、深さ15cm、P5が径15×15cm、深さ18cm、P6が径20×21cm、深さ17cmを測る。顕著な床面の硬化は、認められなかった。調査した範囲内では、カマド・貯蔵穴・周壁溝・住居掘方などは確認されなかった。住居の遺存度は低いが、出土遺物は比較的多く見られた。出土した遺物の内、図化し得たのは16点であるが、その内の10点は土錘であった。



第251図　第93号住居跡



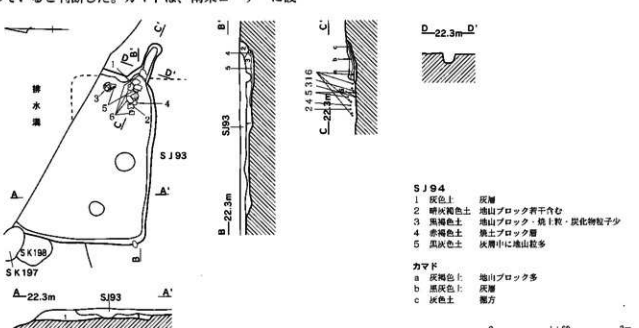
第252図　第93号住居跡出土遺物

第93号住居跡出土遺物観察表（第252図）

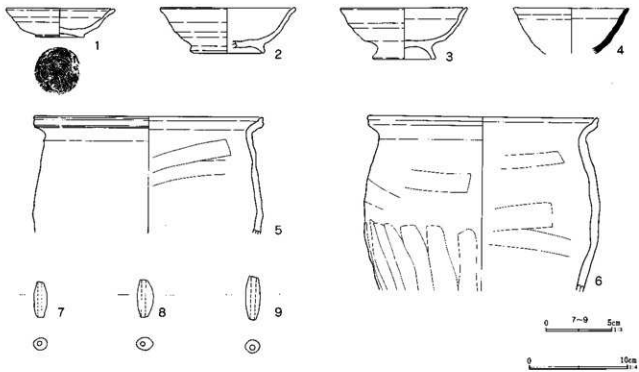
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師坏	(16.4)	4.0		ACGHIJK	普	橙褐色	20	器面は荒れている
2	土師高台付坏		2.4	(8.0)	HIJK	普	橙褐色	35	
3	土師高台付坏		1.9		AGHIJ	普	暗橙褐色	75	
4	土師高台付坏		7.8	(7.1)	AGHIJ	普	褐色	15	
5	須恵高台付坏		3.5	(8.1)	AEIJK	普	灰色	40	
6	土錘	5.7×3.2×3.0cm	孔径1.4		AHIJ	普	明橙褐色	100	重量56.4g
7	甕か		12.4		AGHIJ	普	暗褐色	40	
8	土錘	2.8×1.0×0.9cm	孔径0.3cm		AHIJ	普	黒褐色	100	重量2.8g
9	土錘	3.0×1.1×1.0cm	孔径0.4cm		AHIJ	普	橙褐色	95	重量3.2g
10	土錘	2.8×1.0×0.9cm	孔径0.4cm		AHIJ	普	明橙褐色	95	重量2.4g
11	土錘	1.9×1.0×1.0cm	孔径0.3cm		AHIJ	普	黒褐色	50	重量2.1g
12	土錘	3.2×1.0×1.0cm	孔径0.4cm		AHIJ	普	暗褐色	95	重量4.2g
13	土錘	2.5×0.8×0.8cm	孔径0.3cm		AIJ	普	明褐色	75	重量1.6g
14	土錘	3.3×0.9×0.9cm	孔径0.3cm		AHIJ	普	黒褐色	95	重量2.7g
15	土錘	3.1×1.0×1.0cm	孔径0.4cm		AHIJ	普	明褐色	95	重量2.9g
16	土錘	3.9×0.9×0.9cm	孔径0.4cm		AHIJ	普	暗褐色	95	重量3.0g

第94号住居跡(第253・254図)

J－36グリッドに位置する。第93号住居跡・第197・198号土壙に切られる。第93号住居跡の床下から、カマドの大部分と南東コーナーが検出された。住居の規模は、東西2.65mであるが、南北2.03mまでの検出である。深さ7～17cm。南壁から計測した主軸方向はN-114°-Eであるが、軸方向はN-94°-Eである。平面形は、やや歪んだ方形、または長方形と推定される。壁面は、開きながら緩やかに立ち上がる。2本のピットが検出されたが、住居跡を切っていると判断した。カマドは、南東コーナーに設けられていた。燃焼部は、壁面を掘り込んで造られている。5層は燃焼部、b層は煙道部、c層はカマド掘方に相当すると思われる。燃焼部は浅く掘り窪められ、緩やかな傾斜で煙道部へ続く。カマド燃焼部内から、甕などの土器片がある程度まとまった状態で出土している。カマド手前から、西壁にかけて床面の硬化が認められた。調査した範囲内では、貯蔵穴・ピット・周壁溝・住居掘方などは確認されなかった。出土した遺物の内、図化し得たのは9点であるが、その内の3点は土錘であった。



第253図　第94号住居跡



第254図　第94号住居跡出土遺物

第94号住居跡出土遺物観察表（第254図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	11.0	2.9	4.9	AEGHIK	普	橙褐色	50	内面煤付着
2	土師高台付坏	(13.8)	4.6	(7.1)	ACEGHK	不	褐色	20	
3	高台付坏	12.9	5.2	6.3	AEGHK	不	明橙色	65	
4	須恵坏	(11.8)	4.6		AGHI	不	褐色	20	
5	甕	(23.3)	11.9		ACEHIK	普	明褐色	20	
6	甕	(23.3)	17.7		AGHIK	普	茶褐色	25	内面煤付着
7	土錘	2.7×1.0cm	孔径0.3cm		AHIJ	普	暗褐色	100	重量2.1g
8	土錘	2.9×1.2cm	孔径0.3cm		AHIJ	普	黒褐色	100	重量2.9g
9	土錘	3.3×1.1cm	孔径0.3cm		AHIJ	普	明褐色	100	重量4.1g

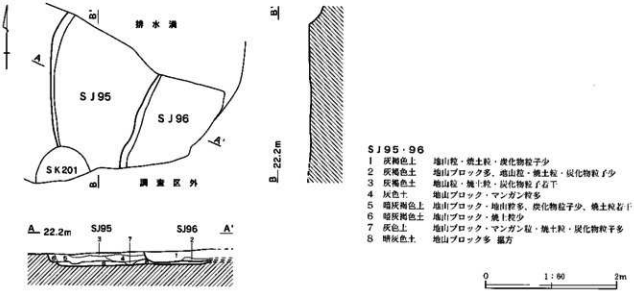
第95号住居跡(第255・256図)

J－35・36グリッドに位置する。A区東端部に位置している。調査区入り口から、調査区に降りるために設けられたスロープの脇に当たっており、きわめて狭い中での検出であった。

西壁の一部のみ遺存していた。遺構の北側と南側、および東側は調査区外に続く。第96号住居跡・第201号土壙に切られている。なお、第96号住居跡の深度が浅いため、本住居跡は第96号住居跡の下層で掘方が遺存していた。検出し得た住居の規模は、東西2.50m、南北2.45mであった。深さ20cm。壁面は直線ではなく、緩やかに弧を描いている。壁面は開きながら立ち上がる。8層は、住居掘方である。床面の硬化は、壁面際よりも中央寄りの方が顕著であった。調査した範囲内では、カマド・貯蔵穴・ピット・周壁溝などは認められなかった。出土した遺物の内、図化し得たのは1点のみである。

第96号住居跡(第255・256図)

J－37グリッドに位置する。A区東端部に位置している。調査区入り口から、調査区に降りるために設けられたスロープの脇に当たっており、きわめて狭い中での検出であった。西壁の一部のみ遺存していた。遺構の北側と南側、および東側は調査区外に

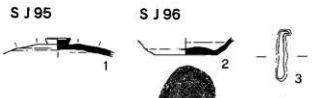


第255図　第95・96号住居跡

第95・96号住居跡出土遺物観察表（第255図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	須恵蓋	2.6	2.0		AEGIJ	普	灰色	35	
2	須恵坏		1.7	6.4	AIJK	普	橙褐色	80	
3	不明鉄製品	現存長3.9×幅1.1×厚0.9cm							全面に錆　先端部はカギ状を呈す

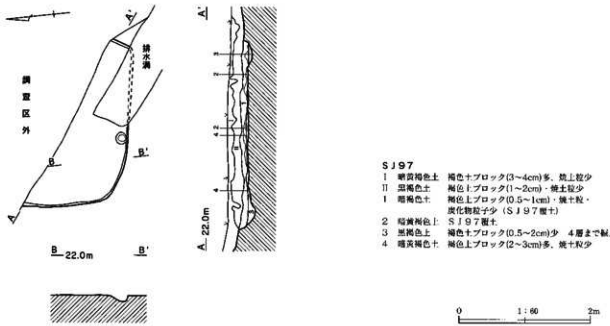
続く。第95号住居跡を切る。検出し得た住居の規模は、東西1.10m、南北1.45mであった。深さ20cm。壁面はやや歪むが直線状で、緩やかに開きながら立ち上がる。8層は、第95号住居跡の掘方である。床面の硬化は、壁面際よりも中央寄りの方が顕著であった。調査した範囲内では、カマド・貯蔵穴・ピット・周壁溝などは認められなかった。出土した遺物の内、図化し得たのは2点である。



第256図　第95・96号住居跡出土遺物

第97号住居跡(第257図)

K－38グリッドに位置する。古代の住居跡の中では、今回検出された最東端に位置するものである。遺構北側は、調査区外に続く。南東コーナー部分を排水溝によって失っている。一面の調査区で検出された住居跡の内で、最東端に位置している。検出し得た住居の規模は、東西2.56m、南北1.30mであった。深さ10cm。壁面は弧を描くと思われ、平面形は隅丸方形、または隅丸長方形を呈すると推定される。壁面は、緩やかに開きながら立ち上がる。ピットが1本検出された。ピットの規模は、径15×20cm、深さ23cmを測る。3・4層は掘方である。調査範囲が小さいため、床面硬化の有無は確認できなかった。検出範囲内では、カマド・貯蔵穴・ピット・周壁溝などは認められなかった。遺物は出土しなかった。



第257図 第97号住居跡

(b) 土壙

一面で検出された土壙は、A区99基、B区20基、C区2基の計121基である。

第103号土壙(第258図)

F・G−28グリッドに位置する。北側は排水溝、南側は試掘溝に切られる。短軸は1.20mであるが、長軸は2.70mまで確認できたのみである。深さ15cm、長軸方向はN-8°-Eである。ここでは土壙として扱ったが、溝跡の可能性もある。平面形は長方形と推定される。断面形は、底面の平坦な逆台形を呈する。土師器坏・須恵器坏の破片が少数出土したが、図化し得るものはなかった。

第104号土壙(第258図)

G−28グリッドに位置する。第47号溝跡を切っている。規模は、長軸0.85m、短軸0.85m、深さ10cmである。平面形は円形、断面形は、底面の平坦な皿状を呈する。遺物は出土していない。

第105号土壙(第258図)

G−29グリッドに位置する。第29号住居跡を切っている。規模は、長軸0.70m、短軸0.60m、深さ20cmである。平面形は楕円形、断面形は、底面の平坦な逆台形を呈する。土師器甕・坏の破片が少数出土したが、図化し得るものはなかった。

第106号土壙(第258図)

H−29グリッドに位置する。第36号住居跡に切られていると思われる。規模は、長軸1.32m、短軸(0.95)m、深さ15cm、長軸方向はN-10°-Wである。平面形は楕円形、断面形は、底面に凹凸のある筒状を呈する。遺物は出土しなかった。

第107号土壙(第258・267図1)

G−28・29グリッドに位置する。第26・27住居跡を切る。また第28号住居跡も切っていると思われる。規模は、長軸1.50m、短軸0.90m、深さ15cm、長軸方向はN-9°-Eである。平面形は長楕円形、断面形は、底面の平坦な逆台形を呈する。土師器甕、

須恵器坏・甕の破片がごく少数出土したが、図化し得たのは1点であった。

第108号土壙(第258図)

G－29グリッドに位置する。北側は調査区外に続く。規模は、長軸(0.90)m、短軸0.65m、深さ12cmである。平面形は長楕円形と推定される。断面形は、底面の平坦な逆台形を呈する。遺物は出土しなかった。

第109号土壙(第258図)

H－29グリッドに位置する。土壙の大部分は、調査区外に位置している。確認できた規模は、長軸1.35m、短軸(0.25)m、深さ5cmである。平面形は楕円形もしくは長楕円形と推定される。断面形は、底面の平坦な皿状を呈する。遺物は出土しなかった。

第110号土壙(第258図)

H－30グリッドに位置する。規模は、長軸0.60m、短軸0.55m、深さ10cmを測る。平面形は楕円形、断面形は皿状を呈する。強いて長軸方向を計測するならば、N-10°-Wである。土師器甕、須恵器甕の破片がごく少数出土したが、図化し得るものはなかった。

第111号土壙(第258図)

H－30グリッドに位置する。第41号住居跡と重複しているが、新旧関係は確認できなかった。規模は、長軸0.65m、短軸0.35m、深さ10cmまで計測できたのみであった。長軸方向はN-10°-Eである。平面形は長楕円形もしくは溝状、断面形は凹凸の多い不整形である。遺物は出土しなかった。

第112号土壙(第258図)

H－30グリッドに位置する。規模は、長軸1.15m、短軸1.10m、深さ23cm、平面形は楕円形、断面形は底面が平坦な逆台形に近いが、北側に段がみられる。土師器坏・甕、須恵器甕の破片がごく少数出土したが、図化し得るものはなかった。

第113号土壙(第258図)

G・H－30グリッドに位置する。第39・40号住居跡を切っている。規模は、長軸1.50m、短軸1.40m、深さ15cmを測る。平面形はやや歪んだ楕円形、断面形は皿状を呈する。遺物は出土しなかった。

第114号土壙(第258図)

H－30グリッドに位置する。第3号井戸跡、第115号土壙を切る。規模は、長軸0.95m、短軸0.65m、深さ17cmを測る。平面形はやや歪んだ楕円形、断面形は皿状を呈する。土師器甕、須恵器坏の破片がごく少数出土したが、図化し得るものはなかった。

第115号土壙(第258図)

H－30グリッドに位置する。第114号土壙と第3号井戸跡に切られている。規模は、長軸(2.45)m、短軸1.25m、深さ30cm、長軸方向はN-3°-Eである。平面形は隅丸長方形、断面形は底面の平坦な逆台形を呈すると思われる。土師器坏・甕がごく少数出土したが図化し得るものはなかった。

第116号土壙(第259図)

H－30グリッドに位置する。第41号住居跡を切っていると思われる。規模は、長軸(0.65)m、短軸0.60m、深さ30cm、現況からみた主軸方向はN-5°-Eである。平面形は長楕円を呈すると思われる。遺物は出土しなかった。

第117号土壙(第259図)

H－30グリッドに位置する。第41号住居跡を切っている。規模は、長軸1.20m、短軸0.68m、深さ10cm、長軸方向はN-88°-Wである。平面形は長楕円、断面形は皿状を呈する。遺物は出土しなかった。

第118号土壙(第259図)

H－30グリッドに位置する。第45号住居跡を切っていると思われる。規模は、長軸0.75m、短軸0.75m、深さ20cmである。平面形は円形、断面形は立ち上がりの急な逆台形を呈する。土師器坏、須恵器坏の破片がごく少数出土したが、図化し得るものはなかった。

第119号土壙(第259図)

H－30グリッドに位置する。第47号住居跡を切っていると思われる。規模は、長軸0.83m、短軸0.65m、深さ15cm、長軸方向はN-35°-Eである。平面形は楕円形、断面形は浅い椀状を呈する。土師器甕、須恵器坏の破片が少数出土したが、図化し得るものはなかった。

第120号土壙(第259図)

H－30・31グリッドに位置する。第44号住居跡に切られていると思われる。規模は、長軸0.65m、短軸0.55m、深さ45cmを測る。平面形はやや歪んだ台形、断面形は立ち上がりの急な長方形を呈したと思われる。土師器坏・甕、須恵器坏の破片が少数出土したが、図化し得るものはなかった。

第121号土壙(第259図)

H－30グリッドに位置する。第47号住居跡、第122・123号土壙を切っている。規模は、長軸0.85m、短軸0.65m、深さ20cm、長軸方向はN-74°-Wである。平面形は長楕円形、断面形は椀状を呈する。土師器坏・甕、須恵器甕の破片がごく少数出土したが、図化し得るものはなかった。

第122号土壙(第259図)

H－30グリッドに位置する。第121号土壙に切られている。規模は、長軸0.70m、短軸(0.50)m、深さ13cmであり、長軸方向はN-53°-Wと推定される。平面形は長楕円形、断面形は椀状に近い。遺物は出土しなかった。

第123号土壙(第259図)

H－30グリッドに位置する。第47号住居跡を切り、第121号土壙に切られている。規模は、長軸(0.65)m、短軸(0.47)m、深さ35cm、長軸方向はN-88°-Wである。平面形は長楕円形と思われる。断面形はU字形に近い。遺物は出土しなかった。

第124号土壙(第259図)

H－30グリッドに位置する。第41号住居跡を切り、ピットに切られている。規模は、長軸1.25m、短軸0.75m、深さ20cm、長軸方向はN-54°-Eである。平面形は隅丸の長方形に近い。断面形はやや歪んだ逆台形を呈する。土師器坏・甕の破片がごく少数出土したが、図化し得るものはなかった。

第125号土壙(第259図)

H－30グリッドに位置する。第41号住居跡を切り、第124号土壙とピットに切られている。現況における長軸は1.10mであるが、短軸は(0.80)mまで検出できたのみであった。深さ20cm。長軸方向はN-28°-Eと推定される。平面形は楕円形、断面形は底面の平坦な皿状を呈すると思われる。土師器坏・甕の破片が少数出土したが、図化には至らなかった。

第126号土壙(第259・267図)

H－29・30、I－30グリッドに位置する。第41号住居跡を切る。南側部分は、調査区外に続く。検出し得た範囲内での規模は、長軸2.50m、短軸1.00m、深さ15cmである。平面形は不整形、断面形は底面の平坦な皿状を呈している。図化し得た遺物は6点であった。

第127号土壙(第259図)

H・I－30グリッドに位置する。規模は、長軸1.05m、短軸0.97m、深さ22cmである。平面形は

ほぼ円形、断面形は椀形を呈する。遺物は出土しなかった。

第128号土壙(第259図)

H－30グリッドに位置する。長軸0.62m、短軸0.62m、深さ8cm、平面形は歪な長方形、断面形は底面の平坦な皿状を呈する。土壙内の西側コーナーにピットが存在する。掘立柱建物跡の柱穴の可能性を想定して、周辺遺構との関係も検討したが、掘立柱建物跡としての柱穴の並びを見出すことはできなかった。遺物は出土しなかった。

第129号土壙(第259図)

H・I－30グリッドに位置する。第48号住居跡に切られている。長軸(1.05)m、短軸0.75m、深さ5cm。長軸方向はN-82°-Wである。平面形は隅丸長方形、断面形は皿状を呈する。土師器坏・甕の破片が少数出土したが、図化し得るものはなかった。

第130号土壙(第259図)

I－30グリッドに位置する。ピットと排水溝に切られている。遺存していた範囲内での規模は、長軸0.85m、短軸0.55m、深さ10cmである。平面形は楕円形、断面形は底面の平坦な皿状を呈すと推定される。土師器甕の破片がごく少数出土したが、図化し得るものはなかった。

第131号土壙(第260図)

H－31グリッドに位置する。第132号土壙を切る。規模は、長軸0.70m、短軸0.65m、深さ27cm、強いて計測するならば主軸方向はN-81°-Wである。平面形は楕円形、断面形は椀形を呈する。遺物は出土しなかった。

第132号土壙(第260図)

G・H－31グリッドに位置する。第131号土壙とピットに切られている。規模は、長軸3.25m、短軸0.80m、深さ25cm、主軸方向はN-0°である。平面形は隅丸長方形、断面形は底面に起伏のある逆台形を呈する。土師器甕・須恵器甕の破片がごく少数出土したが、図化し得るものはなかった。

第133号土壙(第260・267図)

H－31グリッドに位置する。第52・53号住居跡・第134号土壙を切る。規模は、長軸1.10m、短軸0.90m、深さ30cm、主軸方向はN-82°-Wである。平面形は楕円形、断面形は椀形を呈する。土師器坏・甕、須恵器坏の破片がごく少数出土した。図化し得た遺物は1点であった。

第134号土壙(第260図)

H－31グリッドに位置する。第52・53号住居跡を切り、第133号土壙に切られる。規模は、長軸(0.76)m、短軸0.70m、深さは30cm、長軸方向はN-14°-Eである。平面形は不整形、断面形は椀形を呈すると思われる。甕の破片がごく少数出土したが、図化し得るものはなかった。

第135号土壙(第260・267図)

H－31グリッドに位置する。第52・53号住居跡を切る。規模は、長軸1.35m、短軸1.15m、深さ30cm、主軸方向はN-64°-Eである。平面形は楕円形、断面形は椀形を呈する。図化し得た遺物は7点であった。

第136号土壙(第260図)

H－31グリッドに位置する。第137号土壙を切る。規模は、長軸1.35m、短軸1.13m、深さ28cm、強いて計測するならば主軸方向はN-30°-Wである。平面形は楕円形、断面形は椀形を呈する。遺物は出土しなかった。

第137号土壙(第260図)

H－31グリッドに位置する。第46号住居跡を切り、第136号土壙に切られている。規模は、長軸(0.77)m、短軸0.70m、深さ15cmである。平面形は楕円形、断面形は椀形を呈すると思われる。遺物は出土しなかった。

第138号土壙(第260図)

H－31グリッドに位置する。規模は、長軸0.85m、短軸0.70m、深さ10cmである。平面形は楕円形、断面形は逆台形に近い。遺物は出土しなかった。

第139号土壙(第260・267図)

H－31グリッドに位置する。第48号住居跡に切られている。規模は、長軸1.60mであるが、短軸は1.05mまでしか遺存していなかった。深さ35cm、長軸方向はN-59°-Wである。平面形は楕円形、断面形は逆台形に近い。図化し得た遺物は2点であった。

第140号土壙(第260図)

H－31グリッドに位置する。第56号住居跡に接しているが、新旧関係は捉えられなかった。規模は、長軸2.10m、短軸0.80m、深さ20cm、長軸方向はN-5°-Eである。平面形は隅丸長方形、断面形は底面が平坦な逆台形に近い。土師器坏・甕、須恵器坏・甕の破片が少数出土しているが、図化し得るものはなかった。

第141号土壙(第260図)

H－31グリッドに位置する。第142号土壙を切っていると思われる。規模は、長軸1.25m、短軸0.80m、深さ15cm、長軸方向はN-18°-Wである。平面形は隅丸長方形、断面形は皿状を呈する。土師器坏・甕、須恵器坏の破片が少数出土しているが、図化し得るものはなかった。

第142号土壙(第260図)

H－31グリッドに位置する。第141号土壙に切られている。規模は、長軸1.25m、短軸0.65m、深さ10cmである。平面形は楕円形、断面形は皿状を呈する。土師器甕の破片がごく少数出土しているが、図化し得るものはなかった。

第143号土壙(第261図)

G－31・32グリッドに位置する。規模は、長軸0.90m、短軸0.75m、深さ10cm、強いて計測するならば、長軸方向はN-59°-Eである。平面形は楕円形、断面形は皿状を呈する。遺物は出土していない。

第144号土壙(第261図)

I－31グリッドに位置する。2本のピットに切られている。規模は、長軸(1.03)m、短軸(0.60)m、深さ7cm。強いて計測するならば、長軸方向はN-83°-Eである。平面形は楕円形、断面形は皿状を呈すると思われる。遺物は出土していない。

第145号土壙(第261・267図)

H－32グリッドに位置する。第146号土壙を切り、さらに第60・61号住居跡も切っていると思われる。規模は、長軸1.75m、短軸0.75m、深さ23cm、長軸方向はN-8°-Eである。平面形は隅丸長方形、断面形は底面が平坦な逆台形を呈する。土師器坏・甕、須恵器坏・甕の破片が少数出土している。図化し得た遺物は1点であった。

第146号土壙(第261図)

H－32グリッドに位置する。第145号土壙に切られ、第60・61号住居跡を切っていると思われる。また、北側部分を排水溝によって失われている。規模は、長軸(1.00)m、短軸0.60m、深さ15cm、長軸

方向はN-7°-Eと推定される。平面形は隅丸長方形と思われる。断面形は底面が平坦な逆台形を呈する。土師器坏・甕、須恵器坏の破片がごく少数出土しているが、図化し得るものはなかった。

第147号土壙(第261図)

H－32グリッドに位置する。第61号住居跡を切っていると思われる。また、北側部分を排水溝によって失われている。規模は、長軸(0.95)m、短軸0.65m、深さ10cm、長軸方向はN-3°-Eと推定される。平面形は隅丸長方形と思われる。断面形は底面が平坦な逆台形を呈する。遺物は出土していない。

第148号土壙(第261図)

H－32グリッドに位置する。第149号土壙と隣接している。規模は、長軸0.60m、短軸0.50m、深さ10cmを測る。強いて計測するならば、長軸方向はN-39°-Wである。平面形は楕円形、断面形は皿状を呈する。遺物は出土していない。

第149号土壙(第261図)

H－32グリッドに位置する。第148号土壙と隣接している。第49号溝跡と重複するが、新旧関係は捉えられなかった。規模は、長軸0.85m、短軸(0.70)m、深さ10cmを測る。強いて計測するならば、長軸方向はN-14°-Eである。平面形はやや歪んだ楕円形と推定され、断面形は皿状を呈する。遺物は出土していない。

第150号土壙(第261図)

H－32グリッドに位置する。第67号住居跡に切られていると思われる。規模は、長軸(0.45)m、短軸0.43m、深さ35cmを測る。平面形はやや歪んだ楕円形と推定され、断面形は逆台形を呈する。土師器甕の破片がごく少数出土しているが、図化し得るものはなかった。

第151号土壙(第261図)

H－32グリッドに位置する。第66号住居跡を切っている。規模は、長軸2.15m、短軸0.40m、深さ15cm、長軸方向はN-34°-Eである。平面形は隅丸長方形で、溝状に長く延びる。断面形は椀状を呈する。土師器坏・甕の破片がごく少数出土しているが、図化し得るものはなかった。

第152号土壙(第261図)

H－32グリッドに位置する。第69号住居跡と重複するが、新旧関係は捉えられなかった。規模は、長軸0.90m、短軸0.80m、深さ25cm、強いて計測するならば長軸方向はN-8°-Eである。平面形は歪んだ楕円形、断面形は椀状に近い。土師器甕の破片がごく少数出土しているが、図化し得るものはなかった。

第153号土壙(第261図)

H－32グリッドに位置する。規模は、長軸0.75m、短軸0.55m、深さ5cm、長軸方向はN-89°-Eである。平面形は楕円形、断面形は皿状を呈する。土師器坏・甕の破片がごく少数出土しているが、図化し得るものはなかった。

第154号土壙(第261図)

I－32グリッドに位置する。規模は、長軸0.75m、短軸0.50m、深さ20cm、長軸方向はN-3°-Eである。平面形は長楕円形、断面形は椀状を呈する。遺物は出土しなかった。

第155号土壙(第261図)

I－32グリッドに位置する。南側を排水溝に切られている。規模は、長軸(0.60)m、短軸(0.50)m、深さ20cm、長軸方向はN-72°-Wである。平面形は長楕円形と推定される。断面形は逆台形を呈する。遺物は出土しなかった。

第156号土壙(第261図)

H－33グリッドに位置する。第69号住居跡に切られている。規模は、長軸0.65m、短軸0.55m、深さ10cm、強いて計測するならば、長軸方向はN-60°-Wである。平面形は楕円形、断面形は皿状を呈する。遺物は出土しなかった。

第157号土壙(第261図)

H－33グリッドに位置する。第70号住居跡を切っていると思われる。規模は、長軸0.55m、短軸0.45m、深さ29cm、強いて計測するならば、長軸方向はN-4°-Wである。平面形は隅丸長方形、断面形は逆台形を呈する。遺物は出土しなかった。

第158号土壙(第261・267図)

H－33グリッドに位置する。東側は調査区外に続く。全体的に、遺存状況は極めて悪い。規模は、南北1.65mが推定できるのみで、東西については不明である。深さ29cm、強いて計測するならば、長軸方向はN-0°またはN-90°-Wである。平面形は隅丸方形、または隅丸長方形、断面形は凹凸のある皿状を呈すると推定される。図化し得た遺物は2点である。

第159号土壙(第262図)

H－33グリッドに位置する。第70号住居跡を切る。ここでは土壙として扱ったが、形状からみて建てかえの行われた2本の柱穴の可能性が高い。周辺のピットや土壙との位置関係を検討してみたが、掘立柱建物として柱穴の並びを特定することはできなかった。全体の規模は、長軸0.55m、短軸0.40mであるがこの中に、径15～20cmのピットが2本ある。深さは45cmと50cmである。平面形は隅丸方形と推定される。断面形は柱痕跡の部分が窪むU字形に近い。遺物は出土しなかった。

第160号土壙(第262・268図)

H・I－33グリッドに位置する。第70号住居跡に切られている。規模は、長軸3.25m、短軸0.60m、深さ10cm、長軸方向はN-85°-Eである。平面形は歪んだ隅丸長方形、断面形は底面の平坦な逆台形を呈する。図化できた遺物は2点である。

第161号土壙(第262図)

I－33グリッドに位置する。規模は、長軸0.75m、短軸0.60m、深さ10cmである。強いて計測するならば、長軸方向はN-25°-Eである。平面形は楕円形、断面形は皿状を呈する。遺物は出土しなかった。

第162号土壙(第262図)

I－33グリッドに位置する。規模は、長軸0.68m、短軸0.55m、深さ10cmである。強いて計測するならば、長軸方向はN-61°-Wである。平面形は楕円形、断面形は皿状を呈する。遺物は出土しなかった。

第163号土壙(第262図)

I－33グリッドに位置する。規模は、長軸0.90m、短軸0.80m、深さ25cmである。強いて計測するならば、長軸方向はN-25°-Eである。平面形はやや歪んだ楕円形、断面形は逆台形に近い。土師器甕、須恵器坏の破片がごく少数出土したが、図化し得るものはなかった。

第164号土壙(第262図)

I－33グリッドに位置する。規模は、長軸0.70m、短軸0.65m、深さ27cmである。強いて計測するならば、長軸方向はN-12°-Wである。平面形は楕円形、断面形は皿状を呈する。遺物は出土しなかった。

第165号土壙(第262図)

Ⅰ－33グリッドに位置する。第71号住居跡を切る。規模は、長軸0.93m、短軸0.70m、深さ30cmである。強いて計測するならば、長軸方向はN-12°-Wである。平面形は楕円形、断面形は皿状を呈する。土師器甕、須恵器坏の破片がごく少数出土したが、図化し得るものはなかった。

第166号土壙(第262図)

Ⅰ－33グリッドに位置する。第71号住居跡を切る。規模は、長軸1.03m、短軸0.75m、深さ10cmである。強いて計測するならば、長軸方向はN-86°-Eである。平面形は楕円形、断面形は皿状を呈する。遺物は出土しなかった。

第167号土壙(第262図)

Ⅰ－33グリッドに位置する。形状や土層断面から、柱穴の可能性が考えられる。しかし、周辺のピットや土壙との位置関係を検討してみたが、掘立柱建物として柱穴の並びを特定することはできなかった。

規模は、長軸1.05m、短軸0.50m、深さ20cmである。強いて計測するならば、長軸方向はN-12°-Wである。平面形は楕円形、断面形は皿状を呈する。須恵器坏の破片がごく少数出土したが、図化し得るものはなかった。

第168号土壙(第262図)

Ⅰ－33グリッドに位置する。土壙内には、径15cmと20cmの2本のピットがみられる。平面形・断面形から、建てかえの行われた2本の柱穴の可能性が考えられる。全体の規模は、長軸0.75m、短軸0.45m、深さは2つとも17cmである。強いて計測するならば、長軸方向はN-84°-Eである。平面形は楕円形、断面形は皿状を呈する。遺物は出土しなかった。

第169号土壙(第262図)

Ⅰ－34グリッドに位置する。第83号住居跡を切り、ピットに切られている。規模は、長軸2.10m、短軸0.75m、深さ30cm、長軸方向はN-10°-Eである。平面形は隅丸長方形、断面形はU字状を呈する。土師器甕・甑、須恵器甕の破片がごく少数出土したが、図化し得るものはなかった。

第170号土壙(第262図)

Ⅰ－34グリッドに位置する。規模は、長軸2.45m、短軸0.90m、深さ80cm、長軸方向はN-5°-Eである。平面形は隅丸長方形、断面形は底面がほぼ平坦なコ字状を呈する。土師器甕、須恵器甕の破片がごく少数出土したが、図化には至らなかった。

第171号土壙(第262図)

Ⅰ－34グリッドに位置する。土壙内にピット状の窪みを有する。平面形や断面から、柱穴の可能性が考えられる。しかし、周辺のピットや土壙との位置関係を検討してみたが、掘立柱建物として柱穴の並びを特定することはできなかった。規模は、長軸0.60m、短軸0.55m、深さ80cm、長軸方向はN-5°-Eである。平面形は隅丸長方形、断面形は底面がほぼ平坦なコ字状を呈する。遺物は出土しなかった。

第172号土壙(第262図)

Ⅱ－33グリッドに位置する。第78号住居跡を切っていると思われる。規模は、長軸0.80m、短軸0.65m、深さ5cm、強いて計測するならば、長軸方向はN-9°-Eである。平面形は楕円形、断面形は底面が平坦な皿状を呈する。遺物は出土しなかった。

第173号土壙(第262図)

Ⅰ－34グリッドに位置する。第174号土壙と隣接している。西側をピットに切られている。規模は、長軸0.90m、短軸0.65m、深さ15cm、強いて計測するならば、長軸方向はN-86°-Eである。平面形は長楕円形、断面形は皿状を呈する。土師器甕の破片がごく少数出土したが、図化には至らなかった。

第174号土壙(第263図)

Ⅰ－34グリッドに位置する。第173号土壙と隣接している。規模は、長軸0.60m、短軸0.55m、深さ15cmである。平面形は円形、断面形は椀状を呈する。遺物は出土しなかった。

第175号土壙(第263図)

Ⅰ－34グリッドに位置する。規模は、長軸0.65m、短軸0.55m、深さ40cm、強いて計測するならば、長軸方向はN-15°-Wである。平面形は楕円形、断面形はU字形に近い。遺物は出土しなかった。

第176号土壙(第263図)

Ⅰ－34グリッドに位置する。ピットに切られている。規模は、長軸1.20m、短軸0.75m、深さ14cm、強いて計測するならば、長軸方向はN-66°-Wである。平面形はやや歪んだ楕円形、断面形は底面の平坦な「コ」字形に近い。遺物は出土しなかった。

第177号土壙(第263図)

Ⅰ－34グリッドに位置する。第178号土壙に隣接する。第84号住居跡を切っていると思われる。規模は、長軸0.60m、短軸0.45m、深さ35cmである。東側にテラス部分をもつ。テラス部分以外の長軸方向はN-16°-Eである。平面形は楕円形、断面形はU字状を呈する。遺物は出土しなかった。

第178号土壙(第263図)

Ⅰ－34グリッドに位置する。第177号土壙に隣接する。土壙内に径20cm程のピット状の窪みを有する。平面形や断面から、柱穴の可能性が考えられる。しかし、周辺のピットや土壙との位置関係を検討してみたが、掘立柱建物として柱穴の並びを特定することはできなかった。規模は、長軸0.55m、短軸0.45m、深さ30cm、強いて計測するならば、長軸方向はN-74°-Eである。平面形は隅丸長方形、断面形は中央部の窪むU字形に近い。遺物は出土しなかった。

第179号土壙(第263図)

Ⅰ－34グリッドに位置する。第84号住居跡を切っている。規模は、長軸0.60m、短軸0.50m、深さ10cmである。平面形は楕円形、断面形は皿状を呈する。遺物は出土しなかった。

第180号土壙(第263図)

Ⅰ－34グリッドに位置する。ピットに切られている。規模は、長軸0.85m、短軸0.85m、深さ35cmである。平面形は不整円形、断面形は逆台形を呈する。土師器甕の破片がごく少数出土したが、図化し得るものはなかった。

第181号土壙(第263・268図23)

Ｊ－34グリッドに位置する。規模は、長軸1.45m、短軸0.35m、深さ10cmである。長軸方向はN-74°-Eである。平面形は楕円形、断面形は皿状を呈する。ごく少数の土器片が出土したが、図化し得たのは1点のみであった。

第182号土壙(第263図)

Ｊ－34グリッドに位置する。第85号住居跡を切っている。規模は、長軸0.65m、短軸0.50m、深さ15cmである。強いて計測するならば、長軸方向はN-7°-Eである。平面形は楕円形、断面形は椀状を呈する。遺物は出土しなかった。

第183号土壙(第263図)

Ⅰ－35グリッドに位置する。規模は、長軸1.35m、短軸1.22m、深さ18cmである。強いて計測するならば、長軸方向はN-22°-Eである。平面形は隅丸長方形、断面形は逆台形を呈する。土師器甕の小破片がごく少数出土したが、図化し得るものはなかった。

第184号土壙(第263図)

Ⅰ－35グリッドに位置する。北側は排水溝により失われている。第185号土壙に隣接している。ピットに切られていると思われる。規模は、長軸0.80m、短軸0.30m、深さ10cmである。平面形は楕円形あるいは長楕円形、断面形は逆台形を呈すると推定される。土師器甕の破片がごく少数出土したが、図化し得るものはなかった。

第185号土壙(第263図)

Ｊ－34グリッドに位置する。第184号土壙に隣接している。ピットに切られていると思われる。規模は、長軸0.60m、短軸0.55m、深さ10cm、強いて計測するならば、長軸方向はN-66°-Eである。平面形は楕円形、断面形は皿状を呈する。遺物は出土しなかった。

第186号土壙(第263図)

Ｊ－35グリッドに位置する。規模は、長軸1.60m、短軸0.20m、深さ15cm、長軸方向はN-88°-Wである。平面形は溝状、断面形はU字形を呈する。土師器甕の破片がごく少数出土したが、図化し得るものはなかった。

第187号土壙(第264図)

Ⅰ－35グリッドに位置する。規模は、長軸0.60m、短軸0.55m、深さ15cmである。平面形は楕円形、断面形は椀状を呈する。遺物は出土しなかった。

第188号土壙(第264図)

Ⅰ－34・35グリッドに位置する。規模は、長軸0.70m、短軸0.57m、深さ13cm、長軸方向はN-89°-Wである。平面形は隅丸長方形、断面形は逆台形を呈する。遺物は出土しなかった。

第189号土壙(第264図)

Ⅰ－35グリッドに位置する。第55号溝を切っている。規模は、長軸0.70m、短軸0.55m、深さ25cm、長軸方向はN-39°-Eである。平面形は円形、断面形は中央部が突出する逆台形を呈する。土壙として扱ったが、1層は柱痕の可能性がある。その場合、掘立柱建物跡の柱穴と考えられるが、周辺の土壙やピットとの位置関係から、建物跡を特定することはできなかった。遺物は出土しなかった。

第190号土壙(第264図)

Ⅰ－35グリッドに位置する。規模は、長軸0.60m、短軸0.55m、深さ15cmを測る。平面形は楕円形、断面形は皿状を呈する。遺物は出土しなかった。

第191号土壙(第264・268図)

Ⅰ－35グリッドに位置する。規模は、長軸1.25m、短軸(0.98)m、深さ28cm。長軸方向はN-62°-Wと推定される。平面形は楕円形、断面形は底面が比較的平坦な逆台形を呈する。出土した遺物の内、図化し得たのは4点である。

第192号土壙(第264図)

Ｊ－35グリッドに位置する。規模は、長軸0.65m、短軸0.60m、深さ7cmである。平面形は円形、断面形は皿状を呈する。遺物は出土しなかった。

第193号土壙(第264・268図28・29)

Ｊ－35グリッドに位置する。第57号溝に切られている。規模は、長軸1.25m、短軸0.75m、深さ10cm、長軸方向はN-71°-Wである。平面形は楕円形、断面形は皿状を呈する。出土した遺物の内、図化し得たのは2点である。ともに、底面から数センチメートル浮いた状態で出土した。

第194号土壙(第264・268図)

Ｊ－36グリッドに位置する。遺構南側は、調査区外に続く。規模は、長軸0.85m、短軸(0.45)m、深さ20cm、現状での長軸方向はN-75°-Eである。平

面形は楕円形と推定される。断面形は椀状を呈する。出土した遺物の内、図化し得たのは4点である。

第195号土壙(第264図)

J－36グリッドに位置する。第5号井戸に切られている。規模は、長軸(0.98)m、短軸(0.65)m、深さ20cm。平面形は隅丸方形と推定される。推定の平面形を基に、計測した長軸方向はN-3°-Wである。断面形は、底面の平坦なU字状に近い。遺物は出土しなかった。

第196号土壙(第264図)

J－36グリッドに位置する。第5号井戸に切られる。調査し得た範囲内での規模は、長軸0.80m、短軸0.70m、深さ20cm。平面形は楕円形、断面形は椀状を呈すると推定される。遺物は出土しなかった。

第197号土壙(第264図)

J－36グリッドに位置する。第198号土壙を切っている。遺構北側は、排水溝によって失われている。調査し得た規模は、長軸0.60m、短軸(0.35)m、深さ15cmである。平面形は楕円形、断面形は椀状を呈すると推定される。遺物は出土しなかった。

第198号土壙(第264図)

J－36グリッドに位置する。第197号土壙に切られている。調査し得た規模は、長軸(0.45)m、短軸(0.40)m、深さ5cmである。平面形は円形、断面形は皿状を呈すると推定される。遺物は出土しなかった。

第199号土壙(第264図)

J－36グリッドに位置する。南側は調査区外に続く。現状での規模は、長軸(0.70)m、短軸0.65m、深さ55cmである。平面形は長楕円または隅丸長方形、断面形は中央部の突出するU字形に近い。土壙として扱ったが、平面形と断面形から、柱痕跡の可能性も考えられる。その場合、掘立柱建物跡の柱穴と推定されるが、周辺の土壙やピットとの位置関係から、建物跡を特定することはできなかった。遺物は出土しなかった。

第200号土壙(第264図)

J－36グリッドに位置する。南側は、調査区外に続く。規模は、長軸0.70m、短軸(0.65)m、深さ25cm。強いて計測すれば、長軸方向はN-77°-Wである。平面形は楕円形、断面形は底面に凹凸を持つ逆台形を呈する。遺物は、土師器坏・甕、須恵器甕の破片がごく少数出土したが、図化には至らなかった。

第201号土壙(第264・268図34)

J－36グリッドに位置する。南側は調査区外に続く。規模は、長軸0.85m、短軸(0.80)m、深さ55cm。現状での長軸方向は、N-79°-Eである。平面形は円形、断面形は歪みをもつ逆台形を呈する。遺物は、土師器坏・甕、須恵器坏などの破片がごく少数出土したが、図化し得たのは土錘1点であった。

第202号土壙(第265・268図35)

K・L－37・38グリッドに位置する。規模は、長軸0.95m、短軸0.50m、深さ25cm、長軸方向はN-21°-Eである。平面形は楕円形、断面形は不整形を呈する。出土した遺物の内、図化し得たのは1点であった。

第203号土壙(第265・268図)

L－37・38グリッドに位置する。南側は調査区外に続く。規模は、長軸0.75m、短軸(0.62)m、深さ8cm。平面形は円形または楕円形と推定され、断面形は傾斜のなだらかな皿状を呈する。出土した遺物の内、図化し得たのは2点であった。

第204号土壙(第265・268図)

K－38グリッドに位置する。遺構の東西が、調査

区外に続く。第64号溝を切っている。検出し得た規模は、長軸1.45m、短軸0.90m、深さ15cmである。平面形は方形または長方形、断面形は逆台形を呈すると推定される。土壙として扱ったが、調査できた範囲内から、住居跡の可能性も考えられる。出土した遺物の内、図化し得たのは2点であった。

第205号土壙(第265図)

K－38グリッドに位置する。第206号土壙を切っている。規模は、長軸(0.65)m、短軸(0.60)m、深さ10cm、強いて計測するならば、長軸方向はN-45°-Wである。平面形は円形、断面形は逆台形を呈する。遺物は出土しなかった。

第206号土壙(第265図)

K・L－38グリッドに位置する。第205号土壙に切られている。規模は、長軸(0.70)m、短軸0.60m、深さ10cm、強いて計測するならば、長軸方向はN-45°-Wである。平面形は楕円形、断面形は逆台形を呈する。遺物は出土しなかった。

第207号土壙(第265図)

L－38グリッドに位置する。第64号溝、およびピットに切られている。南側は調査区外に続く。規模は、長軸(1.00)m、短軸0.55m、深さ18cm、長軸方向はN-3°-Eである。平面形は隅丸長方形、断面形は椀状を呈する。遺構の北側部分に、人骨の一部が遺存していた。骨には、頭骨や脊骨の一部と思われる部分があり、「北枕」の土葬墓と推定される。今回の調査で検出された、唯一の土葬墓である。土器などの遺物は出土しなかった。

第208号土壙(第265図)

L－38グリッドに位置する。規模は、長軸1.15m、短軸0.75m、深さ7cm、長軸方向はN-50°-Eである。平面形は長楕円形、断面形は不整形な皿状を呈する。遺物は出土しなかった。

第209号土壙(第265図)

L－39グリッドに位置する。規模は、長軸0.75m、短軸0.70m、深さ5cmである。平面形は隅丸方形または不整円形、断面形は皿状を呈する。遺物は出土しなかった。

第210号土壙(第265・268図)

N－41グリッドに位置する。半分は調査区外。規模は、長軸2.50m、短軸1.05m、深さ50cm、長軸方向はN-45°-Wである。平面形は不整形、断面形は皿状を呈する。二面より移動した。出土した遺物の内、図化し得たのは2点であった。

第211号土壙(第265図)

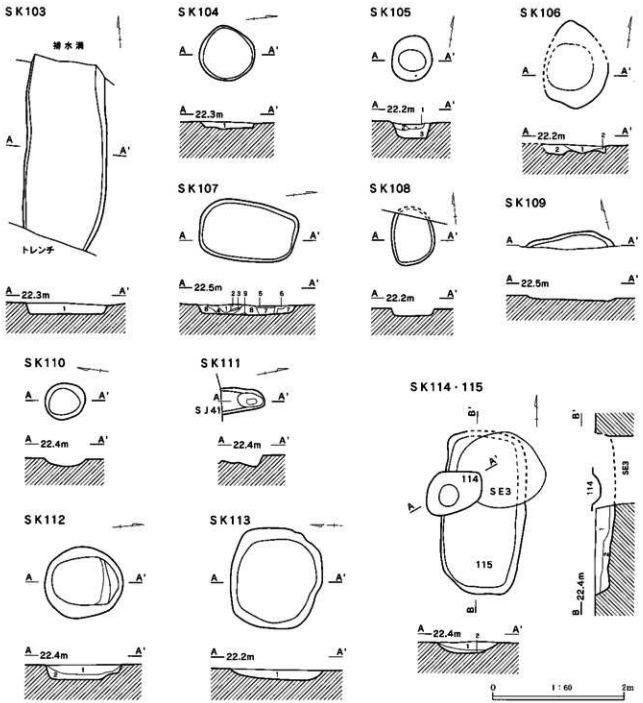
P－43グリッドに位置する。規模は、長軸1.38m、短軸0.90m、深さ25cm、長軸方向はN-5°-Wである。平面形では1つの遺構として扱ったが、上層断面から、2本のピットの重複の可能性も考えられる。その場合、北(左)側が新しいと推定される。現状では、平面形は長楕円形、断面形は段をもつ逆台形といえよう。遺物は出土しなかった。

第212号土壙(第265図)

P－43グリッドに位置する。規模は、長軸1.30m、短軸0.80m、深さ5cm、長軸方向はN-32°-Eである。内側に径30×40cmの、ピット状の窪みをもつ。平面形は長楕円形、断面形は皿状を呈する。遺物は出土しなかった。

第213号土壙(第265図)

Q－43グリッドに位置する。第82号溝を切っている。規模は、長軸(1.10)m、短軸0.80m、深さ13cm、長軸方向はN-87°-Wである。平面形は隅丸長方形、断面形は浅い逆台形を呈する。遺物は出土しなかった。



SK103
1 暗褐色土　粘土ブロック(1～2cm)やや多、焼土粒微量

SK104
1 暗褐色土　地山粒多、炭化物粒子若干

SK105
1 暗褐色土　酸化鉄粒多、地山ブロック少
2 黒褐色土　地山粒多
3 黒褐色土　地山ブロック・焼土ブロック多

SK106
1 褐褐色土　粘土ブロック(1～2cm)少　砂質
2 暗褐色土　粘土ブロック(1～3cm)多　砂質

SK107
1 黒褐色土　砂粒ブロック(0.5cm)・炭化物粒子少
2 暗褐色土　砂粒ブロック(1～2cm)・炭化物粒子微量
3 黒褐色土　炭化物粒子やや多
4 暗褐色土　砂粒ブロック(0.5～1cm)少、炭化物粒子微量
5 黒褐色土　炭化物層

6 暗黄褐色土　砂粒ブロック(0.5～2cm)やや多
7 暗褐色土　砂粒ブロック(1～2cm)多、炭化物粒子少
8 暗黄褐色土　砂粒ブロック(1～2cm)多、炭化物粒子微量
9 赤褐色土　焼土粒・焼土ブロック(0.5～1cm)やや多

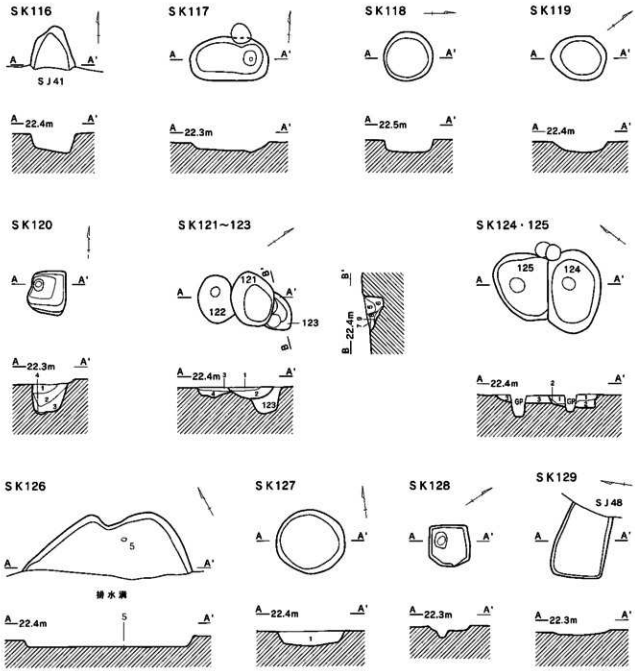
SK112
1 灰褐色土　黄褐色シルト粒子(2～3mm)・シルトブロック(1～2cm)多、炭化物粒子少
2 灰褐色土　黄褐色シルトブロック(1cm)少

SK113
1 黒褐色土　地山ブロック・地山粒多、焼土粒微量

SK114
1 黒褐色土　黄褐色粒子(2～3mm)・炭化物粒子少
2 黄褐色土　炭化物粒子少

SK115
1 黒褐色土　地山粒多
2 黒褐色土　地山ブロック多

第258図　土壙(12)



SK120
1 暗褐色土　地山粒・焼土粒多
2 暗褐色土　灰色粘土粒多
3 暗褐色土　地山ブロック多、炭化物粒子若干
4 黒褐色土　灰色土ブロック同中にマンガン粒多

SK121～123
1 黒褐色土　灰褐色シルトブロック(2cm)多
2 黒褐色土　灰褐色シルト粒子(1～3mm)多
3 黒褐色土　灰褐色シルト粒子(1～2mm)少
4 灰褐色土　灰褐色シルトブロック(1～2cm)多
5 暗褐色土　粘土粒多

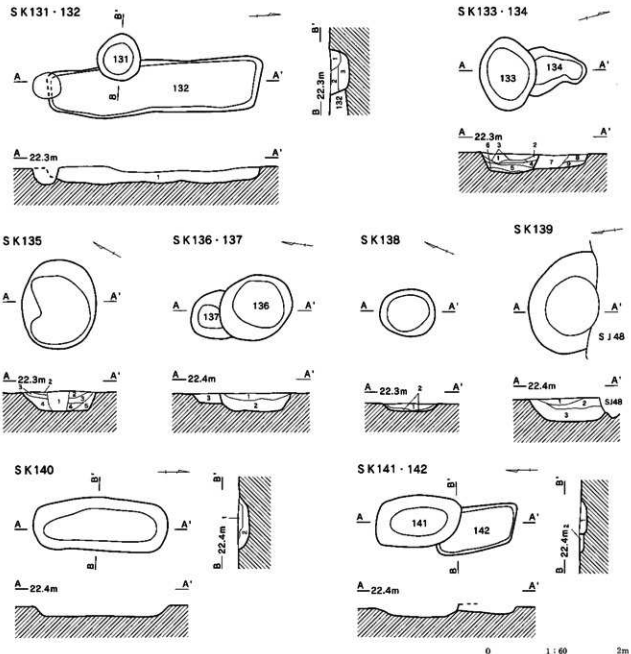
6 暗褐色土　炭化物粒子・焼土粒少
7 暗褐色土　炭化物粒子極少
8 暗褐色土　炭化物粒子やや多
9 黄褐色土　白色粘土粒少

SK124・125
1 黒褐色土　黄色土ブロック多
2 黒褐色土　黄色土ブロック少
3 黒褐色土　黄色土粒やや多

SK127
1 黄褐色土　黄色土ブロック多

0　1:60　2m

第259図　土壙(13)



SK131
1 暗褐色土　粘土ブロック(0.5～2cm)・炭化物粒 ƒ少
2 暗褐色土　粘土ブロック(0.5～1cm)少
3 暗黄褐色土　粘土ブロック(0.5～1cm)・炭化物粒 ƒ微量

SK132
1 黒褐色土　地山ブロック・地山粒多、灰色土ブロック少、焼土粒微量

SK133・134
1 暗灰褐色土　粘土ブロック(0.5～1cm)・焼土ブロック(0.5cm)少、炭化物粒 ƒ やや多
2 黒灰褐色土　粘土ブロック(0.5cm)・炭化物粒子少
3 明灰褐色土　粘土ブロック(0.5cm)・炭化物粒子やや多
4 暗灰褐色土　炭化物ブロック(0.5～1cm)多
5 暗灰褐色土　粘土ブロック(0.5～1cm)やや多
6 明黄褐色土　粘土ブロック(0.5～2cm)多
7 暗褐色土　地山粒少
8 暗褐色土　地山ブロック多
9 暗褐色土　地山ブロック多、焼土粒微量

SK135
1 暗褐色土　粘土ブロック(0.5～2cm)・炭化物ブロック(0.5～1cm)少
2 暗褐色土　粘土ブロック(0.5～1cm)やや多
3 暗黄褐色土　粘土ブロック(0.5～1cm)多
4 暗褐色土　粘土ブロック(0.5～1cm)・炭化物粒子少
5 明褐色土　炭化物粒子少

SK136・137
1 灰褐色土　黄褐色シルトブロック(1cm)多、炭化物粒 ƒ少
2 灰褐色土　黄褐色シルトブロック(0.5cm)多、炭化物粒子少
3 灰褐色土　黄褐色シルト粒子多

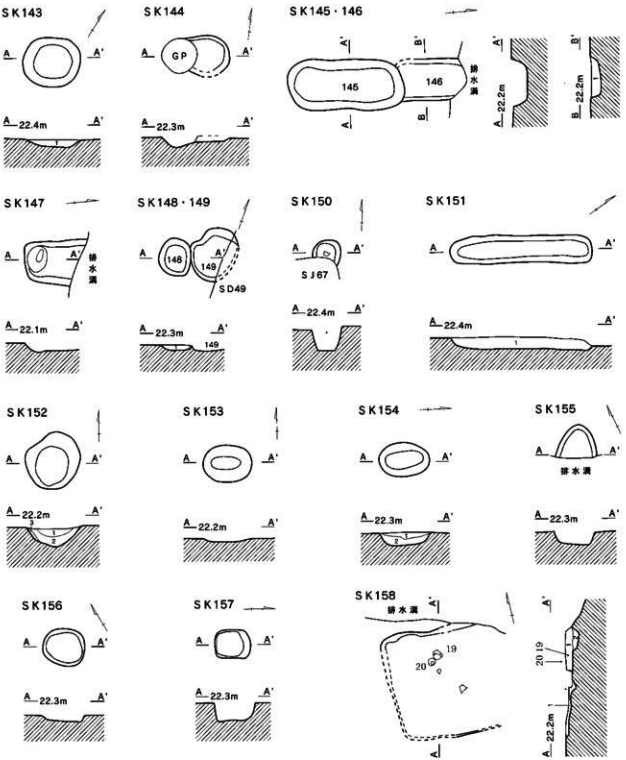
SK138
1 黒褐色土　黄色土粒・焼土粒極少
2 黄褐色土　白色粘土粒少

SK139
1 黄褐色土　黄色土ブロック多
2 明褐色土　炭化物粒子多、焼土粒少
3 暗褐色土　炭化物粒 ƒ やや多、白色粘土ブロック少

SK140
1 黒褐色土　黄色土粒・焼土粒極少
2 黒褐色土　黄色土粒多

SK141・142
1 黒褐色土　黄色土粒・焼土粒極少
2 黒褐色土　黄色土粒多

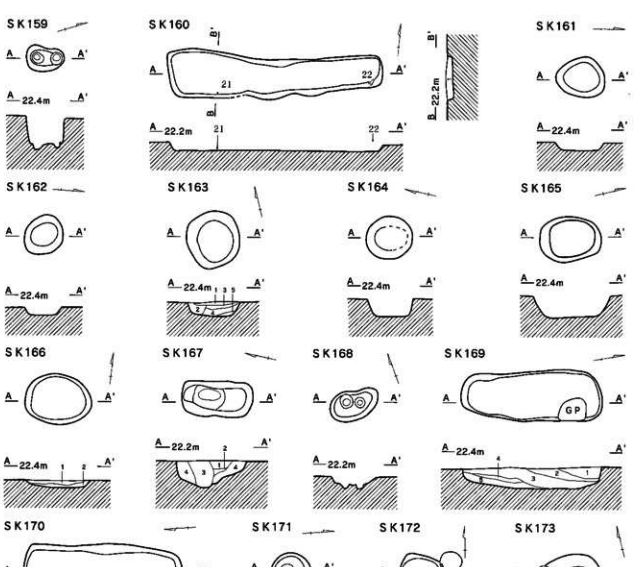
第260図　土壙(14)



SK143
1 黒褐色土　炭化物粒子・焼土粒多
SK146
1 暗褐色土　地山粒多、焼土粒微量
SK148
1 暗褐色土　炭化物粒子少、地山粒やや多
SK151
1 黒褐色土　地山ブロック多
SK152
1 黒褐色土　地山ブロック(1～3cm)・炭化物ブロック(0.5～1cm)少
2 暗褐色土　地山ブロック(0.5～1cm)・炭化物粒子少
3 暗黄褐色土　地山粒多

SK154
1 暗褐色土　地山ブロック・炭化物粒子多
2 黄褐色土　炭化物粒子極少　しまり弱
SK158
1 暗灰褐色土　地山粒多
2 暗灰褐色土　地山ブロック多

第261図　土壙(15)



SK160
1 暗褐色土　焼土粒・炭化物粒子少

SK163
1 黒褐色土　地山ブロック(0.5～1cm)・炭化物粒子少
2 暗褐色土　地山ブロック(0.5～1cm)や中多、炭化物粒子少
3 黒褐色土　地山ブロック(2～4cm)・炭化物粒子やや多
4 暗褐色土　地山ブロック(1～2cm)・炭化物粒子少
5 暗褐色土　地山ブロック(0.5～1cm)少

SK166
1 暗褐色土　炭化物粒子・焼土粒少
2 暗褐色土　焼土ブロック多、炭化物粒子少

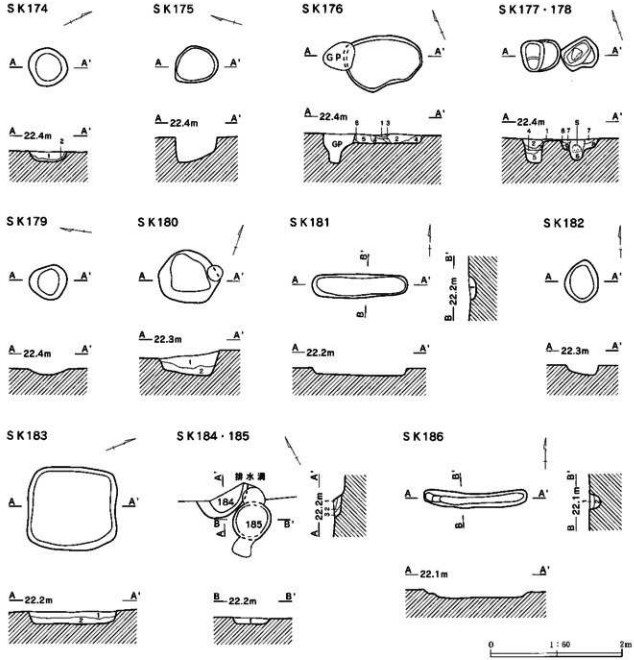
SK167
1 暗灰褐色土　地山ブロック・焼土粒若干
2 暗灰褐色土　地山ブロック多
3 暗灰褐色土　地山粒・焼土粒少
4 炭化物層　地山ブロック多、焼土ブロック少

SK169
1 暗褐色土　地山ブロック(1～3cm)多、炭化物粒子少
2 暗褐色土　地山ブロック(2～4cm)多、炭化物粒子少
3 暗褐色土　地山ブロック(1～3cm)非常に多、炭化物ブロック(1～2cm)少
4 暗黄褐色土　地山ブロック(1～2cm)非常に多、炭化物粒子少
5 暗黄褐色土　地山ブロック(2～3cm)非常に多、炭化物粒子少

SK170
1 黒褐色土　地山ブロック(1～3cm)多、焼土ブロック(0.5～1cm)少、炭化物粒子非常に多
2 暗黄褐色土　地山ブロック(2～4cm)多、焼土ブロック(0.5cm)少
3 暗黄褐色土　地山ブロック(2～4cm)非常に多
4 暗黄褐色土　地山ブロック(1～5cm)非常に多、炭化物ブロック(0.5～1cm)やや多
5 暗黄褐色土　地山ブロック(2～8cm)非常に多
6 灰白色土　焼土ブロック層、炭化物粒子少

SK173
1 暗灰黒色土　地山ブロック少
2 暗灰褐色土　地山ブロック多、焼土ブロック極少

第262図　土壙(16)



SK174
1 暗褐灰色土　地山粒・炭化物粒子・焼土粒少
2 暗黄褐色土　地山ブロック多

SK176
1 黒褐色土　焼土粒・炭化物粒子少
2 暗褐色土　地山粒・炭化物粒子多
3 暗褐色土　地山ブロック多、焼土粒少
4 明褐色土　地山ブロック・炭化物粒子多、焼土粒階層
5 暗黄褐色土　地山ブロック多、炭化物粒子少
6 暗褐灰色土　地山ブロック少

SK177・178
1 褐色土　地山粒多
2 暗褐色土　地山ブロック多
3 暗黄褐色土　地山ブロック多
4 暗褐色土　地山ブロック少
5 明黄褐色土　地山ブロック多、炭化物粒子少
6 明褐色土　地山ブロック少
7 暗褐色土　地山ブロック・炭化物粒子少
8 黄褐色土　地山ブロック多
9 明褐色土　地山ブロック多

SK180
1 暗灰褐色土　地山粒多、焼土粒少
2 明褐色土　地山ブロック少

SK181
1 黒灰色土　地山粒・マンガン粒多

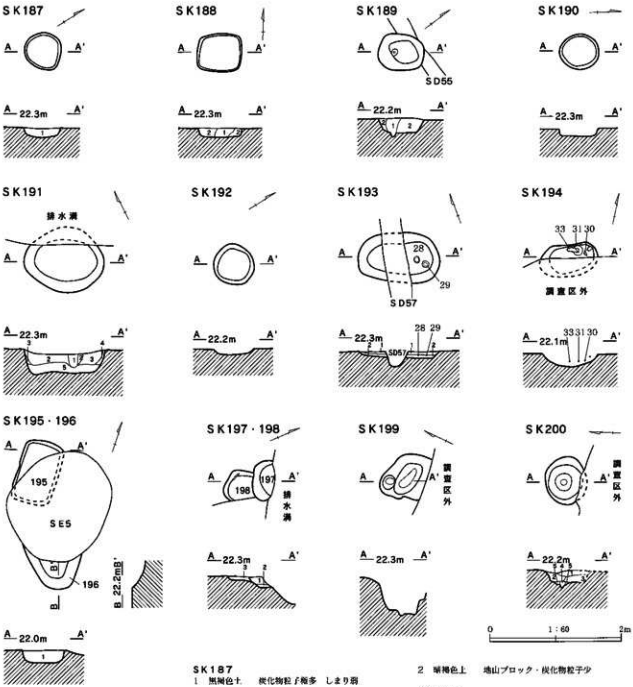
SK183
1 明褐色土　地山ブロック多、焼土粒少
2 黒褐色土　地山ブロック多

SK184
1 暗灰黄色土　地山ブロック少
2 暗褐色土　地山ブロック多、焼土粒僅少
3 明灰黒色土　地山ブロック少、焼土粒微少　1層に比べ粘性やや強

SK185
1 黒褐色土　炭化物粒子やや多、黄色土ブロック・焼土粒少

SK186
1 灰褐色土　地山ブロック多
2 灰褐色土　地山粒少、炭化物粒子微量

第263図　土壙(17)



SK187
1 黒褐色土　炭化物粒子微多　しまり弱

SK188
1 明褐色土　炭化物粒子微多　しまり弱
2 黒褐色土　黄色土ブロック・炭化物粒子多

SK189
1 明褐色土　炭化物粒子微多　しまり弱
2 黒褐色土　黄色土ブロック・炭化物粒子多

SK191
1 黒褐色土　地山ブロック少、炭化物粒子微少(ビット)
2 暗褐色土　地山ブロック少
3 暗灰褐色土　地山ブロックやや多
4 暗灰黒色土　灰色ブロック多
5 褐色土　地山ブロックやや多

SK193
1 黒褐色土　焼土粒・炭化物粒子多
2 明褐色土　地山ブロック・炭化物粒子少

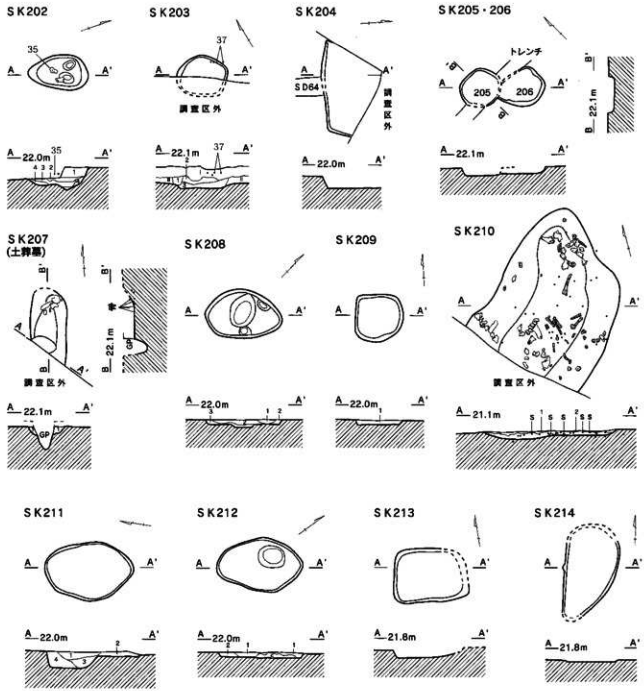
SK195
1 灰褐色土　地山ブロック多

SK197・198
1 黒灰褐色土　地山ブロック多、炭化物粒子少量
2 灰褐色土　地山ブロック多
3 暗褐色土　地山粒多

SK200
1 明灰褐色土　地山ブロック多
2 暗灰褐色土　地山粒多、炭化物粒子少
3 暗褐色土　炭化物層中に地山粒多
4 暗褐色土　炭化物層中に地山粒多、焼土粒若干
5 黒褐色土　炭化物層中に地山ブロック多

SK201
1 黒褐色土　地山ブロック若干
2 灰褐色土　地山ブロック多
3 黒灰褐色土　地山ブロック多、炭化物ブロック若干

第264図　土壙(18)



SK202
1 暗褐色土　地山ブロック(0.5～1cm)・焼土粒少
2 黒褐色土　地山ブロック(1～2cm)少・焼土ブロック(0.5cm)・炭化物粒子やや多
3 暗褐色土　地山ブロック(2～3cm)やや多、焼土粒少
4 暗黄褐色土　地山ブロック(2～3cm)多

SK203
I 黒褐色土　炭化物粒子・焼土粒少　古代の表土層と思われる
II 暗褐色土　炭化物粒子・焼土粒・黒色土ブロック(2～3cm)少
1 暗褐色土　地山ブロック(1～2cm)・炭化物粒子少　ピットか
2 黒褐色土　地山ブロック(0.5～1cm)やや多、炭化物粒子少
3 暗褐色土　炭化物ブロック(0.5～1cm)・焼土ブロック(0.5～1cm)やや多

SK207
1 暗褐色土　地山ブロック(1～2cm)・炭化物粒子少

SK208
1 暗褐色土　焼土ブロック(0.5cm)・炭化物ブロックやや多
2 暗褐色土　地山ブロック(1～2cm)少
3 暗黄褐色土　地山ブロック(0.5～2cm)多

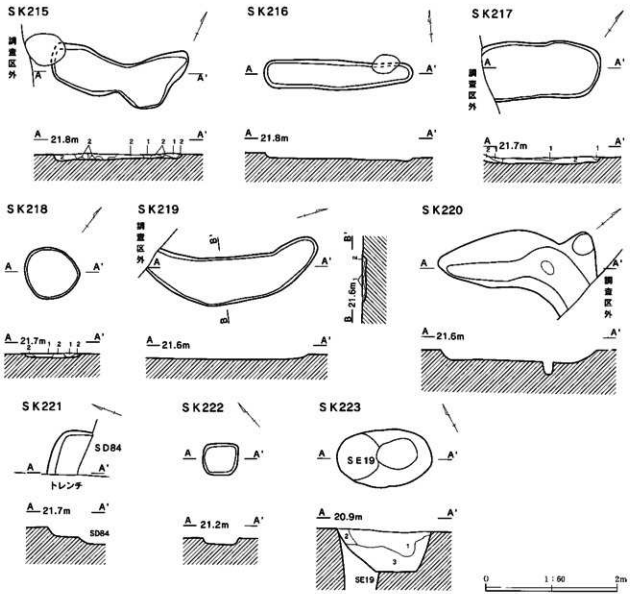
SK209
1 黄灰色土　地山ブロック多

SK210
1 暗黄褐色土　焼土ブロック少、鉄分・マンガン粒多　馬骨直下の砂層　馬骨を含む
2 黒褐色土　炭化物粒子・焼土粒・鉄分・マンガン粒多　馬骨下層　別遺構

SK211
1 暗褐色土　地山ブロック(0.5～1cm)・焼土粒少
2 暗黄褐色土　地山ブロック(4～5cm)・焼土粒少
3 暗褐色土　地山ブロック(0.5～3cm)多、炭化物粒子少
4 黒褐色土　地山ブロック(2～3cm)・炭化物ブロックやや多

SK212
1 暗褐色土　地山ブロック(0.5～1cm)少　しまり強　粘性弱
2 暗黄褐色土　粘土ブロック(0.5～4cm)少、鉄分多　しまり強　粘性弱

第265図　土壙(19)



SK215
1 黒褐色土　マンガン粒・炭化物粒子・地山ブロック(3cm)微量
2 暗黄褐色土　マンガン粒・炭化物粒子多

SK217
1 黒褐色土　地山ブロック(1～2cm)・マンガン粒多　しまり強
2 暗黄褐色土　マンガン粒極多、炭化物粒子少　しまり強

SK218
1 黒褐色土　マンガン粒少、炭化物粒子微量、地山粒多
2 暗黄褐色土　マンガン粒多

SK219
1 黒褐色土　マンガン粒多、炭化物粒子少
2 暗黄褐色土　マンガン粒多

SK223
1 褐灰色土　酸化鉄粒多、灰白色土ブロック・黒灰色土ブロック少
2 暗灰色土　(1層より明)灰白色土ブロック・黒灰色土ブロック微量
3 灰色土　黒灰色土ブロック少

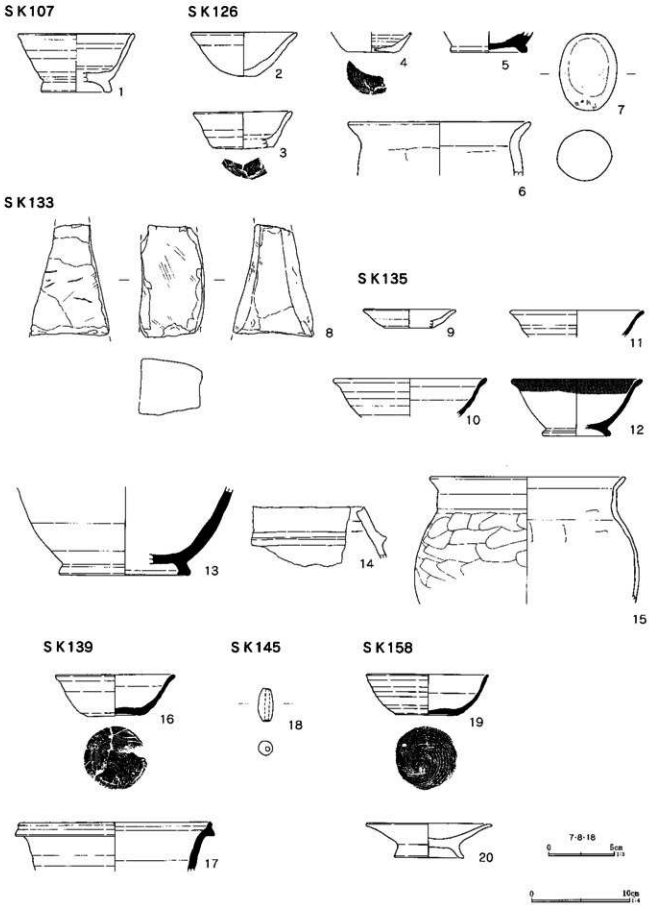
第266図　土壙(20)

第214号土壙(第265図)

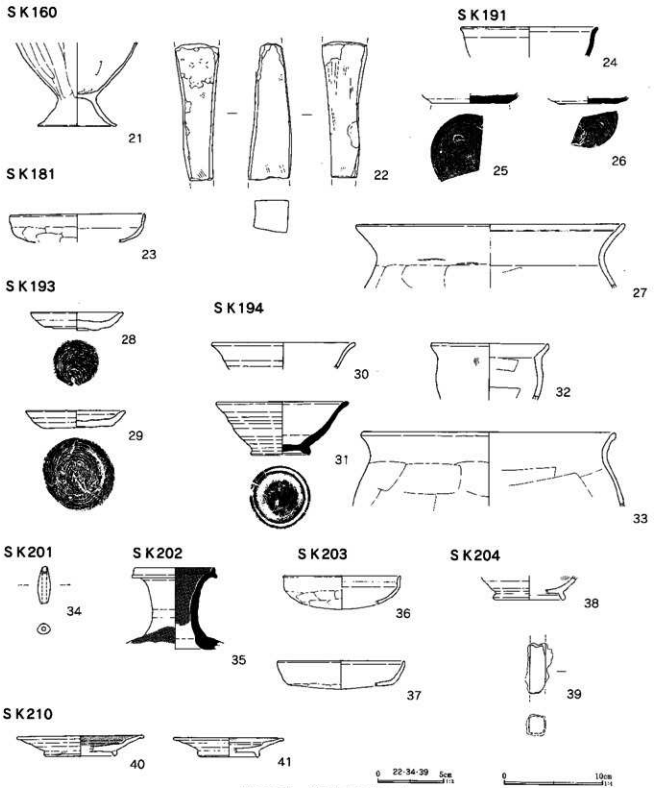
Q－43グリッドに位置する。規模は、長軸（1.55）m、短軸0.80m、深さ3cm、長軸方向はN-20°-Eである。平面形は南側が尖った楕円形、断面形は皿状を呈する。遺物は出土しなかった。

第215号土壙(第266図)

Q－43グリッドに位置する。ピットに切られる。規模は、長軸2.10m、短軸0.70m、深さ10cm、強いて計測するならば、長軸方向はN-63°-Eである。平面形は、土壙が2つ重複しているかのような不整形、断面形は皿状を呈する。遺物は出土しなかった。



第267図　土壙出土遺物(15)



第268図　土壙出土遺物(15)

第216号土壙(第266図)

Q－44グリッドに位置する。ピットに切られている。規模は、長軸2.25m、短軸0.45m、深さ7cm、長軸方向はN-88°-Wである。平面形は細長い隅丸長方形で溝状に近く、断面形は皿状を呈する。遺物は出土しなかった。

第217号土壙(第266図)

Q・R－43・44グリッドに位置する。西側は調査区外に続く。現状での規模は、長軸1.80m、短軸

土壌遺物観察表（第267・268図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師高台付坏	(12.0)	5.9	(7.1)	AGHIJ	不	明褐色	25	SK107 器面は風化している
2	土師小坏	10.9	4.5		ACGHIK	不	黒褐色	65	SK126
3	土師坏	(10.1)	3.6	(6.2)	CHIJ	普	白橙色	25	SK126
4	土師坏		2.1	4.8	CHK	普	白橙色	25	SK126 細密
5	須恵壺		2.1	(7.7)	HIJK	普	灰色	35	SK126 自然釉
6	甕	(18.6)	5.4		AGHIJ	普	暗褐色	25	SK126
7	敲石か	現存長5.9×幅4.4×厚3.8cm硬質砂岩製				灰青色	完形 磨石か		SK126 重量139.1g 煤付着
8	砥石	現存長8.8×幅5.9×厚4.3cm 滑石製				白橙色			SK133 重量289.3g 剥離部分多
9	土師皿	(9.4)	1.9	(5.1)	AGHIJ	普	暗褐色	20	SK135
10	須恵坏	(15.6)	3.9		GHI	普	暗灰色	20	SK135
11	須恵坏	13.6	2.8		CIJK	不	灰橙色	15	SK135
12	須恵高台付坏	(13.3)	5.8	(6.8)	GIJK	不	暗灰色	20	SK135 自然釉
13	須恵甕		9.0	(13.4)	IJ	普	明茶褐色	15	SK135
14	羽釜		5.2		AGHIJ	普	褐色	10	SK135
15	甕	20.0	12.9		AGHIJ	普	暗褐色	55	SK135 外面に煤付着
16	須恵坏	12.2	4.3	6.0	GHIJK	不	灰褐色	80	SK139
17	須恵壺	(19.6)	5.0		AEIJ	普	暗青灰色	15	SK139
18	土錘	2.5×1.1×1.1cm 孔径0.3cmACHJ				普	橙褐色	95	SK145 重量3.0g
19	須恵坏	12.3	4.1	6.3	EGIJ	普	灰色	85	SK158 南比企？
20	土師高台付皿	13.0	3.5	7.0	AGHIJ	普	橙褐色	85	SK158 酸化炎？
21	台付甕		8.4	8.0	AHIJ	普	黒褐色	65	SK160
22	砥石	現存長10.3×幅3.1×厚2.4cm 滑石製					白橙色		SK160 重量126.8g
23	坏	(13.8)	2.8		ACHIJ	普	褐色	15	SK181
24	須恵坏	(14.0)	3.1		AHIJK	不	白灰色	15	SK191
25	須恵坏		1.1	(8.0)	AIJ	良	灰色	35	SK191
26	須恵坏		0.7	(6.1)	EIJK	良	青灰色	25	SK191
27	甕	(27.4)	6.6		AGHIJ	普	褐色	20	SK191
28	土師皿	9.4	1.8	4.9	AEGHIJ	普	橙褐色	100	SK193 歪み大
29	土師皿	10.0	1.9	7.0	ACEGHI	普	褐色	100	SK193
30	土師坏	(14.6)	2.7		ACHIJ	普	橙褐色	15	SK194
31	須恵高台付坏	13.5	5.4	5.8	GIJK	不	灰褐色	100	SK194 黒斑あり
32	甕	(12.0)	5.8		AGIJ	良	黒褐色	15	SK194
33	甕	(25.7)	7.5		AGHI	普	白橙色	25	SK194
34	土錘	2.8×1.0×0.8 孔径0.3			AGI	普	明褐色	95	SK201 重量2.1g
35	須恵壺	8.1	8.4		EIJK	良	黒灰色	95	SK202 自然釉
36	坏		(12.1)	2.9	ACGHIJ	普	明褐色	35	SK203
37	坏	(13.2)	2.6		HIJK	普	明褐色	20	SK203
38	灰釉高台付坏		2.5	7.0	I	良	灰白色	10	SK204 灰釉
39	不明鉄製品	現存長3.8×幅2.2×厚1.6cm							SK204 錆化著しい 両端部欠損
40	灰釉段皿	(13.2)	2.0	(7.2)	I	良	灰色	25	SK210 内面墨 硯に転用か
41	灰釉段皿	(11.4)	1.9	(5.9)	I	良	明灰色	20	SK210 墨付着 硯に転用か 釉

0.80m、深さ10cm、長軸方向はN-50°-Eである。平面形は隅丸長方形に近く、断面形は皿状を呈する。遺物は出土しなかった。

第218号土壌(第266図)

R－44グリッドに位置する。規模は、長軸0.85m、短軸0.80m、深さ5cmである。平面形は楕円形、断面形は皿状を呈する。遺物は出土しなかった。

第219号土壌(第266図)

R－44グリッドに位置する。南側は調査区外に続く。現状における規模は、長軸2.60m、短軸0.70m、深さ5cm、強いて計測するならば長軸方向はN-11°-Eと推定される。平面形は円弧状、断面形は浅い皿状を呈する。遺物は出土しなかった。

第220号土壌(第266図)

R－44グリッドに位置する。東側は調査区外に続く。現状での規模は、長軸2.25m、短軸0.85m、深さ20cm。強いて計測するならば、長軸方向はN-52°-Eである。平面形は円弧状、断面形は浅い逆台形を呈する。遺物は出土しなかった。

第7表　土壙一覧表

番号	位　置	方　位	形態	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	備　考
103	F·G-28	N-8°-E	長方形	2.70	1.20	0.15	
104	G-28		円形	0.85	0.85	0.10	SD47より新
105	G-29		円形	0.70	0.60	0.20	SJ29より新
106	H-29	N-10°-W	楕円形	1.32	(0.95)	0.15	SJ36より旧
107	G-29·29	N-9°-E	長楕円形	1.50	0.90	0.15	SJ26·27·28より新
108	G-29	—	長楕円形	(0.90)	0.65	0.12	
109	H-29	—	長楕円形	1.35	(0.25)	0.05	
110	H-30	N-10°-W	楕円形	0.60	0.55	0.10	
111	H-30	N-10°-E	長楕円形	0.65	0.35	0.10	SJ41と重複、新旧不明
112	H-30	—	楕円形	1.15	1.10	0.23	
113	G·H-30	—	楕円形	1.50	1.40	0.15	SJ39·40より新
114	H-30	—	楕円形	0.95	0.65	0.17	SE3·SK115より新
115	H-30	N-3°-E	隅丸長方形	(2.45)	1.25	0.30	SE3·SK114より旧
116	H-30	N-5°-E	長楕円形	(0.65)	0.60	0.30	SJ41より新
117	H-30	N-88°-W	長楕円形	1.20	0.68	0.10	SJ41より新
118	H-30		円形	0.75	0.75	0.20	SJ45より新
119	H-30	N-35°-E	楕円形	0.83	0.65	0.15	SJ47より新
120	H-30·31		台形	0.65	0.55	0.45	SJ44より旧
121	H-30	N-74°-W	長楕円形	0.85	0.65	0.20	SJ47·SK122·123より新
122	H-30	N-53°-W	長楕円形	0.70	(0.50)	0.13	SK121より旧
123	H-30	N-88°-W	長楕円形	(0.65)	(0.47)	0.35	SJ47より新、SK121より旧
124	H-30	N-54°-E	逆台形	1.25	0.75	0.20	SJ41より新
125	H-30	N-28°-E	楕円形	1.10	(0.80)	0.20	SJ41より新、SK124より旧
126	H·29·30、I·30	—	不整形	2.50	1.00	0.15	SJ41より新
127	H·I-30		円形	1.05	0.97	0.22	
128	H-30		長方形	0.62	0.62	0.08	
129	H·I-30	—	隅丸長方形	(1.05)	0.75	0.05	SJ48より旧
130	I-30	—	楕円形	0.85	0.55	0.10	
131	H-31	N-81°-W	楕円形	0.70	0.65	0.27	SK132より新
132	G·H-31 N-O		隅丸長方形	3.25	0.80	0.25	SK131より旧
133	H-31	N-82°-W	楕円形	1.10	0.90	0.30	SJ52·53、SK134より新
134	H-31	N-14°-E	不整形	(0.76)	0.70	0.30	SJ52·53より新、SK133より旧
135	H-31	N-64°-E	楕円形	1.35	1.15	0.30	SJ52·53より新
136	H-31	N-30°-W	楕円形	1.35	1.13	0.28	SK137より新
137	H-31	—	楕円形	(0.77)	0.70	0.15	SJ46より新、SK136より旧
138	H-31		楕円形	0.85	0.70	0.10	
139	H-31	N-59°-W	楕円形	1.60	1.05	0.35	SJ48より旧
140	H-31	N-5°-E	隅丸長方形	2.10	0.80	0.20	SJ56に接しているが新旧不明
141	H-31	N-18°-W	隅丸長方形	1.25	0.80	0.15	SK142より新
142	H-31	—	楕円形	1.25	0.65	0.10	SK141より旧
143	G·31·32	N-59°-E	楕円形	0.90	0.75	0.10	
144	I-31	N-83°-E	楕円形	(1.03)	(0.60)	0.07	
145	H-32	N-8°-E	隅丸長方形	1.75	0.75	0.23	SK146、SJ60·61より新
146	H-32	N-7°-E	隅丸長方形	(1.00)	0.60	0.15	SJ60·61より新、SK145より旧
147	H-32	N-3°-E	隅丸長方形	(0.95)	0.65	0.10	SJ61より新
148	H-32	N-39°-W	楕円形	0.60	0.50	0.10	
149	H-32	N-14°-E	楕円形	0.85	(0.70)	0.10	SD49と重複、新旧不明
150	H-32	—	楕円形	(0.45)	0.43	0.35	SJ67より旧
151	H-32	N-34°-E	隅丸長方形	2.15	0.40	0.15	SJ66より新
152	H-32	N-8°-E	楕円形	0.90	.80	0.25	SJ69と重複、新旧不明
153	H-32	N-89°-E	楕円形	0.75	0.55	0.05	
154	I-32	N-3°-E	長楕円形	0.75	0.50	0.20	
155	I-32	N-72°-W	長楕円形	(0.60)	(0.50)	0.20	
156	H-33	N-60°-W	楕円形	0.65	0.55	0.10	SJ69より旧
157	H-33	N-4°-W	隅丸長方形	0.55	0.45	0.29	SJ70より新
158	H-33	N-90°-W	隅丸方形か	1.65	(1.65)	0.29	
159	H-33		隅丸方形か	0.55	0.40	0.50	SJ70より新
160	H·I-33	N-85°-E	隅丸長方形	3.25	0.60	0.10	SJ70より旧
161	I-33	N-25°-E	楕円形	0.75	0.60	0.10	
162	I-33	N-61°-W	楕円形	0.68	0.55	0.10	
163	I-33	N-25°-E	楕円形	0.90	0.80	0.25	
164	I-33	N-12°-W	楕円形	0.70	0.65	0.27	
165	I-33	N-12°-W	楕円形	0.93	0.70	0.30	SJ71より新

第8表　土壙一覧表

番号	位　置	方　位	形態	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	備　考
166	I-33	N-86°-E	楕円形	1.03	0.75	0.10	SJ71より新
167	I-33	N-12°-W	楕円形	1.05	0.50	0.20	
168	I-33	N-84°-E	楕円形	0.75	0.45	0.17	
169	I-34	N-10°-E	隅丸長方形	2.10	0.75	0.30	SJ83より新
170	I-34	N-5°-E	隅丸長方形	2.45	0.90	0.80	
171	I-34	N-5°-E	隅丸長方形	0.60	0.55	0.80	
172	H-33	N-9°-E	楕円形	0.80	0.65	0.05	SJ78より新
173	I-34	N-86°-E	長楕円形	0.90	0.65	0.15	
174	I-34		円形	0.60	0.55	0.15	
175	I-34	N-15°-W	楕円形	0.65	0.55	0.40	
176	I-34	N-66°-W	楕円形	1.20	0.75	0.14	
177	I-34	N-16°-E	楕円形	0.60	0.45	0.35	SJ84より新
178	I-34	N-74°-E	隅丸長方形	0.55	0.45	0.30	
179	I-34		楕円形	0.60	0.50	0.10	SJ84より新
180	I-34		不整円形	0.85	0.85	0.35	
181	J-34	N-74°-E	楕円形	1.45	0.35	0.10	
182	J-34	N-7°-E	楕円形	0.65	0.50	0.15	SJ85より新
183	I-35	N-22°-E	隅丸長方形	1.35	1.22	0.18	
184	I-35	—	楕円形か	0.80	0.30	0.10	
185	J-34	N-66°-E	楕円形	0.60	0.55	0.10	
186	J-35	N-88°-W	溝状	1.60	0.20	0.15	
187	I-35		楕円形	0.60	0.55	0.15	
188	I-34·35	N-89°-W	隅丸長方形	0.70	0.57	0.13	
189	I-35	N-39°-E	円形	0.70	0.55	0.25	SD55より新
190	I-35		皿状	0.60	0.55	0.15	
191	I-35	N-62°-W	楕円形	1.25	(0.98)	0.28	
192	J-35		円形	0.65	0.60	0.07	
193	J-35	N-71°-W	楕円形	1.25	0.75	0.10	SD57より旧
194	J-36	N-75°-E	楕円形	0.85	(0.45)	0.20	
195	J-36	N-3°-W	隅丸方形	(0.98)	(0.65)	0.20	SE5より旧
196	J-36	—	楕円形	0.80	0.70	0.20	SE5より旧
197	J-36	—	楕円形	0.60	(0.35)	0.15	SK198より新
198	J-36	—	円形	(0.45)	(0.40)	0.05	SK197より旧
199	J-36	—	長楕円形	(0.70)	0.65	0.55	
200	J-36	N-77°-W	楕円形	0.70	(0.65)	0.25	
201	J-36	N-79°-E	円形	0.85	(0.80)	0.55	
202	K·L-37·38	N-21°-E	楕円形	0.95	0.50	0.25	
203	L-37·38	—	円形か	0.75	(0.62)	0.08	
204	K-38	—	方形か	1.45	0.90	0.15	
205	K-38	N-45°-W	円形	(0.65)	(0.60)	0.10	SK206より新
206	K·L-38	N-45°-W	楕円形	(0.70)	0.60	0.10	SK205より旧
207	L-38	N-30°-E	隅丸長方形	(1.00)	0.55	0.18	SD64より旧
208	L-38	N-50°-E	長楕円形	1.15	0.75	0.07	
209	L-39		隅丸方形か	0.75	0.70	0.05	
210	N-41	N-45°-W	不整形	2.50	1.05	0.50	
211	P-43	N-5°-W	長楕円形	1.38	0.90	0.25	
212	P-43	N-32°-E	長楕円形	1.30	0.80	0.05	
213	Q-43	N-87°-W	隅丸長方形	(1.10)	0.80	0.13	SD82より新
214	Q-43	N-20°-E	楕円形	(1.55)	0.80	0.03	
215	Q-43	N-63°-E	不整形	2.10	0.70	0.10	
216	Q-44	N-88°-W	隅丸長方形	2.25	0.45	0.07	
217	Q·R-43·44	N-50°-E	隅丸長方形	1.80	0.80	0.10	
218	R-44		楕円形	0.85	0.80	0.05	
219	R-44	N-11°-E	円弧状	2.60	0.70	0.05	
220	R-44	N-52°-E	円弧状	2.25	0.85	0.20	
221	R-44	—	方形化	0.70	0.45	0.15	SD84より旧
222	Y-47	N-45°-W	方形	0.55	0.48	0.10	
223	AB-48	N-67°-W	長楕円形	1.45	0.85	0.60	SE19より新

第221号土壙(第266図)

R－44グリッドに位置する。南側は第84号溝に切られ、西側はトレンチによって失われている。検出できた規模は、長軸0.70m、短軸0.45m、深さ15cmである。平面形は方形または長方形、断面形は逆台形を呈すると推定される。遺物は出土しなかった。

第222号土壙(第266図)

Y－47グリッドに位置する。規模は、長軸0.55m、短軸0.48m、深さ10cm、長軸方向はN-45°-Wである。平面形は方形、断面形は逆台形を呈する。遺物は出土しなかった。

第223号土壙(第266図)

AB－48グリッドに位置する。第19号井戸を切っている。規模は、長軸1.45m、短軸0.85m、深さ60cm、長軸方向はN-67°-Wである。平面形は長楕円形、断面形は丸みを帯びた逆台形を呈する。遺物は出土しなかった。

(c) 溝跡

検出された溝跡は48条で、A区16条、B区22条、C区10条である。これらの溝跡の特徴としては、基本的に東西方向もしくは、南北方向に走っているといえる。

第47号溝跡 (第269・272図)

G－28～31グリッドにかけて位置する。東西ともに調査区外に続く。N-85°-Wの向きで、ほぼ東西に走る。第19・20・21・24・28・29・31・39号住居跡・第1号井戸跡などに切られる。検出し得た規模は、長さ38.5m、上幅0.35～1.05m、下幅0.30～0.55m、深さ13～55cmを測る。調査した範囲内では、比較的直線状に走る。底面(4・5層)は砂層が沈殿している状態であった。底面は、比較的平坦な部分もみられたが、概ね断面形は椀状に近い。遺物は出土しなかった。

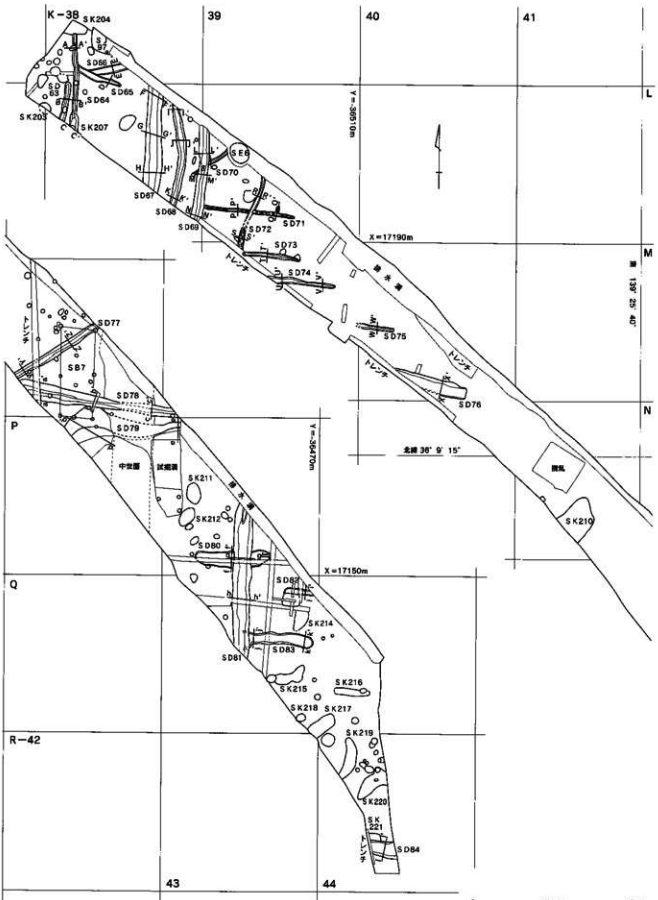
第48号溝跡 (第269・272図)

G・H－31グリッドに位置する。N-7°-Eの向きで、北北東から南南西にかけて走る。第132号土壙を切る。また、第47号溝跡も切っていると思われる。検出し得た規模は、長さ2.30m、上幅0.30～0.40m、下幅0.20～0.30m、深さ10～15cmを測る。調査した範囲内では、比較的直線状に走る。底面は、比較的平坦な部分もみられたが、概ね断面形は椀状に近い。遺物は出土しなかった。

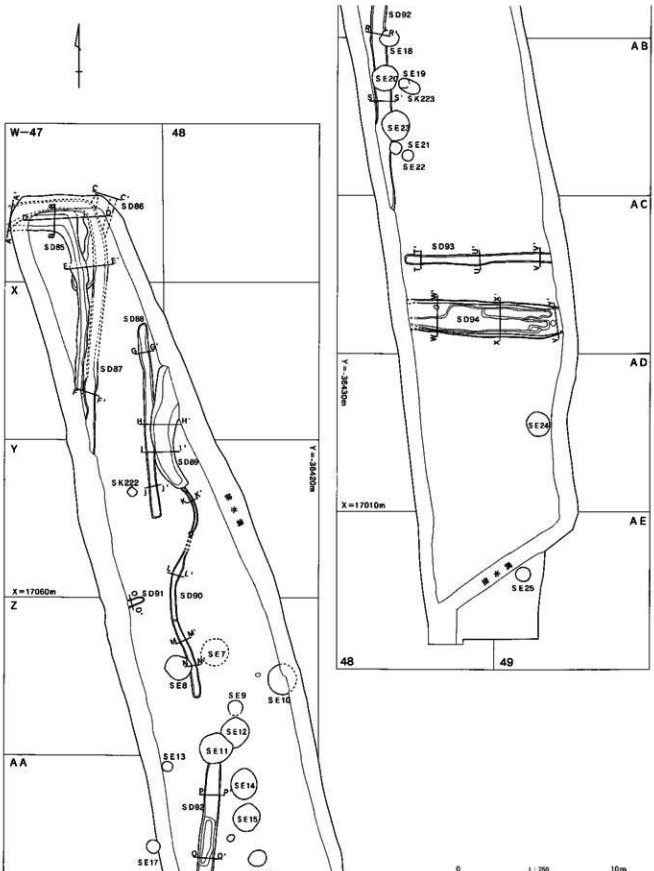
第49号溝跡 (第269・272・277図1)

H・I－32グリッドに位置する。南北ともに、調査区外に続く。N-6°-Eの向きで、北北東から南南西にかけて走る。第65～68号住居跡を切り、4本のピットに切られている。検出し得た規模は、長さ14.30m、上幅0.90～1.30m、下幅0.30～0.90m、深さ20～28cmを測る。調査した範囲内では、比較的直線状に走る。底面は、比較的平坦で、壁面の立ち上がりも緩やかである。出土した遺物の内、図化し

第269図　一面A区溝跡平面図



第270図　一面B区溝跡平面図



第271図　一面C区溝跡平面図

得たのは1点である。

第50号溝跡（第269・272図）

H－32、I－32・33、J－33グリッドに位置する。N-21°-Wの向きで、北北西から南南東にかけて走る。第66・71・74号住居跡に切られている。検出し得た規模は、長さ19.30m、上幅0.30～0.90m、下幅0.15～0.26m、深さ15～50cmを測る。調査した範囲内では、比較的直線状に走るが、溝幅が一定ではない。断面形は椀状を呈しており、壁面の立ち上がりは比較的急であるといえる。遺物は出土しなかった。

第51号溝跡（第269・272図）

H・I－33グリッドに位置する。N-10°-Wの向きで、北北東から南南西にかけて走る。20～40cm東に位置する第52号溝跡は、N-9°-Wの向きで走っており、規模もきわめて類似している。第52号溝跡と同様に、第69号住居跡に切られている。検出し得た規模は、長さ2.55m、上幅0.12～0.20m、下幅0.05～0.10m、深さ5cmを測る。調査した範囲内では、比較的直線状に走る。断面形は椀状に近い。遺物は出土しなかった。

第52号溝跡（第269・272図）

H・I－33グリッドに位置する。N-9°-Wの向きで、北北東から南南西にかけて走る。20～40cm西に位置する第51号溝跡は、N-10°-Wの向きで走っており、規模もきわめて類似している。第51号溝跡と同様に、第69号住居跡に切られている。検出し得た規模は、長さ2.75m、上幅0.13～0.25m、下幅0.05～0.15m、深さ6cmを測る。調査した範囲内では、比較的直線状に走るが、中程でやや屈曲する。断面形は椀状に近い。遺物は出土しなかった。

第53号溝跡（第269・272図）

I－33グリッドに位置する。N-4°-Eの向きで、北北西から南南東にかけて走る。第71号住居跡・第160号土壙に切られている。検出し得た規模は、長さ4.65m、上幅0.20～0.80m、下幅0.11～0.55m、深さ12cmを測る。調査した範囲内では、ほぼ直線状に走る。底面は平坦で、壁面の立ち上がりは緩やかである。遺物は出土しなかった。

第54号溝跡（第269・272・277図2）

H・I－33、I・J－34グリッドに位置する。N-5°-Wの向きで、北北西から南南東にかけて走る。南北ともに調査区外に続く。第75～78・80・83号住居跡に切られている。検出し得た規模は、長さ16.10m、上幅0.40～0.70m、下幅0.17～0.22m、深さ35～43cmを測る。調査した範囲内では、ほぼ直線状に走る。底面は比較的平坦で、壁面の立ち上がりはやや急である。土師器皿が1点出土した。

第55号溝跡（第269・272図）

I－34・35、J－35グリッドに位置する。N-73°-Wの向きで、南南西から北北東にかけて走る。東側は調査区外に続く。第84・86・87・88号住居跡に切られ、第189号土壙にも切られていると思われる。検出し得た規模は、長さ9.00m、上幅0.20～0.30m、下幅0.05～0.22m、深さ17cmを測る。やや湾曲する箇所もあるが、調査した範囲内では、ほぼ直線状に走る。底面は比較的平坦で、壁面の立ち上がりはやや急である。須恵器坏・甕、土師器甕の破片が僅かに出土したが、図化し得るものはなかった。

第56号溝跡（第269・272図）

J－34・35グリッドに位置する。N-87°-Eの向きで、北北西から南南東にかけて走る。両端ともに途切れている。検出し得た規模は、長さ7.70m、上幅0.15～0.25m、下幅0.10～0.16m、深さ3～12cmを測る。やや湾曲する箇所もあるが、調査した範囲内では、ほぼ直線状に走る。遺構が浅いため断面形を捉えにくいが、概ね椀状を呈すると思われる。遺

物は出土しなかった。

第57号溝跡（第269・272図）

Ⅰ・Ｊ－35グリッドに位置する。N-8°-Eの向きで、北北東から南南西にかけて走る。両端ともに調査区外に続く。第87・88号住居跡を切っていると思われる。第193号土壙を切り、第58・59号溝跡に切られている。検出し得た規模は、長さ11.30m、上幅0.26～0.48m、下幅0.10～0.30m、深さ15～22cmを測る。やや湾曲する箇所もあるが、調査した範囲内では、ほぼ直線状に走る。底面は、平坦な箇所もあるが、概ね椀状を呈する。土師器甕、須恵器坏・甕の破片が僅かに出土したが、図化し得るものはなかった。

第58号溝跡（第269・272図）

Ｊ－35グリッドに位置する。N-87°-Eの向きで、西南西から東北東にかけて走る。両端ともに第59号溝跡によって切られているため、途切れている。第57号溝跡を切っている。検出し得た規模は、長さ3.70m、最大幅0.45m、深さ5～8cmを測る。やや湾曲する箇所もあるが、調査した範囲内では、ほぼ直線状に走ると推定される。断面形は、Ｖ字状に近い。土師器甕・須恵器坏の破片が僅かに出土したが、図化し得るものはなかった。

第59号溝跡（第269・272図）

Ｊ－35グリッドに位置する。N-87°-Eの向きで、西南西から東北東にかけて走る。西側をピットに切られているが、それ以西には続いていない。遺構の東側は途切れている。第57・58号溝跡を切り、第60号溝跡に切られている。検出し得た規模は、長さ5.14m、上幅0.14～0.28m、下幅0.04～0.10m、深さ6cmを測る。湾曲する箇所もあるが、調査した範囲内では、ほぼ直線状に走る。遺構が浅いため断面形を捉えにくいが、丸みを帯びたＶ字状に近い。遺物は出土しなかった。

第60号溝跡（第269・272図）

Ⅰ・Ｊ－35グリッドに位置する。N-82°-Wの向きで、北北西から南南東にかけて走る。第61号溝跡を切っていると思われる。第88号住居跡と第59号溝跡を切っているが、北側を第191号土壙に切られている。このため、調査区外にまで続くのかは不明である。南側は試掘溝に切られているが、それ以南にはみられない。検出し得た規模は、長さ5.40m、上幅0.10～0.22m、下幅0.03～0.11m、深さ6～11cmを測る。湾曲する箇所もあるが、調査した範囲内では、ほぼ直線状に走る。遺構が浅いため断面形を捉えにくいが、概ね椀状に近い。土師器甕、須恵器坏・甕の破片が僅かに出土したが、図化し得るものはなかった。

第61号溝跡（第269・272・277図3）

Ｊ－35・36グリッドに位置する。N-73°-Wの向きで、西北西から東南東にかけて走る。第88号住居跡を切っているが、第60・62号溝跡に切られている。このため、東側は調査区外にまで続くのかは不明である。検出し得た規模は、長さ3.70m、上幅0.40～0.57m、下幅0.20～0.30m、深さ10～15cmを測る。調査した範囲内では、ほぼ直線状に走る。なお、本遺構は、第55号溝跡と同一遺構の可能性が考えられる。その場合、両者を合わせた長さは15.60mとなる。遺構が浅いため断面形を捉えにくいが、概ね椀状に近い。土師器甕、須恵器甕の破片が僅かに出土したが、図化し得たのは1点である。

第62号溝跡（第269・272図）

Ｊ－36グリッドに位置する。N-2°-Wの向きで、北北西から南南東にかけて走る。両端ともに調査区外に続く第89・90・91・92号住居跡に切られている。第62号溝跡の東26m程には、南北方向をもつ第63・64号溝が存在する。さらに第64号溝跡の東5mの位置には、第67～69号溝跡が、比較的等間隔で南北方向をもって並んでいる。この周辺には、南北方

向を示す溝跡が集中しているといえよう。検出し得た規模は、長さ6.70m、上幅0.48～0.80m、下幅0.15～0.22m、深さ16～30cmを測る。調査した範囲内では、ほぼ直線状に走る。底部は緩やかな丸味をもち、断面形は概ね椀状を呈する。遺物は出土しなかった。第63～84号溝跡はB区に位置する遺構である。

第63号溝跡（第270・273・277図4）

L－38グリッドに位置する。N-10°-Eの向きで、北北東から南南西にかけて走る。南側は、調査区外に続く。1本のピットを切っている。第63号溝跡の西約26mには、第62号溝跡が存在しており、第64号溝跡の東約5mには、第67～69号溝跡がほぼ等間隔に並んでいる。これらはいずれも南北方向であり、この一帯は南北溝が集中しているといえる。検出し得た規模は、長さ2.45m、上幅0.32～0.38m、下幅0.10～0.20m、深さ10cmを測る。調査した範囲内では、ほぼ直線状に走る。底部は緩やかな丸味をもち、断面形は概ね椀状を呈する。出土した遺物は1点であった。

第64号溝跡（第270・273・277図5）

K・L－38グリッドに位置する。N-1°-Wの向きで、南北に走る。北側を第204号土壙に、南側を第207号土壙に切られている。また、この他に1本のピットにも切られている。このため、南北ともに調査区外に続くのかは不明である。第63号溝跡の西約26mには、第62号溝跡が存在しており、第64号溝跡の東約5mには、第67～69号溝跡がほぼ等間隔に並んでいる。これらはいずれも南北方向であり、この一帯は南北溝が集中しているといえる。検出し得た規模は、長さ5.70m、上幅0.28～0.35m、下幅0.10～0.15m、深さ15～30cmを測る。調査した範囲内では、ほぼ直線状に走る。底面は比較的平坦で、断面形は皿状に近い。土師器坏・甕、須恵器坏の破片が僅かに出土したが、図化し得たのは1点である。

第65号溝跡（第270・273図）

K・L－38グリッドに位置する。N-68°-Wの向きで、西北西から東南東に走る。第66号溝跡を切り、第64号溝跡に切られている。検出し得た規模は、長さ2.90m、上幅0.20～0.40m、下幅0.15～0.30m、深さ10cmを測る。調査した範囲内では、僅かに湾曲するもののほぼ直線状に走る。底面は比較的平坦で、断面形は皿状に近い。土師器甕の破片が僅かに出土したが、図化し得るものはなかった。

第66号溝跡（第270・273・277図6）

K－38グリッドに位置する。N-80°-Eの向きで、西南西から東北東に走る。東側は調査区外に続いているが、西側は第65号溝跡に切られており、その西側には続いていない。検出し得た規模は、長さ2.10m、上幅0.40～0.50m、下幅0.30～0.35m、深さ10cmを測る。調査した範囲内では、直線状に走る。底面は平坦で、断面形は皿状を呈する。僅かに出土した遺物の内で、図化し得たのは1点である。

第67号溝跡（第270・273図）

L－38グリッドに位置する。N-3°-Eの向きで、南北に走る。両端ともに調査区外に続く。第67～69号溝跡はいずれも南北方向であり、比較的等間隔で並んでいる。また第67号溝跡の5m程西には、第63・64号溝跡がやはり南北方向で存在している。さらに、第63号溝跡から26m程西には、第62号溝跡が南北方向で存在している。この周辺には、南北方向を示す溝跡が集中しているといえよう。検出し得た規模は、長さ6.20m、上幅0.85～1.15m、下幅0.35～0.50m、深さ55cmを測る。調査した範囲内では、ほぼ直線状に走る。底面は平坦で、断面形は逆台形を呈する。土師器甕、須恵器坏・甕の破片が僅かに出土したが、図化し得るものはなかった。

第68号溝跡（第270・273図）

L－38グリッドに位置する。湧出しているため調

査区外での形状が読めないが、調査した範囲内では、N-2°-Wの向きで、南北に走る。両端ともに調査区外に続く。

第67～69号溝跡はいずれも南北方向であり、比較的等間隔で並んでいる。また第67号溝跡の5m程西には、第63・64号溝跡がやはり南北方向で存在している。さらに、第63号溝跡から26m程西には、第62号溝跡が南北方向で存在している。この周辺には、南北方向を示す溝跡が集中しているといえよう。検出し得た規模は、長さ6.30m、上幅0.40～0.60m、下幅0.15～0.30m、深さ20～30cmを測る。調査した範囲内では、平面形は、直線状を呈する。底面は比較的平坦で、断面形は逆台形に近い。遺物は出土しなかった。

第69号溝跡（第270・273図）

L－38・39グリッドに位置する。N-6°-Eの向きで、南北に走る。両端ともに調査区外に続く。第70・71号溝跡を切っていると思われる。第67～69号溝跡はいずれも南北方向であり、比較的等間隔で並んでいる。また第67号溝跡の5m程西には、第63・64号溝跡がやはり南北方向で存在している。さらに、第63号溝跡から26m程西には、第62号溝跡が南北方向で存在している。この周辺には、南北方向を示す溝跡が集中しているといえよう。検出し得た規模は、長さ6.00m、上幅0.58～0.71m、下幅0.15～0.38m、深さ18～33cmを測る。調査した範囲内では、平面形は、直線状を呈する。底面は比較的平坦で、断面形は逆台形に近い。遺物は出土しなかった。

第70号溝跡（第270・273図）

L－38・39グリッドに位置する。N-56°-Eの向きで、南西から北東に走る。東側は第6号井戸跡に切られているが、調査区外に続くと思われる。西側は途切れている。第69号溝跡に切られていると思われる。検出し得た規模は、長さ2.70m、上幅0.16～0.25m、下幅0.10～0.15m、深さ18～33cmを測る。調査した範囲内では、平面形は、直線状を呈する。底面は比較的平坦で、断面形は皿状に近い。遺物は出土しなかった。

第71号溝跡（第270・273図）

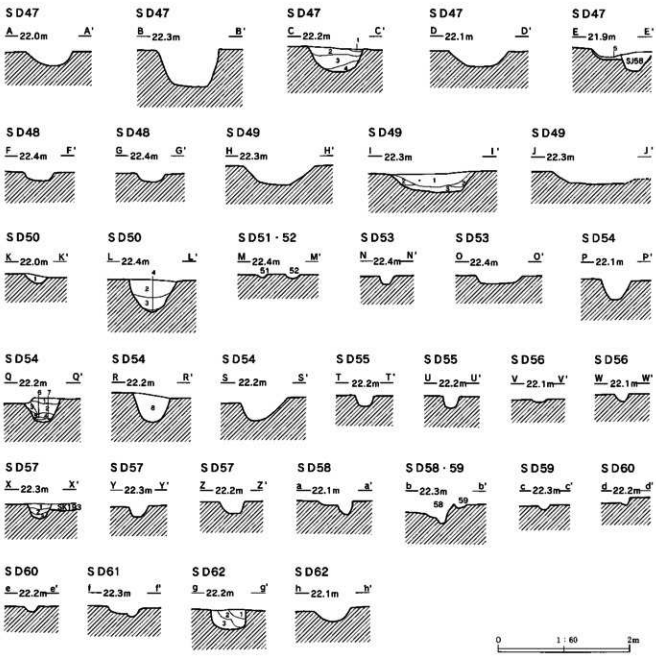
L－39グリッドに位置する。N-83°-Wの向きで、東西に走る。西側は、第69号溝跡に切られていると思われるが、その先には続いていない。東側は途切れている。第72号溝跡にも切られていると思われる。第71・73～76号溝跡はいずれも東西溝であり、この一帯に集中する傾向がうかがえる。これらの溝跡は、幅・深さとも類似しているといえよう。検出し得た規模は、長さ5.80m、上幅0.20～0.25m、下幅0.10～0.15m、深さ11cmを測る。調査した範囲内では、平面形は、直線状を呈する。断面形は椀状に近い。遺物は出土しなかった。

第72号溝跡（第270・273図）

L・M－39グリッドに位置する。N-21°-Eの向きで、南南西から北北東に走る。西側は、第71号溝跡を切っていると思われる。東側は途切れている。南北ともに、調査区外に続く。検出し得た規模は、長さ4.80m、上幅0.20～0.35m、下幅0.10～0.25m、深さ5～10cmを測る。調査した範囲内では、平面形は、直線状を呈する。深度が浅いため断面形は判断しづらいが、現状では椀状または皿状に近い。遺物は出土しなかった。

第73号溝跡（第270・273・277図7）

M－39グリッドに位置する。N-83°-Wの向きで、東西に走る。西側は、調査区外に続くが、東側は途切れている。第71・73～76号溝跡はいずれも東西溝であり、この一帯に集中する傾向がうかがえる。これらの溝跡は、幅・深さとも類似しているといえよう。検出し得た規模は、長さ3.70m、上幅0.20～0.30m、下幅0.10～0.15m、深さ5cmを測る。調査した範囲内では、平面形は、直線状を呈する。深度が浅



SD47
1 炭色土　　微化鉄粒多
2 暗褐灰色土　地山ブロック(1~2cm)・マンガンブロック(0.5~1cm)やや多、炭化物粒子少　砂質
3 灰褐色土　炭化物粒子・マンガンブロック(0.5~1cm)少　砂質
4 暗褐色土　砂層
5 褐灰色土　川砂層

SD49
1 暗褐色土　炭化物粒子多　しまり弱
2 褐褐色土　炭化物ブロック多
3 黒色土　炭化物粒子微量　粘性　しまり強

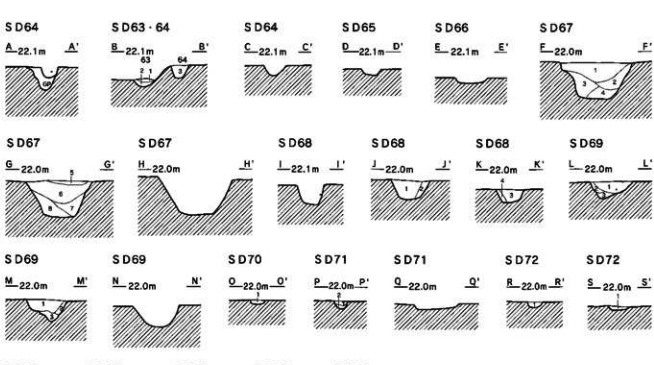
SD50
1 灰褐色土　細砂層
2 茶褐色土　マンガン粒多　細砂層
3 灰褐色土　細砂層
4 赤褐色土　細砂層

SD54
1 灰褐色土　粘土ブロック多　砂層
2 灰褐色土　砂層
3 灰褐色土　粘土ブロック多　砂層
4 灰色土　砂層
5 灰色土　粘土ブロック多　砂層
6 灰色土　マンガンブロック少　砂層
7 灰色土　砂層
8 灰褐色土　マンガン粒少

SD57
1 暗褐灰色土　地山粒子多
2 黒褐色土　炭化物粒子多
3 暗褐色土　地山ブロック多

SD62
1 暗灰褐色土　地山粒若干　細砂層
2 暗灰褐色土　地山ブロック多　細砂層
3 暗灰褐色土　マンガン粒多　細砂層

第272図　第47~62号溝跡



SD63・64
1 暗灰色土　地山粒少
2 褐灰色土　灰色土ブロック多
3 褐灰色土　地山ブロック多

SD67
1 暗灰褐色土　細砂層
2 灰褐色土　酸化鉄粒・マンガン粒多
3 暗灰色土　灰褐色粒・ブロック多
4 灰色土　地山ブロック多
5 灰褐色土　灰色土粒若干
6 暗灰褐色土　細砂層
7 灰褐色土　酸化鉄粒・マンガン粒多
8 暗灰色土　灰褐色粒・ブロック多

SD68
1 褐灰色土　地山ブロック多、灰色微細粒(火山灰か)若干
2 黄灰色土　褐灰色土粒少
3 褐灰色土　地山ブロック多、灰色微細粒(火山灰か)若干
4 黄灰色土　褐灰色土粒少

SD69
1 褐灰色土　灰色土粒・マンガン粒多
2 褐灰色土　黄灰色土ブロック若干
3 黄灰色土　地山大ブロック多

SD70
1 黄灰色土　地山粒多

SD71
1 黄灰色土　地山ブロック多
2 暗褐灰色土　地山ブロック若干

SD72
1 灰色土　地山粒多　炭化物粒子微量

SD74
1 暗褐灰色土　地山粒多

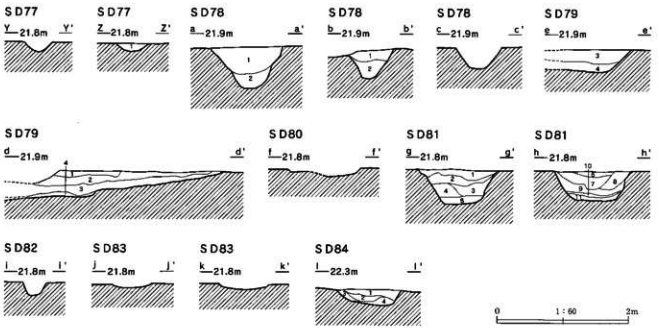
SD75
1 暗褐灰色土　地山粒・マンガン粒多、焼土粒・炭化物粒子微量

第273図　第63～76号溝跡

いため断面形は判断しづらいが、現状では皿状を呈す。遺物は1点出土したのみである。

第74号溝跡（第270・273図）

M－39グリッドに位置する。N-83°-Wの向きで、東西に走る。西側は、調査区外に続くが、東側は途切れている。第71・73～76号溝跡はいずれも東西溝であり、この一帯に集中する傾向がうかがえる。これらの溝跡は、幅・深さとも類似しているといえよう。検出し得た規模は、長さ4.00m、上幅0.20～0.42m、下幅0.10～0.27m、深さ10cmを測る。調査した範囲内では、平面形は、直線状を呈する。深度が浅いため断面形は判断しづらいが、底面が比較的平坦であり、現状では皿状を呈する。遺物は出土しなかった。



SD77
1 褐灰色土　地山ブロック少

SD78
1 褐灰色土　地山ブロック多 粘土質
2 灰色土　酸化鉄粒・マンガン粒多 粘土質

SD79
1 黒褐灰色土　白色微細粒(火山灰か)・褐色土ブロック多、炭化物粒子若干
2 黒褐灰色土　白色微細粒(火山灰)層多、酸化鉄粒多
3 灰色土　酸化鉄粒・地山ブロック多
4 黒灰色土　灰白色ブロック・酸化鉄ブロック多

SD81
1 褐色土　地山ブロック・鉄分・マンガン粒・炭化物粒子少、粘土ブロック多
2 明褐色土　地山ブロック・鉄分・マンガン粒・炭化物粒子少、粘土ブロック多
3 暗褐色土　地山ブロック・鉄分・マンガン粒少
4 灰褐色土　地山ブロック多 粘土質
5 暗灰褐色土　マンガン微量 粘土質
6 明褐色土　地山ブロック・マンガン粒多、炭化物粒子少
7 明褐色土　地山ブロック・マンガン粒多、炭化物粒子少
8 黒褐色土　地山ブロック・炭化物粒子少、マンガン粒多
9 暗褐色土　地山ブロック・炭化物粒子少、マンガン粒微量
10 暗褐色土　マンガン粒少、炭化物粒子微量
11 暗灰褐色土　マンガン粒少、炭化物粒子微量

SD84
1 明緑褐色土　地山ブロック・鉄分・マンガン粒少
2 暗褐色土　地山ブロック・粘土ブロック多、鉄分・マンガン粒少
3 灰褐褐色土　地山ブロック・粘土ブロック多、鉄分・マンガン粒少
4 明褐色土　地山ブロック・粘土ブロック多、炭化物粒子微量

第274図　第77～84号溝跡

第75号溝跡（第270・273図）

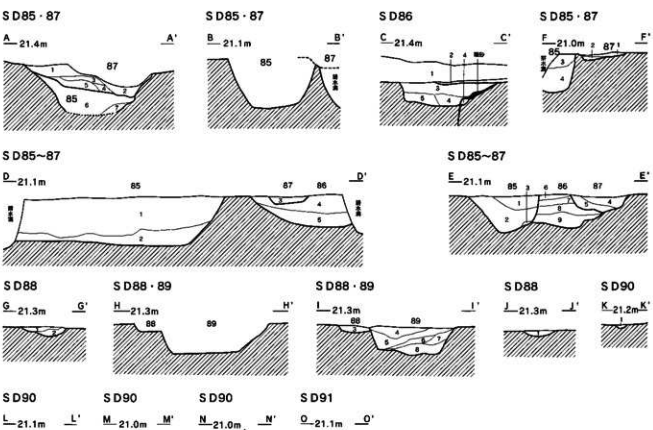
M－39・40グリッドに位置する。N-83°-Wの向きで、東西に走る。両端ともに途切れている。第71・73～76号溝跡はいずれも東西溝であり、この一帯に集中する傾向がうかがえる。これらの溝跡は、幅・深さとも類似しているといえよう。検出し得た規模は、長さ2.30m、上幅0.18～0.28m、下幅0.10～0.17m、深さ10cmを測る。調査した範囲内では、平面形は、直線状を呈する。深度がきわめて浅いため断面形は判断しづらいが、底面が比較的平坦であり、現状では皿状を呈する。遺物は出土しなかった。

第76号溝跡（第270・273図）

M・N－40グリッドに位置する。N-76°-Wの向きで、西北西から東南東に走る。両側は調査区外に続くが、東側は途切れている。第71・73～76号溝跡はいずれも東西溝であり、この一帯に集中する傾向がうかがえる。これらの溝跡は、幅・深さとも類似しているといえよう。検出し得た規模は、長さ4.75m、上幅0.70～0.95m、下幅0.55～0.65m、深さ20cmを測る。平面形は、直線状を呈する。底面は平坦であり、逆台形を呈する。遺物は出土しなかった。

第77号溝跡（第270・274図）

O－42グリッドに位置する。N-57°-Eの向きで、南西から北東に走る。両端とも調査区外に続く。2本のピットに切られている。検出し得た規模は、長さ6.00m、上幅0.42～0.53m、下幅0.12～0.30m、



SD85・87 A–A'
1 明黄灰色土 酸化鉄粒・炭化物粒子多
2 灰色土 細砂を斑状に含む
3 暗灰色土 酸化鉄粒・炭化物粒子多
4 黒灰色土 炭化物粒子少 シルト質
5 灰色土 細砂層
6 明灰色土 黒灰色土ブロック・炭化物粒子若干
7 明灰色土 青灰色土ブロック多

SD85・87 F–F'
1 灰色土 細砂層
2 黒灰色土 シルト質
3 明灰色土 黒灰色土ブロック・炭化物粒子若干
4 暗灰色土 黒灰色粒・青灰色粒・炭化物粒子多

SD86
1 灰色土 酸化鉄粒多
2 黒灰色土 火山灰ブロック(FAから若干
3 黒灰色土 青灰色粒・炭化物粒子少
4 黒灰色土 青灰色粒若干
5 黒灰色土 青灰色ブロック・炭化物粒子多

SD85~87 D–D'
1 暗灰色土 黒灰色土ブロック・炭化物粒子若干
2 暗灰色土 黒灰色粒・青灰色粒・炭化物粒子多
3 灰色土 細砂を斑状に含む
4 黒灰色土 青灰色粒・炭化物粒子少
5 黒灰色土 青灰色ブロック・炭化物粒子多

SD85~87 E–E'
1 暗灰色土 黒灰色土ブロック・炭化物粒子若干
2 暗灰色土 黒灰色粒・青灰色粒・炭化物粒子多
3 暗灰色土 青灰色ブロック少
4 灰色土 細砂を斑状に含む
5 黒灰色土 炭化物粒子少 シルト質
6 灰色土 地山粒多
7 黒灰色土 FAと思われる火山灰ブロック若干
8 黒灰色土 青灰色粒・炭化物粒子少
9 黒灰色土 青灰色ブロック・炭化物粒子多

SD88・89 G~J
1 灰色土 酸化鉄粒・白色微細粒(火山灰か)多
2 暗灰色土 酸化鉄粒・白色微細粒(火山灰か)多、地山ブロック少
3 暗灰色土 酸化鉄粒多、地山ブロック少
4 灰色土 酸化鉄粒多、火山灰と思われる白色微細粒多
5 暗灰色土 酸化鉄粒多、黒灰色土ブロック少
6 灰白色土 酸化鉄粒・灰色土粒多、地灰色土ブロック若干
7 灰色土 灰白色土ブロック多
8 暗灰色土 灰白色土ブロック多

SD90
1 灰色土 酸化鉄粒若干
2 灰色土 酸化鉄粒多
3 黒灰色土 灰色土ブロック若干
4 黒灰色土 灰色土ブロック多

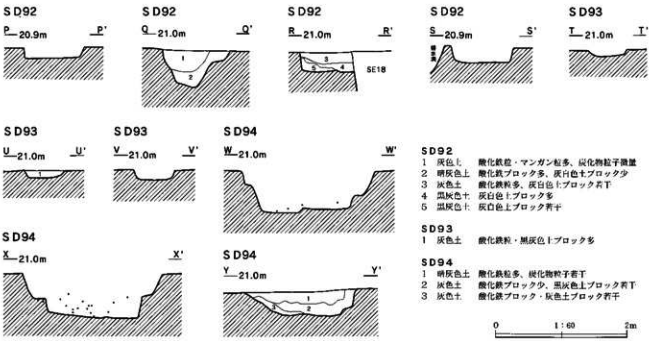
SD91
1 灰色土 酸化鉄粒多

第275図 第85~91号溝跡

深さ10~15cmを測る。調査した範囲内では、平面形は、直線状を呈する。断面形は椀状に近い。遺物は出土しなかった。

第78号溝跡（第270・274図）

O−42・43グリッドに位置する。N-81°-Wの向きで、西北西から東南東に走る。両端とも調査区外に続く。2本のピットに切られているほか、中世面から掘り込まれている第95号溝跡に切られている。また、第7号掘立柱建物跡と重複しているが、新旧関係は捉えられなかった。検出し得た規模は、長さ9.70m、上幅0.48~1.15m、下幅0.10~0.30m、深



第276図　第92～94号溝跡

さ40～65cmを測る。調査した範囲内では、平面形は、直線状を呈する。底面は比較的平坦で、断面形は逆台形を呈す。遺物は出土しなかった。

第79号溝跡（第270・274図）

O－42、P－42・43グリッドに位置する。蛇行していると思われるため溝跡の方位は確定できないが、現状ではN-78°-Eの向きと考えた。両端とも調査区外に続く。2本のピットに切られているほか、中世面から掘り込まれている第95号溝跡に切られている。また、第7号掘立柱建物跡と重複しているが、新旧関係は捉えられなかった。検出し得た規模は、長さ6.90m、上幅0.70～（1.30）m、下幅0.40～1.30m、深さ33～40cmを測る。調査した範囲内では、平面形は、直線状を呈する。底面は比較的平坦で、断面形は逆台形または皿状を呈すると思われる。遺物は出土しなかった。

第80号溝跡（第270・274図）

P－43グリッドに位置する。N-89°-Wの向きで東西に走る。両端とも途切れる。第81号溝跡に切られている。検出し得た規模は、長さ4.75m、上幅0.80～1.00m、下幅0.70～0.95m、深さ10cmを測る。調査した範囲内では、平面形は直線状を呈する。底面は平坦で皿状を呈する。遺物は出土しなかった。

第81号溝跡（第270・274図）

P・Q－43グリッドに位置する。N-2°-Eの向きで南北に走る。両端とも調査区外に続く。第80号溝跡を切るが、第83号溝跡についても切っていると思われる。検出し得た規模は、長さ8.90m、上幅0.95～1.20m、下幅0.35～0.75m、深さ53cmを測る。調査した範囲内では、平面形は直線状を呈する。底面は比較的平坦で、断面形は逆台形を呈する。遺物は出土しなかった。

第82号溝跡（第270・274図）

Q－43グリッドに位置する。N-87°-Wの向きで東西に走る。東側は調査区外に続き、西側は途切れる。検出し得た規模は、長さ1.70m、上幅0.30～0.35m、下幅0.20～0.30m、深さ20cmを測る。調査した範囲内では、平面形は、直線状を呈する。底面は

比較的平坦で、断面形は逆台形を呈する。遺物は出土しなかった。

第83号溝跡（第270・274図）

Q－43グリッドに位置する。N-85°-Wの向きで東西に走る。東側は途切れ、西側は第81号溝跡に切られるが、それ以西にはみられない。検出し得た規模は、長さ1.70m、上幅0.30～0.35m、下幅0.20～0.30m、深さ20cmを測る。調査した範囲内では、平面形は、直線状を呈する。底面は比較的平坦で、断面形は逆台形を呈する。遺物は出土しなかった。

第84号溝跡（第270・274図）

R－44グリッドに位置する。N-80°-Wの向きで東西に走る。東西ともに、調査区外に続く。検出し得た規模は、長さ1.50m、上幅0.90～1.15m、下幅0.65～0.90m、深さ23cmを測る。調査した範囲内では、平面形は直線状を呈する。底面は比較的平坦で、断面形は逆台形もしくは皿状を呈する。遺物は出土しなかった。

第85号溝跡（第271・275図）

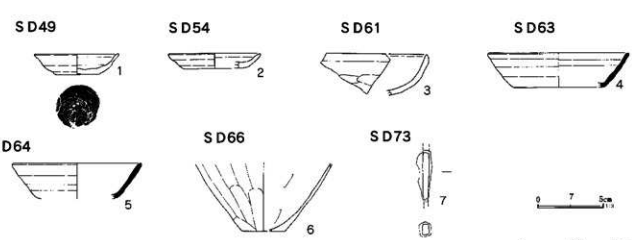
W・X－47グリッドに位置する。N-3°-Wの向きで北に走り、さらに西へほぼ直角（N-96°-W）に屈曲する。西側・南側ともに調査区外に続く。第86号溝跡を切り、第87号溝跡に切られている。検出し得た規模は、長さ14.30m、上幅0.50～1.20m、下幅0.25～0.70m、深さ55～80cmを測る。調査した範囲内では、平面形は鍵形を呈する。底面は比較的平坦で、断面形は逆台形を呈する。遺物は出土しなかった。

第86号溝跡（第271・275図）

W・X－47グリッドに位置する。N-16°-Eの向きで、北北東から南南西に走る。北側は調査区外に続くが、南側は途切れる。第85・87号溝跡に切られる。検出し得た規模は、長さ6.30m、上幅1.40～(1.70) m、下幅1.10m、深さ25cmを測る。調査した範囲内では、平面形は直線状を呈する。底面は湾曲しており、断面形は椀状に近い。遺物は出土しなかった。

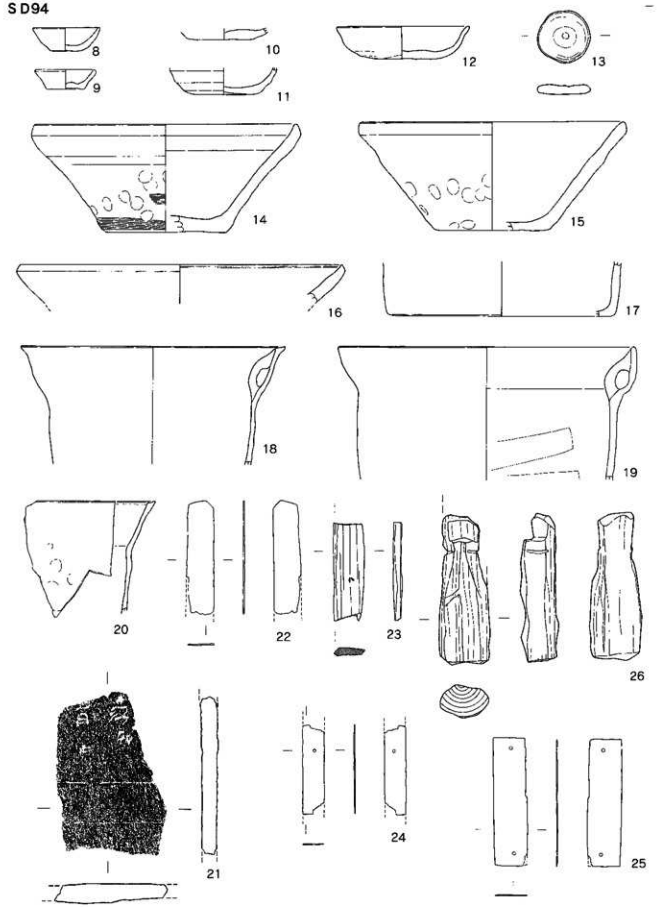
第87号溝跡（第271・275図）

W～Y－47グリッドに位置する。N-3°-Eの向きで北に走り、さらに西へほぼ直角（N-85°-W）に屈曲する。西側・南側ともに調査区外に続く。第85・86号溝跡を切っている。遺構のプランは非常にみづらく、何箇所かトレンチを入れ、土層断面に認められた壁面を結んで推定線とした。検出し得た規模は、長さ19.40m、上幅0.45～0.90m、下幅0.35～0.55m、深さ10～35cmを測る。調査した範囲内では、平面形は鍵形を呈する。底面は比較的平坦で、



第277図　溝跡出土遺物(8)

SD94



第278図　溝跡出土遺物(9)

溝跡出土遺物観察表（第277・278図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師皿	8.7	2.1	4.6	ACGHIJK	普	褐色	95	SD49
2	土師皿	(9.4)	1.6	(6.2)	ACEGHIJ	普	褐色	15	SD54
3	坏		4.2		AHIJK	良	褐色	5	SD61
4	須恵坏	(14.4)	3.5	(9.2)	AIJK	普	灰色	15	SD63
5	須恵坏	(13.3)	3.6		AIJK	普	灰色	20	SD64
6	甕		7.0	(4.4)	ACGHIJ	普	褐色	20	SD66
7	鉄釘か	現存長4.0×幅1.2×厚1.2cm							SD73　錆化著しい　両端部欠損
8	灯明皿	6.8	2.4	3.1	GH	普	白橙色	85	SD94　手捏ね　アスファルト状油脂
9	手捏ね	(6.3)	2.0	(3.8)	ACHIJK	普	褐色	40	SD94
10	坏		1.2	5.9	AHJ	普	橙褐色	85	SD94　細密
11	土師坏		2.7	6.5	AK	普	橙褐色	75	SD94　器面は荒れ　糸切痕剥落
12	坏	13.5	3.3		AH	不	明褐色	50	SD94　細密
13	土製品	4.0×4.0×0.7cm			AGH	普	白橙色	100	SD94　鏡を模造した物か　重量12.8g
14	陶器鉢	(26.6)	11.1	(12.2)	AIJK	普	黒色	20	SD94
15	陶器鉢	(26.8)	11.0	(11.8)	EGI	普	暗灰色	20	SD94
16	土錘	(12.8)	4.0		GI	普	灰色	10	SD94
17	焙烙		5.6	(23.2)	GJ	普	暗灰色	5	SD94　外面煤付着
18	内耳鍋	(26.9)	12.0		ACGIK	普	黒褐色	20	SD94　煤付着
19	内耳鍋	(30.2)	13.7		AIJK	普	暗灰色	20	SD94　外面全体に煤付着
20	土鍋		11.2		GI	普		15	SD94
21	板碑	現存長18.3×幅12.2×厚2.0cm　緑泥片岩製							SD94
22	荷札状木製品	現存長11.5×幅2.7×厚0.15cm							SD94
23	板状木製品	現存長9.9×幅3.2×厚0.8cm							SD94　墨痕有「ハ」もしくは「小」
24	荷札状木製品	現存長9.1×幅2.3×厚0.1cm　孔径0.3cm							SD94
25	荷札状木製品	現存長13.1×幅3.5×厚0.1cm　孔径0.3cm							SD94
26	棒状木製品	現存長14.4×幅5.0×厚3.4cm							SD94　工具痕の刻み目有

断面形は皿状もしくは逆台形に近い。須恵器甕の小破片が1点のみ出土したが、図化には至らなかった。

第88号溝跡（第271・275図）

X・Y－47グリッドに位置する。N-5°-Wの向きで、南北に走る。両端部ともに途切れる。第89号溝跡に切られる。検出し得た規模は、長さ12.30m、上幅0.50～0.70m、下幅0.25～0.45m、深さ8～13cmを測る。調査した範囲内では、平面形は直線状を呈する。底面は湾曲しており、断面形は皿状に近い。遺物は出土しなかった。

第89号溝跡（第271・275図）

X・Y－47・48グリッドに位置する。概ねN-10°-Eの向きで、南北に走る。北側は調査区外に続くが、南側は途切れる。第88号溝跡を切っている。第90号溝跡と重複しているが、新旧関係は捉えられなかった。規模が大きく異なることから同一遺構ではないと判断した。検出し得た規模は、長さ6.90m、上幅0.90～1.75m、下幅0.55～0.95m、深さ45cmを測る。調査した範囲内では、平面形は円弧を描いている。底面は凹凸を持つが比較的平坦であり、断面形は逆台形に近い。遺物は出土しなかった。

第90号溝跡（第271・275図）

Y・Z－48グリッドに位置する。S字状に蛇行するが、概ねN-2°-Wの向きで南北に走る。第8号井戸跡に切られている。北端部で第89号溝跡と重複しているが、新旧関係は捉えられなかった。規模が大きく異なることから同一遺構ではないと判断した。南側は途切れている。検出し得た規模は、長さ13.40m、上幅0.15～0.50m、下幅0.08～0.40m、深さ15cmを測る。底面は比較的平坦なものと、湾曲するものとがあり、断面形は椀状もしくは皿状を呈する。遺物は出土しなかった。

第91号溝跡（第271・275図）

Y・Z－47グリッドに位置する。N-73°-Eの向きで西南西から東北東に走る。西側は調査区外に続き、東側は途切れている。検出し得た規模は、長さ

1.10m、上幅0.45～0.37m、下幅0.40～0.45m、深さ10cmを測る。底面は比較的平坦であり、断面形は逆台形を呈する。遺物は出土しなかった。

第92号溝跡（第271・276図）

AA～AC－48グリッドに位置する。N-3°-Eの向きで南北に走る。北側は第11号井戸跡に切られているが、井戸の北側には認められない。南側は調査区外に続く。東側は途切れている。その他、第18・20・21・23号井戸跡にも切られている。検出し得た規模は、長さ21.00m、上幅0.80～0.37m、下幅0.60～0.70m、深さ18～55cmを測る。底面は比較的平坦であり、壁面の立ち上がりは急である。断面形は、長方形を呈する。遺物は出土しなかった。

第93号溝跡（第271・276図）

AC－48・49グリッドに位置する。N-88°-Eの向きで東西に走る。東側は調査区外に続くが、西側は途切れている。検出し得た規模は、長さ9.30m、上幅0.50～0.65m、下幅0.30～0.50m、深さ10～15cmを測る。底面は比較的平坦であり、断面形は逆台形を呈する。遺物は出土しなかった。

第94号溝跡（第271・276・278図）

AC－48・49グリッドに位置する。N-78°-Eの向きと考えた。両端とも調査区外に続く。1本のピットに切られているほか、中世面から掘り込まれている第95号溝跡に切られている。また、第7号掘立柱建物跡と重複しているが、新旧関係は捉えられなかった。検出し得た規模は、長さ6.90m、上幅0.70～(1.30) m、下幅0.40～1.30m、深さ33～40cmを測る。調査した範囲内では、平面形は直線状を呈する。底面は比較的平坦で、断面形は逆台形または皿状を呈すると思われる。出土した遺物の内、図化し得たのは19点である。

（d）掘立柱建物跡

一面で検出された掘立柱建物跡は、A区・B区から各1棟の、計2棟である。

第6号掘立柱建物跡(第279図)

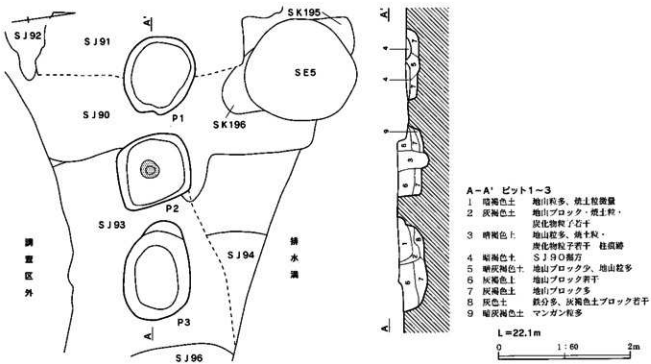
J－36グリッドに位置する。A区の東端部に相当する。調査区出入り口から、調査区内に降りるために設けたスロープの脇に当っており、きわめて幅の狭い範囲内での検出であった。第90·91·93号住居跡に切られている。

本遺構は、柱穴3本＝2間分のみの検出である。東側・西側ともに柱穴は確認されなかった。東西方向は2間とも考えられるが、各柱穴の深度が浅いことから、柱穴が消滅している可能性もある。南北方向も、柱穴は検出されていない。1方向のみの検出ではあるが、柱穴掘方の規模から、構列ではなく掘立柱建物跡と判断した。

規模は東西3.60m、軸方位はN-82°-Wである。柱間寸法は、P1－P2間が1.80m、P2－P3間も1.80mである。南北方向もこの柱間寸法であれば、P1·P3のいずれかが隅柱の場合、柱穴の北または南に柱穴が検出できることになるが、実際には見当たらない。南北方向の柱間寸法は1.80m以上であれば、この東西軸は梁行である可能性が考えられる。

柱穴の長径×短径×深さは、P1が1.03×1.20×0.35m、P2が1.03×1.10×0.45m、P3が1.00×1.34×0.45mを測る。柱穴の掘方は、P1では隅丸方形というよりむしろ不整円形に近い。それに対して、P2は方形、P3は長方形を意識していると考えられる。底面は概ね平坦であるが、P1・P2の柱部分は、ピット状に窪んでおり、柱材の沈降によるものと考えられる。

P1の5層、P2の3層は柱痕である。柱穴埋土は、地山ブロックを比較的多く含んだ締状を呈し、硬く締まっている。柱穴内から、土師器坏・甕の小破片が多数出土したが、図化し得るものはなかった。



第279図　第6号掘立柱建物跡

第7号掘立柱建物跡(第280図)

O・P－42グリッドに位置する。第77·78号溝跡と重複するが、新旧関係は把握できなかった。これらの溝跡以外に、何本かのピットが存在するのみであり、周辺には遺構はほとんど確認されていない。これらの、重複するピットとの新旧関係についても、把握することはできなかった。

本遺構は、1×2間の側柱建物で、規模は桁行長5.50m、梁行長2.10m、床面積11.55㎡である。主軸方向はN-1°-Eで、正確な南北軸をもつ。

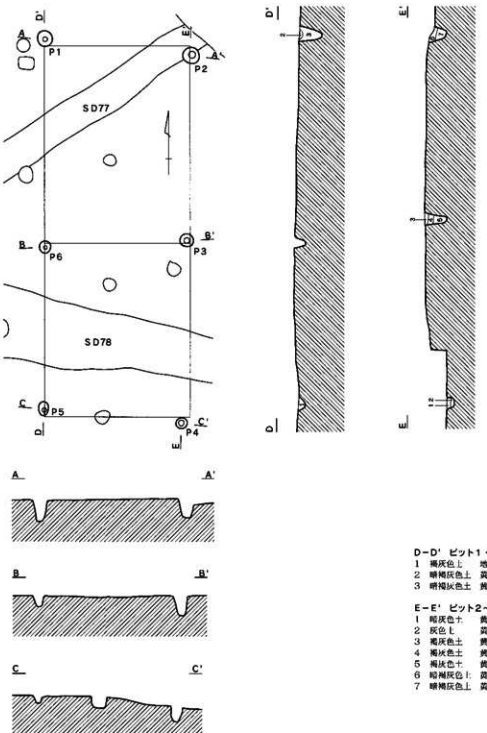
柱間は、桁行でP2－P3間2.80m、P3－P4間2.70m、P5－P6間2.50m、P6－P1間3.20m、梁行はP1－P2間2.20m、P3－P6間2.20mP4－P5間2.10mを測る。柱間は不揃いで、柱筋の通りも良くないといえる。

柱穴の平面形は、円形もしくは楕円形であり、断面形はU字形を呈する小規模なピット状のものである。柱穴の径×深さは、P1が0.26×0.21×0.35m、P2が0.25×0.23×0.28m、P3が0.20×0.18×0.35m、P4が0.18×0.18×0.48m、P5が0.15×0.21×0.10m、P6が0.17×0.20×0.18mを測る。

柱穴の平面規模は大差がないが、深さはまちまちである。P1では、柱痕跡が認められた。柱穴は掘方をもたず、打ち込み式のものと思われる。

柱穴の覆土は、基本的に褐灰色を呈する地山起源の土で、部分的に炭化物粒子含み、締まりは弱いものであった。

本遺構の1.2m南側と7m東側にある南北方向に走る第79·81号溝跡との関連性については、判断材料を得ることはできなかった。本遺構に伴うと思われる遺物は、出土しなかった。



D－D' ピット1・5
1 褐灰色土　地山ブロック多、焼土粒若干
2 暗褐灰色土　黄褐灰色土粒若干、炭化物粒子微量
3 暗褐灰色土　黄褐灰色土ブロック多

E－E' ピット2～4
1 暗灰色土　黄褐色土粒多、炭化物粒子若干
2 灰色土　黄褐色土粒多
3 褐灰色土　黄褐色土粒多
4 褐灰色土　黄褐色土粒多、炭化物粒子若干
5 褐灰色土　黄褐色土粒若干
6 暗褐灰色土　黄褐色土粒・炭化物粒子若干
7 暗褐灰色土　黄褐色土粒・ブロック多、焼土粒微量

L=22.0m
0　1:60　2m

第280図　第7号掘立柱建物跡

（e）井戸跡

検出された井戸跡は、A区5基、B区1基、C区19基の計25基である。以下、A区から順次記述していく。

第1号井戸跡(第281・285図)

G－29グリッドに位置する。第31号住居跡・第47号溝跡を切る。開口部の径は、1.90×2.38mで平面形は楕円形を呈する。深さ1.10mまで掘り下げたが調査時の安全確保のため、底面には達していない。最下面での径は、1.60×2.00mで平面形は楕円形を呈する。壁面は、ほぼ垂直に立ち上がる。発掘調査時には、多くはないものの湧水がみられ、常時2インチの水中ポンプを必要とした。出土した遺物の内、図化し得たのは2点である。

第2号井戸跡(第281図)

H－29グリッドに位置する。重複する遺構はとくにはない。開口部の径と深さは、0.93×1.02×1.32mで平面形はほぼ円形を呈する。底面の径は、0.68×0.75mで平面形はほぼ円形を呈する。底面は平坦で、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。発掘調査時には、多くはないものの湧水がみられ、常時2インチの水中ポンプを必要とした。土師器の坏の破片が少数流れ込んでいたが、図化し得るものはなかった。

第3号井戸跡(第281・285図)

H－30グリッドに位置する。第115号土壙を切り、第114号土壙には切られていると思われる。開口部の径と深さは、1.15×1.35×1.30mで平面形は楕円形を呈する。底面の径は、0.45×0.66mを測り、平面形はほぼ円形を呈する。底面は平坦で、壁面はやや開きながら直線的に立ち上がる。壁面が開くのは、崩落が要因と推定される。発掘調査時には、多くはないものの湧水がみられ、常時2インチの水中ポンプを必要とした。出土した遺物の内、図化し得たのは5点で、いずれも鉄製品である。

第4号井戸跡(第281図)

J－35グリッドに位置する。重複する遺構はとくにはない。開口部の径は、1.38×1.40mで平面形はほぼ円形を呈する。深さ1.75mまで掘り下げたが調査時の安全確保のため、底面には達していない。調査した範囲内での最下面での径は、1.05×0.85mで平面形は楕円形を呈する。壁面は、僅かに開きながら立ち上がるが、これは壁面の崩落が要因と推定される。発掘調査時には、多くはないものの湧水がみられ、常時2インチの水中ポンプを必要とした。遺物は出土しなかった。

第5号井戸跡(第281図)

J－36グリッドに位置する。第90号住居跡・第195・196号土壙を切っている。開口部の径と深さは、1.60×1.65×2.28mで、平面形はほぼ円形を呈する。底面での径は、0.66×0.68mで平面形は円形を呈し、概ね平坦である。壁面は、上半部が開くロート状であるが、これは本来の形状というよりも、壁面の崩落が要因と推定される。発掘調査時には、多くはないものの湧水がみられ、常時2インチの水中ポンプを必要とした。遺物は出土しなかった。

第6号井戸跡(第281図)

L－39グリッドに位置する。B区に位置する唯一の井戸跡である。第70号溝跡を切っている。開口部の径は、1.36×1.60mで平面形は楕円形を呈する。深さ1.35mまで掘り下げたが調査時の安全確保のため、底面には達していない。調査した範囲内での最下面での径は、(1.13)×1.35mで平面形は楕円形を呈する。壁面は、僅かに開きながら立ち上がるが、これは壁面の崩落が要因と推定される。発掘調

査時には、多くはないものの湧水がみられ、常時2インチの水中ポンプを必要とした。遺物は出土しなかった。

第7号井戸跡(第282図)

Z－48グリッドに位置する。第7号井戸跡～第23号井戸跡の17基の井戸跡は、南北25mの範囲内において検出されたものである。重複する遺構は特にはない。開口部の径は、1.73×1.63mで平面形はほぼ円形を呈する。深さ1.20mまで掘り下げたが調査時の安全確保のため、底面には達していない。調査した範囲内での最下面での径は、0.75×1.85mで平面形はほぼ円形を呈する。壁面は、概ね垂直に上がる。発掘調査時には、多くはないものの湧水がみられ、常時2インチの水中ポンプを必要とした。カワラケと陶磁器の破片が、ごく少数出土したが、図化し得るものはなかった。

第8号井戸跡(第282・286図)

Z－48グリッドに位置する。第90号溝跡を切っている。開口部の径は、1.48×1.60mで平面形は不整楕円形を呈する。深さ1.12mまで掘り下げたが調査時の安全確保のため、底面には達していない。断面形はロート状を呈するが、この屈曲点での径は、0.95×0.97mであり、調査した範囲内での最下面での径は、0.78×0.90mで平面形はほぼ円形を呈する。発掘調査時には、多くはないものの湧水がみられ、常時2インチの水中ポンプを必要とした。出土した遺物の内、図化し得たのは5点である。

開口部から50cm程の位置から、板碑の破片が表面を上にした状態で出土した。法量は現存長21.3cm、最大幅32.3cm、厚さ2.0cmである。

第9号井戸跡(第282・286図)

Z－48グリッドに位置する。第90号溝跡を切っている。開口部の径は、0.88×0.90mで平面形は円形を呈する。深さ1.05mまで掘り下げたが調査時の安全確保のため、底面には達していない。調査した範囲内での最下面での径は、0.78×0.80mで平面形はほぼ円形を呈し、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。発掘調査時には、多くはないものの湧水がみられ、常時2インチの水中ポンプを必要とした。出土した遺物の内、図化し得たのは1点である。

第10号井戸跡(第282図)

Z－48グリッドに位置する。遺構の東半分は、調査区外に続く。開口部の径は、(1.80) ×1.90mで平面形は円形を呈すると推定される。深さ1.35mまで掘り下げたが調査時の安全確保のため、底面には達していない。断面形はロート状を呈すると思われるが、この屈曲点での径は、0.95×0.97mであり、調査した範囲内での最下面での径は、(1.05) ×1.45mで平面形はほぼ円形を呈すると思われる。ロート状の断面には、部分的に段がみられるが、これは壁面の崩落が関連していると考えられる。発掘調査時には、多くはないものの湧水がみられ、常時2インチの水中ポンプを必要とした。常滑産の大甕の破片がごく少数出土したが、図化し得るものはなかった。

第11号井戸跡(第282・286図)

Z－48グリッドに位置する。第92号溝跡を切っていると思われる。第12号井戸跡に切られている。開口部の径と深さは、1.65×1.95×0.88mで、平面形はほぼ円形を呈する。深度はきわめて浅いが、水溜めと思われる窪みが検出されていることから、底面であると判断した。断面形はロート状に近い。上半部の下径は、1.65×1.80mのほぼ円形を呈する。水溜めの上径は0.90×1.13mの長楕円形、下径は0.50×0.55mで円形を呈する。水溜めの底面はほぼ平坦である。発掘調査時には、多くはないものの湧水がみられた。出土した遺物の内、図化し得たのは1点である。

第12号井戸跡(第282図)

Z－48グリッドに位置する。第11号井戸跡を切っている。開口部の径と深さは、1.90×1.93×0.75mで、平面形はほぼ円形を呈する。深度はきわめて浅いが、水溜めと思われる窪みが検出されていることから、底面であると判断した。底面は、水溜め以外の部分は平坦である。上半部の下径は1.75×1.82mの楕円形を呈する。水溜めの上径は0.70×0.70m、下径は0.25×0.28mで各々楕円形を呈する。水溜めの底面は椀状を呈する。発掘調査時には、多くはないものの湧水がみられた。常滑産の大甕の破片がごく少数出土したが、図化には至らなかった。

第13号井戸跡(第283図)

AA－47・48グリッドに位置する。開口部の径と深さは、0.62×0.68×0.75mで、平面形は円形を呈する。底径は0.85×0.85mのほぼ円形を呈する。壁面は、底面付近からオーバーハングして袋状を呈しているが、これは井戸内の水位の上下に伴う崩落が要因であると考えられる。発掘調査時には、多くはないものの湧水がみられた。遺物は出土しなかった。

第14号井戸跡(第283・286図)

AA－48グリッドに位置する。開口部の径は、1.73×1.90mで平面形は楕円形を呈する。深さ1.13mまで掘り下げたが調査時の安全確保のため、底面には達していない。調査した範囲内での最下面での径は、1.45×1.73mで平面形はほぼ楕円形を呈し、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。発掘調査時には、多くはないものの湧水がみられ、常時2インチの水中ポンプを必要とした。出土した遺物の内、図化し得たのは1点である。

第15号井戸跡(第283図)

AA－48グリッドに位置する。開口部の径は、1.75×1.75mで平面形は楕円形を呈する。深さ1.25mまで掘り下げたが調査時の安全確保のため、底面には達していない。調査した範囲内での最下面での径は、1.55×1.75mで平面形はほぼ円形を呈し、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。発掘調査時には、多くはないものの湧水がみられ、常時2インチの水中ポンプを必要とした。遺物は出土しなかった。

第16号井戸跡(第283図)

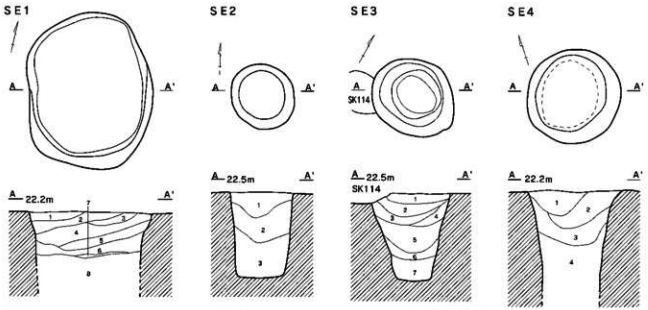
AA－48グリッドに位置する。開口部の径は、1.00×1.15mで平面形は楕円形を呈する。深さ1.10mまで掘り下げたが調査時の安全確保のため、底面には達していない。調査した範囲内での最下面での径は、0.90×1.05mで平面形はほぼ円形を呈し、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。発掘調査時には、多くはないものの湧水がみられた。遺物は出土しなかった。

第17号井戸跡(第283図)

AA－47グリッドに位置する。調査区の壁面において検出されたため、一部拡幅して規模を確定した。開口部の径は、0.85×0.88mで平面形は円形を呈する。排水溝と重複しているため、それよりも深く掘ることができず、1.12mまでの調査である。調査した範囲内での最下面での径は、0.65×0.77mで平面形はほぼ円形を呈する。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。壁面がやや広がるのは、崩落によるものと思われる。4層は、植物の腐食土層である。発掘調査時には、多くはないものの湧水がみられた。遺物は出土しなかった。

第18号井戸跡(第283図)

AA・AB－48グリッドに位置する。第92号溝跡を切っている。開口部の径は、1.08×1.26mで平面形は楕円形を呈する。深さ1.03mまで掘り下げたが調査時の安全確保のため、底面には達していない。調査した範囲内での最下面での径は、0.85×1.00mで、平面形は楕円形を呈する。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。壁面がやや広がるのは、崩落によるもの

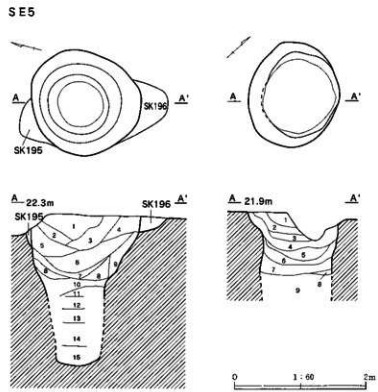


SE1
1 黒褐色土 粘土粒多
2 黒褐色土 地山ブロック若干
3 黒褐色土 地山ブロック(1～3cm)多
4 暗褐色土 地山ブロック(0.5～1cm)若干
5 黒褐色土 地山ブロック(0.5～1cm)少、焼土ブロック(0.5～1cm)・炭化物ブロック(0.5～1cm)やや多
6 暗褐色土 粘土ブロック(1～4cm)・炭化物ブロック少
7 黒色土 炭化物粒子を主とする層
8 暗褐色土 粘土ブロック(1～2cm)少

SE2
1 褐色土 炭化物粒子少
2 黄褐色土 黄色土ブロック多
3 褐色土 黄色土ブロック 粘性強

SE3
1 黒褐色土 黄褐色土粒子・炭化物粒子少
2 黒褐色土 黄褐色土ブロック(2～3cm)・炭化物粒子・焼土粒(3～5mm)多
3 黄褐色土 黄褐色土ブロック(2～3cm)多、炭化物粒子・焼土粒少
4 黒褐色土 黄褐色土ブロック(5～6cm)少、炭化物粒子多
5 黒灰色土 黄褐色土ブロック(4～5cm)・焼土粒少 泥炭状の堆積土
6 黄褐色土 黄褐色シルトを基調とする層
7 黒色土 褐色土ブロック(4～5cm)少 泥炭状

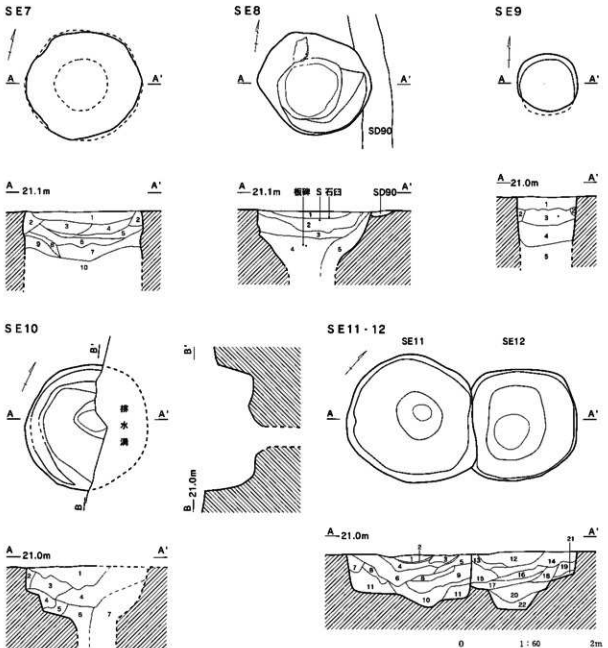
SE4
1 暗褐色土 白色粘土多
2 暗褐色土 白色粘土少
3 暗褐色土 鉄分やや多
4 暗褐色土 鉄分やや多 しまり弱



SE5
1 暗灰褐色土 地山粒多、焼土粒・炭化物粒子少
2 暗灰褐色土 地山ブロック少、焼土粒多
3 暗灰褐色土 地山粒多、焼土粒若干 腐食土を帯状に含む
4 灰褐色土 地山粒・焼土粒若干
5 灰褐色土 地山ブロック多
6 灰褐色土 灰色粘土ブロック多
7 灰色土 酸化鉄ブロック多
8 黒灰褐色土 地山ブロック多
9 灰色土 地山ブロック・酸化鉄粒多 しまり弱
10 暗灰色土 酸化鉄粒・酸化鉄ブロック多
11 暗灰色土 10層の酸化鉄化が激しい部分
12 青灰色土 酸化鉄粒多 粘土質
13 黒灰色土 白色粘土ブロック(2～3cm)少
14 青灰色土 青灰色粘土ブロック(10cm)多
15 黒灰色土 白色粘土ブロック(2～3cm)少

SE6
1 褐灰色土 灰色土粒・マンガン粒多
2 灰色土 褐色土粒・ブロック多、炭化物粒子若干
3 灰色土 褐色土粒多、炭化物粒子若干
4 暗灰色土 褐色土ブロック多 焼土粒・炭化物粒子若干
5 黒褐色土 炭化物層中に褐灰色土粒・ブロック多
6 暗灰色土 焼土ブロック・炭化物ブロック多
7 灰色土 酸化鉄ブロック多、炭化物粒子若干
8 黒褐色土 炭化物層中に灰色土粒少
9 暗灰色土 焼土ブロック・炭化物ブロック少

第281図 第1～6号井戸跡



SE7

1	灰色土	酸化鉄粒多
2	黒灰色土	地山粒混
3	暗灰色土	酸化鉄粒多、炭化物粒子微量
4	灰色土	酸化鉄粒多
5	灰色土	炭化物粒子多
6	明灰色土	黒灰色土ブロック・ 炭化物粒子多
7	暗灰色土	黒灰色土ブロック多
8	黒灰色土	青灰色土ブロック少
9	青灰色土	黒灰色土ブロック若干
10	黒灰色土	青灰色土ブロック多

SE8

1	灰褐色土	酸化鉄粒若干
2	灰褐色土	酸化鉄粒・ 浅黄A粒石と思われる白色微細粒多
3	暗灰色土	灰色土ブロック多
4	明灰色土	黒灰色土ブロック多、 青灰色土ブロック若干
5	黒灰色土	青灰色土ブロック多

SE9

1	灰褐色土	地山粒・鉄滓多
2	灰褐色土	地山ブロック極多
3	暗青灰色土	地山粒・炭化物粒子少
4	暗青灰色土	黒色土ブロック多
5	暗青灰色土	黒色土ブロック少

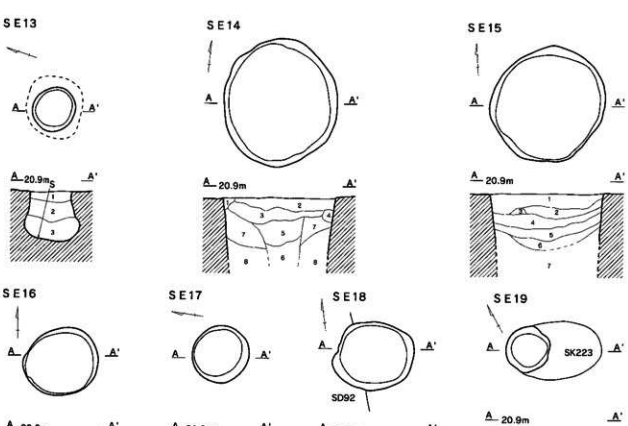
SE10

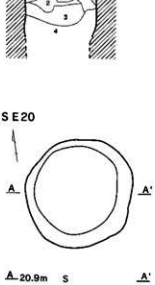
1	灰褐色土	地山ブロック多、浅黄A粒若少
2	灰褐色土	地山ブロック主体とする層
3	暗黒褐色土	地山粒・炭化物粒子少
4	暗青灰色土	地山ブロック・浅黄A粒石少
5	黒色土	地山ブロック少
6	暗青灰色土	地山ブロック・ 黒色土ブロック多
7	黒灰色土	地山ブロック多

SE11・12

1	灰褐色土	鉄滓多
2	黒褐色土	炭化物層中に地山粒少
3	灰褐色土	地山ブロック多
4	明褐色土	炭化物粒子多
5	暗灰褐色土	地山ブロック少
6	暗灰褐色土	地山ブロック・鉄滓多
7	暗褐色土	地山粒子少
8	明灰褐色土	地山ブロック・ 炭化物粒子少
9	暗青灰色土	古灰色土ブロック多
10	明青灰色土	青灰色土ブロック少
11	明灰褐色土	黒灰色土ブロック少
12	灰褐色土	地山ブロック多
13	灰褐色土	鉄滓少 砂質
14	灰白色土	地山ブロック多
15	暗灰褐色土	地山ブロック多
16	暗青灰色土	地山ブロック多 砂質
17	明青灰色土	黒色土ブロック多、 炭化物粒子少
18	明灰褐色土	地山ブロック少
19	灰黒褐色土	黒色土ブロック多
20	暗青灰色土	黒色土ブロック少
21	明青灰色土	黒色土ブロック少
22	明青灰色土	黒色土ブロック多

第282図　第7～12号井戸跡





SE13
1 灰褐色土　鉄斑多
2 暗灰褐色土　炭化物粒子・鉄斑少
3 暗緑灰褐色土　鉄斑少

SE14
1 暗褐色土　炭化物粒子・鉄斑少
2 灰褐色土　地山ブロック・鉄斑多、炭化物粒子・炭化物粒子少
3 灰褐色土　地山粒・炭化物粒子少
4 黄灰褐色土　地山ブロック極多
5 暗青灰色土　地山ブロック・炭化物粒子少
6 暗青灰色土　地山ブロック少
7 明青灰色土　黒色土ブロック少　粘土質
8 明青灰色土　黒色土ブロック少　粘土質

SE15
1 灰褐色土　地山粒・鉄斑多、炭化物粒子少
2 暗緑灰褐色土　地山粒多
3 黒褐色土　地山粒少
4 明青灰色土　炭化物粒子少
5 青灰色土　地山粒少
6 黒灰褐色土　地山ブロック少
7 暗青灰色土　地山ブロック多

SE16
I 暗灰褐色土　鉄斑多（FA火山灰ブロックを含む　暗褐色土層との漸移層）　粘土質
II 灰黄褐色土　鉄斑多、全体的にオレンジ色帯びる（地下水中の鉄分・マンガンの影響によるものと思われる）　粘土質
1 灰色土　酸化鉄粒多
2 暗灰色土　青灰色土粒少
3 暗灰色土　青灰色土ブロック・黒色土ブロック・炭化物ブロック少
4 暗灰色土　青灰色土ブロック多

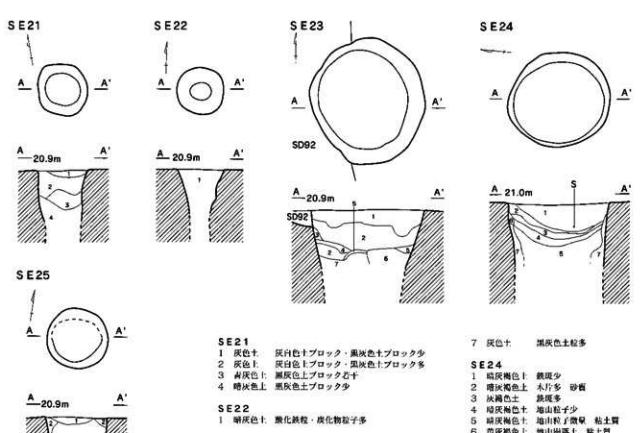
SE17
I 暗灰褐色土　鉄斑多　粘土質
I 灰色土　酸化鉄粒多　しまり弱
2 黒灰色土　灰白色土粒・ブロック若干
3 黒灰色土　灰白色土粒・ブロック若干
4 黒褐色土　炭化物層中に植物の腐食土層
5 暗灰色土　酸化鉄ブロック少
6 暗灰色土　炭化物粒子（腐食土）多
7 暗灰色土　酸化鉄粒若干　しまり弱
8 黒灰色土　青灰色土ブロック多

SE18
I 灰色土　酸化鉄粒多
2 暗灰色土　白色土ブロック・黒色土ブロック若干
3 暗灰色土　青灰色土ブロック少、炭化物粒子若干
4 黒灰色土　青灰色土粒・炭化物粒子少
5 青灰色土　黒灰色土ブロック若干

SE19
I 黒灰色土　灰色土ブロック少

SE20
1 暗灰色土　酸化鉄粒多
2 暗灰色土　酸化鉄粒多、炭化物粒子若干
3 暗灰色土　酸化鉄粒・灰色土ブロック多
4 暗灰色土　酸化鉄粒多、炭化物粒子・灰色土ブロック微量
5 暗灰色土　黒灰色土ブロック多

第283図　第13～20号井戸跡



第284図 第21～25号井戸跡

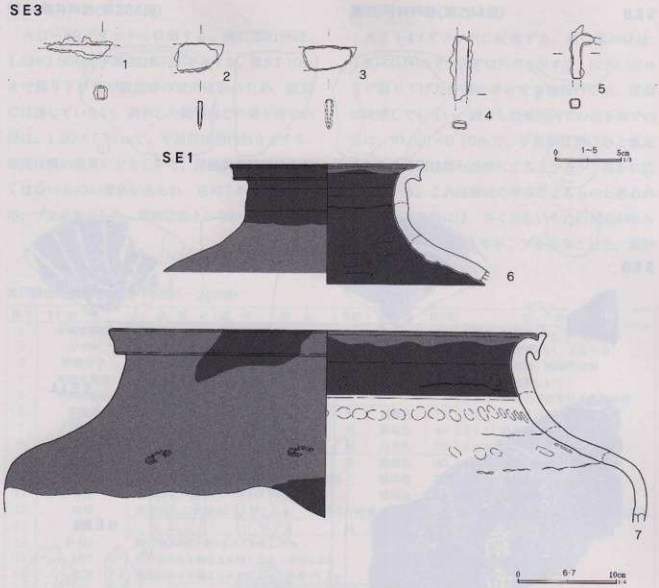
と思われる。発掘調査時には、多くはないものの湧水がみられ、常時2インチの水中ポンプを必要とした。遺物は出土しなかった。

第19号井戸跡(第283図)

AB－48グリッドに位置する。第223号土壙に切られている。開口部の径は、0.66×0.70mで平面形は不整円形を呈する。深さ1.25mまで掘り下げたが調査時の安全確保のため、底面には達していない。調査した範囲内での最下面での径は、0.50×0.55mで、平面形は楕円形を呈する。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。発掘調査時には、多くはないものの湧水がみられ、常時2インチの水中ポンプを必要とした。遺物は出土しなかった。

第20号井戸跡(第283・286図16)

AB－48グリッドに位置する。第92号溝跡を切っている。開口部の径は、1.55×1.70mで平面形はほぼ円形を呈する。深さ1.65mまで掘り下げたが調査時の安全確保のため、底面には達していない。調査した範囲内での最下面での径は、1.23×1.33mで、平面形は楕円形を呈する。壁面はほぼ垂直に立ち上がるが、開口部付近からやや広がっており、これは崩落によるものと考えられる。発掘調査時には、多くはないものの湧水がみられ、常時2インチの水中ポンプを必要とした。出土した遺物の内、図化し得たのは1点である。



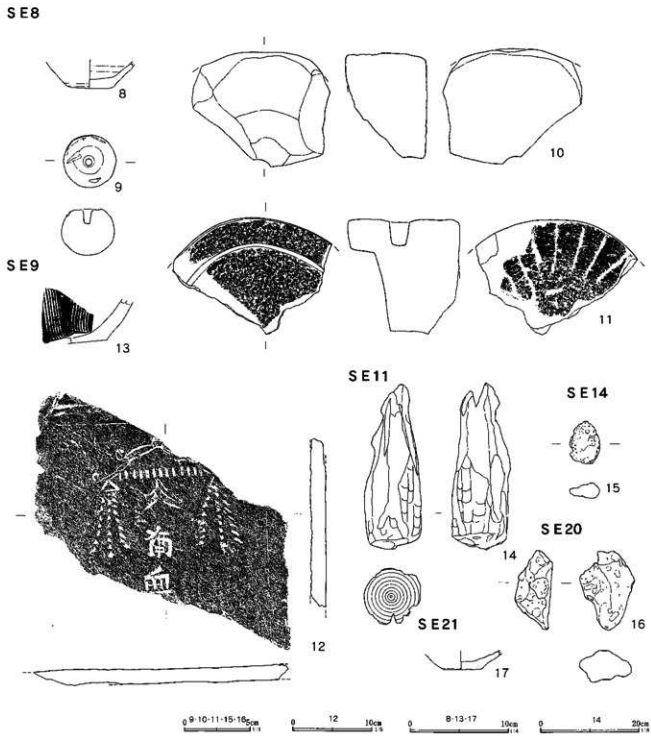
第285図　井戸跡出土遺物(1)

第21号井戸跡(第284・286図17)

ＡＢ－48グリッドに位置する。第92号溝跡を切っている。開口部の径は、0.75×0.85mで平面形はほぼ円形を呈する。深さ1.08mまで掘り下げたが調査時の安全確保のため、底面には達していない。調査した範囲内での最下面での径は、0.50×0.53mで、平面形は楕円形を呈する。壁面はほぼ垂直に立ち上がるが、部分的に崩落によって湾曲している。発掘調査時には、多くはないものの湧水がみられ、常時2インチの水中ポンプを必要とした。出土した遺物の内、図化し得た遺物は1点である。

第22号井戸跡(第284図)

ＡＢ－48グリッドに位置する。開口部の径は、0.73×0.75mで平面形はほぼ円形を呈する。深さ1.10mまで掘り下げたが調査時の安全確保のため、底面には達していない。調査した範囲内での最下面での径は、0.25×0.33mで、平面形は楕円形を呈する。壁面は開きながら立ち上がるが、これは崩落によるものと考えられる。発掘調査時には、多くはないものの湧水がみられ、常時2インチの水中ポンプを必要とした。遺物は出土しなかった。



第286図　井戸跡出土遺物(2)

第23号井戸跡(第284図)

ＡＢ－48グリッドに位置する。第92号溝跡を切っている。開口部の径は、1.70×1.85mで平面形は不整円形を呈する。深さ1.38mまで掘り下げたが調査時の安全確保のため、底面には達していない。調査した範囲内での最下面での径は、1.33×1.52mで、平面形は楕円形を呈する。壁面は開きながら立ち上がるが、これは崩落によるものと考えられる。発掘調査時には、多くはないものの湧水がみられ、常時2インチの水中ポンプを必要とした。遺物は出土しなかった。

第24号井戸跡(第284図)

ＡＤ－49グリッドに位置する。開口部の径は、1.43×1.60mで平面形は楕円形を呈する。深さ1.10mまで掘り下げたが調査時の安全確保のため、底面には達していない。調査した範囲内での最下面での径は、1.20×1.37mで、平面形は楕円形を呈する。壁面は概ね垂直に立ち上がる。発掘調査時には、多くはないものの湧水がみられ、常時2インチの水中ポンプを必要とした。遺物は出土しなかった。

第25号井戸跡(第284図)

ＡＥ－49グリッドに位置する。開口部の径は、0.90×0.90mで平面形は円形を呈する。深さ1.02mまで掘り下げたが調査時の安全確保のため、底面には達していない。調査した範囲内での最下面での径は、(0.63)×0.75mで、平面形は楕円形と推定される。壁面は概ね垂直に立ち上がるが、僅かに広がっている。これは壁面の崩落によるものと思われる。発掘調査時には、多くはないものの湧水がみられ、常時2インチの水中ポンプを必要とした。遺物は出土しなかった。

井戸跡出土遺物観察表（第285・286図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	不明鉄製品	現存長5.0×幅1.7×厚1.1cm							SE3 錆化著しい 両端部欠損
2	刀子か	現存長3.3×幅2.1×厚0.3cm							SE3 錆化著しい 又は小刀
3	鉄製刀子	現存長3.8×幅1.9×厚0.6cm							SE3 全面錆 両端部欠損
4	不明鉄製品	現存長9.9×幅1.7×厚0.6cm							SE3 錆化著しい
5	不明鉄製品	現存長4.1×幅1.8×厚0.8cm							SE3 カギの手状を呈す 全面錆
6	常滑甕	(19.8)	12.1		GI	普	茶褐色	15	SE1 茶褐色自然釉部分薄緑色
7	甕	(44.3)	19.2		GI	良	茶褐色	40	SE1 茶褐色・緑(自然釉)
8	土師坏か		2.9	4.7	CHIJK	普	白橙色	65	SE8
9	土玉	4.0×3.9×3.5 孔径0.5			AIJ	普	橙褐色	90	SE8 重量72.8g 未製品か
10	石臼	径13.7×幅17.5×厚10.3cm 安山岩製					暗灰色	25	SE8 下面煤付着 上臼
11	石臼	径(28.4)×幅14.3×厚(14.9)cm					暗灰色	25	SE8 敲打痕多
12	板碑	現存長21.3×幅32.3×厚2.0cm 緑泥片岩製							SE8「大歳一部遺存 南無阿弥陀仏」
13	擂鉢				AIJ	良	暗灰色	5	SE9
14	柱材か	現存長34.0×幅11.4×厚11.4cm							SE11 工具痕多
15	鉄滓	現存長3.1×幅2.4×厚1.2cm 重量3.4g					黒灰色		SE14
16	鉄滓	現存長6.1×幅4.2×厚2.4cm 重量35.2g					灰褐色		SE20
17	坏		1.9	3.9	ACHIJ	普	白橙色	75	SE21 酸化炎

(f) ピット

ここでピットとして扱ったのは、土壙としては扱わず、掘立柱建物跡や柵列の柱穴となった遺構を除いたものである。土壙との区分も明確なものではなく、概ね平面規模が50×50cm以下の小穴をピットとした。

この中には、柱材や明瞭な柱痕が認められるものもあり、掘立柱建物跡や柵列の存在を想定して、周辺のピットとの位置関係や並びを検討した。

しかし結果的に、そのどちらとも結論づけられなかった例も少なからずあった。

検出されたピットは、A区402本、B区84本、C区5本の、計491本である。

第9表　ピット一覧表(1)

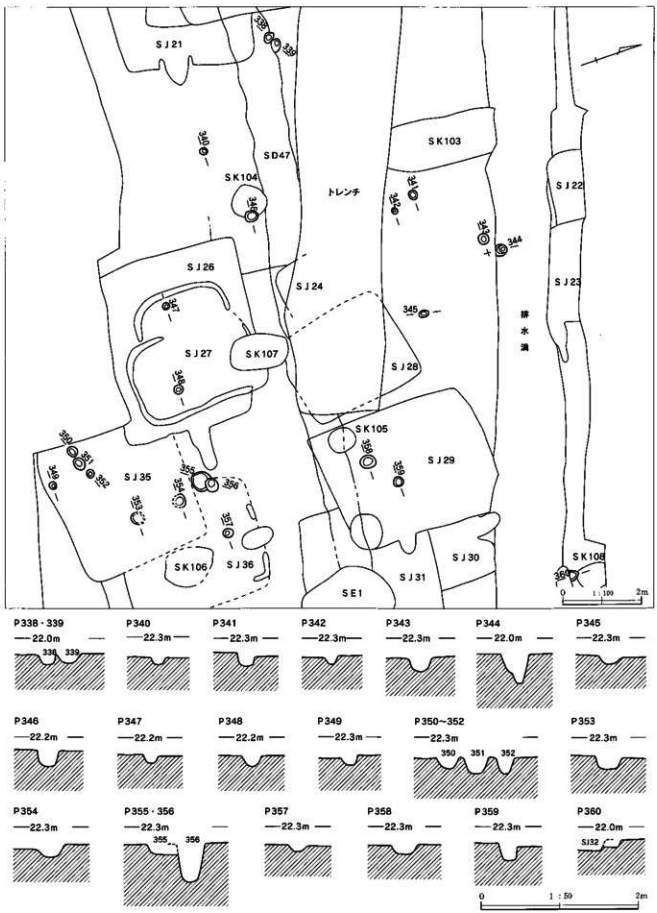
番号	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	番号	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	番号	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	番号	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)
338	32	22	12	343	25		17	348	25		13	353	(35)		14
339	35	25	10	344	30	30	37	349	20		12	354	(35)		15
340	20		8	345	25	18	10	350	28	25	13	355	50	35	13
341	(25)	21	16	346	35	25	20	351	35	25	20	356	35		48
342	18	15	10	347	20		11	352	20		20	357	25		8

第10表　ピット一覧表(2)

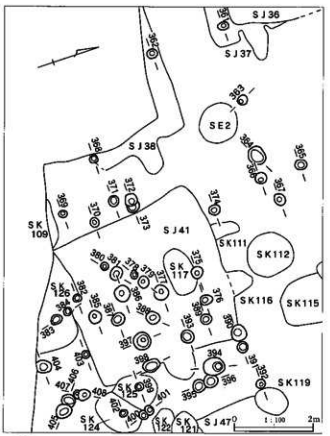
番号	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	番号	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	番号	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	番号	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)
358	40	35	10	417	25	20	7	476	38	32	10	536	20		21
359	25		22	418	45	40	31	477	38		12	537	30	28	53
360	30	25	10	419	45	35	17	478	28	22	8	538	40	30	40
361	30	20	13	420	35	28	13	479	42	38	16	539	40	30	15
362	28		11	421	25		15	480	32	28	16	540	25		16
363	28	25	38	422	40	32	32	481	40	30	12	541	25	22	18
364	48	40	9	423	50	45	14	482	40	28	4	542	20	20	10
365	30	25	8	424	32	16	4	483	38	28	15	543	25		10
366	28		21	425	30	20	13	484	32	22	6	544	40	35	40
367	31	28	12	426	30	28	10	485	20	20	31	545	20		16
368	22		16	427	50		15	486	28		29	546	45		6
369	22	20	50	428	30	28	19	487	40		16	547	55	28	15
370	25	22	42	429	35	30	28	488	65	48	3	548	25	15	10
371	30	25	11	430	25	20	15	489	75	48	6	549	22		16
372	32		35	431	25		15	491	60		10	550	28	15	9
373	35	15	23	432	25		10	492	42	35	14	551	25	22	30
374	30	25	6	433	42	35	13	493	35	30	8	552	25	20	6
375	30		10	434	30	25	9	494	22		24	553	35	30	35
376	31	22	2	435	42	38	33	495	22		18	554	25		14
377	38		22	436	25	15	16	496	40	35	13	555	35	25	38
378	22	18	13	437	25	28	17	497	50	45	7	556	30		6
379	30	25	12	438	43	33	24	498	20		41	557	90		26
380	20		11	439	31	25	16	499	21		16	558	28	25	7
381	35	28	18	440	20		24	500	20		7	559	35	32	28
382	22	20	28	441	31	25	23	501	35	25	8	560	35		24
383	30	25	38	442	20		30	502	20		20	561	35		21
384	22		18	443	35		36	503	20		14	562	25	15	35
385	30		15	444	25	20	10	504	25		11	563	35	20	12
386	40		40	445	40	38	19	505	20		22	564	30	25	38
387	35	32	37	446	29		18	506	20		10	565	30		38
388	35	30	35	447	30	20	15	507	30	27	32	566	20		30
389	26		10	448	30		30	508	35	30	27	567	25	20	28
390	40	35	17	449	45	35	17	509	20	18	18	568	25	20	17
391	30	28	10	450	30	28	22	510	45	40	8	569	55	50	12
392	25		10	451	20	15	14	511	50	45	18	570	32		37
393	25	31	12	452	25	20	16	512	30	30	16	571	20		27
394	55	45	21	453	45		24	513	50	28	38	572	60	25	26
395	32	30	18	454	29	20	35	514	45	36	13	573	30	25	32
396	35		16	455	28		3	515	20	15	10	574	(60)	32	4
397	45		16	456	30	25	16	516	25		11	575	30	25	32
398	43	30	22	457	65	38	8	517	23		20	576	45	25	25
399	20		15	458	28	22	28	518	25		14	577	(20)	(20)	36
400	22		28	459	30		25	519	35	25	16	578	20	15	49
401	25	20	15	460	35		16	520	65	25	8	579	30	25	44
402	22	18	8	461	25		33	521	22		17	580	35	30	17
403	20		37	462	28	21	27	522	22		44	581	(40)	32	17
404	38	32	20	463	28	22	27	523	22		28	582	45	30	25
405	40	35	30	464	40		19	524	22	20	13	583	47	35	8
406	35	28	22	465	30	25	20	525	20		13	584	46	29	28
407	20	10	9	466	25		14	526	20	18	10	585	30	27	21
408	30	27	26	467	55	53	24	527	12		11	586	30		18
409	50	48	29	468	35	30	16	528	18		27	587	20	15	25
410	30	25	7	469	20		15	529	20		32	588	22	20	29
411	20	16	4	470	25		38	530	22		14	589	22	17	25
412	20	16	10	471	20		29	531	25	18	20	590	45	40	50
413	37	22	17	472	62	(50)	8	532	55	50	21	591	35		35
414	20		4	473	30	20	34	533	20		12	592	68	50	23
415	48	38	47	474	25	10	24	534	(70)	45	10	593	25		30
416	22	15	7	475	25		18	535	30		26	594	40	35	35

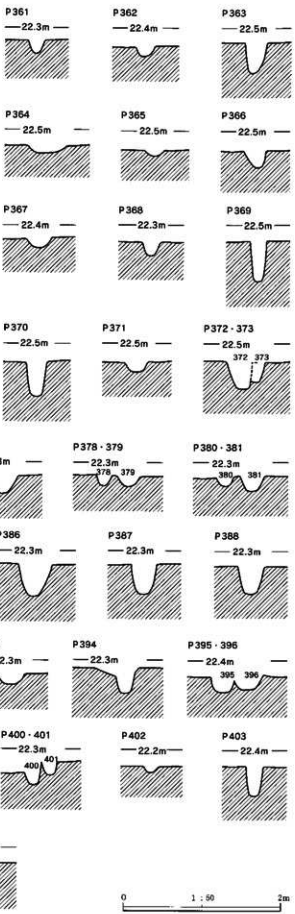
第11表　ピット一覧表(3)

番号	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	番号	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	番号	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	番号	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)
595	65	25	15	654	25		22	713	55	47	8	772	22	20	21
596	40	30	17	655	22		12	714	32		16	773	15		8
597	26	22	18	656	28	20	25	715	45		5	774	40	27	26
598	35	28	32	657	28	25	35	716	35	25	15	775	26	15	8
599	31	22	35	658	40		25	717	30		40	776	7	7	4
600	55	50	10	659	31	27	23	718	38	32	22	777	20		10
601	40	18	10	660	35	30	27	719	28	25	20	778	28	21	32
602	22		15	661	30		18	720	30		33	779	22	21	38
603	22		23	662	50	42	8	721	30	25	56	780	20	15	10
604	35	28	23	663	57	35	47	722	25	20	17	781	20		21
605	30		23	664	40	28	22	723	25	15	26	782	22	21	28
606	40	35	6	665	40		43	724	25	20	26	783	30	25	23
607	30	25	7	666	30		28	725	23	18	21	784	22	18	17
608	25		15	667	22		8	726	23	15	12	785	25	22	12
609	28		20	668	25	20	10	727	20		10	786	25		22
610	27		23	669	35	30	32	728	22		10	787	25	20	28
611	40		43	670	28	25	30	729	20		8	788	35	22	19
612	38	30	35	671	30	20	10	730	28	25	4	789	22	17	22
613	45	38	28	672	60	40	13	731	20		6	790	20		23
614	20	18	20	673	33	20	37	732	15		16	791	25	21	21
615	62	45	45	674	22		18	733	35	28	7	792	22		5
616	35	21	46	675	25		23	734	28		8	793	23		17
617	50	40	40	676	25	22	24	735	33	28	28	794	25	22	5
618	20		12	677	40	30	11	736	40	25	33	795	55	32	10
619	40	31	48	678	45	40	9	737	18	15	14	796	28		5
620	25	(15)	12	679	25	22	25	738	25	20	12	797	48	38	29
621	25	22	15	680	25		37	739	21	18	28	798	30	27	17
622	35	28	22	681	25	20	17	740	25	18	20	799	35	30	4
623	28	20	10	682	40		44	741	30	27	18	800	65	38	5
624	20		12	683	28	23	25	742	30	15	34	801	25		10
625	26	24	25	684	25		18	743	30	25	28	802	35	20	6
626	28		22	685	30	27	15	744	42		14	803	58	42	9
627	25		13	686	45	35	44	745	36	27	17	804	30		30
628	25		12	687	45	40	18	746	46	25	32	805	60	50	10
629	20		12	688	25		20	747	52	32	10	806	20		5
630	18		18	689	40	25	22	748	25		23	807	20	17	5
631	70	55	4	690	38	30	8	749	40	23	24	808	25	22	7
632	25		23	691	18	15	7	750	30	20	37	809	40	38	6
633	25	20	35	692	32		27	751	27		40	810	62	50	6
634	50	38	45	693	22		23	752	30	28	5	811	42	30	5~13
635	50	43	45	694	60	45	10	753	30		11	812	45		10~20
636	20		30	695	25		23	754	20	18	6	813	35	25	12
637	30		22	696	35	30	8	755	50	15	6	814	40		16
638	28	20	32	697	28		23	756	28	20	3	815	32	23	25
639	20		17	698	35	30	8	757	12		7	816	25	18	29
640	22	18	15	699	40	35	7	758	15		6	817	20	20	29
641	22	20	32	700	55	45	30	759	12		3	818	18		10
642	28		18	701	20		27	760	40	25	9	819	18		16
643	25		23	702	50	35	7	761	30	25	11	820	40	30	5~13
644	35	25	43	703	30	(25)	28	762	21		25	821	58	42	27
645	20	12	15	704	35	(25)	26	763	38	35	20	822	28		19
646	28		36	705	22		20	764	40	30	5	823	30		19
647	32	28	52	706	55	35	15	765	22	20	14	824	28	15	18
648	38	30	24	707	30	25	15	766	26	19	4	825	32	20	36
649	40	32	17	708	22		12	767	40		19	826	52	40	80
650	35	25	24	709	37	35	25	768	35	23	16	827	20	15	12
651	50		38	710	28	22	32	769	30	25	19	828	35	20	10
652	45	40	42	711	25	20	23	770	25		10	829	35	32	18
653	30		25	712	45		12	771	25		23				

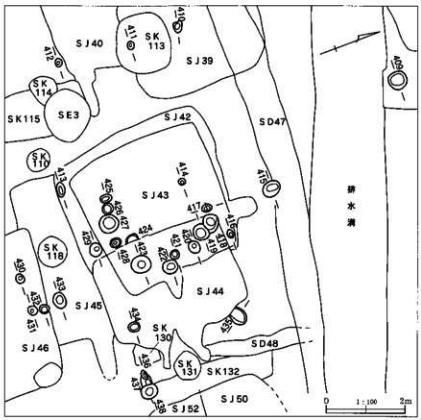

SJ21
SD47
SK104
トレンチ
SK103
SJ22
SJ26
SJ24
SJ23
SJ27
SK107
SJ28
排水溝
SK105
SJ29
SJ35
SK106
SJ36
SJ30
SJ31
SE1
SK108
P338・339
22.0m
P340
22.3m
P341
22.3m
P342
22.3m
P343
22.3m
P344
22.0m
P345
22.3m
P346
22.2m
P347
22.2m
P348
22.2m
P349
22.3m
P350~352
22.3m
P353
22.3m
P354
22.3m
P355・356
22.3m
P357
22.3m
P358
22.3m
P359
22.3m
P360
22.0m
SI32
0 1:50 2m
0 1:100 2m

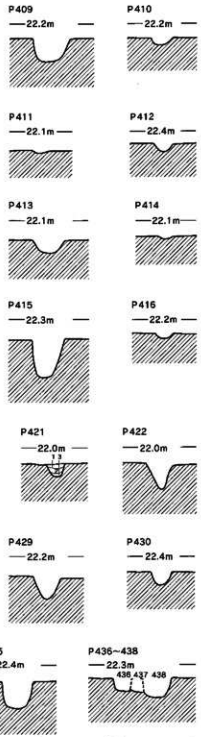
第287図　ピット(15)


SJ36
SJ37
SE2
SJ38
SJ41
SK109
SK111
SK112
SK117
SK116
SK115
SK119
SK125
SK124
SK122
SK121
SJ47
1:100
2m


P361 22.3m
P362 22.4m
P363 22.5m
P364 22.5m
P365 22.5m
P366 22.5m
P367 22.4m
P368 22.3m
P369 22.5m
P370 22.5m
P371 22.5m
P372・373 22.5m
372
373
P374 22.4m
P375 22.4m
P376 22.4m
P377 22.3m
P378・379 22.3m
378
379
P380・381 22.3m
380
381
P382 22.2m
P383・384 22.2m
383
384
P385 22.3m
P386 22.3m
P387 22.3m
P388 22.3m
P389 22.4m
P390・391 22.4m
390
391
P392 22.4m
P393 22.3m
P394 22.3m
P395・396 22.4m
395
396
P397 22.3m
P398 22.4m
P399 22.2m
P400・401 22.3m
400
401
P402 22.2m
P403 22.4m
P404 22.4m
P405・406 22.4m
405
406
P407・408 22.4m
407
408
0
1:50
2m

第288図　ピット(16)





P417
1 暗褐色土　炭化物粒子少
2 暗褐色土　炭化物粒子やや多

P419
1 暗褐色土　地山ブロック(0.5~1cm)・炭化物粒子少
2 暗褐灰色土　地山ブロック(0.5~1cm)やや多、炭化物粒子少
3 灰褐色土　地山ブロック・炭化物粒子少　SJ42覆土か

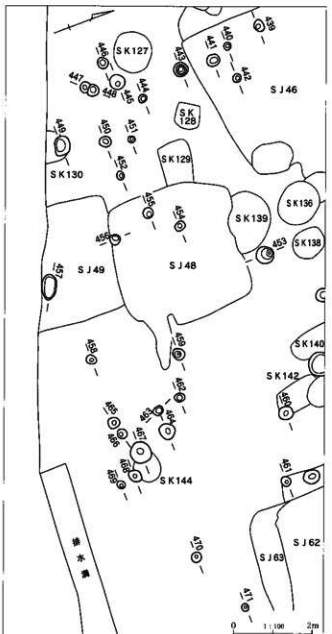
P420
1 暗褐色土　炭化物ブロック(0.5cm)少
2 暗褐色土　炭化物ブロック(0.5cm)やや多、地山ブロック(0.5cm)少
SJ42覆土か

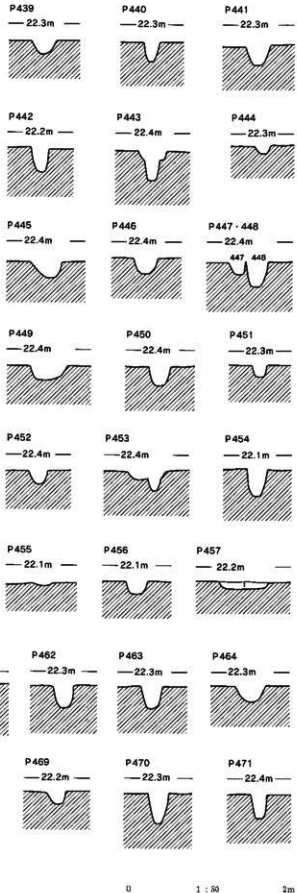
P421
1 暗褐色土　炭化物粒子少
2 黒褐色土　炭化物ブロック(0.5~1cm)やや多、地山ブロック(0.5~1cm)少
3 暗褐色土　炭化物ブロック(0.5cm)少、地山ブロック(0.5~1cm)やや多

P423
1 黒色土　炭化物層中に粘土ブロック(0.5~2cm)少
2 暗褐色土　粘土ブロック(2~3cm)・炭化物粒子多

P433
1 赤褐色土　焼土ブロック(2~3cm)多、炭化物粒子やや多
2 暗褐色土　地山ブロック(1~3cm)多、炭化物粒子少
3 暗褐色土　地山ブロック(1~3cm)非常に多、炭化物粒子少

第289図　ピット(17)

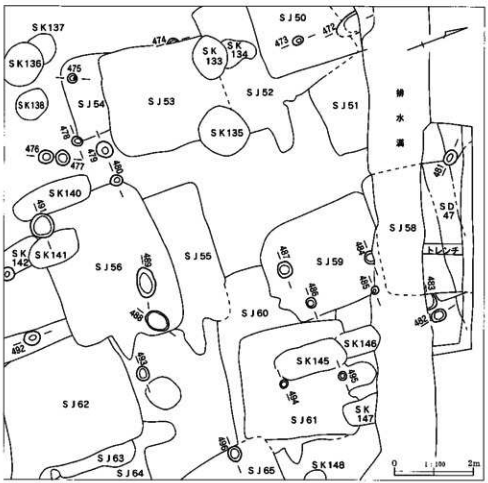


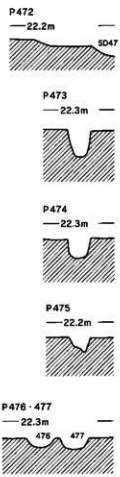


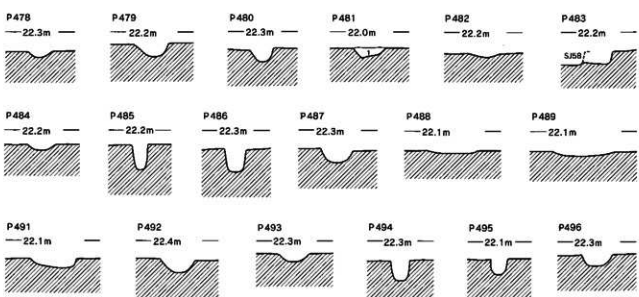
P457
1 褐灰色土 粘土ブロック多 粘性強

0 1:50 2m

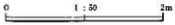
第290図 ピット(18)



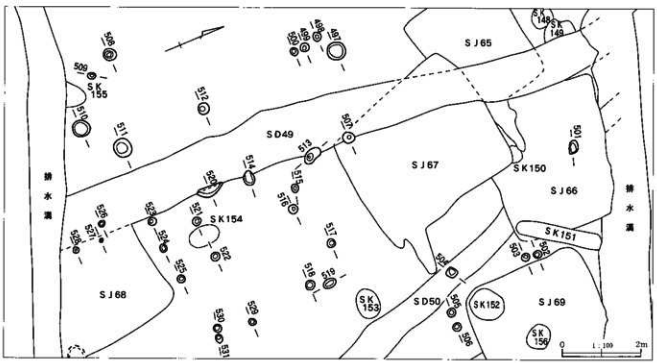


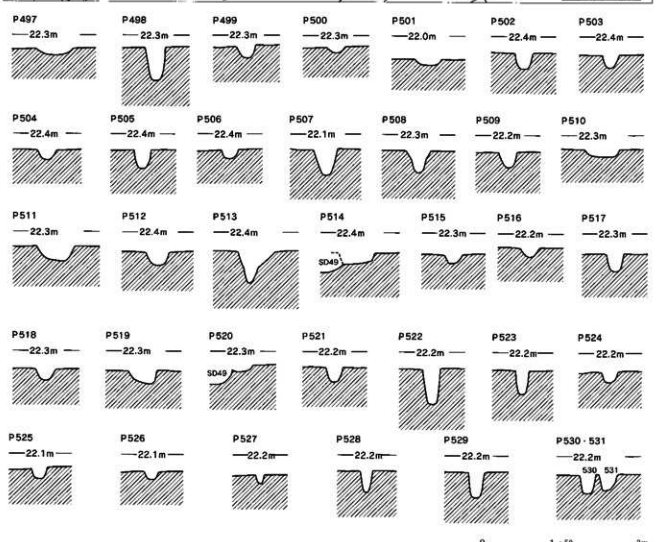


P481
1 暗褐色土 地山粒・焼土粒・炭化物粒子多

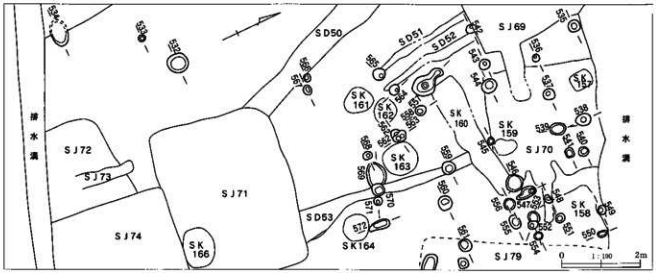


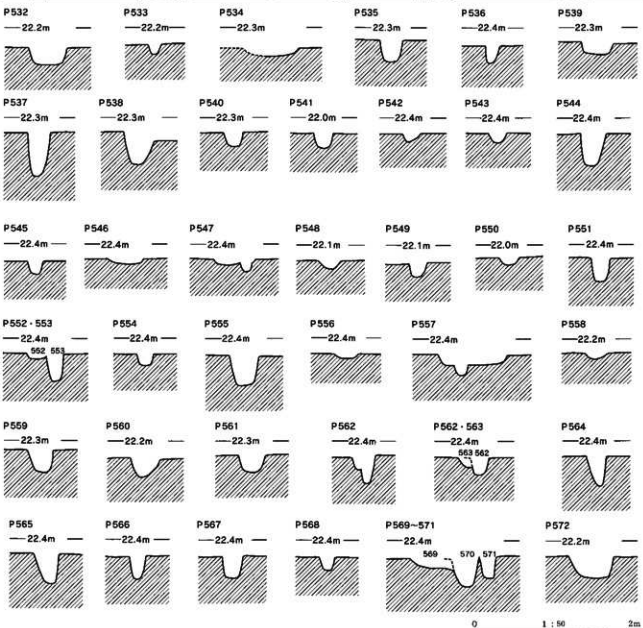
第291図 ピット(19)


SJ65
SK148
SK149
SK155
SD49
SJ67
SK150
SJ66
排水溝
SK154
SK151
SJ68
SK153
SD50
SK152
SJ69
SK156
0 1:100 2m

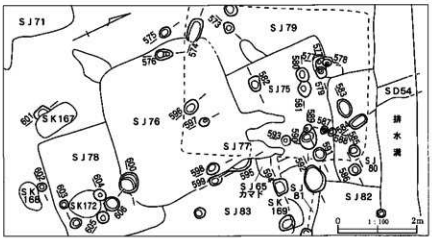

P497 22.3m
P498 22.3m
P499 22.3m
P500 22.3m
P501 22.0m
P502 22.4m
P503 22.4m
P504 22.4m
P505 22.4m
P506 22.4m
P507 22.1m
P508 22.3m
P509 22.2m
P510 22.3m
P511 22.3m
P512 22.4m
P513 22.4m
P514 22.4m
SD49
P515 22.3m
P516 22.2m
P517 22.3m
P518 22.3m
P519 22.3m
P520 22.3m
SD49
P521 22.2m
P522 22.2m
P523 22.2m
P524 22.2m
P525 22.1m
P526 22.1m
P527 22.2m
P528 22.2m
P529 22.2m
P530・531 22.2m
530 531
0 1:50 2m

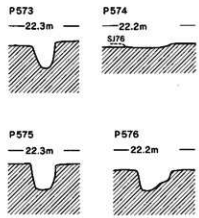
第292図　ピット(20)

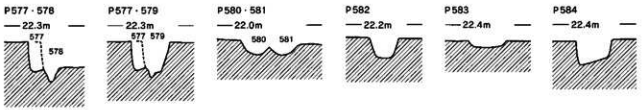

SD50
SD51
SD52
SJ69
SK 161
SK 162
SK 160
SK 159
SK 163
SJ70
SJ72
SJ73
SJ71
SD53
SK164
SJ74
SK 166
SK 158
SJ79
排水溝
0 1:100 2m

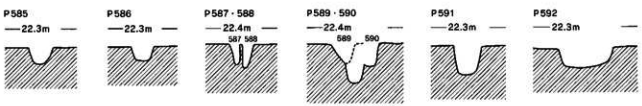

P532 22.2m
P533 22.2m
P534 22.3m
P535 22.3m
P536 22.4m
P539 22.3m
P537 22.3m
P538 22.3m
P540 22.3m
P541 22.0m
P542 22.4m
P543 22.4m
P544 22.4m
P545 22.4m
P546 22.4m
P547 22.4m
P548 22.1m
P549 22.1m
P550 22.0m
P551 22.4m
P552・553 22.4m
552 553
P554 22.4m
P555 22.4m
P556 22.4m
P557 22.4m
P558 22.2m
P559 22.3m
P560 22.2m
P561 22.3m
P562 22.4m
P562・563 22.4m
563 562
P564 22.4m
P565 22.4m
P566 22.4m
P567 22.4m
P568 22.4m
P569~571 22.4m
569 570 571
P572 22.2m
0 1:50 2m

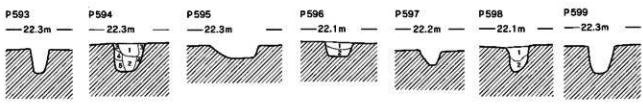
第293図　ピット(21)

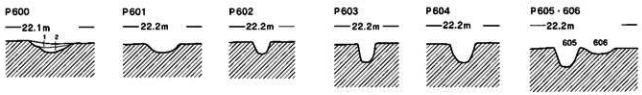


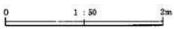












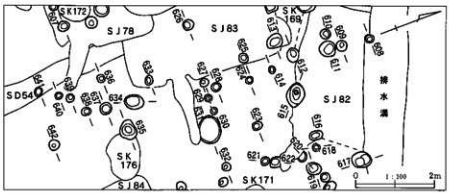
P594
1 褐褐色土　地山ブロック(0.5～2cm)少
2 暗褐色土　地山ブロック(0.5～2cm)微量　柱痕跡か
3 暗黄褐色土　地山ブロック(1～2cm)多
4 暗黄褐色土　地山ブロック(2～4cm)多
5 暗褐色土　地山ブロック(0.5～1cm)少

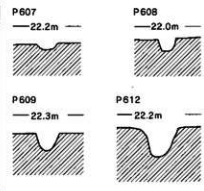
P596
1 暗褐色土　地山粒子・炭化物粒子少
2 暗黄褐色土　地山粒子多

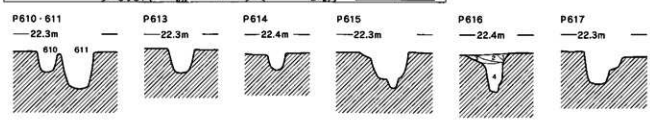
P598
1 黒褐色土　地山ブロック少
2 黒褐色土　地山ブロック多
中世か

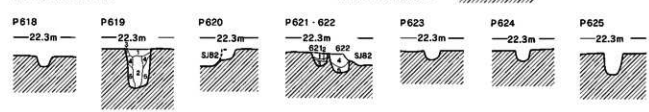
P600
1 暗褐色土　地山ブロック多，炭化物粒子少
2 暗黄褐色土　地山ブロック多
中世か

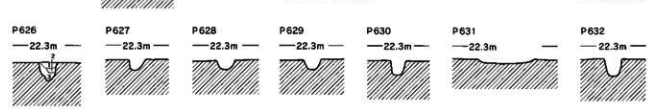
第294図　ピット(22)

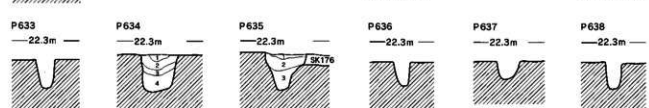


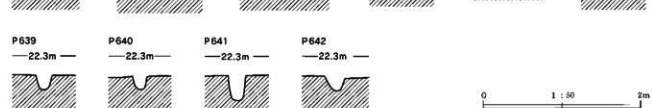












P616
1 黒褐色土　地山ブロック(0.5～1cm)少、炭化物粒子微量
2 黒褐色土　地山ブロック(0.5～1cm)やや多、焼土ブロック(0.5cm)少
3 暗褐色土　地山ブロック(1～2cm)やや多、焼土ブロック(0.5cm)少
4 明褐色土　地山ブロック(1～2cm)非常に多、焼土ブロック(0.5cm)少

P619
1 暗褐色土　地山ブロック多、炭化物粒子少
2 黒褐色土　地山ブロック・焼土粒・炭化物粒子少
3 暗褐色土　地山ブロック多
4 暗黒褐色土　地山ブロック多・炭化物粒子少
5 明黄褐色土　地山ブロック多・炭化物粒子少

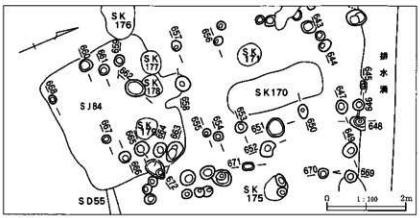
P621・622
1 黒褐色土　焼土ブロック(0.5～1cm)・炭化物粒子若干
2 明褐色土　地山ブロック(1～2cm)・炭化物粒子少
3 暗黄褐色土　地山ブロック(1～2cm)多
4 黒褐色土　炭化物粒子多、焼土粒
・地山ブロック(3～5cm)少
5 暗褐色土　炭化物粒子多、地山ブロック(1～2cm)少

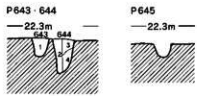
P626
1 暗褐色土　地山ブロック(0.5～1cm)・炭化物粒子少
2 暗黄褐色土　地山ブロック(1～2cm)多、炭化物粒子
3 暗褐色土　地山ブロック(0.5～1cm)少

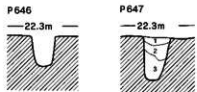
P634
1 黒褐色土　地山ブロック(0.5～1cm)少
2 暗褐色土　地山ブロック(1～2cm)やや多
3 明褐色土　地山ブロック(3～4cm)多
4 暗黄褐色土　地山ブロック(3～4cm)非常に多

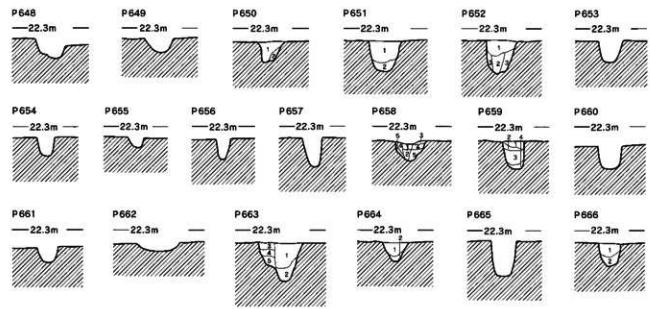
P635
1 明褐色土　地山粒子少
2 暗褐色土　地山ブロックやや多、炭化物粒子少
3 暗褐色土　地山ブロック多

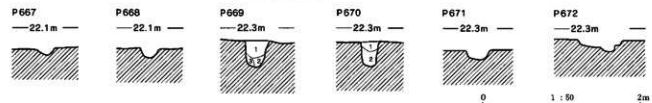
第295図　ピット(23)











P643・644
1 暗褐色土　地山ブロック・焼土粒・炭化物粒子少
2 黒褐色土　地山ブロック少
3 暗褐色土　地山ブロック多
4 暗黄褐色土　地山ブロック多

P647
1 明黄褐色土　地山ブロック多
2 黒褐色土　地山ブロック多、炭化物粒子少
3 暗褐色土　地山ブロック多、炭化物粒子少

P650
1 明褐色土　地山粒子少
2 暗黄褐色土　地山ブロック多

P651
1 暗褐色土　地山ブロック多
2 暗黄褐色土　地山粒子多

P652
1 明褐色土　地山ブロック・炭化物粒子・焼土粒少　住居跡か
2 暗褐色土　地山粒子少
3 暗黄褐色土　地山粒子多

P658
1 黒褐色土　炭化物粒子多
2 明黄褐色土　炭化物粒子少　住居跡か
3 暗灰褐色土　炭化物粒子少
4 明黄褐色土　地山ブロック少
5 暗黄褐色土　地山ブロック多

P659
1 明褐色土　地山ブロック・炭化物粒子少
2 暗黄褐色土　地山ブロック多
3 暗黒褐色土　地山ブロック多、炭化物粒子少
4 明黄褐色土　地山粒子多

P663
1 暗褐色土　地山ブロック(1～3cm)非常に多
2 黒褐色土　地山ブロック(1～2cm)多、炭化物粒子少
3 明褐色土　地山ブロック(0.5～1cm)多
4 暗褐色土　地山ブロック(1～3cm)非常に多、炭化物粒子少
5 明褐色土　地山ブロック(1～3cm)やや多、炭化物粒子少

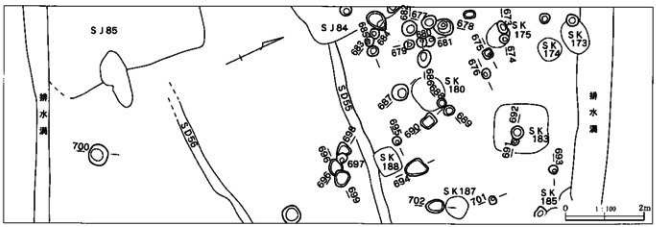
P664
1 明褐色土　地山粒子・炭化物粒子少
2 明黄褐色土　地山ブロック多

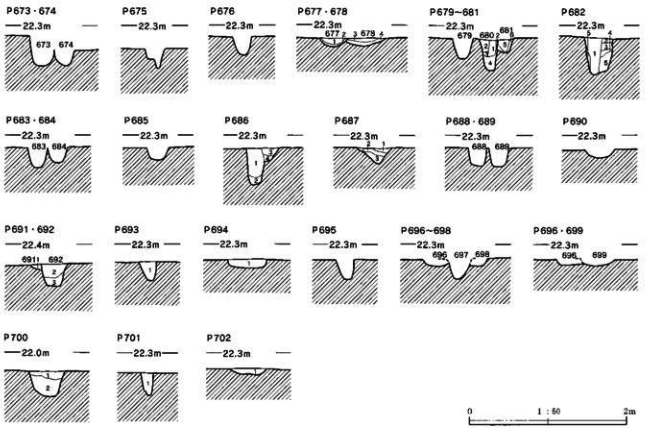
P666
1 明褐色土　地山ブロック(1～2cm)・炭化物ブロック(0.5cm)少
2 暗褐色土　地山ブロック(2～3cm)やや多、炭化物ブロック(0.5cm)少

P669
1 明褐色土　地山ブロック・炭化物粒子少
2 黒褐色土　地山ブロック・炭化物粒子少
3 明黄褐色土　地山粒子

P670
1 暗褐色土　地山粒子少
2 明黒褐色土　地山ブロック多

第296図　ピット(24)





P677・678
1 黒褐色土　地山ブロック多
2 暗黄褐色土　地山粒少
3 暗褐色土　地山ブロック少
4 暗黄褐色土　地山ブロック多

P680・681
1 黒褐色土　地山粒・炭化物粒子少
2 暗褐色土　地山ブロック多、炭化物粒子少
3 明褐色土　地山粒少
4 黒褐色土　地山ブロック少
5 暗褐灰色土　地山ブロック少
6 暗黄褐色土　地山粒少

P682
1 黒褐色土　地山ブロック多　柱痕跡か
2 暗褐色土　地山粒少
3 暗黄褐色土　地山ブロック多
4 黒褐色土　地山ブロック少
5 暗褐色土　地山ブロック少

P686
1 黒褐色土　地山ブロック(1~3cm)・炭化物粒子多
2 暗黄褐色土　地山ブロック(1~3cm)多
3 明黄褐色土　地山ブロック(0.5~2cm)非常に多
4 暗褐色土　地山ブロック(0.5~2cm)・炭化物粒子少

P687
1 暗褐色土　炭化物粒子少
2 暗褐色土　地山粒少
3 黒褐色土　地山ブロック少

P691・692
1 暗褐色土　黄色土ブロック多、炭化物粒子やや多
2 黒褐色土　黄色土ブロック・炭化物粒子多
3 黒褐色土　炭化物粒子微多、黄色土ブロック少

P693
1 黒褐色土　黄色土ブロック多、炭化物粒子やや多

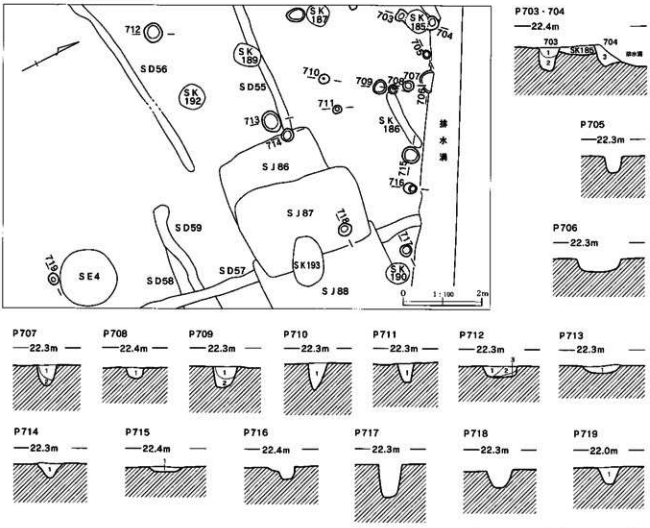
P694
1 黒褐色土　黄色土ブロック多、炭化物粒子やや多

P700
1 暗褐色土　地山粒少
2 暗灰褐色土　地山ブロック多

P701
1 黒褐色土　黄色土ブロック・炭化物粒子多

P702
1 黒褐色土　黄色土ブロック・炭化物粒子多

第297図　ピット(25)



P703・704
1 黒褐色土 黄色土ブロック少、炭化物粒子極多
2 黒褐色土 黄色土ブロックやや多、炭化物粒子極多
3 暗褐色土 黄色土ブロック多、炭化物粒子やや多

P707
1 黒褐色土 黄色土ブロック多、炭化物粒子やや多
2 黒褐色土 黄色土ブロックやや多、炭化物粒子極多

P708
1 黒褐色土 黄色土ブロック・炭化物粒子多

P709
1 黒褐色土 黄色土ブロック多、炭化物粒子やや多
2 黄褐色土 炭化物粒子極少(地山に近い)

P710
1 黒褐色土 黄色土ブロック・炭化物粒子多

P711
1 黒褐色土 黄色土ブロック・炭化物粒子多

P712
1 暗褐色土 黄色土ブロック・炭化物粒子多
2 黒褐色土 黄色土ブロック多、炭化物粒子やや多
3 黄褐色土 炭化物粒子極少

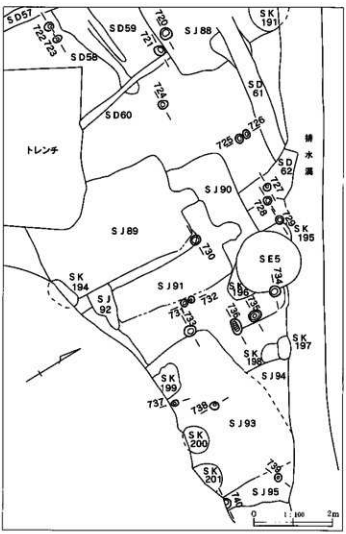
P713
1 黒褐色土 黄色土ブロック多、炭化物粒子やや多

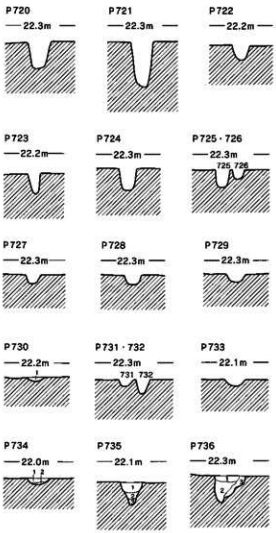
P714
1 黒褐色土 黄色土ブロック・炭化物粒子多

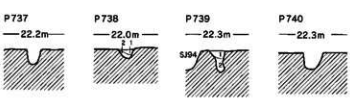
P715
1 黒褐色土 黄色土ブロック多、炭化物粒子やや多

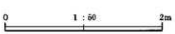
P719
1 灰褐色土 地山ブロック多 シルト質

第298図 ピット(26)









P730
1 灰褐色土 黒褐色ブロック多、炭化物粒子微量

P734
1 暗褐色土 地山粒多、炭化物粒子微量
2 黒色土 炭化物層

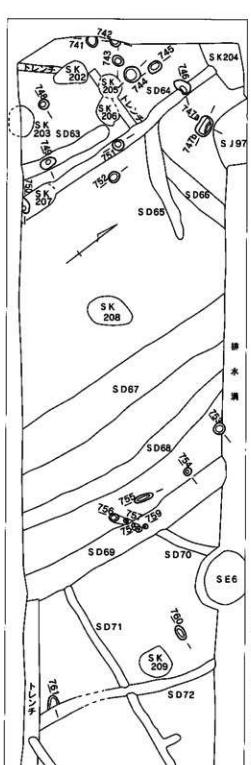
P735
1 灰褐色土 地山ブロック若干
2 灰褐色土 地山粒多
3 灰褐色土 地山粒若干

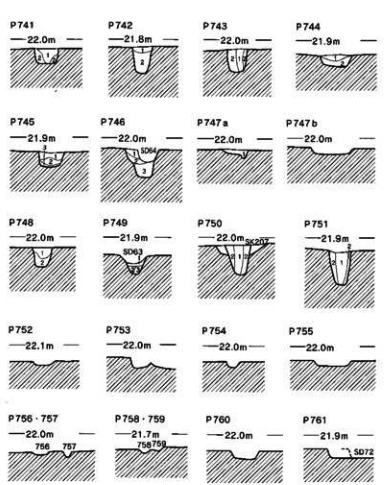
P736
1 黒灰褐色土 地山ブロック多
2 黒褐色土 地山粒少
3 黒灰褐色土 地山ブロック多

P738
1 黒褐色土 地山ブロック多
2 灰褐色土 地山ブロック若干

P739
1 黒褐色土 地山粒多、焼土粒・炭化物粒子若干
2 黒灰色土 地山ブロック若干

第299図 ピット(27)





P741
1 暗褐色土　地山ブロック(2～3cm)・炭化物粒子少
2 暗黄褐色土　地山ブロック(2～3cm)多、炭化物粒子少

P742
1 明褐色土　地山ブロック(0.5～1cm)・焼土粒少
2 暗褐色土　地山ブロック(1～3cm)少

P743
1 暗褐色土　地山ブロック(2～3cm)少
2 明褐色土　地山ブロック(1～2cm)やや多

P744
1 暗褐色土　炭化物粒子少
2 明褐色土　地山ブロック(1～2cm)・炭化物粒子少

P745
1 黒褐色土　地山ブロック(1～2cm)・炭化物粒子少
2 暗褐色土　地山ブロック(0.5～1cm)少
3 暗褐色土　地山ブロック(1～2cm)少

P746
1 明褐色土　地山ブロック(1～2cm)・炭化物ブロック(1cm)少
2 暗褐色土　地山ブロック(1～3cm)やや多、焼土粒少
3 明黄褐色土　地山ブロック(1～3cm)多、焼土粒少

P747
1 明褐色土　地山ブロック(1～2cm)・炭化物粒子やや多

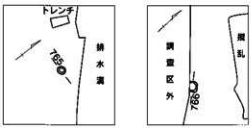
P748
1 黒褐色土　地山ブロック(1～2cm)少
2 明褐色土　地山ブロック(2～3cm)少

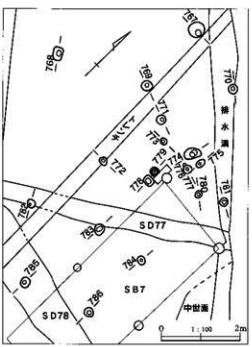
P749
1 暗褐灰色土　灰色土ブロック多、炭化物粒子若干
2 灰色土　酸化鉄粒多
3 暗褐灰色土　灰色土ブロック若干

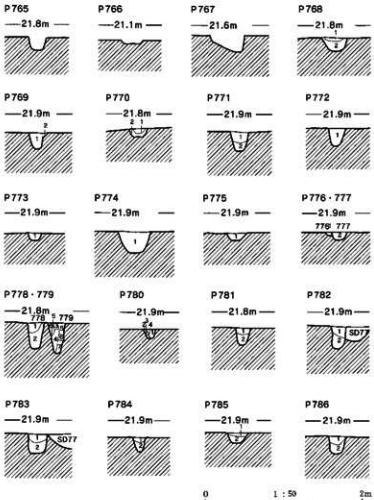
P750
1 黒褐色土　地山ブロック(0.5～1cm)・炭化物粒子少　柱痕跡か
2 明褐色土　地山ブロック(1～3cm)やや多、炭化物粒子少

P751
1 黒褐色土　地山ブロック(1～3cm)やや多、炭化物粒子少　柱痕跡か
2 黒褐色土　地山ブロック(1～2cm)・炭化物粒子少

第300図　ピット(28)







P768
1 暗灰色土　地山粒少
2 褐灰色土　地山ブロック・地山粒多

P769
1 褐灰色土　黄褐色土少
2 褐灰色土　黄褐色土ブロック多

P770
1 暗褐灰色土　地山粒少
2 暗褐灰色土　地山粒多

P771
1 褐灰色土　地山ブロック若干
2 暗褐灰色土　地山ブロック少

P772
1 暗褐灰色土　黄褐色土ブロック多

P773
1 暗褐灰色土　地山粒多

P774
1 褐灰色土　地山大ブロック若干

P775
1 褐灰色土　地山ブロック多

P776・777
1 暗褐灰色土　地山粒多
2 褐灰色土　地山ブロック若干

P778・779
1 褐灰色土　炭化物粒子微量
2 暗褐灰色土　炭化物粒子微量
3 暗褐灰色土　地山粒・炭化物粒子多　柱痕跡か
4 灰色土　マンガン粒多　柱痕跡か
5 暗褐灰色土　地山粒微量
6 暗褐色土　明褐灰色土粒多　炭化物層
7 暗褐灰色土　地山粒若干

P780
1 暗褐灰色土　地山粒若干　柱痕跡か
2 褐灰色土　地山ブロック多
3 黄褐色土　地山ブロック少
4 暗褐灰色土　地山粒少

P781
1 暗褐灰色土　地山粒多
2 暗褐灰色土　地山ブロック若干

P782
1 褐灰色土　地山粒若干
2 暗褐灰色土　地山ブロック若干

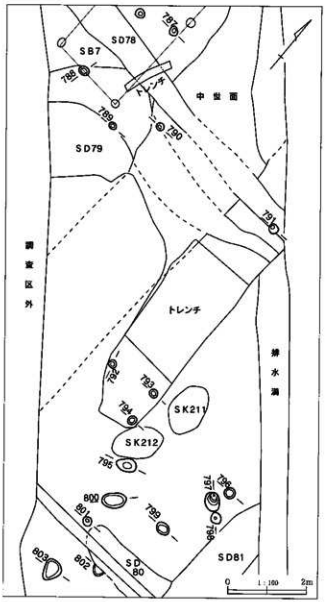
P783
1 褐灰色土　黄褐色土ブロック多、炭化物粒子微量
2 暗褐灰色土　黄褐色土ブロック若干

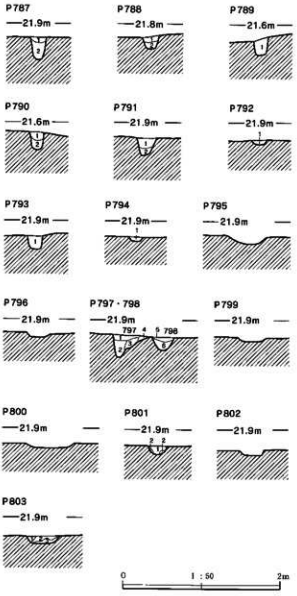
P784
1 褐灰色土　地山ブロック多
2 褐灰色土　地山ブロック若干

P785
1 褐灰色土　黄褐色土粒多、橙土粒微量
2 暗褐灰色土　黄褐色土ブロック少

P786
1 褐灰色土　地山ブロック多
2 褐灰色土　地山ブロック少

第301図　ピット(29)





P787
1 褐灰色土　地山ブロック多、炭化物粒子微量
2 暗褐灰色土　地山ブロック若干

P788
1 褐灰色土　地山ブロック多
2 暗褐灰色土　地山ブロック少

P789
1 黒灰色土　地山ブロック微量

P790
1 暗褐灰色土　地山ブロック多、炭化物粒子若干
2 暗褐灰色土　地山粒多

P791
1 暗褐灰色土　黄褐色土粒・ブロック多、炭化物粒子微量
2 暗褐灰色土　炭化物粒子若干、黄褐色土粒少

P792
1 黄灰色土　地山ブロック多

P793
1 褐灰色土　地山粒多、炭化物粒子微量

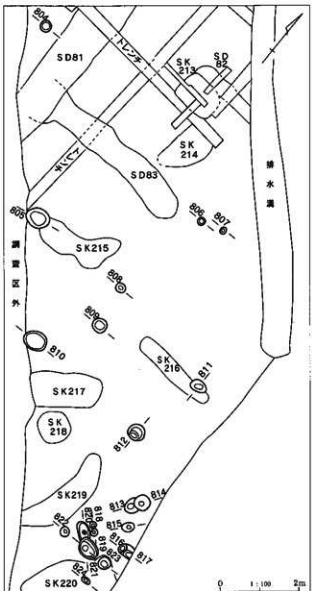
P794
1 黄灰色土　地山粒多、炭化物粒子微量

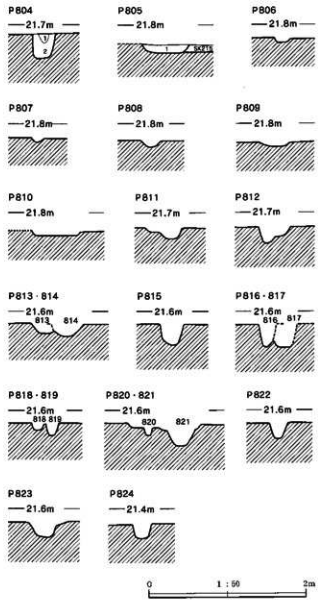
P797・798
1 黒褐色土　地山ブロック(1～2cm)・炭化物粒子少
2 黒褐色土　地山ブロック(0.5～1cm)・炭化物粒子微量
3 暗褐色土　炭化物粒子微量
4 暗黄褐色土　炭化物ブロック(0.5～1cm)少
5 黒褐色土　地山ブロック(0.5cm)・炭化物粒子少
6 暗褐色土　地山ブロック(0.5～1cm)やや多、炭化物粒子少

P801
1 黒褐色土　地山ブロック(0.5～1cm)・炭化物粒子やや多
2 暗褐色土　地山ブロック(1～2cm)・炭化物粒子少

P803
1 暗黄褐色土　炭化物粒子微量
2 暗褐色土　地山ブロック(1～2cm)・炭化物粒子少
3 暗黄褐色土　地山ブロック(1～2cm)非常に多

第302図　ピット(30)

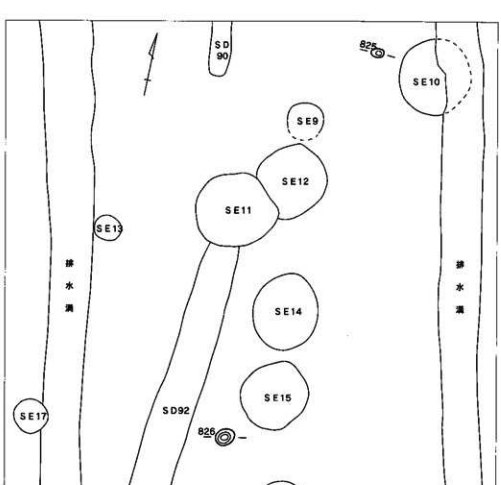


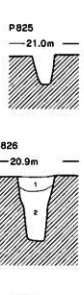


P804
1 黒褐色土　地山ブロック(1～2cm)・炭化物粒子微量、マンガン粒少
2 暗黄褐色土　地山ブロック(1～2cm)多、炭化物粒子微量、マンガン粒少

P805
1 暗褐色土　マンガン粒多、地山ブロック(1cm)・炭化物粒子少

第303図　ピット(31)



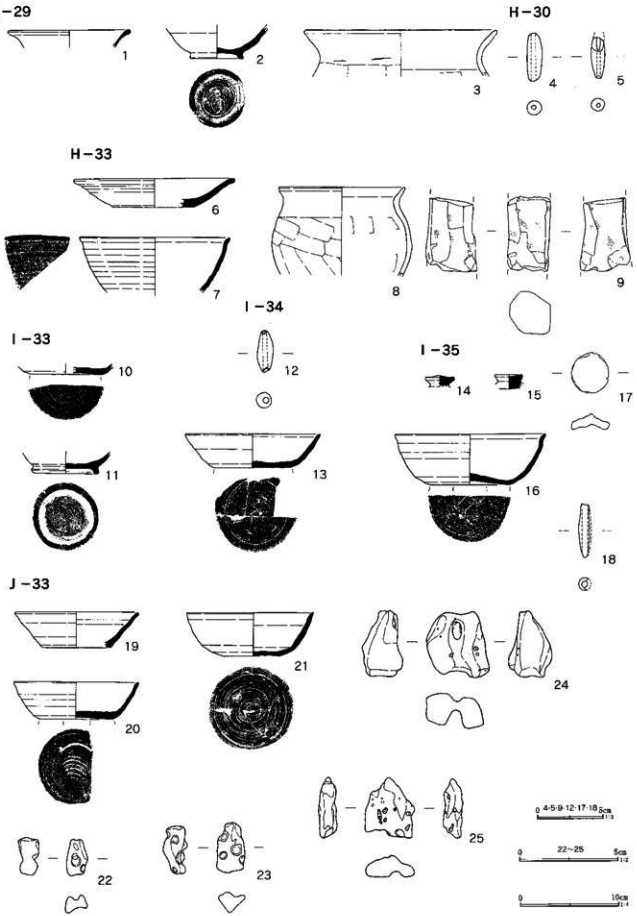


826
1 灰褐色土 炭化物粒子・鉄滓少
2 暗灰褐色土 鉄滓少

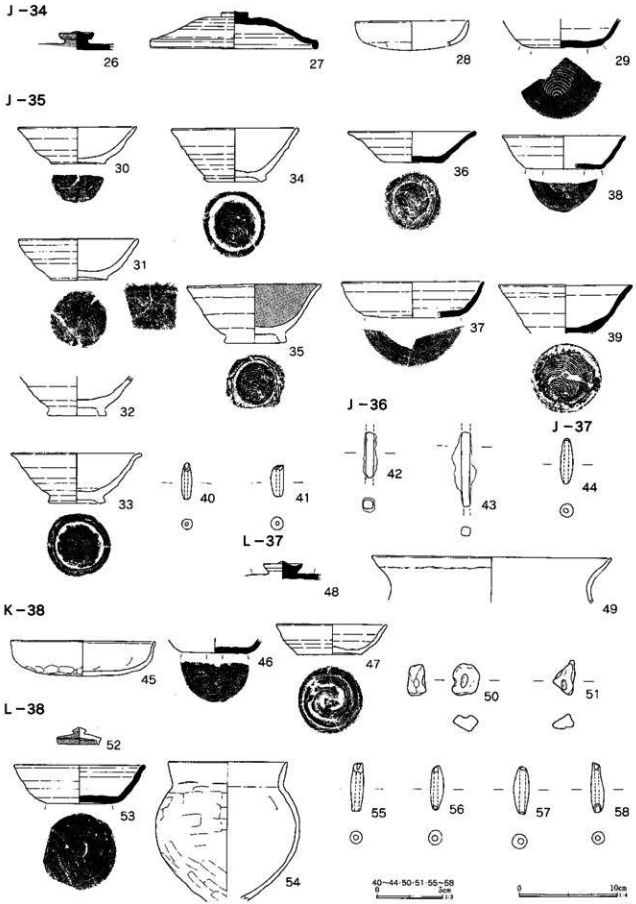
第304図 ピット(32)

(g) グリッド出土・表採遺物等

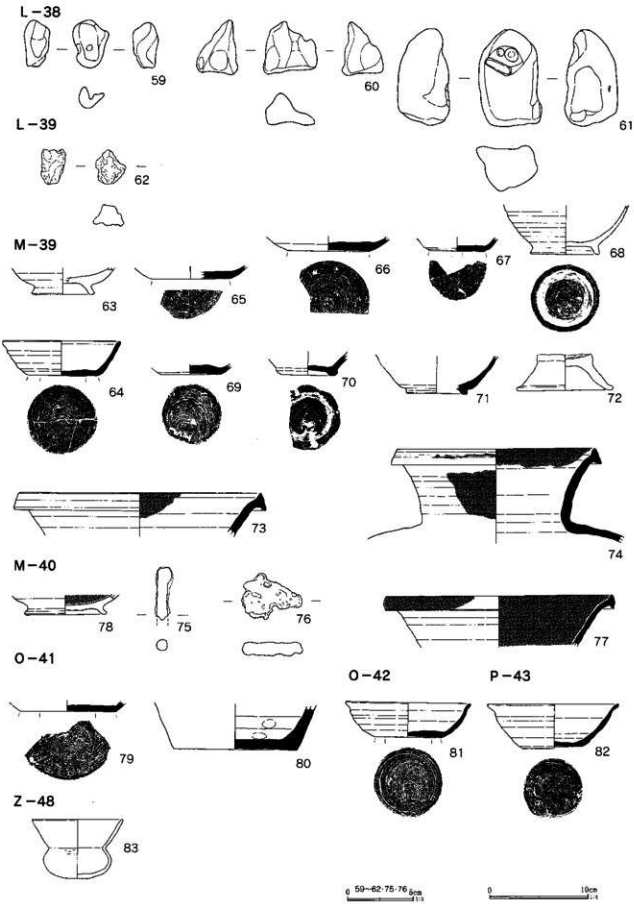
ここでは、グリッド出土遺物、一括・表面採集遺物等を掲載する。内訳は、土師器21点、須恵器42点、鉄製品4点、鉄滓2点、土錘11点、貝巣穴痕泥岩19点、板碑1点、石器6点の、計106点である。



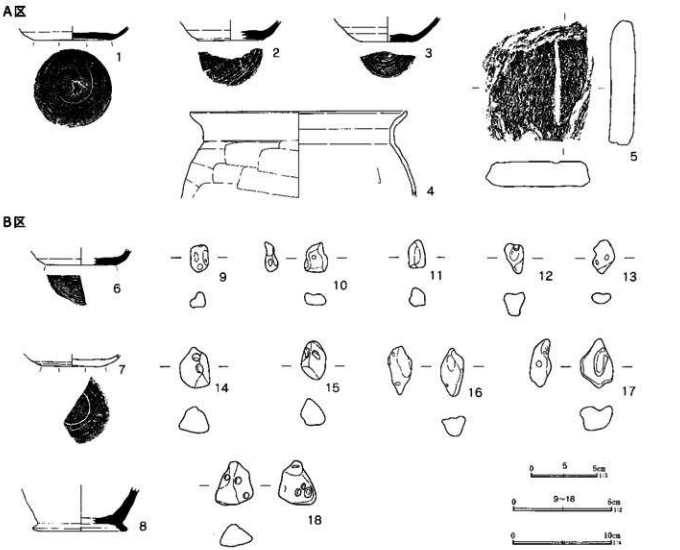
第305図　グリッド出土・表採遺物等(1)



第306図　グリッド出土・表採遺物等(2)



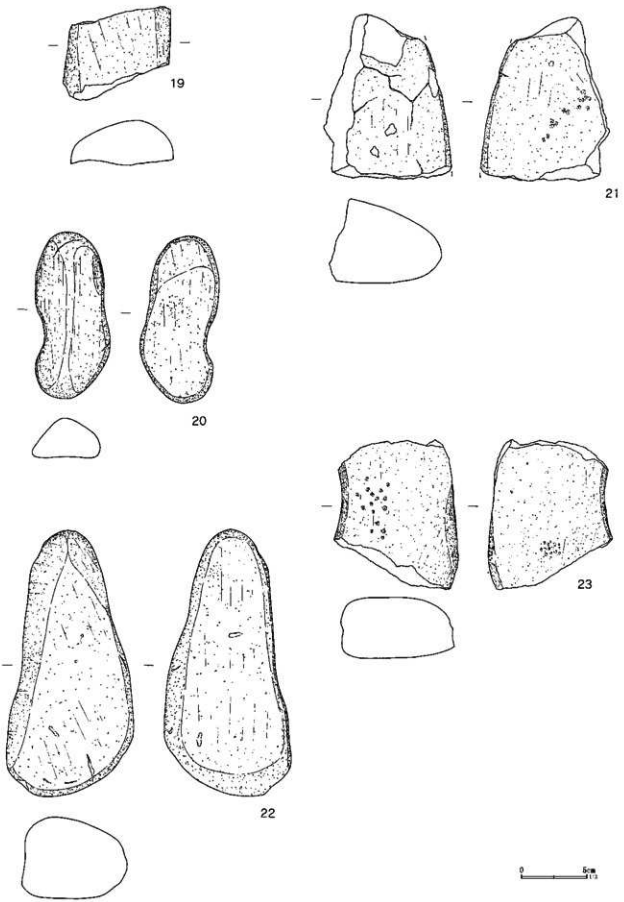
第307図　グリッド出土・表採遺物等(3)



第308図　グリッド出土・表採遺物等(4)

グリッド出土・表採遺物等観察表（第306図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	須恵坏	(12.4)	1.8		AIJK	普	暗青灰色	15	G-29
2	須恵高台付坏		3.5	5.5	EHIJ	普	橙灰色	55	G-29
3	甕	(19.6)	4.7		ACHIJ	普	茶褐色	15	G-29
4	土錘	3.7×1.1×1.1		孔径0.3	AHIJ	普	明褐色	100	H-30　重量4.7g
5	土錘	3.1×1.0×1.0		孔径0.2	AGIJ	普	黒褐色	75	H-30　重量2.2g
6	須恵皿	(16.6)	3.0	(8.4)	AGIJ	普	暗灰色	25	H-33
7	須恵坏	(15.4)	5.6		EGH	不	橙褐色	20	H-33
8	甕	(12.6)	9.1		ACHIK	普	橙褐色	20	H-33
9	砥石	現存長5.7×幅3.8×厚3.2cm　重量101.2g　凝灰岩製					白橙色		H-33
10	須恵坏		1.1	(7.0)	ACEJK	普	灰色	45	I-33
11	須恵坏		2.3	6.6	AGIK	普	灰色	75	I-33
12	土錘	3.2×1.2×1.1		孔径0.4	HJK	普	褐色	100	I-34　重量4.5g
13	須恵坏	(13.8)	3.5	7.9	AGHIJ	普	暗灰色	40	I-34
14	須恵蓋	3.0	1.1		AIJ	普	青灰色	80	I-35
15	須恵蓋	2.8	1.4		HIJK	普	灰色	95	I-35
16	須恵坏	(15.4)	5.2	8.1	GIJK	普	灰色	55	I-35
17	円盤状紡製品	現存長3.0×幅2.9×厚1.3cm							I-35
18	土錘	4.1×1.1×1.0cm		孔径1.0cm	AHJ	普	黒褐色	55	I-35　重量2.9g
19	須恵坏	(12.6)	3.6	(6.8)	AGIJ	普	暗青灰色	10	J-33



第309図　グリッド出土・(5)

グリッド出土・表採遺物等観察表（第305～307図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
20	須恵坏	(12.9)	3.8	7.7	AGHIJK	普	暗灰色	40	J-33
21	須恵坏	12.9	4.4	5.7	GIJK	普	暗灰色	80	J-33
22	貝黒穴質泥岩	法量1.9×1.1×1.1cm 重量1.3g					淡赤褐色		J-33 4孔 被熱
23	貝黒穴質泥岩	法量2.6×1.5×1.3cm 重量2.3g					淡赤褐色		J-33 6孔 被熱
24	貝黒穴質泥岩	法量3.4×3.3×2.2cm 重量12.3g					明褐褐色		J-33 5孔 被熱
25	貝黒穴質泥岩	法量3.0×2.4×1.0cm 重量3.3g					明茶褐色		J-33 10孔 被熱
26	須恵蓋	3.6	1.8		EIJK	良	灰色	75	J-34 自然釉付着
27	須恵蓋	2.8	3.8	(17.0)	AEGIJ	普	灰色	35	J-34
28	坏	(13.2)	2.6		ACGHIJ	普	褐色	15	J-34 器面は荒れている
29	須恵坏		2.9	(8.5)	AIJK	普	茶褐色	35	J-34
30	上師か坏	(12.2)	3.7	5.5	AGHI	不	褐色	35	J-35
31	土師坏	12.3	4.2	5.6	ACGHI	普	明褐色	85	J-35
32	土師高台付坏		3.4		AGHK	普	明褐色	40	J-35 風化著しい
33	土師高台付坏	(13.3)	5.1	5.7	AEGIJK	普	白橙色	50	J-35 内面黒色
34	土師高台付坏	(13.1)	5.4	5.4	AGHIJ	不	黒灰色	55	J-35
35	土師高台付坏	(13.7)	5.2		ACGHIJ	不	暗褐色	75	J-35 墨大 側面線刻 内黒
36	須恵坏	13.2	3.1	6.0	AGIJ	不	暗灰色	100	J-35
37	須恵坏	(14.5)	3.7	(9.7)	ACGIJK	普	暗青灰色	40	J-35
38	須恵坏	(12.5)	3.4	(7.7)	AHIJK	普	暗灰色	15	J-35 窯印あり
39	須恵高台付坏	13.5	4.8		AEGHIK	不	褐色	60	J-35 内面煤付着 酸化炎
40	土錘	2.8×0.8×0.8cm 孔径0.25cm AHJ				普	黒褐色	95	J-35
41	土錘	2.4×1.0×1.0cm 孔径0.3cm AHJ				普	黒褐色	90	J-35
42	鉄釘か	現存長3.5×幅1.1×厚1.1cm							J-36 錆化著しい 両端部欠損
43	鉄釘か	現存長5.6×幅1.9×厚0.7cm							J-36 両端部欠損
44	土錘	3.4×1.0×1.0cm 孔径0.3cm AHIJ				普	黒褐色	100	J-37
45	坏	(14.8)	3.6		ACHIJ	普	明褐色	65	K-38
46	須恵坏		1.5	(6.6)	AGIJ	普	暗青灰色	45	K-38
47	上師坏	11.3	3.2	7.5	ACGHI	普	明褐色	100	K-38
48	須恵蓋	3.9	1.9		AIJ	普	暗灰色	65	L-37
49	甕	(24.4)	4.6		ACHIJK	普	褐色	15	L-37
50	貝黒穴質泥岩	法量1.6×幅1.4×厚0.8cm 重量1.6g					明赤褐色		L-37 3孔 被熱
51	貝黒穴質泥岩	法量1.7×幅1.1×厚0.7cm 重量1.6g					明褐色		L-37 3孔 被熱
52	蓋	4.1	1.7		HI	普	緑黄色	75	L-38 灰釉 全面に釉有
53	須恵坏	(14.3)	3.9	7.7	AEIJK	普	明灰色	50	L-38
54	台付甕	(12.3)	14.2		ACEHI	普	明褐色	40	L-38 黒斑
55	土錘	3.6×1.0×0.9cm 孔径0.3cm AIJ				普	暗褐色	95	L-38 重量3.8g
56	土錘	3.4×1.0×1.1cm 孔径0.4cm AHIJ				普	明褐色	100	L-38 重量4.2g 黒斑有
57	土錘	3.6×1.1×1.1cm 孔径0.4cm ACGHIJ				普	明褐色	100	L-38 重量4.3g
58	土錘	3.8×1.0×1.0cm 孔径0.4cm HJ				普	暗褐色	90	L-38 重量4.0g
59	貝黒穴質泥岩	法量2.5×幅1.8×厚1.1cm 重量3.0g					明赤褐色		L-38 3孔 被熱
60	貝黒穴質泥岩	法量2.7×幅2.7×厚1.6cm 重量5.1g					明赤褐色		L-38 4孔 被熱
61	貝黒穴質泥岩	法量4.9×幅3.1×厚2.3cm 重量28.9g					明橙褐色		L-38 3孔 被熱
62	鉄滓	法量2.7×幅2.3×厚1.7cm 重量14.7g					灰褐色		L-39
63	土師高台付坏		2.7	(6.5)	ACGHJK	普	暗褐色	40	M-39
64	須恵坏	11.9	3.5	7.0	AEGJK	普	明灰色	80	M-39
65	須恵坏		1.3	(7.8)	AEIJK	普	暗灰色	25	M-39
66	須恵坏		1.6	(8.4)	AHIJ	良	暗灰色	35	M-39
67	須恵坏		1.4	5.8	ACIJ	普	灰色	25	M-39
68	土師高台付坏		5.0	7.0	ACHIJ	不	暗褐色	40	M-39 器面は荒れている
69	須恵坏		1.1	6.1	AEIJ	良	青灰色	85	M-39
70	須恵高台付坏		2.4	5.5	AGIJK	普	灰色	70	M-39 外面に黒斑
71	須恵高台付坏		3.8	(6.1)	GIJK	不	灰色	25	M-39
72	台付甕		3.7	(9.9)	AGHIJ	普	明橙褐色	55	M-39
73	須恵壺	(24.7)	4.4		AEIJ	普	黒灰色	15	M-39 自然釉 (内)暗灰色(外)黒灰色
74	須恵壺	(20.1)	9.6		AGIJ	良	暗青灰色	35	M-39 自然釉
75	不明鉄製品	現存長4.0×幅1.3×厚0.8cm							M-39 錆化著しい
76	鉄滓	現存長4.6×幅3.5×厚1.1cm					灰褐色		M-39 内面気泡多
77	須恵壺	(23.1)	5.2		AEGIJ	良	黒灰色	15	M-39 自然釉
78	土師高台付坏		2.0	8.3	GHIJK	普	橙褐色	65	M-40 磨滅著しい
79	須恵坏		1.2	(9.6)	AGIJ	普	灰色	40	
80	須恵壺		4.6	(12.6)	AIJ	普	暗灰色	35	
81	須恵坏	(12.8)	3.6	6.7	AIJK	普	灰色	65	
82	須恵坏	13.5	4.5	5.9	AEGIJ	普	暗灰色	95	
83	坩	(9.4)	6.0		ACGHIJ	普	橙褐色	55	器面は風化著しい

グリッド出土・表採遺物等観察表（第308・309図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	須恵坏		1.4	8.0	AEGIJ	普	青灰色	85	A区
2	須恵坏		2.1	(6.8)	AEGIJ	普	灰色	20	A区
3	須恵坏		2.5	(5.8)	AEGIJK	普	灰色	35	A区
4	甕	(22.2)	8.7		AGH(多)IJK	普	白橙色	20	A区
5	板碑	現存長9.4×幅8.0×厚1.9cm　緑泥片岩製							A区
6	須恵坏		1.8	7.2	AIJK	普	灰色	25	B区
7	上師坏		1.3	(6.4)	AGHIJ	普	橙褐色	35	B区　器面は風化している
8	須恵甕		4.8	(9.7)	AEGIJK	普	青灰色	35	B区
9	貝巣穴痕泥岩	法量1.4×幅0.9×厚0.8cm　重量0.6g					白灰色		B区　4孔か　被熱か
10	貝巣穴痕泥岩	法量1.5×幅1.2×厚0.6cm　重量0.7g					明橙褐色		B区　2孔　被熱か
11	貝巣穴痕泥岩	法量1.4×幅0.8×厚0.8cm　重量1.3g					淡赤褐色		B区　2孔　被熱
12	貝巣穴痕泥岩	法量1.6×幅0.9×厚1.2cm　重量1.3g					明橙褐色		B区　1孔　被熱有無不明
13	貝巣穴痕泥岩	法量1.7×幅1.2×厚0.5cm　重量0.8g					明赤褐色		B区　6孔か　被熱
14	貝巣穴痕泥岩	法量2.1×幅1.5×厚1.3cm　重量3.1g					淡赤褐色		B区　2孔　被熱
15	貝巣穴痕泥岩	法量1.9×幅1.2×厚1.3cm　重量2.3g					明橙褐色		B区　2孔　被熱か
16	貝巣穴痕泥岩	法量2.5×幅1.2×厚1.0cm　重量1.6g					明赤褐色		B区　4孔　被熱か
17	貝巣穴痕泥岩	法量2.0×幅1.6×厚1.2cm　重量3.5g					明赤褐色		B区　3孔　被熱
18	貝巣穴痕泥岩	法量2.3×幅1.9×厚1.1cm　重量3.2g					淡赤褐色		B区　4孔　被熱
19	磨石	現存長8.0×幅8.3×厚3.6cm　重量247.5g　結晶片岩製							
20	磨石	現存長12.6×幅5.85×厚3.3cm　重量324.2g　安山岩製　完形							
21	石皿	現存長12.4×幅9.7×厚6.9cm　重量999.2g　閃緑岩製　25							
22	磨石	現存長20.2×幅9.7×厚6.7cm　重量1690.1g　砂岩製　完形							
23	磨石	現存長11.3×幅9.5×厚5.55cm　重量813.0g　安山岩製　65							

（2）中近世

（a）溝跡・ピット

溝跡

B区の東端部において中世面が確認されているが、検出された溝跡は1条である。

第95号溝跡(第310図)

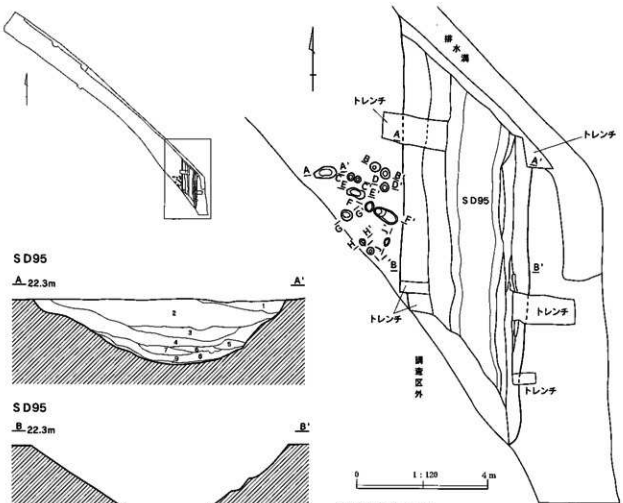
O・P・Q－42グリッドにかけて位置する。N-1°-Eの向きで、南北に走る。検出し得た溝の長さは13.20mで、上幅3.80～3.95m、下幅0.80～1.10m、深さ197～228cmを測る。深さについては、遺構確認面での数値である。調査区境の土層断面を観察すると、耕作土直下から溝の掘り込みが始まっており、実際にはさらに1m程深かったことになる。溝跡の掘り込みは、古代の面にまで及んでおり、底面は青灰色粘土層に達していた。調査した範囲内では、平面形は直線状を呈し、底面は比較的平坦である。壁面は緩やかに立ち上がるが、東側壁面に段をもつ。断面形は、椀状に近い。カワラケの小破片がごく少数出土しているが、図化し得るものはなかった。

ピット(第310図)

B区で検出された中世面では、溝跡1条の他に13本のピットが確認された。いずれも第95号溝跡の西側に位置し、比較的まとまっているが、柵列や掘立柱建物跡を想定させるような並びは認められなかった。各ピットの長径×短径×深さは、以下のとおりである。

P830＝66×35×38cm、P831＝30×28×9cm、P832＝30×28×10cm、P833＝22×20×8cm、P834＝18×18×8cm、P835＝28×23×9cm、P836＝55×25×17cm、P837＝30×23×7cm、P838＝75×33×18cm、P839＝35×30×10cm、P840＝16×15×6cm、P841＝20×20×9cm、P842＝26×16×2cm。

カワラケの小破片がごく少数出土しているが、図化し得るものはなかった。



中世面SD95 A－A'
1 暗灰褐色土 鉄分少 砂質
2 褐灰色土 鉄分少、粘土ブロック(1cm)多 粘質
3 暗褐色土 鉄分やや多、粘土ブロック(1cm)少 粘質
4 赤褐色土 3制より明い 鉄分やや多、粘土ブロック(0.5～1cm)少 粘質
5 明褐色土 鉄分少、褐色土ブロック(2～3cm)多 粘質
6 明褐色土 鉄分やや多、褐色土ブロック(3～5cm)多 粘質
7 灰褐色土 鉄分・粘土ブロック(1cm)少 砂質
8 暗灰褐色土 鉄分少、粘土ブロック(0.5～1cm)微量 粘質
9 褐色土 鉄分少、粘土ブロック(2～3cm)やや多 砂質

ピット830
1 灰褐色土 焼土粒少、炭化物粒子多
2 褐灰色土 灰褐色土ブロック多
ピット831・832
1 褐灰色土 炭化物粒子多
2 灰褐色土 炭化物粒子若干
3 灰褐色土 炭化物粒子若干
ピット833・834
1 灰色土 炭化物粒子若干
2 灰色土 灰褐色土粒多、焼土粒・炭化物粒子若干
ピット835
1 褐灰色土 焼土粒若干、炭化物粒子多
2 灰褐色土 褐灰色土粒多
ピット836
1 灰褐色土 焼土粒・炭色ブロック・炭化物粒子多
ピット837・838
1 褐灰色土 灰褐色ブロック多、炭化物粒子若干、焼土粒微
2 灰褐色土 炭化物粒子・焼土粒微
ピット839
1 灰褐色土 焼土粒多、灰色ブロック・炭化物粒子若干
ピット840
1 灰褐色土 灰色ブロック多、炭化物粒子若干
ピット841
1 褐灰色土 炭化物粒子若干
ピット842
1 灰褐色土 灰色ブロック・炭化物ブロック若干

第310図 B区中近世溝・ピット

古宮遺跡遺構新旧対照表
二面

区	新番号	旧番号
A区	SJ1	SJ88
	SJ2	SX3・SJ89
	SJ3	SJ81
	SJ4	SJ80
	SJ5	SJ79
	SJ6	SJ85
	SJ7	SJ84
	SJ8	SJ82
	SJ9	SJ87
	SJ10	SJ86
	SJ11	SJ83
B区	SJ12	SJ3
	SJ13	SJ6
	SJ14	SJ5
	SJ15	SJ2
	SJ16	SJ4
	SJ17	SJ7
A区	SK1	—
	SK2	—
	SK3	—
	SK4	—
	SK5	—
	SK6	—
	SK7	—
	SK8	SK111
	SK9	—
	SK10	—
	SK11	—
	SK12	—
	SK13	SK130
	SK14	SK112
	SK15	—
	SK16	—
	SK17	—
	SK18	SK131
	SK19	SK129
	SK20	—
	SK21	—
	SK22	SK106
	SK23	SK114
	SK24	SK126
	SK25	SK127
	SK26	SK115
	SK27	SK116
	SK28	SK113

区	新番号	旧番号
	SK29	SK101
	SK30	SK105
	SK31	—
	SK32	SK102
	SK33	SK104
	SK34	—
	SK35	SK94
	SK36	SK95
	SK37	SK100
	SK38	SK98
	SK39	SK103
	SK40	—
	SK41	—
	SK42a	—
	SK42b	SK128
	SK43	SK107
	SK44	SK110
	SK45	—
	SK46	SK120
	SK47	—
	SK48	—
	SK49	—
	SK50	SK119
	SK51	SK118
	SK52	SK124
	SK53	SK132
	SK54	SK123
	SK55	SK122
	SK56	SK121
	SK57	SK92
	SK58	SK125
	SK59	—
	SK60	—
	SK61	—
	SK62	SK91
	SK63	SK109
B区	SK64	SK27
	SK65	SK33
	SK66	—
	SK67	SK28
	SK68	—
	SK69	—
	SK70	SK32
	SK71	—
	SK72	SK26
	SK73	SK30

区	新番号	旧番号
	SK74	SK29
	SK75	SK16
	SK76	SK24
	SK77	SK17
	SK78	SK23
	SK79	SK20
	SK80	SK22
	SK81	—
	SK82	SK19
	SK83	SK18
	SK84	SK39
	SK85	SK35
	SK86	SK36
	SK87	SK37
	SK88	SK38
	SK89	—
	SK90	SK34
	SK91	—
C区	SK92	W-47GP1
	SK93	SD20内
	SK94	SK2
	SK95	SD19内
	SK96	SK3
	SK97	SD14内
	SK98	AA-48GP6
	SK99	AA-48GP5
	SK100	SK1
	SK101	AB-48GP4
	SK102	AB-49GP3
A区	SD1	SD20
	SD2	SD21
	SD3	SD22
	SD4	SD34
	SD5	SD17
	SD6	SD18
	SD7	—
	SD8	SD19
	SD9	SD28
	SD10	SD29
	SD11	SD30
	SD12	SD32
	SD13	SD31
	SD14	—
	SD15	—
	SD16	SD33

区	新番号	旧番号
	SD17	SD26
	SD18	SD27
	SD19	—
	SD20	SD23
	SD21	SD25
B区	SD22	SD35
	SD23	SD28
	SD24	SD29
	SD25	SD26
	SD26	SD27
	SD27	—
	SD28	SD33
	SD29	SD32
	SD30	SD25
	SD31	SD30
	SD32	SD31
	SD33	SD24
	SD34	—
	SD35	—
	SD36	SD23
	SD37	SD22
	SD38	SD34
	SD39	SD36
C区	SD40	SD20
	SD41	SD18
	SD42	SD17
	SD43	SD16
	SD44	SD15
	SD45	SD13
	SD46	SD12
A区	SB1	SB3
	SB2	SB5
	SB3	SB4
	SB4	SB2
B区	SB5	—

一面

区	新番号	旧番号	区	新番号	旧番号	区	新番号	旧番号	区	新番号	旧番号
A区	SJ18	SJ2		SJ65	SJ47		SK113	SK21		SK160	SK67
	SJ19	SJ14		SJ66	SJ48		SK114	SK10		SK161	—
	SJ20	SJ15		SJ67	SJ30		SK115	SK39		SK162	—
	SJ21	SJ1		SJ68	SJ31		SK116	SK24		SK163	SK49
	SJ22	SJ23		SJ69	SJ45		SK117	SK22		SK164	—
	SJ23	SJ16		SJ70	SJ63		SK118	SK37		SK165	SK57
	SJ24	SJ19		SJ71	SJ56		SK119	SK45		SK166	SK46
	SJ25	SJ54		SJ72	SJ50		SK120	SK65		SK167	SK76
	SJ26	SJ10		SJ73	SJ36		SK121	SK3		SK168	—
	SJ27	SJ4		SJ74	SJ49		SK122	SK2		SK169	SK64
	SJ28	SJ18		SJ75	SJ69		SK123	SK4		SK170	SK63
	SJ29	SJ5		SJ76	SJ58		SK124	SK13		SK171	—
	SJ30	SJ12		SJ77	SJ59		SK125	SK14		SK172	—
	SJ31	SJ7		SJ78	SJ61		SK126	SK8		SK173	SK77
	SJ32	SJ13		SJ79	SJ64		SK127	SK12		SK174	—
	SJ33	SJ27		SJ80	SJ70		SK128	SK33		SK175	—
	SJ34	SJ26		SJ81	SJ65		SK129	SK38		SK176	—
	SJ35	SJ24		SJ82	SJ62		SK130	SK32		SK177	—
	SJ36	SJ25		SJ83	SJ60		SK131	SK29		SK178	—
	SJ37	SJ17		SJ84	SJ66		SK132	SK62		SK179	—
	SJ38	SJ21		SJ85	SJ53		SK133	SK30		SK180	SK68
	SJ39	SJ20		SJ86	SJ71		SK134	SK61		SK181	SK72
	SJ40	SJ22		SJ87	SJ67		SK135	SK31		SK182	SK53
	SJ41	SJ3		SJ88	SJ68		SK136	SK7		SK183	SK69
	SJ42	SJ29		SJ89	SJ72		SK137	SK6		SK184	SK78
	SJ43	SJ37		SJ90	SJ75		SK138	SK15		SK185	—
	SJ44	SJ28		SJ91	SJ76		SK139	SK20		SK186	SK81
	SJ45	SJ38		SJ92	SJ74		SK140	SK16		SK187	—
	SJ46	SJ6		SJ93	SJA		SK141	SK17		SK188	—
	SJ47	SJ11		SJ94	SJ73		SK142	SK18		SK189	—
	SJ48	SJ9		SJ95	SJ78		SK143	SK41		SK190	—
	SJ49	SJ8		SJ96	SJ77		SK144	SK44		SK191	SK73
	SJ50	SJ57	B区	SJ97	SJ1		SK145	SK47		SK192	—
	SJ51	SJ39					SK146	SK55		SK193	SK71
	SJ52	SJ34	A区	SB6	SB1		SK147	SK60		SK194	SK86
	SJ53	SJ43	B区	SB7	SB1		SK148	SK43		SK195	SK89
	SJ54	SJ44					SK149	SK59		SK196	—
	SJ55	SJ46	A区	SK103	SK26		SK150	SK58		SK197	SK84
	SJ56	SJ35		SK104	SK25		SK151	SK35		SK198	SK85
	SJ57	SJ42		SK105	SK56		SK152	SK50		SK199	SK87
	SJ58	SJ41		SK106	SK28		SK153	SK48		SK200	SK83
	SJ59	SJ40		SK107	SK1		SK154	SK42		SK201	SK82
	SJ60	SJ52		SK108	SK34		SK155	—	B区	SK202	SK5
	SJ61	SJ51		SK109	SK9		SK156	—		SK203	SK6
	SJ62	SJ32		SK110	SK54		SK157	—		SK204	SK1
	SJ63	SJ33		SK111	SK23		SK158	SK79		SK205	—
	SJ64	SJ55		SK112	SK11		SK159	—		SK206	—

一面

区	新番号	旧番号
	SK207	—
	SK208	SK4
	SK209	SK2
	SK210	SK21
	SK211	SK7
	SK212	SK15
	SK213	SK13
	SK214	—
	SK215	SK10
	SK216	SK8
	SK217	SK9
	SK218	SK11
	SK219	SK12
	SK220	SK14
	SK221	—
C区	SK222	—
	SK223	—
A区	SD47	SD2
	SD48	SD14
	SD49	SD1
	SD50	SD3
	SD51	—
	SD52	—

区	新番号	旧番号
	SD53	SD15
	SD54	SD4
	SD55	SD7
	SD56	SD6
	SD57	SD5
	SD58	SD10
	SD59	SD16
	SD60	SD9
	SD61	SD8
	SD62	SD13
B区	SD63	SD18
	SD64	SD11
	SD65	SD12
	SD66	SD17
	SD67	SD3
	SD68	SD4
	SD69	SD5
	SD70	SD6
	SD71	SD7
	SD72	SD8
	SD73	SD10
	SD74	SD9
	SD75	SD14
	SD76	SD13

区	新番号	旧番号
	SD77	SD15
	SD78	SD16
	SD79	SD2
	SD80	—
	SD81	SD20
	SD82	—
	SD83	—
	SD84	SD19
C区	SD85	SD2
	SD86	SD11
	SD87	SD1
	SD88	SD4
	SD89	SD3
	SD90	SD5・6
	SD91	SD7
	SD92	SD8
	SD93	SD9
	SD94	SD10
B区	SD95	SD1
A区	SE1	SE3
	SE2	SE1
	SE3	SE2
	SE4	SE4

区	新番号	旧番号
	SE5	SE5
B区	SE6	SE1
C区	SE7	SE1
	SE8	SE2
	SE9	SE4
	SE10	SE3
	SE11	SE6
	SE12	SE5
	SE13	SE7
	SE14	SE8
	SE15	SE9
	SE16	SE10
	SE17	SE19
	SE18	SE11
	SE19	SE14
	SE20	SE12
	SE21	SE15
	SE22	SE16
	SE23	SE13
	SE24	SE17
	SE25	SE18

Ⅳ　中条条里遺跡

1．調査の概要

中条条里遺跡は、熊谷市大字生田塚144番地他に所在する古墳時代前期を中心とした遺跡である。

発掘調査は今回、第1次から第3次まで行われた。その期間と面積は、以下のとおりである。

第１次調査　平成13年10月1日～平成14年1月31日まで　5,280㎡

第２次調査　平成14年２月１日～平成14年３月22日まで　1,600㎡

第３次調査　平成14年6月20日～平成14年10月31日まで　2,500㎡

遺跡は、荒川と利根川に挟まれた妻沼低上に立地するが、位置的に荒川新扇状地との境界域に近いといえる。そのためか、扇状地形の伏流水上昇によって発生する湧水を水源とする中小の河川が多数みられる。これらの河川は、基本的に西から東へと流下しながら、さまざまに流路の移動を繰り返すことによって、自然堤防と後背湿地が複雑に形成されていったと推定される。

中条条里遺跡は、幾つかの自然堤防を取り込みながら広がる広大な後背湿地上に位置している。今回の発掘調査では、西端部に大塚古墳をのせる自然堤防の、南側に広がる後背湿地が主な調査対象地となった。調査開始以前は、すべて水田域であり、遺構確認面は水田面下約１ｍである。

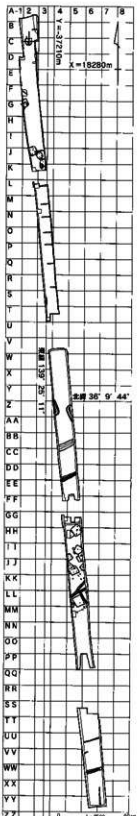
調査区は、農道や用水路によって5箇所に分断されているため、便宜上北側の2ブロックをＡ区、中間の2ブロックをＢ区、南端の1ブロックをＣ区と呼称した。調査の結果検出された遺構は、以下のとおりである。

竪穴住居跡17軒

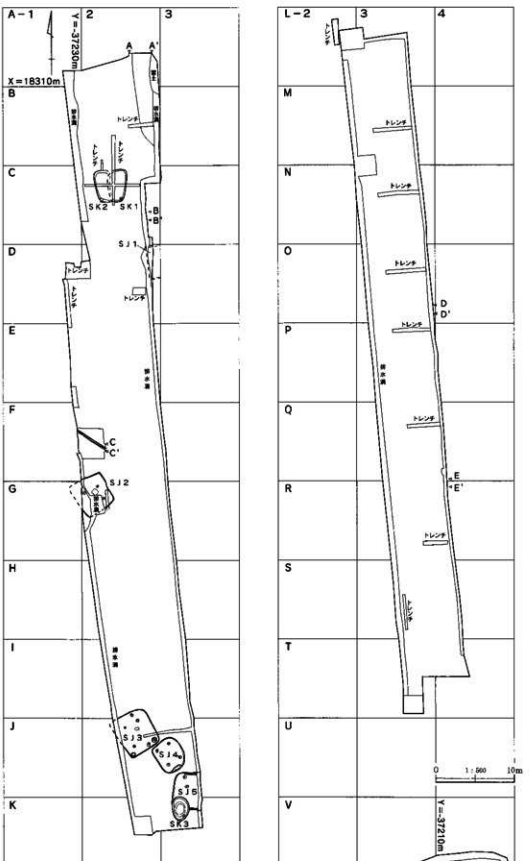
土壙6基

溝跡7条

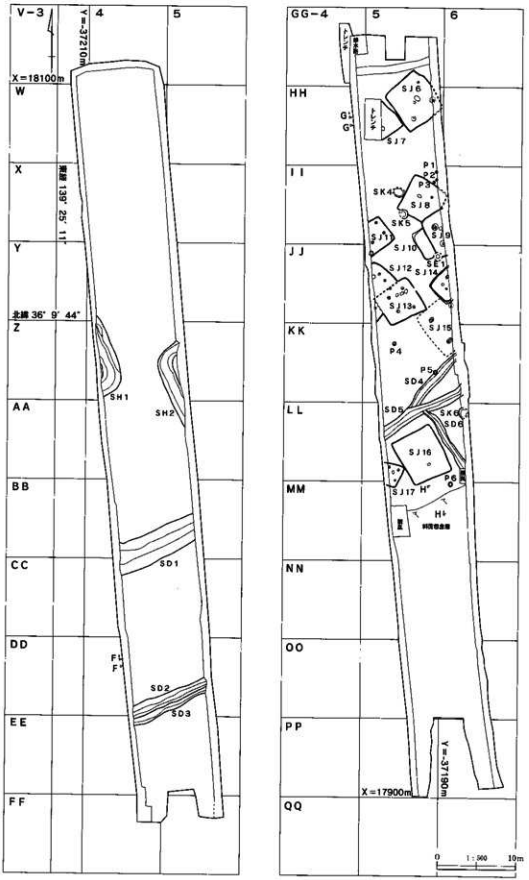
方形周溝墓2基



第311図　中条条里遺跡全測図



第312図　中条条里遺跡A区全測図



第313図　中条条里遺跡B区全測図

井戸跡1基

ピット6本

土器集中1箇所

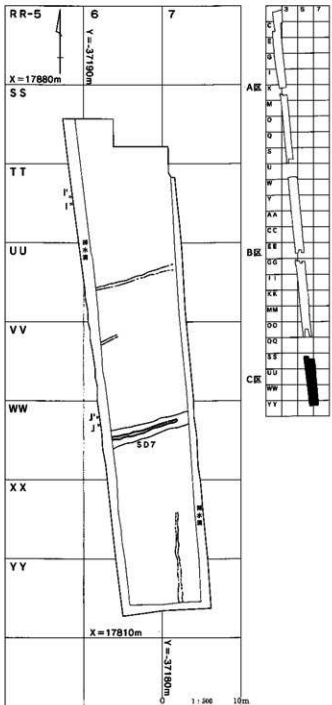
遺跡名の由来である、中条条里に関連すると思われる遺構は検出されなかった。しかし、条里の区割推定線と、調査区を分断する東西方向の農業用水路とがほぼ重なるものがみられ、現在にまで区割が踏襲されている可能性がある。

発掘調査時の遺構確認面では、一部を除いて微地形は不明瞭であった。ここでは二つの住居跡群が検出されており、北側（A区）をⅠ群、南側（B区）と仮称する。Ⅰ群の北側には、現状においても微高地となっている自然堤防が展開している。Ⅰ群は、この自然堤防に向かって、さらに北側に続く可能性が考えられる。見方を変えるならば、現状では調査区一帯は、水田域であったため微地形が失われているが、Ⅰ群または、方形周溝墓による墓域までが自然堤防にのっているものと考えられる。この方形周溝墓と、Ⅱ群の住居跡群の中間に東西に走る2本の溝跡は、二つの自然堤防の境界線に相当すると思われる。

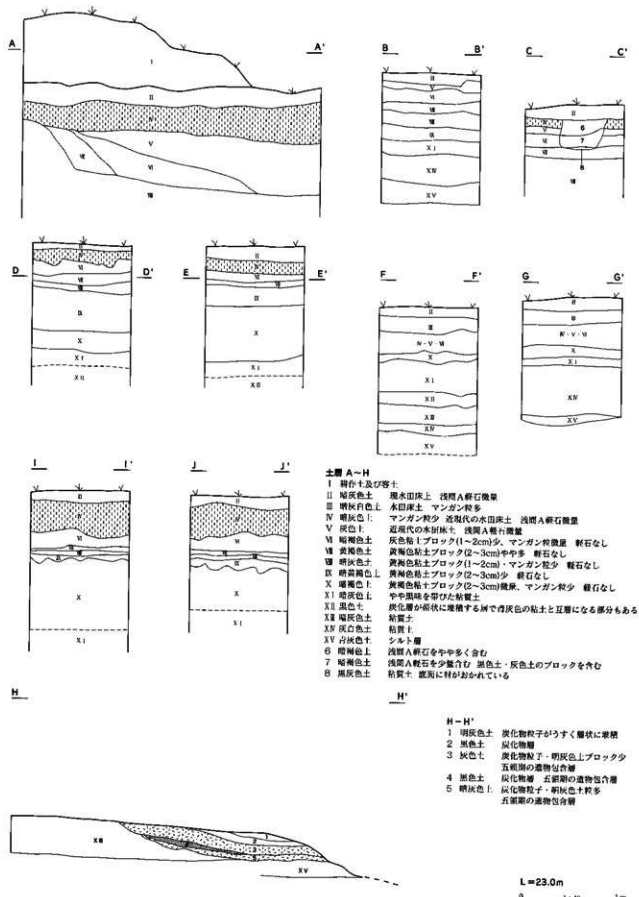
Ⅱ群のすぐ南からは傾斜が始まっており、北側の溝跡までが微高地であるとすれば、Ⅱ群は、両者に挟まれた、南北幅50m程の東西方向に広がる自然堤防上に立地していると推測される。

そして、これら集落域よりも低い地域が、往時の水田域に転換していったものと考えられる。

C区には古墳時代前期の遺構は検出されず、浅間B軽石が散在する水田面の一部が認められたのみであった。言い換えるならば、この部分はその時期まで降って、水田域として活用されるに至ったものと思われる。



第314図　中条条里遺跡C区全測図



土層 A～H

I 耕作土及び客土
II 暗灰色土　現水田床土　浅間A軽石微量
III 明灰色土　本田床土　マンガン粒多
IV 明灰色土　マンガン粒少　近現代の水田床土　浅間A軽石微量
V 灰色土　近現代の本田床土　浅間A軽石微量
VI 暗褐色土　灰色粘土ブロック(1～2cm)少、マンガン粒微量　軽石なし
VII 黄褐色土　黄褐色粘土ブロック(2～3cm)やや多　軽石なし
VIII 明灰色土　黄褐色粘土ブロック(1～2cm)・マンガン粒少　軽石なし
IX 明黄褐色土　黄褐色粘土ブロック(2～3cm)少　軽石なし
X 暗褐色土　黄褐色粘土ブロック(2～3cm)微炭、マンガン粒少　軽石なし
XI 暗灰色土　やや黒味を帯びた粘質土
XII 黒色土　炭化層が縞状に堆積するIVで青灰色の粘土と互層になる部分もある
XIII 暗灰色土　粘質土
XIV 灰白色土　粘質土
XV 青灰色土　シルト層
6 暗褐色土　浅間A軽石をやや多く含む
7 暗褐色土　浅間A軽石を少量含む　黒色土・灰色土のブロックを含む
8 黒灰色土　粘質土　底面に材が置かれている

H－H'
1 明灰色土　炭化物粒子がうすく層状に堆積
2 黒色土　炭化物層
3 灰色土　炭化物粒子・明灰色土ブロック少
五領期の遺物包含層
4 黒色土　炭化物層　五領期の遺物包含層
5 明灰色土　炭化物粒子・明灰色土粒多
五領期の遺物包含層

第315図　中条条里遺跡基本土層図

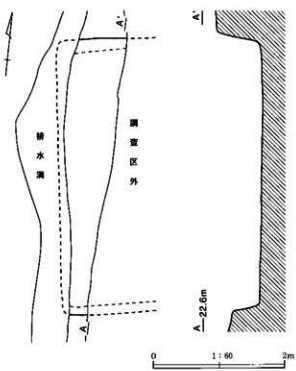
2．検出された遺構と遺物

(a) 住居跡

検出された住居跡は17軒である。すでに述べたように、南北の調査区を西側と東側で別の年度で調査を行う結果となったため、1軒の住居跡が両者にまたがった例（第2号・第3号住居跡）もある。そのためこの2軒については、遺構平面図と遺構写真とでは食い違う結果となった。

第1号住居跡（第316図）

D－2グリッドに位置する。調査区の最北端に位置する住居跡である。表土掘削の段階で炭化物と焼土が検出されたため、手作業による遺構確認に切り替えたが、住居跡のプランは確定できなかった。土層断面を観察しても、壁面の立ち上がりはみられなかったため、床面の一部分のみの遺存であり、調査区の東へさらに続くものと考えられる。炭化物の広がりからみた、住居の規模は南北4.17mで、主軸はほぼ南北または東西を指すと思われる。東西は0.80mまでの確認である。遺物は出土しなかった。



第316図　第１号住居跡

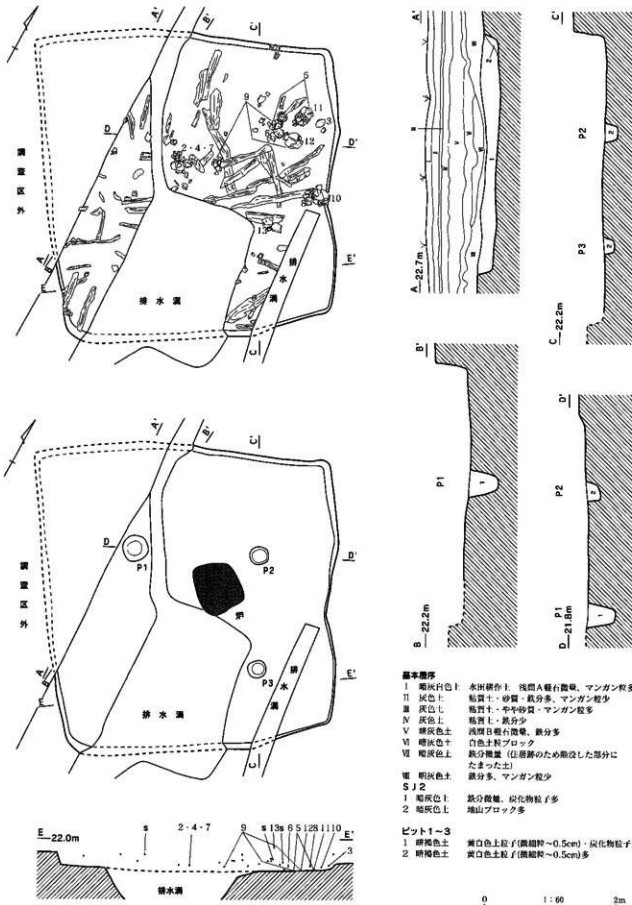
第2号住居跡（第317・318図・319図）

F・G－2グリッドに位置する焼失家屋である。北西コーナーは調査区外となる。調査開始の際に設けたカマ場付近にあったため、遺構の一部分を失ったが、遺存状況そのものは、今回の調査で最も良好なものである。住居の規模は南北4.50m、東西4.25m、深さ20cmで、主軸方向はN-30°-Wである。平面形はやや歪んだ方形であるが、壁面の立ち上がりは垂直に近くしっかりとしたものである。炭化材は、この住居の屋根構造を反映して分布しており、その下からは、潰れた状態の土器が床面直上から出土している。これらの土器は、原位置を保っていると推定される。その他に、炭化材よりも上層から土器片が少数出土しているが、これらについては本住居跡に伴わないものと思われる。床面は粘土質で堅く、掘方はみられなかった。炉は80×68cmの隅丸方形に近い。検出し得た範囲内では、周壁溝はみられなかった。P1～3は柱穴と思われるが、炭化した柱材はみられなかった。柱穴の深さはP1が43cm、P2が21cm、P3が15cmである。遺存していた範囲内では、貯蔵穴は検出されなかった。焼土や炭化材の下から、台付甕などがまとまって出土した。(第318・319図9～13)は、土圧で潰れた状態で出土した。図化し得たのは13点である。

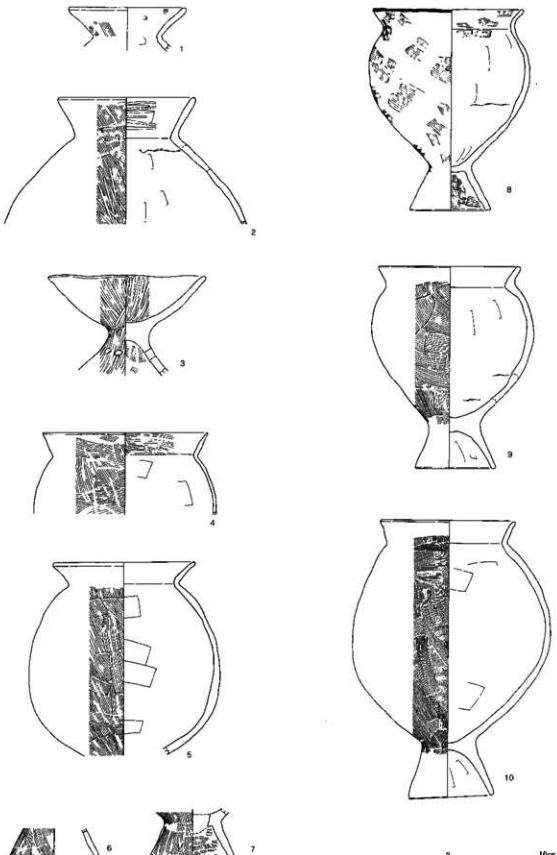
第3号住居跡（第320図・321図）

I・J－2グリッドに位置する。第4号住居跡と近接しているが、重複はしていない。北西コーナーは排水溝によって失われている。住居の規模は、南北5.42m、東西4.72m、深さ10cmで、主軸方向はN-32°-Wである。平面形態はやや歪んだ長方形を呈す。炉の平面形態は長楕円形で、規模は53×33cm、深さは8cmである。

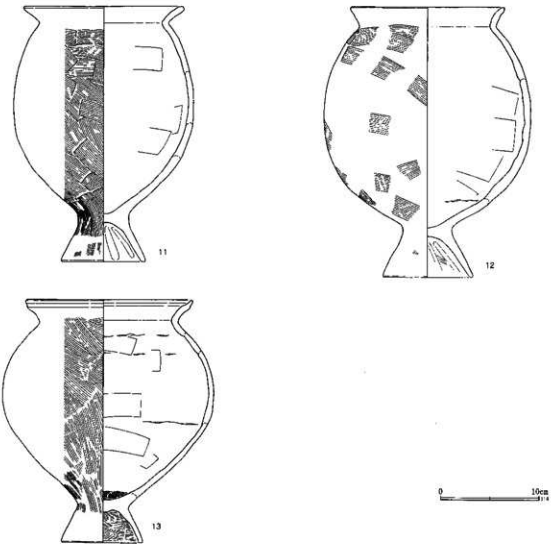
床面は粘質で堅く、掘方はみられなかった。検出し得た範囲内では、周壁溝はみられなかった。P1～3は柱穴と思われるが、P2とP3を90°で結ぶ位置周辺にはピットは検出されなかった。4本目はP6であろうか。この4本の深さは、番号順に35cm・



第317図　第2号住居跡



第318図　第２号住居跡出土遺物(1)



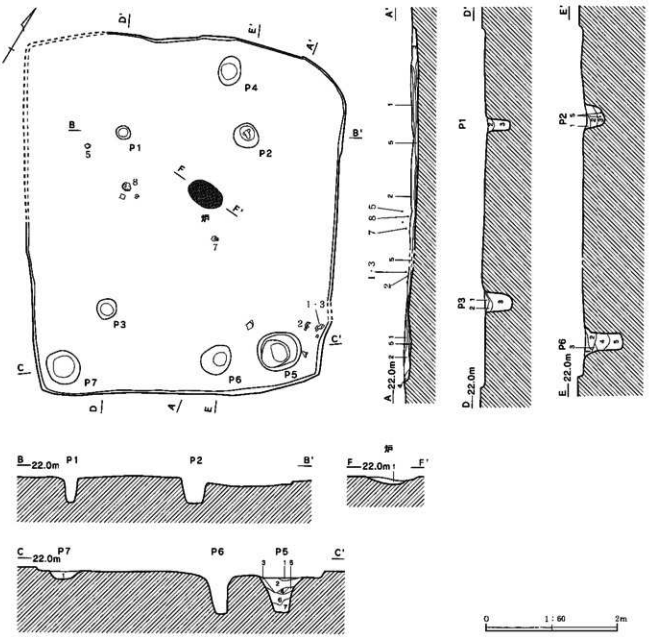
第319図　第２号住居跡出土遺物(2)

第２号住居跡出土遺物観察表（第318・319図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	壺	(12.0)	4.4		ACHIJK	普	褐色	20	器面は荒れている
2	壺	(14.0)	12.7		AGHIJ	普	明橙褐色	80	器面は荒れている
3	高坏	16.0	10.1		AEGIJK	普	明褐色	80	風化している　坏部は歪んでいる
4	甕	(16.8)	8.4		ACGHIJ	普	白橙色	25	器面は荒れている
5	甕	14.4	19.6		AGHIJ	普	黒褐色	60	外面煤付着
6	台付甕		3.5	9.4	ACGHIJ	普	暗褐色	70	
7	台付甕		5.4	8.8	ACEGHIJ	普	橙褐色	40	
8	台付甕	15.5	20.5	8.3	AHI	不	明褐色	75	風化著しい　胴部外面に煤付着
9	台付甕	14.5	20.6	8.2	AGHIJ	良	黒褐色	75	
10	台付甕	13.9	28.5	8.5	AGHIJ	普	橙褐色	85	外面煤付着
11	台付甕	16.1	26.1	8.6	AGHIJK	普	暗褐色	85	
12	台付甕	15.8	27.5	9.1	AGHIJ	不	白橙色	95	風化著しい　調整痕不明瞭
13	台付甕	(17.1)	24.7	8.3	AHIJ	普	明橙褐色	35	外面煤付着

30cm・42cm・56cmを測る。P2の下面中央からは、6×12cmの楕円形の石が出土しているが、礎石的なものであろうか。P5は貯蔵穴と推定される。炉の周辺には、少量ではあるが炭化物が分布していた。

古墳時代前期の土器片が、床面よりやや浮いた状態で出土した。出土した遺物の内、図化し得たのは10点である。



SJ3

1 黒褐色土　地山ブロック(0.5～1cm)・鉄分・マンガン粒・焼土ブロック微量
2 暗褐色土　地山ブロック(0.5～1cm)・鉄分・マンガン粒多
3 褐色土　地山ブロック(0.5～1cm)・鉄分・マンガン粒少
4 明褐色土　地山ブロック多
5 明褐色Ⅰ　地山ブロック多、鉄分少

炉

1 赤色土　焼土層

ピット1～3・7

1 明灰褐色土　粘土ブロック・炭化物粒子やや多
2 明褐色土　粘土ブロック・炭化物ブロック多
3 灰褐色土　粘土ブロックやや多

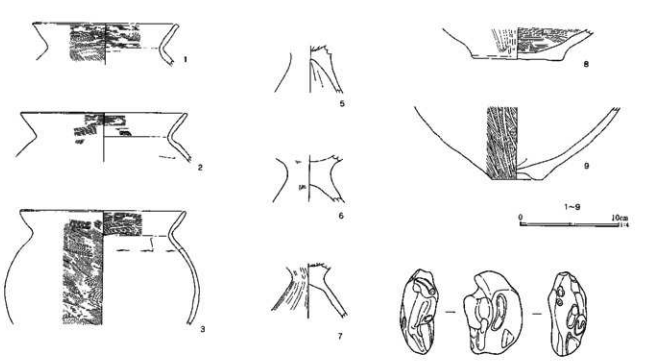
ピット5

1 黒褐色土　地山ブロック少、焼土ブロック(0.5～1cm)、炭化物粒子やや多
2 暗褐色土　地山ブロック(0.5～3cm)・炭化物ブロック(0.5～3cm)少、焼土ブロック・鉄分微量
3 明褐色土　地山ブロック多、鉄分微量
4 灰白色土　鉄分・暗褐色土少　粘土質
5 暗褐色Ⅰ　地山ブロック(0.5cm)・鉄分少、炭化物粒子微量
6 暗褐色Ⅰ　地山ブロック(0.5～1cm)・粘土ブロック・鉄分少
7 褐色土　地山ブロック・鉄分多

ピット6

1 黒褐色土　地山粒・炭化物粒子微量
2 暗褐色土　地山ブロック(2～3cm)多、炭化物粒子少
3 暗褐色Ⅰ　炭化物粒子微量
4 暗褐色Ⅰ　炭化物粒子・地山ブロック(1～2cm)少
5 黒褐色Ⅰ　炭化物粒子・地山ブロック(0.5～1cm)少

第320図　第3号住居跡



第321図　第3号住居跡出土遺物

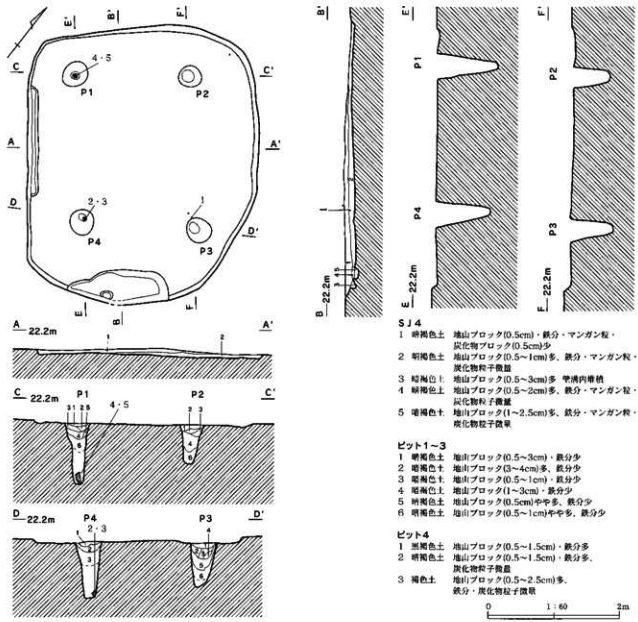
第3号住居跡出土遺物観察表（第321図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	甕	(14.9)	4.2		ACHIJ	普	黒褐色	20	外面煤付着
2	甕	(16.9)	5.0		AHIJ	不	橙褐色	15	風化している
3	甕	(16.9)	11.6		AGHIJ	普	黒褐色	15	
4	台付甕		6.0	9.8	AGHIJK	普	黒褐色	65	器面は荒れている
5	台付甕		4.8		GHIJK	普	橙褐色	75	
6	台付甕		4.7		AGHIJ	普	白橙色	70	風化著しい
7	高坏		5.6		EGHIJ	普	白橙色	75	器面は荒れている
8	壺		3.2	9.1	AGHIJ	普	黒褐色	95	器面は荒れている
9	壺		7.4	5.1	AEGHIJ	普	黒褐色	15	外面に黒斑
10	貝巣穴痕泥岩	法量4.2×3.0×2.7cm　重量12.4g					明赤褐色		13孔　被熱

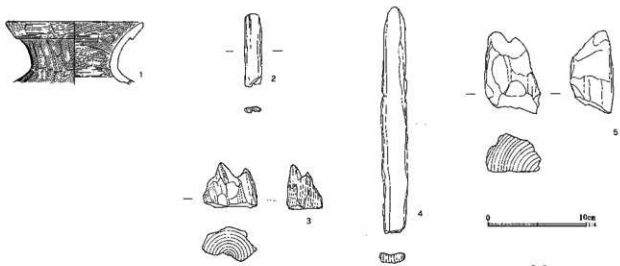
第4号住居跡（第322・323図）

J－2・3グリッドに位置する。第3号住居跡と隣接するが、重複はしていない。プラン全体が残っているが、遺構確認の段階で、一部の柱穴が現れてしまうほどに、壁面の立ち上がりは小さなものであった。住居の規模は、南北4.10m、東西3.53m、深さ17cmで、長軸方向はN-30°-Wである。平面形態はやや歪んだ隅丸の長方形を呈す。床面の一部が消失しているためか、炉跡は検出されなかった。

西側壁面に長さ1.65m、幅0.15m、深さ5cm程の周壁溝がみられる。南側の壁面際には、長さ1.73m、幅0.53m、深さ10cm程の掘方を1箇所もつが、他の部分ではみられない。柱穴が4本検出されているが径35～45cm程で、深さはP1から番号順に91cm・58cm・68cm・86cmを測る。なお、P1とP4の底部には柱材の一部が遺存していた。古墳時代前期の土器が少数出土しているが、図化し得たのは1点のみであった。その他に木製品が4点検出されたが、樹種は不明である。2・3はP4から、4・5はP1からの出土である。



第322図　第4号住居跡



第323図　第4号住居跡出土遺物

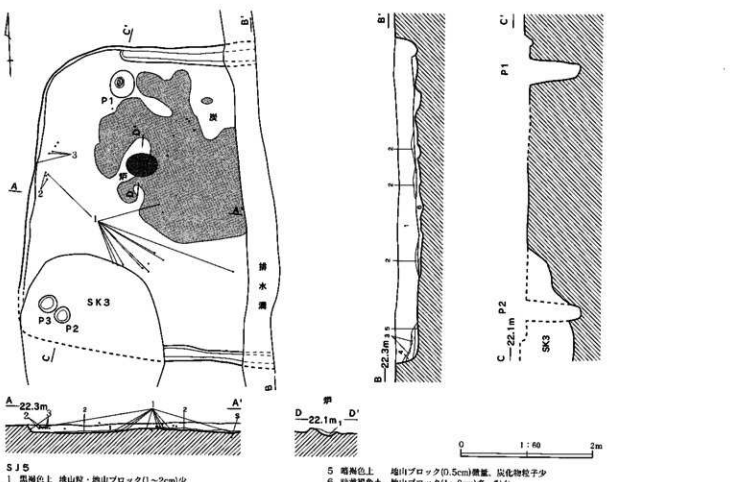
第4号住居跡出土遺物観察表（第323図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	椀	14.1	6.4		AGHIJK	普	白橙色	90	
2	板材	長14.8×幅3.5×厚1.3cm							P4出土　礎板か
3	柱材	長9.2×幅11.0×厚4.4cm							P4出土
4	柱材	長46.4×幅5.4×厚2.0cm							P1出土
5	柱材	長16.4×幅8.8×厚7.8cm							P1出土

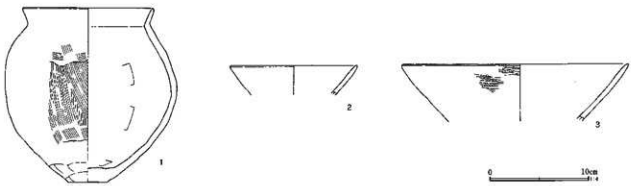
第5号住居跡（第324・325図）

J・K−3グリッドに位置する。住居の南西部分を第3号土壙に切られ、東側は調査区外に続いている。このため東西方向の規模は不明である。住居の規模は、南北4.75m、東西3.45m、深さ12cm、主軸方向はN-4°-E、またはN-86°-Wである。住居の北寄りに、南北約2.50m、東西は確認部分で約2.20m、厚さ数cmの範囲に炭化物が数cmの厚みで分布していたが、図化できる程の部材は検出されなかった。床面は堅く締まっているが、掘方はもたないと思われる。検出し得た範囲内では、周壁溝はみられなかった。

P2は、第3号土壙の下面から検出された。このP2とP1が柱穴と思われる。東側の2本については調査区外にあると思われる。ピットの深さは、P1が78cm、P2が83cmと深く、P3は23cmである。P1の底面には、柱材の一部が遺存していた。古墳時代前期の土器片が少数出土しているが、図化し得たのは3点であった。



第324図　第5号住居跡



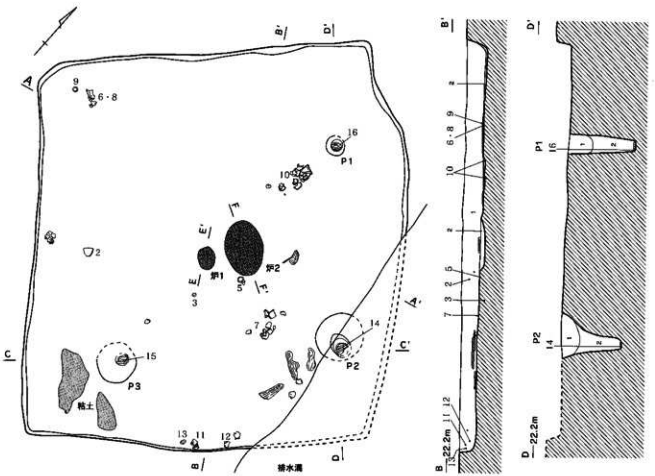
第325図　第5号住居跡出土遺物

第5号住居跡出土遺物観察表（第325図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	甕	13.3	17.7	3.9	AGHIJ	普	暗褐色	75	外面煤付着
2	坩	13.0	3.0		AEGHIJ	不	橙褐色	30	風化著しい
3	高坏	(23.1)	5.8		ACEGHIJ	普	暗橙褐色	25	風化著しい

第6号住居跡（第326・327図）

GG・HH－5グリッドに位置する。第5号住居跡の南約220mにあたり、第6号住居跡から第17号住居跡と第1号住居跡から第5号住居跡とは別の一群と推定される。第6号住居跡は、この一群では最北端にあたる。第7号住居跡に近接するが重複はしていない。東コーナーが、調査のために設けた排水溝によって欠われているが、平面形はやや歪んだ方形を呈するといえる。検出し得た範囲内では、周壁溝はみられなかった。住居の規模は、南北6.03m、東西5.65m、深さ30cmで、主軸方向はN-40°-Wである。平面形態はやや歪んだ隅丸の長方形を呈す。壁面は比較的急角度に立ち上がる。床面が被熱のため焼けている部分が何箇所かあること、炭や炭化材が散在していることなどから、焼失家屋と思われる。しかし、炭化して残った部材が少ない場合、その分炭が多くなると思われるが、炭の残りは少ない。第2号住居跡では焼け残った部材の下から、原位置を保っていると思われる土器が出土したが、第6号住居跡ではまったく検出されていない。これらの点から、焼け残った部材や土器は持ち去った可能性が考えられる。P1～3は柱穴と思われるが、西側の柱穴については、床面にトレンチを入れてみたものの確認することはできなかった。柱穴の深さはP1が102cm、P2が93cm、P3が92cmと深くしっかりとしたものである。これらの柱穴の底面には、板材が各1枚ずつ置かれていたが、礎板としての意味合いが強いと思われる。これら3点の周囲は面取りされているが、これは柱穴内に収めるため、削り取ったものであると考えられる。また、各々1箇所ずつ「×」印が線刻されている。なおP1出土の板材は、本来柄があったと思われる。炉は20cm程の距離をおいて、2箇所検出されたが、どちらもよく焼けている。炉1は35×27cmの楕円形で、深さは3cm、炉2は80×60cmの長楕円形で、深さは5cmである。古墳時代前期の土器片が比較的多く出土している。出土した遺物の内、図化し得たのは16点であった。

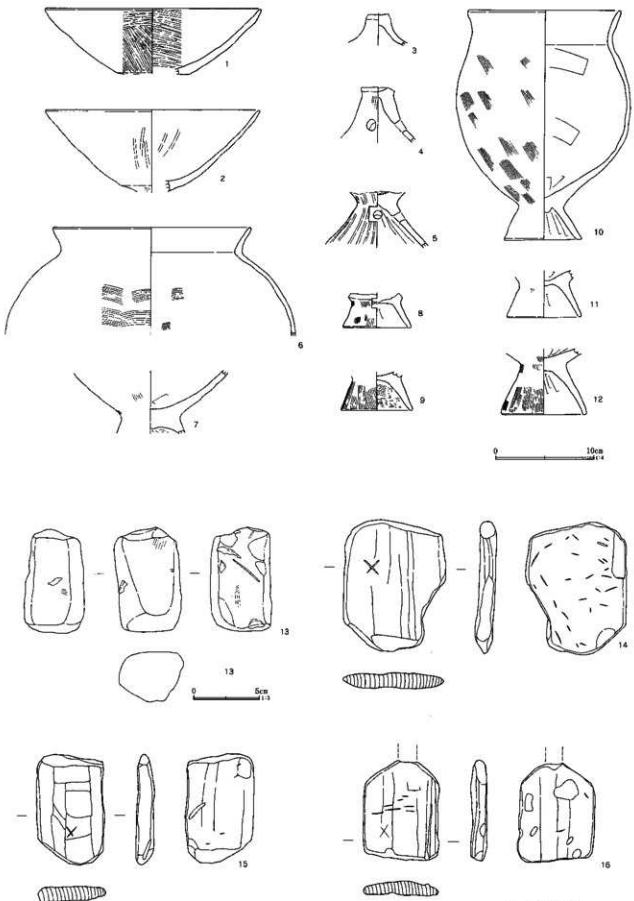


SJ6
1 暗灰色土　炭化物粒子・焼土粒・灰白色土粒・灰白色土ブロック少
　床面直上部は部分的に炭化物粒子を帯状に堆積する
2 灰白色土　灰白色土ブロック　床部は部分的に灰白色土で貼床しており、
　その部分が帯状に堆積して確認できる
3 赤褐色土　焼土層
4 暗灰色土　(1層よりやや明)炭化物粒子微量、灰白色土ブロック少
　軟弱
5 青灰色土　粘土層

ピット1～3
1 暗灰色土　炭化物粒子・地山灰褐色土ブロック(1～3cm)少、
　酸化物多　粘土質
2 暗灰色土　酸化物多、地山灰褐色土大ブロック(10cm)少、
　炭化物粒子を含まない　粘土質

炉
1 暗灰褐色土　炭化物粒子多　炭化物層
2 赤色土　炭化物粒子・酸化鉄少　焼土層

第326図　第6号住居跡



第327図　第6号住居跡出土遺物

第6号住居跡出土遺物観察表（第327図）

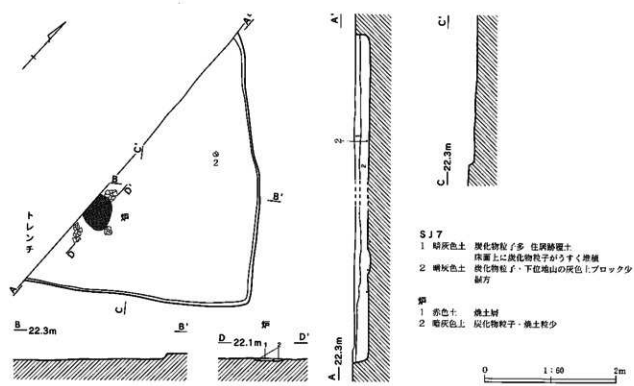
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	高坏	22.0	6.7		AEGHIJK	普	明褐色	85	風化著しい
2	高坏	(21.8)	8.4		AEGHIJ	普	明褐色	25	風化著しい
3	器台		3.2		AGHIJ	不	褐色	70	風化著しく調整が見えない
4	器台		5.6		AGHIJ	普	橙褐色	15	風化著しい
5	高坏		5.7		AGHIJ	普	橙褐色	40	器面は荒れている
6	甕	(20.3)	11.0		ACEG(多)HIJ	不	暗褐色	20	風化著しい
7	台付甕		6.4		HIJ	不	橙褐色	85	風化著しい
8	台付甕		3.6	6.9	AEGHIJK	普	橙褐色	85	器面は荒れている
9	台付甕		3.9	7.3	AEGHIJ	普	白橙色	90	器面は荒れている
10	台付甕	15.7	23.4	7.8	AGHIJ	普	橙褐色	75	器面風化
11	台付甕		4.7	(7.5)	AGHIJ	不	明橙褐色	80	風化著しい
12	台付甕		6.9	(8.7)	ACGHIJK	普	白橙色	70	風化著しい
13	砥石	法量8.0×4.6×3.8cm 重量158.6g 軟質泥岩製 灰白色							
14	板材	長20.1×幅15.6×2.2cm 線刻「×」							P2出土 礎板か
15	板材	長15.5×幅11.4×2.2cm 線刻「×」							P3出土 木製品の転用材か
16	板材	長17.0×幅10.4×2.4cm 線刻「×」							P1出土 礎板か

第7号住居跡（第328図・329図）

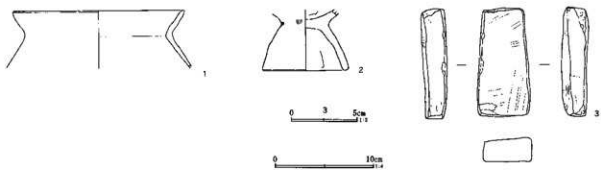
HH−5グリッドに位置する。西側をトレンチに切られており、コーナーは1箇所のみしか残らなかった。残っている範囲内での住居の規模は、南北4.10m、東西3.34m、深さ9cmで、平面形は方形もしくは長方形を呈すと思われる。掘方の深さは13cm程ある。主軸方向はN-48°-E、またはN-42°-Wである。

炉もトレンチによって切られている。残っている範囲内での規模は53×42cm、深さは5cmで、楕円形を呈し、比較的よく焼けている。検出し得た範囲内では、周壁溝はみられなかった。住居全体に掘方をもち、床面は硬い。東側の柱穴を検出できなかったが、この付近に入れた南北方向のサブトレンチによって失われた可能性が高い。

炉の近くから、古墳時代前期の土器片が少数出土しているが、図化し得たのは3点であった。



第328図 第7号住居跡



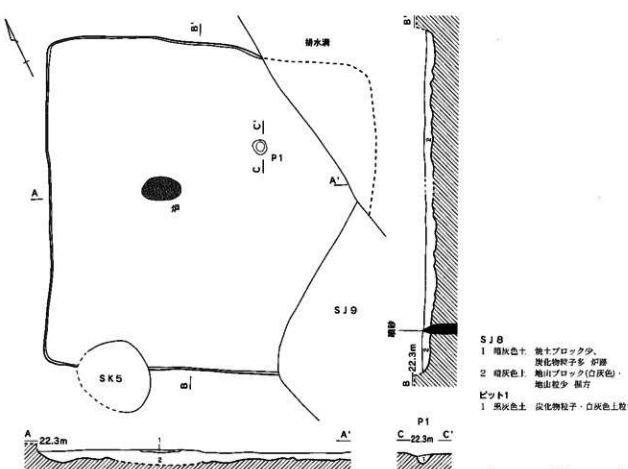
第329図　第７号住居跡出土遺物

第７号住居跡出土遺物観察表（第329図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	甕	(17.6)	5.9		AEG(多)IJ	不	暗橙褐色	15	風化著しい
2	台付甕		6.3	8.7	AGHIJ	不	暗褐色	80	胴面は風化著しい
3	砥石	現存長8.4×幅4.0×厚1.9cm　重量109.6g　凝灰岩製　灰白色　完形							

第8号住居跡（第330図・331図）

Ⅱ－5グリッドに位置する。東側のコーナーは調査範囲外になり、第9号住居跡と第5号土壙に切られる。住居の規模は南北5.03m、東西4.68mまで確認できた。主軸方向はN-65°-Wを指す。住居跡の遺存度はきわめて悪く、遺構確認の際に床面が現れてしまう状況であった。掘方の深さは15cm前後である。検出し得た範囲内では、周壁溝はみられなか



第330図　第８号住居跡

った。炉は住居の北西寄りに位置しており、あまり焼けていない。炉の規模は59×35cmの長楕円形を呈し、深さは5cm程である。古墳時代前期の土器片が少数出土しているが、図化し得たのは2点であった。

第331図　第8号住居跡出土遺物

第8号住居跡出土遺物観察表（第331図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	甕	15.8	10.7		AGHIJ	普	暗橙褐色	25	器面は風化している
2	甕	(16.6)	3.1		AEGHIJ	普	白橙色	15	風化著しい

第9号住居跡（第332・333図1～9）

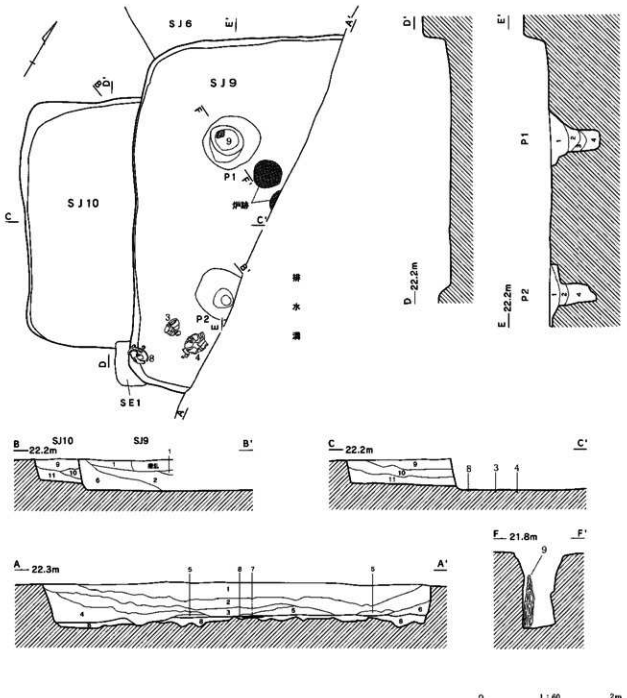
II・JJ－5・6グリッドに位置する。住居東側は調査区外に続く。第10号住居跡と第1号井戸跡を切る。住居の規模は、南北5.32m、東西2.80mまで確認できたにとどまる。床面までの深さは45cmで、掘方の深さは5～10cm程である。床面にはごく少量ではあるが炭化物が広い範囲に分布していた。検出し得た範囲内では、周壁溝はみられなかった。主軸方向はN-29°-W、またはN-61°-Eが考えられる。検出されたピットは2箇所で、柱穴と思われる。柱穴の深さはP1が75cm、P2が70cmあり、掘方も大きなしっかりとした柱穴である。P1の底面からは長さ64.8cm、径14.4×10.4cmの柱材（第333図9）の最下部が遺存していた。この部材は遺存状況が比較的良好で下面は原形をとどめていると推定される。工具痕はあまりみられない。

炉跡が2箇所検出されたが、1つは排水溝によって大部分が失われる結果となった。被熱により、厚さ数cm程が焼土化していた。もう1つの炉跡は、径が43×42cmのほぼ円形で、こちらも被熱により、厚さ数cm程が焼土化していた。掘方をもち、床面は硬く締まっている。南側コーナーと柱穴（P2）の間では、台付甕2点（同図3・4）と壺1点（同図8）が土圧で潰れた状態で検出された。1・5～7はP2からの出土である。図化し得たのは9点である。

第10号住居跡（第332・333図10）

II・JJ－5グリッドに位置する。第9号住居跡と第1号井戸跡に切られる。住居の規模は、南北3.70m、東西1.70mが残っているのみであった。深さは40cmで、壁面の立ち上がりは比較的しっかりとしている。主軸方向はN-32°-W、またはN-58°-Eと考えられる。

検出し得た範囲内では、炉・柱穴・ピット・周壁溝等はみられなかった。古墳時代前期の土器片が少数出土しているが、図化し得たのは1点である。



SJ9・10

1 灰色土　炭化物粒子少、白灰色土粒微量
2 暗灰色Ⅰ　炭化物粒子・白灰色土ブロック少、白灰色土粒多
3 暗灰色Ⅱ　炭化物粒子少、白灰色土粒・白灰色土ブロック多
4 暗灰色土　炭化物粒子多、白灰色土粒やや多　炭化材少
　　床面に炭化物粒子がうすく堆積　一部焼土堆積
5 白灰色十　炭化物粒子・灰色土ブロック多
　　床面との間に炭化物粒子がうすく堆積　一部焼土堆積
6 暗灰色Ⅰ　炭化物粒子少、白灰色土粒多
7 赤灰色土　床面が被熱硬化したもの　炉跡
8 白灰色土　炭化物粒子少、暗灰色土ブロック多　貼床
9 暗灰褐色　白灰色土粒多、炭化物粒子少
10 暗灰褐色　白灰色土粒・炭化物ブロック多
11 暗灰褐色　白灰色土粒・炭化材・炭化物粒子多　床面に堆積する

SJ9 ピット1・2

1 暗灰色土　炭化物粒子・白灰色土粒多
2 暗灰色土　炭化物粒子・白灰色土ブロック多
3 暗灰色土　炭化物粒子・白灰色土粒多
4 青灰色土　炭化物粒子多

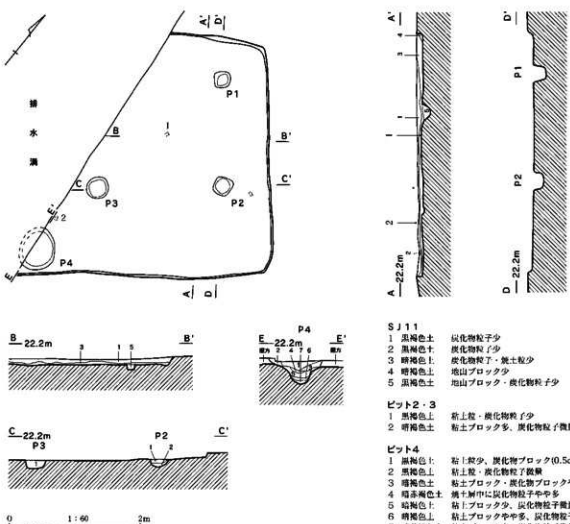
第332図　第9・10号住居跡

第11号住居跡（第334・335図）

Ⅱ・ＪＪ－5グリッドに位置する。住居跡の西側部分は調査区外に続く。住居の規模は、南北3.72ｍで、東西3.80ｍまで検出し得たにとどまる。平面形は長方形と思われるが、遺存状況は悪く深さは10cmである。長軸方向はN-50°-Eを指す。

Ｐ1～3は柱穴と思われるが、深さは番号順に20cm・15cm・12cmときわめて浅いものである。この3本の位置関係からみて、4本目の柱穴は調査範囲外であろう。Ｐ4は深さ25cm、貯蔵穴と思われる。検出し得た範囲内では、炉や周壁溝はみられなかった。床面は硬く、部分的に掘方をもつ。古墳時代前期の土器片が、ごく少数出土しているが、図化し得たのは2点である。

第335図　第11号住居跡出土遺物



第334図　第11号住居跡

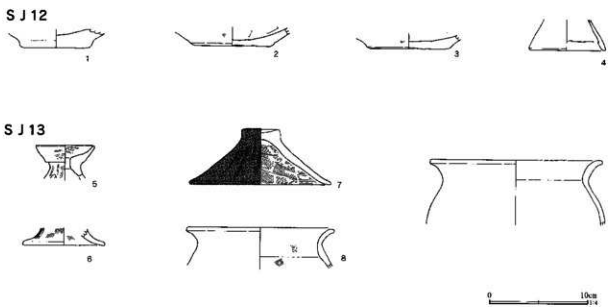
第11号住居跡出土遺物観察表（第335図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	器台		3.9		AGHIJ	普	褐色	65	風化著しい
2	台付甕		4.5		AHIJ	不	明橙褐色	45	風化著しい　砂粒多

第12号住居跡（第337・336図1～4）

ＪＪ－5グリッドに位置する。住居西側は調査区外に続き、南側は第13号住居跡に切られる。住居の規模は、南北（4.92）mで、東西5.10mまで検出できたにとどまる。炉の位置から、短軸（N-45°-W）が主軸と考えられる。深さは30cmである。隅丸の方形または長方形を呈すると思われる。床面上には、焼失した家屋の、建築部材と思われる炭化材が少数存在するが、再利用できる部材は他へもち去ったということであろうか。掘方はもたない。

本住居跡に伴うと考えられるピットが4本検出されているが、P1・P3・P4は柱穴と思われる。柱穴の径は30cm前後で、深さはP1が30cm、P3が43cm、P4が30cm、ちなみにP2は20cmである。検出し得た範囲内では、炉や周壁溝はみられなかった。古墳時代前期の土器片が、ごく少数出土しているが、図化し得たのは4点である。



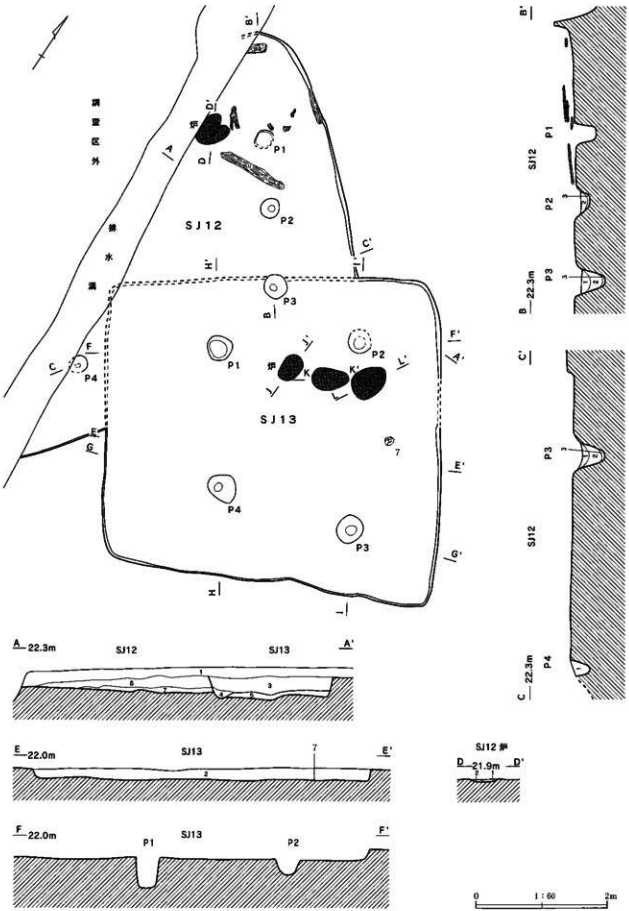
第336図　第12・13号住居跡出土遺物

第12・13号住居跡出土遺物観察表（第336図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	壺		1.9	7.2	AEGHIJ	普	橙褐色	85	風化著しい
2	壺		1.9	(7.6)	AEG(多)HIJ	普	橙褐色	40	風化著しい
3	壺		1.4	8.1	AEG(多)HIJ	普	橙褐色	30	風化著しい
4	台付甕		3.1	(7.7)	AIJ	普	橙褐色	15	
5	器台	(6.0)	3.3		GHIJ	普	山橙色	45	器面風化
6	器台か			8.4	ACGHIJ	普	褐色	75	器面は荒れている
7	高坏		5.7	(14.4)	AGHIJ	普	灰褐色	75	外面は風化著しい　赤彩
8	甕	(15.2)	4.1		AEGHIJ	普	橙褐色	15	風化著しい
9	甕	(17.6)	6.5		AEGHIJ	普	暗橙褐色	15	器面は風化著しい

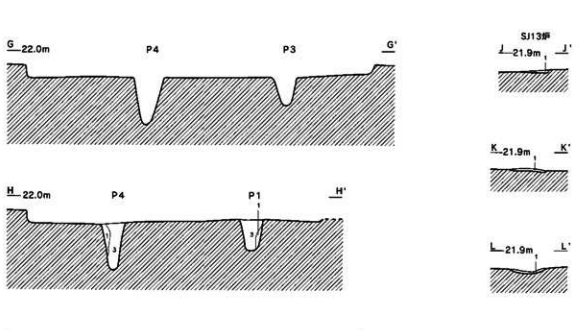
第13号住居跡（第337・336図5～9）

ＪＪ－5グリッドに位置する。第12号住居跡を切る。炉の位置からみて短軸（南北）が主軸と思われる。住居の規模は、南北4.92m、東西5.13m、深さは20cm、主軸方向はN-32°-Wである。やや歪んではいるが平面形は方形に近い。炉の東側に2箇所、被熱によって床が焼土化した部分がみられた。また少量ではあるが、床面には炭化物粒子が分布していた。炉の規模は42cm×30cmで長楕円形を呈し、深さは数cmと浅い。4本のピットが検出されており、P3は位置的にややずれてはいるが、いずれも柱穴と思われる。柱穴の径は40～50cmで、深さはP1が



第337図　第12・13号住居跡(1)

45cm、P2が25cm、P3が40cm、P4が70cmである。検出し得た範囲内では、炉や周壁溝はみられなかった。古墳時代前期の土器片が、ごく少数出土しているが、図化し得たのは5点である。



SJ12・13
1 黒褐色土　粘土ブロック(0.5～1cm)・炭化物粒子ややや多
2 黒灰色土　灰白色土粒・炭化物粒子多
3 黒褐色土　炭白色土粒・炭化物粒子多
4 黒褐色土　炭化物粒子微量、粘土ブロック少
5 明灰褐色土　帯状に黒色土混入　砂粒微量　掘方
6 黒褐色土　粘土ブロック(2～3cm)やや多、炭化物粒子少
7 黒褐色土　粘土粒・炭化物粒子少

SJ12炉
1 赤褐色土　焼土多、炭化物粒子なし　粘性なし
2 明茶褐色土　炭化物粒子多、焼土粒少　粘性なし

SJ12ピット2～4
1 黒褐色土　白灰色土粒・炭化物粒子多
2 黒褐色土　白灰色土ブロック多、炭化物粒子少
3 白灰色土　黒褐色土ブロック少

SJ13ピット1・3・4
1 灰白色土　黒炭色土ブロック多　柱穴の掘方か
2 黒色土　炭白色粘土ブロック多、炭化物粒子少
3 黒色土　炭化物粒子少、炭白色粘土粒多

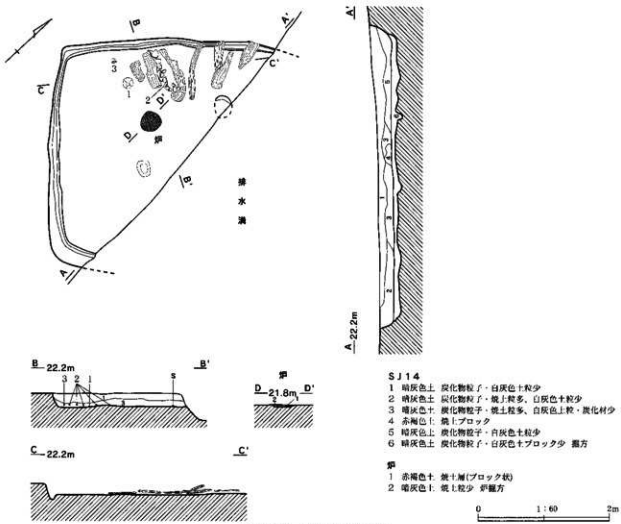
SJ13炉
1 赤褐色土　被熱して焼土化した炉床部分

SJ13 I－I' K－K' L－L'
1 赤褐色土　被熱して焼土化した炉床部分

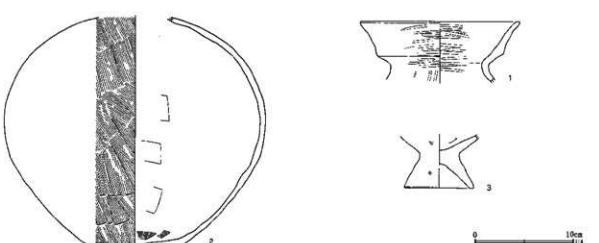
第338図　第12・13号住居跡(2)

第14号住居跡（第339・340図）

ＪＪ－5・6グリッドに位置する。第15号住居跡を切り、住居の東側は調査区外に続く。住居の規模は、南北3.10mであるが、東西については3.40mまでしか確認できない。主軸方向はN-45°-Wである。床面までの深さは31cmで、壁面の立ち上がりは明確である。掘方の深さは5～10cm程である。北側の壁面際には、この住居の建築部材と思われる長さ30～90cm程の炭化材が7本出土しているが、他の個所ではまったく残っていなかった。検出された範囲内では、幅10cm前後、深さ10cm前後の周壁溝が巡らされていた。また床面上には、ごく少量ではあるが、炭化物粒子が散在していた。この炭化物粒子を被る状態で、古墳時代前期の土器片が少数出土しているが、図化し得たのは3点である。



第339図　第14号住居跡



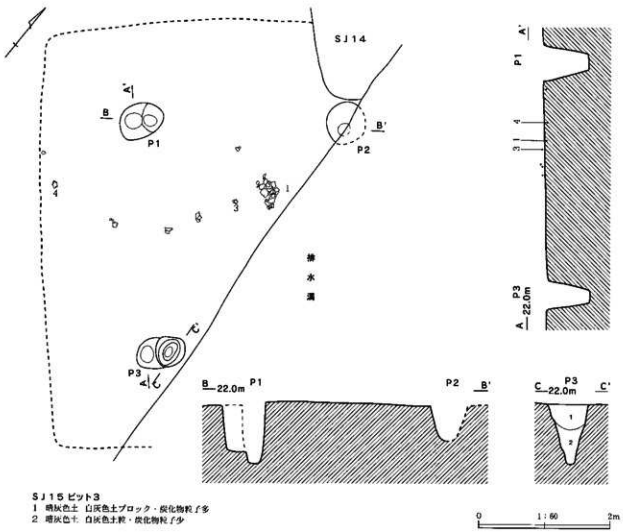
第340図　第14号住居跡出土遺物

第14号住居跡出土遺物観察表（第340図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	壺	(16.1)	6.2		AGHIJK	普	橙褐色	85	嶺面は荒れている
2	壺		24.1	6.9	AGHIJ	普	黄褐色	40	嶺面は荒れている
3	台付甕		5.4	7.1	AG(多)HIJ	普	黒褐色	55	風化著しく整形が見えない

第15号住居跡（第341・342図）

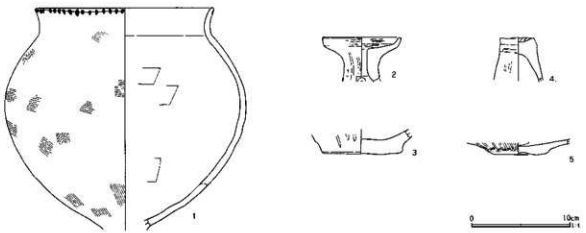
ＪＪ・ＫＫ−5・6グリッドに位置する。土層断面に、薄い炭化物層が確認されたため、そのレベルまで掘り下げ、床面と柱穴（P1〜3）および遺物を検出した。平面図に示した破線は、柱穴の位置関係から推定した平面形である。柱穴の並びからみた軸方向はP1−P2でN-42°-E、P1−P3ではN-43°-Wである。P1とP3は、各々2本のピットから成っているかのように表現されている。断面形からみても2つ存在したと思われるが、新旧関係は確認できなかった。P1とP3のピットの重複は、住居の拡幅または縮小、あるいは柱材の抜き取りによるものであろうか。検出し得た範囲内では、炉や周壁溝はみられなかった。古墳時代前期の土器片が少数出土しているが、図化し得たのは5点である。



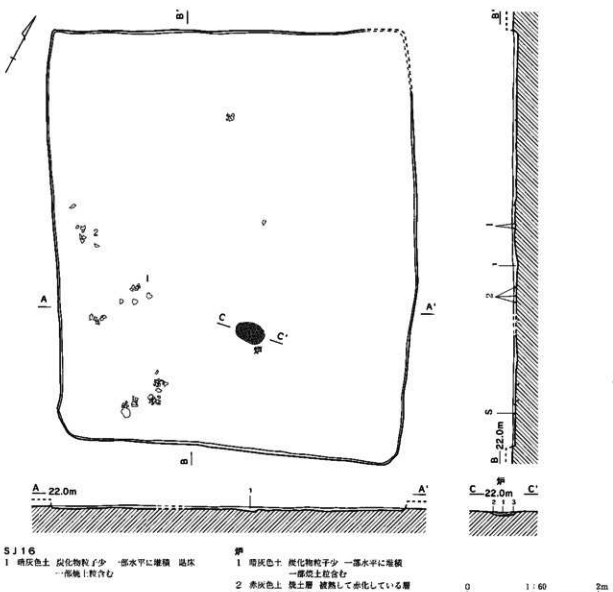
第341図　第15号住居跡

第15号住居跡出土遺物観察表（第342図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	台付甕	18.1	22.7		AGHIJ	普	明橙褐色	75	風化著しい
2	器台	(7.9)	4.5		AGHIJ	普	明褐色	35	器面は荒れている
3	高坏		4.5		AHIJ	普	暗褐色	65	
4	壺		2.5	(8.1)	AEGHIJ	普	橙褐色	70	
5	壺		1.6	5.6	AEGHIJ	普	明橙褐色	80	風化著しい



第342図　第15号住居跡出土遺物



第343図　第16号住居跡

第16号住居跡（第343・344図）

LL−5・6、MM−5グリッドに位置する。第17号住居跡と近接するが重複はしていない。北側コーナーはトレンチによって失われている。

遺構確認の時点で炉・床面・遺物が検出された。床面は貼床である。住居の規模は、南北6.43m、東西5.55mの長方形を呈し、貼床の厚さは5cm前後である。主軸方向はN-28°-Wを指す。少量ではあるものの、焼土粒子や炭化物粒子が散在していた。

炉は45×28cmの長楕円形を呈し、厚さは5cm前後、焼け方は弱い。古墳時代前期の土器片が、少数出土しているが、図化し得たのは2点である。

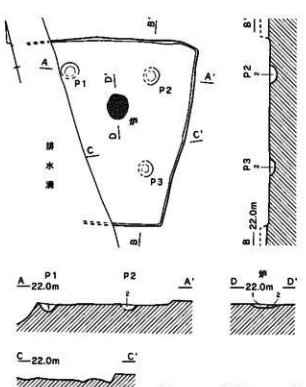
第344図　第16号住居跡出土遺物

第16号住居跡出土遺物観察表（第344図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	甕		5.9	(4.4)	AHIJ	普	暗褐色	45	器面風化　赤彩
2	甕	(15.9)	1.8		AEHIJ	普	褐色	15	風化著しい

第17号住居跡（第345・346図）

LL・MM−5グリッドに位置する。西側部分は調査区外に続く。住居の規模は、南北2.88mであるが、東西2.15mまでしか検出することはできなかった。確認面からの深さは5cm程である。ピットの並びからみて、主軸方向はN-17°-Eを指すと思われる。規模が、35×30cmの楕円形を呈する炉が検出されているが、焼け方は弱い。ピットが3本見られる



第345図　第17号住居跡

第346図　第17号住居跡出土遺物

SJ17 ピット1〜3
1　暗灰色土　炭化物粒子・白灰色土粒少
2　暗灰色土　炭化物粒子多、白灰色土粒やや多

炉
1　赤灰色土　焼土層　被熱のため焼土化
2　明灰色土　炭化物粒子・月灰色土粒少

が、位置的にみて柱穴であろうか。深さは、P1・P2が11cm、P3が8cmである。東西の法量は不明であるものの、平面規模がきわめて小さいといわざるを得ない。焼土部分が炉であるならば、この面が床面であることになり、柱穴としては浅いピットである。この2点から住居跡ではない可能性もある。出土した遺物は1点のみであった。

第17号住居跡出土遺物観察表（第346図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	台付甕		6.3	(9.6)	AGIJK	普	灰褐色	45	器面は荒れている

(b) 土壙

検出された土壙は6基で、A区・B区各々3基ずつであった。

第1号土壙（第348・347図1）

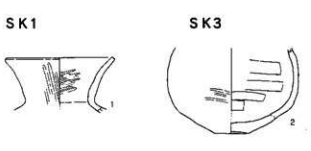
C−2グリッドに位置する。第2号土壙とともに本遺跡の最北端に位置している。第2号土壙を切る。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長軸4.05m、短軸2.43m、深さ30cm、長軸方向はN-3°-Wである。南東方向コーナーに、径30cm程のピットがみられるが、土壙に伴う否かは不明である。第2号土壙と形状や規模がきわめて似ているが、第2号土壙を新たに掘り直したものであろうか。古墳時代前期と思われる壺の破片が少数出土しているが、図化し得たのは口縁部1点のみであった。

第2号土壙（第348図）

C−2グリッドに位置する。第1号土壙に切られている。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長軸4.05m、短軸は確認し得たのは1.75mであるが、推定規模は2.30mである。深さは35cm、長軸方向はN-10°-Wを指す。古墳時代前期と思われる土器片が1点出土しているが、図化し得るものはなかった。

第3号土壙（第348・347図2）

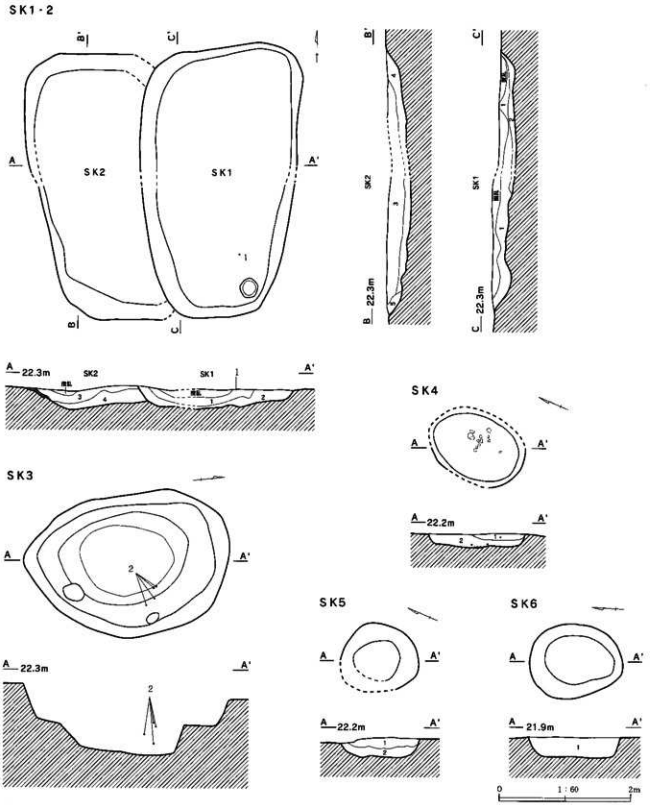
A区南端の、K−4グリッドに位置する。第5号住居跡を切る。平面形は長楕円形を呈し、規模は長軸3.15m、短軸2.16m、深さ95cm、長軸方向はN-3°-Eである。内部にはテラスが一巡する。20〜30cm程の径をもつピットが2本みられるが、土壙を切っていると思われる。古墳時代前期と思われる土器片が少数出土しているが、図化し得たのは1点である。



第347図　第1・3号土壙出土遺物

第1・3号土壙跡出土遺物観察表（第347図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坩	11.1	5.6		AEGHIJ	普	明褐色	95	器面は荒れている
2	壺		8.7	3.5	AEGIJ	普	明褐色	65	風化著しい



SK1・2 A－A' B－B' C－C'
1 明褐色土 地山ブロック(0.5～2cm)多、焼土ブロック(0.5～1.5cm)・炭化物ブロック(0.5～1.5cm)少 壁際底に厚さ(0.5～1cm)の炭化物層が散在
2 褐色土 鉄分・地山ブロック(0.5～2cm)多
3 褐色土 焼土ブロック多
4 黒色土 地山ブロック(0.5～3cm)多、炭化物ブロック(0.5～1cm)・焼土ブロック・鉄分少
5 褐色土 鉄分・焼土ブロック(0.5cm)多

SK4
1 明灰色土 白炭化上粒微量、炭化物粒子少
2 炭色土 白炭色土粒多、炭化物粒子少

SK5
1 暗灰色土 炭化物粒子少、灰白色土粒微量
2 明灰色土 炭化物粒子少、灰白色上ブロック・灰白色土粒多

SK6
1 明灰色土 炭化物粒子・白炭色上粒多

第348図 第1～6号土壙

第4号土壙（第348図）

B区ほぼ中央のⅡ－5グリッドに位置する。第5号土壙との距離は約1.60mで、第8号住居跡と近接するが重複はしない。平面形は長楕円形を呈し、規模は長軸1.50m、短軸1.05m、深さ25cm、長軸方向はN-7°-Eである。古墳時代前期と思われる土器片が少数出土しているが、図化し得るものはなかった。

第5号土壙（第348図）

B区ほぼ中央のⅡ－5グリッドに位置する。第8号住居跡を切っている。平面形は不整円形を呈すると推定される。規模は長軸1.20m、短軸（1.02）m、深さ30cm、あえて計測すれば長軸方向はN-19°-Wである。古墳時代前期と思われる土器片がごく少量出土しているが、図化し得るものはなかった。

第6号土壙（第348図）

LL－6グリッドに位置する。今回の調査で最も南に位置する土壙である。平面形は楕円形を呈する。規模は長軸1.42m、短軸1.10m、深さ30cmを測る。あえて計測すれば長軸方向はN-5°-Wを指す。底面は比較的平坦である。古墳時代前期と思われる土器片がごく少量出土しているが、図化し得るものはなかった。

（c）溝跡

検出された溝跡は7条で、B区6条、C区1条である。基本的に南西から北東に走っていたと思われる。

第1号溝跡（第349・351図1・2）

BB・CC－4・5グリッドにかけて位置する。N-64°-Eの向きで、西南西から東北東にかけて走る。

N-65°-EとN-64°-Eの向きで、西南西から東北東にかけて走る。第2・3号溝跡と同じ軸を意識しているのであろうか。検出し得た溝の長さは10.60mで、上幅3.60～4.10m、下幅0.80～1.80m、深さは70cm前後である。溝の立ち上がりはきわめて緩やかである。シルト質の土によって埋まった状態である。古墳時代前期と思われる土器片が少数検出されているが、図化し得たのは台付甕の破片1点と、棒状木製品の一部分が1点であった。

第2号溝跡（第349・351図3・4）

DD・EE－4・5グリッドにかけて位置する。N-65°-Eの向きで、西南西から東北東にかけて走る。

重複関係からみて、第3号溝跡の掘替えの可能性が考えられる。N-64°-Eの向きで、西南西から東北東にかけて走る第1号溝跡と同じ軸を意識しているのであろうか。検出し得た溝の長さは10.80mで、上幅1.10～1.80m、下幅0.40～0.70m、深さは70cm前後である。古墳時代前期と思われる土器片が少数検出されているが、図化し得た遺物は、古墳時代前期の器台と台付甕の脚台部が各1点ずつである。但しこれらの遺物については、第3号溝跡に帰属する可能性がある。

第3号溝跡（第349図）

DD・EE－4・5グリッドにかけて位置する。N-64°-Eの向きで、西南西から東北東にかけて走る。

重複関係からみて、第2号溝跡から第3号溝跡に掘替えられた可能性が考えられる。N-64°-Eの向きで、西南西から東北東にかけて走る第1号溝跡と同じ軸を意識しているのであろうか。溝の方位に関しては、設定の仕方による誤差の範囲内であり、第1～3号溝跡は同じ方位を意識していると思われる。検出し得た範囲内での溝の規模は、長さ10.50m、上幅0.60～1.00m、下幅0.60～0.70m、深さは40cm前後である。

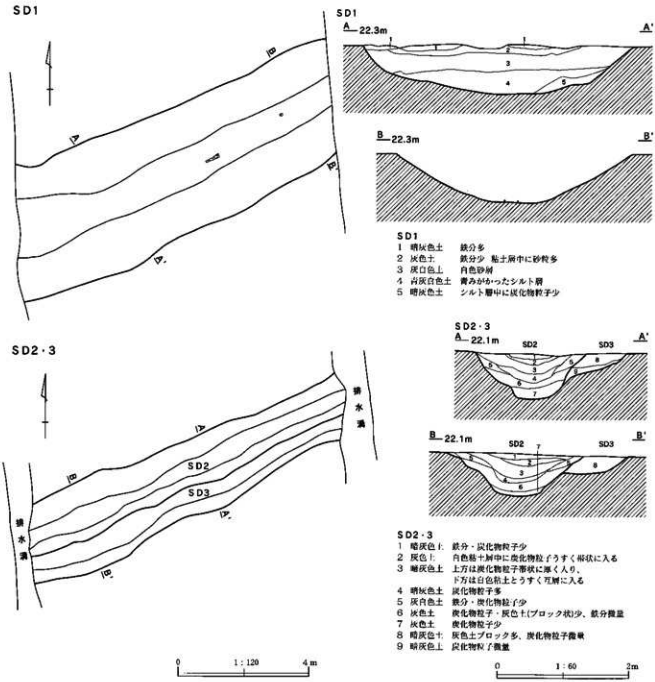
すでに述べたように、第2号溝跡の項に掲げた2点の土器は、第3号溝跡に帰属する可能性がある。

第4号溝跡（第350図）

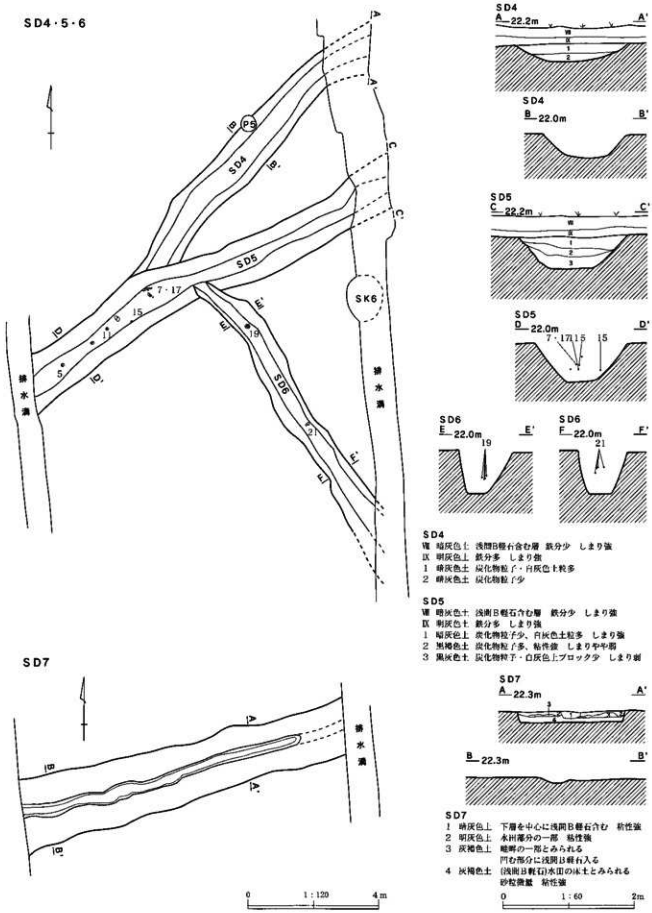
KK・LL−5・6グリッドに位置する。N-45°-Eの向きで、南西から北東に走る。第5号溝跡からの分岐とも考えられるが、底面のレベルは、第5号溝跡の方が10〜20cm程低い。第4号から5号へつけ替えた結果であろうか。検出し得た溝の長さは9.00mで、上幅0.90〜1.20m、下幅0.40〜0.60m、深さは25〜30cmである。溝の立ち上がりはきわめて緩やかである。遺物は出土しなかった。

第5号溝跡（第350・351図5〜18）

KK・LL−5・6グリッドに位置する。第4号溝跡との重複部分でやや屈曲する。屈曲以西はN-52°-Eであるが、以東ではN-63°-Eに向きを変える。言い換えるならば、屈曲点以東は第1〜3号溝跡とまったく同じ方向に走っていることになる。検出し得た溝の長さは12.40mで、上幅1.20〜1.60m、下幅0.20〜0.70m、深さは60cm前後である。断面形は台形を呈する。コンテナ4分の1程の土器が出土



第349図　第1〜3号溝跡



第350図　第4～7号溝跡

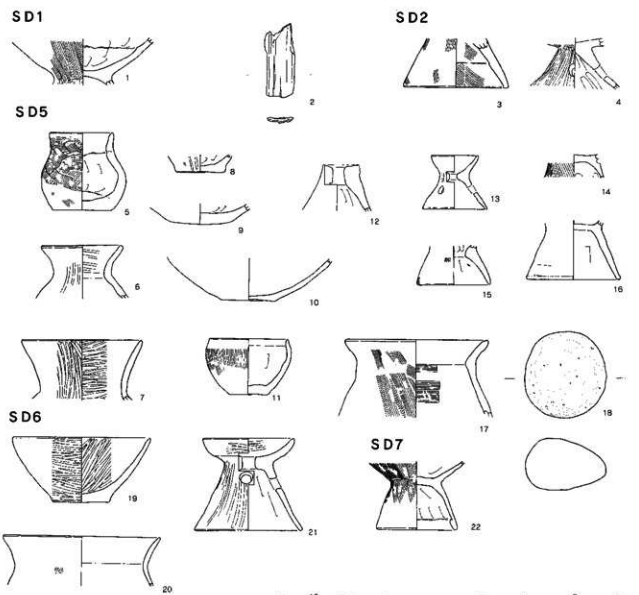
した。図化し得たのは14点である。

第6号溝跡（第350・351図19～21）

ＬＬ－5・6グリッドに位置する。第5号溝跡と重複するが、新旧関係にあるのか分岐であるのか、また第4号溝跡と同一の遺構であるのかは不明である。N-35°-Wの向きで、北西から南東にかけて走る。検出し得た溝の長さは10.10mで、上幅1.10～1.80m、下幅0.50～0.80m、深さは60cm前後である。断面形は、立ち上がりが急で箱薬研に近いといえよう。古墳時代前期の土器片が少数出土しているが、図化し得たのは3点である。

第7号溝跡（第350・351図22）

WW－6・7グリッドにかけて位置する。幅広の溝状に表現されているが、浅間Ｂ軽石を含む水田の間を走る細い溝といえる。N-35°-Wの向きで、北西から南東にかけて走る。検出し得た溝の長さは8.80mで、上幅0.40～0.50m、下幅0.50～0.80m、深さは20cm前後である。古墳時代前期の土器片がごく少数出土しているが、図化し得たのは1点である。



第351図　第1・2・5～7号溝跡出土遺物

第1・2・5～7号溝跡出土遺物観察表（第351図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	台付甕		4.9		ACEGHIJ	普	黒褐色	65	SD1 器面は荒れている
2	板材	長15.0×幅6.2×厚1.2cm							SD1
3	台付甕		5.0	(10.7)	AGHIJK	普	褐色	20	SD2
4	器台		5.1		AGHIJ	普	明褐色	65	SD2
5	小型壺	(6.7)	7.9	5.9	AGHIJ	普	橙褐色	85	SD5 胎土精密
6	坩	8.4	5.4		ACEGHIJ	普	白橙色	90	SD5 器面は荒れている
7	壺	(12.3)	6.1		AGHIJ	普	明褐色	70	SD5 器面風化
8	坩		1.8	5.0	AGHIJ	普	明褐色	85	SD5
9	壺		2.1	6.4	AGHIJL	普	暗褐色	70	SD5 内外面に黒斑
10	壺		4.4	5.6	AGHIJK	普	橙褐色	60	SD5 器面は風化著しい
11	碗	(8.0)	5.7	3.6	AEGHIJ	普	橙褐色	50	SD5 器面は荒れている
12	器台		4.7		AEGIJ	普	橙褐色	80	SD5 器面は風化著しい
13	器台	(4.8)	5.5	(6.7)	ACGHIJ	普	茶褐色	15	SD5 器面は風化著しい
14	台付甕		2.3		AGHIJ	普	明褐色	65	SD5 被熱
15	器台		4.0	7.4	ACHIJ	普	白橙色	40	SD5 器面は荒れている
16	台付甕		6.0	(9.3)	AFGHIJ	普	白橙色	20	SD5
17	甕	(14.6)	7.8		AEGHIJ	普	白橙色	15	SD5
18	敲石	法量6.6×6.2×4.0cm 重量197.0g 安山岩製 完形							SD5
19	碗	14.1	6.6	5.7	AHIJ	普	黒・橙褐色	95	SD6 器面は荒れている 胎土細密
20	甕	(16.2)	5.1		ACDGHIJ	不	黒褐色	15	SD6 器面は風化著しい
21	器台	(9.4)	9.4	11.1	GHIJ	普	白橙色	55	SD6 風化著しい
22	台付甕		7.1	8.0	ACGIJK	普	褐色	80	SD7

（d）方形周溝墓

方形周溝墓はB区において2基検出された。両者の距離は5m程で、近接した位置関係といえる。

第1号方形周溝墓（第352・353図1～11）

Y・Z－4グリッドに位置する。周溝墓の南東コーナーと東溝のみの検出である。1個所のみ検出されたコーナー部分は、ブリッジをもたないものであった。土層断面を観察した限りでは、方台部の盛土は遺存していなかった。溝の規模は、上幅2.15～2.40m、下幅0.75～1.10m、深さ90～105cmで、検出し得た東溝の長さは9.60mである。東溝の軸から推定される主軸方向は、N-15°-Wであり、第2号方形周溝墓の主軸方向と一致している。周溝の断面形は、方台部側の立ち上がりが急で、外周側は緩やかである。周溝の底面は比較的平坦であるといえよう。古墳時代前期の土器片と木製品が少数出土した。図化し得たのは11点だった。木製品の樹種はいずれも不明である。

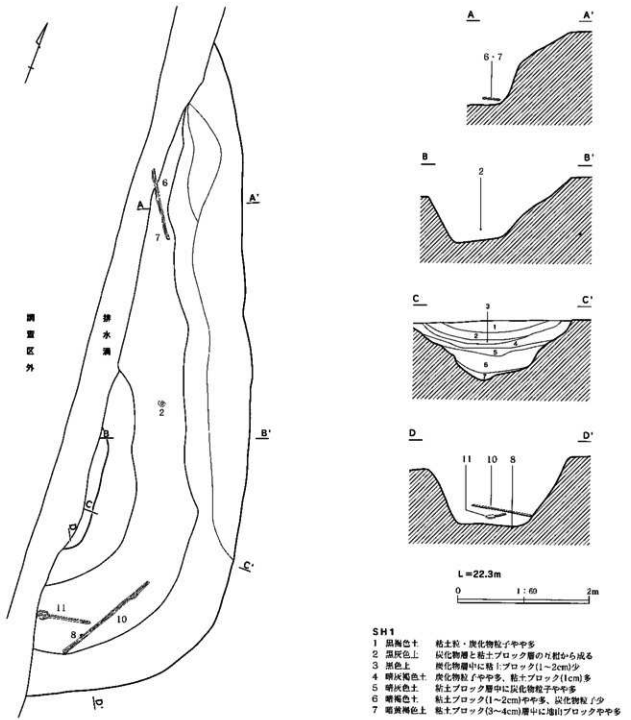
6と7は、接合しないものの同一個体であると思われる。遺存状況は極めて悪く、断面形は丸味を欠っている。杭材の一部分であろうか。2点あわせて長さ28.4cm、幅4.2cm、厚さ2.4cmを測る。

8は全周自然面のままであるが、先端部を面取りして尖らせている。杭材の一部分であろうか。現存長15.0cm、径は2.5×2.2cmである。

9は、先端部を面取りして尖らせていると思われる。また、側面にも面取りとおぼしき部分があるため、杭材の一部分と判断した。

10は遺存状況が極めて悪く、丸太材が3分の1程度残っているという状況である。一方がやや尖っており、杭材もしくは柱材の先端部分と判断した。現存長17.4cm、幅8.2cm、厚さ5.2cmを測る。

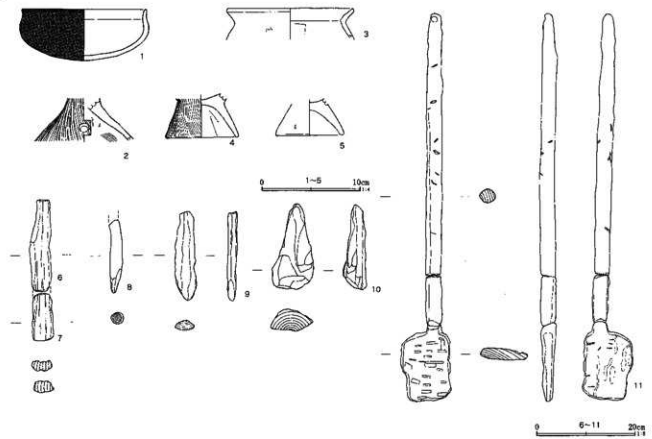
11は鋤と考えられる。柄の表面はおおむね原形を留めているが、1箇所が折れており、さらに上端部は欠損している。鋤先の表裏面は、工具痕と思われる窪みが残っていることからこちらもおおむね原形を保っていると推定される。しかし、鋤先の周囲は、柄に近い箇所を除いて、周囲全体が失われていると思われる。破損による廃棄であろうか。



第352図　第1号方形周溝墓

第1号方形周溝墓跡出土遺物観察表（第353図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	碗	(12.8)	5.2		AGHIJ	普	褐色	45	風化著しく調整見られず　赤彩
2	高坏		4.5		AGHIJ	普	明褐色	35	
3	甕	(12.8)	3.2		AEGHIJ	不	橙褐色	25	風化著しい
4	台付甕		4.4	7.4	AHIJK	普	橙褐色	95	
5	台付甕		3.7	7.0	AGHIJ	普	橙褐色	55	風化著しい



第353図　第１号方形周溝墓出土遺物

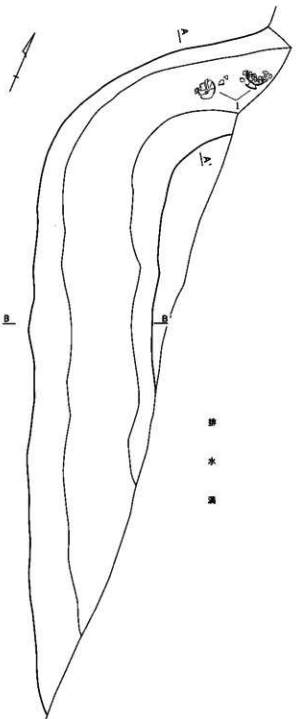
第２号方形周溝墓（第354・355図）

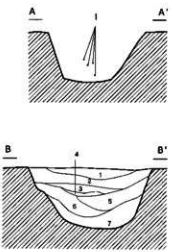
Z・AA－4・5グリッドに位置する。第1号方形周溝墓とは逆に、北西コーナーと西溝のみの検出である。1個所のみ検出されたコーナー部分は、ブリッジをもたないものであった。土層断面を観察した限りでは、方台部の盛土は遺存していなかった。

溝の規模は、上幅1.40～1.90m、下幅0.70～1.20m、深さ70～90cmで、検出し得た東溝の長さは9.00mである。東溝の軸から推定される主軸方向は、N-15°-Wであり、第1号方形周溝墓の主軸方向と一致している。周溝の断面形は、B－B'では方台部側の立ち上がりが急で、外周側が緩やかであるのに対し、A－A'では外周側の立ち上がりが急で、方台部側が緩やかである。出土した遺物は、壺形土器（第355図1）のほかは、ごく少数の土器片であり、図化には至らなかった。壺形土器は、上半部と下半部とが分離した状態で出土しており、方台部から転落した際に割れたものであろうか。

第２号方形周溝墓跡出土遺物観察表（第355図）

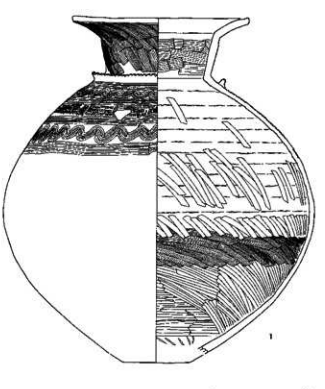
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	壺	17.4	34.2		G(多)L	良	明赤褐色	90	外面胴部Aに煤付着





L=22.3m
0 1:60 2m

SH2
1 黒灰色土 炭化物層と灰色粘土層のブロックから成る
2 暗褐色土 炭化物粒子・粘土ブロック(0.5～1cm)少
3 暗褐色土 炭化物粒子・炭化物ブロック中少
4 暗灰色土 暗灰色土粘土ブロック層中に炭化物粒子少
5 黒灰色土 炭化物ブロック・粘土ブロック(0.5～1cm)少
6 黒灰色土 炭化物ブロック少、粘土ブロック(0.5～1cm)中少
7 暗灰色土 粘土ブロック(0.5～2cm)多、炭化物粒子少



第355図　第２号方形周溝墓出土遺物

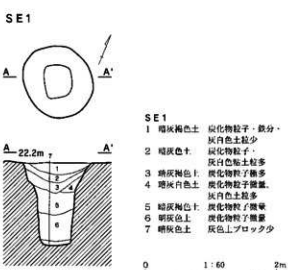
第354図　第２号方形周溝墓

(e) 井戸跡

今回の調査で検出された井戸跡は、B区で検出された1基のみである。

第1号井戸跡 (第356図)

ＪＪ－5グリッドに位置する。第9・10号住居跡と重複している。その新旧関係はどうか。1：第9・10号住居跡の遺構確認時には第1号井戸跡は検出されず、第9号住居跡の床面精査の段階で第1号井戸跡が検出されている。2：第9号住居跡の貼床が井戸跡の上にのっていると思われる。3：第9号住居跡の床面直上の遺物がＳＥ1まで続いている。以上の3点から、第1号井戸跡は住居跡に切られていると判断した。平面形は開口部で1.08×1.00mの円形、底面は0.50×0.44mの丸味をもった長方形に近く、深さは125cmを測る。断面形はロート状である。古墳時代前期のものと思われる土器の小破片が3点出土しているが、図化し得なかった。



第356図 第1号井戸跡

(f) ピット

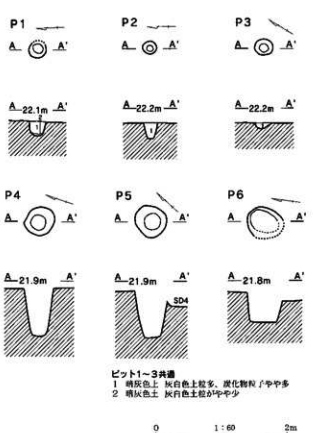
検出されたピットは6基であり、いずれもB区の住居跡群から検出された。集落内に存在するという事実は、用途は不明ではあるものの、ピットも必要性があって掘られたものであるとの証であろうか。

ピット (第357図)

P1から古墳時代前期の土器片が多数出土したが、小破片のみで図化には至らなかった。他のピットからは、遺物は出土しなかった。

第12表 ピット一覧表

番号	径(cm)	深さ(cm)	形 態	備 考
1	25×25	21	円形	
2	22×20	25	円形	
3	27×23	10	楕円形	
4	45×40	75	楕円形	
5	48×43	70	円形	
6	(55)×50	40	楕円形	



第357図 ピット1～6

(g) 斜面包含層

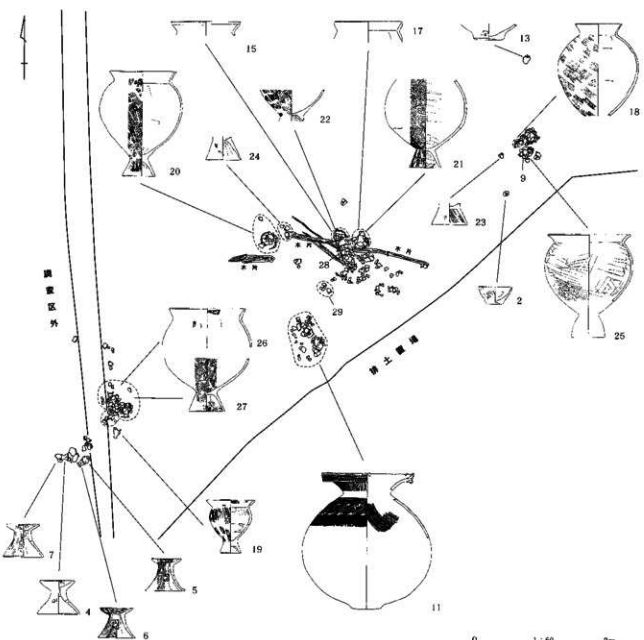
斜面包含層 (第358·359図1～19·360図20～32)

B区の南端部手前、第16号住居跡から2mほどの位置から、南に向かって下っていく傾斜面となる。この谷地形は数十mに亘って続き、C区からは別の微高地となる。

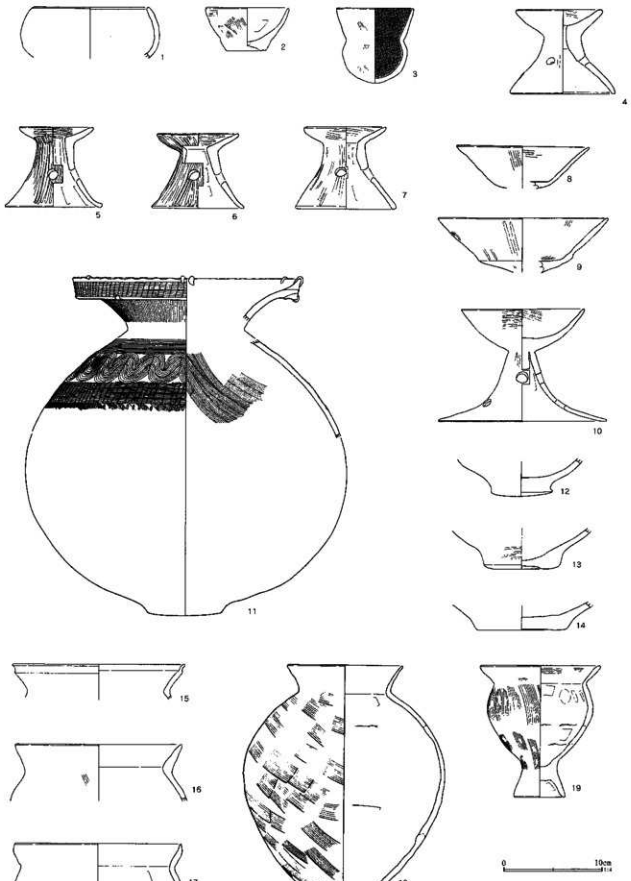
そしてその斜面の落ち際付近から、土器と木製品などが、ある程度まとまった状態で検出された。位置的には、MM－5グリッドに相当する。

この遺物のまとまりは1箇所ではなく、いくつかのグループに細分することが可能であると思われる。これらの土器の中には、ほとんど完形に近いもの(4～7)もみられた。

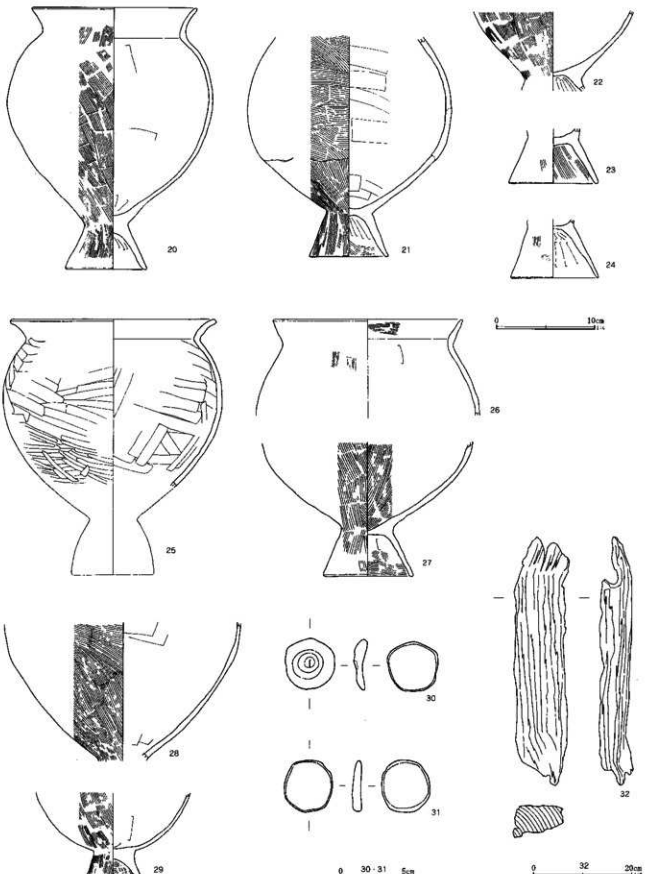
これに対して、C区では、水田の畦畔に堆積していると思われる浅間B区軽石が、僅かではあるが検出されており、平安時代の水田域の一部と思われる。出土した遺物の内、図化し得たのは32点である。



第358図　斜面包含層遺物出土状況



第359図　斜面包含層出土遺物(1)



第360図　斜面包含層出土遺物(2)

包含層出土遺物観察表（第359・360図）

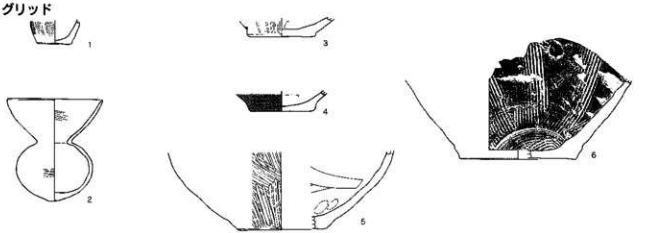
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	鉢	(11.8)	(14.2)	5.1	D(多)G(多)	普	黄灰色	10	
2	碗	8.8	4.4	4.1	AEGHIJ	普	橙褐色	75	器面荒れている
3	坩	(7.8)	7.6		AGHIJ	普	橙褐色	55	底部外面黒斑　風化著しい　赤彩
4	器台	8.9	8.6	10.6	EGHIJ	普	明褐色	95	風化著しい上ド3孔づつ
5	器台	7.6	8.2	9.9	AGHIJK	良	橙褐色	100	脚台部4孔
6	器台	8.4	7.7	9.5	AEHIJ	普	白橙色	100	脚台部4孔
7	器台	8.4	8.4	10.3	AEGHIJ	普	白橙色	95	風化著しい　脚台部4孔
8	高坏	13.6	4.3		AGHIJ	普	橙褐色	70	風化著しい
9	高坏	17.3	5.6		AEHIJ	普	橙褐色	85	風化著しい
10	高坏	12.5	8.7		AGHIJ	普	褐色	40	風化著しい
11	竪	(23.2)		15.5	D(多)G(多)H	良	黄橙色	10	風化・磨耗著しい
12	壺		3.5	6.2	G(多)	良	明赤褐色	20	
13	壺		4.2	7.7	AEGHIJ	普	明橙褐色	75	風化著しい
14	壺		2.5	9.1	AEGHIJ	普	明橙褐色	20	
15	甕	(17.6)	3.6		AEHIJ	不	明赤褐色	25	風化著しい　被熱
16	甕	(17.1)	5.8		ACEGHIJ	普	橙褐色	70	風化著しい
17	甕	(17.1)	5.4		AEGHIJ	不	橙褐色	20	風化著しい
18	甕	(11.7)	23.3		AEGHIJ	普	褐色	35	風化著しい
19	台付甕	12.3	13.3	5.2	AEGHIJ	普	橙褐色	75	胴部外面に煤付着
20	台付甕	16.8	26.6	8.3	AGHIJ	普	黒褐色	85	外面煤付着　器面荒れている
21	台付甕		22.3	8.1	AGHIJ	普	橙褐色	40	外面上半に煤付着　風化している
22	台付甕		8.2		AGHIJ	不	暗褐色	30	内面炭化物付着　風化著しい
23	台付甕		5.6	9.1	AEGHIJ	普	橙褐色	95	外面風化著しい
24	台付甕		6.0	8.9	ACHI	普	橙褐色	90	風化著しい
25	台付甕	(21.2)	17.1		AGHIJ	普	暗褐色	20	風化著しい
26	甕	(19.4)	10.2		ACGHIJ	普	褐色	20	風化著しい
27	台付甕		13.7	9.1	ACEGHIJ	普	暗褐色	45	内面炭化物付着　風化著しい
28	台付甕		14.0		AGHIJ	普	暗褐色	25	風化著しい
29	台付甕		9.8	7.2	AGHIJ	普	橙褐色	25	煤付着
30	小型土製円盤	径3.8×3.7×0.9cm			AEGHIJ	普	橙褐色	完形	重量13.7g　手捏ね　「一」字状刻目
31	小型土製円盤	径3.9×3.7×0.7cm			ACEGHIJ	普	橙褐色	完形	重量10.7g　手捏ね　模倣の有無不明
32	木材片	現在長50.4×幅10.0×厚6.4cm							

（h）グリッド出土・表採遺物等

グリッド出土・表採遺物等（第361・362図）

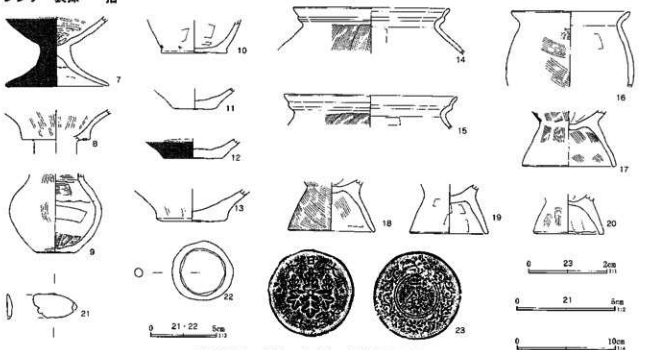
グリッド出土遺物で、図化し得たのは6点、その他に試掘溝出土や表面採集の遺物で図化し得たのは17点である。

グリッド



第361図　グリッド出土・表採遺物等(1)

トレンチ・表採・一括



第362図　グリッド出土・表採遺物等(2)

グリッド出土・表採遺物等観察表（第361・362図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	手捏ね		2.5	3.5	HIJK	普	明褐色	65	底部外面に黒斑
2	坩	9.7	10.5	1.1	EGHIJ	普	明褐色	95	器面は風化著しい
3	壷		1.9	(6.9)	AGHIJ	普	明褐色	85	器面は荒れている
4	壷		2.1	(6.7)	AGHIJ	普	橙褐色	45	外面赤彩か
5	壷		7.8	(9.2)	AEGHIJK	普	暗褐色	35	
6	擂鉢		8.2	(11.8)	EG	普	暗茶褐色	35	
7	高坏		7.1	(10.4)	AHIJK	普	橙褐色	35	風化している　赤彩
8	壷		3.2		AGHIJ	普	明褐色	85	風化著しい
9	坩		8.2	4.0	AGHIJK	普	橙褐色	95	風化著しい
10	壷		3.4	6.7	AHIJ	普	黒褐色	35	
11	坩		2.1	4.6	AE(多)GHIJ	普	褐色	60	風化著しく調整見えず
12	壷		2.0	6.0	AGHIJ	良	暗褐色	75	赤彩　外面黒斑
13	壷		3.3	(7.2)	AEGIJK	普	明橙褐色	40	器面は荒れている
14	台付甕	(16.0)	4.7		ACHIJK	普	白橙色	15	器面は荒れている
15	台付甕	(17.8)	3.3		ACGHIJ	普	橙褐色	15	風化著しい
16	甕	(12.1)	7.7		AEG(多)HIJ	普	明褐色	15	
17	台付甕		5.6	9.4	AGHIJK	不	橙褐色	80	器面は風化著しい
18	台付甕		5.0	8.9	AEHIJ	普	橙褐色	90	器面は荒れている
19	台付甕		5.0	(7.9)	AGHIJ	良	明褐色	40	
20	台付甕		4.2	7.2	AGHIJ	普	暗褐色	95	
21	鏃	現在長3.1×幅1.7×厚0.4cm							錆化著しい
22	耳環	直径4.6×4.5cm 厚0.6×0.7cm 鉄地金銅貼り、現状では鉄地のみ遺存							錆化著しい
23	一銭銅貨	「大日本　大正十年」							

中条条里遺跡遺構新旧対照表

区	新番号	旧番号	区	新番号	旧番号	区	新番号	旧番号	区	新番号	旧番号	区	新番号	旧番号
A区	SJ1	SJ17		SJ10	SJ10	A区	SK1	SD8	B区	SD1	SD2	B区	SH1	SH1
	SJ2	SJ1		SJ11	SJ2		SK2	SD7		SD2	SD3		SH2	SH2
	SJ3	SJ4		SJ12	SJ3		SK3	SK4		SD3	SD3			
	SJ4	SJ15		SJ13	SJ5	B区	SK4	SK2		SD4	SD5	B区	SE1	SE1
	SJ5	SJ16		SJ14	SJ9		SK5	SK1		SD5	SD4			
B区	SJ6	SJ11		SJ15	SJ14		SK6	SK3		SD6	SD6			
	SJ7	SJ8		SJ16	SJ13				C区	SD7	SD1			
	SJ8	SJ6		SJ17	SJ12									
	SJ9	SJ7												

V　上河原遺跡

1．調査の概要

上河原遺跡は、熊谷市大字下川上字上河原1598番地5他に所在する。調査期間は平成13年4月9日～平成13年5月31日、調査面積は800㎡である。

今回は、第1次調査であり、その期間と面積については、「例言」に示したとおりである。遺跡は、中条条里遺跡の南東約400m、古宮遺跡の北西約150mに位置し、両遺跡のほぼ中間に当る。

上河原遺跡は、荒川と利根川に挟まれた妻沼低地に立地するが、位置的に荒川扇状地との境界域に近いといえる。そのためか、扇状地形の伏流水上昇によって発生する湧水を水源とする中小の河川が、多数みられる。これらの河川は、基本的に西から東へと流下しながら、さまざまに流路の移動を繰り返すことによって、自然堤防や後背湿地が複雑に形成されていったと推定される。遺跡周辺は、星川が大きく蛇行する地域であるため、より一層、地形の形成は複雑なものとなったと考えられる。上河原遺跡は、そういった自然堤防の一つの南側斜面に位置している。星川からの距離約150mの、左岸に立地している。調査区は、民家に隣接していること、最終的な遺構確認面が現地表面から2m程下がること、調査区内を悪水路が通っていることなどから、土砂崩落の危険を避けるため、全面的な掘削は行わずトレンチ掘りによる調査を実施することとした。

具体的作業としては、5本のトレンチを調査区内に入れ、砂層もしくは粘土層に達するレベルまで掘り下げ、土層断面を精査して、水田面の枚数・規模・範囲などを確認した。続いて、重機によって水田面直前まで掘り下げ、そののち人力で畦畔の検出を試みた。この作業を、水田面ごとに行ったが、面的に畦畔を検出することはできなかった。そのため、水田跡の記録としては、土層断面図と平面写真、および断面写真となった。

2．検出された遺構と遺物

(a) 水田跡

トレンチ内において、畦畔・水路など、水田の痕跡の検出を試みたが、平面的に確認することはできなかった。土層断面では、水田面は鉄分やマンガン粒子が多量に沈着した茶褐色の土層として検出された(第364図C－C´、D－D´のアミかけ部分)。

水田面は基本的に4枚、部分的に5枚検出された。この茶褐色土層の厚さは2～4㎝程である。

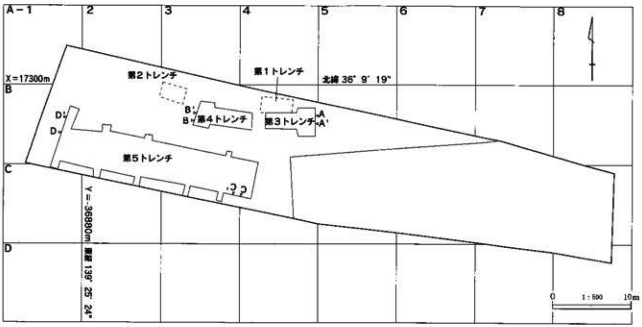
水田の痕跡である各層ごとの間隔は、Ⅲ－Ⅴ層間が8㎝、Ⅴ－Ⅶ層間が4㎝、Ⅶ－Ⅹ層間が6㎝、Ⅹ－Ⅻ層間が16㎝である。なお、断面A－A´、B－B´のⅡ・Ⅲ層、C－C´、D－D´のⅡ層には、浅間A軽石と思われる白色粒子が散在している。

狭い調査区内でのトレンチ調査であったが、第3・4トレンチと第5トレンチとでは、様相が異なっている。後者では水田面が認められるのに対し、前者ではみられない。位置的に自然堤防の肩部に当たっているため、高い部分に相当する第3・4トレンチには水田はなく、低い部分(第5トレンチ)が水田として営まれたものと推定される。

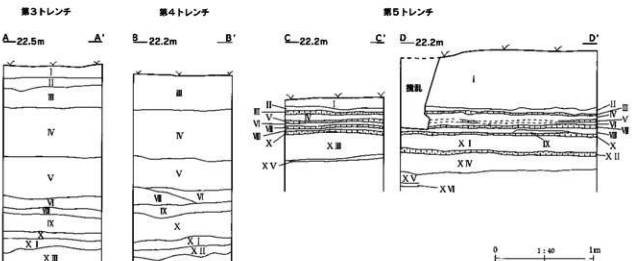
中条条里遺跡や、北西約1kmに位置する北島遺跡では、浅間B軽石が薄く堆積した水田が確認されている。上河原遺跡周辺でも、上記の二遺跡と同様に、この火山灰が降下したと考えられるがここでは検出されておらず、浅間A軽石と思われる粒子が混入していた。この点から、上河原遺跡の水田は、浅間B軽石降下以降につくられたものと推定される。

水田土層中から、土師器や須恵器の小破片が僅かに出土したが、水田の時期を示すものではないと考えられる。このほかに、鉄製品が1点検出された。

第364図1は、不明鉄製品である。現存長16.0㎝、最大幅2.6㎝、厚さ0.8㎝。錆化著しく、X線撮影を行ったが器影は不明確であり、実測図の輪郭線は推定線に近いものである。



第363図　上河原遺跡全測図

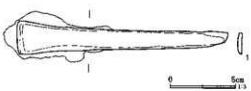


第3・4トレンチ A－A′ B－B′

I	客土	
II	灰色土	酸化鉄粒・浅間A軽石と思われる白色粒多　粘土質
III	灰黄色土	II層と同じ火山灰粒少　砂質
IV	明灰黄色土	灰白色の粘土小ブロック少、小礫(1cm)若干
V	明灰黄色土	マンガン粒・IV層と同じ粘土小ブロック多
VI	明灰黄色土	細砂層　IV層と同じ粘土小ブロック多
VII	明灰黄褐色土	川砂を帯状に含む
VIII	黄褐色土	細砂層　酸化鉄粒多　粘性弱
IX	暗灰褐色土	IV層中に堆層の上を少量含む
X	灰色土	細砂層　酸化鉄ブロック若干
XI	灰色土	粘土層　酸化鉄ブロック多　粘性強
XII	灰色土	細砂層　粘性強
XIII	青灰色土	細砂層　粘性強

第5トレンチ　C－C′ D－D′

I	客土	
II	灰色土	粘土層　浅間A軽石と思われる白色粒多 全体的に酸化鉄化している
III	茶褐色土	水田マンガン結核集石層　マンガン粒子(4～5mm)が密に帯状をいす
IV	灰色土	水田鉄斑集石層　酸化鉄粒・III層の沈殿したマンガン粒多、炭化物粒子微量
V	茶褐色土	水田マンガン結核集石層　マンガン粒子(2～3mm)が斑文状に層をなす
VI	灰色土	水田鉄斑集石層　酸化鉄粒多、V層の沈殿したマンガン粒若干
VII	茶褐色土	水田マンガン結核集石層　マンガン粒子(4～5mm)が密に帯状をなす
VIII	灰色土	水田鉄斑集石層　酸化鉄粒多、マンガン粒少
IX	暗灰色土	固に酸化面をはさむ　暗畸か
X	茶褐色土	水田マンガン結核集石層　マンガン粒子(4～5mm)が密(堆層よりも密)に帯状をなす
XI	灰色土	水田鉄斑集石層　酸化鉄粒・マンガン粒子(1～3mm)少
XII	茶褐色土	水田マンガン結核集石層　マンガン粒子(4～8mm)が中や面に帯状をなす
XIII	黄褐色土	灰色土の粘土小ブロック多、マンガン粒少
XIV	灰色土	細砂層　全体的に酸化鉄化する マンガンブロック(0.5～1cm)の小石若干
XV	灰白色土	水田鉄斑集石層　酸化鉄粒多　粘性中や多
XVI	灰色土	細砂層　粘性強



第364図　基本土層図・出土遺物

Ⅵ まとめ

1 古宮遺跡の縄文時代

ⅰ）土器集中地点について

古宮遺跡では、B区南側とC区北端において縄文時代晩期中葉の大量の土器が検出された。両出土地点は調査区域外を挟んで約60～70mの距離を測る。B区は南へ、C区は北へ緩やかに傾斜する地形である。土器を包含する層は、両地点ともに炭化物ブロックに富んでいる。土器出土地点付近には遺構はまったく検出されていない。

出土遺物の内容は、両地点ともに大半は土器であり、大小の礫を伴いながら数点の石器も確認された。出土土器の多くは粗製土器で、なかでも有段口縁粗製深鉢とした、口縁部に１～３段の隆帯を巡らせた土器が圧倒的な数量を誇っている。これらの土器は大抵の場合、内底面から５ｃｍ程上位に帯状の炭化物粒子が付着しており、付着幅の広い個体や、帯状に幾重にも形成され、煮沸使用の痕跡が明瞭である。また、祭祀的な遺物はまったく確認されていない。

以上、出土地付近の様相や出土遺物の内容などから、古宮遺跡の土器集中地点とは生活廃棄物を捨てた廃棄場のような場所であると推測される。

ⅱ）土器群の様相

次に本遺跡出土土器群について説明する。はじめに、本文中の分類について若干の補足をしたあと、土器群の変遷について触れてみたい。

B区では、第1群とした資料が安行３ｂ式、第2群が「天神原式」、第3～５群が安行３ｃ式、第7群が大洞系の土器である。一方Ｃ区は、第1・３・４群とした資料が安行３ｃ式、第2群が「天神原式」、第5群が安行３ｄ式であり、第6群に1点、大洞系の土器が確認される。

第365図は本遺跡出土の土器変遷図である。特徴的なものを中心に掲載した。本文中の説明と重複する部分もあるが地点ごとに再度確認しよう。

[B区]　１～４は安行３b式と思われる。１・２は豚鼻状貼付文が施される。

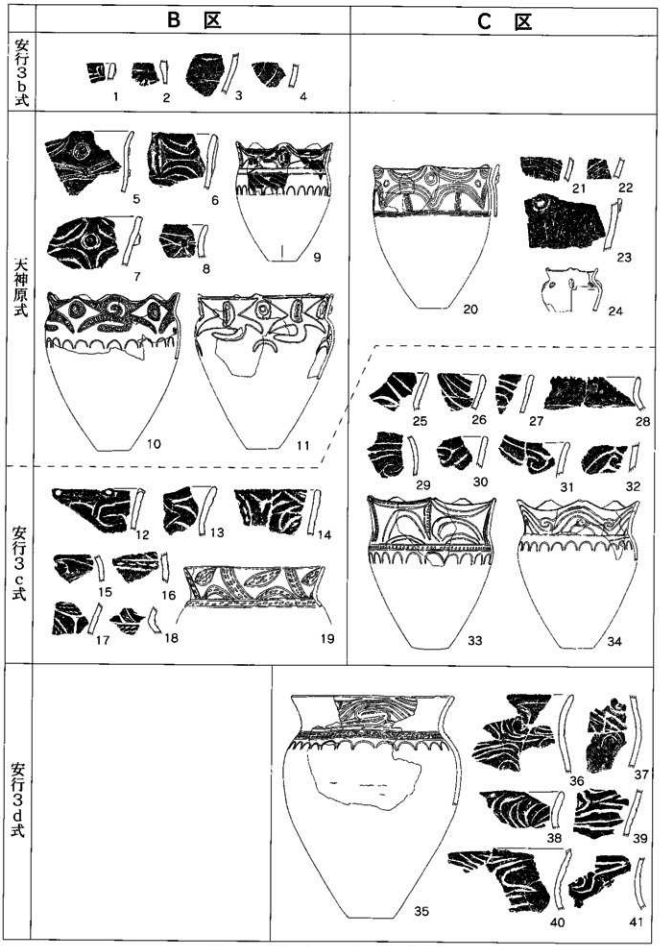
５～11は「天神原式」である。いずれも菱形区画文の土器であるが、文様描出において差異が見られるようである。後述するので詳細は省く。

12～19は安行３c式である。12・15は入組文系の土器で安行３ｃ式とした中でも古～中段階に位置づけられよう。13は姥山Ⅲ式類似の土器である。破損部位には貼付文の剥落痕跡のようなものが看取され、「天神原式」のような文様構成になる可能性があることは本文中でも示した通りである。17～18は帯状沈線区画内に充填される列点が複列化した資料で、新屋雅明の安行３c式３細分（新屋1996・2004）のうちの新段階に位置づけられる。B区ではこの資料がもっとも新しい段階ものであろう。

[C区]　20～24は「天神原式」である。20は菱形区画文系の土器。21・22は先端の細い棒状工具による沈線区画内に、同一工具による刺突がランダムに充填される土器。23・24は貼付文のみによって器面を装飾する土器である。

25～34は安行３ｃ式土器である。25～27は三角形区画文系土器で、並行沈線により文様を描出する。28は粗製土器の流れを汲む土器である。33は列点を施した縦スリットを中心に、波状口縁に沿って重弧線が、さらに胴部最大径付近の横帯区画に接するように下向きの重弧線が描かれる土器で、かつて鈴木正博によって概念化された「裏慈恩寺３式（鈴木正・鈴木加　1988）」の特徴をもっている。27は沈線のみで文様を描出する土器で三叉状入組文が施される。26～28と同一個体の可能性がある。安行３ｃ式新段階の資料と思われる。

35～41は安行3d式である。いずれも多条の沈線により文様を描出する土器で、36～38、39～41は同一個体である。これらの資料は文様構成や描出手



第365図　古宮遺跡出土縄文晩期土器変遷図

法において35とは異質である。後述。

以上を整理すると、B区はごく少量確認されている安行3b式に始まり、「天神原式」がかなり安定して認められる。また、これと並行する安行3c式は古～新段階の各期にわたっている。一方C区は安行3b式が見られず、少量確認された「天神原式」や各期にわたって認められた安行3c式に始まり、安行3d式まで安定して認められる。

以上のように両土器集中地点は、形成開始と終了時期に若干の相違があったようである。

iii)「天神原式」土器について

本本文中や前項でも触れてきたように、本遺跡ではある一定量の「天神原式」土器が確認されている。B区では第2群、C区では第2群と、胴部とした第6群の一部がこれに相当する資料である。

林克彦によって提唱された「天神原式」は、安行式の系統をひく在地化した土器群で、安行3b～3c式期にほぼ群馬県域の広がりを持つ土器であるが(林1994)、その後の資料の増加により、群馬県を中心に栃木県南部、埼玉県北部にも分布の広がりを見せる。本遺跡も埼玉県北部に位置する利根川右岸の遺跡であるが、同じく「天神原式」を出土した利根川右岸の遺跡としては、赤城遺跡（新屋他1988）や原ヶ谷戸遺跡（村田他1993）が、利根川左岸の遺跡としては、群馬県明和町矢島遺跡（川島1991）、板倉町板倉遺跡（宮田1989）などが上げられる。「天神原式」については近年、猪瀬美奈子により集成、整理が図られたが、氏は文様構成により三角形区画文系、b）菱形区画文系、c）対向弧線文系に分類、この他に文様描出や装飾の特徴等により、d）粗雑な沈線文で定型モチーフを描かないもの、e）コブ・突起・隆帯のみで文様を描くもの、f）横位沈線文・横位沈線間刺突文のみのもの、g）有段口縁深鉢を特徴とする無文粗製土器に分類している(猪瀬2004)。

氏の上記分類に則り、本遺跡の「天神原式」土器を見てみると、b）菱形区画文系の土器として第13図1～3、第14図4・9～13・24、第25図1を、e）コブ・突起・隆帯のみで文様を描くものとして第26図29、第27図1を上げることができる。この他に、文様構成自体は不明であるが、刺突帯の施された第26図18・19も「天神原式」の特徴を有している。

以上に見たように、本遺跡における文様構成の明らかな「天神原式」はすべて菱形区画文系である。本遺跡の特徴として明記しておきたい。

さて、菱形区画文系として一括した資料中にも、いくつかのヴァリエーションが見られる。第365図5～7のように並行沈線により菱形区画文を構成する土器に対し、10・11などは独特の文様で類例をあまり見ない（本文中では「一筆書き」と言っているが、実態にそぐわず適切な表現ではないかもしれない）。ところで、「一筆書き」様に文様を描出する方法は、「天神原式」においては少なくなく、「天神原式」の標識ともなった安中市天神原遺跡でも、渦巻文や下向三日月文、横帯区画から垂下するJ字状文など随所に見られる。しかし文様の全域にわたり'曲線'と'折り返し'を駆使して文様を途絶えさせることなく描出する様子は、文様の随所で見られた描出原則とは明らかに異質なものとして認識されよう。これらの資料は、同じ菱形区画文系である5～7のような資料から崩れた、より後出的な印象を受ける。この「崩れる」要素によって「天神原式」土器内での新旧関係把握の糸口が掴めるかもしれないが、ここでは指摘するに留めておきたい。

第366図には「一筆書き」様の文様モチーフをもつ土器の例を示したが、紙幅の都合上、3遺跡6例

1・2原ヶ谷戸　3・4谷地　5・6矢島

第366図　「一筆書き」様文様例

の掲載に留めた。他にも桐生市千網外戸遺跡や館川村安通・洞遺跡でも類例が見られるようである。

iv）C区第5群土器について

C区第5群土器は多条の沈線により文様を描出する土器を一括した分類であり、時期的には安行3d式に属するものと位置づけた。しかしながら第365図35が安行3d式と容易に判断されるのに対し、36～38、39～41の資料は文様モチーフがわかりにくく分類にも苦慮する。これらの資料に共通する文様描出の特徴として本文中では、沈線同士の接触がありつなぎがスムースでない一群とした。再度両資料を確認してみよう。

36～38は平口縁深鉢で口頸部文様帯には渦巻文が描出され、括れ部付近を三条の平行沈線によって区画するが、渦巻文下部において沈線は収斂しながら下方へ開く。また、渦巻文の下位には重弧線文が下向三日月文が施される。39～41はB突起が崩れたような小突起がつく平口縁深鉢で、突起下において左右に開く「く」字状文が背合わせに配される。41はモチーフがわかりづらく天地を迷う資料であるが、懸垂するJ字状文と判断した。

これらの資料についてここで注目したいのは、①下方へと開く横沈線、②重弧線文もしくは下向三日月文、③「く」字状文の背合わせ配置（＝菱形区画文）、④垂下するJ字状文の4点である。ここから想起されるのは、本土器群と「天神原式」との関係である。①に関しては、板倉町板倉遺跡で類例が出土しており、②・③は天神原式の要素のひとつである。また、④に関しては、本遺跡B区出土の「天神原式」土器（第365図10・11）に見るJ字状文が想起される。

以上のことから、C区第5群と分類した土器群のうち、沈線同士の接触がありつなぎがスムースでない一群については、「天神原式」上器に特徴的な文様と同系統のものとして捉えるべきであろう。

以上、古宮遺跡の縄文時代晩期について雑駁に述べてきたが、天神原式の細分や安行3d式へのについては不問にしてきた。今後の課題としたい。

（加藤隆則）

なお、引用・参考文献については、巻末に一括して掲載する予定であったが、紙幅の都合上、本稿にかかるものについては、以下に掲げることにした。

<引用・参考文献>

新屋雅明　2004「埼玉周辺の晩期中葉の様相」『第17回縄文セミナー　晩期中葉の再検討』

新屋雅明他　1988『赤城遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第74集

猪瀬美奈子　2004「北関東における晩期中葉の様相」『第17回縄文セミナー　晩期中葉の再検討』

川島正一　1991『矢島遺跡発掘調査報告書』群馬県明和村教育委員会

鈴木正博・鈴木加津子　1983「安行式遺跡解題（1）－埼玉県岩槻市裏慈恩寺遺跡の分析－」『上曜考古』第7号

大工原豊・林　克彦　1994『中野谷地区遺跡群』群馬県安中市教育委員会

鷹野光行　1990「安行3c式土器の3分について」『先史考古学研究』第3号

寺内敏郎　1988『C7神明北遺跡・C8谷地遺跡』群馬県藤岡町教育委員会

林　克彦　1996・1997・2000「「天神原式」土器の研究（1）～（3）」『青山考古』第13・14・17号

宮田　毅　1989『板倉遺跡』『板倉町史別冊9資料編』板倉町史編纂委員会

村田章人他　1993『原ヶ谷戸・滝下』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第127集

2．弥生時代中期の遺構と出土遺物について

古宮遺跡で検出された弥生時代中期の遺構は、竪穴住居跡4軒、掘立柱建物跡1棟、土壙17基で、出土遺物は土器、石器等である。

以下では該期の遺構と出土遺物について、若干のまとめを行うことにする。

(1) 出土土器について

本遺跡出土土器の器種構成は壺形土器、広口壺、鉢形土器、甕形土器で、存在が予想される高坏形土器は確認できなかった。

壺形土器の器形は、細頸長頸壺が主体をなし、他に太頸の壺がある。細頸長頸壺は大形、小形の別があり、口縁部形態は素口縁、口唇部が肥厚する、内彎するもの等がある。文様は、箆描沈線文、磨消縄文、櫛描文によるもの等がある。

広口壺（第36図2）は器形が筒形土器類似のもので、胴部がやや縦長である。群馬県宮岡市長根安坪遺跡（菊地1997）で器形が類例する広口壺が出土している。

底部は未調整（若干のナデ含む）、木葉痕、布目圧痕があるもの等がある。

鉢形土器（第36図3）は、磨消縄文による幾何学文が施される。口脣部が特徴的で、平坦に作り出されている。王子ノ台遺跡（大島慎一2000）に口唇部平坦例がある。

甕形土器は、条痕文系甕が主体を占め、有文甕、縄文甕（第55図ＳＫ87-15）は少ない。条痕文系甕は横羽状が大部分で、口縁部は指頭押捺と刻み目がある。有文甕は箆描平行線文（第49図ＳＫ87-1）と櫛描文（第50図ＳＫ23-6）のものがある。いずれも類例は池上遺跡、小敷田遺跡に見出せる。本遺跡の有文甕は無文帯を既に消失し、区画線が弧線文化している。また櫛描き簾状文と平行線文、短線文を組み合わせた小松式系の甕形土器も出土している。

壺形土器、有文甕の文様のうち、地文縄文（擬縄文が若干存在する）に平行沈線文と、波状文乃至山形文を組み合わせたもの、三角連繋文、単位文では重四角文、重菱形文、幾何学文等を施すもの、或いはこれに刺突文が加わるものは、伝統的な文様である。三角連携文（第57図ＳＫ64-1）、波状文（第48図ＳＫ18-1）についてみると、次のような特徴が指摘できる。すなわち、単位の崩れ、区画線の弧線文化、無文帯の消失等簡略化が進行し、出土比率も低い。沈線は、比較的幅広いものから細いものまであるが、大部分が浅くなっている。また2本同時施文（第36図9）は殆どみられない。刺突文は列状に施文されるものが多く、小形化している。刺突列が1平行線間に施文されるもの（第36図1）もある。縄文は単節以外に無節縄文が一定の比率を占めるようである。

次に磨消縄文系についてみると、沈線区画による縄文帯とそうでないもの、工字文、枠状文、垂下文、王子状文、重三角形文、山形乃至鋸歯文、円形文と組み合う曲線的文様等がある。枠状文（第48図ＳＫ22-1）は小敷田遺跡で出土しており、重三角形文（第48図ＳＫ78-1）と共に南御山2式系である。本遺跡例は沈線が太く、前者は頸部まで後者も頸部下半まで施文が及ぶ。五本松遺跡（吉田1984）とは施文領域が異なる。また磨消縄文部分が赤彩される破片（第52図ＳＫ63-15）も南東北系である。磨消縄文による工字文（第36図1）、垂下文（第48図ＳＫ29-1）は、清水市矢崎（清水町史編さん委員会1998）、三島市長伏六反田遺跡（寺田光一郎他1995）等駿河湾岸の遺跡、周辺では宮ヶ谷戸遺跡で破片が出土している。胴部上半に大柄の工字文を配する細頸壺（第36図1）は小敷田遺跡、大里東遺跡で似たものがある。

大形の単位文を胴部に配する長頸壺（第57図Ｇ30-1）は、円形文と工字文を交互に配する構成で充填縄文である。頸部は無文帯を挟んで波状文か山形文が施文されるとみられる。茨城県女方遺跡例（田中國男1972）は円形文に刺突が充填され、要所

に縦長の貼付文が付される。群馬県飯野辻遺跡（群馬県史編さん委員会1986）に類例があるが、本例は地文縄文である。池上遺跡では要所に縦長の沈線が施されている。本例とは縄文施文部が逆転している。小敷田遺跡例はX字状文と円形文で相似である。異なる文様意匠を配置し一体化する手法は、北島遺跡の重四角文と鍵穴状文の構成にも通じる。

筒形土器の器形を持つ広口壺（第36図2）は、口縁下から体部上半まで崩れた波状文が施され充填度は高い。区画方法は、3本沈線による懸垂文で4区画し、さらに上下2段に分割されている。要所にやや縦長の円形の貼付文が付けられる。3本沈線による懸垂文区画は長野県松節遺跡にあり、重四角文を重帯化するものは群馬県方面にやや多く見られる。

櫛描文系では平行線乃至簾状文と弧線乃至波状文を組み合わせるもの（第57図ＳＤ2-1）、扇形文、短線文がある。小松式系の文様で、工具は櫛歯状工具と束線具があり、条線に細い、太いの別がある。

文様意匠に弧線を用いるものは平行沈線文系（第52図ＳＫ63-16）と磨消縄文系（第54図ＳＫ78-21，22）、櫛描文系（第51図ＳＫ30-10～12）がある。櫛描平行線文に櫛歯状工具による剰突文（第52図ＳＫ38-3、4）、弧状の剰突文等と合わせて栗林系と考えられる。

以上伝統的文様系列を概観すると、本遺跡例は池上遺跡例よりも小敷田遺跡例に近く、上敷免遺跡までは降らないと考えられる。破片資料にやや新しい段階も含むが、ほぼ同一時期と考えられる。近年埼玉県北部の弥生中期中葉～後半の土器形式については、池上式→小敷田式→上敷免（新）式→北島式という編年案が提唱された（埼玉考古学会　2003）が、本遺跡は小敷田式段階に相当する。

また北陸系の小松式、中部高地系の栗林式、南東北系の南御山2式が認められ、群馬県、神奈川、静岡方面の影響も考えられた。破片資料中には滝式風のもの（第62図ＳＫ210-1）も見られ、栃木方面との交渉も窺われる。並行形式との対応関係については、既に詳細な研究（鈴木正博　2004）があるが、本遺跡例は該期の交通諸関係解明も含めて大きく寄与するものと考えられる。

（2）出土石器について

本遺跡出土の石器は装身具である玉類を除けば総点数13点である。その多くは土壙内もしくは包含層から出土し、住居跡内出土例は認められない。このような出土状況も含めて周辺域に点在する該期の遺跡と比較検討し、本遺跡の石器のあり方について概要をまとめておきたい。

本遺跡の石器組成の大きな特徴は磨石類及び打製石斧（石鍬）が大半を占め、刃器状の石器2点（56図ＳＫ27-8・63図G30－52）及び凹石または環状石器の未製品（56図ＳＫ86-14）、用途不明石器（形代の未製品か）（63図G30－50）があるものの池上遺跡や小敷田遺跡等で出土した大陸系磨製石器が全く認められないことが指摘できる。

打製石斧は便減りした小型の打製石斧（有肩扇状石器の可能性有り）（56図ＳＫ38-14）以外の2点(石鍬)（56図ＳＫ25-10・63図G30－49）は何れも刃部を欠損している。欠損した打製石斧の基部は池上遺跡や小敷田遺跡出土例に比べてやや長く感じられる。

環状石器の未製品は池上遺跡や小敷田遺跡でも見られる。

刃器状石器は掻器状を呈する小型で薄刃の出土例（56図ＳＫ27-8）と欠損した礫器状の肉厚の例（63図G30－52）が認められるが他の遺跡と比べて出土例が少ない。

磨石類（磨石・砥石・敲石）は砂岩系及び閃緑岩が用いられ該期の通有の石材である。

これらの出土石器の組成並びに出土状況から見て、本遺跡では使用欠損後の廃棄に伴う出土状況が窺える。また、住居跡内からは石器石器が出土しなかったこともこれらを裏付けるものと考えられる。池上遺跡や小敷田遺跡で出土している大陸系磨製石器が含まれないことは、本遺跡がこれらの遺跡の外縁的な集落であった可能性も指摘できる。但し、調

査範囲が狭い上に本遺跡では掘立柱建物跡が検出されていることを考慮すれば集落としての性格は今後さらに検討を要するものである。　（吉田　稔）

（3）遺構について

遺跡は旧川に沿って展開する自然堤防上に存在するもので、県道弥勒寺行山線がこれを縦断する形になっている。弥生中期の遺構、遺物はA区二面とB区二面から出土している。

現状での遺構配置は、主に自然堤防の両側に遺構が分布し、中央部は薄く竪穴住居跡が1軒のみである。東側は竪穴住居跡2軒と土壙10基が検出され、西側は竪穴住居跡2軒と掘立柱建物跡1棟及び土壙7基が検出された。遺物出土グリッドをみると、出土量の多少はあるがB区は万遍なく出土している。A区は調査区両端で出土していない。東端は自然堤防のほぼ中央部にあたる。

住居跡の分布位置は3ケ所に分かれ、土壙群は自然堤防両側の住居跡群に付随している。自然堤防中央部には、遺構の空白がある。掘立柱建物跡は西側の遺構群で、標高がやや高い位置にある。東側の遺構群では主軸が南北方向を基調にしているが、西側の遺構群では東西方向が基調で、占地形態に若干の相違がある。

第27号土壙は、長大なもので方形周溝墓の可能性があり、西側遺構群に墓域が伴う可能性もある。

竪穴住居跡は、平面プランが隅丸方形乃至長方形を基調としており、規模に大小がある。主柱穴は4本が基本と考えられる。炉は、第17号住居跡では主柱穴内の北東側に設置されている。壁溝は同住居跡のみ検出された。第2号住居跡は最大規模の住居跡で、管玉、ヒスイ製勾玉がまとまった状態で出土した。

掘立柱建物跡は完掘ではないが、1間×2間以上で棟持柱を持つと考えられ、一部柱材が残っていた。最大規模で玉類が出土した第2号住居跡とは離れた位置にある。棟持柱付き掘立柱建物跡は北島遺跡で1棟検出されているが、本遺跡よりは新しい。

住居跡の規模、施設等について周辺遺跡を概観してみると、池上遺跡の場合、4本主柱穴を基調として、炉は床面中央付近に設置される例が多い。構成は、大形の住居跡1軒と長径6～8mの住居跡8軒、4m前後の小形住居跡2軒というものである。小敷田遺跡では、4本主柱穴を基調として、炉は主柱穴内側に設置される例が多い。10m級の大形住居跡は無く、長径6～8mのものが約半数を占め、4～6mがほぼ半数で4m以下の小形住居跡は2軒である。時期的にやや降る北島遺跡では総数78軒の住居跡が調査された。4本主柱穴を主とし、3期に渉って住居が営まれ、Ⅰ期は8m以上の大形住居跡6軒、長径6～8mのものが7軒、4～6mが1軒である。Ⅱ期は8m以上の大形住居跡4軒、長径6～8mのものが13軒、4～6mが11軒でほぼ半数、4m以下の小形住居跡は無い。Ⅲ期は8m以上の大形住居跡1軒、長径6～8mのものが11軒、4～6mが10軒でほぼ同数、4m以下の小形住居跡は1軒である。

本遺跡の場合、住居規模は6m前後と4m前後に分かれる。住居軒数が少ないこともあるが、小敷田遺跡に近い構成といえる。

荒川流域の弥生時代中期後半の集落について、既に「5～6軒からなる単一の小住居跡群（単位集団）」が、「一定の地域で短期間の移動を繰り返した」という指摘（朝持和夫　1990）や、「自然堤防上を移動しながら集落を営むのが荒川扇状地における集落のあり方の特質」とした見解（松岡有紀子　2003）があるが、古宮遺跡もこれらの指摘を超えるものではない。一方棟持柱を持つ掘立柱建物跡、玉類の出土した住居跡等があり、「複数の集落で構成される一つの大きな集落群」の中で各集落の性格（分業）を考えていかなければならない。

3．古墳時代の出土土器について

古宮遺跡および中条条里遺跡から出土した古墳時代の土器は、前期から中期にわたるものである。このうち大部分の土器が器面の風化が著しく、外面の調整等の観察は充分になしえなかった。ここでは、仮にⅠ～Ⅳ期と呼称し、記述を進めたい。

調査においては、遺構の切り合い関係のような層位論的な前後によって、各時期の設定を行うことはできなかった。各時期は、型式論的なまとまりと変化の連続性に基づいて設定したものである。

前期後半は第Ⅰ・Ⅱ期が該当する。Ⅰ期の土器群は、壺は球形胴、台付甕はやや長めの球形胴、高坏は坏部に大小のバリエーションがある、といった特徴を有する。第Ⅱ期の土器群は、第Ⅰ期に比して、壺は長胴化して頸部のしまりが緩くなり、台付甕も同様に長胴化して口縁部が相対的に短く、脚台部が小型化する。高坏も坏部が小さいもののみとなる。

中期は第Ⅲ・Ⅳ期が該当する。第Ⅲ期の資料は、壺の口縁部がⅡ期より短く外反するものである。平底の甕もあると思われるが、調査では明確なものは出土しなかった。台付甕はⅡ期から継続するものである。高坏は中膨らみの柱状の脚台部をもつものである。第Ⅳ期の資料は、壺の口縁部が短く外反するものである。甕はやや大きめの平底で、長胴気味のものも認められる。台付甕は認められなくなる。高坏は中膨らみの柱状の脚台部をもつもので、全体的に器高が径に比して低めである。本遺跡の資料には、これにミニチュアの壺が含まれている。

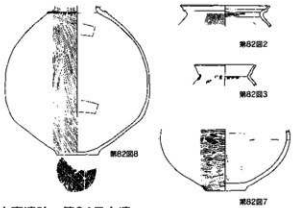
以下、各時期の資料について具体的にみていきたい。なお、ここでは資料としてまとまりがあるものを中心に扱うこととする。

第Ⅰ期の土器は、古宮遺跡第13号住居跡、第64号土壙出土資料が該当する。第13号住居跡からは、壺、S字状口縁台付甕が出土している。壺はやや長めの球形の胴部のもので、頸部に上方に伸びる突帯が貼付されている。先端はつまみ上げられ、刻み目が施されている。刻み目は線状で細い。この突帯を境に上下で調整が異なり、組み合わせ成形が明らかな個体である。中条条里遺跡の第2号方形周溝墓出土の壺は文様を持たず、器形もやや異なるが、頸部の突帯やその上下の組み合わせの様相は共通するように見受けられる。S字状口縁台付甕のうち、3は頸部の径が小さく細長い器形になると考えられる。

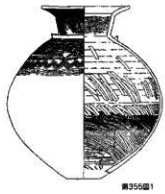
第64号土壙からは、壺、台付甕、高坏、器台が出土している。壺は球形胴を呈するもので、6の壺は精良な胎土である。甕は単純口縁のものとS字状口縁のものがある。単純口縁のものは、口縁部全体が短く、端部が丸く収められる。胴部はやや長めの球形である。S字状口縁のものは、胴部がやや長めの球形胴で口縁端部はシャープさがなく、頸部内面も木口ナデ等は施されていない。脚台部はやや大きめのしっかりしたものである。高坏は15がラッパ状に開く脚部を持つもので、他の器種より新しいものと考えられる。13・14は直線的な柱状の脚部をもつもので、こちらの方が全体の様相とは合致している。

中条条里遺跡では第2号方形周溝墓が、この時期の可能性がある。出土している壺は、球形の胴部を持つもので、古宮遺跡第13号住居跡同様の突帯が貼付されている。突帯の先端はつまみ上げられ、刻み目が施されている。やはりこの突帯を境に上下で調整が異なり、組み合わせ成形が明らかな個体である。古宮遺跡の突帯は刻み目が線状で細いのに

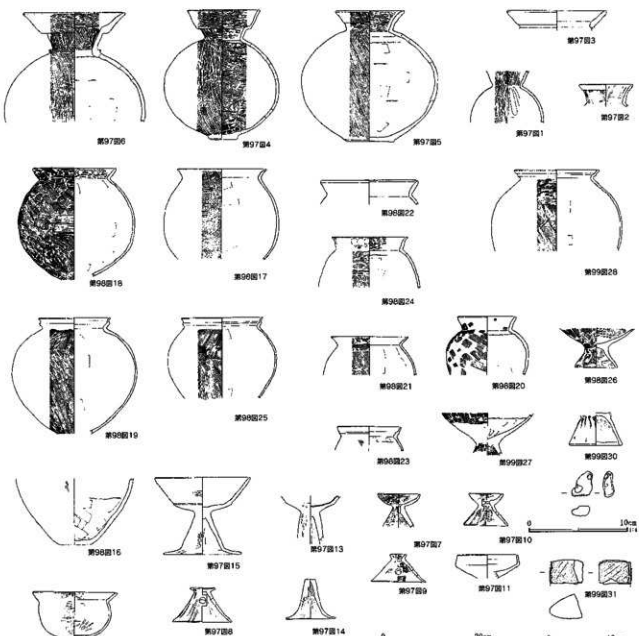
古宮遺跡　第13号住居跡



中条条里遺跡　第2号方形周溝墓



古宮遺跡　第64号土壙



第369図　古宮・中条条里遺跡　第Ⅰ期の資料

対して、板状の工具によって刻み目が施されている。口縁部は北陸地方の系譜を引くような、まっすぐ上方に立ち上がり、稜をもって直線的に開くものである。この個体の胴部上半には櫛描様の文様と縄文が施されている。櫛描文は2本一単位の刷毛目状工具の小口を使って施文される。波状文は連続的なものではなく、いわゆるコンパス文と呼ばれるものに近く、西遠江との親縁性を感じさせる。この櫛描文の間にはLRの単斜縄文が施され、西方の外来的文様要素と在来の縄文が融合した稀有な個体である。

第Ⅱ期の資料としては、古宮遺跡第7・10号住居跡、中条条里遺跡第2・6・9・10・13・15号住居跡、第1号方形周溝墓出土のものがあげられる。ここでは古宮遺跡第7号住居跡、中条条里遺跡第2号住居跡出土資料を取り上げる。古宮遺跡第7号住居跡からは、壺、小型壺、台付甕、高坏が出土している。壺は、単純口縁のもので口縁端部に面を持つものである。頸部の括りが弱く、胴部は下位に最大径を持つやや長めの球形胴のものである。台付甕はS字状口縁台付甕が3点出土している。脚台部のみの10はホゾ接合で端部内面に折り返し等がなく、単口縁台付甕と考えられる。9のS字状口縁台付甕は口径が小さく、長い胴部で、刷毛目も単斜方向で乱れがあり、模倣が崩れている。脚台部のみが大きく、通常のS字状口縁台付甕のもので、かえって全体のバランスが悪くなっている。高坏は坏部の法量がほぼ同じ小型のものである。6はその坏部に直線的に開く脚部が付くものである。通常この坏部には柱状の脚部が付く可能性が高い。中条条里遺跡第2号住居跡からは、壺、台付甕、高坏が出土している。壺は、単純口縁のもので、胴部が長めになると考えられる。台付甕はいずれも単口縁で口縁部が短く、直線的に外側に開いている。胴部は長胴で、脚台部が小さい。胴部と脚台部の接合はいずれもホゾ接合である。13は端部がつまみあげられているが、いずれかの系譜の土器を意識したかは不明である。

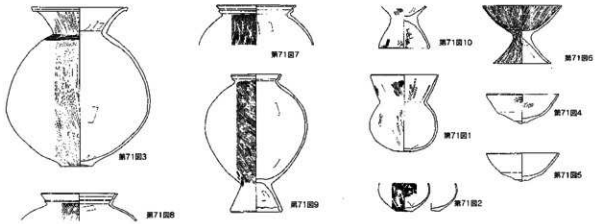
第Ⅲ期の資料としては、古宮遺跡第3号溝があげられる。壺、小型壺、台付甕、高坏、鉢、椀が出土している。ただし、出土資料中にはより新しい段階と考えられる廃模倣の小型壺や鉢、甑が含まれ、層位論的なまとまりを欠くものである。石製模造品も円板、剣形が出土しているが、調整も粗く、続く第Ⅳ期以後のものと考えられる。

第Ⅳ期の資料としては、古宮遺跡第12・15号住居跡のものがあげられる。第12号住居跡からは、壺、小型壺、甕、高坏、椀が出土している。壺は口縁部を欠く球形胴に近いものである。甕は長胴に近く、小口状工具により調整されている。小型壺は口縁部より胴部が大きく、底部がやや大きめの球形胴である。高坏は、ふくらみのあるやや短めの柱状の脚台部を持つものである。椀は頸部が不明瞭で、底部はヘラケズリである。剣形の石製模造品が出土している。

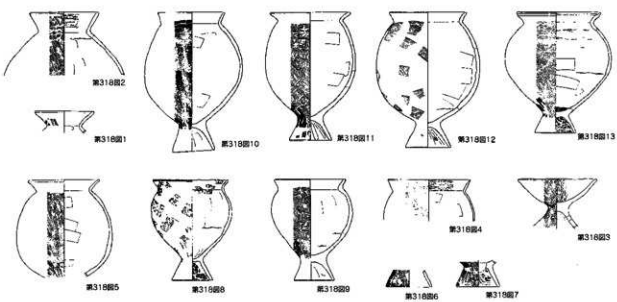
第15号住居跡からは、壺、甕、高坏、ミニチュア壺が出土している。壺は単口縁のもので短く外反する口縁部を持つものである。また、中型壺とも言うべき法量のものもあり、それは口縁部が短く直立している。甕は長胴気味のもので、外面の調整は小口状工具によるものである。高坏は、ふくらみのあるやや短めの柱状の脚台部を持つものと直線的な柱状部を持つものがある。また、この住居跡からは7点のミニチュア壺が出土している。

以上、Ⅰ～Ⅳ期の概要について述べた。本来なら全ての時期について周辺遺跡との対比を行うべきなのだろうが、ここでは両遺跡

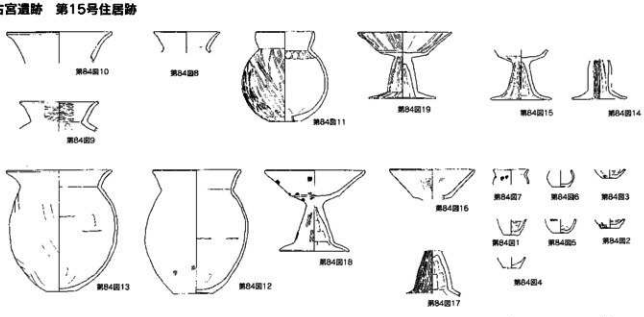
古宮遺跡　第７号住居跡



中条条里遺跡　第２号住居跡



古宮遺跡　第15号住居跡



第370図　古宮・中条条里遺跡　第Ⅱ～Ⅳ期の資料

の中心的な時期である第Ⅰ・Ⅱ期の資料について対比を試みたい。

第Ⅰ期の資料と同様の資料としては、熊谷市天神東遺跡第3号住居跡（栗岡1999）、熊谷市北島遺跡第12地点5号住居跡（大谷1991）、行田市小敷田遺跡3区第27号溝（吉田1991）出土のものがあげられる。（第371・372図）天神東遺跡第3号住居跡からは、壺、台付甕、甕、高坏、器台、鉢が出土している。壺は短い直口縁のもので、頸部に突帯が貼付されている。台付甕は頸部の括れが弱く、端部は丸く収めており、胴部も長めで古宮遺跡のものとは様相が異なる。また、S字状口縁台付甕を組成に含まず、平底の甕があり、胎土に片岩を多く含むものがあるといった特徴がある。一方、北島遺跡第5号住居跡の台付甕は、S字状口縁台付甕であり、対照的である。小敷田遺跡27号溝からは壺、広口壺、小型壺、台付甕、高坏が出土している。台付甕は口縁部が短く外反するもので端部は丸く収めている。一部に刻み目を施すものがある。この遺構から出土した資料には、天神東遺跡同様にS字状口縁台付甕が含まれていない。胴部は球形からやや長めのものである。細部では異なるものの、古宮遺跡の台付甕と同様の印象を受ける部分もある。高坏は大型の坏部を持つもので、いわゆる元屋敷系高坏である。

3遺跡とも古宮のものと共通する部分もあるが、様相を異にする部分も多い。近接した遺跡間のこのような共通点、相違点は何によるものかが問題であろう。

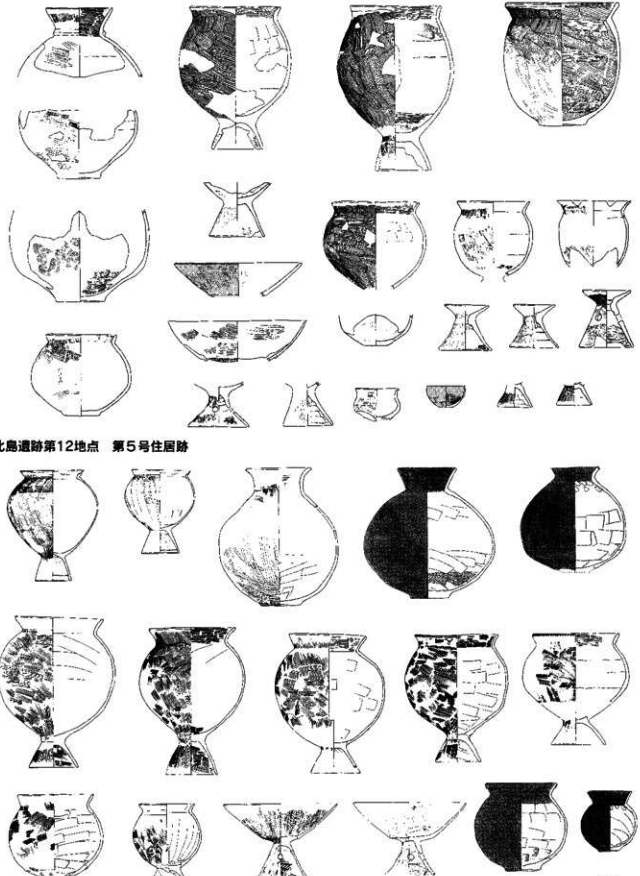
第Ⅱ期の資料としては、北島遺跡第12地点第2号住居跡、小敷田遺跡4区第4～10号方形周溝墓があげられる。北島遺跡第2号住居跡からは、小型壺、甕、台付甕、鉢、高坏が出土している。小型壺は口縁部と体部の器高がほぼ等しく、球形胴に近いものである。甕はやや長めの胴部で、台付甕とほぼ同様の口縁部と胴部である。台付甕はS字状口縁台付甕である。高坏はいずれも柱状の脚台部で、中実の小型のものと中空のやや大型のものがある。鉢は偏平で、胴部が小さく、口縁部が大きく開くものである。小敷田遺跡4区第4～10号方形周溝墓は報告時には周溝墓とされているが、周溝を有する建物跡であったことが明らかになっている。（及川1998）いずれもほぼ同時期のものと考えられるが、第Ⅰ期に遡る可能性があるものもある。出土器種は、壺、小型壺、台付甕、高坏、器台、鉢で、土器以外にも木器が出土している。壺は、二重口縁を呈するもの、複合口縁を呈するもの、単純口縁のものがあり、頸部は括れがやや弱く、球形胴のものである。台付甕は単純口縁のものとS字状口縁のものがある。単純口縁のものは口縁部が短く端部は丸く収められている。胴部が長胴のもの、脚台部が小型のものが含まれている。S字状口縁のものは、長胴気味のもの、脚台部が小型のものが含まれている。小型壺はいわゆる坩である。高坏はいずれも坏部が小さいもので、柱状の脚台部を持つものとハの字状に開き端部が折れ曲がるように更に開くものがある。器台も同様に脚台部がハの字状に開き端部が折れ曲がるように開くものである。鉢は扁平な小型のもので、口縁部が直線的に大きく開くものである。

古宮・中条条里両遺跡の資料は一部の器種で様相が明らかでないものがあるものの、北島、小敷田両遺跡とも相似した様相を呈している。

また、妻沼低地で500軒を超える住居跡が検出された一本木前遺跡の第Ⅰ期（寺社下2004）が、古宮・中条条里遺跡の第Ⅰ・Ⅱ期

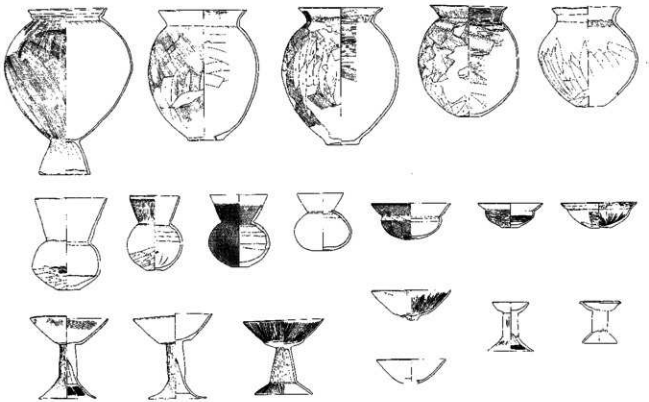
天神東遺跡　第3号住居跡

北島遺跡第12地点　第5号住居跡

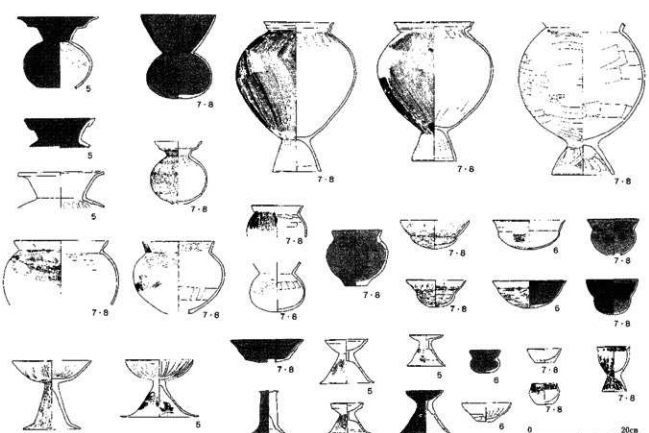


第371図　周辺遺跡の第1期の資料

北島遺跡題2地点　第２号住居跡



小敷田遺跡　第４～８号方形周溝墓



第372図　周辺遺跡の第II期の資料

に相当する。ただし、調査時に実見させていただいた資料は、距離的にも近い深谷市根絡遺跡（木戸1995）の様相に近く、古宮・中条条里遺跡周辺の資料とは若干異なる印象を受ける。

児玉地域を中心とした本遺跡とほぼ同時期の古墳時代前期の土器様相についてはかつて検討したことがあるが（福田1997）、古宮遺跡、中条条里遺跡の第Ⅰ・Ⅱ期は、その際の古・新段階にほぼ相当する。

その中で大宮台地の資料との対比も行ったが、その中でも述べたように、古宮遺跡、中条条里遺跡の第Ⅰ・Ⅱ期は、書上編年（書上1994）の第3段階古・新段階に併行すると考えられる。

このように、本書で扱った資料と各地域との資料の併行関係について大変雑駁ではあるが把握することができた。しかし、かつて述べたように、各地域の資料との間では共通する要素、相違する要素があり、熊谷低地の中でも北島、大神東、古宮、小敷田各遺跡の資料の間で同様の問題がある。

また、既に栗岡潤氏がこの地域の古墳時代の遺跡分布についてはまとめられている（栗岡1999）が、熊谷低地は県内でもこの時期の集落が密集する稀有な地域であると考えられる。その様相の整理は、埼玉県のみならず北関東地方の古墳時代前期の実態を把握するために欠くことができない情報を提供すると考えられる。

現在、本書の資料と同時期の大集落である北島遺跡の整理が行われており、その刊行を待って更に検討を試みることにしたい。

（福田　聖）

4. 小結

今回の調査において検出されたのは、古宮・中条条里・上河原の三遺跡である。以下に、三遺跡の概況について、ごく簡単にではあるが触れておきたいと思う。なお、本報告書中のⅢ～Ⅴの記載と一部重複するが、そのままとして記述を進めたい。

古宮遺跡

今回の調査において最も南に位置している(第2・3図)。410m×280m程の遺跡推定範囲内を、北西から南東にトレンチを入れた形となる。本報告書では、古宮遺跡は基本的に二面の文化層からなるとして記述を行った。つまり上から順に、一面目＝古代～中近世、二面目＝縄文時代晩期～古墳時代中期として扱った。しかし、厳密に細分すれば、文化層は四面とみなすことが可能である。

B区南端部では、一面目とした遺構確認面のさらに上位に、中近世のみが分布する文化層が検出されている(Ⅲ－B－(2))。また、B区南端・C区北端で検出された縄文時代晩期の土器集中は、弥生時代中期後半～古墳時代中期の遺構確認面より20～30cm程下位に広がっており、後者とは別個の面であると考えられる。そこでこの部分については、文化層は四面からなるといえる。本報告書中で事実記載を行う」－A・Bでは、煩雑化を避けるため、下位から二面・一面、さらにその上位に位置する中近世面といった具合に項目立てを行った。

本項では、この四つの調査面についての記述に、説明不足の点を補う意味でも、各面についてごく簡単ではあるが要旨を述べておきたいと思う。

なお、紙数の都合上、時期的な細分ではなく、あくまでも遺構・遺物の検出面(≒当時の生活面)を基にしたものであることをお断りしておき、古い順(下層の面)から進めていくことにする。

二面その二(縄文時代晩期　第373図1)

上位から数えて四面目に相当する。ここでの現地表面からの深度は280～310cm程である。ここでは土器集中のみの確認であった。土器集中の確認に伴い、遺構確認を何度か試みたが、検出はされなかった。

土器の集中範囲はきわめて局地的なものであり、位置的にはB区南端部とC区北端部が該当する。両者の間には、南北60m程の調査範囲外の部分があるが、両者が連結しているのか、別個の土器集中であるのかは結論することはここでは困難である。土器集中の範囲については、南北方向は確認できたが、東西方向に関しては、その出土状況からみて、さらに調査区外に続くと推定される。なお、この他の地点では該期の遺物は確認されていなかった。

土器集中が検出された辺りは、今回の調査範囲内では、後世における河川の氾濫の影響を最も大きく受けた地点であるといえよう。この部分では、20～30cm程上位に時代中期後半、50cm程上位に古墳時代中期の住居跡が存在する。しかしこれ以降、中近世に至るまで人口の痕跡は認められない。この部分については、土層断面を観察しても、土層の性格・色調・包含物などの違いによる分層はほとんどできないほどに、土質は均質に近いものであった。これは河川(現在の皇川と推定される)の増水と氾濫によって、土砂が堆積した結果と思われるが、小規模な氾濫が繰り返されたというよりも、大規模なものが急激に起こったための土壌堆積と推定される。そして、この氾濫に伴う集落の埋没後、古代に至って、皇川沿いに集落が現れたとみなすことができる。

二面その一(弥生時代中期～古墳時代中期　同図2)

上位から数えて三面目に相当する。この面で現地表面からの深度は、A区西端部で120cm、東端部で150～220cm、B区では210～280cm、C区で170～220cm程である。この面では、弥生時代の住居跡4軒・掘立柱建物跡1棟、土壙17基、古墳時代前期の住居跡11軒、中期の住居跡2軒のほか、掘立柱建物跡棟、古墳時代と推定される土壙85基や、溝跡46条が検出された。

現在の微地形が、過去の微地形をある程度、踏襲しているという前提で（大規模な地形変化を伴う河川の氾濫の場合は、これに当てはまらない）調査区を一瞥してみると、現状では、A区とB区の境界部分が、微地形的に最も高い。この点に関しては、弥生時代に関する遺構確認面のレベルから、標高差は現在ほどではないものの、最も高い部分であったのがわかる。これを念頭に遺構の分布をみると、A区－B区間の様相については、発掘調査が行われていないため詳細は知れないが、この地形的なピークの近辺には遺構がみられない。つまり、南北方向的には、この時期の集落域は、C区にまでは及んでおらず、東西方向については、地形的なピークを挟んで、旱川沿いに展開していたと推定されるのである。

そして、この部分を挟んだ両側に、住居跡や土壙などの遺構が分布していることが見て取れる。

なおこの地点から、地形的に40～50cm程下ったC区では、弥生時代の遺構はみられない。

古墳時代については、基本的に弥生時代の遺構分布に近いが、住居跡はA・B区に集中し、緩斜面であったと思われるC区では、等高線に並行したであろう東西方向に走る溝跡のみとなる。これらの遺構は、A区西端部付近(当時の星川際)からC区北半部までの、概ね南北200m程の範囲内に収まると思われるが、東西規模については、今回の調査結果からだけでは結論できない。傾向としてはやはり、東西方向に展開する自然堤防の微地形に沿った状態で、集落展開していたと考えられる。

一面その二（古代　同図3）

上位から数えて二面目に相当する。ここでの現地表面からの深度は、A区西端部で10～20cm、東端部で120～140cm、B区では180～220cm、C区で120～150cm程である。この面では9世紀代を中心として、8～10世紀代の遺構・遺物が検出されたほかに、中世の遺構・遺物も少数ではあるものの確認されている。

これについては、地表レベルを異にした生活面(上位の生活面)に設けられた遺構が、古代の面にまで達した結果といえよう。ただし、この生活面の上位にあったであろう生活面については特定することができなかった。

検出された遺構は、住居跡80軒、掘立柱建物跡1棟、土壙118基、溝跡37条などである。この時期と思われる遺構は、C区にまで及んで入るものの住居跡の分布は、ほぼA区内に限られている。

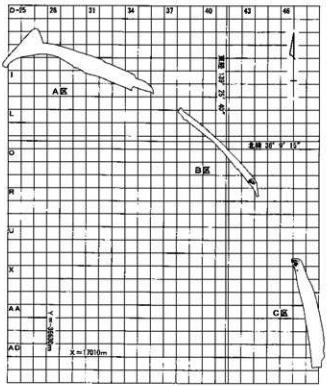
二面(その一)においては、A区西端部が星川際まで達していたが、一面(その二)ではその手前で遺構の分布が途切れている。これは、一面のA区西側が一段低い水田面によって古代の面が失われていることによるが、当時は旱川手前にまでが集落域が及んでいたと思われる。遺構の分布状況から推して、古代においても二面と同様に、自然堤防上を集落の拠点としていたと思われる。

現在の地表面では、A区とB区の中間部分が調査区内では最も標高地が高い。無論、古代においては現在よりも地形的に低いものの、相対的には当時においても、最も高い部分であったと推定される。そしてこの一帯から、南（B・C区）に向かって地形的に徐々に下っていく。すでに述べたように、二面から一面に至る過程で、自然堤防が立体的に急激な発達をした状況が観察できた。常識的にみて、自然堤防が形成されるのは河川の増水・氾濫によりものである以上、これが繰り返され、順次発達していく場合には、立体方向よりも平面方向でより顕著になるとみなされる。つまり、自然堤防が立体的に発達した以上に、平面的(主として東方向と考えられる)な発達をみたと推測される。見方を変えるならば、古代の集落は、それ以前よりも大きく発達した自然堤防上に立地し、星川際から、地形的にピークに達する前後辺りまでの範囲内で、星川に沿ってさらに東方向へ拡大していったとも考えられよう。

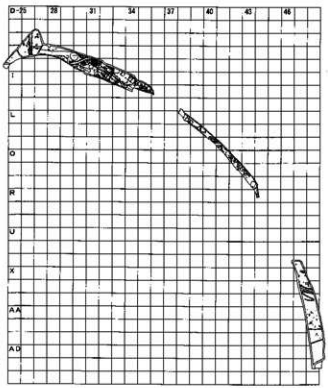
一面その一（中近世　同図4）

上位から数えて最初に検出される文化層である。純粋に中近世の遺構のみが検出されたのはB区南半

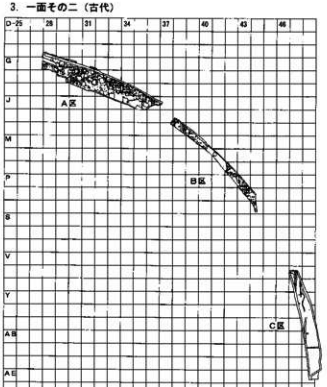
1. 二面その二（縄文時代晩期）



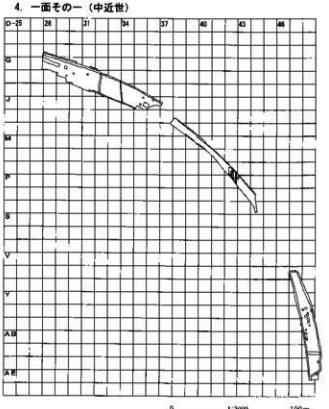
2. 二面その一（弥生時代中期～古墳時代中期）



3. 一面その二（古代）



4. 一面その一（中近世）



第373図　古宮遺跡の変遷

の部分で、ここでの現地表面からの深度は150～170cm程で、溝跡1条、ピット13本が確認された。

この他に、純粋に中近世の面ではないものの、遺構の深度が大きな溝跡や井戸跡は、下位の面にまで達しているものが存在する。例えば、A区では中近世と考えられる溝跡1条・土壙3基・井戸跡5基、B区では掘立柱建物跡1棟・井戸跡1基、C区では溝跡10条・井戸跡19基などが検出されている。調査範囲内における遺構の密度はきわめて密度は低いが、これらの遺構は調査区全体に亘っている。ここでは、掘立柱建物跡1棟が検出された他には、住居関連の遺構は認められなかった。

この時期に及んで、自然堤防上に展開する集落域がさらに拡大したか、あるいは縮小したかまでは判断できない。立地や環境、および現在の集落の展開から推して、拡大したと見るのが妥当であると考えるが、これはあくまでも現状における憶測でしかない。今後、近隣の調査の機会が待たれるところである。今回の調査結果から言える事柄は、A～Cの調査区は、この時期の集落域の中心には及んでいない、ということであろう。

なお図中では、この面で検出された遺構のほかに、上記で述べた溝跡や井戸跡についても、図示しておくことにする。

中条条里遺跡

今回調査された三遺跡の中では、最も北に位置する。南北約800m、東西約1300mという広大な遺跡推定範囲の中の西端部際に、南北にトレンチを入れた形となる。今回の調査では、遺跡名の基となった中条条里に関連すると思われる遺構は検出されなかった。しかし、条里の区画推定線と、調査区を分断する東西方向に延びる農業用水路とがほぼ重なるものがみられることから、現在に至るまでこの区画が踏襲されている可能性が考えられる。検出された遺構は、古墳時代前期の住居跡17軒、方形周溝墓2基、井戸跡1基、土壙6基、溝跡7条、ピット6本、土器集中1箇所である。今回の調査区は、集落の中心には及んでいないと思われる。調査区南端部付近（C区）で、浅間B軽石が散在する水田面の一部が検出されているが、それ以外の時期に関わる遺構は検出されていない。言い換えるならば、部分的に浅間B水田の一部をのせる部分があるほかは、明瞭に遺構確認面として遺存していたのは一面のみといえる。

上河原遺跡

位置的には、古宮遺跡と中条条里遺跡との中間に位置する遺跡である。60m×40m程の遺跡推定範囲内を、西北西から東南東にトレンチを入れた形となる。試掘調査の結果、上河原遺跡では、中近世と思われる水田跡が何層かにわたって検出されたが、その他の遺構については確認されなかった。

そこで今回の発掘調査では、水田面の平面的な規模・範囲、立体的な枚数(水田の層数)を捉えることを旨とし、東西に延びる調査範囲の中で、5本のトレンチを設定した(第363・364図)。その結果、北側に位置する第3トレンチ（A－A´）・第4トレンチ（B－B´）においては、水田耕作土や水田鉄斑集積層、あるいは水田マンガン結核集積層などは検出されなかった。これに対し、第5トレンチの南端部中央（C－C´）と調査区西端部（D－D´）では、水田耕作土や水田鉄斑集積層（Ⅱ・Ⅳ・Ⅵ・Ⅷ層）、水田マンガン結核集積層（Ⅲ・Ⅴ・Ⅶ・Ⅹ・Ⅻ層）が検出されており、小規模な調査範囲内で、大きく異なった様相を呈していた。

この点について小考してみたい。土層断面A・Bについては、上層では人工の可能性が想定されるものの、それ以下の土層については、自然堤防の特徴である水性の堆積状況を示すものと考えられる。これに対して、土層断面C－C´では4枚、上層断面D－D´では5枚の水田面が重なった状態で検出された。なお、各水田面を平面的に検出するため、重機で1枚1枚剥がすように掘削していったが、畦畔などの痕跡を捉えることはできなかった。

きわめて近接した位置関係にありながら、土層断

面A－A´・B－B´とC－C´・D－D´にこれほどの違いが生じるのか。その要因については、この地点における立地環境によるものと考えられる。調査地点は、概ね北から南に下る地形を呈しており、平面図には表されていないが、前二者は自然堤防上の平坦面の南端に位置し、後二者は地形的に肩の部分に相当すると思われる。図版60上段の全景写真では、右(北)から左に下る地形が見て取れるが、写真中央に排水路が手前方向に流下している。この位置こそが、現在に至るまで平坦面から斜面部への転換点といえよう。そして、土層断面A－A´・B－B´と土層断面C－C´・D－D´はこの排水路を挟んで位置する形となっている。

言い換えるならば、後二者は、斜面地を造作して水田を営んだ地点を反映した層位であると考えられる。前二者近辺の、平坦部に集落が展開していたか否かについては、今後の課題といえよう。

以上に述べた事柄は、古宮遺跡・中条条里遺跡・上河原遺跡のごく一部について、きわめて局地的な視点で眺めたものであり、もっと広い視点からの検討が不可欠である。近隣には、北島遺跡をはじめとして、天神東遺跡・田谷遺跡・池上遺跡・池守遺跡・小敷山遺跡他が存在している。とくに北島遺跡では面的調査の範囲が大きく、人々の生活の歴史のみではなく、立地・環境についてもさまざまで、しかも豊富な資料を提示している。

平成16年9月の時点で、北島遺跡は、発掘調査報告書作成の最終段階に入っており、また諏訪木遺跡の報告書作成作業については、作業は緒についたばかりの段階である。今後、この二遺跡の報告書が刊行されることにより、この一帯の多方面にわたる資料が、さらに加わることは想像に難くない。

その際に、今回のきわめて不十分な検討を補う意味でも、再考の機会を設けたいと思う。

引用・参考文献

浅野晴樹　1998『北島遺跡Ⅳ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第81集 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団

芦川忠利　1999『長伏六反田遺跡』ヤマト運輸(株)新沼津ベース建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
三島市教育委員会

猪狩忠雄他　1985『龍門寺遺跡』いわき市埋蔵文化財調査報告第11冊 財団法人いわき市教育文化事業団

大谷　徹　1991『北島遺跡Ⅲ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第103集 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団

及川良彦　1998「関東地方の低地遺跡の再検討－弥生時代から古墳時代前半の「周溝を有する建物跡」を中心に－」
『古山考古第15号』pp1～34 青山考古学会

書上元博　1994『稲荷台遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第95集 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団

加藤隆則・吉野　健　2003『三ヶ尻遺跡Ⅲ』平成14年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書 熊谷市教育委員会

金子正之　1988『天神遺跡』 熊谷市教育委員会

川口　潤　1989「光屋敷遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第82集 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団

菊池　実　1997『長根安坪遺跡』関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第38集
群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第210集 群馬県埋蔵文化財調査事業団

栗岡　潤　1999『天神東遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第240集 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団

黒坂禎二　2002「池上／諏訪木」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第283集 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団

群馬県史編さん委員会　1986『群馬県史』資料編2 原始古代2 弥生・土師 群馬県

鄭持和大　1990「荒川流域における中期後半の弥生集落」『埼玉考古』 第27号

小池一之他　2000「関東平野と周辺の丘陵」『日本の地形4　関東・伊豆小笠原』東京大学出版会

寺社下博　1980『中条遺跡群・中島遺跡』 熊谷市教育委員会

寺社下博　1982『中条遺跡群Ⅲ・椎現山遺跡・常光院東遺跡』 熊谷市教育委員会
寺社下博　1984『中条遺跡群 昭和52年度～昭和56年度調査遺跡概略 昭和58年度調査・光屋敷遺跡』
熊谷市教育委員会
寺社下博　2004『一本木前遺跡Ⅴ』平成15年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書 熊谷市教育委員会
清水町史編さん委員会　1998『清水町史』資料編Ⅱ(考古) 清水町
清水町史編さん委員会　2003『清水町史』通史編 上巻 清水町
鈴木孝之　1998『北島遺跡Ⅳ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第195集 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
鈴木正博　2004「南関東弥生式中期『小田原式』研究の基礎―俗称『須和田式』を廃する構えと所謂
『小田原式』期に学形式学―」『上曜考古』第28号
高橋　保他　1979『下谷地遺跡』北陸自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書　新潟県埋蔵文化財調査調査報告書第19集
新潟県教育委員会
滝瀬芳之他　1993『上敷免遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第128集 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
田中弘明　2002『北島遺跡Ⅴ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第278集 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
田中弘明　2004『北島遺跡Ⅸ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第293集 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
出中國男　1972『縄文式弥生式接触文化の研究』(再版)出中國男博士遺著刊行会
寺田光一郎他　1995『初音ヶ原第４地点 谷ヶ遺跡 箱根田遺跡 長伏六反田遺跡 三島御殿遺跡第２地点』
三島市埋蔵文化財報告Ⅳ 三島市教育委員会
富田和夫　2000『大寄遺跡Ⅰ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第268集 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
富田和夫　2002『熊野遺跡(Ａ・Ｂ・Ｃ区)』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第279集
(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
中島　宏　1984『池守・池上』 埼玉県教育委員会
福島正美他　1987『吉崎・次場遺跡』(資料編(1)) 石川県立埋蔵文化財センター
福島正美他　1988『吉崎・次場遺跡』(資料編(2)) 石川県立埋蔵文化財センター
並木　隆　1979『中条条里遺跡調査報告書』 熊谷市教育委員会
増山　仁　1989『北陸の考古学Ⅱ』石川考古学研究会々誌第32号 石川考古学研究会
松岡有希子　2003『北島式と集落』埼玉考古学会シンポジウム「北島式土器とその時代―弥生時代の新展開―」
「埼玉考古別冊７」
松田　哲　2002『一本木前遺跡Ⅲ』平成13年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書 熊谷市教育委員会
松田　哲　2004『籠原裏遺跡』平成15年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書 熊谷市教育委員会
宮　昌之　1983『池上西』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第21集 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
山本　靖　2000『築道下遺跡Ⅳ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第246集 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
吉田博行　1984『五本松遺跡』会津武家屋敷報告書第２集 会津武家屋敷・会津歴史資料館
吉田　稔　1991『小敷田遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第95集 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
吉田　稔　2003『北島遺跡Ⅵ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第286集 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
吉田　稔・富田和夫・久保田睦子　2004『北島遺跡Ⅶ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第291集
(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
吉野　健　2002『前中西遺跡Ⅱ』平成13年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書 熊谷市教育委員会
吉野　健　2003『前中西遺跡Ⅲ』平成14年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書 熊谷市教育委員会